

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集

国道395号改良工事関連遺跡発掘調査

大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書

— 第2次～第5次調査 —

第1分冊

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

序

岩手県には縄文時代の遺跡を始めとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、平成6年3月現在で、8,771カ所に及ぶ遺跡が確認されています。これら先人が残した文化遺産を保存し、後世に伝えて行くことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実もまた、重要な施策であります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も、今日的な課題であり、(財)岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、東北縦貫自動車道軽米インターチェンジの開通に伴う高速交通網の整備を目的とした、一般国道395号の改良工事に関連して昭和63年度から平成3年度まで発掘調査を実施した大日向II遺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。調査によって、縄文時代後・晩期の住居跡や土坑・墓坑をはじめ、弥生時代の住居跡などの遺構のほか、縄文時代や弥生時代の土器や石器が数多く発見され、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました岩手県土木部二戸土木事務所・軽米町教育委員会を始めとする関係各位に衷心よりの謝意を表します。

平成7年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 高橋 令則

例言

1. 本報告書は、岩手県九戸郡軽米町大字軽米第13地割字叭屋敷26-1ほかに所在する大日向II遺跡の第2次～第5次の発掘調査成果を収録したものである。
2. 本遺跡の岩手県遺跡登録台帳はIF73-2112、遺跡の調査略号はOHII-88・OHII-89・OHII-90・OHII-91である。
3. 本遺跡の発掘調査は、一般国道395号の改良工事に伴い、岩手県教育委員会の調整を経て、岩手県土木部の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。
4. 野外調査は4ヵ年にわたって実施し、調査期間・調査面積・調査担当者は以下のとおりである。

第2次調査 昭和63年4月27日～7月21日 1400 m² 田鎖壽夫・斎藤邦雄

第3次調査 平成元年4月7日～6月30日 950 m² 藤村敏男・斎藤邦雄

第4次調査 平成2年4月10日～7月6日 1000 m² 佐々木弘・伊東格・斎藤邦雄

第5次調査 平成3年4月9日～11月8日 1385 m² 鈴木貞行・斎藤邦雄・八重座のり子
なお、第1次調査（昭和59年実施）については既に報告済みである（岩埋文セ：1986）。

5. 室内整理期間・整理担当者は以下のとおりで、昭和63年度調査の遺構分については田鎖壽夫が、その他については斎藤邦雄が執筆・編集にあたった。

昭和63年11月1日～平成元年3月31日 田鎖壽夫

平成3年11月1日～平成6年3月31日 斎藤邦雄

6. 各種遺物の分析・鑑定は次の方々をお願いした。

石質鑑定 佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）

黒曜石・ヒスイ産地同定 藁科哲男（京都大学原子炉実験所）

胎土分析・火山灰分析 三辻利一（奈良教育大学）

土器胎土分析 清水芳裕（京都大学）

人骨分析鑑定 野坂洋一郎（岩手医科大学歯学部）

木製品鑑定 山田昌久（東京都立大）

樹種鑑定 高橋利彦（木工舎「ゆい」）

花粉分析・リン分析他 株式会社パリノ・サーベイ

獣骨鑑定 西本豊弘（国立歴史民俗博物館）

顔料分析・アスファルト分析 木村克則（岩手県立博物館、現花巻農業高等学校）

炭素・酸素同位体組成分析 溝田智俊（岩手大学農学部）

7. 本報告書の作成にあたり、次の方々・機関から御指導・御助言を頂いた。（敬称略・現職名）
相原康二（岩手県教育委員会）・稲野裕介（北上市埋蔵文化財センター）・岡村道雄（文化庁）・
小田野哲憲（岩手県教育委員会）・佐瀬隆（一戸高等学校）・須藤隆（東北大学）・熊谷常正（岩
手県教育委員会）・工藤竹久（八戸市教育委員会）・昆野靖（伊保内高等学校）・佐々木勝（岩
手県立博物館）・佐藤嘉宏（岩手県教育委員会）・高橋信雄（岩手県立博物館）・千葉啓蔵（久
慈市教育委員会）・都出比呂志（大阪大学）・鈴木克彦（青森県埋蔵文化財調査センター）・春
成秀爾（国立歴史民俗博物館）・藤田亮一（八戸市教育委員会）・村越潔（弘前大学）・渡辺誠
（名古屋大学）・林謙作（北海道大学）・元興寺文化財研究所・藤田 等（静岡大学）・岡田康
博（青森県埋蔵文化財調査センター）・竹下将男（宮古市教育委員会）・高橋文明（北上市教
育委員会）・井上雅孝（滝沢村教育委員会）・桐生正一（滝沢村教育委員会）・高田和則（一戸
町教育委員会）・関豊（二戸市教育委員会）
8. 野外調査にあたっては、軽米町教育委員会及び小林栄治氏・高沢喜一氏をはじめとする地
元の方々の御協力を頂いた。
9. 国土地理院発行の地形図を複製したものは、図中に図幅名と縮尺を記した。
10. 遺構の埋土観察・出土遺物の色調観察は、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1989）を参考
にした。
11. 本上告書に掲載した実測図の凡例については、II. 調査経過及び調査方法等によった。な
お、実測図の縮尺については図中にスケールを付した。写真図版の縮尺は図版に準じた。
詳細は調査方法の項に記した。
12. 本報告書の担当は以下の通りである。
〈執筆・編集〉田鎖壽夫・斎藤邦雄
〈遺物撮影〉岩淵希士・金沢耕二
13. 本遺跡の発掘調査では、中間報告として現地説明会資料や研究会等に概略を公表している
が、本書の記載事項と異同がある場合は、本報告書を優先するものとする。
14. 出土遺物及び整理に関わる諸記録類は岩手県立埋蔵文化財センターで保管・管理している。

目 次

序	
例言	
I. 調査に至る経過	3
II. 遺跡の立地と環境	3
1. 遺跡の位置	3
2. 遺跡周辺の地形と地質	3
3. 歴史的環境	7
III. 調査の方法	12
1. 野外調査	12
2. 室内整理	14
IV. 検出された遺構と遺物	19
1. 住居跡・住居跡状遺構 (SA)	19
2. 掘立柱建物跡 (SB)	159
3. 土坑類 (SD)	188
4. 炉・焼土遺構 (SC)	268
5. 土器埋設遺構 (SG)	286
6. 集配石遺構 (SH)	296
7. 溝跡・旧河道遺構 (SF)	301
8. 柱穴状ピット群 (PP 群)	312
9. 土器捨て場・遺物集中区 (SX)	314
V. 総括(1) ～遺構について～	330
1. 縄文時代後期中葉・後葉の住居跡	330
2. 縄文時代の掘立柱建物跡	330
3. 縄文時代の土壇墓	331
4. 縄文時代の土器埋設遺構	333
5. 弥生時代初頭の住居跡	335
VI. 総括(2) ～遺物について～	336
1. 土器	336
2. 土製品	351
3. 剥片石器類・礫石器類・石製品類	359
4. 自然遺物	374
VII. まとめ	378
1. 軽米町内の縄文時代の遺跡の立地について	378
2. 大日向II遺跡の構成について	380

付篇	389
報告書抄録	522

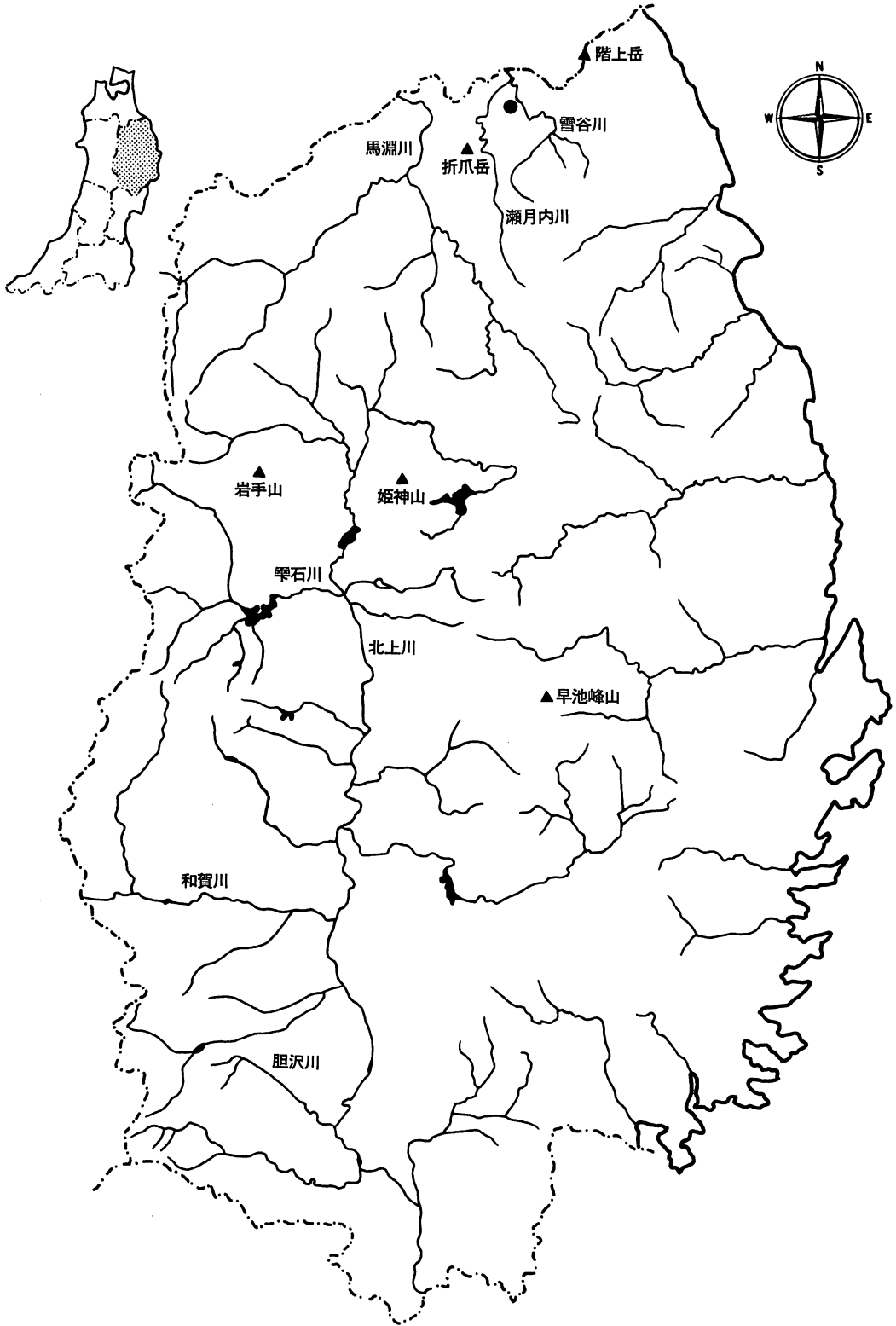
図版目次

付図1 遺構配置図

第1図	岩手県図にみる遺跡の位置	1	第27図	SA26 住居跡	63
第2図	遺跡の位置図・周辺の遺跡	2	第28図	SA27 住居跡	66
第3図	遺跡周辺の地形図	5	第29図	SA28 住居跡	67
第4図	基本層序概念図	6	第30図	SA29 住居跡	69
第5図	年度別調査区域	12	第31図	SA30 住居跡	71
第6-1図	グリッド配置図	15	第32図	SA31・32 住居跡	74
第6-2図	地形図	17	第33図	SA33 住居跡	76
第7図	SA01 住居跡	19	第34図	SA34 住居跡	77
第8図	SA02 住居跡	21	第35図	SA35 住居跡	79
第9図	SA03 住居跡	24	第36図	SA36 住居跡	81
第10図	SA04 住居跡	25	第37図	SA37 住居跡状遺構	82
第11図	SA05・17・18 住居跡	27	第38図	SA38 住居跡	83
第12図	SA06 住居跡	30	第39図	SA39 住居跡状遺構	85
第13-1図	SA07 住居跡	33	第40図	SA41 住居跡	87
第13-2図	SA07 住居跡	35	第41図	SA42 住居跡	90
第14-1図	SA08 住居跡	39	第42図	SA43 住居跡	92
第14-2図	SA08 住居跡	41	第43図	SA44 住居跡	95
第15図	SA09 住居跡状遺構	42	第44図	SA46・47 住居跡	98
第16図	SA10 住居跡	44	第45図	SA48 住居跡	99
第17図	SA11 住居跡・SA12 住居跡状遺構	46	第46図	SA49 住居跡	101
第18図	SA13 住居跡状遺構	47	第47図	SA50 住居跡	104
第19図	SA14 住居跡	49	第48図	SA51 住居跡(1)	105
第20図	SA15 a・b 住居跡	51	第49図	SA51 住居跡(2)・SA52 住居跡状遺構	110
第21図	SA16 住居跡	53			
第22図	SA19・20 住居跡	55	第50図	SA53 住居跡	111
第23図	SA21 住居跡	57	第51図	SA54 住居跡	112
第24図	SA22・23 住居跡	59	第52図	SA55 住居跡	113
第25図	SA24 住居跡	60	第53図	SA56 住居跡	114
第26図	SA25 住居跡	62	第54図	SA57 住居跡	115

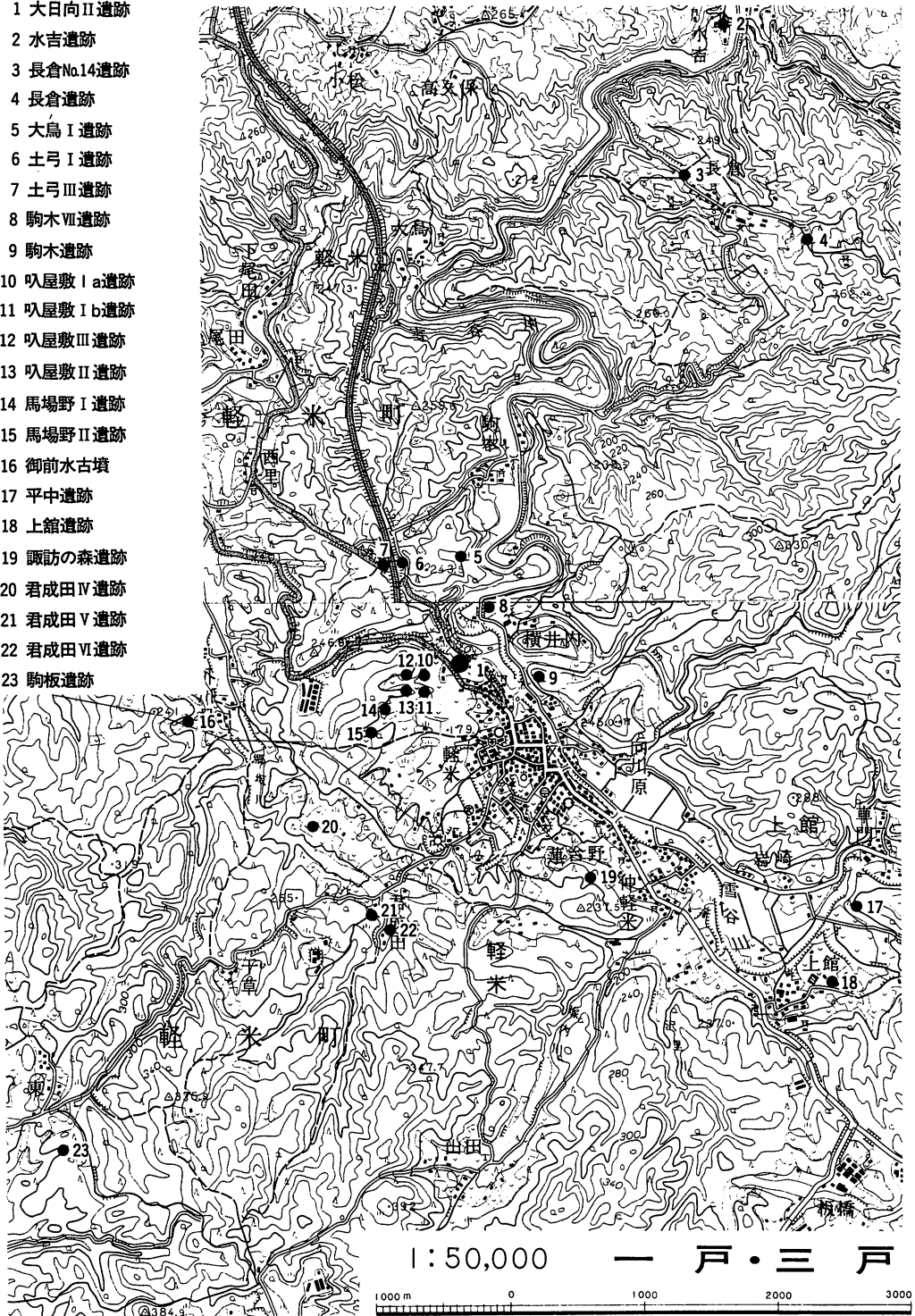
第55図	SA58 住居跡状遺構	115	第86図	SB04 掘立柱建物跡	164
第56図	SA59 住居跡	117	第87図	SB05 掘立柱建物跡	165
第57図	SA60 住居跡	119	第88図	SB06 掘立柱建物跡	166
第58図	SA61・62・63 住居跡(1)	122	第89図	SB07 掘立柱建物跡	167
第59図	SA61・62・63 住居跡(2)	123	第90図	SB08 掘立柱建物跡	169
第60-1 図	SA64 住居跡	125	第91図	SB09 掘立柱建物跡	170
第60-2 図	SA64 住居跡	127	第92図	SB10 掘立柱建物跡	171
第61図	SA65 住居跡	128	第93図	SB11 掘立柱建物跡	173
第62図	SA66 住居跡	129	第94図	SB12 掘立柱建物跡	174
第63図	SA67 住居跡状遺構	130	第95図	SB13 掘立柱建物跡	175
第64図	SA68 住居跡	132	第96図	SB14 掘立柱建物跡	177
第65図	SA69 住居跡	134	第97図	SB15 掘立柱建物跡	178
第66図	SA70 住居跡	135	第98図	SB16 掘立柱建物跡	179
第67図	SA71 住居跡	136	第99図	SB17 掘立柱建物跡	180
第68図	SA72 住居跡	137	第100図	SB18 掘立柱建物跡	181
第69図	SA73 住居跡(1)	139	第101図	SB19 掘立柱建物跡	183
第70図	SA73 住居跡(2)	140	第102図	SB20 掘立柱建物跡	184
第71図	SA74 住居跡	141	第103図	SB21 掘立柱建物跡	186
第72図	SA75 住居跡	142	第104図	SB22 掘立柱建物跡	187
第73図	SA76 住居跡	144	第105図	土坑類(1) SD001~009	246
第74図	SA77 住居跡	145	第106図	土坑類(2) SD010~013・015~019	247
第75図	SA78 住居跡	147	第107図	土坑類(3) SD020~026・029	248
第76図	SA79 住居跡	148	第108図	土坑類(4) SD027・028・030~032	249
第77図	SA80 住居跡	150	第109図	土坑類(5) SD033~042	250
第78図	SA81 住居跡	151	第110図	土坑類(6) SD043~051	251
第79図	SA82 住居跡	152	第111図	土坑類(7) SD052~060	252
第80図	SA83 住居跡	154	第112図	土坑類(8) SD061~066・068・069・072	253
第81図	SA84 住居跡	156			
第82図	SA85 住居跡	157	第113図	土坑類(9) SD067・070・071・073~076	254
第83図	SB01 掘立柱建物跡	160			
第84図	SB02 掘立柱建物跡	161	第114図	土坑類(10) SD077~080	255
第85図	SB03 掘立柱建物跡	162	第115図	土坑類(11)SD081~087	256

第116図	土坑類(12)SD088～096	257	第142図	柱穴状ピット群	313
第117図	土坑類(13)SD097～103	258	第143図	土層断面調査地点	329
第118図	土坑類(14)SD104～112	259	第144図	土壌墓軸線方位	331
第119図	土坑類(15)SD113～121	260	第145図	土器埋設遺構分布図	334
第120図	土坑類(16)SD122～127	261	第146図	弥生時代前半の住居跡床面積	335
第121図	土坑類(17)SD128～133	262	第147図	参考土器(1)	346
第122図	土坑類(18)SD134～142	263	第148図	参考土器(2)	347
第123図	土坑類(19)SD143～151	264	第149図	参考土器(3)	348
第124図	土坑類(20)SD152～158・160	265	第150図	参考土器(4)	349
第125図	土坑類(21)SD159・161～164	266	第151図	参考土器(5)	350
第126図	土坑類(22)SD084・SD099	267	第152図	土製円盤法量図(1)	353
第127図	焼土遺構・炉跡 SC01～05・13・14・ 16・17	280	第153図	土製円盤法量図(2)	354
第128図	焼土遺構・炉跡 SC06～12	281	第154図	焼成粘土法量図	355
第129図	焼土遺構 SC15・18～20・22～24	282	第155図	土器重量分布図	356
第130図	焼土遺構・炉跡 SC21・25～27	283	第156図	土偶出土分布図	356
第131図	焼土遺構・炉跡 SC28～30・33	284	第157図	耳飾り類出土分布図	357
第132図	焼土遺構・炉跡 SC31・32・34・35	285	第158図	土製円盤出土分布図	357
第133図	土器埋設遺構(1) SG01～08	293	第159図	焼成粘土出土分布図	358
第134図	土器埋設遺構(2) SG09～14	294	第160図	石製円盤出土分布図	358
第135図	土器埋設遺構(3) SG15～19	295	第161図	石器組成と石材構成(1)	360
第136図	集配石遺構(1) SH01・02	298	第162図	石材構成(2)	361
第137図	集配石遺構(2) SH03・04	299	第163図	石鏃法量図	363
第138図	集配石遺構(3) SH05・06	300	第164図	石匙の構成	364
第139図	SF01 溝跡	303	第165図	石錐の構成	365
第140-1図	SF02 旧河道(1)	305	第166図	不定形石器の構成と法量	366
第140-2図	SF02 旧河道(2)	307	第167図	石斧残存部位類型図	367
第141図	SF02 旧河道(3)	308	第168図	敲打磨石類の構成	369
			第169図	石製円盤法量図	371
			第170図	時期別住居跡分布図	385



第1図 岩手県図にみる遺跡の位置

- 1 大日向II遺跡
- 2 水吉遺跡
- 3 長倉No.14遺跡
- 4 長倉遺跡
- 5 大鳥I遺跡
- 6 土弓I遺跡
- 7 土弓III遺跡
- 8 駒木VII遺跡
- 9 駒木遺跡
- 10 吠屋敷I a遺跡
- 11 吠屋敷I b遺跡
- 12 吠屋敷III遺跡
- 13 吠屋敷II遺跡
- 14 馬場野I遺跡
- 15 馬場野II遺跡
- 16 御前水古墳
- 17 平中遺跡
- 18 上館遺跡
- 19 諏訪の森遺跡
- 20 君成田IV遺跡
- 21 君成田V遺跡
- 22 君成田VI遺跡
- 23 駒板遺跡



第2図 遺跡の位置図・周辺の遺跡

I 調査に至る経過

大日向II遺跡は一般国道 395 号軽米地区道路改良工事にもなって発掘調査された。事業は路線変更によって屈曲部分や狭隘部分を解消しようとするもので、軽米地区では当遺跡のほか沼 I 遺跡がこの事業に該当した遺跡である。

遺跡が所在する軽米町では昭和 61 年に東北縦貫自動車道八戸道が開通し、軽米インターチェンジが開設されたことにより、インターチェンジから国道 395 号を交差させて国道 340 号につなげる計画が策定された。調査は 4 年間にわたったが、この事業に関連する遺跡の取扱いについては岩手県教育委員会文化課と岩手県土木部との間で協議がなされた。調査の初年度に係る経緯については次のとおりである。

昭和 62 年 8 月 24 日付「教文第 289 号」で教育委員会文化課から岩手県土木部に対して「昭和 63 年度における埋蔵文化財関連土木工事の調査について」照合し、9 月 24 日付「道建号外」で土木部から大日向II遺跡 2,800 m²の事業を回答している。これを受けて、教育委員会では発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの昭和 63 年度の事業とした。埋蔵文化財センターと土木部の間では、昭和 63 年 4 月 27 日付けで 1,400 m²について委託契約をし調査を開始した。

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置 (第 1・2 図)

大日向II遺跡の所在する軽米町は岩手県北部、北上山系の北端部に位置し、雪谷川の河岸低地に発達した町である。遺跡は軽米町の中心部から北西へ約 1.3 km の所にあり、八戸自動車道軽米インターチェンジの直下に位置している。遺跡の載る面は、東が雪谷川、西が郷坂川に挟まれた丘陵から南東方向に張り出した標高 163 m～186 m の南東向きの斜面に広がっている。遺跡と雪谷川との間は急峻な崖となっており、その比高は 20 m～35 m である。土地の現状利用状況は、果樹園及び煙草耕作地である。遺跡のわきを流れる雪谷川は県境を越えるとその河川名を新井田川と改め、軽米町はこの河川を挟み隣県の青森県南郷村と接している。新井田川下流域には、八戸市に所在する是川中居遺跡や風張遺跡など東北地方の代表的な縄文時代の遺跡がある。

2. 遺跡周辺の地形と地質 (第 3 図)

(1) 地形

遺跡の所在する九戸郡軽米町は本県の最北端に位置しており、東は種市町と大野村、南は山形村と九戸村、西は二戸市、北は青森県階上町と南郷村・名川町と接している。北東に階上岳(740 m)・久慈平岳(706 m)、南西に折爪岳(852 m)などの山々が遠望できる。軽米は雪谷川の河谷低地帯に発達した街である。雪谷川は九戸郡九戸村雪谷の小起伏山地に源を發し、北東方向に流路をとるが、軽米町小軽米付近で流路を大きく変更して北西～北方向に流れる。青森県との県境付近で北流する瀬月内川に合流し、青森県に入ると新井田川と名前をかえて八戸市で太平洋に注ぐ。総延長は約 58 km である。

雪谷川は古生層、一部は第三紀層を侵食しながら流れる。流域の河岸低地の発達はよくない。下円子から小軽米・軽米にかけて小規模な沖積地が形成されるが、河成の洪積段丘に相当する地形面は丘陵地の前面に小規模に付着するにすぎず、しかも中位面以上をほとんど欠いている。それらの背後は丘陵地や小起伏山地が占め、開析が進んでいるために緩やかなうねりを示している。

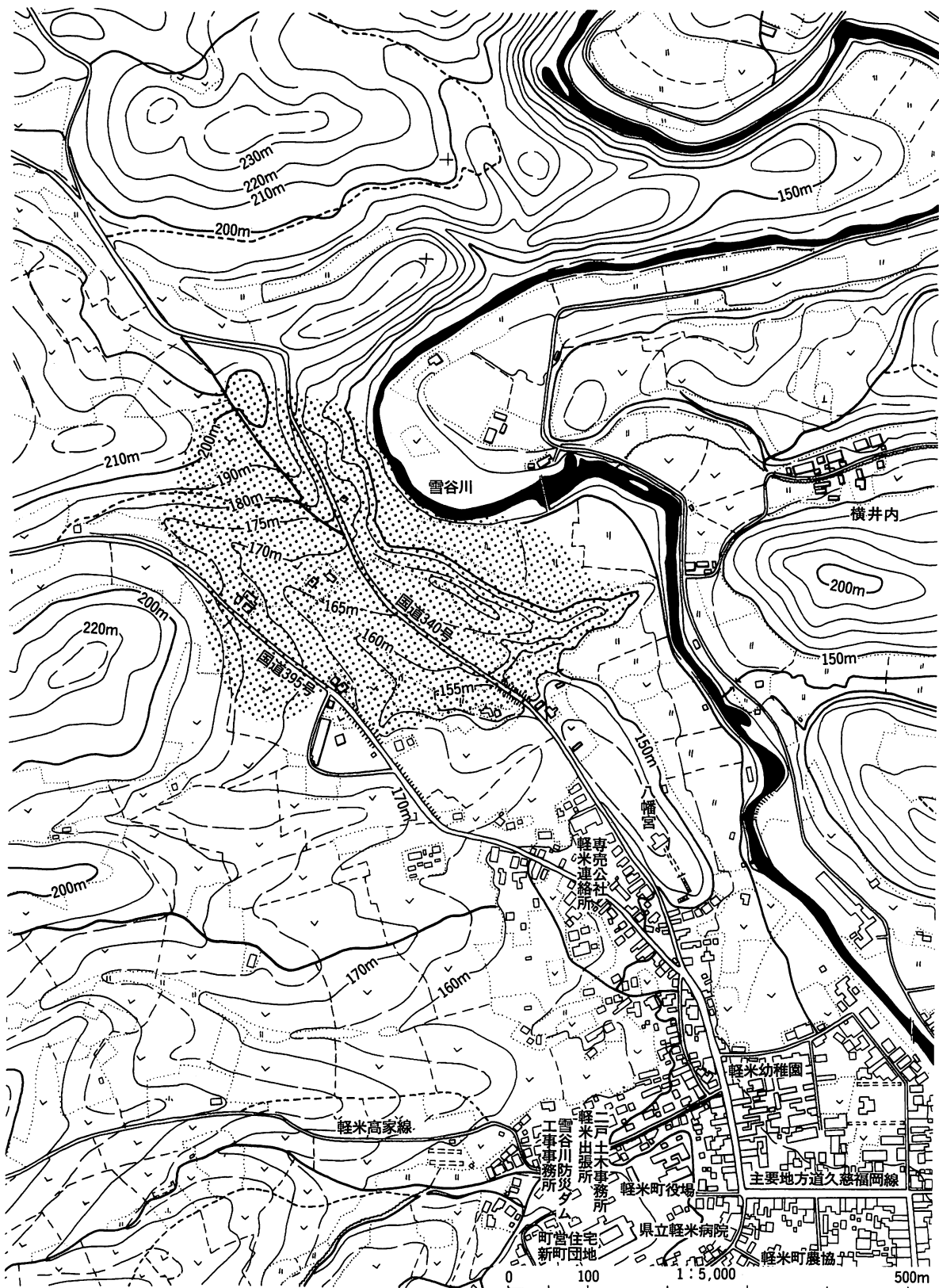
(2) 地質

軽米町付近の丘陵や小起伏山地はチャート・粘板岩などを主体にした古生層が主に基盤を構成し、火山碎屑物がその上を広く覆う。遺跡に分布する火山灰層群のうち、同定できるものは下位から順に、八戸火山灰層・南部浮石層・中振浮石層・十和田 b 降下火山灰層・十和田 a 降下火山灰層であり、供給源はいずれも十和田火山とされている。八戸火山灰層の下位は古い順に、青森県上北地南部では天狗岱火山灰層・高館火山灰層、九戸地域では九戸火山灰層・種市火山灰層が占める(東北地方第四紀研究グループ：1969)。放射性年代測定による年代は、八戸火山灰層が 12,700±260 年 B.P の値が与えられており(大池：1963)、南部浮石層から上位はいずれも完新世火山灰である。本遺跡では八戸火山灰層・南部浮石層、局部的ではあるが十和田 a 火山灰層・十和田 b 火山灰層・中振浮石層が確認されている。

本遺跡は前述のように C 調査区とした旧河道を挟み、南西側に展開する A 調査区と南東側に展開する B 調査区に分かれている。両調査区とも縄文時代を中心とした遺構が数多く見られ、断続的ではあるが長期間に渡った人間の関与が認められる。そのため各層は不連続であり調査区全域に基本土層に示したような土層が見られるのではなく非常に複雑で局所的な分布のしかたをしている。A・B 調査区とも基本的には第 4 図に示した層相を示している。

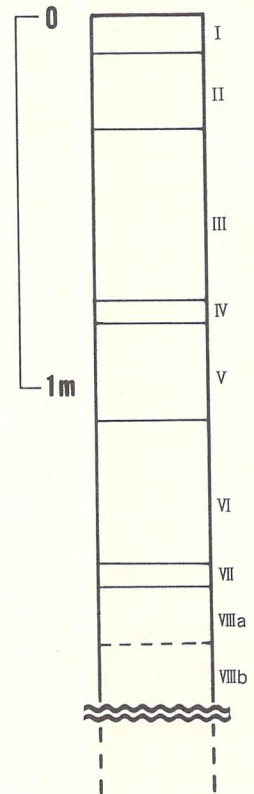
I 層 黒色土 (10 YR 1.7/1) 耕作土である。厚さ 10 cm±である。

II 層 黒色土 (10 YR 1.7/1) 遺物はあまり含まれていない。特に A 調査区には広く発達しており、B 調査区ではほとんど見られない。しまりのないシルト質土である。この黒色土の上位に局所的であるが十和田 a 火山灰 (To-a) が見られる。この十和田 a 火山灰は A 調査区では奈良時代住居跡の埋土中に観察される。厚さ 20 cm±である。



第3図 遺跡周辺の地形図

- III層 黒色土 (10 YR 2/1) シルト質でややしまりがあり、極小の黄褐色浮石細粒が認められる。焼土・炭化物を含み人間の存在が認められる層である。弥生時代・縄文時代晩期・後期の遺物が多量に含まれ、該期の遺構もこの層中より検出される。B調査区の東側の調査区とSX01遺物集中区、A調査区の土器捨て場の下位から断片的であるが十和田b火山灰 (To-b) が検出される。また、B調査区GVI・GVII・HVI・HVII・HVIIIグリッド周辺にはこの黒色土の上位に広範囲に不連続であるが投棄された焼土が多量に認められる。層厚は30 cm～60 cmで上位では縄文晩期の土器、黄褐色浮石細粒の混じりが少なくなる下位では後期中葉・後半の土器が出土する傾向にある。
- IV層 黒色土 (10 YR 2/1) 中振火山灰の二次堆積あるいは土壌化したものである。しまりがありやや砂っぽい感じを受ける。純粋な中振火山灰は断片的にしか見られない。層厚は10 cm～3 cm±である。
- V層 黒褐色土 (7.5 YR 2/1) 黒色土を主体に大粒の黄褐色浮石が7～15%程度含まれたシルト質土である。遺物量は多くないがこの層の上面から縄文前期の遺物が出土する。層厚は30 cm±である。
- VI層 明褐色土 (7.5 YR 5/8) 南部浮石層。ほぼ全域に分布しているが、A・B調査区とも斜面下方では流失をうけ認められない。遺物は含まれていない。
- VII層 黒褐色土 (10 YR 2/2) やや粘土質で層厚は5 cm±で硬くしまりがある。
- VIII a 層 明黄褐色土 (7.5 YR 4/6) 八戸火山灰層である。
- VIII b 層 灰白色土 (2.5 Y 8/2) 一連の八戸火山灰層である。



第4図 基本層序概念図

<参考・引用文献>

- 大池昭二(1963)：「八戸浮石の絶対年代」青森地学 No. 8
- 大池昭二(1972)：「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」 第四紀研究 11-4
- 東北地方第四紀研究グループ(1969)：「東北地方における第四紀海水準変化」地団研専報 No.14
- 三浦・小平(1983)：「吠屋敷 I a 遺跡発掘調査報告書」 岩埋文第 61 集
- 田鎖寿夫(1984)：『大日向II遺跡発掘調査報告書』岩埋文第 100 集

3. 歴史的環境 (第2図)

北上山地北部の中央部に位置している軽米町はその大部分が丘陵地帯で占められており、新井田川の支流である雪谷川と瀬月内川に沿った所に集落や耕地が開けている。遺跡の分布もほぼ現在の集落分布と重複しており、人間の生活の場は地形的な制約を受け古くから限定された場所に営まれている。

現在までのところ町内には約400ヵ所の遺跡が知られている。軽米町は遺跡の宝庫として古くから知られており、好事家の手により遺物が採集されていた。町内での考古学的調査は、昭和30年代に地元の高専に在職した鈴木孝志氏によってなされている。鈴木氏は、縄文時代晩期中葉の板橋遺跡、縄文時代晩期末葉～弥生時代初頭の下野場遺跡(君成田IV遺跡と同一)、縄文時代後期後半の明神下遺跡(長倉I遺跡と隣接)の調査を行っている。その後、本格的に組織的な調査が行われたのは昭和50年代後半に入ってからであり、東北縦貫自動車道八戸線の建設及びそれに関連した国道・県道の改良工事に伴う緊急発掘調査が実施されてからである。調査が実施された遺跡についての概要は以下の通りである。

長倉No14遺跡(大字長倉) 昭和54年調査 3,372m² No10集 1980

立地: 標高250mの丘陵頂部

遺構: 時期不明の土坑8基・溝跡1条

遺物: 縄文時代後期前葉 縄文時代晩期後葉

長倉遺跡(大字長倉) 昭和55年調査 1,500m² No25集 1981

立地: 標高270mの丘陵緩斜面

遺構: 時期不明の土坑2基

遺物: 円筒下層a・b・d式

君成田IV遺跡(大字軽米字君成田) 昭和55年調査 13,000m² No62集 1983

立地: 標高200m～230mの丘陵地末端部

遺構: 住居跡58棟(縄文中期末10・縄文後期初頭8・縄文後期前葉19・縄文後期中葉3・縄文後期後葉5・縄文後期末葉3・縄文晩期前葉4・縄文不明3・弥生初頭1・古代2)、土器埋設遺構3基、配石遺構1基、土坑類65基、陥し穴状遺構2基、近世遺構の建物跡1棟

遺物: 大木10式、十腰内I・IV・V式、砂沢式、遠賀川系土器、天王山式、赤穴式耳栓、鐸形土製品、土偶

叭屋敷II遺跡(大字軽米) 昭和56年調査 7,680 m² No47集 1983

立地: 標高200 m~250 mの丘陵地上

遺構: 住居跡19棟(縄文中期末葉7・縄文後期後半3・縄文後期後葉3・縄文不明5・古代1)、炉跡1基、土坑類29基

遺物: 円筒下層c・d式、円筒上層a式、大木10式、十腰内I・III・IV・V式、大洞B・BC・C1・C2式

叭屋敷III遺跡(大字軽米) 昭和56年調査 7,680 m² No48集 1983

立地: 標高210 m~223 mの丘陵地上

遺構: 住居跡13棟(縄文中期末葉4・縄文後期9)、土坑26基、焼土遺構1基、土器埋設遺構1基

遺物: 縄文前期前葉、大木10式、十腰内I・V式、大洞B式
円盤状土製品

土弓I遺跡(大字軽米) 昭和56年調査 5,580 m² No50集 1983

立地: 標高200 mの丘陵地上

遺構: 土坑類5基(縄文早期)、道路跡1

遺物: 物見台式、早稲田3類、ムシリI式、早稲田5類、円筒上層a式、十腰内V式、大洞B式、弥生初頭

叭屋敷I a遺跡(大字軽米) 昭和56年調査 13,450 m² No61集 1983

立地: 標高171 m~185 mの丘陵地上

遺構: 住居跡49棟(大木9式期9・大木10式期28・後期初頭1・十腰内III式期2・大洞C1式期1・縄文不明2、奈良1、平安7、時期不明5)、炉跡2基、土坑101基、陥し穴状遺構4基

遺物: 大木9・10式、十腰I・II・III・IV・V式、大洞B・C2式
土偶、耳飾り

叭屋敷I b遺跡(大字軽米) 昭和56年調査 12,740 m² No63集 1983

立地: 標高174 m~194 mの丘陵地先端部の緩斜面上

遺構: 住居跡4(縄文前期前半2・縄文中期末葉1・平安1)、土坑類28基、掘立柱建物跡2棟、陥し穴状遺構7基

遺物：深郷田式、円筒下層 a・b・d 式、円筒上層 e 式、大木 9・10 式、十腰内 I・V 式、大洞 B・BC・C 1・C 2 式

馬場野 I 遺跡（大字軽米字馬場野） 昭和 56・57 年調査 11,970 m² No.68 集 1983

立地：標高 196 m～211 m の丘陵地上の尾根部

遺構：住居跡 10 棟（縄文後期初頭 3・縄文中期末～後期初頭 3・縄文後期前葉 1・助文中期末葉 1・縄文後期中葉 1・縄文時代不明 1）、土坑類 76 基、陥し穴状遺構 5 基、近世土墳墓 3 基

遺物：大木 10 式、十腰内 I 式、十腰内 V 式、大洞 B 式、大洞 BC 式
耳飾り

駒板遺跡（大字山内字駒板） 昭和 57 年・58 年調査 78,700 m² No.98 集 1986

立地：標高 195 m～215 m の丘陵地上

遺構：住居跡 83 棟（縄文後期初頭 7・縄文後期前葉 17・縄文後期中葉～末葉 1・縄文後期末葉 2・縄文後期 7・縄文晩期前葉 4・縄文晩期中葉 1・縄文後葉 1・縄文不明 11、奈良 15、中世 2）、炉跡・焼土遺構 16 基、埋設土器 3 基、土坑 264 基、陥し穴状遺構 17 基、溝遺構 1 条、近世炭窯跡 28 基、鑄銭場跡 1

馬場野 II 遺跡（大字軽米字馬場野） 昭和 56・57 年・58 年調査 20,500 m² No.99 集 1986

立地：標高 195 m～215 m の丘陵地上

遺構：住居跡 57 棟（縄文中期末 10・後期初頭 3・後期中葉 23・後期中葉～末葉 6・縄文晩期中葉 2・晩期前葉 1・縄文不明 1・弥生初頭 11）

遺物：多縄文系土器、押型文、貝殻文系土器、十腰内 I～V 式、大洞 B～A' 式 砂沢式土偶、耳飾り、スタンプ形土製品、球状土製品、勾玉、円盤状土製品、土玉、土製勾玉

大日向 II 遺跡（大字軽米字叭屋敷） 昭和 59 年調査（第 1 次） 6,101 m² No.100 集 1986

立地：標高 168 m～173 m の丘陵地の緩斜面上

遺構：住居跡 47 棟（縄文前期 3・縄文中期末葉 4・縄文後期後半 27、奈良 2、平安 2、時期不明 5）、掘立柱建物跡 1、土坑 85 基、陥し穴状遺構 1 基、池跡 1、配石遺構 1、土器埋設遺構 4 基、カマド跡 1 基

遺物：十腰内 III・IV・V 式、大洞 B・BC・C 1 式
土偶、亀形土製品、琥珀

大堤II遺跡（大字晴山字大堤） 昭和 61 年調査 6,000 m² No.119 集 1987

立地：標高 250 m の丘陵地上

遺構：土坑類 20 基 縄文 17 平安 3

陥し穴状遺構 17 基

遺物：大洞B式

自角子久保VI遺跡（大字晴山字小沼） 昭和 62 年調査 5,000 m² No.129 集 1988

立地：標高 250 m の丘陵地上

遺構：縄文時代 土坑 15 基、陥し穴状遺 17 基

平安時代 住居跡 5、掘立柱建物跡 3、円形周溝 1、用水路跡 1、土坑 6、柱穴跡 16、
畑地跡 江戸末～明治初頭 民家跡、井戸跡

遺物：大洞B式、近代木製品

糺口 I 遺跡（大字晴山字泉沢） 平成 2 年調査 4,563 m² No.175 集 1991

立地：標高 248 m～256 m の丘陵地縁辺部

遺構：住居 2 棟（縄文早期 1・奈良 1）、土坑 11 基（縄文 9・奈良 1・不明 1）、陥し穴状遺
構 1 基、時期不明焼土 5

遺物：吹切沢式、物見台式、ムシリ I 式、赤御堂式、早稲田 5 類、晩期中葉、後北式土器

上述の遺跡が現在まで町内において正式に調査された遺跡である。縄文時代早期前葉では押型文を伴出する遺構が馬場野II遺跡、現在調査が進行中の大日向II遺跡（第6次調査）で検出されている。これに続くものとして貝殻文系の土器群があてられるが、遺物の発見はあるが遺構については未検出である。続いて早期中葉以降の住居跡は、これから述べる大日向II遺跡でムシリ式併行期の住居跡が検出されている。

前期では赤御堂式期の住居跡が糺口 I 遺跡で、深郷田式併行期の住居跡が吠屋敷 I 遺跡で検出されている。また、昭和 59 年調査の大日向II遺跡で円筒下層式前半期の住居跡が検出されている。

中期については断片的ではあるが円筒上層 a・b・c 式の土器が発見されているが現在までのところ住居跡等は知られていない。中期末葉から後期前葉の時期は全県的な傾向であるが遺跡数・住居跡の著しい増加が見られ、君成田IV遺跡で 37 棟・吠屋敷II遺跡で 7 棟・吠屋敷III遺跡 4 + α・吠屋敷 I a 遺跡で 38 棟・馬場野 I 遺跡で 8 棟・駒板遺跡 30 数棟・馬場野II遺跡で 13 棟・大日向II遺跡で 4 棟が検出されている。これらの住居跡には、炉の形態・敷設場所に共通

性が見られる。他の地域と比較した場合、集落の構成においてこの時期にしばしば認められる配石遺構の欠落が注目される。縄文時代後期中葉～末葉の時期は前時期よりも住居跡数が減少するが県内の他地域と比べた場合、圧倒的に遺構数・遺物の質量とも豊富なものがあり、八戸周辺を含めた新井田川下流域も同様な傾向が看取される。晩期では数遺跡から住居跡なども検出されており県内のこの時期に限ってみた場合比較的高密度で遺構が検出されている。

弥生時代では、当遺跡を含め馬場野II遺跡で初頭の時期の集落跡が検出されている。また、君成田IV遺跡でも同時期の住居跡が発見されており、北上川流域などと比較した場合住居跡の検出例は圧倒的に多くなっている。既に小田野氏によって指摘されているところであるが、馬淵川流域で検出されるこの時期の住居跡は他地域から検出される同期の住居跡と比較した場合、相対的に床面積が広く壁溝をもつといった特徴が指摘される。これは秋田県・青森県など東北地方北半地域においても同様のことがみられ、弥生文化波及期の現象として特筆される。このような事象は、遠賀川系土器の出土傾向と重複しており、このような事象が単なる偶然の一致なのか今後追究して行かねばならない重要な課題である。これ以降の時期については、田舎館式・赤穴式の土器が少量検出されているが遺構などの検出例は現在までのところ確認されていない。

時期的な位置づけについては未だ流動的であるが、北海道に主要な分布を示す後北式土器が北上川上流域および馬淵川流域で散見されることがある。軽米町内でも破片資料であるが駒木、諏訪の森、吠屋敷I a遺跡、大日向II遺跡（第2次調査）・糺口I遺跡で発見されている。

奈良時代では、大日向II遺跡（第1次調査）2棟・吠屋敷I a遺跡で1棟・君成田IV遺跡で2棟・駒板遺跡14棟・糺口I遺跡で1棟が検出されている。平安時代では皂角子久保遺跡で住居跡5棟・掘立柱建物跡3棟・畑跡が発見され当時の生業形態を知る上で貴重な資料を提供している。その他、大日向II遺跡（第1次調査）で住居跡が2棟・吠屋敷I a遺跡で5棟が検出されている。縄文時代に比較して人間活動の痕跡が希薄であり生業形態の変化にともなう集落立地の変化とも理解される。

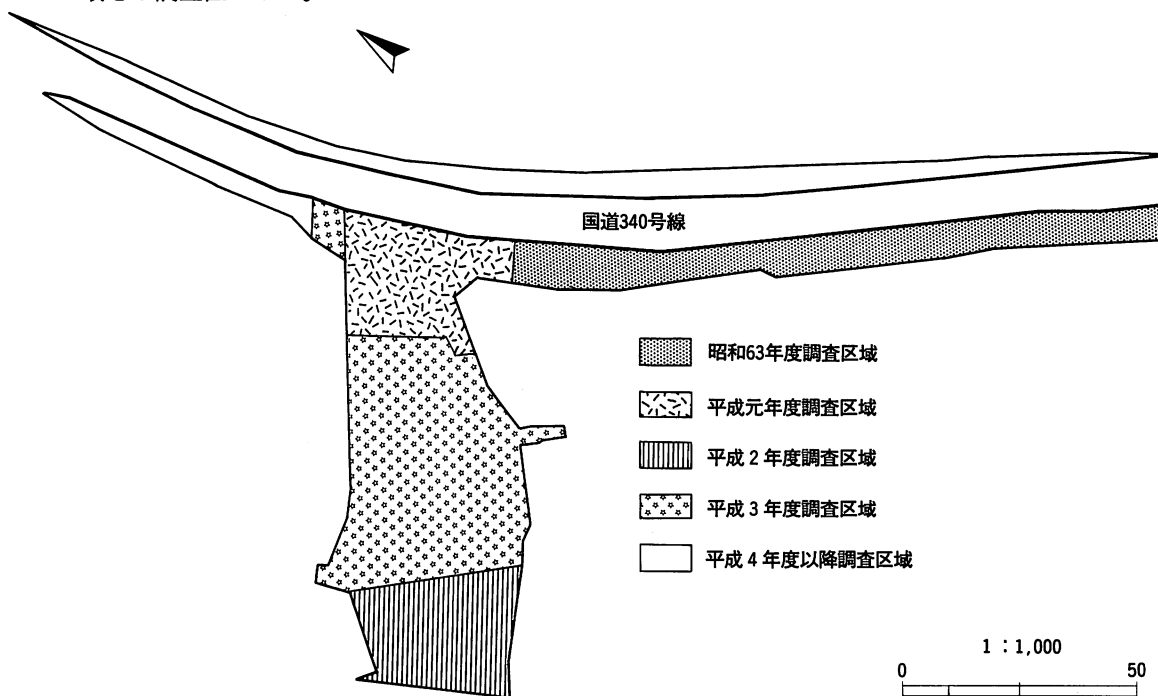
III 調査の方法

1. 野外調査

(1) 調査区の設定

調査区は東西に 250 m、南北に 160 m の T 字状を呈しており、グリッドは昭和 59 年に当センターが実施した大日向 II 遺跡第 1 次調査(田鎖他：1986)の基準点 2 (X = +36786.24 m、Y = +53171.20 m) をもとに設定した。調査区の全域を網羅すべく基準点 2 から北へ 175 m、西へ 85 m の地点に原点を設け 10 m × 10 m の大グリッドを設定した。大グリッドの呼称は原点を起点として東側へは大文字のアルファベットで A・B・・・、南側へはローマ数字を用い、これを組み合わせ A I グリッド B II グリッドというように行った。また、各大グリッド内に 2 m × 2 m の小グリッドを設け、東側へは小文字のアルファベットを用い、南側は算用数字を使用しこれを組み合わせ 1a 区、1b 区とした。大グリッドと併用した場合は HVI 2b 区というようになり、この小グリッドが遺物取り上げの基本となっている。

グリッドの設定は上述のようであるが、今回の調査範囲が沢を挟み両側の斜面に分割されているため便宜上次のように調査区を呼称した。A 調査区は沢の南側で昭和 59 年に調査した区域に隣接した場所である。B 調査区は沢の北側斜面の部分で、A・B 両調査区に挟まれた沢の地域を C 調査区とした。



第 5 図 年度別調査区域

(2) 粗掘りと遺構検出

グリッド設定後、各調査区において地形に直交するようにテストトレンチを設定し土層の確認と遺構・遺物の状況を把握した。その結果、各調査区で表土（耕作土）の段階から多量の遺物が出土することが確認されたためすべて手作業で実施することにした。ただし、平成3年度に実施したA調査区の土器捨て場、C調査区の旧河道の調査区では遺物包含層まで1 m以上の無遺物層が確認されたためこれら調査区に限り表土除去に重機を使用した。

前述したように、当遺跡は遺構密度が非常に高くしかも遺構の重複が激しいことや鍵層となる層が局部的にしか発達していないことなどから遺構の検出には大変困難を窮めた。遺構検出は大グリッドを基本として行い、最終検出面である南部浮石層に達するまで2～3段階にわけて検出を行った。また昭和63年度の調査で縄文時代早期の押型文の土器片が確認されたことからトレンチ方式により一部の調査区において南部浮石層下位の面でも遺構検出を実施した。

(3) 遺構の名称

野外調査では大グリッドを基本とし、住居跡・住居跡状遺構は1～、土坑類51～、焼土遺構21～、土器埋設遺構71～とし、J VIII-1住居跡というような遺構の命名法を採用した。

尚、4ヶ年の継続調査で相当数の遺構に達したため室内整理の段階で以下のような記号に各種遺構名を変更している。これに伴い、実測図をはじめ各種記録類は遺構名の訂正を行っている。

住居跡・住居跡状遺構	SA01～	掘立柱建物跡	SB01～
炉・焼土遺構	SC01～	土坑類（含墓塚）	SD01～
落とし穴状遺構	SE01～	溝跡・旧河道	SF01～
土器埋設遺構	SG01～	集配石遺構	SH01～
土器集中区・捨て場	SX01～		

(4) 精査

住居跡・住居跡状遺構は四分法、土坑類・焼土遺構・土器埋設遺構は二分法を原則として採用し、他の遺構については性格に応じて精査を実施した。遺構内の遺物については、埋土上部・中部・下部、埋土・床面直上・床面等で取り上げた。遺構外の遺物については昭和63年度の調査では大グリッドで取り上げたが、次年度の調査からは大量の出土遺物に対応するため層位毎に小グリッド（2 m×2 m）で取り上げている、しかし調査の進行状況等により一部大グリッドで取り上げた遺物もある。

(5) 実測と写真

実測は簡易の遣り方の方法を採用し、各種遺構とも断面図・平面図とも1/20を原則としており、状況によっては一部小縮尺で行った。

写真はモノクロームが35 mm判と6×7 cm判各1台、カラーライドが35 mm判1台を使用し土層断面・全景写真・細部写真等の記録として使用した。また、各調査時の終了時点で調査区全景の撮影のため業者に依頼し空中写真の撮影を実施している。

(6) 広報活動

調査の成果を可能な限り一般に公開し、埋蔵文化財に対する理解と認識を得るために各年度の調査終了時点で現地説明会を開催してきた。また、調査成果の一部については各種研究会等で発表を行ってきた。

2. 室内整理

(1) 作業内容

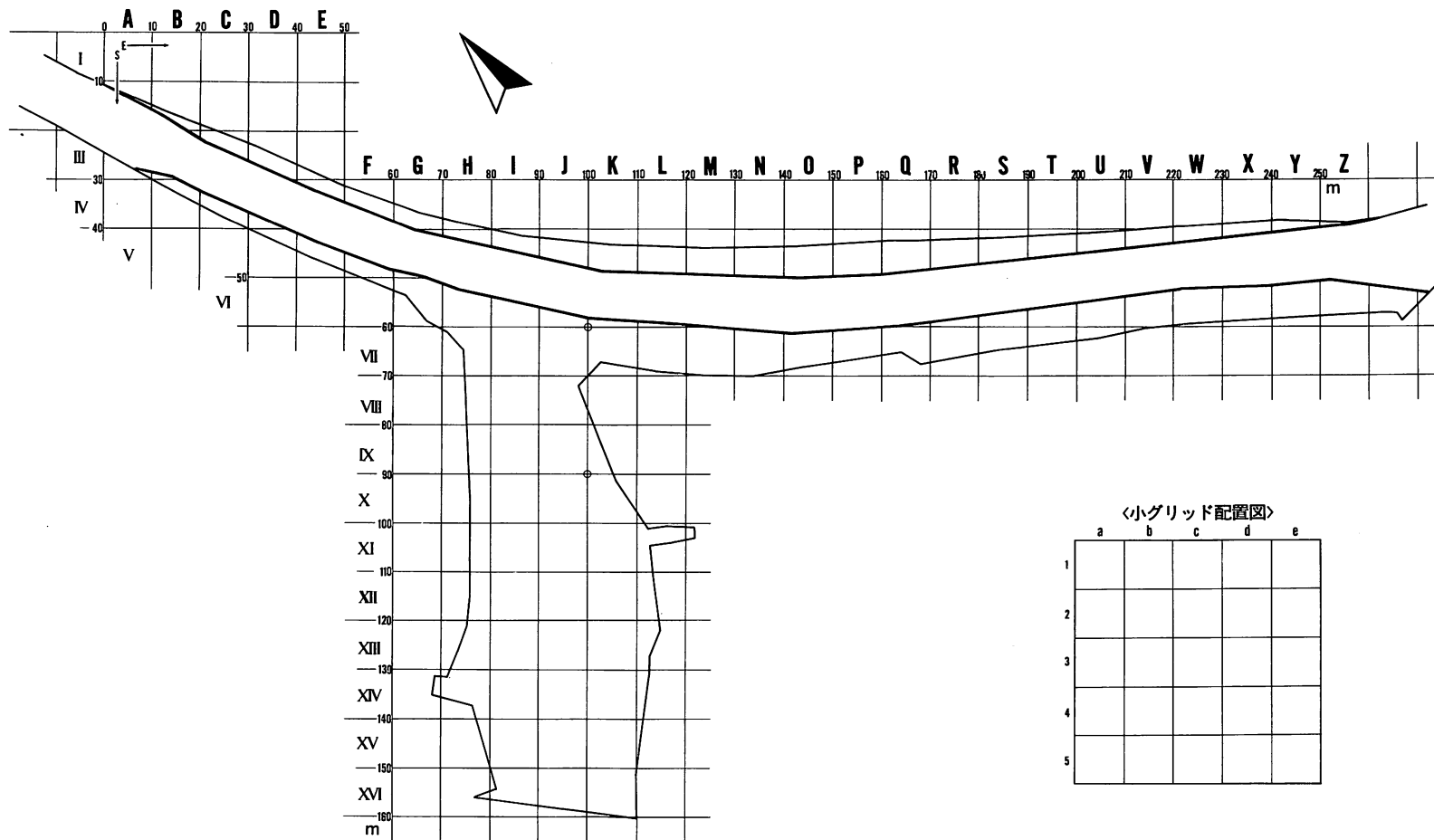
室内作業も野外調査と同様、担当調査員と臨時職員の協業の上に成り立っている。おおよそ次のように分担して室内作業を実施した。

調査員：全体計画の立案・作業の指示・遺物の観察・作図の点検・原稿執筆等

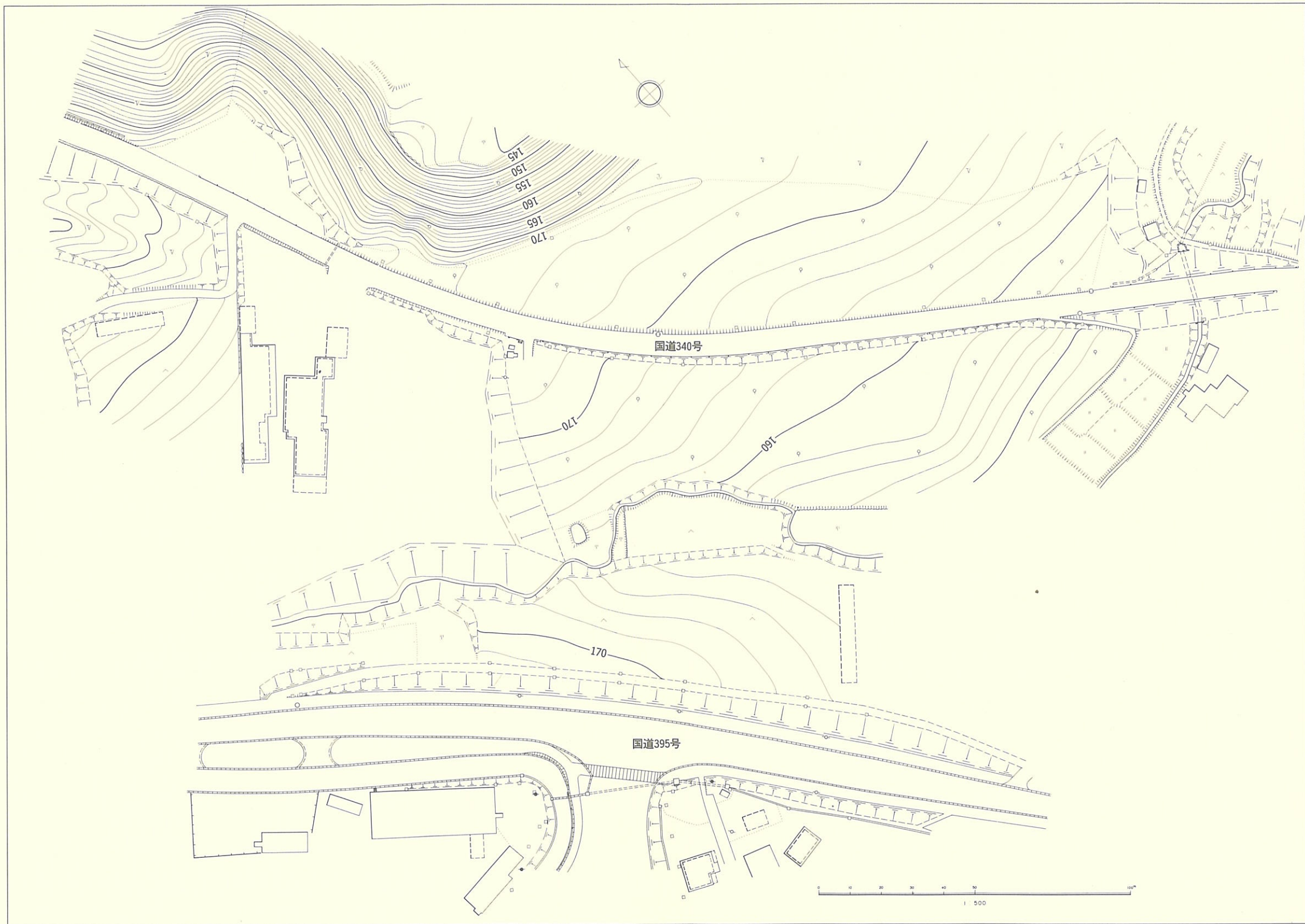
臨時職員：遺物実測・トレース・拓影・割付・写真撮影・作図・データー入力・収納等

(2) 凡例

- a. 本報告書は3分冊から構成され、分冊1には本文・遺構図版・まとめ・付偏が、分冊2には出土遺物、分冊3には遺構写真図版・遺物写真図版が収められている。
- b. 遺構の事実記載は各調査区毎、各種遺構毎に連番順に記載することを基本としているが、一部順番の入れ違いもある。
- c. 掲載遺物は、遺構内外や種類に関係なく掲載順に1からの連番を付しており、この番号は遺物図版・遺物写真図版とも同一の番号である。一部、焼成粘土等は実測図版中に写真の掲載に止めている遺物もある。
- d. 遺構図版は住居跡 1/50 or 1/60・炉断面 1/40・土坑類 1/40・土器埋設遺構 1/20・焼土遺構 1/20を基本としており、挿図の右下に縮尺率あるいはスケールを付した。また、遺構写真図版についてはすべて任意縮尺である。
- e. 遺物図版は、土器類 1/3 or 1/4・土製品類 1/2・剥片石器類 2/3 or 1/2・礫石器類 1/3 or 1/4・自然遺物 1/3 or 1/2を原則としており、挿図の右下に縮尺率あるいはスケールを付した。遺物写真図版は遺物図版に概ね準拠しているが、一部任意縮尺のものもある。
- f. 遺物の凡例については分冊2の最初に掲げた。また、特殊なものについては各図版中に凡例を示した。
- g. 分冊2の石器類の観察表中の計測値のなかで、数値の前に*印が付されたものは現存値を示している。遺物実測図版の下に掲載した表中の計測値はすべて現存値であり、長さの単位はcm・重量はg単位となっている。土製円盤の計測値は長径・短径・厚さ・重量の順となっている。



第6-1図 グリッド配置図



第6-2図 地形図

IV 検出された遺構と遺物

昭和63年度から平成3年度までの4カ年の調査で、縄文時代の住居跡64棟・住居跡状遺構10棟・掘立柱建物跡22棟・土壇墓を含む土坑類164基・土器埋設遺構19基・炉焼土遺構24基・集配石遺構4基・旧河道1条、弥生時代の住居跡8棟・焼土遺構11基・集配石遺構2基、奈良時代の住居跡1棟、近世以降の用水路跡1条を検出した。

1. 住居跡・住居跡状遺構

SA01住居跡

遺構（第7図、写真図版4）

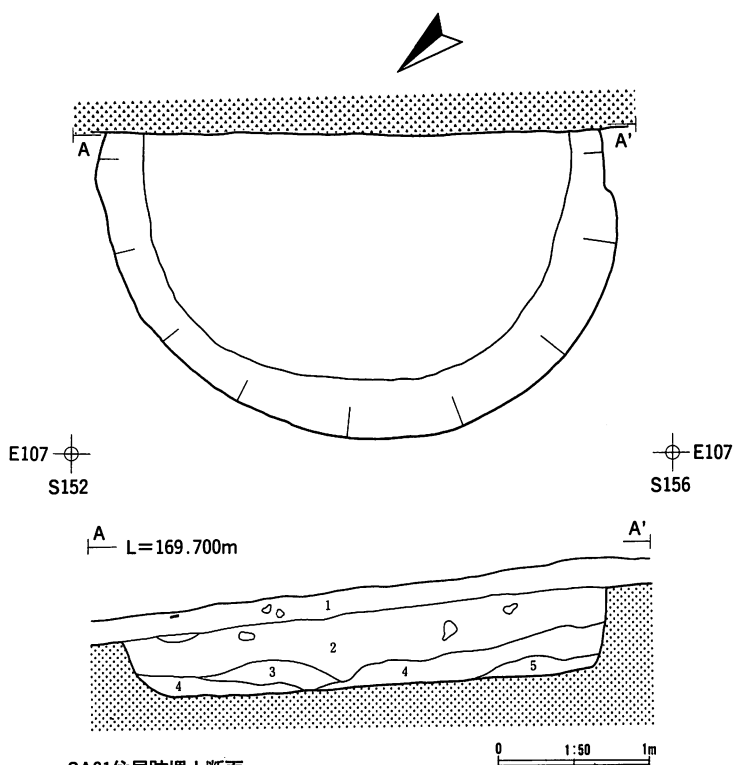
〈位置〉 A調査区、K XVIグリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 遺構のほぼ半分は調査区外にのびている。SA02住居跡と重複関係にあり、SA02住居跡よりも古く位置づけられる。耕作土除去後に検出された。

〈平面形・規模〉 平面形は円形で、直径で約3.5mの規模である。推定床面積は5.7m²である。調査区内の精査では、この遺構に伴う柱穴・炉など附属施設は検出されなかったが、規模・形状から住居跡状遺構として取り扱った。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色～褐色のシルト質土が主体を占めており、自然堆積相を示している。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味に立ち上がっており、床面からの壁の高さは、北壁で34cm・西壁で47cm・南東壁で53cm、現地形面（第I層、耕作土面）からは67cmを測る。床面はほぼ水平である。



SA01住居跡埋土断面

F区 (旧)基本土層

I層	7.5YR2/1	黒色	シルト	耕作土
II層	7.5YR1.7/1	黒色	シルト	
III層	7.5YR2/3	黒褐色	シルト	中礫浮石を部分的に含む
IV層	7.5YR3/4	暗褐色	シルト	黄褐色浮石細粒を多量含む
V層	7.5YR5/6	明褐色	粘土	八戸火山灰相当
VI層	7.5YR7/4	にぶい橙色	粘土	水分の多い粘質土

第7図 SA01住居跡

〈柱穴〉 検出されていない。

〈炉〉 検出されていない。

遺物 (第 171 図、写真図版 175)

〈土器・土製品〉 埋土中より出土している。1～3 は縄文後期前葉の土器である。1・3 は折り返し状の口縁部で、1 には網目状撚糸文・3 には斜行縄文が胴部全体に施文されている。2 は緩やかな波状口縁の深鉢である。曲線状の文様の内部には縄文が充填されている。4 は焼成粘土である。

〈石製品〉 5 は石棒の破損品で整形時の敲打痕が認められる。

〈時期〉 埋土中・上部縄文時代後期前葉の遺物が出土しているが、検出面や埋土の状況が縄文時代晩期前葉の土坑群に類似していることからこれらの時期に近いと考えられる。

SA02 住居跡

遺構 (第 8 図、写真図版 5)

〈位置〉 A 調査区、K XVI グリッドの南側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 遺構のほぼ半分は調査区外にのびており、さらに南側の壁及び床面部分は重機等による攪乱を受けている。SA01 住居跡・SD001 土坑・SD004 土坑と重複関係にあり、いずれの遺構よりも新しく位置づけられる。耕作土である第 I 層除去後に検出された。

〈平面形・規模〉 平面形は隅丸正方形、推定で一辺約 4.0 m の規模である。推定床面積は 10.0 m² である。

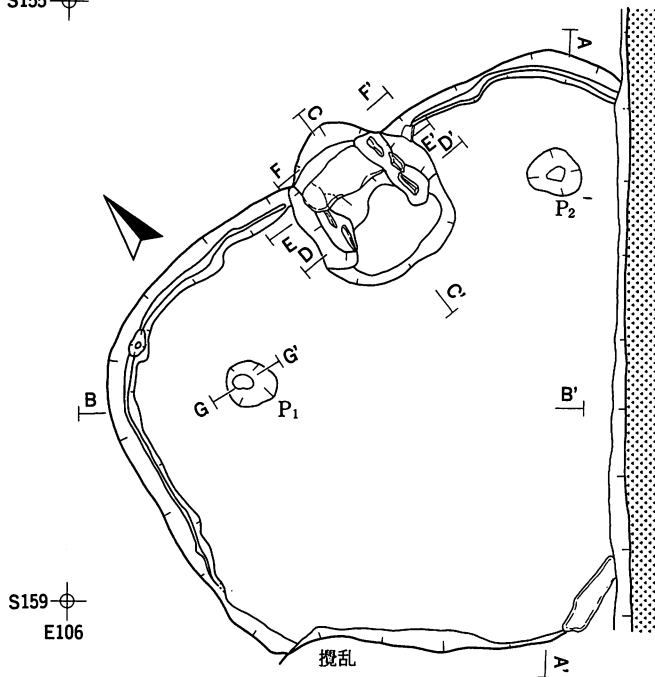
〈埋土〉 埋土上部には層厚 10 cm の灰白色火山灰がほぼ水平に、その下位には炭化物・焼土を含んだ黒色～黒褐色のシルト質土が堆積している。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味に立ち上がり、調査された部分での壁高は北側で 27 cm、西側で 32 cm を測る。黒色土を床面としており、貼床が施され平坦で堅く踏みしめられている。

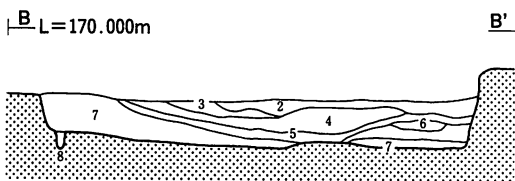
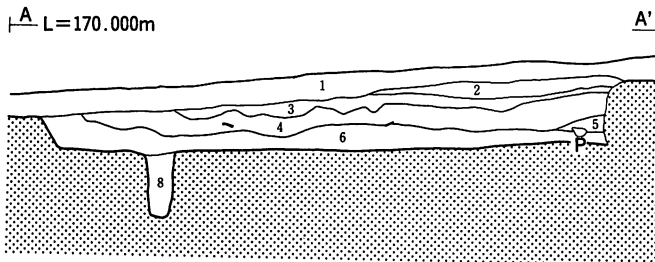
〈柱穴・壁溝〉 柱穴は本来は 4 本構成と思われ、カマドの両脇付近に径 35 cm 土、深さ 40 cm 程度の柱穴が 2 本検出されている。検出された床面の壁際には、幅 5～10 cm・深さ 10 cm の壁溝が全周している。

〈カマド〉 カマドは北壁の中央部に設けられており、粘板岩質の偏平な礫を使用して燃焼部分の両側壁及び天井部を構築している。両袖部分は偏平な礫を左右に各 3 個ずつ垂直に床面に埋置し、周囲をシルト質土混じりの灰白色粘土で被覆している。天井部には同様の偏平な礫が使用されており、ここに使用されたと考えられる礫がカマドから約 3 m 南側の埋土中から出土している。煙道はカマドが構築された北壁部分から約 20° の傾斜で立ち上がり約 20 cm ほどの長さである。

E106
S155



S159
E106



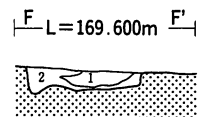
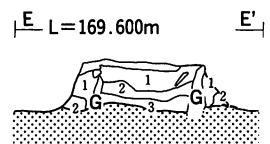
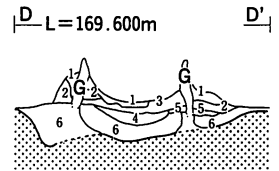
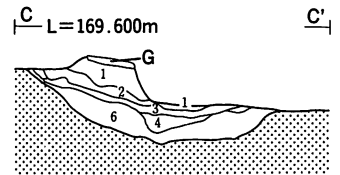
SA02住居跡埋土断面

- | | | |
|---------------|--------|----------------------|
| 1. 7.5YR1.7/1 | 黒色シルト | 表土(耕作土) 黄褐色浮石細粒少量含む。 |
| 2. 10YR1.7/1 | 黒色シルト | 灰白色火山灰多量に含む。 |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | |
| 4. 10YR1.7/1 | 黒色シルト | スコリア多量に含む。 |
| 5. 10YR1.7/1 | 黒色シルト | 炭化物含む。 |
| 6. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 灰白色火山灰少量含む。 |
| 7. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 炭化物少量含む。 |
| 8. 10YR1.7/1 | 黒色シルト | 壁溝・柱穴の埋土。 |

SA02住居跡P₁

- | | | |
|--------------|-------|----------------------|
| 1. 10YR1.7/1 | 黒色シルト | 粘性しまりともなし。 |
| 2. 10YR1.7/1 | 黒色シルト | φ5~10mmの黄褐色浮石細粒少量含む。 |

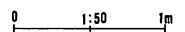
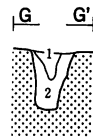
No.	P ₁	P ₂
径 cm	34×32	36×32
深さ cm	41	42



SA02住居跡カマド

- | | | |
|--------------|--------|----------------|
| 1. 10YR1.7/1 | 黒色シルト | 灰白色粘土少量含む。 |
| 2. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 礫を巻く灰白色粘土。 |
| 3. 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 2層に類似、天井部の崩落土。 |
| 4. 5YR4/6 | 赤褐色シルト | 焼土層。 |
| 5. 10YR2/1 | 黒色シルト | |
| 6. 10YR2/1 | 黒色シルト | |

L=169.400m



第8図 SA02住居跡

〈その他〉特に、床面付近とその直上の層から比較的多量の炭化物・焼土が認められることからこの住居跡は焼失を受けたと考えられる。

遺物（第 171 図、写真図版 175）

〈出土状況〉遺物の多くは、カマド周辺から出土している。

〈土器〉6～10 は小型の鉢形土器、11 は壺形土器である。すべてロクロ未使用の土師器である。小型の鉢形土器は、すべて口縁部が外反しており頸の部分に軽い段が認められる。内外面とも刷毛目調整の後にミガキ調整がなされており、特に外面のミガキ調整は丁寧である。底部の形状が明かな 6・9・13 は、底部外端が外側に突き出し内面は球面状である。6～9 の口唇部は丸みを帯びているが、10 の口唇部は凹線状となっている。11 は壺形土器の胴部状半である、内外面とも光沢を帯びるほど入念なミガキ調整が施されている。頸部には特に段はみとめられず、直線的に外反している。

〈時期〉奈良時代前半頃の時期と考えられる。

SA03 住居跡

遺構（第 9 図、写真図版 6）

〈位置〉A 調査区、J XV グリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SD015 土坑・SD014 土坑・SA08 住居跡と重複関係にあり、SA08 住居跡・SD015 土坑より新しく、SD014 はこの住居跡に伴う土坑と考えられる。

〈平面形・規模〉平面形は不整形円で、長径約 4.4 m、短径 3.7 m の規模である。推定床面積は 10.8 m²である。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒・炭化物を含む黒色～褐色のシルト質土が主体を占めており、自然堆積様を示す。

〈壁・床面〉残存部分の壁は外傾気味に立ち上がっており、斜面下方の北東側の壁は既に失われていた。床面からの壁の高さは、西壁で 27 cm・南壁で 26 cm・東壁で 13 cm を測る。床面はほぼ水平であり、特に斜面下方の北壁付近は炉の付近にかけて非常に堅く踏みしめられていた。

〈柱穴〉住居跡に伴うと考えられる柱穴は全部で 28 個検出されており、この中で P1～P3 は主柱穴を構成すると考えられる。壁際を巡る P5～P28 の小柱穴はすべて内傾しており、壁柱穴に相当するものである。

〈炉〉炉は中央部からやや東側に片寄った所にあり、八戸ロームを掘りくぼめた地床炉である。平面形は円形で、60 cm×70 cm の規模で焼土の厚さは 5 cm 程度である。

遺物（第 172・173 図、写真図版 175・176）

〈出土状況〉土器では 12・13・14・15・21・22 が床面から、16・17・18・19・20・23・24・25

は埋土から出土している。石器は3点とも埋土からの出土である。

〈土器〉12は非常に薄手の鉢形土器である。無文帯と縄文帯が平行に交互に配されている。口唇部には叉状の低い突起が9個、その下には4ヶ所に、刻みの施された低く丸い瘤が貼付されている。同様の貼瘤は3段目の縄文帯のなかに沈線と連結するように4個貼付されている。底部はやや上底気味である。13は頸部が緩やかに内傾する薄手の壺形土器である。口唇部は内ぞりで平坦気味に整形されている。14は粗製の深鉢である。口縁部は若干丸みをもち内湾している。外面には異種原体による非結束羽状縄文が施文されている。15は深鉢の底部付近である。底部外端は丸みを持ち底部よりやや上半に1条の沈線が巡っている。胎土には赤色の粒子が含まれている。16は台部が欠損した香炉形の土器である。重層する弧状沈線により文様が描かれ、結節部には丸い瘤が貼付されている。17は注口土器の頸部付近である。横方向に鋭く尖る貼瘤が9個付されておりこれらは隆帯状の連結沈線により結ばれている。18は脚部の欠損した台付の鉢形土器である。口唇部は2個1単位の低い装飾状の突起が巡り、その間には刻目が施されている。胴部中央に3本の平行沈線がめぐり胴部上半と下半が区画されている。胴部上半にはレリーフ状の雲形文が施文されている。口縁部内面には1条の沈線が巡る。19は胴部全面に斜行縄文が施文された鉢形土器である。口縁部には浅い沈線が1条巡り、口唇部には連続した円形の刺突文が施文される。21～25は深鉢及び壺形土器の破片である。幅の狭い入り組み状の曲線文様が施文され、内部は異種原体により羽状縄文が充填されている。

〈石器〉埋土から有茎の石鏃2点と身部の太い石錐が1点出土している。

〈時期〉埋土から18・19のような縄文晩期中葉前半頃の土器も出土しているが、床面等の土器などから縄文後期後葉田柄貝塚第V群に相当する時期と考えられる。

SA04 住居跡

遺構（第10図、写真図版7・8）

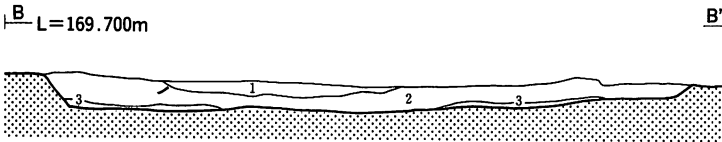
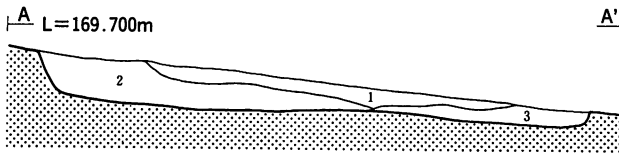
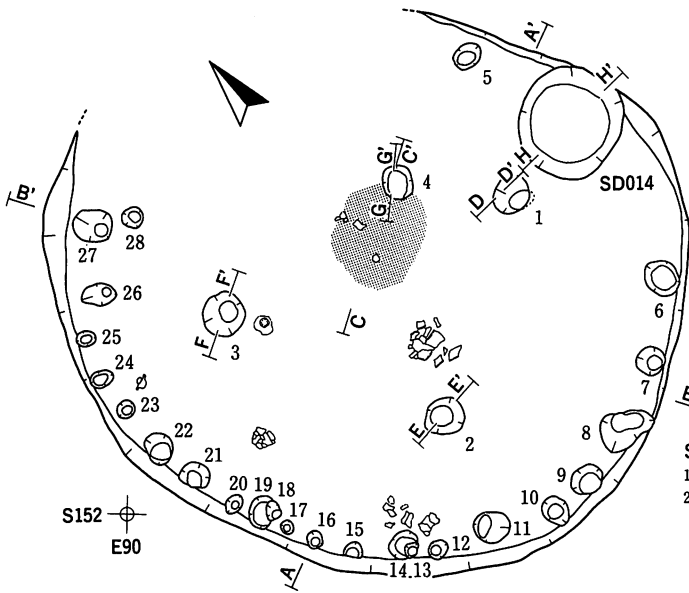
〈位置〉A調査区、J XVグリッドの北西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SD009土坑・SD019土坑と重複関係にあり、いずれの土坑よりも古く位置づけられる。

〈平面形・規模〉推定で規模が約3.8mの円形を呈する住居跡である。推定床面積は9.4m²である。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒・炭化物を含む黒色～褐色のシルト質土が主体を占めている。特に、埋土下部に相当する層には多量の炭化物が広範囲に認められることから焼失を受けた住居跡と思われる。

〈壁・床面〉土層の識別が困難で平面形の確認が遅れたため、現存値で床面からの壁の高さは、



SA03住居跡埋土断面

1. 10YR1.7/1 黒色シルト φ5~10mmの黄褐色浮石細粒多量、炭化物少量含む。
2. 10YR1.7/1 黒色シルト φ5mmの黄褐色浮石細粒、炭化物少量含む。
3. 10YR2/1 黒色シルト φ5~20mmの黄褐色浮石細粒多量、炭化物少量含む。

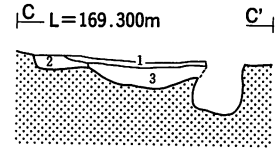
No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	25×24	25×25	29×29	22×20	17×17	23×23	18×18	37×26
深さcm	43	53	56	27	15	27	21	33

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	23×19	20×16	24×21	13×13	10×10	(20×18)	12×10	12×10
深さcm	21	17	26	21	12	12	10	15

No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径 cm	9×8	14×10	(21×17)	14×11	20×17	18×17	13×12	14×11
深さcm	5	30	20	13	28	26	7	23

No.	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	SP104
径 cm	13×11	23×15	26×22	14×13	74×68
深さcm	2	10	22	9	23

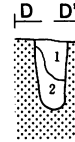
E94
⊙ S149



SA03住居跡炉

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 灰含む。
2. 10YR1.7/2 黒色シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
3. 10YR5/6 明褐色シルト 焼土。

L=169.200m



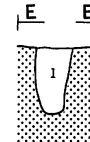
SA03住居跡P₁

1. 10YR1.7/1 黒色シルト
2. 10YR2/3 黒褐色シルト 汚れた黄褐色浮石細粒多量含む。

⊙ S152

E94

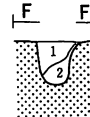
L=168.300m



A' **SA03住居跡P₂**

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒多量、炭化物少量含む。

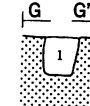
L=168.300m



SA03住居跡P₃

1. 10YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色シルト 汚れた黄褐色浮石細粒多量含む。

L=169.200m



SA03住居跡P₄

1. 10YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。

L=169.300m



SD014土坑

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 汚れた黄褐色浮石細粒多量含む。

0 1:50 1m

第9図 SA03住居跡

北東壁で14 cm・北西壁で3 cm 南壁で5 cm を測る。床面はほぼ水平である。

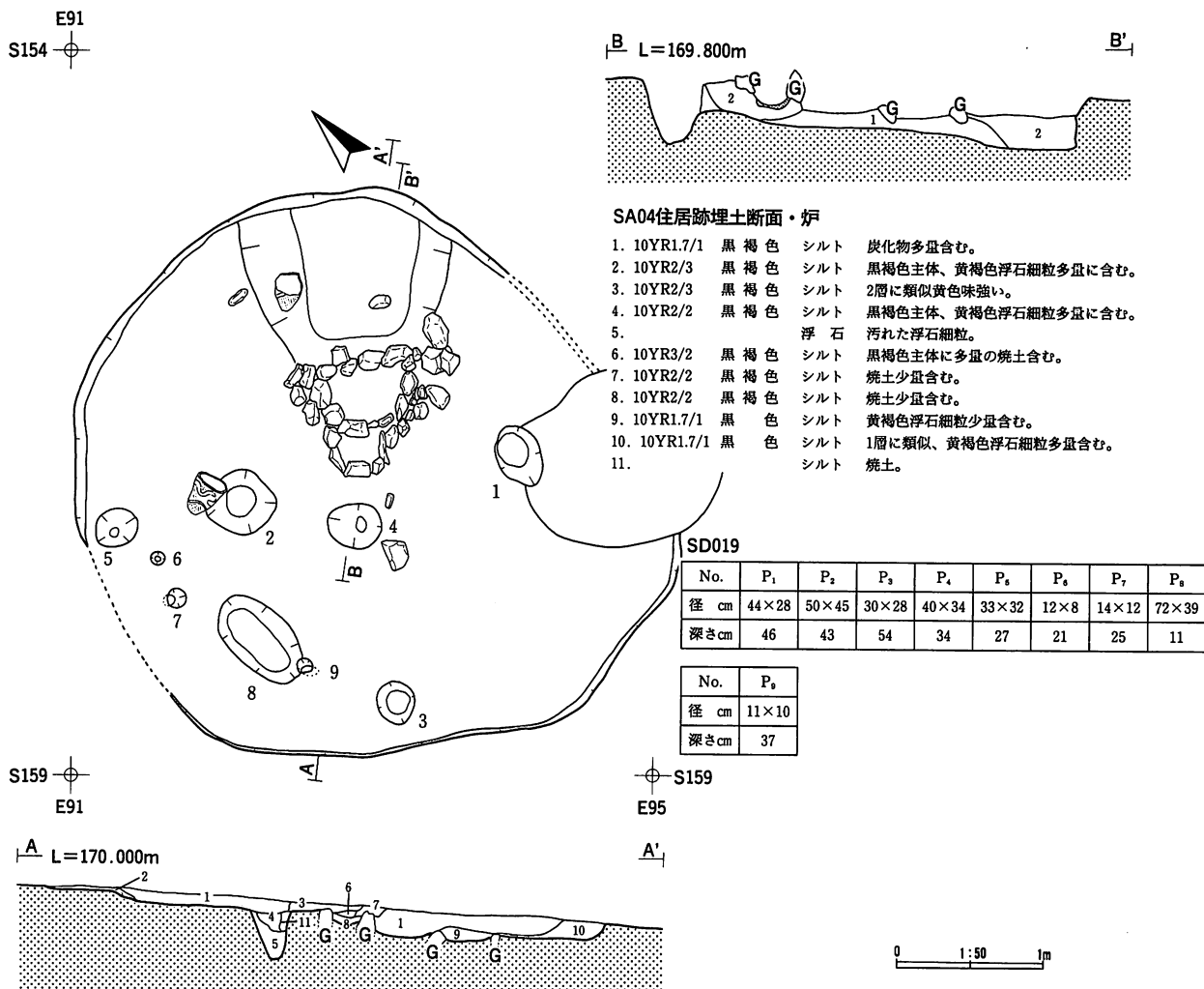
〈柱穴〉住居跡からは柱穴が全部で9個検出されており、この中でP1~P3は主柱穴を構成するものと考えられる。またP4は炉に付随したピットと思われる。

〈炉〉炉は、前庭部と石組部からなる複式炉の形態のものである。前庭部は北東壁に接して構築され、南西方向に向かって大小2組の石組部が設けられている。先端の石組部にある小ピットはこの炉に伴うもので、埋設土器の抜き取り穴と考えられる。

遺物（第173・174図、写真図版176・177）

〈出土状況〉床面から29・30の土器と34・35の石器が出土している。

〈土器〉29は大振りの四波状の深鉢である。胴部の中央の最大径付近に波状の沈線が巡っている。上半部には4単位の波頭文が施文されている。30は低い四波状の深鉢である。胴中央部よ



第10図 SA04住居跡

りやや下に緩やかな沈線文が巡り区画されている。胴部上半には横S字文、口縁部付近には1条の刺突文が見られる。正面と思われる部分にのみ曲線文のなかに方形状の刺突文がみられる。

31～33は縄文後期前葉の土器である。

〈石器〉34は楕円形の磨石、35は破損品であるが石皿と思われる。

〈時期〉縄文時代中期末葉大木10式の時期と考えられる。

SA05 住居跡

遺構（第11図、写真図版8・9）

〈位置〉A調査区、J XVIグリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉炉は検出されなかったが、一部明瞭な壁と柱穴が確認されたため住居跡と認定した。SA03住居跡・SD018・SD021・SD022土坑より古く、SB01掘立柱建物跡より新しく、SA17・SA18住居跡との関係については不明である。

〈平面形・規模〉推定で、6.0m×4.5mの規模で平面形は不整形円形と思われる。推定床面積は13.5m²である。

〈埋土〉黄褐色浮石細粒が混入した黒褐色のシルト質土と南部浮石の再堆積層で構成されている。

〈壁・床面〉北壁で4cm、西壁で15cm、南壁で5cm検出された。南部浮石層を床面としており、凹凸があり、それほど堅い面は認められなかった。

〈柱穴〉明確な柱穴は不明であるが、P26～P48がこの住居跡に伴うと思われる。

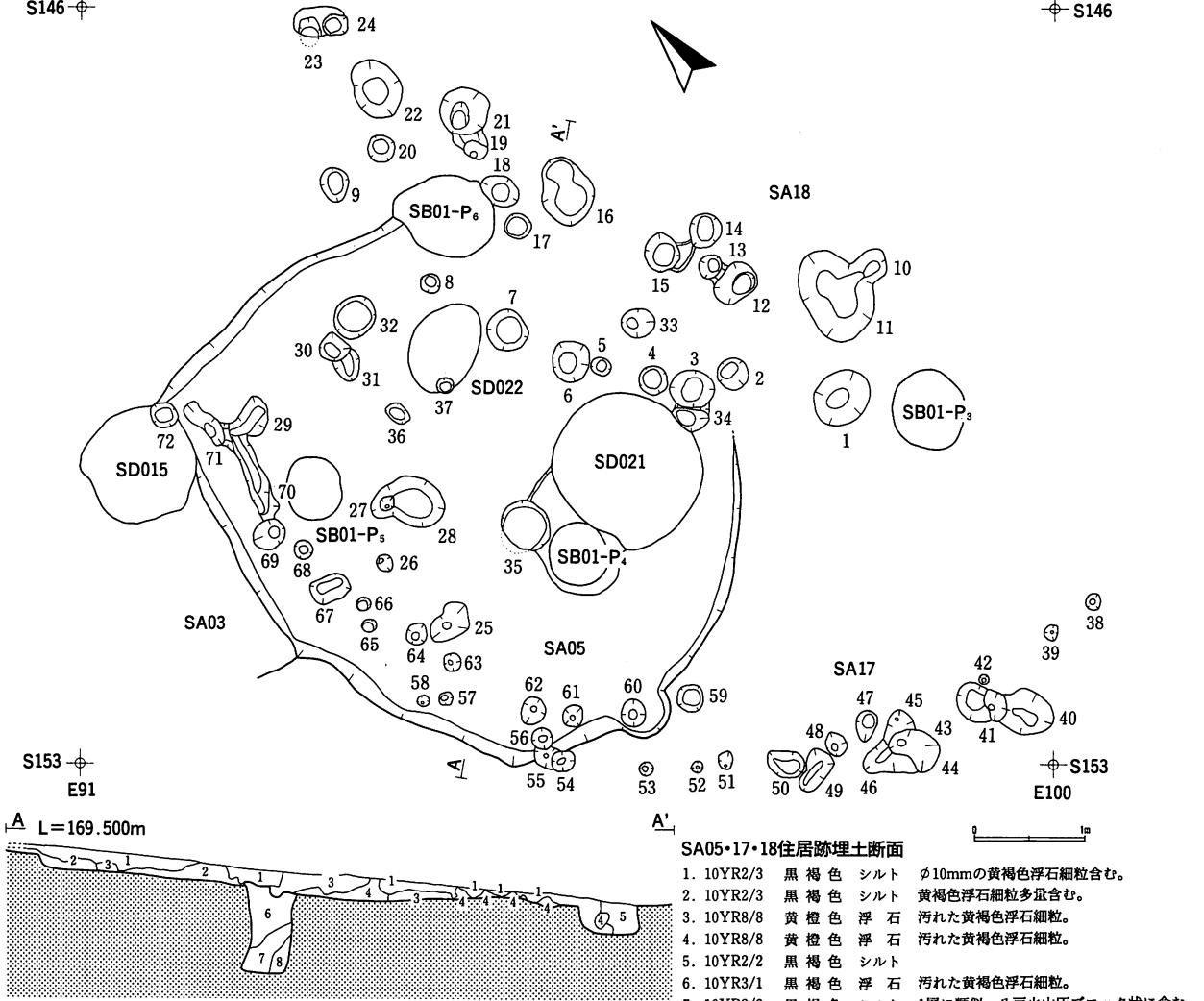
〈炉〉検出されなかった。

遺物（第174・175図、写真図版177）

〈土器〉36・37は床面相当部分から出土している。36は緩やかな四波状の口縁で、波頂部には浅い刻みが認められる。胴部には無節縄文が施文され底部付近では磨り消されている。37は注口部分が欠損した注口土器である。口唇部には叉状の突起が7個付され、外端部分には縄文が施文される。頸部には小粒の瘤が4個貼付され、それらは平行沈線により連結されている。底部付近に若干の無文部分を残し、胴部には連弧状の沈線により4単位の曲線縄文が描かれている。上半部の曲線文の結節部には中央に刻みを持つ大粒の瘤が貼付されている。注口部と反対側の肩部付近に懸垂孔が認められる。38・39は縄文後期前葉の土器である。

〈石器〉有茎凸基の石鏃1点、不定形石器1点、刃部に粗い敲打痕の認められる石斧が1点出土している。

〈時期〉床面から縄文時代後期後半田柄貝塚第IV群に相当する完形の注口土器が出土しておりほぼこの時期に相当すると思われる。



No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	52×51	29×29	45×41	26×26	17×9	38×35	38×37	18×18
深さcm	42	30	25	26	12	41	34	16

No.	P ₃₄	P ₃₅	P ₃₆	P ₃₇	P ₃₈	P ₃₉	P ₄₀	P ₄₁
径 cm	34×25	45×43	25×16	16×13	15×13	14×13	55×42	27×22
深さcm	24	85	11	20	17	7	18	33

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	32×26	30×27	86×60	42×30	23×20	33×30	36×33	65×45
深さcm	17	32	42	15	17	32	32	33

No.	P ₄₂	P ₄₃	P ₄₄	P ₄₅	P ₄₆	P ₄₇	P ₄₈
径 cm	10×9	35×35	30×20	23×21	33×23	27×19	22×19
深さcm	9	17	20	15	15	13	18

No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径 cm	24×24	34×28	37×29	26×24	45×42	55×44	20×19	25×19
深さcm	32	28	23	31	37	30	44	30

No.	P ₄₉	P ₅₀	P ₅₁	P ₅₂	P ₅₃	P ₅₄	P ₅₅	P ₅₆
径 cm	41×23	36×24	16×13	11×11	13×12	22×19	25×21	20×18
深さcm	22	19	8	3	13	9	8	13

No.	P ₂₅
径 cm	44×41
深さcm	23

No.	P ₅₇	P ₅₈	P ₅₉	P ₆₀	P ₆₁	P ₆₂	P ₆₃	P ₆₄
径 cm	13×13	11×11	25×25	26×23	20×18	25×23	17×16	20×19
深さcm	11	8	6	13	12	33	7	16

No.	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂	P ₃₃
径 cm	16×15	27×25	49×46	43×36	31×26	25×29	39×37	31×27
深さcm	11	21	14	28	26	17	25	25

No.	P ₆₅	P ₆₆	P ₆₇	P ₆₈	P ₆₉	P ₇₀	P ₇₁	P ₇₂
径 cm	14×12	12×12	37×23	17×17	30×27	90×16	51×16	25×24
深さcm	22	9	21	11	18	15	39	4

第11図 SA05・17・18住居跡

SA06 住居跡

遺構（第 12 図、写真図版 10～12）

〈位置〉 A 調査区、J XV グリッドの南東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SD025 土坑・SB01 掘立柱建物跡の P1 柱穴と重複関係にあり、いずれの遺構よりも古く位置づけられる。

〈平面形・規模〉 平面形は不整形で、長径で約 4.0 m、短径 3.4 m の規模である。推定床面積は 12.3 m²である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色～褐色のシルト質土が主体を占めており、埋土の中位には厚さ 30 cm ほどの他の遺構を構築した際の排土と考えられる南部浮石の再堆積層が広く分布している。

〈壁・床面〉 残存部分の壁は外傾気味に立ち上がっており、斜面下方の東側の壁は既に失われている。床面からの壁の高さは、北壁で 40 cm・南壁で 30 cm 西壁で 48 cm を測る。床面はほぼ水平であり、特に斜面下方の東壁付近から炉の付近にかけて非常に堅く踏みしめられている。

〈柱穴〉 住居跡に伴うと考えられる柱穴は全部で 27 個検出されており、この中で P1～P4 は主柱穴を構成し P5 は出入口状施設に関わる柱穴と考えられる。主柱穴のなかの P2 の断面観察で径 18 cm 程度の柱痕跡が明瞭に認められた。壁際を巡る P6～P28 の小柱穴はすべて内傾しており、壁柱穴に相当するものである。

〈炉〉 炉は中央部からやや東側に片寄った所にあり、八戸ロームを掘りくぼめた地床炉である。平面形は不整形で、50 cm×45 cm の規模で焼土の厚さは厚さ 10 cm 程度である。

〈その他〉 この住居跡に伴う施設として炉の東側、東壁に接してある SD014 土坑があげられる。平面形は円形で径 70 cm×68 cm、深さ 20 cm の規模を持ち、埋土は黄褐色浮石細粒の黒褐色のシルト質土である。床面からは土器とともに炭化した堅果類が出土している。

遺物（第 175・176 図、写真図版 177・178）

〈土器・土製品〉 床面から出土している 46 の深鉢形土器は、口縁部が四波状を呈しその間に刻みの入った 2 個一対の山形の突起が付されている。波頂部の突起は頂部に刻みが入り、この周辺の内外面には円形の刺突文が見られる。波頂部およびその間に付される突起の下には刻みのある瘤が貼付されている。胴部下半については不明であるが、胴部に屈曲部をもち口縁部は直線的に外傾している。口縁部文様帯は波状の沈線で区画され、内部には縄文が施文されている。頸部文様帯には入組帯縄文状の 4 単位の文様が施文され内部は口縁部文様帯同様、異種原体による羽状縄文が施文されている。44 は無文の壺である。45 は LR 縄文が施文された深鉢の下半部である。47 は LR 縄文が施文された深鉢の下半部である。48 は LR 縄文が施文された壺である。49 は異種原体による非結束羽状縄文が施文されている。51・52 は口唇部に突起が付され曲

折状文が施文されている。54 は微隆線で入組状の曲線文が施文された浅鉢で、外面は赤色塗彩されている。土製品ではミニチュアの壺形土器 1 点 (59)、土玉 1 点 (60)、細い沈線間に刻みが施された鐸形土製品 1 点 (61) が出土している。

〈石器〉 横型の石匙 1 点 (62)、不定形石器 1 点 (63)、敲石 1 点 (64) が出土している。64 の敲石はアバタ状の細かい敲打痕が観察され主に円礫の側面部分で使用されている。

〈時期〉 床面出土の土器などから縄文後期後半田柄貝塚第IV群に相当する時期と思われる。

SA07 住居跡

遺構 (第 13-1・2 図、写真図版 12~14)

〈位置〉 A 調査区、K XV グリッドに位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA19 住居跡・SA20 住居跡・SA13 住居跡状遺構と重複しており、いずれの遺構よりも新しい。

〈平面形・規模〉 斜面下方の北側の壁は既に失われているが、推定で長軸方向 8.15 m×短軸方向 7.5 m の規模を持つ楕円形を呈する住居跡である。推定床面積は 43.7 m²である。

〈埋土〉 埋土は上部から下部まで、黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土で構成されており、レンズ状の堆積状況を示し自然堆積である。

〈壁・床面〉 床面の北側部分は耕作等により、溝状の攪乱を受けている。残存部分での壁はほぼ垂直に立ち上がっており、残存値は東壁で 23 cm・南壁で 54 cm である。このなかで住居跡の西側部分は SA19 住居跡の埋土を壁の一部としていたと考えられるが本来の壁を認めることはできなかった。床面は平坦であり、大部分が汚れた暗褐色の粘土質の土で貼床されている。

〈柱穴〉 柱穴は 87 個検出されており、このなかの P1~P13 が主柱穴・支柱穴を構成し、壁際に内傾した壁柱穴が全周している。

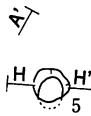
〈炉〉 炉は、中央部に 60 cm×55 cm・厚さ 10 cm の規模を持つ隅丸方形の地床炉が検出された。

〈その他〉 特に斜面下方の北側部分の壁際に非常に堅緻であり、この部分が出入口部分に相当すると考えられる。

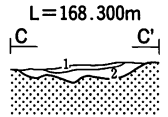
遺物 (第 176~185 図、写真図版 178~184)

〈土器・土製品〉 65 は異種原体による羽状縄文が施文された幅広の曲線縄文の壺形土器である。66 は異種原体による羽状縄文が施文された幅の狭い入組状の曲線縄文が 4 単位施文された注口土器である。口唇部には 4 個の低い突起が付され、口縁部には帯状の縄文帯が巡っている。注口部以外の肩の部分には刻みのある瘤が 3 個貼付されている。67 は広口の壺形土器である。口縁部は内傾し、口唇部は肥厚している。口縁部には 4 条、頸部には 3 条の刻目帯が巡っている。

E95
S143

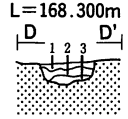


E100
S143



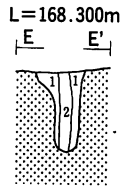
SA06住居跡炉

- 7.5YR3/4 暗褐色 シルト ϕ 5mm±の黄褐色浮石細粒含む。
- 10YR3/4 暗褐色 シルト 炭化物・焼土微量含む(貼床に相当)。



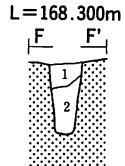
SA06住居跡P₁

- 10YR3/2 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
- 10YR3/3 暗褐色 シルト 1層より黄褐色浮石細粒多く含む。
- 10YR3/4 暗褐色 シルト 褐色土の混じった黄褐色浮石細粒。



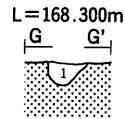
SA06住居跡P₂

- 10YR3/3 暗褐色 シルト 黄褐色浮石細粒多量含む。
- 10YR2/2 暗褐色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。



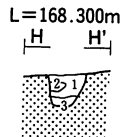
SA06住居跡P₃

- 10YR4/4 褐色 シルト 粘性強い。
- 10YR4/3 泥い黄色 シルト 粘性強い。



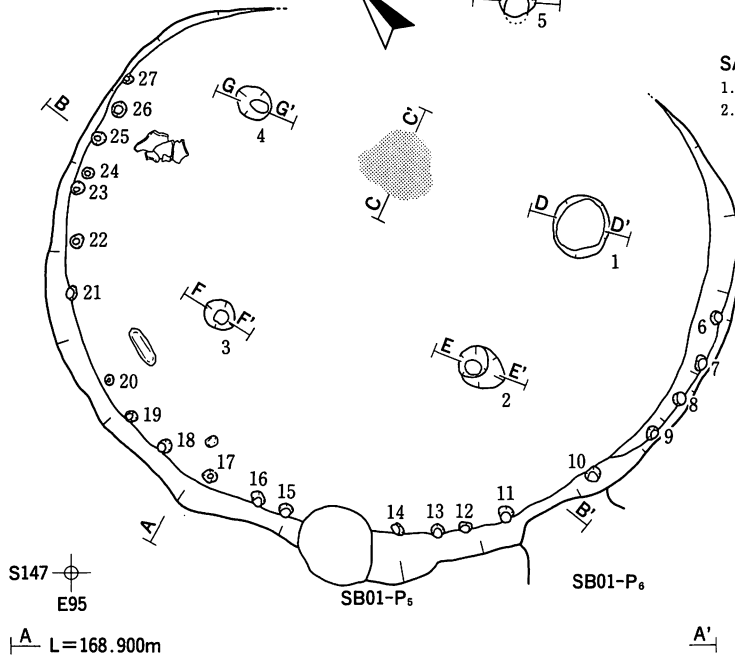
SA06住居跡P₄

- 10YR3/4 暗褐色 シルト やや粘性あり。

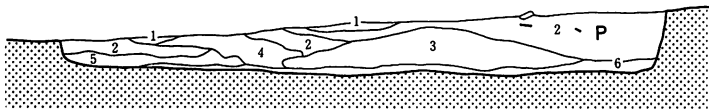


SA06住居跡P₅

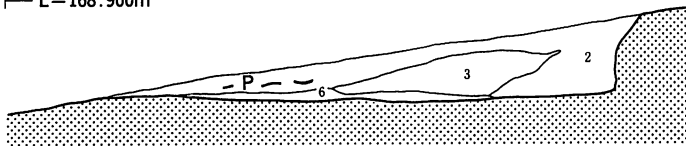
- 10YR2/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒含む。
- 10YR3/2 暗褐色 シルト 黄褐色浮石細粒微量含む。
- 10YR3/3 暗褐色 シルト 黄褐色浮石細粒微量含む。



A L=168.900m



B L=168.900m



SA06住居跡埋土断面

- 10YR2/1 黒色 シルト ϕ 5mmの黄褐色浮石細粒少量含む。
- 10YR2/2 黒褐色 シルト 1層より黄褐色浮石細粒少ない。
- 10YR4/4 褐色 粘土 八戸火山灰の再堆積。
- 10YR4/6 褐色 浮石 汚れた黄褐色浮石細粒。
- 10YR1.7/1 黒色 シルト 炭化物、黄褐色浮石細粒含む。
- 10YR2/3 黒褐色 粘土 炭化物含む、貼床に相当。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	41×38	32×26	22×19	23×21	23×21	9×7	11×8	9×9
深さ cm	11	51	62	14	21	5	3	2

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	8×9	10×9	11×9	8×8	8×8	7×7	9×9	10×9
深さ cm	1	4	92	11	7	5	6	5

No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径 cm	10×9	10×9	8×7	6×6	9×6	9×8	9×8	7×7
深さ cm	6	5	4	3	2	5	3	5

No.	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇
径 cm	10×9	11×10	7×5
深さ cm	5	6	2

第12図 SA06住居跡

0 1:50 1m

胴部には4単位で幅広の鍵状の帯縄文が施文されている。底部付近は沈線で区画されている。施文されている縄文は異種原体による羽状縄文である。68は四波状の深鉢形土器である。波頂部分の口唇部は肥厚し、口唇部外端には1状の刻目帯が巡っている。胴部中央に刻目帯で区画された屈曲部をもち、それより上半には円文、下半には鍵状の帯縄文が施文され、各文様要素の内部に見られる縄文は異種原体による羽状縄文である。69は壺形の土器である。口唇部には低い8個の縦割れの丸い瘤が付されている。口縁部文様帯には異種原体による羽状縄文、頸部は無文帯、頸部と胴部の境には縄文帯が巡り丸い瘤が付されている。胴部下半は沈線で区画され上半部分には折り重なる曲線縄文が施文され、4カ所の結節部分には丸い瘤が貼付される。各文様要素の内部に見られる縄文は異種原体による羽状縄文である。70は鉢形土器である。口縁部は屈曲部から外傾しており、口唇部は肥厚している。頸部は無文帯、口縁部と胴部には異種原体による羽状縄文が施文されている。71は深鉢形土器である。口縁は緩やかな波状縁で5個の角状の突起が付いている。突起部分の基部の内外面には瘤が貼付されている。中央部に屈曲部を持ち、頸部にはタスキ掛け状入組文、口縁部には縄文帯が施文されている。屈曲部分は貼瘤を中心に連結沈線で結ばれており、それより下位にはタスキ掛け状入組文が施文されている。各文様要素の内部に見られる縄文は異種原体による羽状縄文である。72は注口土器である。口縁部には縄文帯、頸部は無文帯、胴部と頸部の境には4個の瘤を配した連結状の帯縄文で結ばれている。胴部上半および下半は入組状の曲線縄文で、内部には斜行縄文が施文されている。胴部の最大径部分には3この瘤が貼付されている。73・75は口唇部がやや肥厚している鉢形土器である。74はLR縄文が施文された浅鉢である。76はLR縄文が施文された深鉢の下半部である。77はLR縄文が施文された鉢である。78は異種原体による非結束羽状縄文が施文された台付鉢である。79は接合部に瘤が貼付された台付鉢である。80はLR縄文が施文された深鉢で口縁部は外反し口唇部は肥厚している。81はRL縄文が施文された深鉢で、口縁部は直立気味で口縁部はやや肥厚している。82は胴部下半が無文の深鉢である。83は異種原体による非結束羽状縄文が施文された深鉢で、口縁部は直立気味で口唇部は肥厚している。84は口唇部に刻みをもち、胴部に雲形文が施文された浅鉢である。85は頸部に瘤が貼付され、LR縄文が施文された浅鉢である。86は無文の鉢である。87は頸部に匹字状文、胴部にLR縄文が施文された台付鉢である。88は胴部に曲折状文が施文された壺の下半部である。89は多条沈線が施文された台付土器である。底部は切断状となっている。90は異種原体による非結束羽状縄文が施文された壺である。91は多条沈線で弧状文が施文され、頸部には刻みが施された壺である。92は同一原体の非結束羽状縄文が施文された鉢である。93は口唇部に部分的に刻みをもちLR縄文が施文された鉢である。94は口縁部が直立気味で口唇部が内反り肥厚のLR縄文が施文された深鉢である。95はRL縄文が施文された深鉢の底部付近である。96は口縁部が直立気味で口唇部が肥

厚し、異種原体による非結束羽状縄文が施文された深鉢である。97・99 は壺で、口縁部裝飾帯は縄文帯、頸部は無文帯となっている。98・100・101 は曲線状文が展開する深鉢である。102 は口縁部が内湾し口唇部が肥厚する異種原体による非結束羽状縄文が施文された深鉢である。土製品では、土偶 1 点 (103) ・土製円盤 2 点 (104・105) ・耳飾り 1 点 (106) ・鐸形土製品 1 点 (107) が出土している。床面から出土している 103 の土偶は胸部・腹部が残存している。表裏面には異種原体による羽状縄文が施文された鍵状の文様が描かれている。正中線は低く盛り上がりその上には浅く小さい刺突文がみられる。中実の土偶であるが、首の部分の観察からソケット式の接合方法で製作されている。

〈石器・石製品〉石鏃 14 点 (108～121)、横型石匙 2 点 (122・123)、縦型石匙 7 点 (124～130)、不定形石器 8 点 (131～138)、石斧 7 点 (139～145)、礫石錘 1 点 (146)、敲打磨石類 6 点 (147～151・153)、石皿類 2 点 (152・154)、石棒 1 点 (155) が出土している。151 の敲石は長軸方向の一端に敲打痕が認められる。153 の敲石は長軸方向の両端部が使用部分で、アバタ状の細かい敲打痕が認められる。

〈時期〉埋土上半部に縄文時代晩期中葉頃の土器 (84・85・87・93) が見られるが、床面 (65・66・67・71・73・75・82・81・80・86・103) および埋土下部 (68・69・72・70・81・83) の土器などから縄文時代後期後半田柄貝塚第IV群に相当する時期と考えられる。

SA08 住居跡

遺構 (第 14-1・2 図、写真図版 15～17)

〈位置〉A 調査区、I XVI グリッドに位置している。

〈検出状況・重複関係〉II 層上面を検出面としている。SD037 土坑・SD038 土坑・SD039 土坑・SD041 土坑より新しく、SD040 土坑・SA03 住居跡・SA10 住居跡より古く位置づけられる。同一地点で同心円状に拡張が 2 回行われ、最終的に 3 時期にわたる使用の痕跡が認められる。古いほうから a・b・c の順で記述を行う。

〈SA08a 住居跡〉

〈検出状況・重複関係〉床面と柱穴、出入口状施設を検出しただけである。

〈平面形・規模〉推定で、直径 5.2 m 程度の規模を持つ円形をもつ住居跡である。

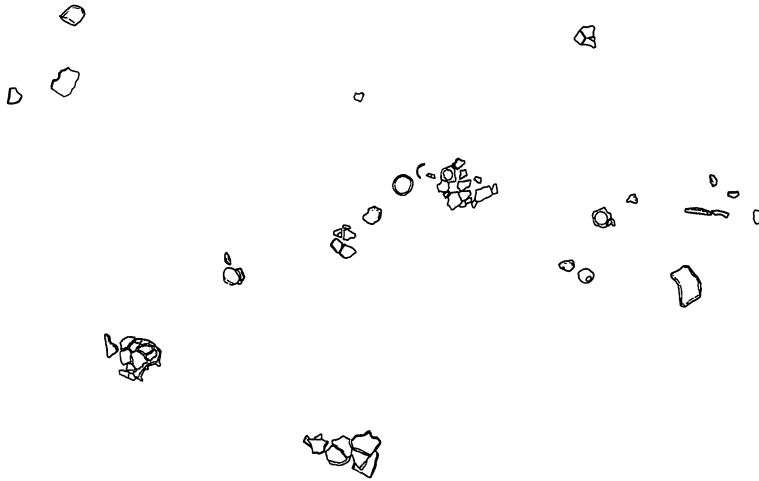
〈柱穴〉P1～4 が主柱穴、P5～25 が壁柱穴に相当すると思われる。

〈炉〉炉に相当するものは検出されなかった。

〈その他〉東側には出入口状施設に相当する、長さ 68 cm・幅 20 cm・深さ 33 cm、長さ 68 cm・幅 20 cm・深さ 29 cm の並行する 2 条の溝が約 75 cm の間隔をあけて検出された。

E102
S143

E110
S143



S149
E102

S149
E110

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	23×21	29×21	32×24	28×28	46×37	31×28	32×30	32×30
深さcm	44	38	55	49	67	48	54	39

No.	P ₄₉	P ₅₀	P ₅₁	P ₅₂	P ₅₃	P ₅₄	P ₅₅	P ₅₆
径 cm	11×10	16×13	11×8	8×8	8×7	12×9	15×11	10×10
深さcm	9	15	11	16	7	17	19	19

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	47×33	20×17	24×18	29×27	32×28	18×14	20×18	23×20
深さcm	19	29	61	7	15	8	10	7

No.	P ₅₇	P ₅₈	P ₅₉	P ₆₀	P ₆₁	P ₆₂	P ₆₃	P ₆₄
径 cm	12×12	16×15	16×15	14×11	16×13	11×10	12×11	18×14
深さcm	20	14	1	19	16	20	15	18

No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径 cm	18×19	25×18	16×16	17×16	17×15	21×19	17×16	18×16
深さcm	11	18	36	21	6	32	32	25

No.	P ₆₅	P ₆₆	P ₆₇	P ₆₈	P ₆₉	P ₇₀	P ₇₁	P ₇₂
径 cm	20×19	15×15	17×16	14×14	21×17	11×11	24×17	30×19
深さcm	24	14	16	11	14	17	22	9

No.	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂
径 cm	20×19	17×15	18×13	22×18	20×18	14×10	12×12	14×12
深さcm	26	34	27	18	15	15	29	25

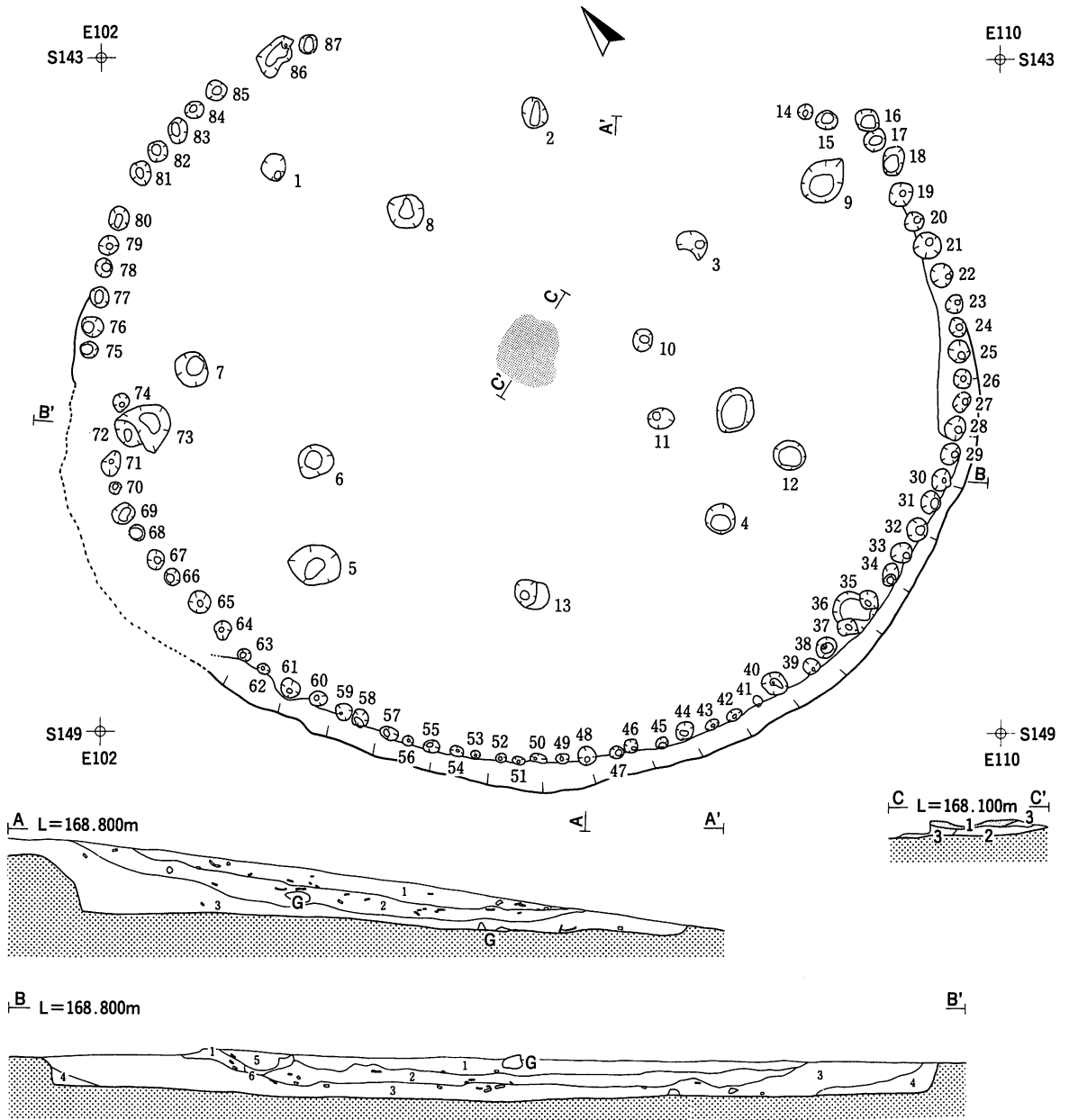
No.	P ₇₃	P ₇₄	P ₇₅	P ₇₆	P ₇₇	P ₇₈	P ₇₉	P ₈₀
径 cm	47×35	16×16	16×14	20×18	18×17	16×15	17×16	21×17
深さcm	11	21	20	16	17	15	20	14

No.	P ₃₃	P ₃₄	P ₃₅	P ₃₆	P ₃₇	P ₃₈	P ₃₉	P ₄₀
径 cm	19×11	11×10	13×13	17×13	18×16	14×13	14×14	14×14
深さcm	24	12	23	15	24	5	17	17

No.	P ₈₁	P ₈₂	P ₈₃	P ₈₄	P ₈₅	P ₈₆	P ₈₇
径 cm	19×21	17×17	22×17	17×15	19×19	38×22	17×16
深さcm	19	13	17	9	11	1	14

No.	P ₄₁	P ₄₂	P ₄₃	P ₄₄	P ₄₅	P ₄₆	P ₄₇	P ₄₈
径 cm	9×8	14×10	13×8	16×16	12×10	12×12	12×11	17×15
深さcm	14	20	12	22	14	19	11	22

第13-1図 SA07住居跡



SA07住居跡埋土断面

- | | | | |
|------------|-----|-----|--------------------|
| 1. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒少量含む。 |
| 2. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 炭化物微量、黄褐色浮石細粒少量含む。 |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 炭化物微量、黄褐色浮石細粒少量含む。 |
| 4. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒多量含む。 |
| 5. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 1層に類似、黄褐色浮石細粒少ない。 |
| 6. 10YR2/1 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色粘土ブロック状に含む。 |

SA07住居跡炉

- | | | | |
|------------|-----|-----|----------------------|
| 1. 5YR4/6 | 赤褐色 | シルト | 焼土層。 |
| 2. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 非常に堅い、貼床。 |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | φ5~10mmの黄褐色浮石細粒少量含む。 |

第13-2図 SA07住居跡

〈SA08b 住居跡〉

遺構（第 14-1・2 図、写真図版 15～17）

〈検出状況・重複関係〉床面と柱穴、出入口状施設を検出しただけである。

〈平面形・規模〉推定で、長軸方向 6.5 m・短軸方向 6.3 m 程度の規模を持つ円形をもつ住居跡である。

〈柱穴〉P26～30 が支柱穴、P31～61 が壁柱穴に相当すると思われる。

〈炉〉炉に相当するものは検出されなかった。

〈その他〉東側には出入口状施設に相当する、長さ 110 cm・幅 35 cm・深さ 38 cm、長さ 110 cm・幅 28 cm・深さ 31 cm の 2 条の溝状のピットが約 55 cm の間隔をあけて検出された。

〈SA08c 住居跡〉

遺構（第 14-1・2 図、写真図版 15～17）

〈重複関係〉東側と北側は SA03 住居跡・SA10 住居跡により切られている。

〈平面形・規模〉推定で、8.3 m×7.5 m の規模を持つ略円形の住居跡である。推定床面積は 49.7 m²である。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒混じりの黒色～黒褐色のシルト質土で構成されている。

〈壁・床面〉壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存値は西壁 37 cm・南壁 32 cm・南東壁 24 cm である。

〈柱穴〉P62～67 が支柱穴・支柱穴、P68～101 が壁柱穴に相当すると思われる。

〈炉〉炉は住居跡のほぼ中央部、SD041 土坑の上部にあり 95 cm×65 cm・厚さ 21 cm の規模をもつ地床炉である。この炉の東側の貼床下部から 75 cm×60 cm の規模の現地性の焼土が検出されており、位置関係からこれに先行する住居跡より古い炉の痕跡と考えられる。また、北側にも 32 cm×37 cm・厚さ 10 cm の現地性焼土が認められ、この住居跡に伴うものであるがその性格については不明である。

遺物（第 185～191 図、写真図版 185～188）

〈土器・土製品〉156 は底部が欠損した深鉢である。平行縄文帯と無文帯が交互に展開している。口縁部には刻みのある山形突起が付され、外端には刻みのある瘤が貼付されている。157 は頸部に屈曲を持つ深鉢である。口縁部装飾帯には縄文帯、頸部は無文帯、屈曲部より下の胴部全面には斜行縄文が施文されている。158 は無文の浅鉢である。159 は鉢形土器である。口縁部には両面に刻みを持つ 3 個一対の突起が付されているが全体の単位については不明である。この突起の外側直下には瘤が付されている。全容については不明であるが頸部文様帯には曲線帯状文が展開している。160 は注口土器である。注口部は胴部のほぼ中央部に付される。文様帯は胴部上半に展開し入り組み状の曲線状文が施文されている。胴部の中央部に丸い瘤と刻みを持つ瘤が貼付されている。161 は壺形の土器である。頸部～口縁部・底部が欠損しており全容について

は不明であるが文様帯は胴部全面に展開している。入り組み状の曲線状文が2～3段施文されている。162はLR縄文が施文された浅鉢である。163は全面に異種原体による羽状縄文が施文された台付の浅鉢である。口縁部に刻みを持つ低い山形の突起が付されており、口唇部は肥厚し内反り状となっている。164は平口縁の壺形土器と思われる。口唇部はやや肥厚し内反り状となっている。頸部は幅の広い無文帯となっている。165は平口縁の注口土器と思われる。口縁部装飾帯は縄文帯となりその上に瘤が貼付されている。167は脚部の欠損した小型の台付鉢である。細く浅い沈線により平行状の文様が施文されている。167は無文の注口土器の胴部である。胴部最大径部分に相当する肩部と胴部と頸部の境に瘤が付されている。168は壺あるいは注口土器の胴部上半である。頸部には先の鋭い瘤が貼付されている。胴部には入り組み状の曲線状文が展開し、結節部分には先の鋭い瘤が貼付されている。169は小型の壺形土器である。胴部上半に弧状沈線が展開し結節部分には瘤が付されている。170は無文研磨された平口縁の壺である。口縁部は直線的に外傾している。口唇部は内反り状となっている。胴部最大径はほぼ中央部にあり、頸部に若干の膨らみを持っている。171はRL縄文が施文された平口縁の鉢形土器である。172は口縁部が欠損した無文の注口土器である。胴部最大径は中央部よりやや上半にあり、頸部に膨らみをもつものである。173は壺形土器の胴部下半である。無節縄文を施文した後全面を磨り消している。174は注口土器である。胴部のほぼ中央部に最大径があり、この部分に注口部が付されている。胴部最大径部分と頸部と胴部の境には瘤の貼付帯が巡っている。175・176は異種原体による羽状縄文が施文された鉢形土器である。177はLR縄文が施文された鉢形土器である。底部下端は丸みをもち、口縁部まで直線的に外傾している。178はLR縄文が施文された鉢形土器である。179はRL縄文が施文された鉢形土器である。口唇部は肥厚し内傾している。180はLR縄文(附加条付き)が施文された鉢形土器である。口唇部は肥厚し内傾しており、底部は極端に小さくなっている。181は異種原体による羽状縄文が施文された鉢形土器である。182はRL縄文が施文された鉢形土器であり、全体に薄手で口唇部は平坦に整形されている。183は頸部に文様帯をもつ浅鉢と思われる。184は台付の鉢形土器である。口縁部装飾帯には瘤が貼付され、頸部は無文帯・胴部上半には不規則な雲形文が施文されている。185は胴部にLR縄文が施文された壺形土器である。広い底部で沈線が1条巡り、頸部は無文帯となっている。186は台付の鉢形土器である。口唇部は装飾縁で、頸部は無文帯となっている。胴部にはRL縄文が施文され、脚部は無文である。187は口縁部が直行する壺形土器である。頸部は入念にミガキ調整されおり、口唇部は丸みを持っている。胴部全体にはLR縄文が施文されている。188は異種原体による非結束羽状縄文帯と無文帯が展開する壺である。189は縄文帯と無文帯が展開する壺である。190は口唇部に突起が付き、縄文帯と無文帯が展開する壺である。191は入組状の曲線文が展開する深鉢である。195はスタンプ形土製品であり、中央部に円文その周囲に放射状に10条の刻みが入っている。

〈石器・石製品〉石鏃 3 点 (198～200)、つまみ部の明瞭な石錐 1 点 (197)、横型石匙 1 点 (196)、不定形石器 3 点 (192～194) 磨石が 1 点 (201)、台石類 2 点 (202～206) が出土している。

〈時期〉埋土上部に縄文晩期中葉前半 (183・184・186) の土器も見られるが、床面 (156・157・158・160) および埋土下部 (159・161・163・167・169～180・182・185・187) の土器などから縄文時代後期後葉田柄貝塚第 V 群に相当する時期と思われる。

SA09 住居跡

遺構 (第 15 図、写真図版 17)

〈位置〉 A 調査区、I XV グリッドに位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA10 住居跡と重複しており、SA10 住居跡よりも古く位置づけられる。

〈平面形・規模〉 全貌については不明であるが、推定で平面形は隅丸長方形を呈するようである。遺構の検出が遅れ、埋土は 5 cm 程度しか残存していない。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒が大量に混じった汚れた南部浮石である。

〈壁・床面〉 床面と考えられる部分は凹凸があり軟弱である。

〈柱穴〉 南壁の部分に幅 10 cm・深さ数 cm の壁溝が見られ、部分的に小柱穴状のものが見られる。

〈炉〉 検出されていない。

遺物 (第 192 図、写真図版 189)

〈土器〉 縄文時代後期前葉 (210・211) と後期後葉 (207・208・212・213) の土器が出土している。

〈時期〉 縄文時代後期後葉田柄貝塚第 IV 群に相当する土器が出土しているが詳細は不明である。

SA10 住居跡

遺構 (第 16 図、写真図版 18・19)

〈位置〉 A 調査区、I XV グリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA08 住居跡・SA09 住居跡・SD034 土坑・SD035 土坑・SD036 土坑と重複しており、SA08・SA09 住居跡より新しく SA034 土坑より古く SD035 土坑・SD036 土坑との関係については不明である。

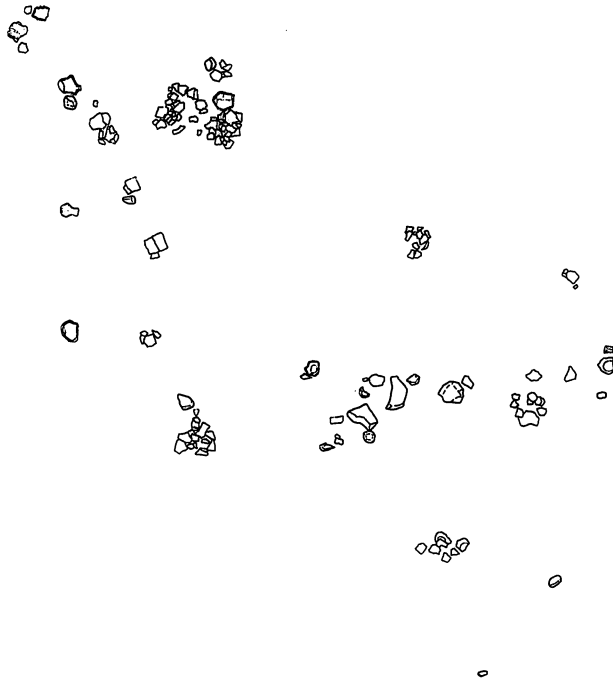
〈平面形・規模〉 平面形は円形、規模は開口部で 5.15 m×4.96 m である。推定床面積は 16.6 m²である。

〈埋土〉 埋土は黒色～暗褐色のシルト質土で構成され、その間に八戸火山灰・南部浮石の二次堆積が認められることから人為堆積と考えられる。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味に立ち上がっており、壁は東壁 24 cm・西壁 44 cm・南壁 25 cm・北

E82
S149

E90
S149



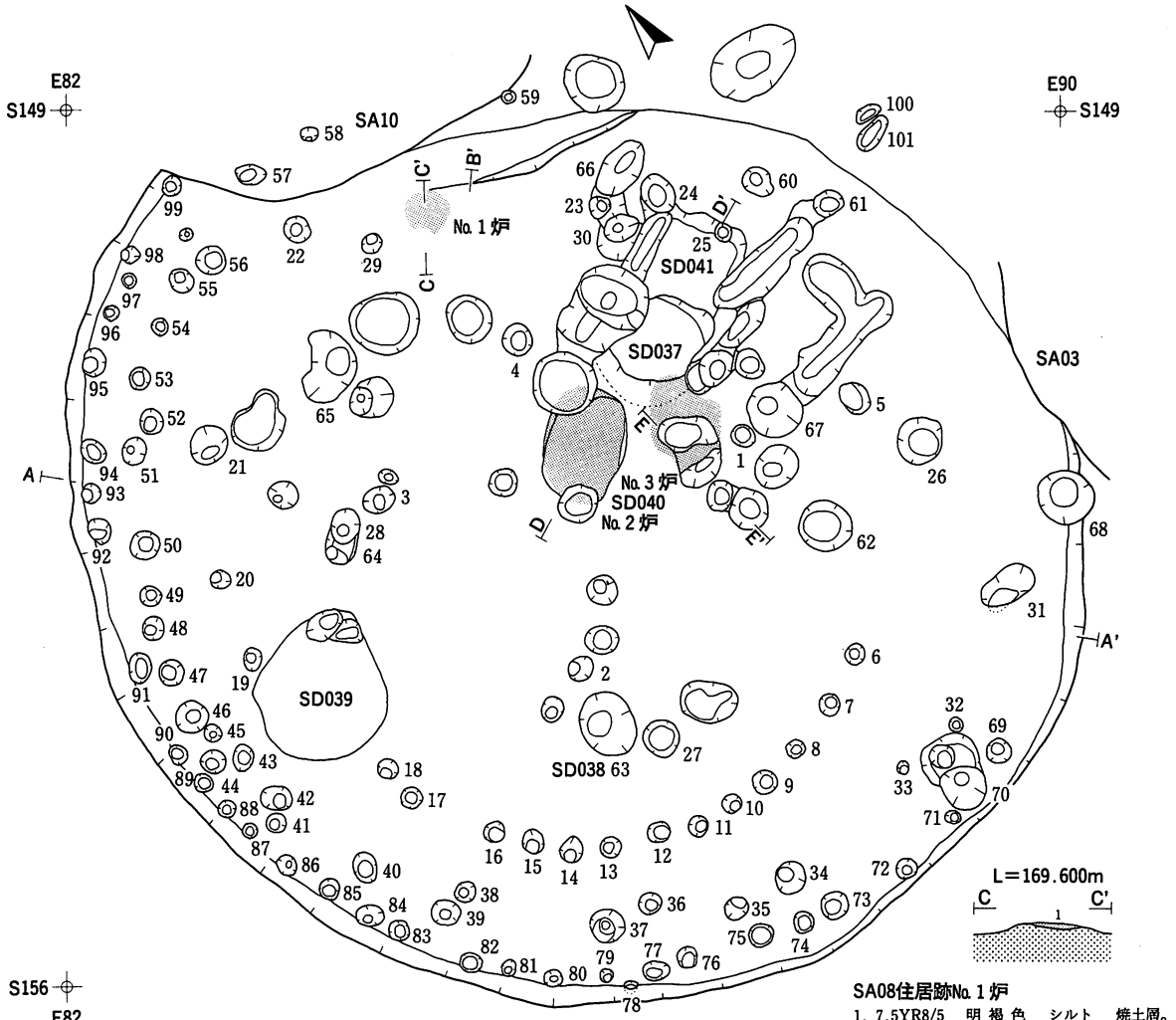
S156
E82

S156
E90

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	19×17	21×19	26×21	26×23	28×21	16×15	19×16	15×15
深さcm	35	25	34	39	23	21	15	15
No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	19×15	15×15	16×15	18×16	17×17	20×18	18×17	17×16
深さcm	13	22	12	12	15	19	13	15
No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径 cm	17×17	16×16	18×14	17×14	31×30	21×21	18×17	31×25
深さcm	13	18	7	18	26	25	26	46
No.	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂
径 cm	16×14	37×36	49×30	28×23	16×15	28×22	46×25	12×11
深さcm	44	42	36	26	20	30	53	7
No.	P ₃₃	P ₃₄	P ₃₅	P ₃₆	P ₃₇	P ₃₈	P ₃₉	P ₄₀
径 cm	11×10	26×24	20×18	13×12	28×26	16×16	24×21	25×19
深さcm	10	36	30	13	27	12	19	7
No.	P ₄₁	P ₄₂	P ₄₃	P ₄₄	P ₄₅	P ₄₆	P ₄₇	P ₄₈
径 cm	16×16	25×9	12×12	20×19	14×13	27×26	20×20	18×19
深さcm	22	24	8	28	5	8	17	40
No.	P ₄₉	P ₅₀	P ₅₁	P ₅₂	P ₅₃	P ₅₄	P ₅₅	P ₅₆
径 cm	17×15	24×23	22×19	21×18	12×12	13×13	20×19	13×12
深さcm	11	14	46	19	30	13	43	30

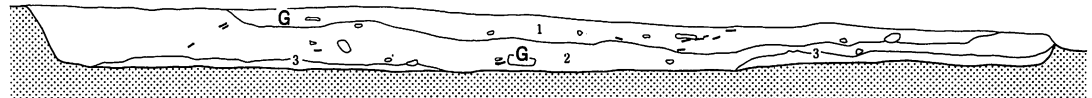
No.	P ₅₇	P ₅₈	P ₅₉	P ₆₀	P ₆₁	P ₆₂	P ₆₃	P ₆₄
径 cm	25×16	11×19	11×11	27×22	24×19	44×40	54×42	37×25
深さcm	17	13	10	20	17	49	17	24
No.	P ₆₅	P ₆₆	P ₆₇	P ₆₈	P ₆₉	P ₇₀	P ₇₁	P ₇₂
径 cm	57×37	50×31	45×44	45×43	20×19	36×34	13×10	17×16
深さcm	30	24	41	25	24	22	9	12
No.	P ₇₃	P ₇₄	P ₇₅	P ₇₆	P ₇₇	P ₇₈	P ₇₉	P ₈₀
径 cm	22×21	17×16	20×19	17×16	16×12	10×7	11×10	15×13
深さcm	24	8	12	3	7	8	7	8
No.	P ₈₁	P ₈₂	P ₈₃	P ₈₄	P ₈₅	P ₈₆	P ₈₇	P ₈₈
径 cm	13×11	17×15	17×16	22×17	17×17	17×16	12×12	14×14
深さcm	4	11	6	8	6	39	4	8
No.	P ₈₉	P ₉₀	P ₉₁	P ₉₂	P ₉₃	P ₉₄	P ₉₅	P ₉₆
径 cm	15×15	16×14	24×18	20×18	16×16	19×18	22×18	13×11
深さcm	8	7	16	15	20	18	12	12
No.	P ₉₇	P ₉₈	P ₉₉	P ₁₀₀	P ₁₀₁			
径 cm	12×11	15×14	16×16	22×9	33×11			
深さcm	12	11	9	12	23			

第14-1 図 SA08住居跡

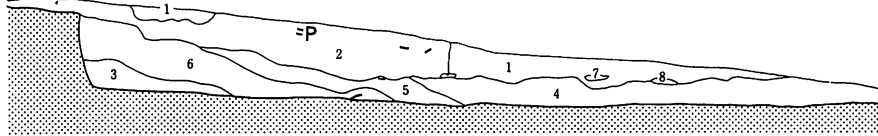


SA08住居跡No.1 炉
1. 7.5YR8/5 明褐色 シルト 焼土層。

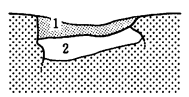
A L=170.400m



B L=170.400m



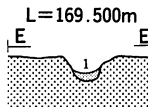
B' D L=169.500m D'



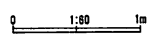
SA08住居跡No.2 炉
1. 7.5YR4/6 褐色 シルト 焼土層。
2. 7.5YR4/4 褐色 シルト

SA08住居跡埋土断面

- 1. 10YR2/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒微量含む。
- 2. 10YR2/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
- 3. 10YR2/2 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒含む。
- 4. 10YR1.7/1 黒色 シルト 炭化物・焼土微量含む。
- 5. 10YR1.7/1 黒色 シルト 炭化物・焼土多量を含む。
- 6. 10YR1.7/1 黒色 シルト 焼土少量含む。
- 7. 10YR2/1 黒色 シルト 2層に類似、黒色土卓越。
- 8. 10YR2/2 黒褐色 シルト 焼土多量含む。



SA08住居跡No.3 炉
1. 7.5YR4/6 褐色 シルト 焼土層。



第14-2図 SA08住居跡

壁 21 cm である。床面には広く貼床が施されている。

〈柱穴〉P17~23 は支柱穴に相当し、この中で P20 は廃滓ピットである。壁際には、多数の壁柱穴が巡りその多くは中心を向いて傾斜している。

〈炉〉 炉は中央よりやや東側に寄ったところに設けられており、57 cm×35 cm・層厚 10 cm の規模をもつ地床炉である。

〈その他〉 斜面下方の東壁には出入口状施設に相当すると思われる、壁に直交する 95 cm×20 cm・深さ 39 cm、90 cm×20 cm・深さ 43 cm の 2 条の溝が検出された。

遺物(第192~195図、写真図版189~192)

〈土器・土製品〉 214 は異種原体による羽状縄文が施文された深鉢である。口唇部は肥厚し内反り状となっている。215 は LR 縄文が施文された深鉢である。口唇部は肥厚し

端部は内側に突き出ている。胴部のラインは直線的である。216 は 0 段多条の LR 縄文が施文された深鉢である。口唇部は肥厚し端部は内側に突き出ている。217 は LR 縄文が施文された深鉢の下半部である。218 は LR 縄文が施文された深鉢で、口唇部はやや肥厚している。219 は RL 縄文が施文された小型の深鉢である。220~227 は縄文後期前半の土器である。土製品として焼成粘土 2 点 (229・230)、土偶 1 点 (228) が出土している。228 は中実土偶の左脚で指が明瞭に表現され、更に縄文帯が一周している。表面には明褐色の化粧土が塗布されている。

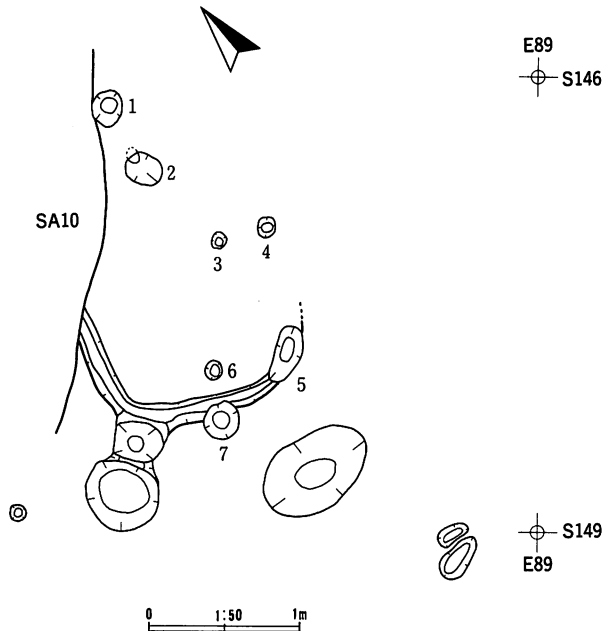
〈石器・石製品〉 不定形石器 1 点 (231)、石斧 2 点 (234A・234B)、石錐 1 点 (232)、石鏃 1 点 (233)、柱状石棒 1 点 (235A)、台石 3 点 (235B・236・237) が出土している。

〈時期〉 埋土から縄文時代後期前葉の土器が出土しているが、出入口状施設を持つ住居跡の特徴や床面出土の粗製深鉢の特徴などからこの住居跡は縄文時代後期後葉田柄貝塚第IV群~V群に相当する時期と思われる。

SA11 住居跡

遺構 (第 17 図、写真図版 19~21)

〈位置〉 A 調査区、I XV グリッドに位置している。



No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
径 cm	24×22	26×20	10×10	14×12	38×18	12×12	24×24
深さ cm	47	27	6	11	6	15	41

第15図 SA09住居跡状遺構

〈検出状況・重複関係〉西側部分でSA12住居跡状遺構と重複しており、当住居跡が新しい。
〈平面形・規模〉平面形は略円形、規模は開口部で3.5m×3.3mである。推定床面積は7.4m²である。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒混じりの軟らかい黒色～黒褐色のシルト質土で構成されている。

〈壁・床面〉壁は緩やかに立ち上がっており、壁高は東壁5cm・南壁19cm・西壁34cm・北壁で11cmを測る。斜面下方に相当する。北東壁は既に失われている。床面は平坦で、後述する石囲炉の東側の部分が特に堅緻である。

〈柱穴〉柱穴はP1～P18まで検出されており、この中でP2・4・7・10は支柱穴に相当し、その他は壁柱穴・出入口状施設に関わる柱穴と考えられる。

〈炉〉炉は、東壁に寄った場所に設けられており、円礫・亜円礫を方形状に配した石囲炉である。この石囲炉と東壁の間に床面よりもやや低い部分があり、炉に関連した場所と考えられる。東壁に接して20～30cm大の垂角礫が並行して2個埋置されておりこの礫も炉と関連したものと考えられる。

遺物（第196図、写真図版192・193）

〈土器・土製品〉238は異種原体による羽状縄文が施文された深鉢である。口唇部は平坦に調整されている。239はLR縄文が施文された深鉢の下半部である。242は縄文後期前葉の壺である。243は耳栓である。

〈石器〉台石1点（244）、245片面調整で刃部が急角度のスクレイパー状の石器である。

〈時期〉埋土からは縄文時代後期後半の土器が出土しているが炉の形態等から縄文時代後期初頭から前葉の時期が考えられる。

SA12住居跡状遺構

遺構（第17図、写真図版21・22）

〈位置〉A調査区、I XVグリッドに位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA11住居跡・SD030土坑より古く、SD031土坑より新しく位置づけられる。柱穴などの住居跡に伴う施設は未検出であるが、明瞭な壁が認められることやある一定規模をもつことから住居跡状遺構として扱うことにした。

〈平面形・規模〉推定床面積は3.2m²である。

〈埋土〉埋土は、黄褐色浮石細粒混じりの黒色のシルト質土が主体である。

〈壁・床面〉残存状況から、推定で楕円形を基調とする住居跡状遺構と考えられる。壁は緩やかに立ち上がり、残存値は北壁10cm・西壁20cm程度である。床面は比較的かたく平坦である。

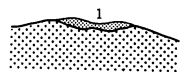
〈柱穴〉P19の1個が検出されている。

〈炉〉地床炉に相当する焼土が痕跡的に認められた。

E81
S144

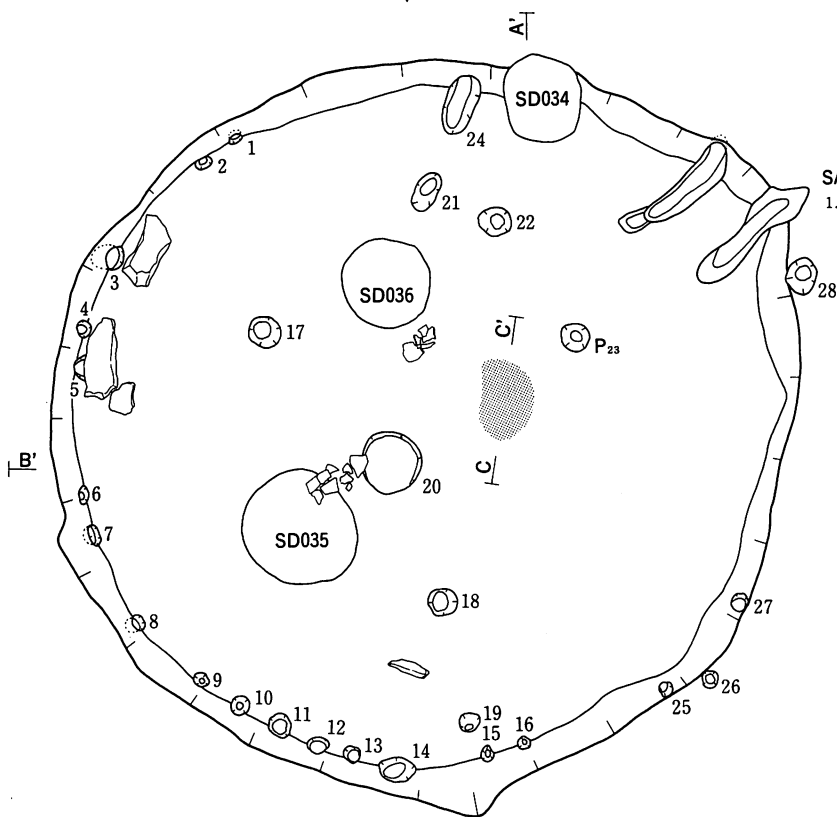
E86
S140

C L=169.200m C'



SA10住居跡炉

1. 5YR2/1 赤褐色シルト
焼土層、黄褐色浮石細粒微量含む。



B

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径 cm	9×6	11×8	13×12	11×9
深さ cm	18	4	20	2

No.	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	16×16	11×7	14×8	10×8
深さ cm	7	7	16	14

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
径 cm	10×8	13×12	15×15	13×11
深さ cm	3	12	8	11

No.	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	10×10	24×16	10×8	8×7
深さ cm	9	17	2	2

No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀
径 cm	14×12	15×13	17×13	41×40
深さ cm	49	41	10	23

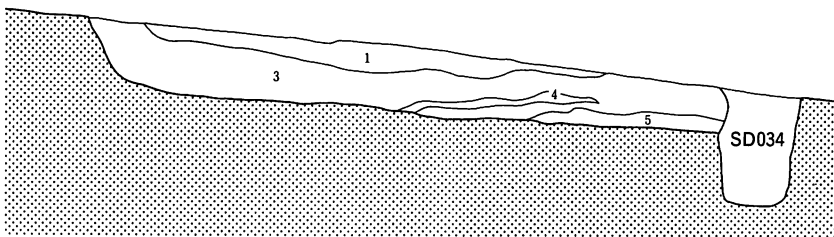
No.	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径 cm	27×17	22×19	19×18	40×21
深さ cm	7	46	19	11

No.	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈
径 cm	10×8	11×11	12×11	22×19
深さ cm	3	7	7	45

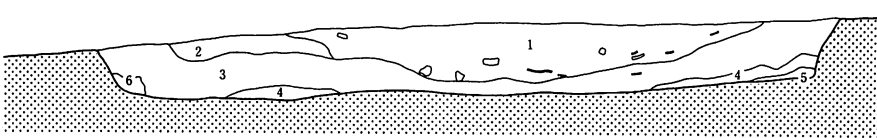
S150
E81

S150
E86

A L=169.500m



B L=169.400m



SA10住居跡埋土断面

1. 10YR2/1 黒色シルト φ5~10mmの黄褐色浮石少量含む。
2. 10YR2/3 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒多量含む(南部浮石の投棄)。
3. 10YR2/1 黒色シルト φ5~10mmの黄褐色浮石少量含む。
4. 10YR3/4 暗褐色シルト 八戸火山灰の投棄。
5. 10YR2/1 黒色シルト 汚れた黄褐色浮石細粒。
6. 浮石 汚れた黄褐色浮石細粒。

0 1:50 1m

第16図 SA10住居跡

遺物（第 196 図、写真図版 192・193）

〈土器・土製品〉 246 は縄文が充填された楕円文が施文された深鉢である。247 は LR 縄文が施文された深鉢で、口唇部は肥厚している。248 は RL 縄文が施文された深鉢である。250 は LR 縄文が施文された深鉢である。

〈時期〉 縄文時代中期末葉の時期の土器が出土しているが詳細については不明である。

SA13 住居跡状遺構

遺構（第 18 図、写真図版 22）

〈位置〉 A 調査区、K XV グリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA07 住居跡よりも古く位置づけられる。当初は SA07 住居跡の附属施設と想定したが、埋土の観察でレンズ状の自然堆積様をしめすことから別個の遺構として認識した。炉は検出されていないが、壁が明瞭に確認され、柱穴様のピットも存在することから住居跡遺構として扱うことにした。

〈平面形・規模〉 残存状況から、推定で 2.0 m×1.5 m・深さ 15 cm 程度の規模の楕円形と考えられる。推定床面積は 2.0 m²である。

〈埋土〉 埋土は、黄褐色浮石細粒が多量に混じった南部浮石の再堆積層である。

〈壁・床面〉 壁は緩やかな立ち上がりを示し、残存値は西壁 14 cm・南壁 15 cm・北壁 6.0 cm である。床面は軟弱で中央部がやや盛り上がっている。

〈柱穴〉 2 個の柱穴様のピットが検出されており、柱穴の埋土も当遺構の埋土と同様であることからこの遺構に伴うものである。

〈炉〉 検出されなかった。

遺物 出土していない。

〈時期〉 縄文時代の遺構であるが詳細については不明である。

SA 14 住居跡

遺構（第 19 図、写真図版 23）

〈位置〉 A 調査区、I XIV グリッドのほぼ中央部に位置し、SD027 土坑と隣接している。

〈検出状況・重複関係〉 SD026 土坑と重複しており、当住居跡が新しく位置づけられる。

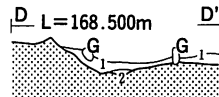
〈平面形・規模〉 平面形は略円形で、長径 4.1 m、短径 3.4 m の規模である。推定床面積は 10.4 m²である。

〈埋土〉 埋土は 6 層で構成されており、黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土であり人為堆積を示している。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味に立ち上がり、床面からの壁の高さは東壁で 19.7 cm・西壁で 31.2

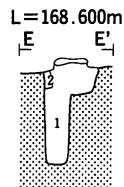
E83
S140

E89
S140



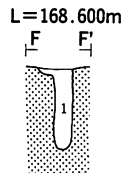
SA11住居跡炉

1. 10YR2/3 黒褐色 シルト 炭化物少量含む。
2. 5YR2/1 暗赤褐色 シルト 焼土層。



SA11住居跡P₁

1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。



SA11住居跡P₂

1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。

L=168.600m



SA11住居跡P₃

1. 10YR2/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒含む。

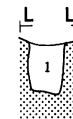
L=168.600m



SA11住居跡P₅

1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色 シルト

L=168.600m



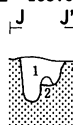
SA11・12住居跡埋土断面

1. 7.5YR2/2 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒多量含む。
2. 7.5YR1/2 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
3. 7.5YR2/3 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒微量含む。
4. 7.5YR3/4 暗褐色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
5. 7.5YR3/3 暗褐色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
6. 7.5YR2/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒微量含む。

SA12住居跡埋土断面

1. 7.5YR2/2 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒多量含む。
2. 7.5YR1/2 褐色 シルト 黄褐色浮石細粒微量含む。

L=168.000m



SA11住居跡P₆

1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。

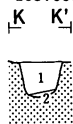
SA11住居跡P₄

1. 10YR3/3 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒含む。
2. 10YR5/6 黄褐色 粘土 黄褐色浮石細粒微量含む。

L=168.600m



L=168.600m



SA11住居跡P₇

1. 10YR2/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色 シルト

SA12住居跡P₁₉

1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	(46×41)	31×26	22×22	34×33	31×29	32×27	38×33	12×11
深さcm	18	65	19	60	20	18	30	18

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	12×11	21×19	19×18	20×11	10×10	9×8	46×21	46×21
深さcm	37	74	21	4	9	36	10	4

No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉
径 cm	(25×20)	8×8	47×39
深さcm	27	5	36

0 1:60 1m

第17図 SA11住居跡・SA12住居跡状遺構

cm・南壁で29.8cm・北壁で41.4cmを測る。床面は凹凸がなく平坦であるが、非常に軟弱である。

〈柱穴〉柱穴に相当すると考えられるものは30個検出されており、P1～P9は支柱穴の一部を構成しこのなかのP6・P7は後述する出入口状施設と、P5は炉に関連をもつものである。壁に沿って巡るP10～P30の小柱穴はすべて住居跡の中央部に向いており壁柱穴に相当するものである。

〈炉〉炉は住居跡のほぼ中央部に設けられており、床面を掘りくぼめた地床炉である。径60cm×60cmの規模の不整形形で焼土の層厚は5cm程度である。

〈その他〉斜面下方住居跡の北東壁際に、出入口状施設と考えられる壁に直交するように幅25cm長さ61cm深さ13cm、幅21cm長さ75cm深さ26cmの規模を持つ並行した2条の小規模な溝が検出されている。そのほか、地床炉の北西側にあるP5は炉に関連する施設と考えられる。東壁際、出入口状施設

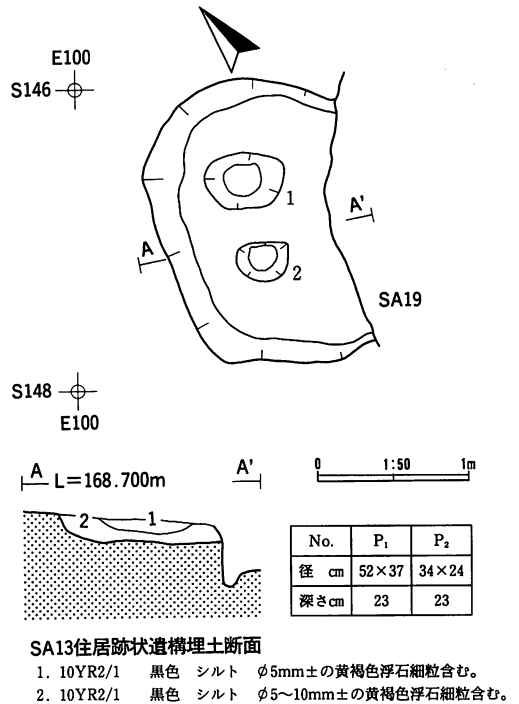
の床面付近に赤色の土壌の分布が見られ、当初赤色顔料と考えたがこの住居跡の北東側に旧河道が通っており水が浸透した結果形成された酸化鉄の集積と思われる。

遺物 (第197図、写真図版193・194)

〈土器〉251は鉢形土器の下半部と思われる。縄文が施文された曲線状文が展開し、刻みのある瘤が貼付される。252は壺形土器の口縁部である。口縁部には刻みのある大小の突起が交互に排される。口縁部裝飾帯には瘤を中心に連結状の縄文帯が巡っている。頸部文様帯にも曲線状文が展開し結節部には瘤が貼付される。縄文は異種原体による羽状縄文である。口唇部は内傾し端部は内側にやや突き出している。253は壺と思われる。胴部上半から頸部の付近である。胴部上半にはタスキ掛け状入組文が展開し、内部には0段多条の異種原体による羽状縄文が施文されている。254は台付土器の無文の台である。255は口唇部が若干肥厚しLR縄文が施文された深鉢である。257は異種原体による非結束羽状縄文が施文された深鉢である。口唇部は内ぞりで端部は突き出ている。259は波状縁の深鉢の口縁部である。258は異種原体による非結束羽状縄文が施文された深鉢で、口縁部裝飾帯には縄文帯となっている。

〈石器〉石錐1点、縦型石匙2点が出土している。

〈時期〉縄文時代後期田柄貝塚第IV群に相当する時期と思われる。



第18図 SA13住居跡状遺構

SA15 住居跡

遺構 (第 20 図、写真図版 24・25)

〈位置〉 A 調査区、J XIV グリッドの傾斜変換点付近に位置している。

〈検出状況・重複関係〉このグリッドにある SX01 土器捨て場を精査中にほぼ垂直な壁の立ち上がりを確認した。貼床及び上下に重なる地床炉の存在から一度拡張されており二時期にわたって住居跡が営まれたことが確認された。旧河道に面した住居跡の東壁に相当する部分は既に流失を受けており全体を把握することはできなかった。古期の住居跡を SA15a 住居跡、新期の住居跡を SA15b 住居跡として記述を行う。

〈SA15a 住居跡〉

遺構 (第 20 図、写真図版 24・25)

〈平面形・規模〉残存部の形状当から平面形は略円形、推定で規模は 3.3 m×3.2 m である。推定床面積は 6.6 m²である。

〈壁・床面〉一部礫層を床面としており貼床がなされている。壁高は (SA 15 b 住居跡の床面との比高差)、南壁 6 cm・西壁 5 cm・北壁 40 cm 程度であり、乳白色の砂質シルトの土を使用して貼床としている。

〈柱穴〉柱穴は 9 個検出されており、P4・5・7・8 などが支柱穴を構成していたと思われる。

〈炉〉炉は住居跡のほぼ中央部に設けられており、65 cm×57 cm・厚さ 5 cm の規模の地床炉である。

〈SA15b 住居跡〉

遺構 (第 20 図、写真図版 24・25)

〈検出状況・重複関係〉先行する SA15a 住居跡に乳白色の砂質シルト質土を使用して貼床とし床面を構築し拡張をおこなっている。

〈平面形・規模〉残存状況から平面形は略円形、開口部は推定で 4.4 m×4.2 m 程度の規模と考えられる。推定床面積は 12.7 m²である。

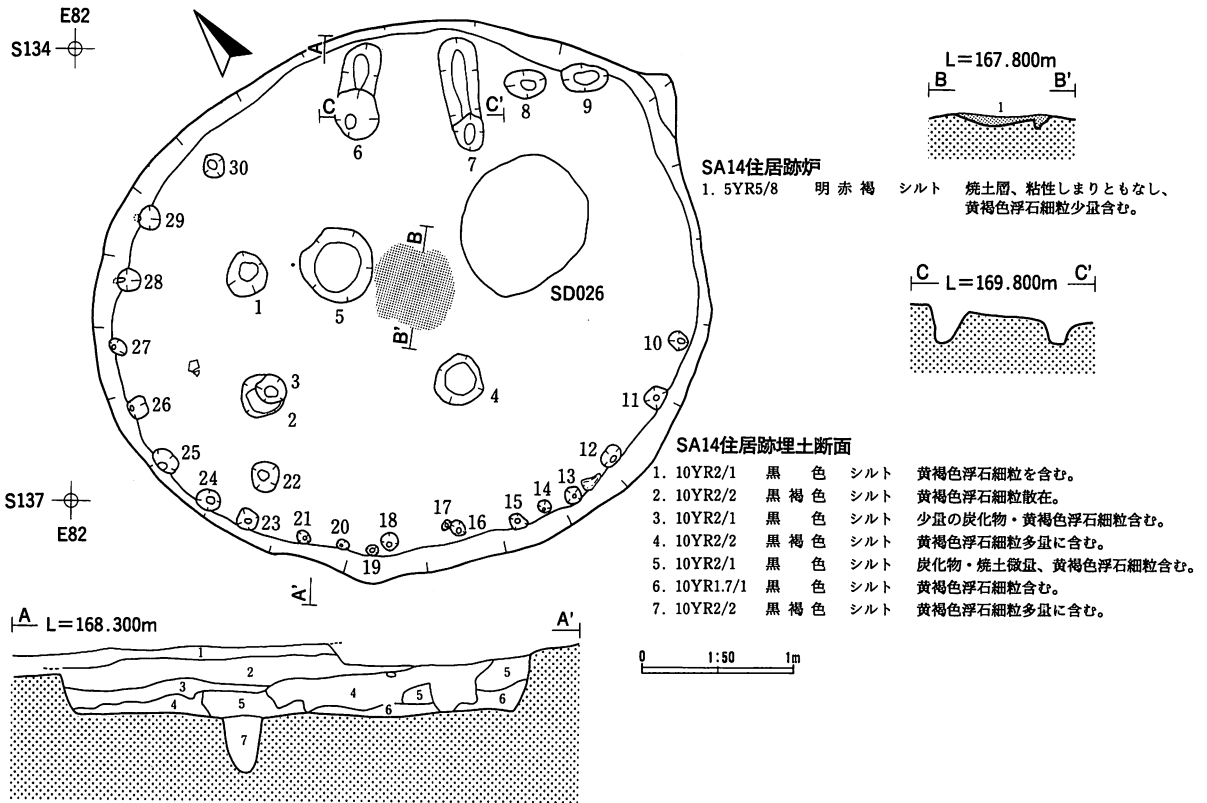
〈埋土〉埋土下部は黄褐色浮石細粒・炭化物・焼土混じりの黒色～黒褐色のシルト質土で、上部には黄褐色浮石細粒混じりのシルト質の黒色土を主体とした遺物包含層の土が堆積している。

〈壁・床面〉残存部分での壁高は、南壁 51 cm・西壁 76 cm・北壁で 25 cm である。

〈柱穴〉柱穴は P10～P26 で、この中で P16・17・22・26 が支柱穴に相当する。

〈炉〉炉は中央部からやや東側に寄った所に構築されており、94 cm×70 cm・厚さ 10 cm の規模の不整楕円形をした地床炉である。この焼土の縁辺に頭大・拳大の礫が各 1 個認められたが、熱を受けていないこと、他に礫の抜き取りの痕跡が認められないことから直接炉に関係したものではない。

〈その他〉炉から約 10 cm 北側に 23 cm×22 cm・厚さ 10 cm 程度の現地性焼土が認められたが



SA14住居跡炉

1. 5YR5/8 明赤褐 シルト 焼土層、粘性しまりともなし、黄褐色浮石細粒少量含む。

SA14住居跡埋土断面

- 1. 10YR2/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒を含む。
- 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒散在。
- 3. 10YR2/1 黒色 シルト 少量の炭化物・黄褐色浮石細粒含む。
- 4. 10YR2/2 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒多量に含む。
- 5. 10YR2/1 黒色 シルト 炭化物・焼土微量、黄褐色浮石細粒含む。
- 6. 10YR1.7/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒含む。
- 7. 10YR2/2 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒多量に含む。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	29×26	(29×29)	20×19	33×32	48×48	33×29	24×20	28×19
深さcm	9	25	31	8	33	25	23	15

No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径 cm	10×10	7×6	12×11	9×7	9×7	9×9	20×18	15×15
深さcm	10	6	8	8	6	5	7	8

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	31×18	13×12	17×15	16×12	11×8	12×12	9×8	13×12
深さcm	20	9	9	5	1	9	8	10

No.	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀
径 cm	19×16	8×11	14×13	12×9	16×15	15×15
深さcm	8	12	10	12	17	17

第19図 SA14住居跡

炉との関係については不明である。住居跡に伴う炉の焼土の上部及び周辺の床面に少量であるが炭化材と二次的な焼土の形成が見られることなどから焼失を受けた住居跡でと考えられる。

遺物 (第 198 図、写真図版 194)

〈土器〉270 は小型の注口である。口縁部は欠損しているが、胴部から頸部には曲線状文が展開している。注口部と反対側の胴部最大径部分には懸垂孔が貼付されている。273 は口縁部文様帯が無文の深鉢である。274～276 は縄文時代後期前葉の土器である。

〈石器・石製品〉石鏃 1 点、不定形石器 1 点、石斧 1 点、敲石 1 点、凹石 2 点、軽石製品 1 点が出土している。269 の軽石製品は扁平な長方形形状で長軸方向の一端に両面から穿孔された孔が認められる。226 の敲石は側縁部が主に使用されている。

〈時期〉床面出土の注口の特徴から縄文時代後期後半田柄貝塚第IV群に相当する時期と考えられる。

SA16 住居跡

遺構 (第 21 図、写真図版 26)

〈位置〉 A 調査区、I XVI グリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 攪乱及び遺構の大半が調査区外に延びているため、全貌については不明である。遺構のプラン検出の段階では明瞭にその範囲をとらえることはできなかったが、土層の断面観察の段階で壁の立ち上がり及び床面・柱穴の一部が確認されたため住居跡と判断した。II 層中を遺構構築面としている。

〈平面形・規模〉 規模については不明であるが、平面形は円形を基調としたものである。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味に立ち上がり壁高は 20～25 cm 程度である。

〈柱穴〉 柱穴に相当するものが 1 個検出されている。

遺物 (第 198 図、写真図版 194)

〈土器〉 278・279 は縄文時代後期前葉の土器である。

〈時期〉 縄文時代後期前葉の土器が出土しているが詳細については不明である。

SA17 住居跡

遺構 (第 11 図、写真図版 9)

〈位置〉 A 調査区、J XVI グリッドに位置している。

〈検出状況・重複関係〉 炉や壁は確認されなかったが、弧状に展開する連続した壁柱穴の存在から住居跡の痕跡として認定した。SA05 住居跡・SA18 住居跡と重複しており、これらとの新旧関係については不明である。

〈平面形・規模〉 円形～楕円形を基調とした住居跡と思われる。

〈柱穴〉 P49～83 がこの住居跡に伴う柱穴と考えられる。壁柱穴の状況から、最低でも 2 時期程度の変遷が考えられる。

遺物 出土していない。

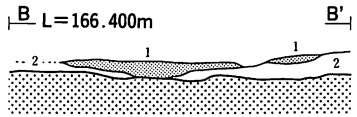
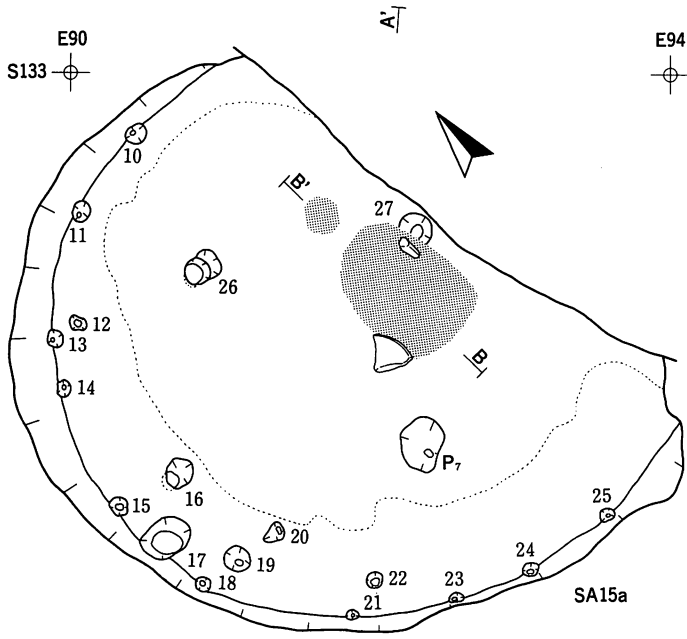
〈時期〉 遺物は出土していないが柱穴配置などから縄文時代後期後半頃の時期と考えられる。

SA18 住居跡

遺構 (第 11 図、写真図版 10)

〈位置〉 A 調査区、J XV グリッドに位置している。

〈検出状況・重複関係〉 炉や壁は確認されなかったが、弧状に展開する連続した壁柱穴の存在から住居跡の痕跡として認定した。SA05 住居跡・SA17 住居跡と重複しており、これらとの新旧関係については不明である。



SA15a住居跡炉

- 5YR4/8 赤褐色 シルト 焼土層、炭化物微量含む。
- 10YR2/3 黒褐色 シルト 貼床。

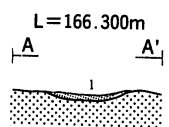
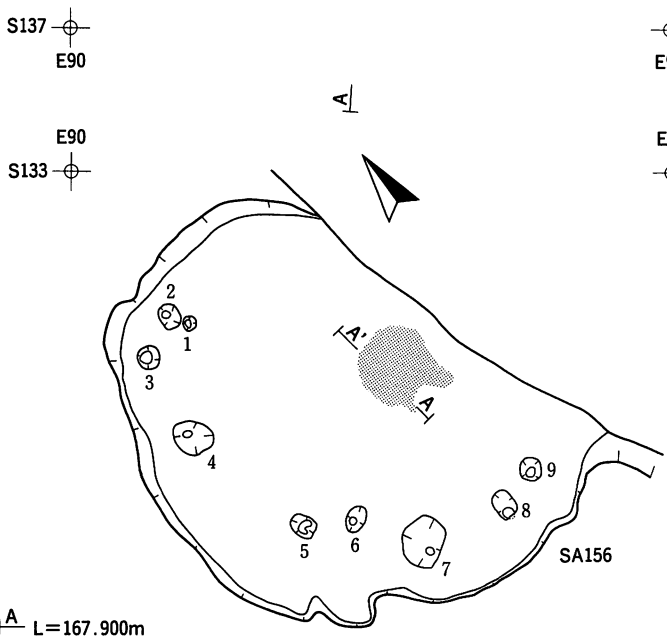
No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	9×9	17×15	15×15	27×21	17×14	18×13
深さcm	9	11	12	25	8	29

No.	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
径 cm	35×29	18×13	15×14	15×13	14×11	10×9
深さcm	28	24	11	9	8	18

No.	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈
径 cm	11×11	8×6	14×8	20×18	33×15	10×10
深さcm	11	7	9	39	46	10

No.	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径 cm	19×19	15×10	8×7	11×11	10×6	11×9
深さcm	13	7	1	32	6	6

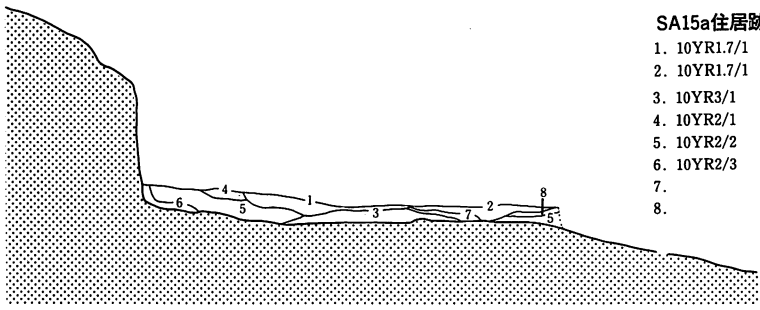
No.	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇
径 cm	10×8	19×16	24×23
深さcm	8	35	21



SA156住居跡炉

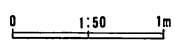
- 5YR3/6 暗赤褐色 砂質シルト 焼土層、砂・小礫含む。

A L=167.900m



SA15a住居跡埋土断面

- 10YR1.7/1 黒色 シルト φ10mm±の黄褐色浮石細粒少量含む。
- 10YR1.7/1 黒色 シルト 炭化物多量含む。
- 10YR3/1 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒多量含む。
- 10YR2/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
- 10YR2/2 黒褐色 シルト
- 10YR2/3 黒褐色 シルト
- 焼土
- 炭化物



第20図 SA15a・b住居跡

〈柱穴〉P1～25 がこの住居跡に伴う柱穴と思われる。壁柱穴の状況から、最低でも 2 時期程度の変遷が考えられる。

遺物 出土していない。

〈時期〉遺物は出土していないが柱穴配置などから縄文時代後期後半頃の時期と考えられる。

SA19 住居跡

遺構 (第 22 図、写真図版 27)

〈位置〉A 調査区、K XV グリッドに位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA07 住居跡の床面を精査している段階で検出された。SA07 住居跡の下位にあり、この住居跡よりも古く位置づけられる。

〈平面形・規模〉平面形は略円形、推定で 4.5 m×4.2 m の規模をもつ住居跡である。推定床面積は 13.2 m²である。

〈壁・床面〉壁の残存が確認されたのは西壁のみで、壁の残存値は 20 cm である。

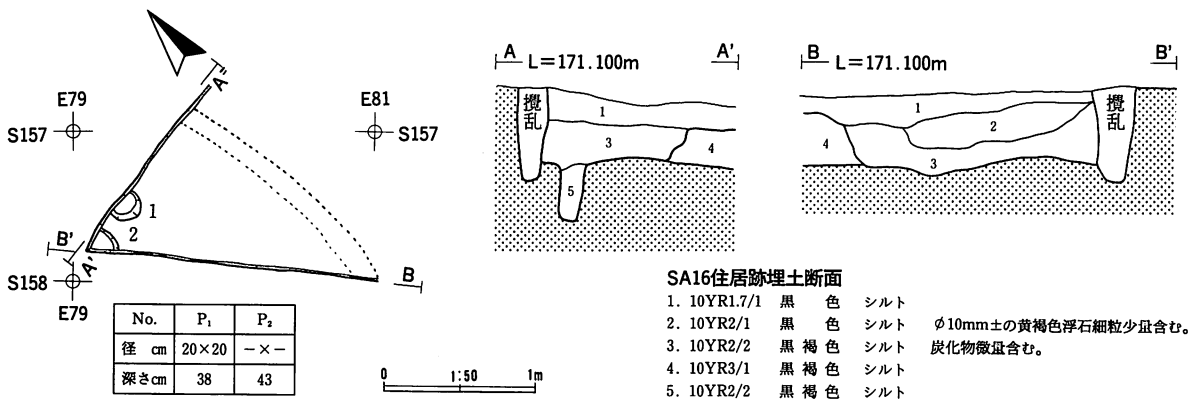
〈柱穴・壁溝〉支柱穴を構成するのは P1～P4 で、このほかに壁溝と重複ないしはその内側に壁柱穴に相当する P1～P12 が検出されている。壁溝は住居跡の壁際を全周するのではなく、部分的に途切れている。壁溝の残存部分では上場幅 15 cm、床面からの深さ 5～10 cm の規模である。

〈炉〉明確に炉に相当するものは検出できなかったが、SA07 住居跡の地床炉と貼床を除去した段階で、当住居跡の東壁に相当する部分から、1.5 m×0.8 m の規模の長円形の範囲から明黄褐色の砂質シルトの集積が認められた。この部分が非常に堅くしかも一部に熱を受けた痕跡が認められることからこの部分が炉に相当すると考えられる。

遺物 (第 199 図、写真図版 195)

〈土器〉280 は壺形土器である。口縁部は内傾し頸部には 6 ヶ所にブリッジが付いている。胴部には LR 縄文が地文として施文され、2 重の長方形沈線文が 8 ヶ所に施文されている。胴部には赤色顔料が塗布されている。頸部～口縁部の部分は入念にミガキ調整されている。281 は小型の鉢である。4 単位と思われる緩やかな山形状の口縁で、胴部に屈曲部分を持ちそれより口縁部までは急激に内湾している。口唇部外端には 1 条の刺突列が巡っている。破片のため全容は不明であるが曲線沈線で区画された内部には RL 縄文が施文されている。282 は縄文が充填された楕円文が施文された小型の深鉢である。

〈時期〉埋土下部出土の土器などから縄文時代中期後半大木 9 式段階頃に相当する時期と思われる。



第21図 SA16住居跡

SA20 住居跡

遺構 (第 22 図、写真図版 28)

〈位置〉 A 調査区、K XV グリッドに位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA07 住居跡の炉を精査している段階で、SA07 住居跡の炉の下部から石囲炉が確認された。SA07 住居跡より古く、SA19 住居跡のいずれよりも新しい。検出されたのは、炉と東壁の一部を確認しただけである。

〈平面形・規模〉 推定で直径 5.0 m 前後の略円形を呈する住居跡と考えられる。推定床面積は 16.4 m² である。

〈壁・床面〉 床面は平坦で、残存している東壁で 5 cm の壁を確認しただけである。

〈柱穴〉 住居跡に関連する柱穴は P1～P6 で、このなかで P1～P5 が支柱穴に相当する。

〈炉〉 炉は、住居跡のほぼ中央部に構築されており、20 cm 大の偏平な礫を「コ」の字形に配した石囲炉である。炉の西側部分には礫の抜き取りの痕跡は認められなかった。

遺物 (第 199～203 図、写真図版 195～197)

〈出土状況〉 浅い直径 25 cm の P3 内から、同一母岩とする石器未製品の剥片貯蔵が認められた。

〈土器〉 285 は底部を中心に沈線で放射状の文様が見られる皿である。286 は一部に小突起が付く平口縁の深鉢である。縦位撚糸文を地文として沈線により紡錘状の文様が展開している。287～295 は縄文後期前葉の土器である。

〈石器〉 296 の 73 点の剥片は同一の母岩から得られたものである。中には加工途中の剥片も認められる。

〈時期〉 埋土下部の土器から縄文時代後期初頭～前葉の時期に相当する時期と思われる。

SA21 住居跡

遺構 (第 23 図、写真図版 29)

〈位置〉 B 調査区、VVIグリッドの西側に位置する。

〈検出状況・重複関係〉 検出をみたのは北東壁と床面の一部で、大半は調査区外にはいる。遺構は、基本層序のIII層を構築面としている。

〈平面形・規模〉 検出された壁の在り方から規模・平面形を推定すると、開口部直径 3 m 程度の円形を呈するものと思われる。推定床面積は 5.1 m²である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土で構成されており、壁際には壁の崩落土と考えられる八戸火山灰をブロック状に含む黒褐色土が堆積している。自然堆積を呈する。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味に緩やかに立ち上がり、残存部分で床面からの壁高は東壁で 12 cm、北壁で 28 cm を測る。床面はほぼ平坦であり、南側に向かって緩やかに傾斜している。

〈柱穴〉 壁に一部食い込む状態で柱穴 1 個が検出されている。

〈炉〉 炉は検出されていない。

遺物 (第 203 図、写真図版 198)

〈土器〉すべて胎土に繊維が含まれている。207 は口縁部付近に隆帯をもち、口縁部文様帯に撚紐押捺、胴部には結束羽状縄文が施文されている。298 は胴部破片で多軸絡条体回転文が施文されている。300 は木目状撚糸文が施文されている。301 は口縁部文様帯に不整綾線文、胴部に縦位撚糸文が施文されている。302 は深鉢の胴部で結束羽状縄文が施文されている。303 は LR 縄文が施文され、口縁部には撚紐押捺が見られる。304 は口縁部に撚紐押捺で幾何学状の文様が施文されている。305 は口縁部に絡条体の押捺、胴部に木目状撚糸文が施文されている。

〈時期〉 埋土出土の土器から縄文時代前期前半の時期と思われる。

SA22 住居跡

遺構 (第 24 図、写真図版 30)

〈位置〉 B 調査区、VVIグリッドの北西側に位置する。

〈検出状況・重複関係〉 SA23 住居跡と重しており、遺構の残状状況から SA23 より古く位置づけられる。この周辺は国道改良工事に伴う攪乱が激しく、このため住居跡の上面が破壊されており、検出されたのは北壁と床面の一部及び炉である。

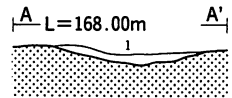
〈平面形・規模〉 平面形は検出された壁の状況から推定して隅丸長方形を呈するものと思われる。

〈壁・床面〉 壁高は 28 cm で、壁下には幅約 5~7 cm、深さ 3~7 cm の壁溝が巡る。

〈柱穴〉 壁溝の中には P1~P5 の支柱穴が配される。支柱穴の構成配置については不明である。

E102
S144

E106
S144

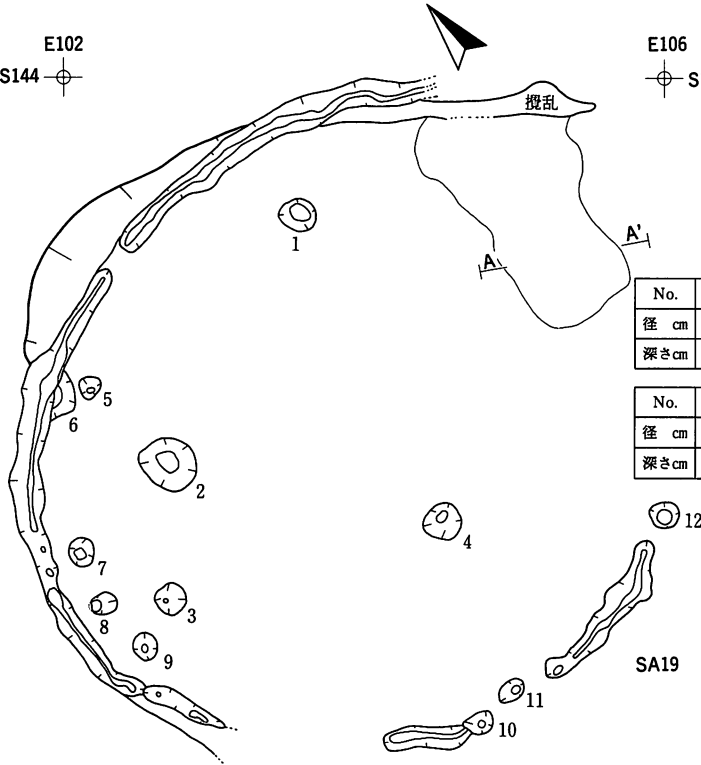


SA19住居跡炉

1. 10YR7/6 明褐色 砂質シルト 部分的に焼土含む。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	21×15	38×33	22×21	25×24	16×15	-×-
深さ cm	34	35	29	45	18	23

No.	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
径 cm	21×18	20×16	18×17	21×14	20×12	20×18
深さ cm	11	12	11	14	10	9

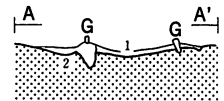


S149
E102

S149
E106

E105
S143

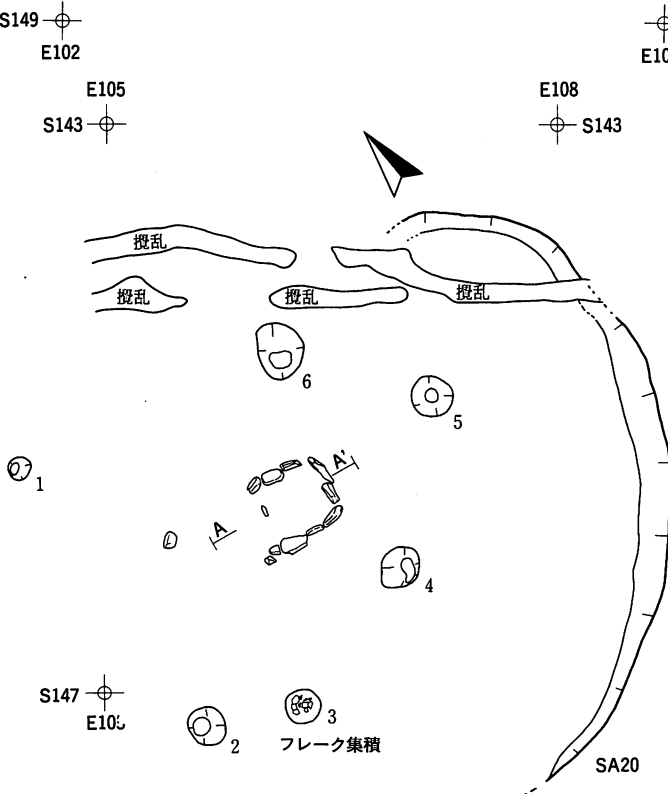
E108
S143



SA20住居跡炉

1. 7.5YR3/3 暗褐色 シルト 焼土層、堅い。
2. 10YR8/4 浅黄橙色 シルト 非常に堅い、貼床。
3. 10YR3/2 黒褐色 シルト 非常に堅い、貼床。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	16×15	28×24	24×22	30×25	28×27	38×30
深さ cm	9	46	-	53	39	48



S147
E105

3
フレーク集積

第22図 SA19・20住居跡

〈炉〉 炉は八戸火山灰上に構築された地床炉で、床面のほぼ中央部に位置する。その規模は径85×90 cmのほぼ円形を呈し、中心部が凹み、堅くしまっている。内部の焼土最大層厚は6 cmである。

遺物（第204図、写真図版199）

〈土器〉306は口縁部に絡条体の押捺、胴部に結束羽状縄文が施文される。307は結束羽状縄文が施文され口縁部には撚紐押捺が見られる。308は刺突文がほどこされた微隆帯で区画され、口縁部には絡条体の押捺、胴部には木目状撚糸文が施文されている。309は撚紐押捺で区画され、口縁部には葺瓦状撚糸文、胴部には縄文が施文されている。310は口縁部に不整綾線文が施文された深鉢である。311は撚紐押捺で区画された深鉢である。312は押圧状の刺突文で区画され、口縁部には不整綾線文が施文されている。

〈時期〉 円筒下層前半と後半頃の土器が出土しているが、時期決定については明かでない。

SA23 住居跡

遺構（第24図、写真図版29）

〈位置〉 B調査区、VVIグリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA22住居跡の南側にこれと重複する形で位置する。上面の攪乱が激しく、この為検出をみたのは北壁及び床面の一部である。

〈平面形・規模〉 平面形は長形状を呈するものと思われる。規模については不明であるが、壁の形状から小規模の住居跡と推定される。

〈壁・床面〉 壁高は北壁で20 cmである。埋土は砂礫が充填されており不明である。床面はSA22住居跡床面から10～20 cmの段差をもって低くなり、凹凸が激しい。

〈柱穴・壁溝〉 壁際には幅2～5 cm、深さ3～5 cmの壁溝が巡り、壁溝に沿って、支柱穴が配される。柱穴はP1～P15が検出されているが、その構成配置については不明である。

〈炉〉 炉は検出されていない。

遺物（第204図、写真図版199）

〈土器〉 313は隆帯で区画され口縁部には縄の束の押捺、胴部にはLR縄文が施文されている。314は口縁部に不整綾線文が施文されている。315は口縁部に撚紐が押捺されている。316は結束羽状縄文、317は木目状撚糸文、318は複節縄文が施文されている。

〈石器〉 細部調整の粗い不定形石器が4点出土している。

〈時期〉 出土している土器は縄文時代前期前半頃の土器で、住居跡もほぼこの時期に近いものと思われる。

SA24 住居跡

遺構 (第 25 図、写真図版 30・31)

〈位置〉 B 調査区、TVIグリッドのやや南東寄りに位置する。

〈検出状況・重複関係〉 北東側は調査区外にはいり、南西側は SF01 溝に寄って切られている。検出面から上面は国道改良工事に伴う掘り込みや砂礫層によって攪乱されている。検出をみたのは北西側と南東側の壁、床面と炉である。

〈平面形・規模〉 平面形は北東から南西に長軸をもつ不整楕円形を呈する。規模は短軸の直径で 4 m を測る。床面はほぼ平坦である。推定床面積は 12.3 m² である。

〈埋土〉 埋土は攪乱部に部分的に残る黒色土を基調としている。

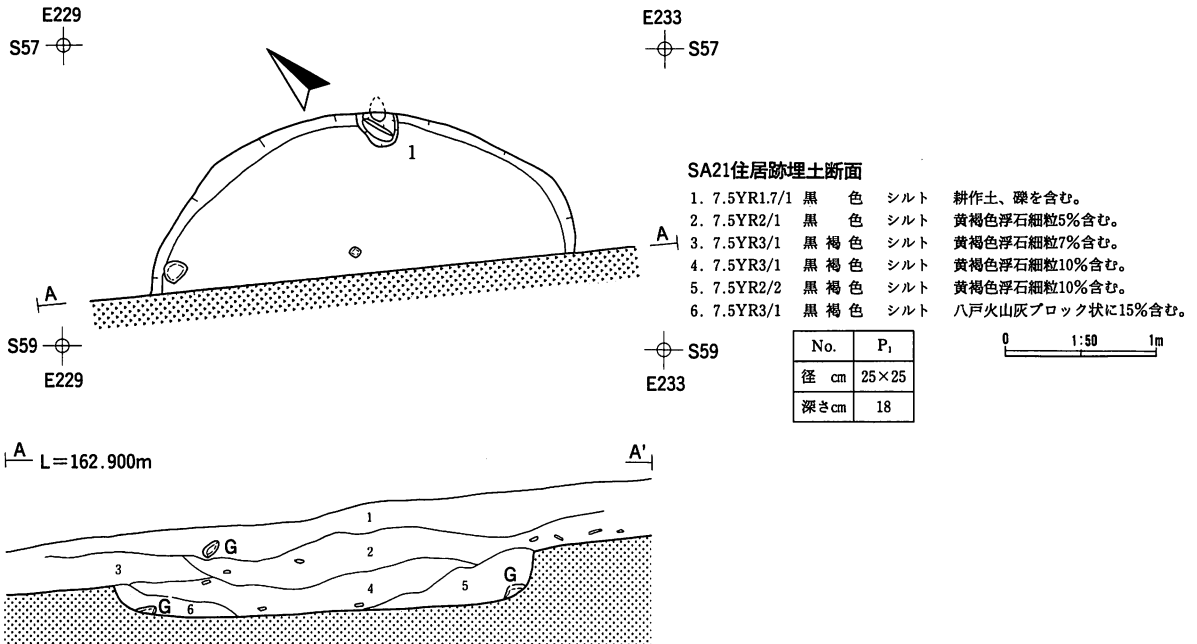
〈壁・床面〉 壁は床面からゆるやかに立ち上がる。壁高は北西壁で 10cm、南東壁で 11cm である。

〈柱穴〉 柱穴は壁際に P1~P7 が検出されているが、その構成は位置については不明である。

〈炉〉 炉は地床炉で、床面のほぼ中央部に位置する。規模は 50×85 cm の不整形をなし、その焼土最大層厚は 7 cm である。

遺物 (第 204・205 図、写真図版 199・200)

〈土器・土製品〉 323 は最大径を肩部にもつ無文の壺である。小型ではあるが非常に重量感がある。324 は無文の壺に近い形態の土器である。325 は遠賀川系土器の壺である。無文の肩部に 3 本



第23図 SA21住居跡

の沈線が巡っている。326は波状の鉢の口縁部である。口縁部の下に3本、頸部付近に2本の沈線が巡り頸部文様帯にはLR縄文が施文されている。327は変形工字文が施文された高坏である。328は口縁部に変形工字文と平行沈線文が施文された甕である。329～333は甕の口縁部である。334は土偶の右肩である。中実で腹面には沈線、背面には円形刺突文が垂直に突かれている。

〈石器・石製品〉 不定形石器1点、磨石1点、石鏃2点が出土している。

〈時期〉 弥生時代初頭の時期と考えられる。

SA25 住居跡

遺構 (第26図、写真図版32)

〈位置〉 B調査区、TVIグリッドのやや南東より、SA24住居跡の下面に位置する。

〈検出状況・重複関係〉 SA24住居跡との床面差は28cmで、SA24住居跡の柱穴P3の真下に当住居跡の炉中心部が位置する。北東側は調査区外にはいり、南西側は溝によって切られている。また西側はSA26住居跡と重複しているが、SA26住居跡の床面から約3～4cmの上面に当住居跡の壁が検出されているところから、当住居跡が後行することが確認されている。

〈平面形・規模〉 平面形は円形を呈する。規模は直径7.1mである。推定床面積は36.5m²である。

〈埋土〉 埋土は黒褐色のシルト質土である。

〈壁・床面〉 壁高は北西壁で3～4cm、南東側は12～21cm、幅8～20cm、深さ6～23cmの壁溝が巡り、その中にP59～P72の支柱穴が規則的に配列される。床面はほぼ平坦で、SA26住居跡と重複する範囲には灰白色のシルト質土で貼床されている。

〈柱穴〉 P1～5が支柱穴、P22～38が壁柱穴に相当すると思われる。

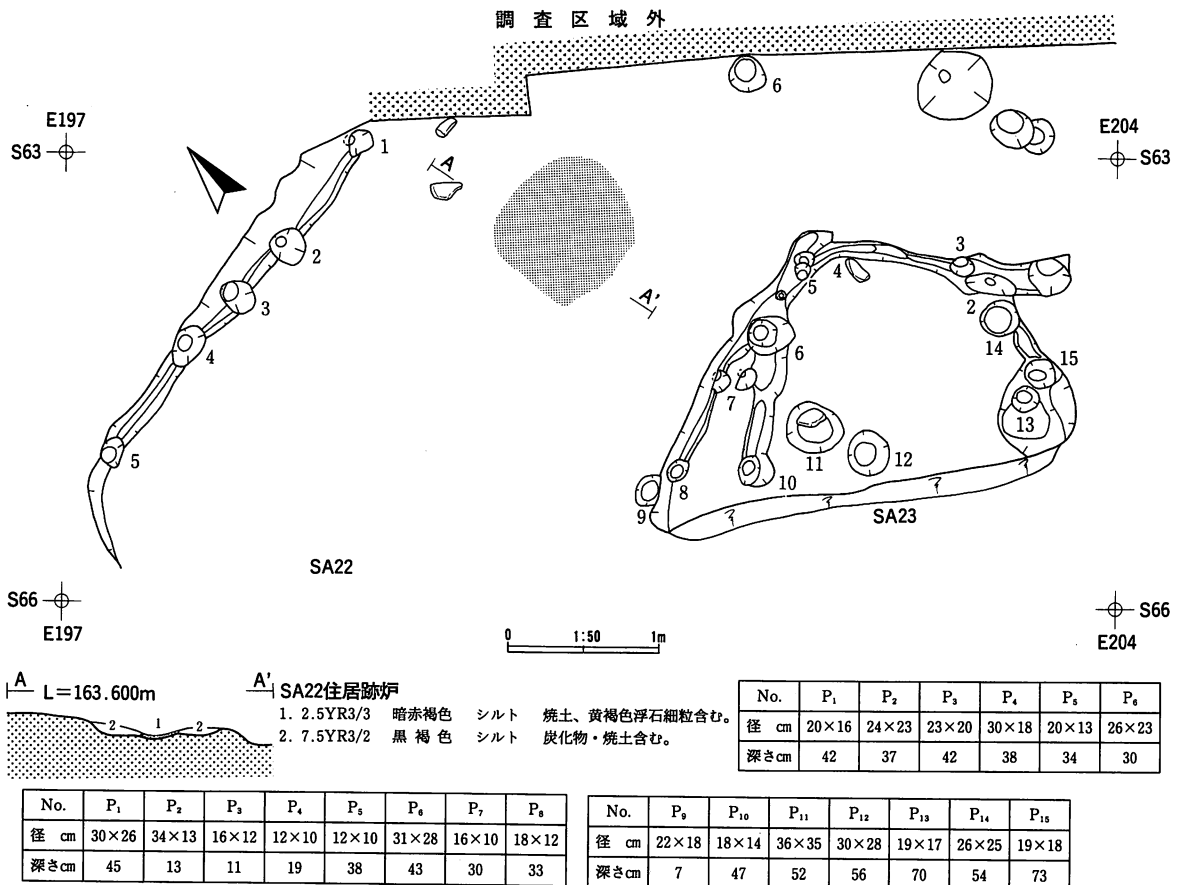
〈炉〉 炉は長方形の石囲い炉で、床面の中央部に位置する。規模は85×130cmで、中央部に土器が埋設されている。内部の焼土最大層厚は5cmである。

遺物 (第205・206図、写真図版201)

〈土器・土製品〉 339～347は鉢・高坏類である。339は高坏の脚部である。2単位の変形工字文が施文されている。内面には2条の沈線が巡る。外面には赤色顔料の痕跡が認められる。346は高坏の台で波状沈線文が施文されている。348～366は鉢・甕類である。348は鉢である。頸部に2条、胴部条半に3条の太く浅い平行沈線が施文される。胴部には痕跡的ではあるが斜行縄文が認められる。口唇部は平坦に調整されている。352は口縁部が非常に短い甕である。口唇部は丸く整形されている。地文として横回転のLR縄文が施文されている。外面に煤の付着が認められる。353は口唇部が丸みをもち頸部に屈曲部をもち、口縁部がやや受け口状となる甕である。地文として横走る縄文が施文される。焼成は良好であるが胎土には多くの砂粒が含まれている。354は頸部に1条の沈線をもち、口縁部に低い3叉状の山形突起が付された甕である。

口縁部は外傾しており、胴部にはLR縄文が施文されている。355は横走縄文が施文された甕の下半部である。甕類には口縁部が幅の広い無文帯のもの、幅の狭いもの、横位沈線文が巡るものなどが見られる。

〈時期〉 出土土器などから弥生時代初頭の時期と考えられる。



第24図 SA22・23住居跡

SA26 住居跡

遺構 (第27図、写真図版32・33)

〈位置〉 B調査区、TVIグリッドのやや南東寄りに位置する。

〈検出状況・重複関係〉 検出段階において、その上面に壁の掘り込みは認められず、円形状に巡る壁溝とそれに伴う支柱穴、炉及び主柱穴の検出によって住居跡と確認された。南西側約半分は調査区外にはいる。北側はSA27住居跡と、東側はSA25住居跡と重複している。その先後

関係については、SA27 住居跡より新しく、SA25 住居跡より古い。

〈平面形・規模〉 平面形は円形を呈する。規模は直径9.9mである。推定床面積は48.5m²である。

〈壁・床面〉 壁溝は幅10～95cm、深さ5～34cmで、北東側の半円を描く形に巡る。この中にP6～P30の支柱穴が伴い、途切れながらもほぼ規則的に配列されている。床面はほぼ平坦である。

〈柱穴〉 P1～3が主柱穴、P31～60が壁柱穴に相当すると思われる。

〈炉〉 炉は円形の石囲い炉で、床面のほぼ中央部に位置する。その規模は92×110cmで、角礫を密に埋置している。内部の焼成は良く、その焼土最大層厚は5cmである。北壁寄りの場所に現地性焼土の痕跡が認められた。

遺物（第207図、写真図版200・201）

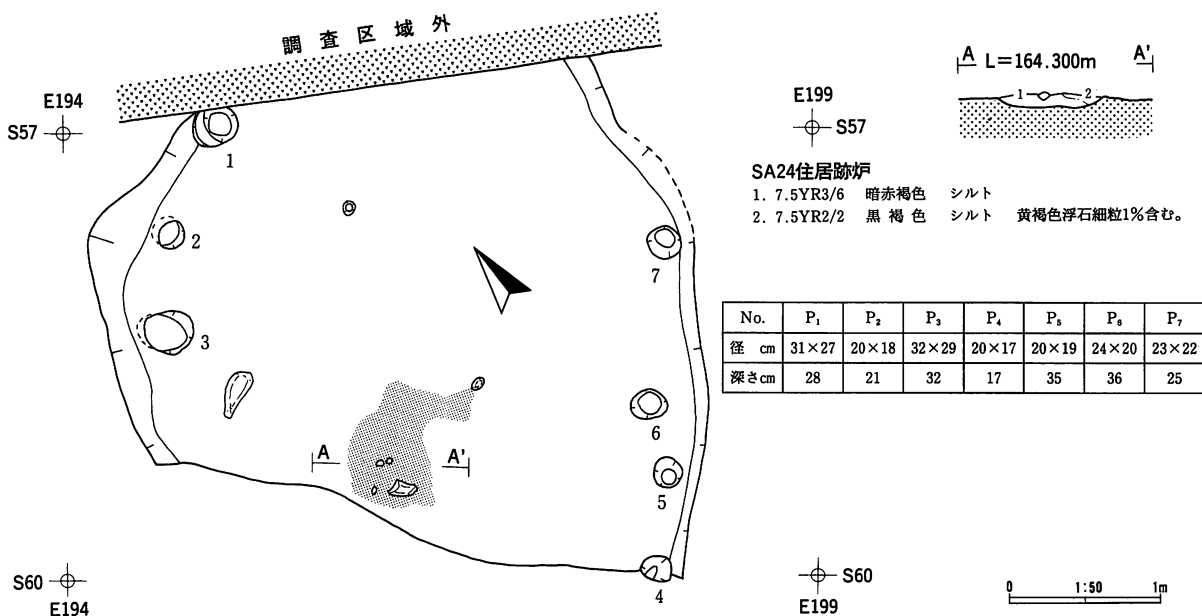
〈土器〉 367は台付浅鉢の脚部である。平行沈線で区画されその間には斜行縄文が施文されている。368は地文に横走縄文が施文された鉢である。頸部に2条の沈線が巡り、外面口縁部はミガキが調整されている。369・370は胴上半に肩部をもつ小型の無文鉢である。375～378は鉢・高坏の類である。375は高坏で整然とした変形工字文、胴部下半にはLR縄文が施文されている。377・380は高坏の台で、波状沈線文が施文されている。

〈時期〉 弥生時代前半の時期と考えられる。

SA27 住居跡

遺構（第28図、写真図版33）

〈位置〉 B調査区、SVIグリッドのほぼ中心部、SA30住居跡の南東に隣接する。



第25図 SA24住居跡

〈検出状況・重複関係〉南側半分は SA26 住居跡と SF01 溝に切られ、北東側は調査区外にはいる。検出されたのは北西壁と南東側の壁溝の一部、限られた範囲の床面と炉である。

〈平面形・規模〉平面形はほぼ円形を呈し、5.5 m 前後の規模をもつものと推測される。推定床面積は 24.0 m²である。

〈壁・床面〉床面は、SA26 住居跡のそれと 13 cm の段差をもって高くなる。この住居跡の壁高は北西壁で 4~5 cm である。南東側の壁溝は幅 9 cm、深さ 11 cm を測る。床面は平坦である。

〈柱穴〉主柱穴は P1~3 で構成されるものと思われる。

〈炉〉炉は礫 1 個を伴うもので、床面の中央部に位置する。規模は、径 50×55 cm のほぼ円形を呈するものと思われるが、南西側を SA26 住居跡の壁溝と SF01 溝に切られている。内部の焼土最大層厚は 4 cm である。

遺物（第 207 図、写真図版 202）

〈土器〉384~386 は浅鉢・高坏である。387~391 は甕である。甕は口縁部が短いものが顕著である。

〈石器〉有茎凸基の石鏃が 1 点出土している。

〈時期〉弥生時代初頭の時期と考えられる。

SA28 住居跡

遺構（第 29 図、写真図版 34）

〈位置〉B 調査区、S VII グリッドのほぼ中央部、SA29 住居跡の上面に位置する。

〈検出状況・重複関係〉北東側半分は SF01 溝によって切られている。

〈平面形・規模〉平面形は円形を呈する。規模は直径 3 m である。推定床面積は 6.3 m²である。

〈埋土〉埋土はシルト質の黒色土から黒褐色土で構成される。

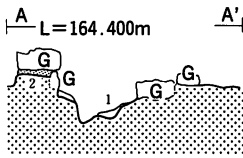
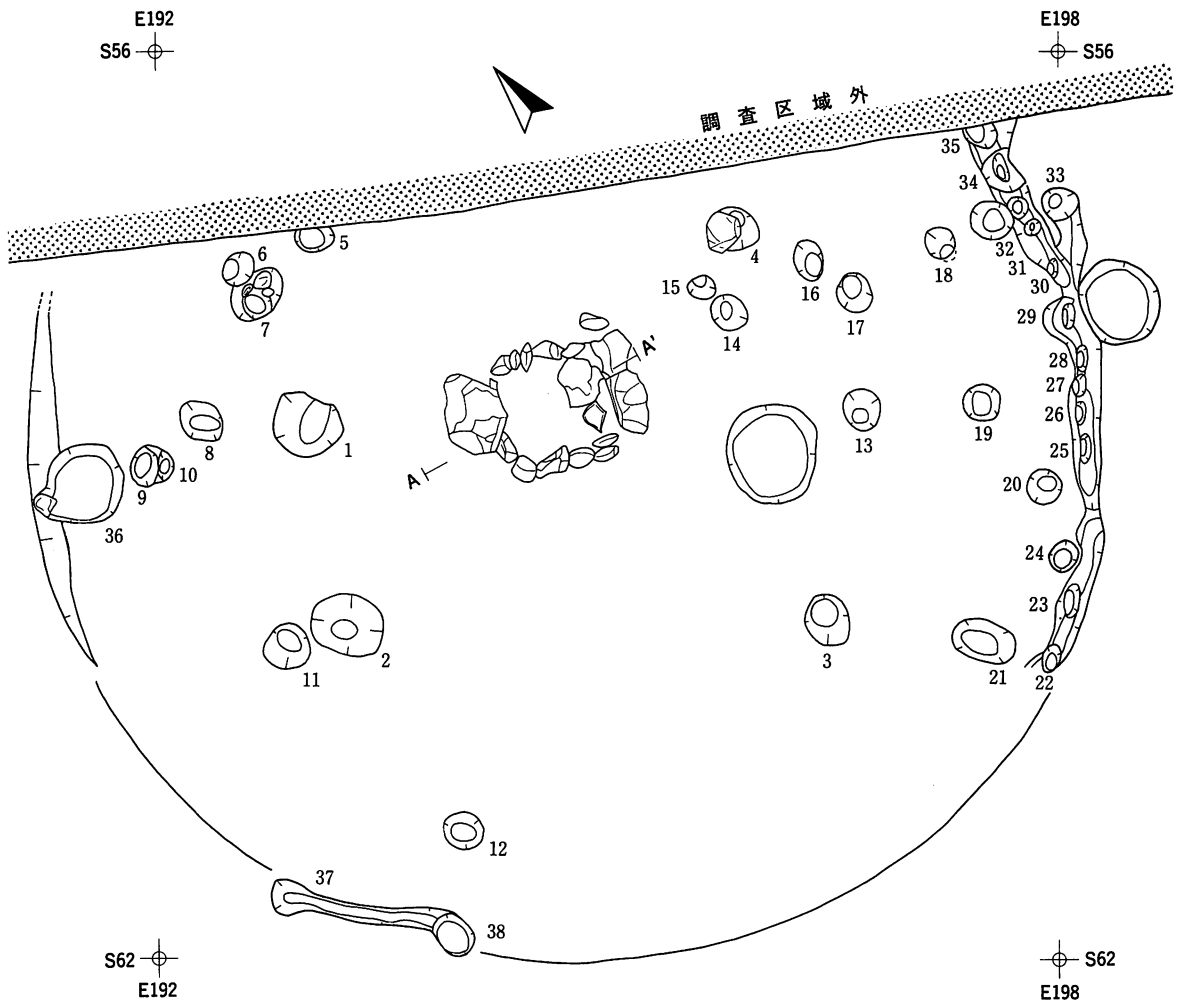
〈壁・床面〉壁は床面からゆるやかに立ち上がる。壁高は北西壁で 11 cm、南西壁で 12 cm、南壁で 26 cm である。床面は溝の底面及び SA29 住居跡の床相当面で、凹凸が認められる。

〈柱穴〉柱穴は P1~P14 がこの住居跡に伴うものと思われ、その中で P14・7・11 が主柱穴に相当すると思われる。

〈炉〉炉と明確に確定されるものはないが、床面中央部やや南東寄りに、径 30 cm の不整形に炭化物の分布が認められた。

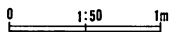
遺物（第 208 図、写真図版 202~204）

〈土器〉393 は小型の壺と思われる。頸部に 2 条の沈線が巡り胴部上半には 2 条の沈線で急角度の山形沈線が施文されている。胴部には地文として斜行縄文が施文されている。394 は小型の甕と思われる。395 は緩やかな 6 単位の波状口縁部を持つ鉢である。波頂部は山形となっており間



SA25住居跡炉

1. 7.5YR2/1 黒色シルト 炭化物・焼土含む。
2. 7.5YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒散在、堅緻。



No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	48×42	49×39	36×29	32×28	26×19	24×20	40×29	32×26
深さ cm	22	60	70	56	18	49	48	32

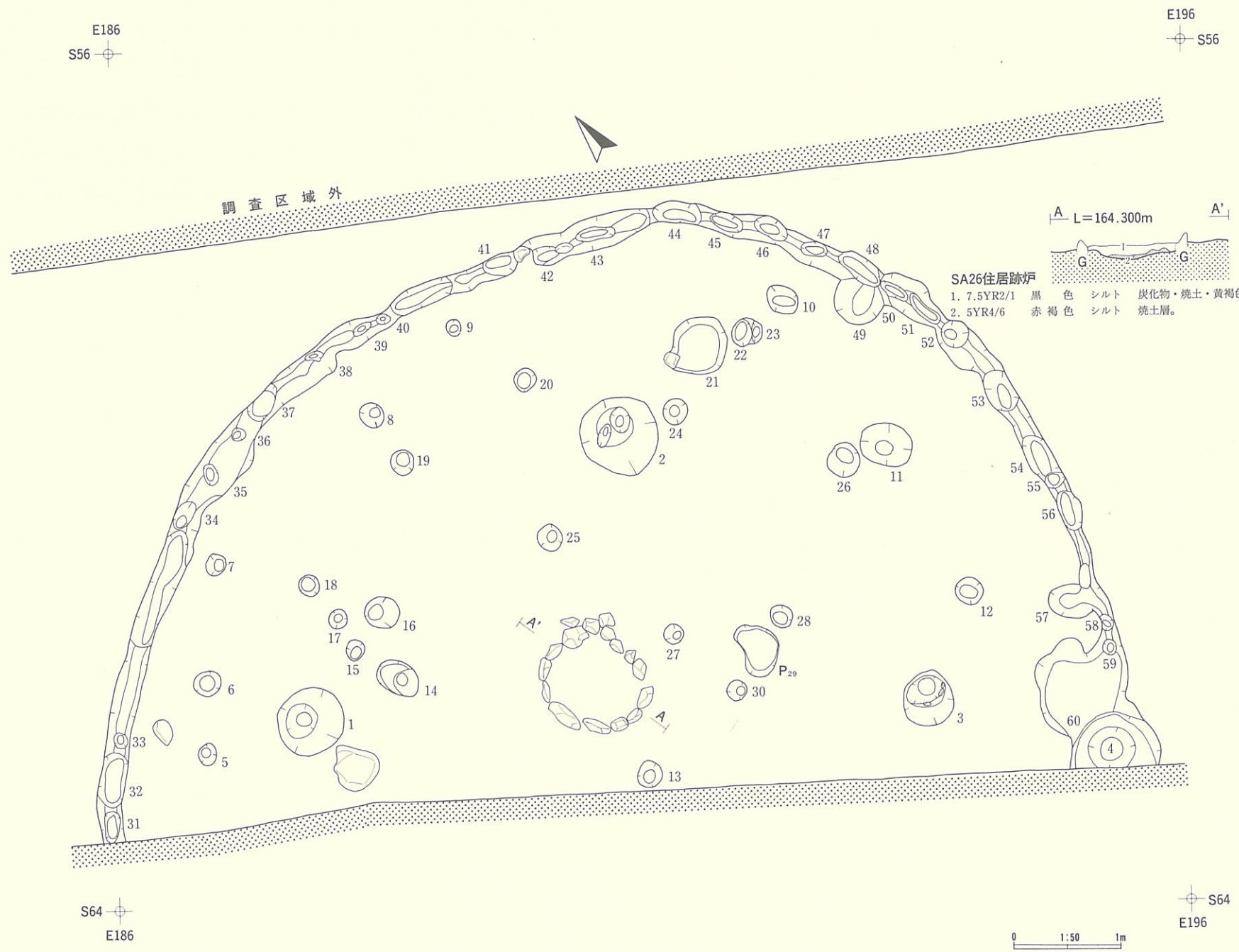
No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	28×18	20×10	31×30	28×25	28×25	26×22	19×16	27×10
深さ cm	46	24	66	21	22	30	21	55

No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径 cm	27×24	21×19	25×24	24×23	43×26	19×11	22×10	20×18
深さ cm	43	43	16	32	24	24	47	29

No.	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂
径 cm	20×8	15×8	14×9	17×7	17×8	14×7	11×11	29×25
深さ cm	37	38	30	42	43	14	26	33

No.	P ₃₃	P ₃₄	P ₃₅	P ₃₆	P ₃₇	P ₃₈
径 cm	14×14	31×29	22×20	60×54	24×24	30×22
深さ cm	25	28	15	15	17	71

第26図 SA25住居跡



No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	65×60	76×74	50×48	-×-	21×16	25×25	20×18	24×21
深さ cm	63	85	66	91	35	31	43	44

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	16×14	30×24	48×40	26×26	26×24	42×30	19×17	32×30
深さ cm	12	31	59	19	24	48	50	22

No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径 cm	19×17	20×19	23×22	24×20	58×54	26×19	20×9	34×23
深さ cm	10	41	46	5	16	46	24	25

No.	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂
径 cm	24×23	32×31	19×18	23×20	×	19×19	30×14	51×23
深さ cm	47	65	37	9	欠番	24	23	25

No.	P ₃₃	P ₃₄	P ₃₅	P ₃₆	P ₃₇	P ₃₈	P ₃₉	P ₄₀
径 cm	15×13	29×16	20×12	13×12	38×21	18×10	19×8	13×9
深さ cm	34	36	32	29	28	32	28	41

No.	P ₄₁	P ₄₂	P ₄₃	P ₄₄	P ₄₅	P ₄₆	P ₄₇	P ₄₈
径 cm	34×21	25×17	37×13	45×24	32×16	33×18	24×14	46×20
深さ cm	39	14	43	31	32	31	41	42

No.	P ₄₉	P ₅₀	P ₅₁	P ₅₂	P ₅₃	P ₅₄	P ₅₅	P ₅₆
径 cm	46×43	29×11	37×13	26×26	41×29	46×26	19×15	39×21
深さ cm	*22	22	37	45	41	38	40	41

No.	P ₅₇	P ₅₈	P ₅₉	P ₆₀
径 cm	40×34	15×14	14×13	-×-
深さ cm	14	25	37	27

第27図 SA26住居跡

に刻みがいり、その直下には小さな粘土粒の貼付が見られる。口縁部は外反し頸部に2条の沈線が巡っている。396はLR縄文が施文された甕である。口縁部は外反しており横方向のミガキ調整が見られる。397は口縁部は外反し無文帯となっている。最大径を肩部にもち縦走する縄文が見られる。398は口縁部が外反し無文帯となっている。397ほど極端ではないが最大径を肩部にもち斜行する縄文が施文されている。全体に薄手成形である。400～403は鉢・高坏である。403の鉢の変形工字文の沈線は太く、貼付される瘤も大きい。404～407は甕である。

〈石器〉有茎凸基の石鏃が3点出土している。

〈時期〉弥生時代初頭の時期と考えられる。

SA29 住居跡

遺構（第30図、写真図版34・35）

〈位置〉B調査区、SVIIグリッドの中央部、SA28住居跡の下面に位置する。

〈検出状況・重複関係〉検出段階において壁の掘り込みは認められず、炉をはさんで北西側と南東側に円状に巡る壁溝とその中に伴う支柱穴列及び主柱穴の検出によって住居跡と確認された。住居跡の北東側及び南西側は調査区外にはいる。上位にあるSA28住居跡より古い。北西側はSA30住居跡と重複するが、その新旧関係については不明である。

〈平面形・規模〉平面形はほぼ円形を呈する。規模は直径8.7mである。推定床面積は50.1m²である。

〈壁・床面〉床面は凹凸が認められ、堅くしまっている。

〈柱穴・壁溝〉壁溝は幅13～40cm、深さ14～19cmで、その中にP56～94の柱穴が規則的に配列される。主柱穴はP1～3で構成されると思われる、4本柱を基調とする配列とみられる。

〈炉〉炉は地床炉で、床面のほぼ中央部に位置する。その規模は80cm×150cmの北西から南東に長軸をもつ不整形を呈する。内部の焼成は弱い。

遺物（第209図、写真図版204）

〈土器〉411～414は鉢・高坏である。412は頸部に刻みが施されその下には変形工字文が施文されている。413は高坏で口縁部は波状で突起部分は擬宝珠状となっている。415は小型の甕である。頸部に2条の沈線が巡り、口縁部は丁寧にミガキ調整され無文となっている。胴部には縦走する縄文が施文されている。416は無文の壺である。417は蓋である。側面には5条の沈線が巡り、表面は沈線で十字を切りその中に放射状に沈線が描かれている。焼成前の4個の貫通孔が見られる。外面には赤色顔料塗布の痕跡が認められる。418・419は口縁部が直立気味の甕である。

〈時期〉弥生時代初頭の時期と考えられる。

SA30 住居跡

遺構（第31図、写真図版35・36）

〈位置〉 B調査区、RⅦグリッドのほぼ中央部に位置する。

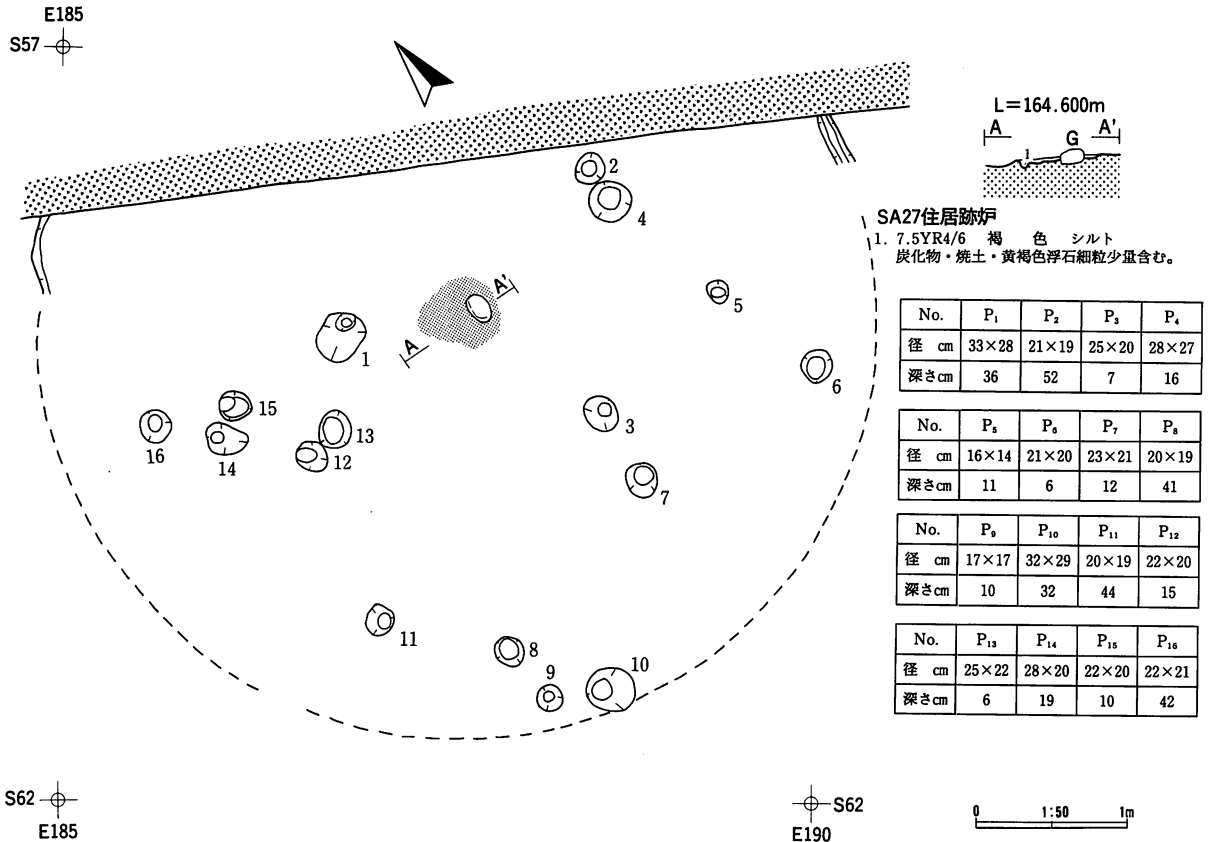
〈検出状況・重複関係〉 検出面には壁溝とそれに円形状に規則的に巡る支柱穴、主柱穴の一部及び炉が確認されたため住居跡と認定した。この検出面の壁の掘り込みは認められなかった。検出をみたのは住居跡の北東側約半分で、南西側半分は調査区外にはいる。南東側はSA29住居跡と重複しているが、両者の壁溝や支柱穴及び床面が同一面で、しかも先後関係を判断するに足りる資料に乏しく、その関係については不明である。

〈平面形・規模〉 推定で平面形はほぼ円形を呈する。規模は直径約11mと推定される。

〈壁・床面〉 床面はほぼ平坦である。

〈柱穴〉 柱穴が一部は壁溝に伴って、半円状に規則的に配列される。主柱穴はその規模、深度、支柱穴列からの位置関係から、P1・2で構成されるものと思われ、4本柱を基調とする配置と考えられる。

〈炉〉 炉は地床炉で、床面のほぼ中央部に位置する。その規模は径70cm×170cmの北西から



第28図 SA27住居跡

南東に長軸をもつ不整形をなす。炉内の焼成は弱く、焼土と炭化物が薄く分布する。

遺物 (第 209 図、写真図版 204)

〈土器〉 421～428 は縄文時代後期前葉の土器である。428 は条痕文風の施文である。

〈石器〉 基部が欠損しているが無茎凹基の石鏃が 1 点 (420) 出土している。

〈時期〉 弥生時代初頭の時期と考えられる。

SA31 住居跡

遺構 (第 32 図、写真図版 36)

〈位置〉 B 調査区、Q VII グリッドの北東側に位置する。

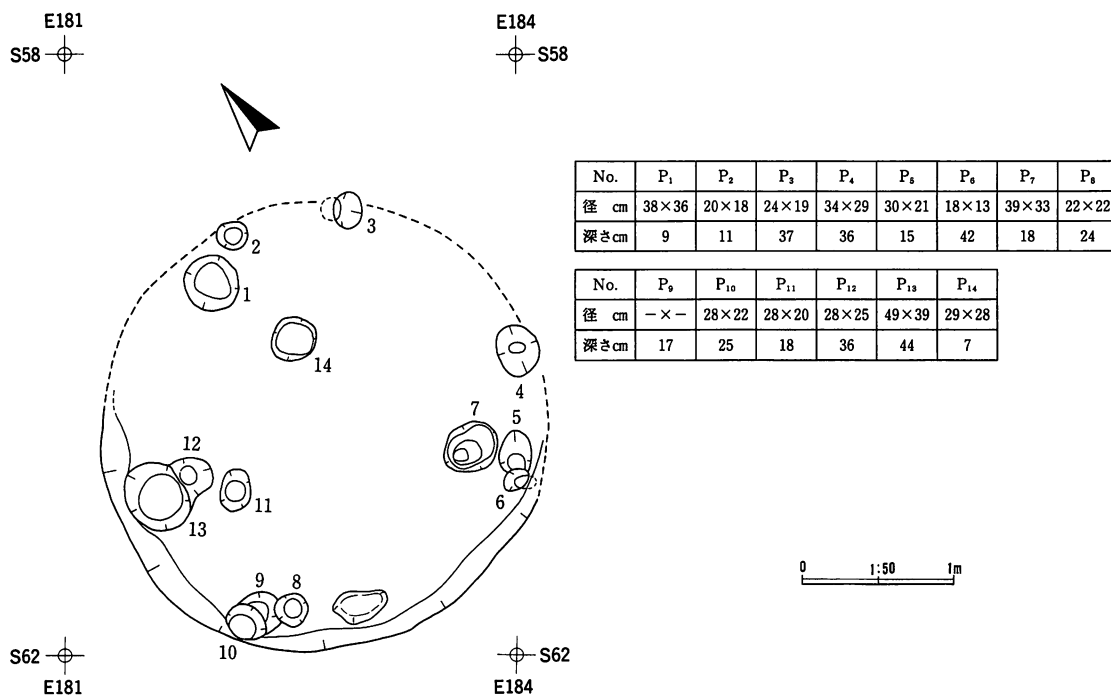
〈検出状況〉 柱穴の残存から住居跡の痕跡と認定した。2 時期程度の使用が考えられる。

〈柱穴〉 P1～19 が検出されている。P20 以外は壁柱穴に相当すると思われる。

〈炉〉 検出されなかった。

遺物 出土していない。

〈時期〉 詳細な時期については不明であるが遺構検出の段階でこの周辺から比較的多くの縄文時代後期初頭から前葉の土器が出土している。



第29図 SA28住居跡

SA32 住居跡

遺構 (第 32 図、写真図版 37・38)

〈位置〉 B 調査区、Q VII グリッドの北東側に位置する。

〈平面形・規模〉 平面形は隅丸方形を呈する。規模は開口部で直径 3.3 m×3.6 m、床面で径 2.9 m×3.4 m である。推定床面積は 6.9 m² である。

〈埋土〉 埋土は南部浮石を若干包含する、シルト質の黒色土である。

〈壁・床面〉 壁は床面よりゆるやかな傾斜をもって立ち上がる。壁高は北西壁で 10 cm、南東壁で 11 cm、南西壁で 9 cm である。床面は平坦である。北東壁際には、開口部直径 130 cm×170 cm、床面からの深さ 33 cm の規模をもつ、断面形が鉢形を呈する土坑を伴う。この土坑の埋土は住居跡の埋土と同一である。

〈柱穴〉 壁には P1～P4 の支柱穴を伴う。この 4 個の支柱穴のうち P2 と P4 はピットの中央上部にむかって傾斜して立ち、交わる在り方を示す。この住居に伴うと思われる柱穴として P5～P11 が検出されている。これらのうち支柱穴を構成すると思われるものは P5-P7-P10 で、二等辺三角形の配置となっている。

〈炉〉 炉は石囲い炉で床面のほぼ中央部に位置する。その規模は直径 60 cm のほぼ円形を呈し、小礫 3 個を焼土の縁に規則的に埋置している。礫の抜き取りの痕跡は確認されなかった。内部の焼成は弱く、焼土粒と炭化物が黒褐色土に混じっている。

遺物 (第 210～213 図、写真図版 204～207)

〈出土状況〉 床面及び埋土から多量の遺物が出土している、特に埋土上部から出土して土器の多くは住居跡の中央部から出土しており一括投棄された遺物と考えられる。

〈土器・土製品〉 429 は逆台形状の浅鉢で、口縁部から胴部状半に文様帯をもつものである。口縁部に 3 条の沈線が巡り、その下に変形工字文、その下位には縄文が施文されている。底部から口縁部まで直線的に外傾している。430 は逆台形状の浅鉢であり、全面に文様が展開しており 3 単位の変形工字文が施文されている。粘土粒は両側から盛り上げてその間をひとつきして成形している。口縁内面にも 2 条の沈線が見られる。内外面ともミガキ調整が丁寧である。底部から口縁部まで直線的に外傾している。431 は口縁部に緩やかな屈曲部をもつ浅鉢で、口縁部から胴部にかけて文様帯をもつものである。3 条の平行沈線が巡り胴部には 3 単位の変形工字文が施文される。432 は台付の浅鉢である。胴部は直線的に外傾し、頸部で屈曲し口縁部は直立している。口縁部に 3 条の沈線が巡り、その下には 3 単位の変形工字文、その下位には斜行縄文が施文される。口縁部の内面にも 1 条の沈線が巡っている。433 は逆台形状の浅鉢で、口縁部から胴部上半に文様帯をもつと思われる。434・435・436・438 は外面が丁寧に磨かれた無文の壺である。437 は鉢である。頸部に 2 条、胴部上半に 3 条の平行沈線が見られる。胴部の沈線には

E176

S57

E185

S57



SA29住居跡炉

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト 炭化物・焼土・黄褐色浮石細粒少量含む。
2. 7.5YR3/6 暗褐色 シルト 焼土。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	48×38	67×58	72×50	22×18	37×28	34×29	29×25	25×24
深さ cm	61	69	57	39	39	22	42	23

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	25×24	29×28	48×40	22×21	38×28	25×23	31×26	33×30
深さ cm	25	40	8	25	20	29	41	24

No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径 cm	30×30	23×16	32×24	28×24	46×43	71×61	75×64	47×35
深さ cm	43	30	55	29	56	49	16	48

No.	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂
径 cm	48×40	54×49	31×29	58×43	27×25	24×20	28×25	51×45
深さ cm	48	36	52	18	23	12	13	47

No.	P ₃₃	P ₃₄	P ₃₅	P ₃₆	P ₃₇	P ₃₈	P ₃₉	P ₄₀
径 cm	35×29	55×45	80×60	42×41	56×40	45×42	24×22	24×18
深さ cm	39	38	24	22	23	47	21	11

No.	P ₄₁	P ₄₂	P ₄₃	P ₄₄	P ₄₅	P ₄₆	P ₄₇	P ₄₈
径 cm	27×24	40×38	46×40	20×16	22×19	26×20	36×22	30×21
深さ cm	16	47	51	19	37	33	34	34

No.	P ₄₉	P ₅₀	P ₅₁	P ₅₂	P ₅₃	P ₅₄	P ₅₅	P ₅₆
径 cm	29×24	28×21	- × -	55×47	29×24	23×23	26×25	14×10
深さ cm	14	16	36	51	48	25	22	33

No.	P ₅₇	P ₅₈	P ₅₉	P ₆₀	P ₆₁	P ₆₂	P ₆₃	P ₆₄
径 cm	13×11	12×11	16×12	18×13	10×8	14×13	16×11	26×23
深さ cm	34	30	24	27	21	34	33	44

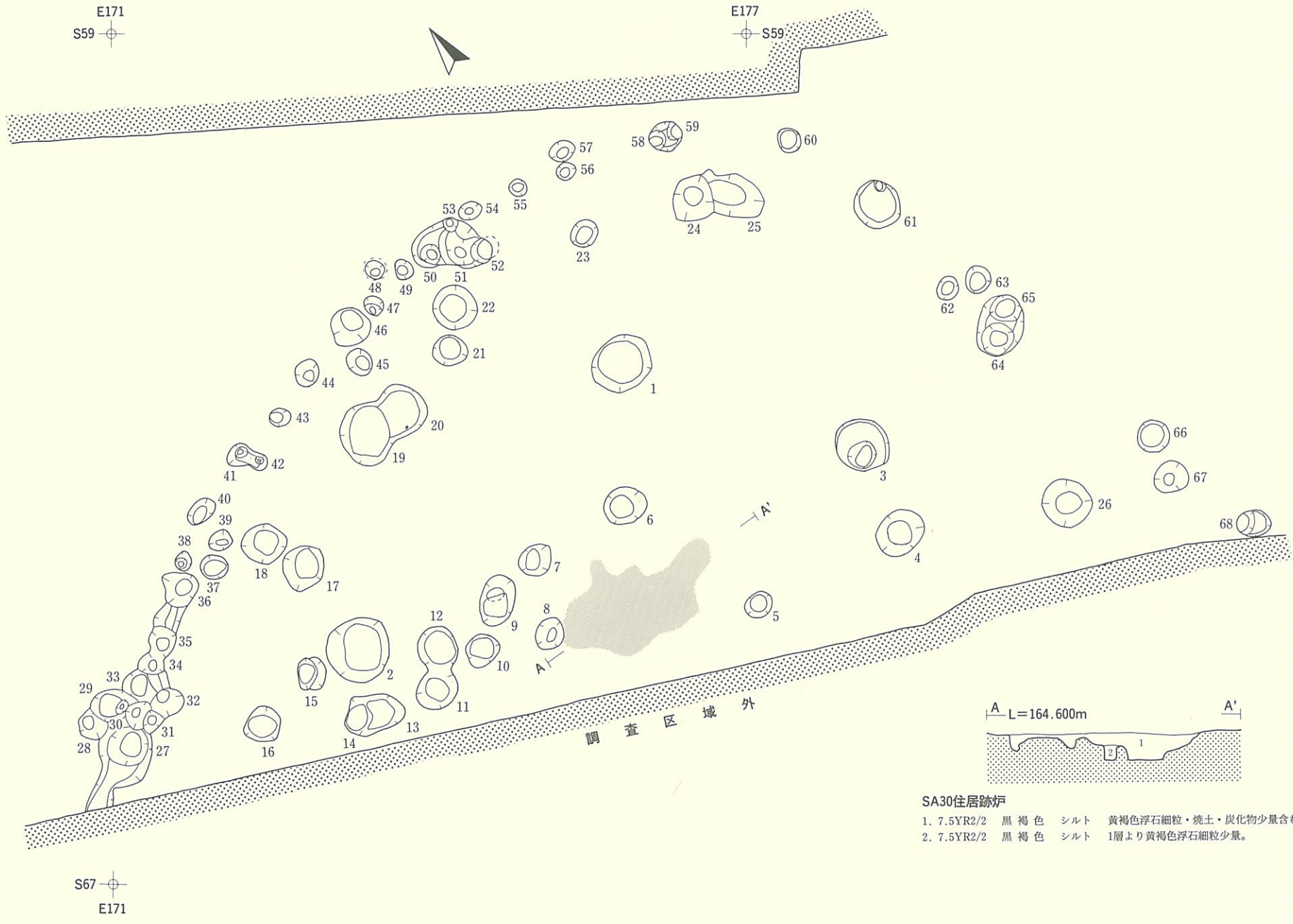
No.	P ₆₅	P ₆₆	P ₆₇	P ₆₈	P ₆₉	P ₇₀	P ₇₁	P ₇₂
径 cm	34×20	14×14	12×11	17×16	24×18	18×15	24×15	10×10
深さ cm	22	21	30	33	31	33	24	24

No.	P ₇₃	P ₇₄	P ₇₅	P ₇₆	P ₇₇	P ₇₈	P ₇₉	P ₈₀
径 cm	15×12	12×8	16×12	27×18	- × -	35×27	29×18	18×17
深さ cm	25	25	29	23	36	63	19	47

No.	P ₈₁	P ₈₂	P ₈₃	P ₈₄	P ₈₅	P ₈₆	P ₈₇	P ₈₈
径 cm	36×24	26×15	11×10	28×22	12×10	12×12	17×15	20×13
深さ cm	40	37	31	15	23	21	35	43

No.	P ₈₉	P ₉₀	P ₉₁	P ₉₂	P ₉₃	P ₉₄
径 cm	15×12	24×19	44×40	11×8	11×9	10×6
深さ cm	37	39	42	28	31	31

第30図 SA29住居跡



No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	60×49	61×60	54×48	48×38	17×13	40×34	34×29	30×26
深さ cm	41	15	36	48	8	30	39	17

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	49×32	33×28	40×38	40×38	44×34	33×28	30×26	34×32
深さ cm	50	32	32	36	22	44	56	21

No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径 cm	40×40	42×38	58×52	55×48	33×28	42×42	27×23	42×38
深さ cm	34	52	45	11	9	28	13	42

No.	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂
径 cm	65×40	46×44	37×37	28×28	38×30	25×25	20×19	32×25
深さ cm	24	56	50	33	27	31	13	46

No.	P ₃₃	P ₃₄	P ₃₅	P ₃₆	P ₃₇	P ₃₈	P ₃₉	P ₄₀
径 cm	32×27	24×24	28×26	37×34	26×23	18×15	22×19	30×19
深さ cm	12	46	22	23	17	41	20	16

No.	P ₄₁	P ₄₂	P ₄₃	P ₄₄	P ₄₅	P ₄₆	P ₄₇	P ₄₈
径 cm	12×10	8×6	20×18	27×23	26×23	38×37	20×17	18×16
深さ cm	43	24	18	16	22	43	18	29

No.	P ₄₉	P ₅₀	P ₅₁	P ₅₂	P ₅₃	P ₅₄	P ₅₅	P ₅₆
径 cm	20×17	20×18	—	25×24	16×14	23×17	17×16	18×17
深さ cm	16	24	29	53	39	12	9	11

No.	P ₅₇	P ₅₈	P ₅₉	P ₆₀	P ₆₁	P ₆₂	P ₆₃	P ₆₄
径 cm	23×20	18×16	18×16	24×21	45×44	23×20	26×24	30×29
深さ cm	40	26	24	21	47	12	13	52

No.	P ₆₅	P ₆₆	P ₆₇	P ₆₈
径 cm	28×26	30×30	33×29	32×25
深さ cm	23	43	24	39

SA30住居跡炉

- 7.5YR2/2 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒・焼土・炭化物少量含む。
- 7.5YR2/2 黒褐色 シルト 1層より黄褐色浮石細粒少量。

第31図 SA30住居跡

4 単位の縦長の瘤が貼付されている。地文として斜行縄文が施文される。439 は最大径を肩部に持つ甕である。440 は甕である。単位は不明であるが口縁部には中央に刻みをもつ低い山形突起が付されている。頸部は無文で丁寧にミガキがかけられている。胴部の地文は LR 斜行縄文である。441 は LR 縄文が全面に施文された甕である。全体に薄手のつくりである。442 は小波状縁の小型の甕である。地文として LR 縄文が施文されており、内面に靱痕と思われるものが観察される。443 は小波状縁の甕である。頸部は縄文施文後に丁寧にミガキがかけられている。444 は最大径を肩部に持つ横走る縄文が施文された甕である。445・446 は回転方向を変化させて縄文が施文されている。447 は横走る縄文が施文されている。448～457 鉢・高坏の類である。456・457 は波状沈線文が施文された台部である。458～462・464～468 は甕である。463 は胴部最大径部に 1 条の沈線が巡る胴張りの無文壺である。469 は中実土偶の胸腹部である。腹面には臍を境に胸部には 2 本 1 組の沈線が左右に各 3 組、臍の下には縄文が施文され、背面には肩胛骨を結ぶように平行沈線が施文される。470 は中実土偶の脚部である。足首に相当する部分に 1 条の沈線が巡り他は縄文が施文されている。

〈石器〉 縦型石匙 1 点、不定形石器 4 点、凹石 1 点が出土している。

〈時期〉 弥生時代初頭の時期と考えられる。

SA33 住居跡状遺構

遺構（第 33 図、写真図版 38・39）

〈位置〉 B 調査区、OVII グリッドの西側に位置する。

〈検出状況・重複関係〉 南東壁は果樹作付けによって攪乱を受けている。

〈平面形・規模〉 平面形は略円形を呈する。規模は開口部で直径 3.4 m×3.5 m である。推定床面積は 7.0 m² である。

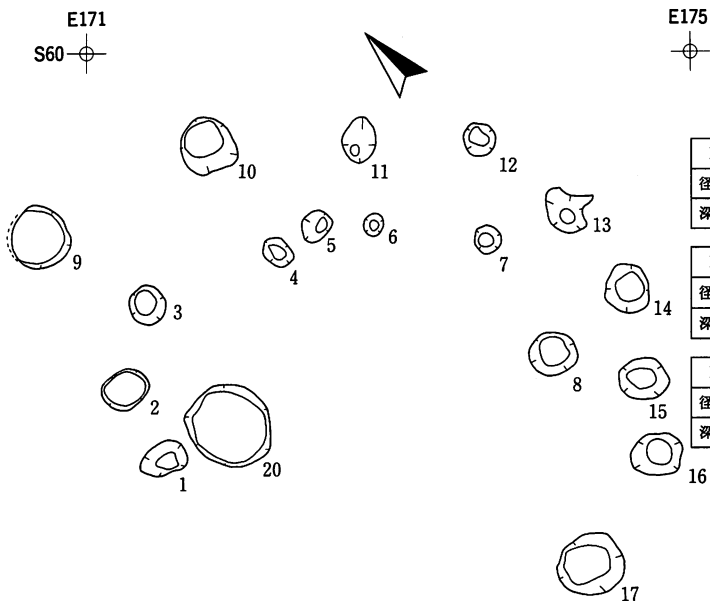
〈埋土〉 埋土は、シルト質の黒色土である。

〈壁・床面〉 壁は底面からゆるやかな斜面をもって立ち上がる。壁高は北壁で 26 cm、南壁で 24 cm、東壁で 20 cm、西壁で 25 cm である。床面は平坦でやわらかく、北東壁から南西壁にむかって傾斜している。

〈柱穴〉 柱穴は壁に沿って P1～P4 が、壁よりに P6～P8 が検出されているが、配置構成上不規則である。

〈炉〉 炉は明確に確認できるものはないが、床面中央部の小礫を中心とする直径約 40 cm のほぼ円形の範囲に、にぶい褐色の変色土が認められた。また壁際に、床面より約 10 cm に盛り上がった粘質土の上に焼土が検出されている。

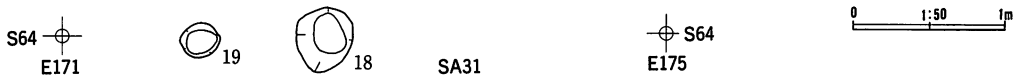
遺物（第 214 図、写真図版 207・208）



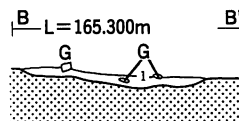
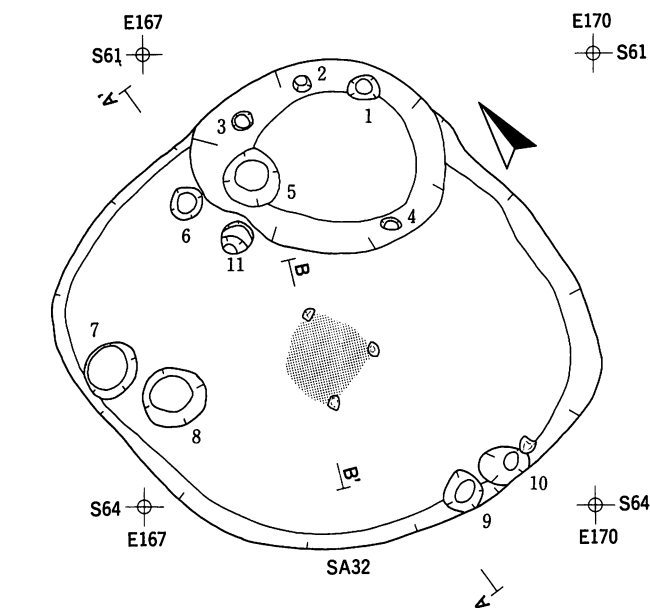
No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	32×21	30×26	26×24	20×17	22×18	15×13	18×18	32×28
深さ cm	17	24	22	8	15	19	14	9

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	42×40	38×38	30×22	21×21	34×23	32×29	33×28	34×28
深さ cm	35	35	20	13	30	21	53	23

No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀
径 cm	44×40	44×38	26×23	60×53
深さ cm	51	37	18	37



第31図 SA30住居跡



SA32住居跡炉

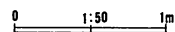
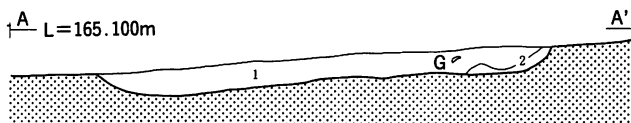
- 7.5YR1.7/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒2%含む。
- 7.5YR2/2 黒褐色 シルト

SA32住居跡埋土断面

- 7.5YR2/2 黒褐色 シルト 焼土・炭化物を含む。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	22×16	12×11	14×12	14×8	38×37	22×20	39×33	42×40
深さ cm	51	51	51	32	56	12	46	43

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
径 cm	28×26	32×26	22×21
深さ cm	29	43	18



第32図 SA31・32住居跡

〈土器・土製品〉477は口縁部が外反する甕である頸部は無文、口縁部と胴部にはLR縄文、口縁部内面にもLR縄文が施文されている。477～479・482・483は弥生時代中頃の土器である。480・481・484～490は縄文時代後期前葉の土器である。491は完形品の土冠である。男根状の突起物があり根本の部分には対称的な渦巻沈線文が施文されている。全体にミガキが丁寧であるが、特に文様が施文されている反対側の湾曲した部分が入念である。胎土は緻密で色調は橙色である。

〈時期〉弥生時代の土器も出土しているが、検出面や埋土の状況から縄文時代晩期の時期と考えられる。

SA34 住居跡状遺構

遺構（第34図、写真図版40）

〈位置〉B調査区OⅦグリッドの北東側、SA33住居跡の東側約2mに位置する。

〈検出状況・重複関係〉大半は調査区外にはいる。検出をみたのは南西壁及び床面の一部である。

〈平面形・規模〉規模・平面形は壁の形状から推定して、開口部の直径約3.6mの円形を呈するものと思われる。推定床面積は6.1m²である。

〈埋土〉埋土はシルト質の黒色土である。

〈壁・床面〉壁は床面からゆるやかな傾斜をもって立ち上がる。壁高は南西壁で16cmである。床面は平坦で軟らかい。

〈柱穴〉検出されていない。

〈炉〉検出されていない。

遺物（第215図、写真図版208）

〈土器〉縄文時代前期後半(492)、後期前葉(493・494)、晩期中葉(495)、弥生中葉(497)の時代の土器が出土している。

〈時期〉縄文時代前期前半と思われる。

SA35 住居跡

遺構（第35図、写真図版40・41）

〈位置〉B調査区、KⅦグリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SD076土坑より新しく、SD072土坑より古く位置づけられる。住居跡の5分の1ほどが調査区外に延びており全貌は把握できなかった。

〈平面形・規模〉規模・平面形は残存部の形状から推定して、開口部の長軸5.12m×4.64mの規模を持つ略円形を呈するものと思われる。推定床面積は15.4m²である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色のシルト質土を主体に構成されている。

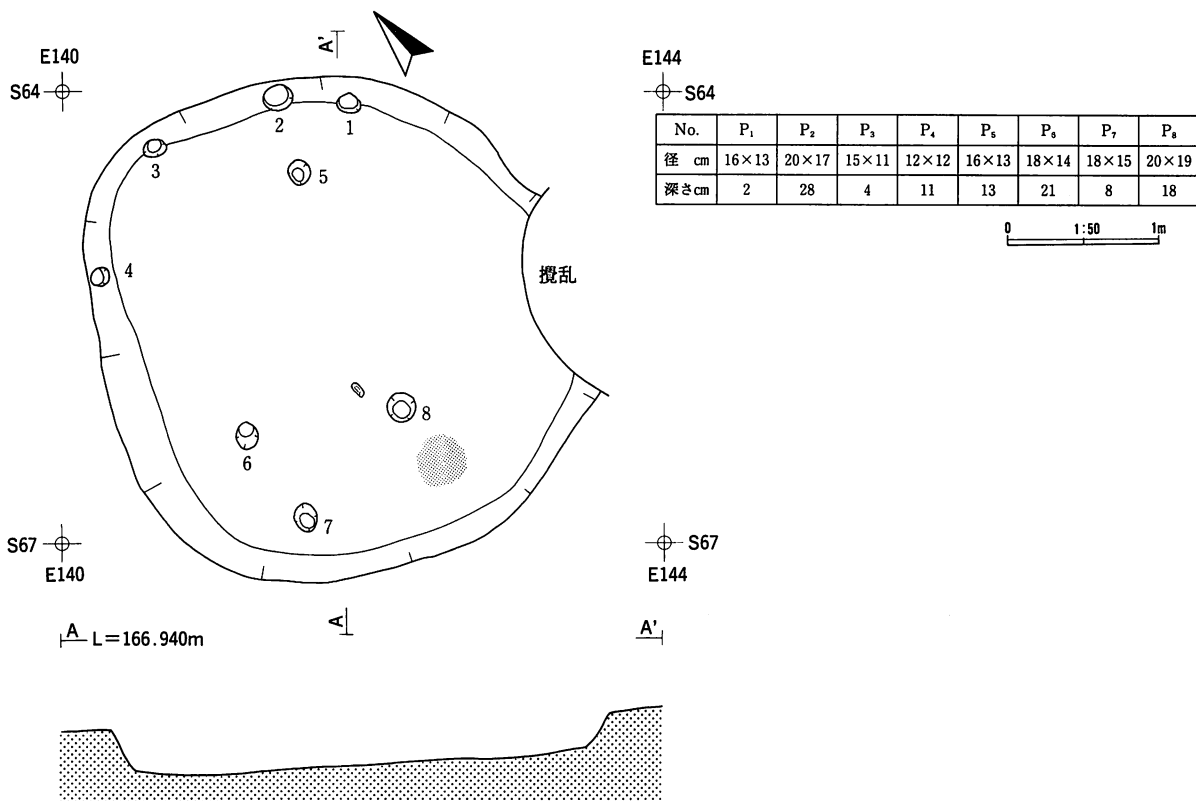
〈壁・床面〉 壁は外傾気味に立ち上がり、壁の残存値は東壁で 36 cm・西壁 43 cm・北壁で 48 cm である。

〈柱穴〉 柱穴に相当するものは 10 個検出されており、P1～P4 は主柱穴、P5～P8 は壁柱穴、P9・P10 は補助的な機能を持つ柱穴と考えられる。

〈炉〉 炉は中央部からやや東側に寄った所に設けられており、80 cm×70 cm・厚さ十数 cm の規模を持つ地床炉である。焼土の最上部に若干の灰が残存していた。

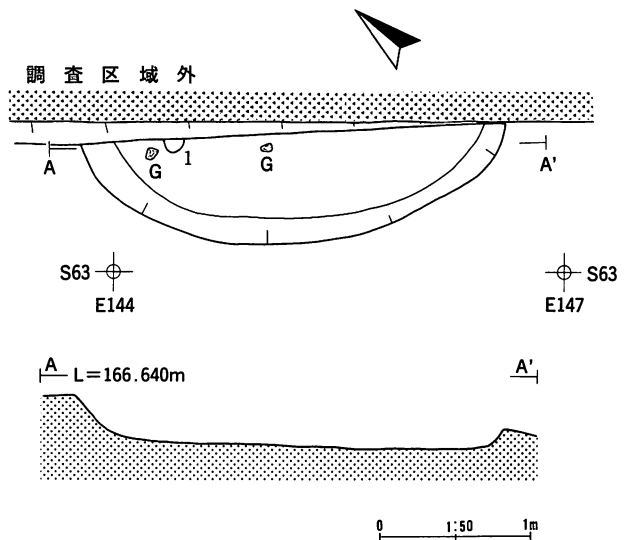
遺物 (第 215～219 図、写真図版 208～211)

〈土器・土製品〉 498 は胴部に屈曲部をもつ深鉢である。平口縁で内外面に刻みのある山形突起が付される。口縁部は屈曲部分から内湾し口唇部は肥厚している。胴部下半は不明であるが口縁部裝飾帯は縄文帯、頸部文様帯は無文帯、胴部文様帯には平行縄文帯と無文帯が交互に展開している。499 は胴部に屈曲部をもつ深鉢である。平口縁で口唇部には内外面に刻みのある角状の突起と 2 個 1 対の低い突起が付され、突起が付された外面直下には瘤が貼付されている。頸部文様帯には押しつぶされた曲線状の縄文帯が展開している。屈曲部分には平行する縄文帯が巡り、胴部文様帯にも曲線状の縄文帯が展開している。501 は平口縁の内面に刻みを持つ大小の



第33図 SA33住居跡

突起が付された深鉢である。口縁部裝飾帯は縄文帯、頸部文様帯は無文帯、胴部文様帯には平行する無文帯と縄文帯が展開している。500・502・503 は深鉢の下半部である。500・502 は入り組み状の曲線状文が展開しており、503 は屈曲部から下位の胴部全面に縄文が施文されている。504 は平口縁の壺である。口縁部裝飾帯には2条の沈線と縄文帯が巡り、頸部文様帯には入り組み状の曲線状文が展開している。505 は頸部に膨らみを持つ壺である。頸部は無文、膨らみを持つ部分には相対する4単位の弧状文が施文され交差する部分には瘤が貼付されている。胴にはタスキ掛け状入組文、交差部分には交互に瘤と懸垂孔が付される。土器の内部には約一匹分のへび目の骨が収納されていた。506 は二波状の壺である。波頂部には角状の突起が付され口縁部裝飾帯は縄文帯、頸部文様帯には押しつぶされたような曲線状文、胴部には2段の入り組み状の帯状文が展開している。胴部と頸部の境には貼瘤を中心に連結状の縄文帯が巡っている。507 は平口縁の壺である。口縁部裝飾帯は縄文帯、頸部文様帯は無文帯、胴部には全面に斜行縄文が施文されている。508 は低い山形の突起の付く小型の注口である。頸部には6条の平行沈線文、胴部下半には5条の平行沈線が巡り、胴部には相対する3条1組の弧状文が施文されている。弧状文の結節部には刻みのある瘤、注口部と反対側の部分には懸垂孔が付されている。509 は香炉の頂部である。瘤が貼付され瘤を起点として多条沈線が施文されている。511 は口縁部に低い突起が付された平口縁の注口である。口縁部裝飾帯は瘤が添付された縄文帯、頸部文様帯は無文帯、頸部と胴部の境には瘤の付された縄文帯が展開している。胴部には曲線状の縄文帯が施文されている。512 はLR縄文が施文された平口縁の鉢である。口唇部は肥厚し外端が内側に突き出ている。513 はLR縄文が施文された平口縁の深鉢である。口縁部は内湾し口唇部は若干肥厚している。514 はRL縄文が施文された平口縁の深鉢である。口縁部は内湾し口唇部は若干肥厚している。515 はLR縄文が施文された平口縁の深鉢である。口縁部は内湾し口唇部は若干肥厚している。514・515の内面は砂粒の動きが明瞭なほど粗い削り様の調整痕が認められる。516 は口縁部裝飾帯に刻みをもち瘤が貼付された波状口縁の深鉢である。517 は口縁部裝飾帯が縄文帯で波頂部に突起とその下に瘤をもつ深鉢である。518 は口縁部外端と頸部に刻みのある壺である。529 は口縁部裝飾帯が縄文帯で口唇部には内側に面した瘤が貼付されている。520 は土偶の右脚部である。中実で断続的な平行沈線が施



第34図 SA34住居跡

文されている。521 は中実土偶の脚部で、膝頭の部分に相当する。522 はスタンプ形土製品である。つまみ部分が欠損しており、印面には沈線でタスキ掛け状入組文が施文されている。523 は完形のスタンプ形土製品である。つまみ部の境に1 状の沈線が巡り、印面に右巻きの渦巻沈線文が見られる。526 は土製円盤である。表面に相当する文様施文部分が大きく打ちかかっている。

〈石器・石製品〉石鏃1 点、不定形石器1 点、磨製石斧2 点、凹石1 点、磨石2 点が出土している。

〈時期〉縄文時代後期後半田柄貝塚第IV群の時期に相当すると思われる。

SA36 住居跡

遺構（第36 図、写真図版41・42）

〈位置〉B調査区、K VIIグリッドに位置する。

〈検出状況〉大半が調査区外にわたっており、全体については不明である。

〈平面形・規模〉規模・平面形は残存部の形状から推定して、開口部の直径5 m ほどの規模を持つ略円形を呈するものと思われる。推定床面積は20.2 m²である。

〈埋土〉埋土はしまりのない黒色～黒褐色のシルト質土で構成されている。一部導水管の敷設溝によって攪乱を受けている。

〈壁・床面〉壁は外傾気味に立ち上がっており、残存値は西壁17 cm・南壁7 cm・東壁10 cm である。八戸ロームを床面としており、平坦である。

〈柱穴〉4 個検出されており、一般に浅い。

〈炉〉ほぼ中央部に位置しており、平面形が略円形の地床炉である。

遺物（第219 図、写真図版211・212）

〈出土状況〉床面及び埋土下部から出土している。

〈土器〉535 は上半が欠損した壺である。胴部最大径部分に1 条の沈線が巡り上半には羽状縄文、下半には長方形の縄文帯を中心に3 単位の凹字状の縄文帯が展開している。底部付近にも縄文帯が巡り底部は丸底風である。536 は口唇部付近に刻みのある深鉢である。537・538・540 は粗製の深鉢である。胴部に斜格子状の沈線文が施文された深鉢で縄文後期前葉の土器と思われる。

〈石器〉石鏃1 点、石錐1 点、ノッチ部分のある偏平な凹石1 点が出土している。

〈時期〉縄文時代後期後半田柄貝塚第IV群期に相当する時期と考えられる。

SA37 住居跡状遺構

遺構（第37 図、写真図版42）

〈位置〉B調査区、J VIIグリッドの東側に位置している。

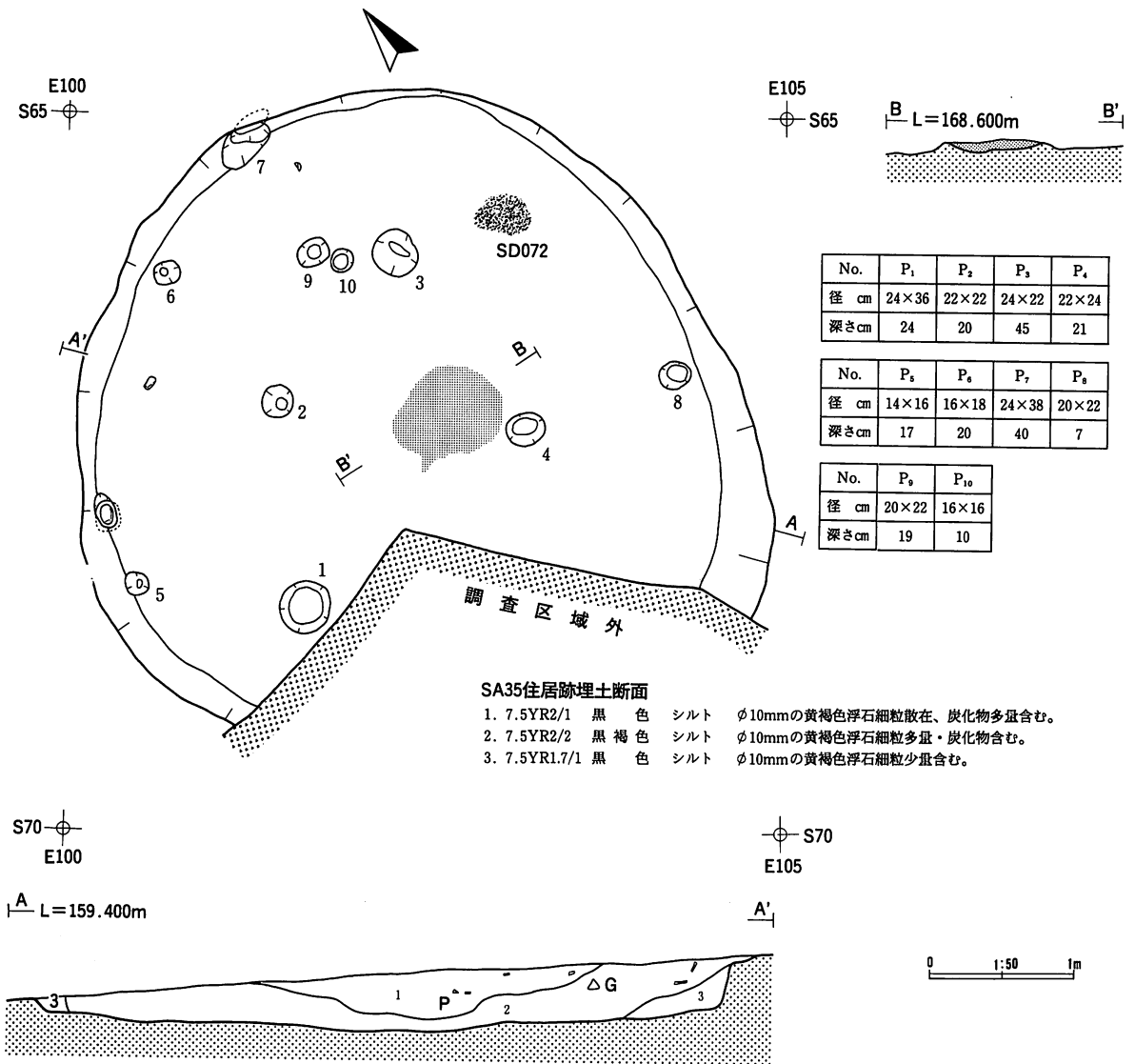
〈検出状況・重複関係〉 南部浮石層の直上で検出した。

〈平面形・規模〉 平面形は隅丸長方形、規模は長軸方向で2.7m・短軸方向で2.1mである。
推定床面積は3.9m²である。

〈埋土〉 埋土は単層で、黄褐色浮石細粒を多量に含むしまりのないシルト質の黒色土である。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味に立ち上がり、北東壁36cm・南東壁29cm・北西壁45cm・南西壁28cmの残存値である。八戸ロームを床面としており、南東側がやや高くなっているが全体に平坦である。

〈柱穴〉 検出されなかった。



第35図 SA35住居跡

〈炉〉 検出されなかった。

遺物 (第 220 図、写真図版 212)

〈土器・土製品〉 544 は円筒形の深鉢である。捺糸文が施文された隆帯と沈線で区画され、幅の広い口縁部文様帯には不整綾線文、胴部には縦走する捺糸文、底部付近には横走する捺糸文が施文されている。545・546 は底部付近で縦走する捺糸文が施文されている。547 は組み紐の回転文、548 は隆帯で区画され口縁部・胴部には LR 縄文が施文されている。549～551 は焼成粘土である。特に繊維の混入などは認められない。

〈時期〉 埋土の状況、土器などから縄文時代前期前半頃の時期と考えられる。

SA38 住居跡

遺構 (第 38 図、写真図版 42・43)

〈位置〉 B 調査区、J VII グリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA52 住居跡・SD073 土坑と重複しており、いずれの遺構より古く位置づけられる。

〈平面形・規模〉 南側の壁が失われ全貌については不明であるが、4.2 m×3.8 m の規模の楕円形を呈する住居跡と思われる。推定床面積は 12.9 m²である。

〈埋土〉埋土は、黄褐色浮石細粒を多量に含む軟らかいシルト質の赤黒色土で構成されている。

〈壁・床面〉 壁高は、北壁 14 cm・東壁 5 cm・西壁 13 cm である。床面は水平であるが軟らかい。

〈柱穴〉 P1～P3・P5・P6 が主柱穴、それ以外の柱穴は支柱穴や間仕切りに相当する。

〈炉〉 ほぼ中央部に位置しており地床炉である。

遺物 (第 220～222 図、写真図版 212・213)

〈土器・土製品〉 553 は胴部に屈曲部を持つ深鉢である。屈曲部に 1 条の刻目帯が巡り、胴部には 3 単位の鍵状の帯状文が展開している。頸部文様帯については不明である。554 は 0 段多条の LR 縄文が施文された鉢である。底部は広く、口縁部まで直線的に外傾している。555 は 0 段多条の RL 縄文が施文された深鉢で、口唇部付近はやや肥厚している。556・557 は口縁部外端に刻みのある深鉢である。埋土からは 559～563 のような縄文前期前半期の土器も出土している。559 は組紐により施文されたものと思われる。焼成粘土が 1 点 (552) 出土している。

〈石器〉 石鏃 4 点、正方形の両面加工の石器、石棒などが出土している。

〈時期〉 縄文時代後期田柄貝塚第 IV 群に相当する時期と思われる。

SA39 住居跡状遺構

遺構 (第 39 図、写真図版 43・44)

〈位置〉 B 調査区、I VII グリッドの中央部に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 晩期中葉の遺物を多量に含む包含層を構築面としている。II 層中を掘り込み面としている。

〈平面形・規模〉 平面形は隅丸方形、規模は長軸方向で 5.2 m・短軸方向 5.0 m である。炉は確認されなかったが、壁が明瞭に認められることから住居跡状遺構として扱うことにした。推定床面積は 18.9 m² である。

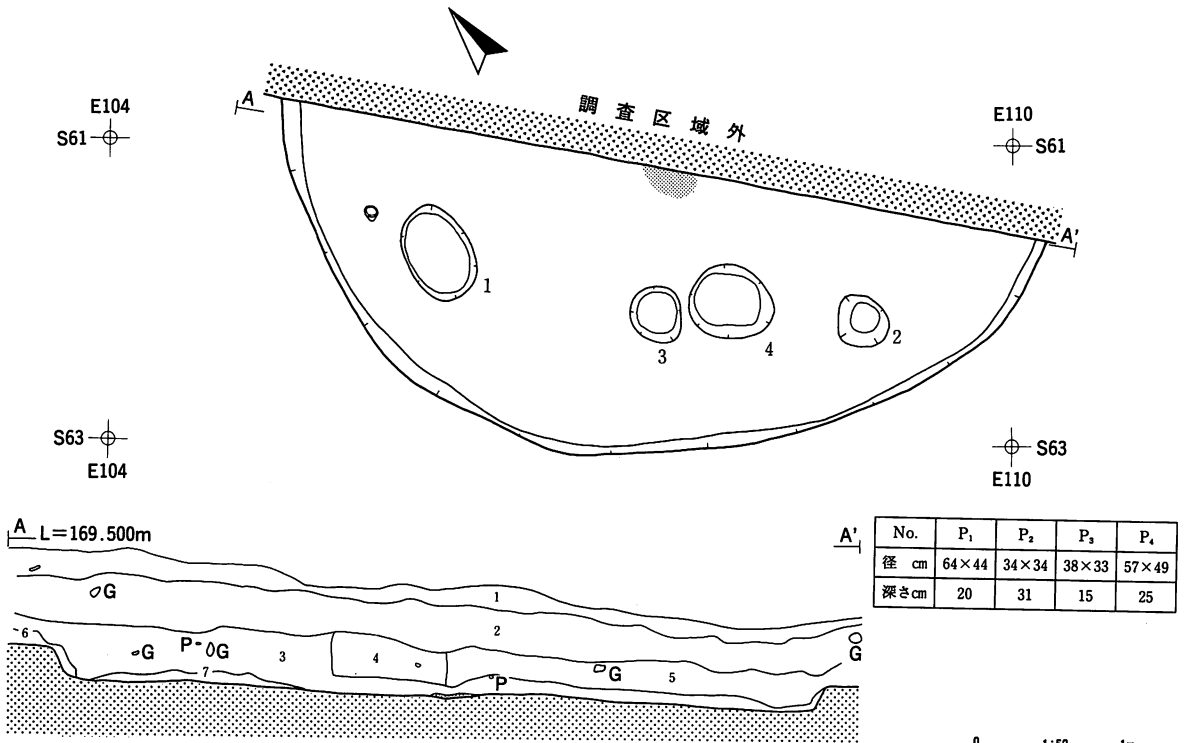
〈埋土〉 壁は外傾気味に立ち上がり、壁高は東壁 50 cm・北壁 56 cm・西壁 55 cm・南壁 47 cm である。

〈壁・床面〉 埋土は風化した黄褐色浮石が主体で、焼土や大量の遺物が混入している。

〈柱穴〉 P1~15 が検出されているが柱穴配置については不明である。

〈炉〉 検出されなかった。

遺物 (第 222~228 図、写真図版 213~218)



SA36住居跡埋土断面

- | | | | | | |
|------------------|-----|--------------------------|----------------|-----|-----------------------|
| 1. 7.5YR2/3 極暗褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒少量含む。 | 5. 7.5YR2/1 黒色 | シルト | 上部にφ2~12mmの黄褐色浮石細粒含む。 |
| 2. 7.5YR3/3 暗褐色 | シルト | φ3~8cmの礫・φ5mmの黄褐色浮石細粒含む。 | 6. 7.5YR2/1 黒色 | シルト | 粘性しまりともなし、黄褐色浮石細粒含む。 |
| 3. 7.5YR2/1 黒色 | シルト | 上部にφ2~5mmの黄褐色浮石細粒含む。 | 7. 7.5YR3/1 黒色 | シルト | 粘性しまりともなし、黄褐色浮石細粒含む。 |
| 4. 7.5YR2/2 黒色 | シルト | 少量の黄褐色浮石細粒・焼土含む(攪乱)。 | | | |

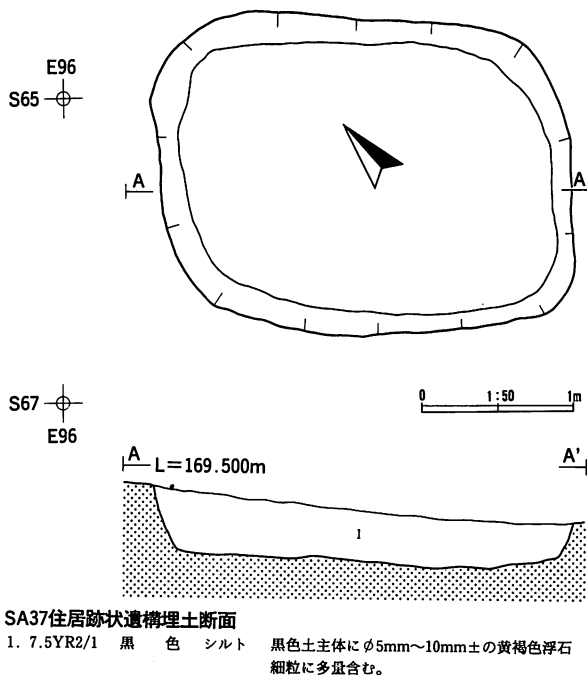
第36図 SA36住居跡

〈出土状況〉埋土上部に遺物が大量に廃棄されていた。その遺物の一部についてはB調査区遺物包含層（I VIIグリッド）にふくめて記述している。

〈土器・土製品〉588～590は縄文時代前期前半の土器群で、588は地文として斜行縄文が施文され口縁部には3条の沈線が巡っている。口縁部内面にも斜行縄文の施文が見られる。589は地文として結束第2種の縄文が施文されている。590は沈線と隆帯により区画された円筒形の深鉢である。幅広の口縁部文様帯には不整綾線文、胴部には斜行する複節縄文？が施文されている。口唇部には絡条体の押捺が見られる。591・993・594は縄文時代後期後半に相当する土器である。592・595～601は縄文時

代晩期前葉の土器群である。文様要素として入組三叉文、剣菱状文がみられる。602～618は晩期中葉後半頃の土器である。文様要素として、口縁部外端の斜位刻み・平行沈線・列点文・工字文などが見られる。619・620は変形工字文施文された縄文時代晩期終末から弥生時代初頭の土器である。621～624はミニチュアの土器である。625は香炉の頂部である。縦の貫通孔が見られる。626は中空土偶の腹部と思われる。正中線は若干盛り上がり上には縦長の刺突が見られる。全体の文様展開は不明であるが三角形の彫去がみられる。精選されたきめのこまい胎土が使用されている。627は中空土偶の頭部である。眼・口の部分は盛り上がり縄文が施文されている。全体に入念にミガキがかけられている。628は板状の土偶である。右腕部が欠損している。顔面の各部位は沈線で表出されている。表裏面に身体の各部位に沿うように刺突文が見られる。629は中空の遮光器土偶の腕である。630は土偶の左顔面部である。眼は隆帯で表現され、側面部・後頭部には沈線文が施文されている。635・636は土版、637は土玉、638は耳飾りである。639は種別不明の土製品で、約半分ほど残存しているものである。丁寧にみがかれ、穿孔部がある。640・641は貫通孔のある不明土製品である。642は通常の土器底部とも考え難く不明土製品としておく。太い沈線が2条見られる。643～649は土製円盤、650～653は焼成粘土である。

〈石器・石製品〉石鏃5点、石錐2点、横型石匙1点、縦型石匙1点、不定形石器2点、石斧



第37図 SA37住居跡状遺構

2点、凹石1点、円盤状石製品1点、石剣2点、環状石製品1点が出土している。585は菱形の環状石製品である。長軸方向の両端部には穿孔がみられ、表面はよく研磨されている。

〈時期〉縄文時代晩期中葉頃の時期と考えられる。

SA41 住居跡

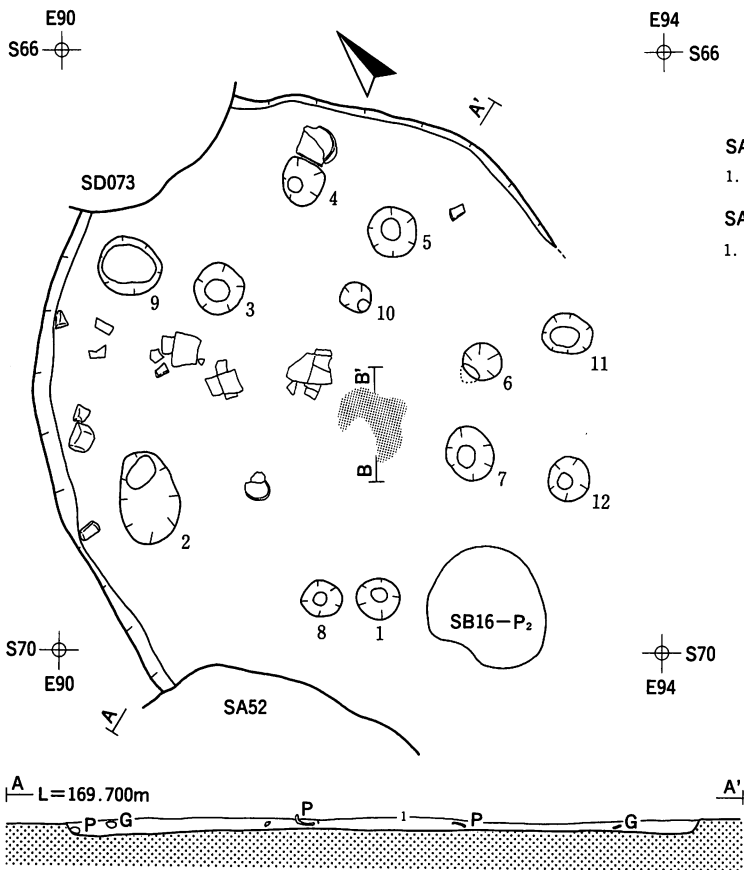
遺構（第40図、写真図版44～46）

〈位置〉B調査区、J VIIIグリッドに位置する。

〈重複関係〉SB15 掘立柱建物跡より新しい。

〈平面形・規模〉円形を呈し、規模は5.2m×4.9mである。推定床面積は17.2m²である。

〈埋土〉黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土で構成され、全体としては自然堆積に近いが、埋土中に投棄された焼土を含んでいる。



SA38住居跡炉

1. 5YR4/8 赤褐色 シルト 焼土、しまりなし。

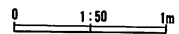
SA38住居跡埋土断面

1. 10YR2/1 黒色 シルト 粘性なし、しまりあり、
φ5mm±の黄褐色浮石細粒多量含む。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径 cm	30×28	62×40	34×34	32×28
深さcm	41	79	25	44

No.	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	34×32	26×26	36×32	26×24
深さcm	13	33	25	25

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
径 cm	42×38	20×20	32×26	30×28
深さcm	10	27	31	24



第38図 SA38住居跡

〈壁・床面〉 壁は外傾気味に立ち上がり、東壁 20 cm・西壁 35 cm・南壁 28 cm・北壁 18 cm である。南部浮石層を床面としており比較的平坦であり、部分的に貼床が施される。

〈柱穴〉P1～P3 は支柱穴、P4～P25 は壁柱穴に相当する。壁柱穴はすべて中心に向かい内傾している。

〈炉〉 ほぼ中央部に位置しており、礫を弧状に配した「C」字状の石囲炉である。炉の縁石の見られない北東部分からは礫の抜き取りの痕跡は認められなかった。

〈その他〉 炉の北東側に位置する P41 は廃滓用のピットと考えられる。

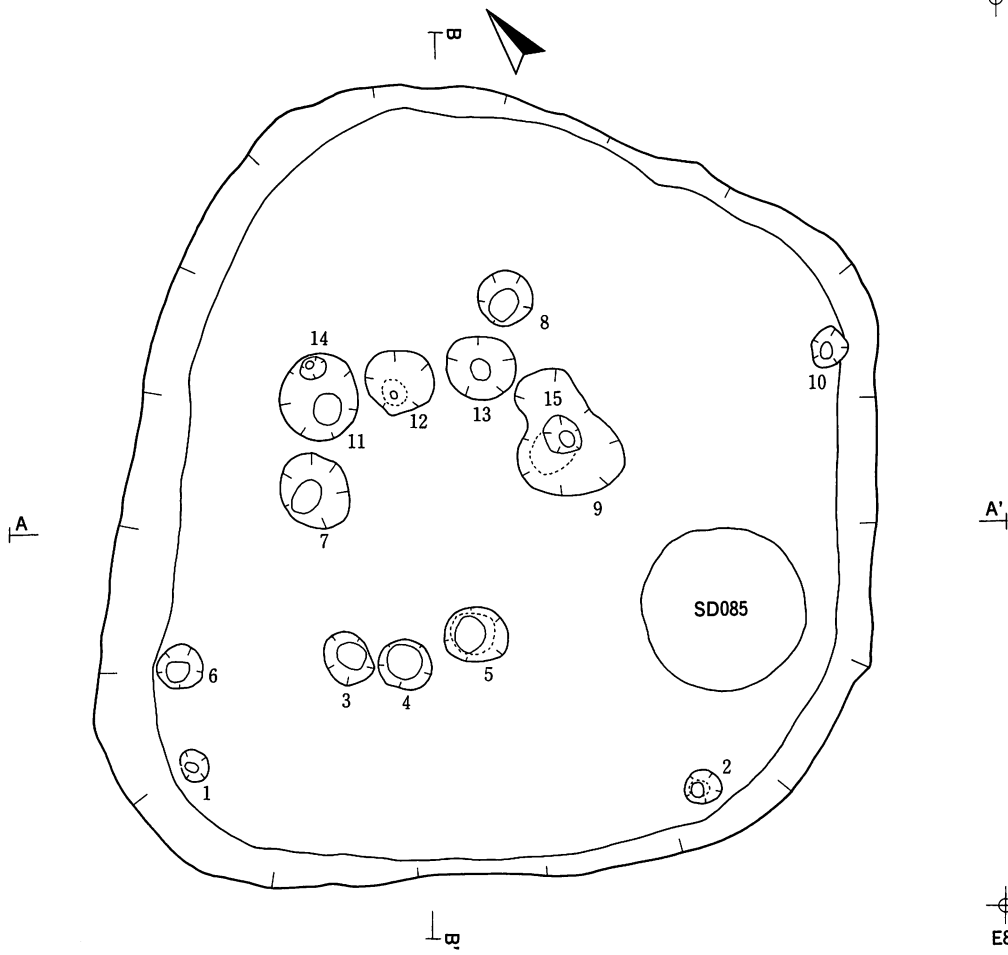
遺物（第 229～235 図、写真図版 219～224）

〈出土状況〉 床面及び埋土から大量の遺物が出土している。

〈土器・土製品〉 654 は頸部から口縁部にかけてすぼまる壺形土器である。胴部下半は無文帯、上半から口縁部にかけては平行無文帯と縄文帯がくりかえされている。全体に薄手で器表面には入念にミガキがかけられている。655 は長軸方向の両端に懸垂孔のある舟形の土器である。内外面とも粗いケズリ様の調整がされている。656 は小さな貼瘤と列点状の刺突文のある香炉である。頂部には横方向の貫通孔が認められる。657 は無文の注口である。胴部中央よりやや上に最大径をもちその部分に急角度の注口部がついている。頸部は膨らみがあり、口縁部装飾帯に 1 条の刺突列が巡っている。658 は平行沈線区画されその間に列点文が施文された深鉢である。659 は異種原体による非結束羽状縄文が施文された深鉢である。頸部に 1 条の沈線が巡り、口縁部には 8 単位の肥厚した低い山形突起が付されている。661 は胴部に屈曲を持つ深鉢である。屈曲部には 2 列の押圧状刻目列、それより下には斜行縄文が施文されている。660 は口縁部に間に凹部の「几」字状の突起が付された深鉢である。口縁部装飾帯には縄文帯、頸部文様帯には入り組み状の曲線状文が施文される。「几」字状突起の下には 1 条の沈線が施文されている。662 は畝状の装飾口縁の鉢である。頸部文様帯には縄文帯と玉抱き状の三叉文、胴部上半には斜行縄文が施文されている。全体に薄手成形で胎土は精選されたものである。663 は LR の斜行縄文が施文された浅鉢である。664 は無文の浅鉢で、口縁部に突起が付されていた痕跡がある。665 は、内外面とも磨かれた無文の台付浅鉢である。666 は無文の浅鉢である。底部は若干揚底風となっている。667 は胴部に屈曲部をもつ台付鉢である。屈曲部付近に押圧状刻目列が巡っている。668 は壺の口縁部と思われる。口縁部の 6ヶ所に縦の彫り込みと穿孔部を持つ装飾された山形突起がふさされている。内外面とも無文でいねいにミガキがかけられている。669 は台付の鉢である。口縁部には畝状の装飾の刻みが見られる。頸部に 2 条の沈線と列点文、口縁部文様帯には入組三叉文、胴部には斜行縄文が施文されている。670 は台付鉢の脚部である。671 は注口である。口縁部装飾帯には瘤の付された縄文帯、頸部文様帯と胴部文様帯は無文で、胴部の中央部に最大径をもちこの部分に短い注口部が付される。672 は注口部である。急角度で注口の根本には円

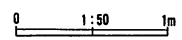
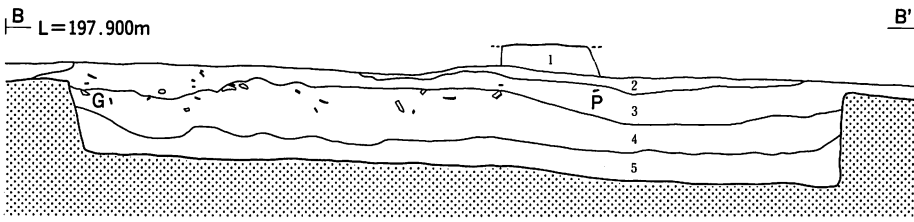
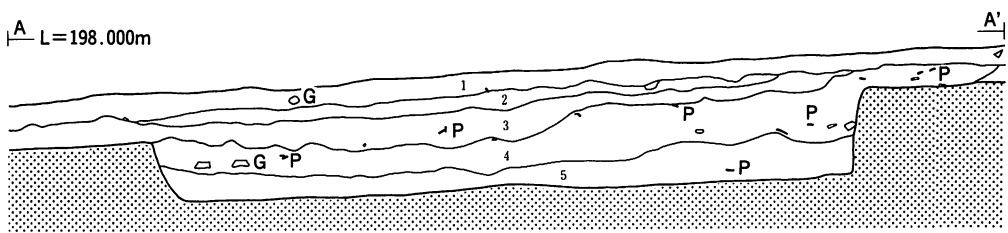
E81
S61

E88
S61



S67
E81

S67
E88



No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	22×20	22×21	36×34	36×34	44×36	32×30	52×46	40×36
深さcm	11	31	44	15	50	31	29	75

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅
径 cm	86×66	26×24	58×54	46×42	48×44	18×14	26×26
深さcm	38	12	13	18	23	10	38

SA39住居跡状遺構埋土断面

1. 10YR2/1 黒色シルト 非常にしまりあり、耕作土。
2. 10YR1.7/1 黒色シルト 白色状の浮石含む。
3. 10YR1.7/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
4. 10YR1.7/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒・焼土・炭化物、多量の遺物含む。
5. 10YR1.7/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒多量に含む。

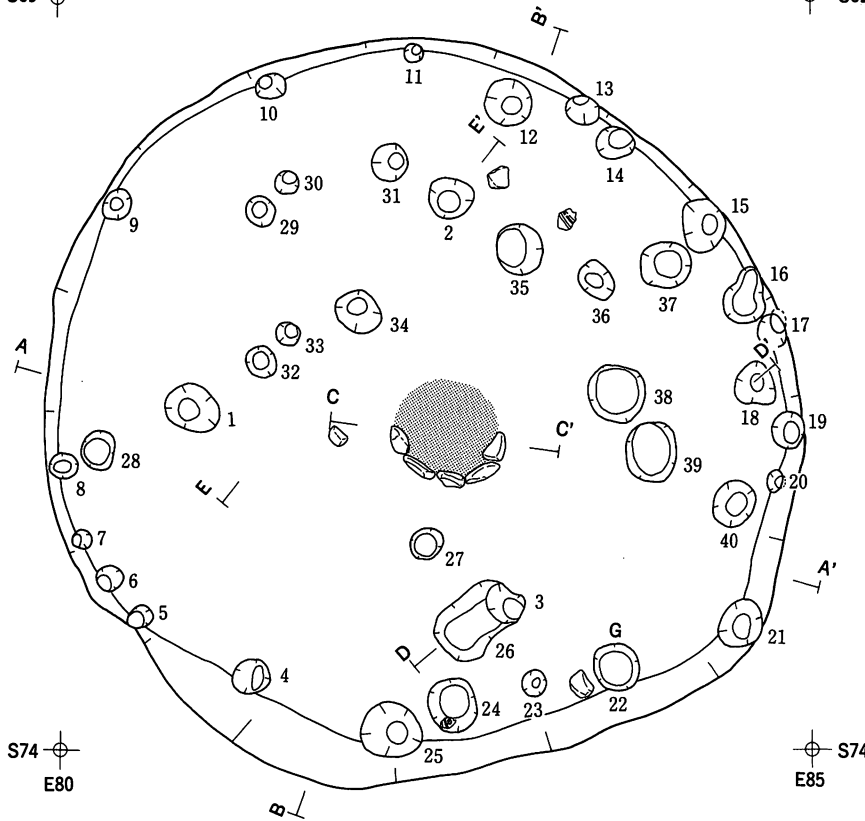
第39図 SA39住居跡状遺構

文と2個の瘤が貼付されている。文様の展開については不明である。673は頸部に膨らみをもつ黒色研磨された無文の注口である。674は無文研磨された注口である。注口部は短い。676は無文の注口である。注口部は短く付け根の部分は袋状の膨らみをもっている。677は無文の注口である。口縁部は受け口状で頸部は膨らみをもち、胴部最大径は中央部にありその部分に短い注口部が付される。注口の付け根は二叉状となっている。注口部の下にはアスファルトの付着が認められる。底部は揚底となっている。678は無文研磨された注口である。中央部に胴部最大径をもちその部分に短い注口部がついている。679・680は無文の鉢である。681は無文の浅鉢で口縁部に刻みを持つ突起が付される。682は無文の鉢の下半部である。底部は上げ底風となっている。683は無文の鉢の上半部である。単位は不明であるが口縁部に刻みをもつ3個1対の山形突起が付される。684は無文の平口縁の小型の鉢である。685は無文のほぼ球形に近い壺であり、最大径を中央部にもっている。686はLR縄文が施文された小型の鉢である。底部は上げ底風となっている。687はLR縄文が施文された小型の鉢である。胴部の中央に屈曲部をもち、単位数は不明であるが口縁部には低い山形突起が付されている。688は異種原体による非結束羽状縄文が施文された深鉢である。口縁部には13単位の低い山形突起が付される。底部は上げ底風となっている。689は口縁部に低い山形突起が付され、地文に異種原体の非結束羽状縄文が施文された小型の鉢である。底部は上げ底風となっている。690はLR縄文が施文された平口縁の小型鉢である。691はLR縄文が施文された平口縁の小型鉢である。692は壺の胴部と思われる。693は異種原体による非結束羽状縄文が施文された深鉢である。底部は上げ底風で口縁部に比較して非常に小さい。694・695は壺である。696・698は異種原体による非結束羽状縄文が施文された深鉢である。697はLR縄文が施文された平口縁の深鉢である。口縁は内湾しやや肥厚している。700・701は口縁部外端と頸部に刻みが施された壺である。702は口縁部外端と頸部に押圧状刻目列が施され、頸部文様帯には弧状文が施文されている。704・705は押圧状刻目列が施文されている。706は頸部文様帯に沈線で右下がりの入組文、胴部の膨らみの部分には焼成前の円孔が見られる。707は深鉢の胴部で入組帯縄文と横長の列点文が見られる。708は入組三叉文が見られる鉢である。709・710はミニチュアの土器である。711は土製腕輪の可能性が考えられる。712～714は耳飾りである。715は土偶の頭部である。716は中空状の土偶と考えられる。亀形土製品のように中空状のものが剥離したものと思われる。眼、眉に相当する部分には縄文が施文され鼻の下には貫通孔がみられ周囲に小さい刺突が施される。717は土面の一部と考えられる。口に相当する部分には貫通孔が認められ、眼に相当する部分は隆起している。718は人面付き土器と考えられる。内面は指頭による押圧調整がなされている。719～721は土製円盤、722は焼成粘土である。

〈石器・石製品〉 石鏃2点、石錐2点、磨石1点、軽石製品1点、石棒の頭部1点が出土している。

E80
S69

E85
S69



No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径 cm	38×34	26×20	28×26	24×24
深さ cm	54	49	15	34

No.	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	18×16	18×18	12×12	20×18
深さ cm	6	11	11	10

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
径 cm	20×20	20×16	14×12	30×30
深さ cm	16	16	-	17

No.	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	22×20	26×22	36×30	36×28
深さ cm	26	6	16	20

No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀
径 cm	22×20	30×28	24×22	14×10
深さ cm	23	19	18	9

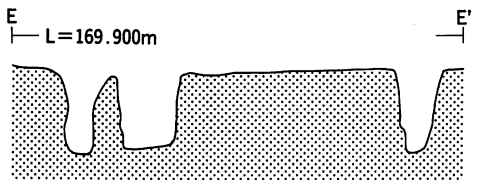
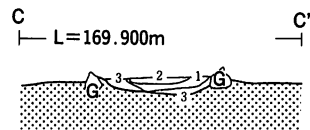
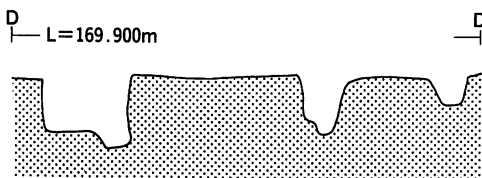
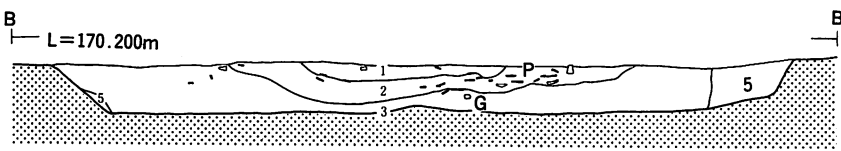
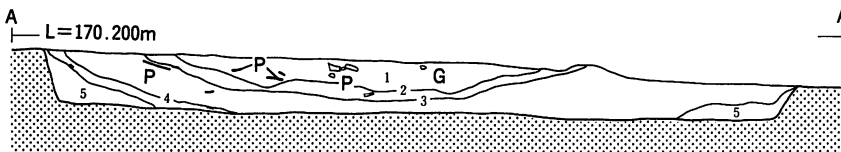
No.	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径 cm	30×30	32×30	16×16	36×32
深さ cm	24	9	19	34

No.	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈
径 cm	42×36	60×54	22×22	26×22
深さ cm	30	38	18	12

No.	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂
径 cm	20×20	16×14	24×24	20×20
深さ cm	26	18	35	-

No.	P ₃₃	P ₃₄	P ₃₅	P ₃₆
径 cm	16×16	30×28	34×30	26×24
深さ cm	-	24	30	26

No.	P ₃₇	P ₃₈	P ₃₉	P ₄₀
径 cm	34×30	38×38	40×34	30×30
深さ cm	10	8	28	13



0 1:50 1m

SA41住居跡埋土断面

1. 7.5YR2/1 黒色 シルト 少量の焼土・炭化物含む。
2. 7.5YR4/3 褐色 シルト 多量の焼土含む。
3. 7.5YR2/1 黒色 シルト 少量の焼土・炭化物、黄褐色浮石細粒多量含む。
4. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト 微量の焼土含む。
5. 7.5YR2/3 極暗褐色 シルト 微量の焼土、黄褐色浮石細粒少量含む。

SA41住居跡炉

1. 7.5YR5/4 におい褐色 シルト 炭化物少量含む。
2. 5YR5/8 明赤褐色 シルト 被熱した黄褐色浮石含む。
3. 10YR6/4 におい黄褐色 シルト 黄褐色浮石細粒多量含む。

第40図 SA41住居跡

〈時期〉床面等の土器から縄文時代後期後半田柄貝塚第Ⅴ群期に相当すると思われる。

SA42 住居跡

遺構（第 41 図、写真図版 46～48）

〈位置〉B 調査区、IⅧグリッドに位置する。

〈重複関係〉SA43 住居跡より古く、SD125・SD126・SD124 よりも新しい。

〈平面形・規模〉円形を呈し、規模は 7.5 m×7.4 m である。推定床面積は 32.4 m² である。

〈埋土〉埋土の大半は先行する SA 43 住居跡の埋土で占められており、わずかに床面上部の土が残存するのみである。黄褐色浮石細粒混じりの赤黒色のシルト質土である。

〈壁・床面〉壁は外傾気味に立ち上がり、東壁 20 cm・西壁 35 cm・南壁 28 cm・北壁 18 cm である。南部浮石層を床面としており比較的平坦であり、部分的に貼床が施される。

〈柱穴〉P1～P8 は主柱穴、P10・11 は支柱穴など補助的なものと考えられる。

〈炉〉南壁に密着した状況であり、複式炉の形態のものである。大きく三つの部分から構成されている。壁に接したピットを有する部分、中間に位置する皿状の窪み部分、弧状に展開する先端の部分である。先端の弧状に展開する部分の内側には、黄褐色の砂質シルトを貼っている。

〈その他〉P 9 とした柱穴様のものは柱穴配置の想定からも、柱穴とは考えがたく炉に付随ピットと考えられる。

遺物（第 235～238 図、写真図版 224～226）

〈土器・土製品〉730 は木目状捺糸を地文とし口縁部には捺紐押捺が見られる。731 は口縁部には不整綾線文、胴部に縦位捺糸文が施文されている。732 は沈線と隆帯で区画され、胴部に LR 縄文が施文されている。733 は沈線で区画され、地文は RL 縄文である。734 は口縁部に沈線で重層山形沈線文が施文されている。735 は頸部に外に張り出す屈曲部をもち、口縁部に捺紐押捺と列点文、胴部には縦位綾線文が施文されている。736 は壺である。最大径を胴部上半にもちこの部分に焼成後の貫通孔が 1 ヶ所見られる。737 は列点文、738 には曲線沈線文がみられる。739 は深鉢である。小波状縁で口唇部はやや肥厚している。740～742 は縄文時代後期前葉の土器である。743～745 は捺紐押捺された縄文時代中期前葉の土器である。753 は小型の鉢である。沈線により縦位の条線状の文様が施文される。754 は小型の壺である。口縁部は直立気味で胴部も直線的であり、肩部がはっている。

〈石器・石製品〉縦型の石匙 1 点、不定形石器 1 点、石斧 1 点、円盤状石製品 1 点、台石 1 点、凹石 1 点、磨石 4 点、砥石 1 点が出土している。

〈時期〉炉の形態・出土土器などから縄文時代後期初頭に相当する時期と考えられる。

SA43 住居跡

遺構 (第 42 図、写真図版 48)

〈位置〉 B 調査区、I VIII グリッドに位置する。

〈検出状況・重複関係〉 遺構検出の段階では明瞭なプランを把握できなかったが、SA42 住居跡のプランを確認し精査を進行中に、多量の炭化材・焼土・縄文時代後期後半の遺物の存在が認められたため住居跡として認定した。このような調査状況であったため全体については不明であり断片的な状況から推定したものである。SA42 住居跡より新しく、SD124 よりも古い。

〈平面形・規模〉 推定で、直径 6.0 m 前後の円形を呈すると思われる。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味に立ち上がり、東壁 45cm・西壁 50cm・南壁 30cm・北壁 50cm である。

〈柱穴〉 痕跡的ではあるが、この住居跡に伴う柱穴は P1～P6 が検出されている。

〈炉〉 精査の段階で、礫を用いた規則的な石囲いなどがみられなかったことなどから、地床炉タイプのものであったと推定される。

〈その他〉 多量の焼土・炭化材の状況から焼失を受けた住居跡である。

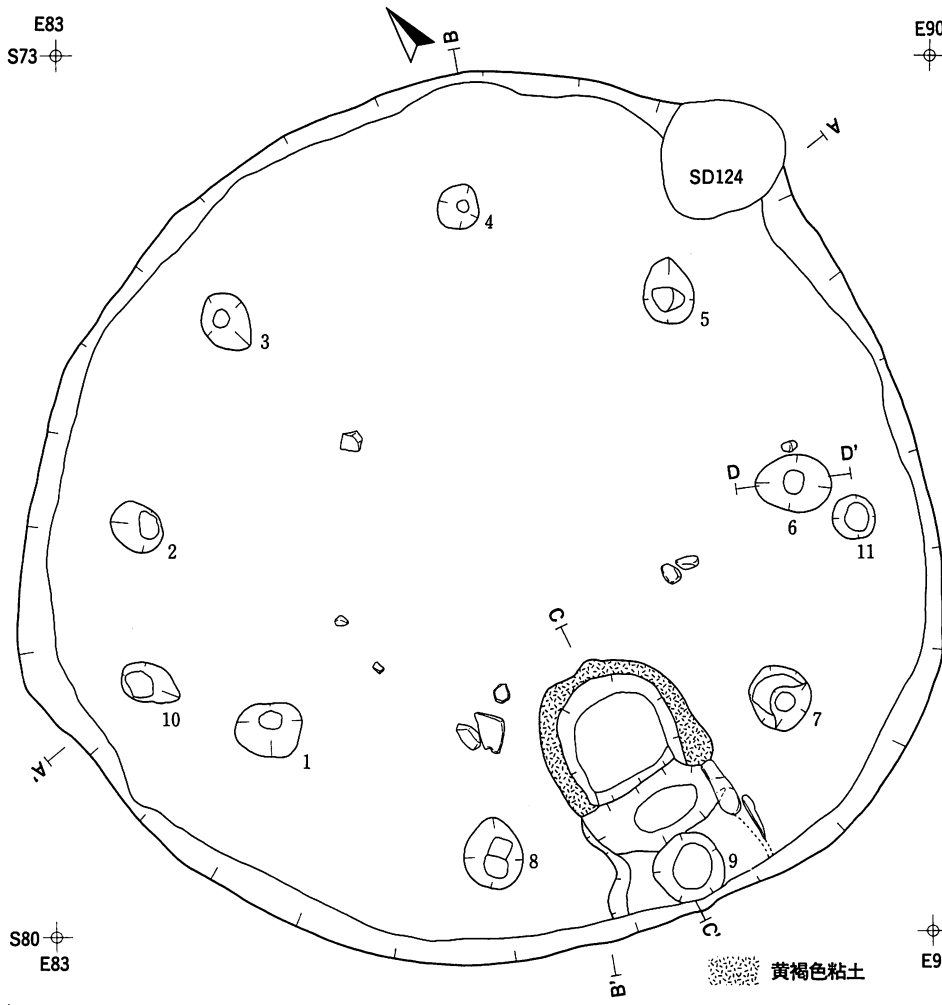
遺物 (第 238～248 図、写真図版 226～235)

〈出土状況〉 床面及び埋土から大量の遺物が出土している。

〈土器・土製品〉 766 は広口の壺である。頸部に屈曲部をもち口縁部は外傾し、口唇部はやや肥厚している。口縁部には肥厚した低い山形の突起が付される。口縁部装飾帯には 2 条の刻目帯が巡っており、口縁部は無文帯となっている。口縁部と胴部を区画する屈曲部にも刻目帯が巡り、胴部には曲線状の縄文帯が展開している。文様の中心部には刻みをもつ瘤が貼付されている。767 は長頸の壺である。口縁部には小さい山形突起が付され、口縁部文様帯には格子状沈線により弧状の文様が展開し結節部には低い瘤が貼付されている。頸部文様帯には縄文帯が 3 状めぐり、鱗状の貼付・小さい瘤の貼付が見られる。肩部に胴部最大径をもち、斜格子状沈線と連結弧線文が施文され、連結部には低い瘤が貼付されている。768 は深鉢の下半部である。地文に LR 縄文が施文され、胴部に屈曲部をもちその部分に先の鋭い瘤が貼付されている。769 は注口土器の下半部と思われる。胴部は無文で、最大径部分に瘤を配し連結沈線で結ばれている。770 は胴部に屈曲部をもつ深鉢である。平口縁で多数の瘤を貼付した口縁部装飾帯が巡る。頸部文様帯は幅が広く、入り組み状の複雑な曲線状文が展開し結節部には小さな瘤が貼付されている。屈曲部付近には瘤の貼付された 3 条の縄文帯が巡り、胴部には幅の狭い 5 単位の鍵状の縄文帯が展開している。771 は無文の台付鉢、772 は無文の小型壺、773 は無文の台付浅鉢である。774 は蓋である。沈線により文様が施文され多数の小さい瘤が貼付されている。つまみ部には横方向の貫通孔、頂部には「十」字状沈線文が施文されている。775 は注口である。頸部は膨らみをもち 4 単位の弧状文が展開し結節部に低い瘤が貼付されている。注口部は胴部のやや上半に

E83
S73

E90
S73



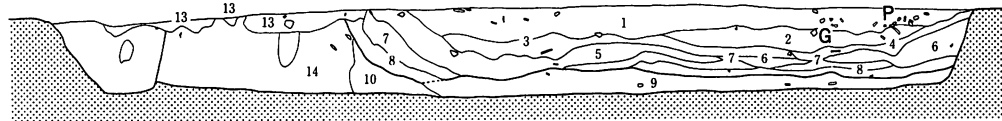
S80
E83

S80
E90

L = 171.102m

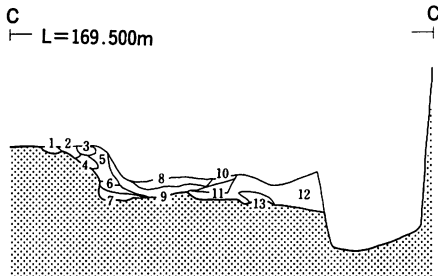
L = 171.102m

L = 169.200m



P 6 埋土断面

L = 169.500m



SA42住居跡炉

- | | | | |
|--------------|--------|-----|------------|
| 1. 7.5YR2/3 | 極暗褐色 | シルト | 少量の焼土含む。 |
| 2. 7.5YR2/1 | 黒色 | シルト | 少量の焼土含む。 |
| 3. 7.5YR3/4 | 暗褐色 | シルト | 少量の焼土含む。 |
| 4. 2.5YR4/6 | 赤褐色 | シルト | 砂質、焼土。 |
| 5. 10YR4/6 | 褐色 | シルト | 粘土、焼土少量含む。 |
| 6. 5YR3/6 | 暗赤褐色 | シルト | 砂質、焼土。 |
| 7. 7.5YR4/4 | 褐色 | シルト | |
| 8. 7.5YR5/4 | にぶい褐色 | シルト | 砂質。 |
| 9. 2.5YR4/6 | にぶい赤褐色 | シルト | 砂質、焼土少量含む。 |
| 10. 7.5YR4/6 | 褐色 | シルト | 砂質、焼土少量含む。 |
| 11. 7.5YR4/4 | 褐色 | シルト | 砂質、焼土少量含む。 |
| 12. 7.5YR4/4 | 褐色 | シルト | 砂質、焼土少量含む。 |
| 13. 7.5YR4/4 | 褐色 | シルト | 砂質、焼土少量含む。 |

SA42住居跡埋土断面

- | | | | |
|--------------|------|-----|----------------------------|
| 1a. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 微量の焼土・炭化物、遺物多量含む (SA43覆土)。 |
| 1b. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | (SA43覆土)。 |
| 2. 5YR2/1 | 黒褐色 | シルト | 炭化物少量含む (SA43覆土)。 |
| 3. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 焼土・炭化物多量含む (SA43覆土)。 |
| 4. 5YR2/1 | 黒褐色 | シルト | 焼土・遺物含む (SA43覆土)。 |
| 5. 5YR2/1 | 黒褐色 | シルト | 焼土・遺物含む (SA43覆土)。 |
| 6. 5YR2/1 | 黒褐色 | シルト | 焼土多量含む (SA43覆土)。 |
| 7. 7.5YR5/6 | 明褐色 | シルト | 焼土多量含む (SA43覆土)。 |
| 8. 7.5YR7/1 | 黒色 | シルト | (SA43覆土)。 |
| 9. 2.5YR2/1 | 赤黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒多量含む。 |
| 10. 2.5YR2/1 | 赤黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒散在。 |
| 11. 10YR3/3 | 暗褐色 | シルト | 炭化物含む。 |
| 12. 5YR2/1 | 黒褐色 | シルト | 焼土含む。 |
| 13. 10YR6/6 | 明黄褐色 | シルト | 黒色土が混じる。 |
| 14. 7.5YR4/4 | 褐色 | シルト | 黒色土混在。 |

SA42住居跡 P₆

- | | | | |
|-------------|-----|-----|---------------|
| 1. 7.5YR3/2 | 黒褐色 | シルト | 暗褐色土と明黄褐色の混土。 |
| 2. 7.5YR2/1 | 黒色 | シルト | 粘性・しまりあり。 |

第41図 SA42住居跡

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
径 cm	52×44	44×20	50×38	34×32	50×40	60×46	54×46
深さ cm	77	73	65	65	72	70	75

No.	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
径 cm	58×46	58×56	50×32	34×34
深さ cm	72	58	42	30

付され、玉抱き三叉文風の文様が展開している。底部は上げ底風となっている。776・777は無文研磨の注口である。口縁部文様帯は非常に幅が広く、頸部に膨らみを持っている。胴部上半に最大径部をもちこの部分に注口部が付されている。778は注口である。頸部に膨らみをもち口縁部文様帯は無文となっている。胴部全面に沈線により入り組み状の弧線文が施文されている。779は注口である。口縁部文様帯と頸部が瘤の貼付された縄文帯で区画されている。780は注口の口縁部である。口縁部装飾帯には縄文が施文されその間には横方向に張り出す先鋭な瘤が貼付されている。また、口縁部文様帯下部にも同様な瘤が貼付されている。781・783・785は無文の注口である。782は注口の頸部付近である。頸部は膨らみをもち、沈線で弧状文が施文され結節部には小さい瘤が貼付されている。784は頸部に膨らみをもつ先細の無文の壺である。786は肩部の張る壺である。縦方向の帯状文が展開している。787は内外面に赤色顔料の痕跡が残る無文の大型壺である。788・789・792は無文の鉢、790は口縁部装飾帯に瘤の貼付帯が巡る無文の浅鉢である。791はLR縄文が施文された大型の壺で、胴部最大径を中央よりやや上半にもっている。793～811は縄文が施文された平口縁の深鉢である。812～815はミニチュアの土器である。816は土偶の胸腹部である。正中線上腹部は隆起しており上に刺突が施されている。817は右脚部、818は肩部、819は右脚部で赤色塗彩の痕跡が認められる。820は赤色塗彩の痕跡が残る土偶である。腹面の正中線上・腹部は隆起し刺突文がほどこされ、背面には入り組み状の弧状沈線文が施文されている。821は腹面に刺突文、背面には沈線で入り組み状の文様が施文されている。823は土偶頭部で全面に赤色塗彩の口縁部が見られる。眼・口は隆起表現されている。824は肩部である。腹背面に曲線状の縄文帯が施文され、縄文施文部分には赤色塗彩の痕跡が認められる。826は筒状の耳飾りである。上下面には沈線で文様が施文されている。827はつまみ部に貫通孔があり、印面部分には2本1組の放射状の沈線が施文されている。828～833は土製円盤で、このなかの828は表面が広く打ちかかっている。834～836は焼成粘土である。

〈石器・石製品〉石鏃12点、孔をもつ軽石製品1点、無孔の軽石製品1点、石製円盤1点、凹石1点、磨製石斧2点、石匙5点、不定形石器3点が出土している。

〈時期〉縄文時代後期後半田柄貝塚第V群期に相当する時期と考えられる。

SA44 住居跡

遺構（第43図、写真図版49・50）

〈位置〉B調査区、JⅧグリッドのSA49住居跡の上位に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA49住居跡より新しく位置づけられる。西側の壁はSA49住居跡の壁と誤認し明確に把握できなかった。

〈平面形・規模〉直径4.2m前後の円形を基調とする住居跡である。推定床面積は11.4m²である。

〈埋土〉 黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土が主体であり、特に埋土上部には多量の焼土・炭化物が含まれている。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味に立ち上がり、東壁35cm・西壁33cm・南壁16cm・北壁56cmである。

〈柱穴〉 P1～P3 は主柱穴、P4～P7 は壁柱穴に相当する。

〈炉〉 住居跡はほぼ中央部に不整形で 80 cm×60 cm・厚さ 10 cm 程度の規模を持つ地床炉が検出された。

〈その他〉 炉の上部及び住居跡の西半に多量の焼土・炭化材が認められており、焼失を受けた住居跡と考えられる。

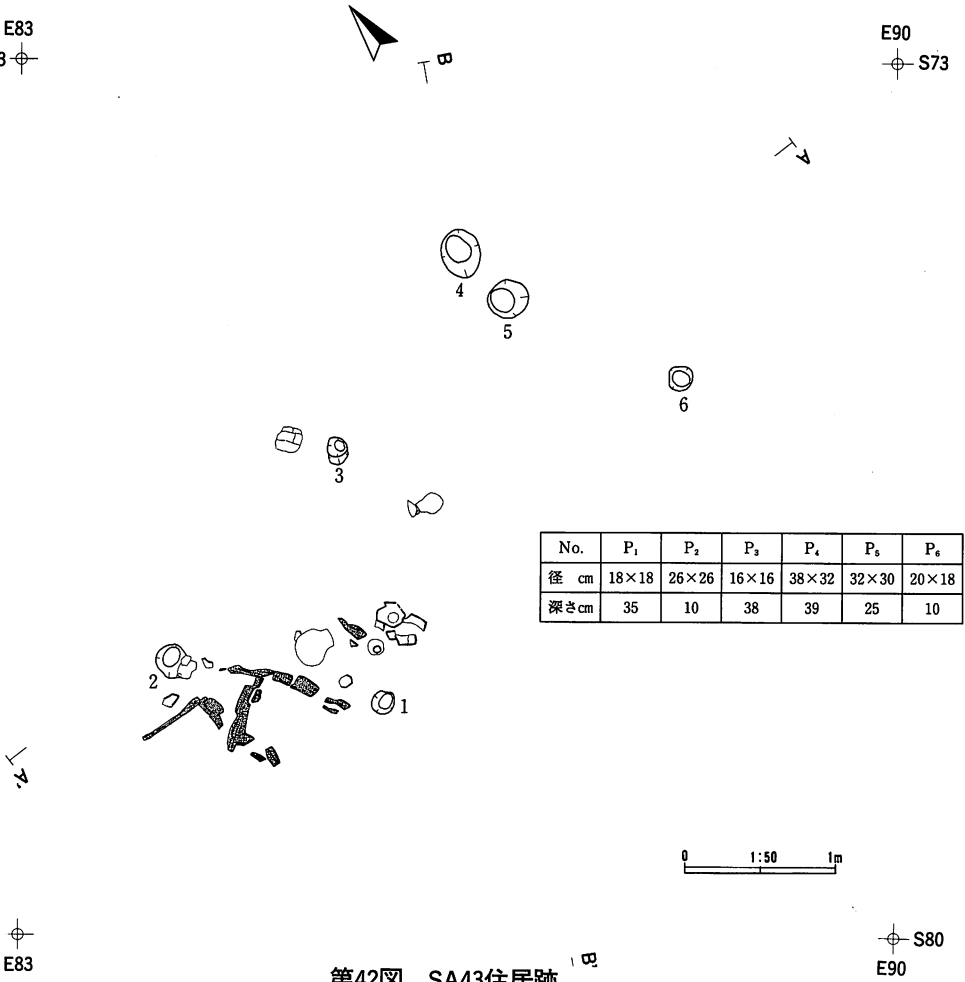
遺物 (第 249～254 図、写真図版 236～239)

〈出土状況〉 床面及び埋土から大量の遺物が出土している。

〈土器・土製品〉 863 は深鉢である。口縁部には 6 単位の低い山形突起が付されている。口縁部

E83
S73

E90
S73



第42図 SA43住居跡

装飾帯には縄文が充填された相対する弧状文、頸部および胴部には異種原体による非結束羽状縄文が施文されている。胴部に屈曲部をもちその部分には瘤が貼付され連結沈線により結ばれている。底部は上げ底風となっている。864 は刻みをもつ山形突起が付された浅鉢である。山形突起の下には弧状沈線、頸部文様帯には4単位の円文を中心に5単位の長い楕円文が展開している。865 は脚の高い無文の台付浅鉢である。口縁部には4単位の山形突起がふさされている。866 は台付鉢である。脚部と胴部の境に押圧状刻目列が1状巡っている。867 は鉢である。口縁部は肥厚し、口縁部装飾帯には縄文帯、胴部文様帯には波頭状の縄文帯が展開している。868 は壺である。胴部に6単位の弧線連結文が展開し、連結部分には瘤が貼付されている。底部は上げ底となっている。869 は無文の壺である。口縁部に低い山形突起が付され、口縁部装飾帯には4個、頸部に5個の瘤が貼付されている。870 は頸部がすぼまる壺である。頸部は無文、胴部にはLR縄文が施文されている。頸部では成形時の輪積みの痕跡が明瞭に観察される。871 は胴部の最大径部に瘤が貼付された無文の壺である。872 は香炉の頂部である。瘤、刺突文が見られる。873 は無文の壺である。874 は異種原体による非結束羽状縄文が施文された壺である。875 は注口である。注口部は中央部よりやや上に付けられ、つけねの部分は膨らみをもっている。列点文、弧状文が施文されている。876 は注口土器である。口縁部は無文、膨らみをもつ頸部文様帯には瘤の貼付された幅の狭い平行縄文帯、胴部上半には幅の狭い弧状文が施文されている。877 は無文の注口の下半部である。878 は無文の小型の注口土器である。879 は無文の注口土器の口縁部である。880 は頸部に膨らみをもつ無文の注口土器の上半部である。881・882 は無文の注口土器の上半部である。883 は口縁部に3個1対の低い山形突起が4ヶ所に付された無文の鉢である。884 は無文の鉢である。885～894 は縄文が施文された深鉢である。887 は胴部上半に屈曲部をもち頸部文様帯は無文となっている。887 は口縁部に肥厚した山形突起が付されている。892 は折り返し口縁の深鉢である。895～899 は押圧状刻目列がみられる。901 は土偶の脚部である。非結束羽状縄文が施文され、沈線で曲線状・格子状の文様が施文されている。902 は土偶の脚部である。903～912 は耳飾りである。903・906の内側には隆起部分が見られる。913～917 は焼成粘土である。

〈石器・石製品〉 918 は片面加工で、背面の2辺には細部加工が認められる。919 は背面の中央部まで細部加工が及んでいる。920 は長方形で片面加工である。921～925 は石鏃、928 は磨石、927・926・930 は敲石、929 は凹石、931・932 は石棒である。

〈時期〉 縄文時代後期後半、田柄貝塚第V群期に相当する時期と考えられる。

SA46 住居跡

遺構 (第44図、写真図版50・51)

〈位置〉 B調査区、JⅧグリッドの南側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA47 住居跡と重複しており、当住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉 大半が調査区外に延びており全貌については不明であるが、直径 4.0 m 前後の規模で平面形は略円形であると思われる。推定床面積は 17.0 m²である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒混じりの黒色～黒褐色のシルト質土が主体である。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味に立ち上がり、北壁で 70 cm・西壁で 60 cm の残存値である。床面は平坦であり重複する SA47 住居跡の床面と同じレベルである。

〈柱穴〉 柱穴は 7 個検出されており、P1・P4・P5 は支柱穴を構成し、P6・P7 は壁柱穴、その他は補助的な柱穴と考えられる。P4 は SA47 住居跡の柱穴を再利用したと考えられる。この中で P1・P5 の柱穴には直径約 10 cm の柱痕跡に相当する黒色土が認められ、周囲の掘り方は明黄褐色のロームで充填されていた。

〈炉〉 炉は住居跡の中央に設けられており、44 cm×40 cm・厚さ 10 cm の規模をもつ地床炉である。

〈その他〉 柱穴数が少ないことや床面の高さが全く同じことから、時間差をもたない建て替え住居跡の可能性が考えられる。

遺物 (第 255～259 図、写真図版 240～243)

〈土器・土製品〉 933 は胴部に屈曲部を持つ深鉢である。口縁部には 2 個 1 対の低い山形突起が付され、口縁部装飾帯・屈曲部分には縄文帯、頸部文様帯・胴部文様帯には入り組み状の曲線状文が展開している。934 は鉢である。口縁部には山形突起、口縁部装飾帯には縄文帯、頸部文様帯は無文帯となっている。935 は台付鉢の脚部で、胴部下半は無文となっている。936 は多条の平行沈線が施文された台付鉢の脚部で、部分的に瘤が貼付される。937 は香炉の頂部である。938 は深鉢の下半部である。939 は口縁部に低い突起が付された壺である。口縁部装飾帯には縄文帯、頸部文様帯には瘤を中心に相対する弧状文が施文される。940 は口縁部に低い突起が付された壺である。頸部文様帯には多条の平行沈線が施文されている。941 は深鉢の胴部である。胴部下半には入り組み状の曲線状文が施文されている。942 は小型の壺である。口縁部には低い突起が貼付され、頸部文様帯には平行沈線文、胴部上半には瘤を中心に曲線状文が展開している。943 は壺の胴部である。最大径は胴部中央で球形である。胴部下半は縄文、上半部には曲線状文が施文されている。肩の付近には瘤が付される。944 は壺の胴部である。下半には縄文、上半には曲線状文が施文されている。945 は深鉢である。胴部の下半は縄文が施文されているが、上半については不明である。946 は異種原体による非結束羽状縄文が施文された壺である。949・950 は無文の鉢である。947・948・951～960 は縄文が施文された深鉢である。961 はパイプ状の土製品である。962 は無文の浅鉢のミニチュア土器である。963 は匙状土製品の柄の部分である。964 は曲線状の文様が展開する土偶の肩部である。965 は土製円盤である。966 は棒状土製品で

ある。967 は内面渦巻状土製品である。968 は焼成粘土である。

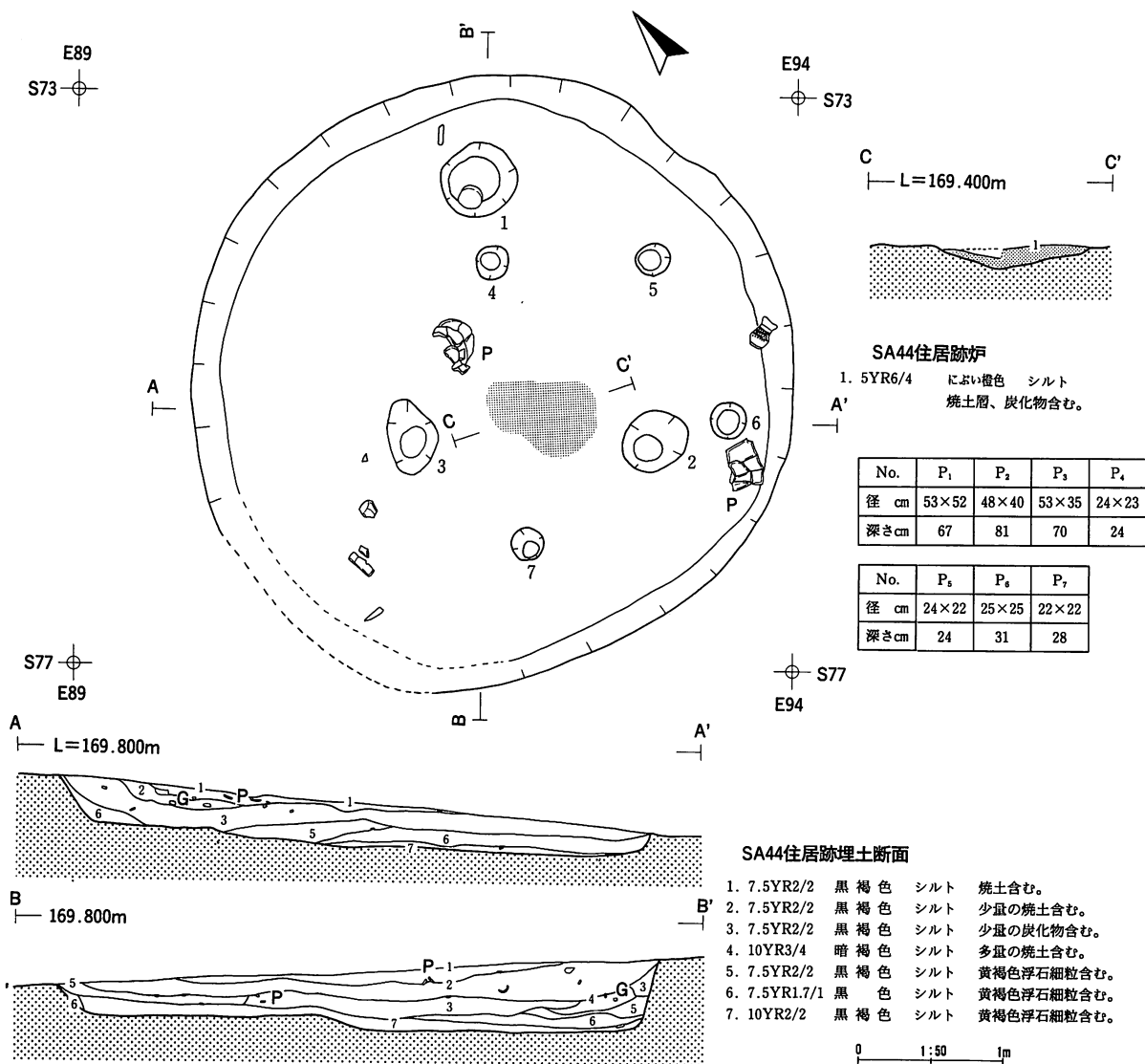
〈石器・石製品〉 石匙 3 点、不定形石器 6 点、石鏃 2 点、石錐 2 点、一部に凹部のある磨石 1 点、砥石 1 点、軽石製品 1 点、石棒 3 点、有孔石製品 1 点が出土している。

〈時期〉 縄文時代後期田柄貝塚第IV群の時期に相当すると思われる。

SA47 住居跡

遺構 (第 44 図、写真図版 52)

〈位置〉 B 調査区、J VIII グリッドの南側に位置している。



第43図 SA44住居跡

〈検出状況・重複関係〉 SA46 住居跡と重複しており、当住居跡が古い。大半が調査区外に延びており全貌は明かでない。

〈平面形・規模〉 推定で、直径約 6.0 m 程度の円形を呈する住居跡と考えられる。

〈埋土〉 埋土は黒色～黒褐色をした黄褐色浮石細粒混じりのシルト質土であり人為堆積様を示している。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味に立ち上がり、残存部での壁高は西壁 33 cm・南壁で 22 cm である。八戸ロームを床面としておりほぼ水平となっている。

〈柱穴〉 SA46住居跡のP4が支柱穴の一部に相当し、P1・P2は支柱穴に相当すると思われる。

〈炉〉 炉は検出されなかった。

遺物（第 260・261 図、写真図版 244・245）

〈出土状況〉 床面から石棒の身部の一部が出土している。

〈土器・土製品〉 989 は口縁部に 2 条に沈線が巡っている。991 は多条沈線で弧状文が施文され瘤が貼付されている。992・993 は幅の広い曲線状文が施文されている。999 は不明土製品である。1000・1001 は土製円盤である。

〈石器・石製品〉 縦型石匙 1 点、石鏃 3 点、台石 1 点、石棒 1 点、軽石製品 1 点が出土している。

〈時期〉 縄文時代後期田柄貝塚第IV群期に相当する時期と考えられる。

SA48 住居跡

遺構（第 45 図、写真図版 52・53）

〈位置〉 B 調査区、J VIII グリッドの北東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 炉と壁の一部及び柱穴を検出しただけである。SA44・SA49 住居跡と重複しており、いずれの当住居跡より新しい。

〈平面形・規模〉 推定で、直径約 6.0 m 程度の円形を呈する住居跡と考えられる。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒混じりの黒色のシルト質土である。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味に立ち上がり、残存部での壁高は北壁で 12 cm である。

〈柱穴〉 P1・P2 は支柱穴、P3～P8 は壁柱穴に相当する。

〈炉〉 住居跡のほぼ中央部に位置すると思われる。推定で、直径 50 cm 程度で層厚 10 cm の規模の円形を基調とする地床炉である。

遺物（第 261～264 図、写真図版 245～247）

〈土器・土製品〉 1009 は鉢である。口縁部文様帯には X 字文、頸部には 2 本の沈線が巡り胴部には LR 縄文が施文される。口縁部の一部にゆがみがあり一部片口の可能性も考えられる。1010 は小型の鉢である。装飾状の口縁部で、頸部には一部に刻みをもつ平行沈線文、胴部には LR 縄

文が施文されている。外面に赤色塗彩の痕跡が認められる。1011 は小型の鉢である。装飾状の口縁で頸部には刻目の見られる平行沈線文、胴部には LR 縄文が施文されている。1018 は S 字文が展開する波状縁の深鉢である。1019・1020 は縄文が充填された長楕円文が展開している。1021 は楕円文、1022 は刺突文がみられる。1023 は滑車型の耳飾りである。非常に分厚く、表裏面に鱗状の隆帯と刺突文が見られる。

〈石器・石製品〉石鏃 11 点、不定形石器 2 点、磨石 2 点、台石 2 点、石皿 1 点が出土している。1040 の石皿は裏面に 2 脚がつき、表面の中央部に柱状部を残し周囲は低くなっている。

〈時期〉縄文時代中期末葉ころの遺物も見られるが (1018~1022・1023・1014)、床面付近の出土土器から縄文時代晩期中葉前半の時期と考えられる。

SA49 住居跡

遺構 (第 46 図、写真図版 52~54)

〈位置〉 B 調査区、J VIII グリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA44・SA48 住居跡の下位にあり、いずれの住居跡より古く位置づけられる。一部調査区に延びており、また南側の壁は既に失われている。

〈平面形・規模〉 推定で、長軸方向 12 m・短軸方向 6.5 m の規模をもつ、平面形が隅丸長方形の住居跡と思われる。推定床面積は 42.0 m²である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒混じりの黒色~黒褐色のシルト質土である。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味に立ち上がり、残存部での壁高は北壁で 42cm・西壁で 40cm である。

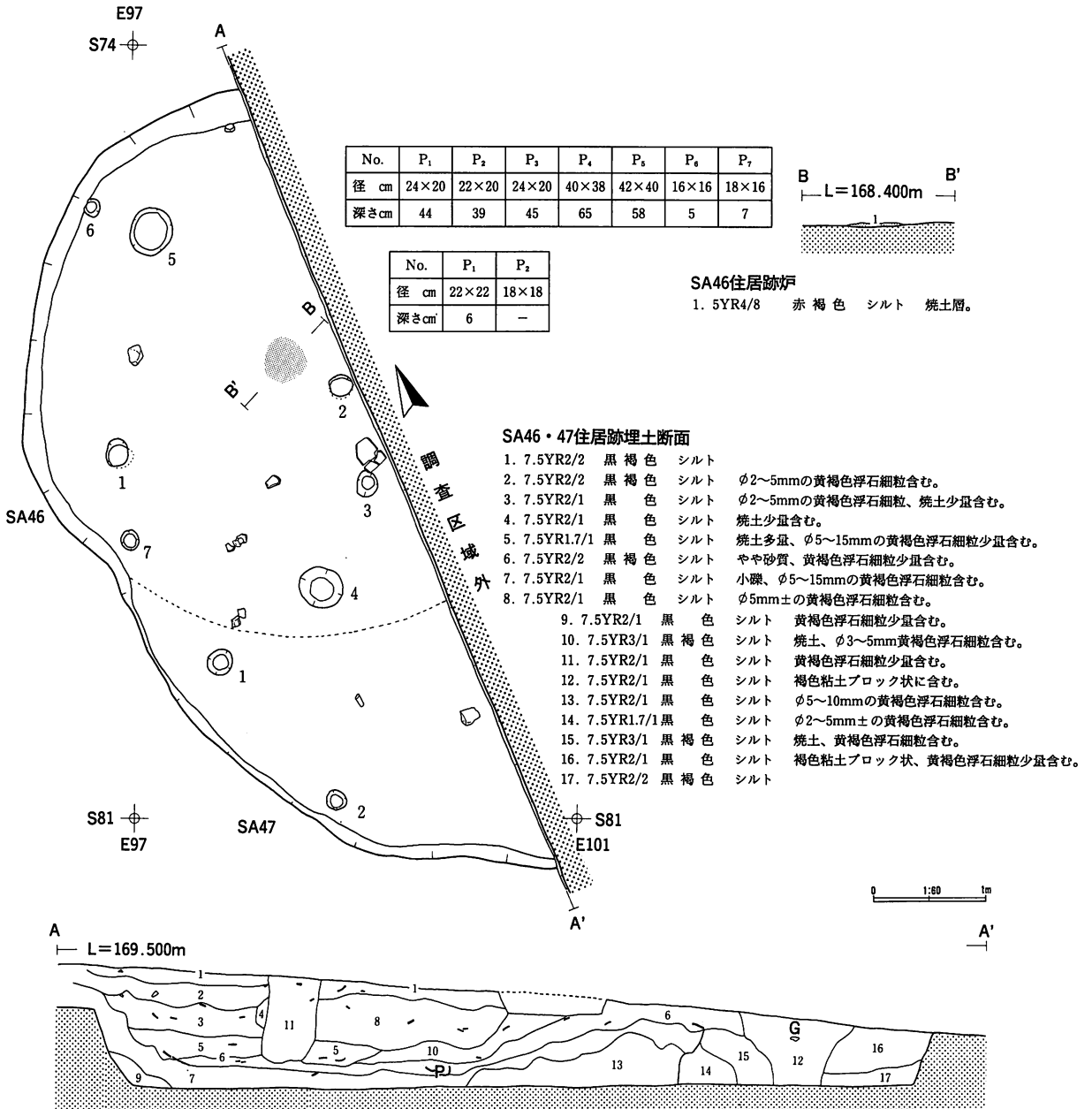
〈柱穴〉 壁柱穴及び主柱穴 (P1~3) に相当する柱穴が検出されている。特に主柱穴は 3 か所で確認され他の 1 か所は調査区外に存在すると思われる。これらの主柱穴は 4 ないし 5 本の小柱穴で構成されており、細木を組み合わせて主柱穴としたことが考えられる。

〈炉〉住居跡の中央部からやや北にずれた長軸線上に約 4 m の間隔をおいて、直径 45 cm 同じく直径 55 cm 規模の円形の石囲炉が 2 か所で検出された。これらの石囲炉は礫の長辺が接した形で組まれている。東側の石囲炉から 30 cm 西側には、一直線上に 3 個の直立に埋設された土器が検出されている。これらの土器の周囲には現地性の焼土が認められた。土器の内部には拳大の亜角礫が数個づつあった。

遺物 (第 265~268 図、写真図版 248・249)

〈土器・土製品〉 1042 は四波状の深鉢である。小振りの弁状突起でその下には貫通孔が見られる。口縁部文様帯には撚紐の押捺、隆帯に囲まれた部分には刺突文が施文されている。胴部の地文は斜行する複節縄文である。1043 は LR 縄文が施文された深鉢で、内部には拳大の礫が入っていた。1044 は波状縁の深鉢である。波頂部の直下には撚紐が押捺されたボタン状のはりつ

けとその下には2本の隆帯が垂下している。口縁部文様帯と胴部は撚紐が押捺された隆帯で区画され、口縁部文様帯には撚紐押捺、胴部には複節の斜行縄文が施文されている。1045はLR縄文が施文された深鉢で、内部には拳大の礫が入っていた。1046はLR縄文、1047は結束羽状縄文、1048はLR縄文、1049は附加条の結束羽状縄文が施文されている。1050~1054は撚紐が押



捺された深鉢である。1055 は表裏面に縄が押捺された板状土偶の肩部である。

〈石器・石製品〉 1056 は側辺にノッチの入った縦型の石匙である。他に石鏃が2点出土している。1059 は台石である。表面には赤色の顔料が塗彩されていた。1060 は周縁が敲打された半月形の石器である。1061 は石のみと思われる。1062 は台石である。1063～1077 は1048・1049の深鉢の内部に入っていた拳大の礫である。

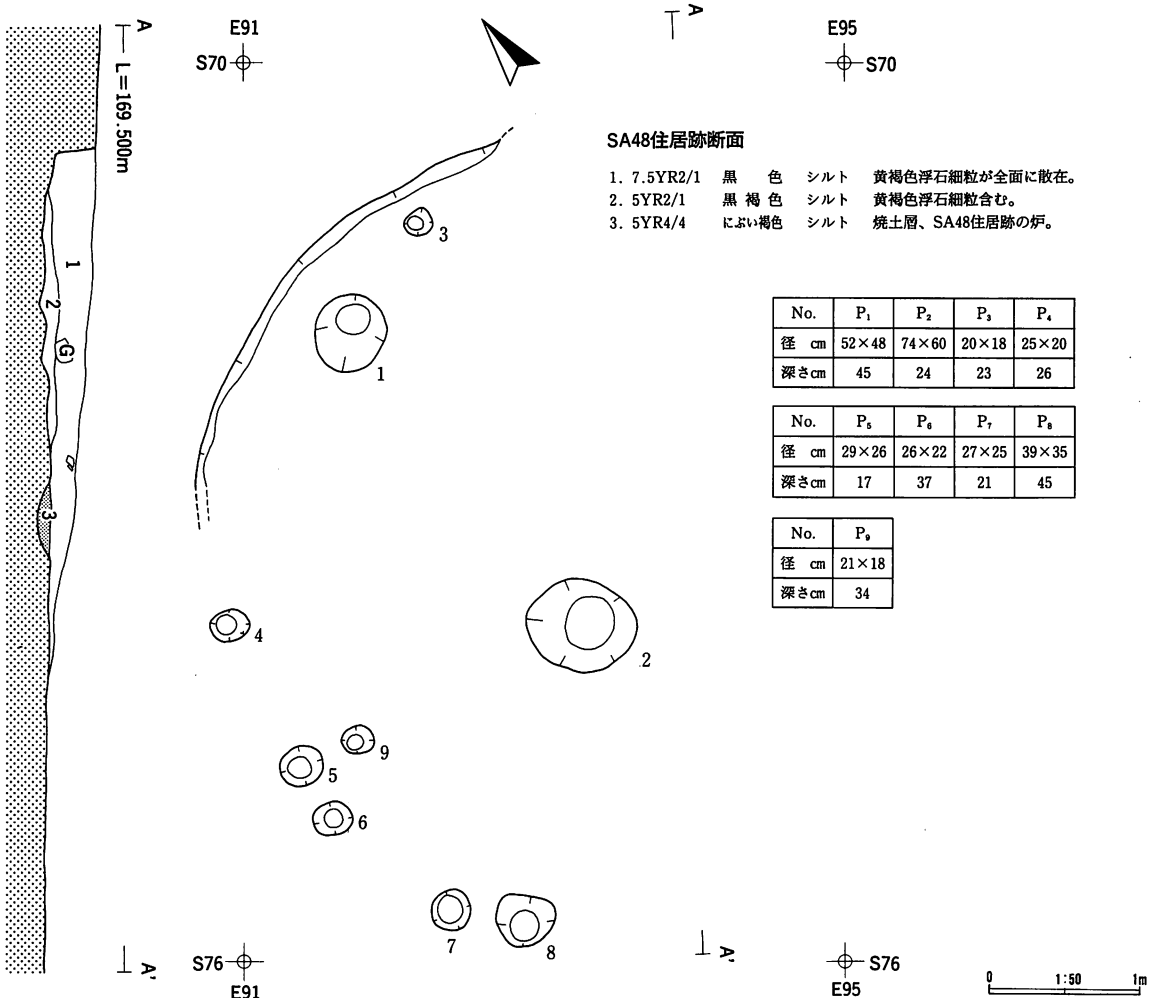
〈時期〉 縄文時代中期初頭、円筒上層 a 式の時期と思われる。

SA50 住居跡

遺構 (第47図、写真図版55)

〈位置〉 B調査区、HVIIグリッドの東側に位置する。

〈検出状況・重複関係〉 晩期の遺物包含層除去後に検出された。SB08・10 掘立柱建物跡を構成



している柱穴群より古い。

〈平面形・規模〉平面形は円形、長軸方向 4.3 m・単軸方向 4.1 m の規模である。推定床面積は 12.6 m²である。

〈埋土〉黄褐色浮石細粒混じりのシルト質の黒色土である。

〈壁・床面〉壁は外傾気味に立ち上がり、東壁 12 cm・西壁 17 cm・南壁 17 cm・北壁 22 cm である。風化した中礫火山灰を含む黒色土を床面としており平坦である。

〈柱穴〉痕跡的ではあるが、この住居跡に伴う柱穴は P1～P5 が検出されている。

〈炉〉ほぼ中央部に設けられており、地床炉である。

遺物（第 269・270 図、写真図版 250・251）

〈出土状況〉床面及び埋土から遺物が出土している。

〈土器・土製品〉1078 は胴部中央の内外面に軽い段を持つ浅鉢である。中央部に 1 条の刻目帯がめぐり頸部文様帯は無文、胴部下半には反転平行沈線文が施文されている。1079 は深鉢の下半部である。胴部上半には反転平行沈線文、下半部は無文となっている。1080・1081 は頸部が無文帯で胴部に LR 縄文が施文された壺である。条間が非常に密であり、重量感がある。1082 は RL 縄文が施文された、広口の壺である。口唇部は平坦に調整されている。1083 は壺の口縁部である。直立気味の頸部で口縁部付近でやや外傾している。異種原体による羽状縄文の平行縄文帯と無文帯が展開している。1088 は中実の土偶の頭部である。1089 は焼成粘土である。

〈石器〉石鏃 1 点、石斧 1 点、敲打磨石類 3 点が出土している。1092 は重量感があり、側縁部にアバタ状の敲打痕が集中している。1094 は半月形の偏平な礫で、表裏面には連続した凹部、直線状の側縁には擦面が見られる。

〈時期〉縄文時代後期前葉の土器（1086）も見られるが床面等の土器から田柄貝塚第Ⅲ群期に相当すると思われる。

SA51 住居跡

遺構（第 48・49 図、写真図版 56・57）

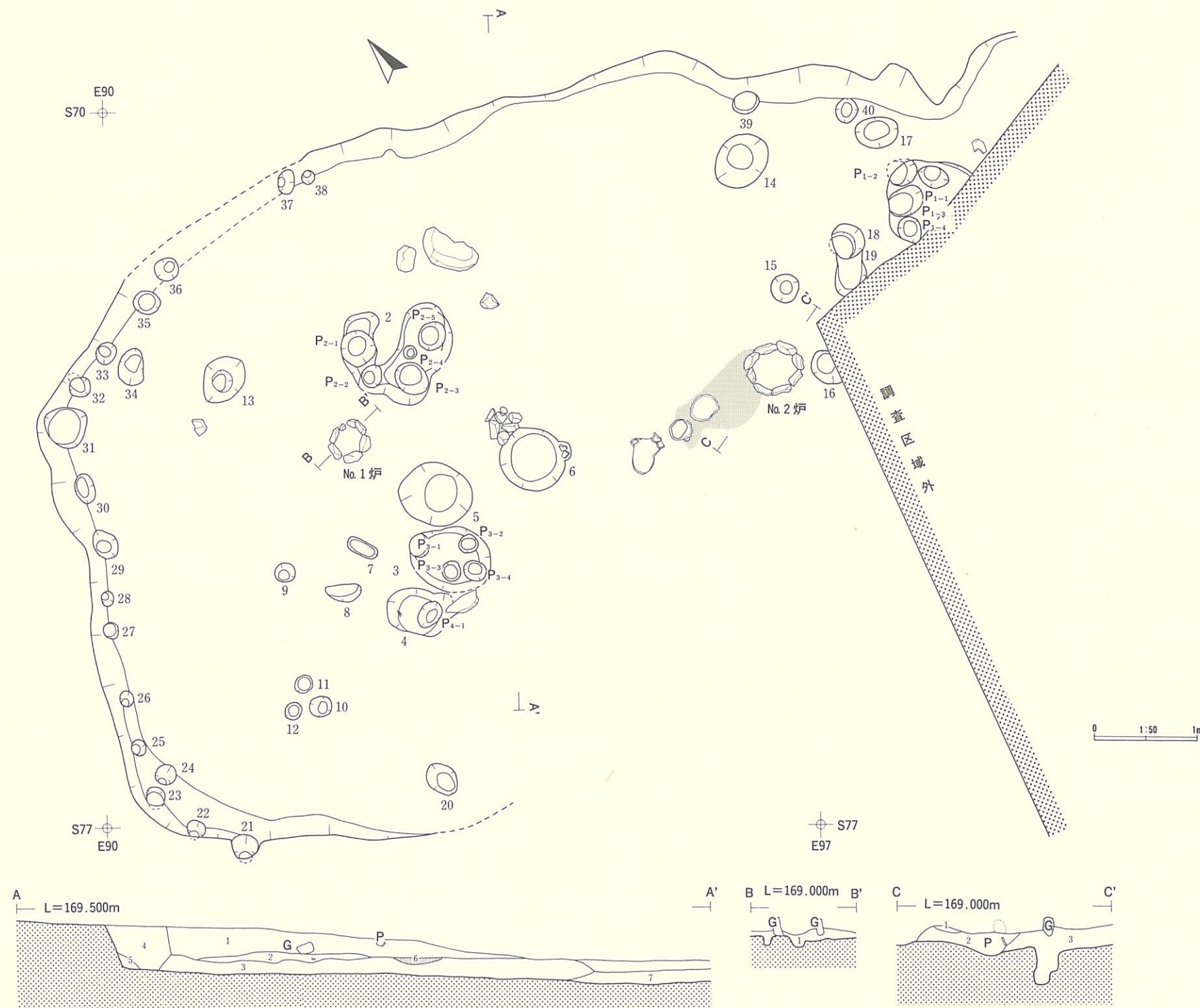
〈位置〉B 調査区、I VI グリッドに位置している。

〈検出状況・重複関係〉大半が住居跡外に延びており全貌については不明である。SD083 土壌墓と重複しており、住居跡が新しい。SB10 掘立柱建物跡の構成柱穴より新しい。

〈平面形・規模〉推定で直径 6.7 m 程度の、円形を基調とする。推定床面積は 23.0 m²である。

〈埋土〉黄褐色浮石細粒・焼土・炭化物混じりの黒色～黒褐色のシルト質土で構成されており、埋土中部から上部にかけて投棄された灰の層が広範囲に認められる。

〈壁・床面〉外傾気味に立ち上がっており、残存値は北壁 45 cm・西壁 30 cm・南壁 5 cm であ



No.	P ₁	P ₁₋₁	P ₁₋₂	P ₁₋₃	P ₁₋₄	P ₂	P ₂₋₁	P ₂₋₂
径 cm	93×88	31×21	29×29	37×26	29×22	110×96	34×33	23×20
深さ cm	42	54	64	73	68	20	57	56

No.	P ₂₋₃	P ₂₋₄	P ₂₋₅	P ₃	P ₃₋₁	P ₃₋₂	P ₃₋₄	P ₄
径 cm	35×29	13×13	29×26	83×65	23×20	18×18	22×18	66×44
深さ cm	69	32	58	30	68	32	57	37

No.	P ₄₋₁	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
径 cm	29×20	70×60	64×60	32×14	35×17	20×18	21×20	18×17
深さ cm	59	24	40	7	9	33	22	14

No.	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉
径 cm	17×16	47×40	47×57	28×26	35×30	42×30	34×30	36×30
深さ cm	13	61	48	49	17	20	66	39

No.	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇
径 cm	36×27	26×23	18×17	18×17	20×20	16×14	15×13	16×14
深さ cm	33	23	24	39	14	25	15	13

No.	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂	P ₃₃	P ₃₄	P ₃₅
径 cm	14×11	30×23	29×18	41×40	20×19	22×18	36×24	25×23
深さ cm	13	16	15	32	13	38	27	10

No.	P ₃₆	P ₃₇	P ₃₈	P ₃₉	P ₄₀
径 cm	23×22	24×15	13×12	26×20	24×21
深さ cm	16	40	21	8	12

SA49住居跡埋土断面

- 7.5YR2/1 黒色シルト SA48住居跡覆土。
- 5YR2/1 黒褐色シルト SA48住居跡覆土。
- 7.5YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒含む。
- 10YR2/1 赤黒色シルト 黄褐色浮石細粒含む。
- 5YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒含む。
- 5YR4/4 におい褐色シルト SA48住居跡炉の焼土。
- 5YR2/3 極暗赤褐色シルト 黄褐色浮石細粒含む。

SA49住居跡No.1 炉

- 7.5YR2/1 黒色シルト φ5~10mm±の黄褐色浮石細粒含む。

SA49住居跡No.2 炉

- 7.5YR4/6 褐色シルト 焼土層。
- 7.5YR2/1 黒色シルト φ1mm±の黄褐色浮石細粒散在。
- 7.5YR2/2 黒褐色シルト SA49住居跡より古い遺構の埋土。

第46図 SA49住居跡

る。南部浮石層を床面としており、炉を中心に黄褐色ローム混じりの黒褐色のシルト質土を用いて貼床がされていた。

〈柱穴〉支柱穴に相当する P1～P3、壁際を巡る壁柱穴が検出されている。壁柱穴はすべて炉の位置する住居跡の中心に向かって内傾している。

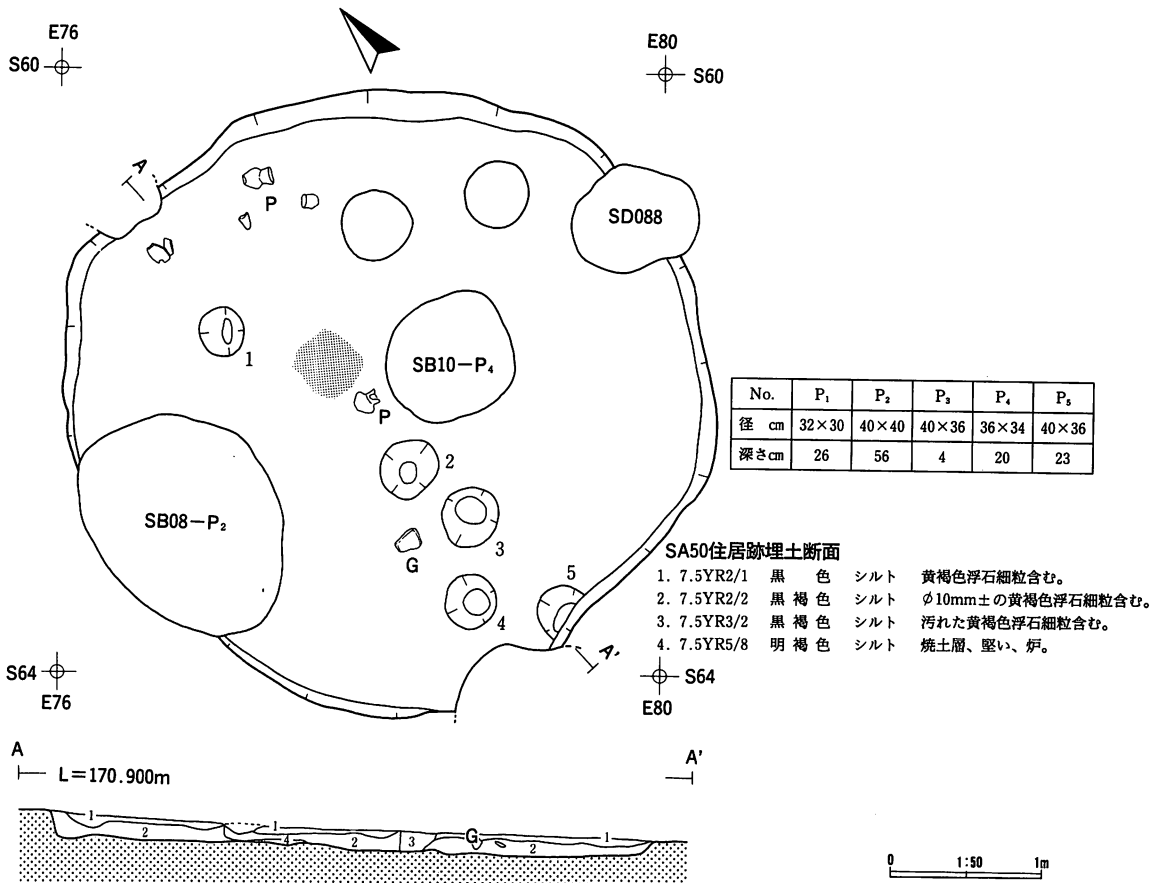
〈炉〉住居跡の中央部よりやや南側に片寄った地点にあり、直径 90 cm ほどの石囲炉である。東側に炉の縁石が認められなかったが、抜き取りの痕跡も認められなかったことから「C」字状を呈する炉である。炉の内部の埋土には厚く灰の層が認められた。

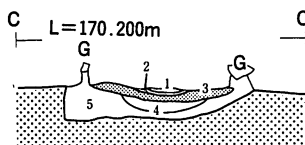
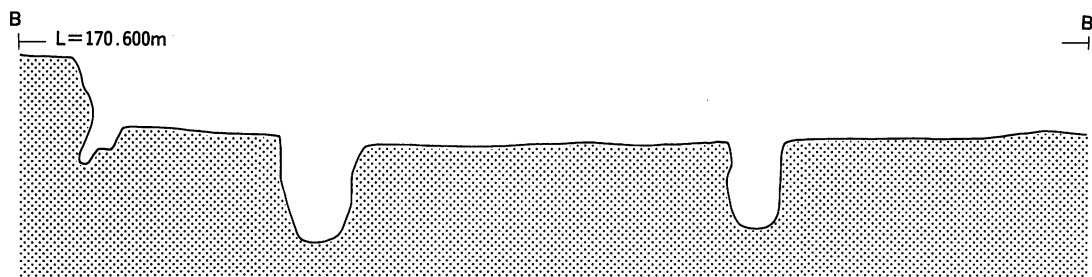
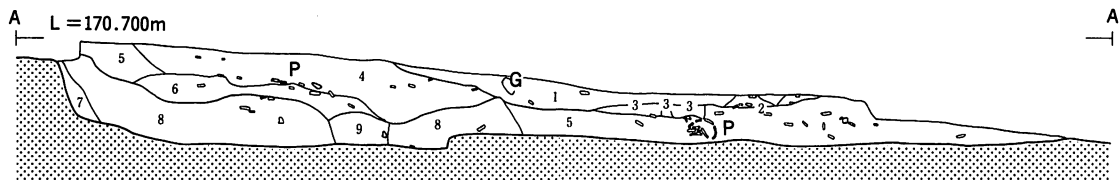
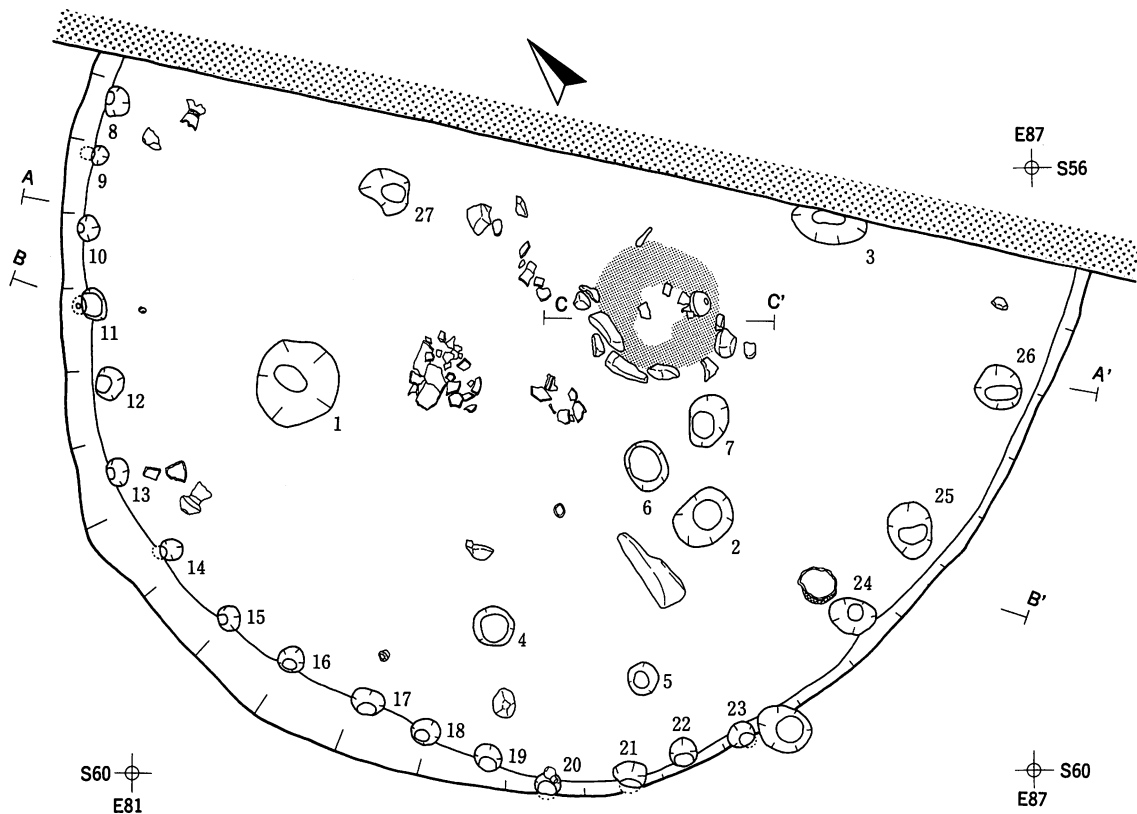
遺物（第 270～282 図、写真図版 251～259・261）

〈出土状況〉床面及び埋土全体から多量の遺物が出土している。埋土上部の遺物は縄文晩期中葉を中心とした遺物であり、I VII グリッドを中心として分布する包含層と一連のものであり、包含層の項に含めた。

〈土器・土製品〉1095 は口縁部に刻みを持つ低い山形突起が付された深鉢である。口縁部には平行沈線が巡りその間には連続する刻目が見られる。1096 は口縁部外端に押圧状刻目列が見られる平口縁の深鉢である。口縁部文様帯には工具による突き起こし状の押圧状刻目列が巡っている。胴部上半には複雑な入り組み状の曲線状文が展開している。胴部にも押圧状刻目列が認められるが胴部下半の文様構成については不明である。1097 は胴部の内外面に屈曲部の見られる平口縁の砲弾形の深鉢である。口縁部外端に 1 条、屈曲部に 2 条の押圧状刻目列が巡っている。頸部文様帯には縦方向に展開する連結状の弧状文が展開している。弧状文の連結部分には小粒の瘤が貼付されている。胴部文様帯は無文となっている。1098 は 5 単位波状口縁の深鉢である。胴部に屈曲部をもち、口縁部外端・屈曲部分・口縁部文様帯には押圧状刻目列が巡っている。波頂部からは押圧状刻目列が施文された 2 条の弧状文が垂下し、波底部には長い隆帯が貼付されている。頸部文様帯には入り組み状の連結弧状文が施文され、胴部は無文となっている。屈曲部に巡る 2 条の押圧状刻目列の間には、交互に先の鋭な瘤と刻みを持つ隆帯が貼付されている。頸部文様帯と口縁部文様帯に展開している各文様要素の結節部には瘤が貼付されている。1099 は胴部の内外面に屈曲部をもつ深鉢である。口縁は頂部が三角状の大波状と半月状の小波状の突起が交互に繰り返されている。口唇部は押圧状刻目列が施され、三角状の頂部は盲孔となりその部分から刻みを持つ隆帯が垂下している。半月形の低い頂部の下には 2 本の上向きの弧状沈線が施文されているがこのなかの一つには刻目の入る頂部もありこの部分が正面に相当すると思われる。口縁部文様帯、胴部文様帯の屈曲部には各 2 条の押圧状刻目列が巡っている。屈曲部分の 2 条の押圧状刻目列の間には刻みを持つ隆帯が貼付されている。胴部文様帯は無文である。1100 は無文の台付鉢である。口縁部には 2 個 1 対の低い叉状の山形突起が付される。1101 は台付の浅鉢である。口縁部には 4 単位の低い山形突起が付されている。横長の列点文が口縁

部外端に1条、胴部上半には弧状、脚部の接合部に1条施文されている。1102は無文の浅鉢である。1103は台付鉢の脚部である。無文の脚部には1個の焼成前の孔、接合部には瘤の貼付が見られる。1104は無文の台付鉢である。口縁部には4単位の刻みを持つ低い突起が付されている。1105は無文の台付鉢である。上半については不明であるが胴部に6単位の盲孔のボタン状の瘤が貼付されている。1106は台付鉢の脚部である。脚部の外端には先の鋭い瘤が貼付され、接合部には7単位の隆帯状の横長楕円文が展開している。1107は平口縁の無文の注口である。口縁部文様帯は長く頸部には膨らみを持っている。胴部最大径を肩の部分にもち、注口部はこの部分に付されている。注口部の根本は膨らみをもっている。1108は頸部に膨らみを持つ注口である。膨らみを持つ頸部には沈線により4単位の連結弧状文とその間に相対する弧状文が施文されている。沈線の交差部分には瘤が貼付されている。胴部は無文で、最大径部に相当する肩部付近に注口部が付され接合部分には刻みを持つみじかい隆帯が貼付されている。1109は小型の注口である。縦横に展開する平行沈線文が施文され、胴部最大径部には瘤が貼付されその間には連続する円形刺突文が施されている。胴部下半は無文となっている。1110は注口の口縁部と思わ





SA51住居跡埋土断面

- | | | | |
|---------------|------|-----|----------------------|
| 1. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒・微量の焼土含む。 |
| 2. 7.5YR5/6 | 明褐色 | シルト | |
| 3. 7.5YR8/2 | 灰色 | | 灰の層。 |
| 4. 7.5YR2/1 | 褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒・微量の焼土・炭化物含む。 |
| 5. 7.5YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒・少量の焼土・炭化物含む。 |
| 6. 7.5YR4/4 | 黒褐色 | シルト | 多量の焼土・炭化物含む。 |
| 7. 7.5YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒疎らに含む。 |
| 8. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒疎らに含む。 |
| 9. 7.5YR2/3 | 極暗褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒・微量の焼土含む。 |

SA51住居跡炉

- | | | | |
|-------------|-----|------|---------------|
| 1. 5YR7/1 | 灰色 | シルト | 灰。 |
| 2. 7.5YR2/1 | 黒色 | シルト | 赤色顔料混入。 |
| 3. 7.5YR6/6 | 橙色 | シルト | 焼土。 |
| 4. 7.5YR4/8 | 赤褐色 | 南部浮石 | 南部浮石が熱変化を受ける。 |
| 5. 7.5YR2/3 | 暗褐色 | 南部浮石 | 南部浮石が熱変化を受ける。 |

0 1:50 1m

第48図 SA51住居跡(1)

れる。口縁部外端とその下に押圧状刻目列が巡り、その間に異種原体による非結束羽状縄文が充填された入組帯縄文が展開している。1111 は注口である。口縁部については不明である。膨らみを持つ頸部には沈線による円文とそれを結ぶ弧状沈線文が展開している。頸部と胴部の結節部には小さい瘤が貼付されている。最大径を胴部の中央部よりやや上半にもち、注口部はこの部分に付されている。胴部上半には沈線による円文と縦方向に展開する弧状文が交互に配されている。1112 は注口の上半部である。大きく外反する頸部には縄文帯と無文帯が交互に展開しており、口縁部装飾帯の縄文帯には6個の瘤が貼付されている。1113 は胴部下半無文の注口の底部でやや上げ底風となっている。1114 は注口の上半部である。口縁部は無文で、膨らみを持つ頸部文様帯には3条の押圧状刻目列が巡りその間には弧状沈線文が施文されている。弧状沈線と押圧状刻目列の接点には小さい瘤が貼付されている。1115 は口縁部無文の注口である。1116 は口縁部外端に押圧状刻目列が見られる注口である。1117 は頸部に押圧状刻目列が巡る注口、押圧状刻目列の内部には4ヶ所に瘤が貼付されている。1118 は口縁部無文の注口である。1119 は香炉である。頂部には横方向の貫通孔、胴部には2個の円窓が見られる。円窓部分には沈線と刻みで文様が施文され縁には4個の小さい瘤が貼付されている。胴部最大径部には刻目帯が巡り、円孔を持つボタン状の貼付が2個見られる。外面に赤色顔料塗彩の痕跡が見られる。1120 は胴部にタスキ掛け状入組文が展開する壺である。1121 は小型の壺である。胴部上半には菱形沈線文と横長列点文が展開し、頸部の列点文帯には小さい瘤が6個貼付されている。また、胴部最大径部の列点文帯にも円孔のあるボタン状の瘤が貼付されている。胴部下半は無文で底部は上げ底となっている。1122 はLR縄文が施文された壺である。1123 は頸部がすぼまる無文の壺である。1124 は無文の壺で下半部のひび割れが認められる部分にはアスファルトが埋め込まれている。1125 は無文の壺である。1126 は広口の無文壺である。1127 はLR縄文が施文された深鉢で口唇部は平坦に調整されており、内面は擦痕が明瞭に残るミガキ様の調整が見られる。1128 は0段多条のLR縄文が施文された深鉢で、口唇部は肥厚せず内反りの平坦調整されている。1129 はLR縄文が施文された深鉢で、口縁部は内湾し口唇部はやや肥厚している。1130 はLR縄文が施文された深鉢である。底部がやや上げ底風となっている。1131 はLR縄文が施文された深鉢で口唇部は平坦調整されている。1132 はLR縄文が施文された鉢で口縁部には緩やかな山形突起が付されている。1133 はLR縄文が施文された深鉢である。1134 はLR縄文が施文された深鉢で口縁部は内湾している。1135 は附加条付きのLR縄文が施文された1単位の低い山形突起が付された深鉢である。1136 はLR縄文が施文された平口縁の深鉢である。1137 は胴部に雲形文が展開する浅鉢である。1138 は台付鉢で胴部は平行沈線文で区画され上半には雲形文、下半にはLR縄文が施文されている。1139 は口縁部に刻目帯が巡り胴部に雲形文が施文された浅鉢である。1140 は広口の壺である。装飾口縁で頸部は無文、胴部上半には縄文が施文されない

雲形文、下半は無文となっている。1141 は平底算盤形の注口である。胴部に雲形文が展開している。1142 は頸部のない胴部が長い無文の壺である。1143 は注口である。1144 は山形突起が付された胴部に LR 縄文が施文された鉢である。1145 は口縁部に低い山形突起と口唇部に刻みが施された鉢である。1146 は口縁部に低い山形突起と口唇部に刻みの見られる鉢である。頸部には平行沈線が巡り、胴部には LR 縄文が施文されている。1147 は小波状縁の鉢である。頸部は無文帯で胴部には LR 縄文が施文されている。1148 は貝殻復縁文で幾何学状の文様が展開している。1165・1166 は香炉の頂部である。横方向の貫通孔が見られる。1167 脚付き土器の脚部である。1168 は小型の香炉である。頂部はやや欠損しているが貫通孔の痕跡が見られる。胴部には 2 個の円窓、他の部分には小さな穿孔部が 2 個見られる。1169・1170 はミニチュアの台付土器である。1171 はミニチュアの無文の浅鉢である。1172 は片口土器の片口部である。1173 は土偶の頭部で中実である。顔面の各部位は隆帯で表出されており、頭部には刺突文、耳朵には貫通孔が見られる。また、後頭部分には垂直な孔が見られる。頸の部分にアスファルトの付着が見られる。1174 は土偶の胸腹部であり、中実である。腹面には刺突文が施文された隆起した正中線とその両側には連結する弧状沈線が見られる。背面には沈線による入り組み状文が見られる。腰部には帯状の剝離痕が見られる。1175 は屈曲の見られる中実土偶の下半身である。1176 は中実土偶の腕部である。1177 は中実土偶の左肩部である。1182 は中実土偶の左肩部である。腹背面は沈線で文様が描かれ、頸部にはアスファルトの付着が見られる。手の部分は前面に反り返っている。1183 は中実土偶の左肩部である。手は前面に反り返っている。1184 は土製の垂飾りである。上半部に貫通孔があり、表面には 2 個の瘤が貼付され、側面には沈線が巡っている。1185 は両面の中央が窪む滑車状の耳飾りと思われる。1186 は管状の耳飾りである。1187～1199 は円環状の耳飾りである。1200～1207 は土製円盤である。1208～1214 は焼成粘土である。

〈石器・石製品〉 石匙 2 点、石錐 2 点、不定形石器 4 点、石鏃 5 点、石斧 6 点、石棒 1 点、凹石 1 点、石製円盤 1 点、磨石 4 点、砥石 1 点、有孔石製品 1 点、台石 2 点が出土している。

〈時期〉 埋土上部から縄文晩期中葉前半頃の遺物も多数出土しているが、床面等の出土遺物から田柄貝塚第 V 群～VI 群の時期に相当すると思われる。

SA52 住居跡状遺構

遺構 (第 49 図、写真図版 54)

〈位置〉 B 調査区、J VIII グリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 小規模かつ不整形であるが、明確な壁が認められること、床面の壁際に壁柱穴に相当する小柱穴が認められることから住居跡状遺構と認定することにした。SA38 住居跡の床面を精査している段階で検出された。SA38 住居跡より新しく、SA49 住居跡より古く

位置づけられる。

〈平面形・規模〉開口部で2.3 m×1.6 m・深さ45 cmの規模で、平面形は不整形である。推定床面積は2.2 m²である。

〈埋土〉黄褐色浮石細粒を含む黒色のシルト質土である。

〈壁・床面〉壁は外傾気味に真っ直ぐに立ち上がり、東壁29 cm・北壁38 cm・西壁37 cm・南壁31 cmである。

〈柱穴〉直径20 cmで深さ11～33 cmの規模の壁柱穴が北壁際に4個検出されている。これらの壁柱穴はすべて中心に向かい内傾している。

〈炉〉検出されなかった。

遺物（第283図、写真図版261・262）

〈土器〉縄文時代前期前半の土器（1246～1259）と、縄文時代後期中葉の土器（1251～1253）が出土している。

〈時期〉床面等の土器から縄文時代前期前半の時期と考えられる。

SA53 住居跡

遺構（第50図、写真図版58）

〈位置〉B調査区、IⅧグリッドの西側に位置する。

〈検出状況・重複関係〉炉と柱穴の一部を検出したのみである。

〈平面形・規模〉不明である。

〈壁・床面〉壁は本来存在したと思われるが、明瞭に把握することはできなかった。

〈柱穴〉住居跡に伴うと思われる柱穴は5個検出されている。

〈炉〉住居跡内での位置関係は不明であるが、40 cm×30 cm・厚さ5 cmの楕円形状の地床炉である。

遺物（第283図、写真図版262）

〈土器・土製品〉1254は香炉で、沈線で菱形状の文様が施文されている。菱形状の内部に小さい円窓をもつ面が3面見られ、その部分には円形の刺突文が見られる。台部は上げ底状となっている。1260は土製円盤である。

〈時期〉床面等の土器から縄文時代後期後半田柄貝塚第IV群期に相当すると思われる。

SA54 住居跡

遺構（第51図、写真図版58）

〈位置〉B調査区、HⅥグリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA56 住居跡と一部重複しこの住居跡の上位から、検出されており当住居跡が新しいと思われる。北半は電話交換所の基礎により大きく破壊を受けている。南半部分は SA 59 住居跡と重複しているが新旧関係については不明である。また、SB 06 掘立柱建物跡と重複し構成柱穴より新しい。

〈平面形・規模〉 不明である。

〈埋土〉 住居跡の埋土下部は炭化物を含む黒褐色のシルト質土である。

〈壁・床面〉 確認できた部分では水平であり、特に炉の周辺は堅緻であった。

〈柱穴〉 この住居跡に関係すると思われる柱穴は4個 検出されている。

〈炉〉 円形を基調とする石囲炉と思われるが、北半は攪乱により既に失われている。

遺物 (第 283 図、写真図版 262)

〈土器・土製品〉 縄文時代晩期初頭、後期後葉・後期中葉の土器が出土している。1261 は3単位の曲線状の文様が施文された鉢である。1262 は土製円盤である。

〈時期〉 縄文時代晩期初頭の時期に相当すると思われる。

SA55 住居跡

遺構 (第 52 図、写真図版 59)

〈位置〉 B調査区、HVIグリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 大半が調査区域外に延びており、柱穴と壁の一部を検出したのみで全貌については不明である。攪乱及び他の遺構との重複が著しい。いずれの遺構よりも古く位置づけられる。縄文時代後期中葉頃の土器を除去した段階で検出された。

〈平面形・規模〉 推定で円形を基調とする、直径 4.0 m 程度の規模をもつ住居跡と思われる。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味立ち上がっており、壁の残存値は西壁で 7 cm・西南壁で 10 cm である。床面はほぼ平坦である。

〈柱穴〉 3個検出されている。柱穴内は 15 % 土の黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土で構成されている。

〈炉〉 炉は調査範囲内からは検出されなかった。

遺物 (第 284 図、写真図版 262)

〈土器〉 縄文時代後期中葉の土器が出土している。1268 は RL 縄文が施文された浅鉢である。

〈時期〉 縄文時代後期田柄貝塚第IV群期に相当する時期と考えられる。

SA56 住居跡

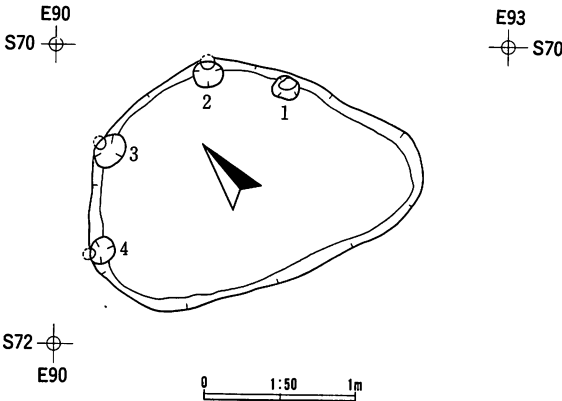
遺構 (第 53 図、写真図版 59・60)

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	56×54	40×40	50×22	28×26	22×22	32×30	34×28	20×16
深さ cm	66	56	26	27	18	29	30	19

No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径 cm	22×16	22×16	18×18	18×14	22×16	18×18	18×16	32×24
深さ cm	22	23	29	30	34	18	28	38

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	12×12	18×14	22×18	22×20	18×14	16×12	16×14	18×16
深さ cm	9	25	23	20	25	19	27	23

No.	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇
径 cm	38×30	32×30	34×28
深さ cm	38	28	53



SA52住居跡状遺構埋土断面

1. 7.5YR2/1 黒色 シルト φ3~10mmの黄褐色浮石細粒、炭化物を少量含む。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径 cm	16×15	20×17	24×18	18×16
深さ cm	16	27	33	11

第49図 SA51住居跡(2)・SA52住居跡状遺構

壁で18cm、南壁で28cmである。床面はほぼ平坦である。

〈柱穴〉P₁は主柱穴、P₃~P₂₆は壁柱穴に相当する。壁柱穴の多くは中心に向かい内傾している。P₁内の埋土は炭化物・焼土・少量の黄褐色浮石細粒を含む黒色のシルト質土である。壁柱穴は少量の黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土で構成されている。

〈炉〉住居跡のほぼ中央部から、76cm×70cm・厚さ10cmの規模の略円形の地床炉が検出されている。

〈その他〉P₂とした深さ27cmの小ピット内から多くの剥片が出土している。

遺物(第284~286図、写真図版262~264)

〈土器・土製品〉1273は広口の大型の壺である。口縁部外端と頸部に2条の刻目列が見られる。頸部文様帯は無文で胴部には幅の広い3単位の曲線状文が施文されている。1276~1278は口縁部外端、頸部に刻みが施されている。1284~1287は土製円盤である。1284は表面が四葉のクローバー状に成形されている。

〈石器〉円形搔器1点、石鏃2点、石錐1点、台石1点、20片の石器未製品の貯蔵剥片が出土している。貯蔵剥片はほぼ同じ大きさであり、二次加工が見られる剥片もある。

〈位置〉B調査区、GVIグリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉住居跡よりも新期の掘立柱建物跡の柱穴及び電話交換所の建物の基礎で床面が大きく破壊を受けている。SB02・03・04・05掘立柱建物跡の構成柱穴より古く位置づけられる。

〈平面形・規模〉残存状況等から直径4.5m前後の規模を持つ円形基調の住居跡と考えられる。推定床面積は12.3m²である。

〈埋土〉黄褐色浮石細粒を含む黒色のシルト質土である。

〈壁・床面〉壁は外傾気味緩やかに湾曲して立ち上がっており、壁の残存値は北壁で22cm・東

〈時期〉 縄文時代後期田柄貝塚第Ⅲ群期に相当する時期と考えられる。

SA57 住居跡

遺構（第 54 図、写真図版 60）

〈位置〉 B 調査区、HVI グリッドの中央部に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 明確なプランの検出はできなかったが、土層断面に炉と床面・壁の立ち上がり認められたため住居跡と認定した。

〈平面形・規模〉 推定で直径 2.5 m 中で、平面形は円形と思われる。

〈埋土〉 少量の炭化物を含む、黄褐色浮石細粒を含むシルト質土である。

〈壁・床面〉 断面図からの推定で、外傾気味に緩やかに立ち上がっている。床面は凹凸がある。

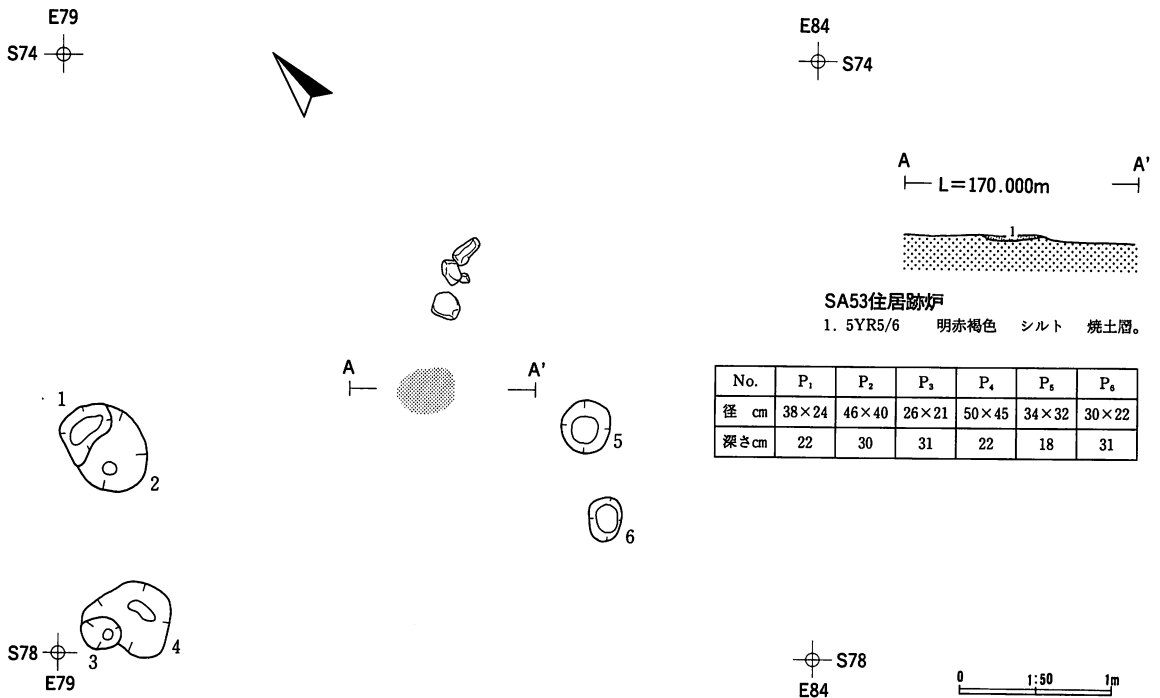
〈柱穴〉 住居跡に伴うと考えられる柱穴が 3 個検出されている。

〈炉〉 中央よりやや東側に寄った所に位置しており、70 cm × 30 cm ・ 厚さ 10 cm 土の長方形形状の地床炉である。

〈その他〉 住居跡の炉の 80 cm 西南方向に、直径 25 cm ・ 深さ 40 cm 程度の小ピットが 2 個あり、この小ピットの開口部にそれぞれ半頭大から頭大の垂円礫が埋置されていた。

遺物（第 286 図、写真図版 264）

〈土器〉 胴部に軽い屈曲部を持つ小型の鉢である。口縁部には刻みをもつ低い山形突起が付さ



第50図 SA53住居跡

れ、頸部文様帯には3列も連珠文が展開している。胴部にはLR縄文は施文されている。

〈石製品〉石製円盤が1点出土している。

〈時期〉地床炉から出土した土器から縄文時代晩期前葉の時期と考えられる。

SA58 住居跡状遺構

遺構（第55図、写真図版61）

〈位置〉B調査区、HVIグリッドの東側に位置している。一部を検出したのみである。

〈検出状況・重複関係〉SD099土坑を精査している段階で検出された。SD099土坑より古く位置づけられる。

〈平面形・規模〉規模は不明であるが、円形を基調とした住居跡と思われる。

〈埋土〉7%の黄褐色浮石細粒を含んだ暗褐色のシルト質土である。

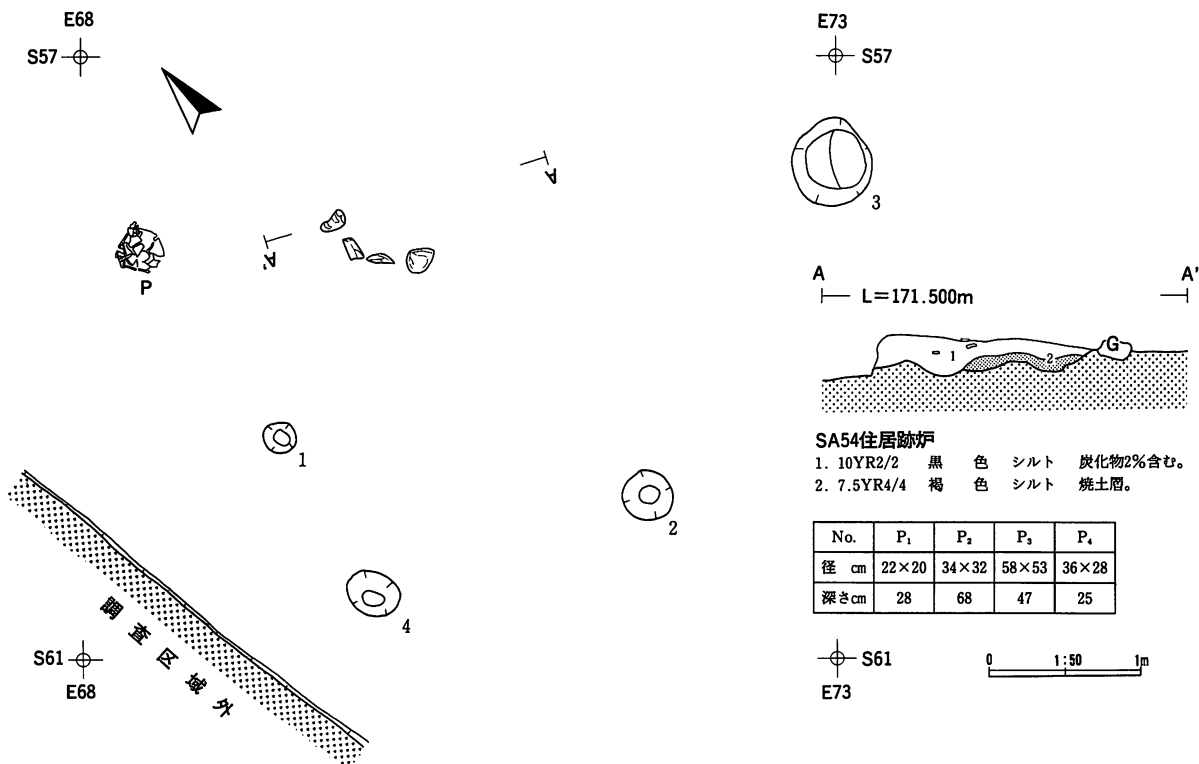
〈壁・床面〉床面はやや凹凸が軟弱である。

〈柱穴〉調査範囲内からは検出されなかった。

〈炉〉不整形で厚さ5cm±の規模の地床炉が検出された。

遺物（第287図、写真図版264）

〈土器・土製品〉1299は台付鉢である。口縁部は装飾縁で、頸部文様帯にはC字状文と羊歯状

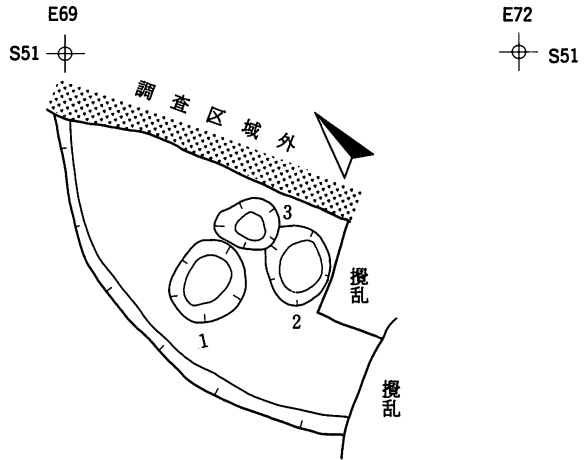


第51図 SA54住居跡

文が交互に配され、胴部にはLR縄文が施文されている。1300は0段多条のRL縄文が施文された平口縁の深鉢である。口唇部は平坦に調整されている。1301は土製円盤で表面は広く打ち欠かされている。1302・1303は焼成粘土である。

〈石器〉半月形扁平の磨石が1点出土している。擦面は側縁にある。

〈時期〉縄文時代晩期前葉後半頃に相当すると思われる。



SA59 住居跡

遺構 (第56図、写真図版61)

〈位置〉B調査区、HVⅦグリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉現表土を10cm程度掘り下げた段階で石囲炉が検出され、さらに住居跡に伴うと考えられる柱穴も存在することから住居跡の一部と認定した。SB06掘立柱建物跡の構成柱穴より新しい。

〈平面形・規模〉不明である。

〈埋土〉微量の炭化物・焼土を含む黄褐色浮石細粒混じりの黒色から黒褐色のシルト質土である。

〈壁・床面〉床面は水平で、特に炉の周辺は堅緻であった。

〈柱穴〉住居跡に関連すると思われる柱穴が6個検出されている。

〈炉〉石囲炉が検出されている。南側は開口しているが、抜き取りの痕跡などが認められなかったことから「C」字状の石囲炉である。

遺物 (第287～290図、写真図版265～267)

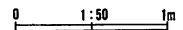
〈土器・土製品〉1305は台付鉢である。畝状の装飾口縁で頸部に2本の沈線が巡り、口縁部文様帯に入組三叉文、胴部にLR縄文が施文される。1306は鉢である。畝状の装飾口縁で頸部に2本の沈線が巡り、口縁部文様帯に入組三叉文、胴部にLR縄文が施文される。1307は台付鉢である。口縁部外端に円形の刺突文、頸部文様帯に2段の羊歯状文、胴部にLR縄文が施文されている。頸部は内湾し、口縁部付近で短く外反している。1308は台付鉢の台部である。4単位



SA55住居跡埋土断面

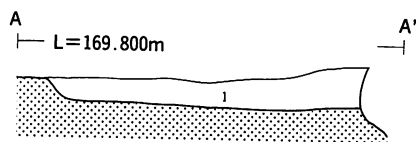
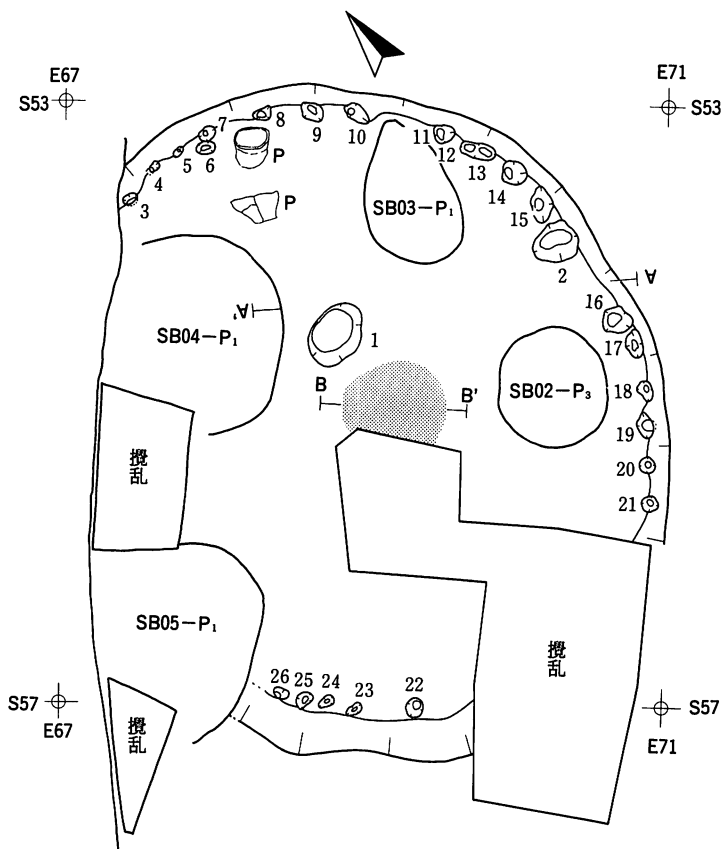
1. 10YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒3%含む。

No.	P ₁	P ₂	P ₃
径 cm	56×47	53×42	43×34
深さ cm	18	11	11



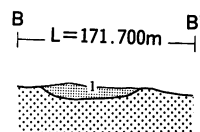
第52図 SA55住居跡

の透かし状の玉抱き三叉文が施文される。両面ともいねいにミガキ調整されている。1309は台付鉢の台部である。台部は縄文帯と無文帯で構成されている。1310は低い山形突起の付く無文の浅鉢である。口縁部付近に軽い変換がありそのまま外傾している。1311は丸底の注口である。胴部上半に三叉文が展開し、胴部は無文である。短い注口部は最大径に相当する肩部に付き、根本の部分にも三叉文が見られる。1312は無文の壺である。1313はミニチュアの浅鉢で胴部上半に刻目列が巡り、胴部は無文である。1314は無文の広口壺で、底部は平底である。1315はLR縄文が施文された深鉢である。口唇部は平坦に調整されている。1316は無節縄文が施文された平底の壺である。1317は口縁部がやや内湾しているLR縄文が施文された深鉢である。1318は口縁部が直立気味のRL縄文が施文された深鉢である。1341は内外面に赤色塗彩された



SA56住居跡埋土断面

1. 10YR2/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒3%含む。



SA56住居跡炉

1. 5YR4/8 赤褐色 シルト 焼土層。

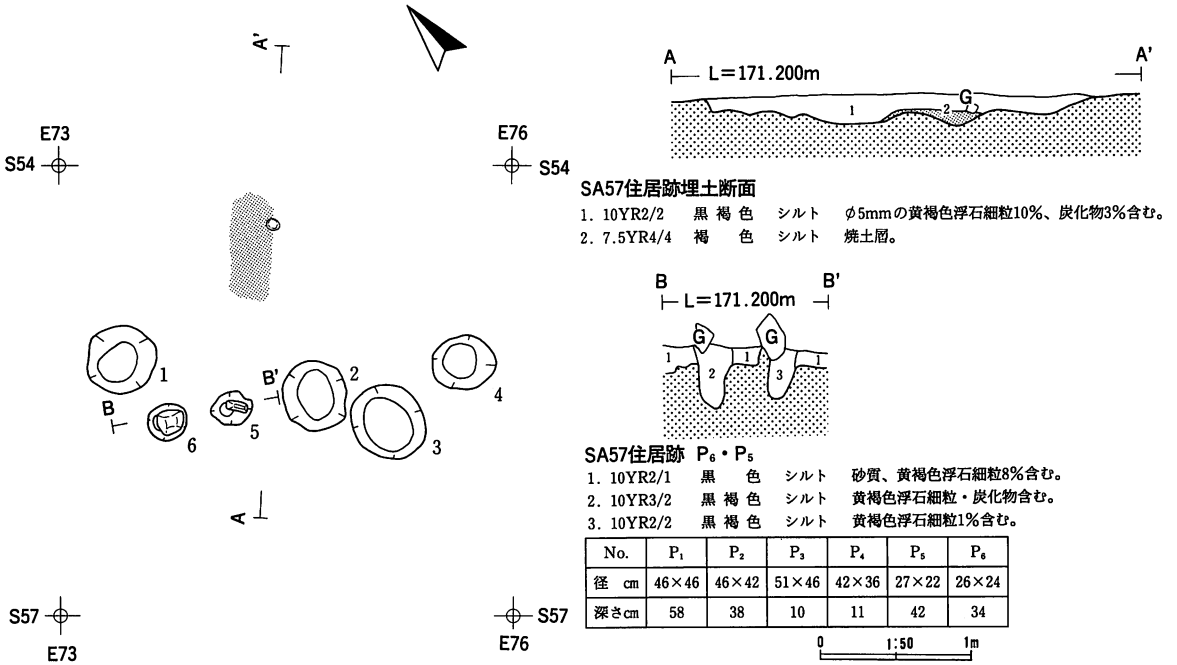
No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
径 cm	44×32	31×26	10×6	7×5	8×4	12×8	11×9
深さ cm	27	28	8	1	4	42	7

No.	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄
径 cm	13×8	13×11	18×10	13×11	11×8	13×10	16×16
深さ cm	12	33	6	22	21	12	23

No.	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁
径 cm	24×14	19×17	18×11	13×10	17×10	10×10	11×10
深さ cm	21	35	17	16	11	14	7

No.	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆
径 cm	13×11	11×7	11×7	12×9	10×7
深さ cm	20	9	6	16	4

第53図 SA56住居跡



第54図 SA57住居跡

無文壺の口縁部である。1342 は赤色塗彩された中空土偶の腹部付近と思われる。1343 は中空土偶の脚部である。1344 は中実土偶の胸腹部である。1345 は横に貫通孔の見られる棒状土製品である。1346 から 1352 は土製円盤である。1353・1354 は焼成粘土である。

〈石器・石製品〉 石棒 1 点、石鏃 5 点、石製円盤 2 点が出土している。

〈時期〉 縄文時代晩期前葉前半頃に相当する時期と考えられる。

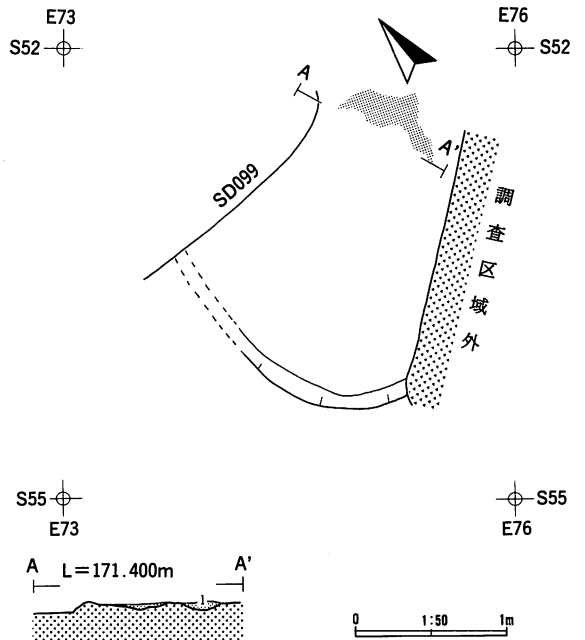
SA60 住居跡

遺構 (第 57 図、写真図版 62・63)

〈位置〉 B 調査区、HIX グリッドの北東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SD140・SC32 焼土遺構よりも古く、SB21 掘立柱建物跡より新しく位置づけられる。

〈平面形・規模〉 直径 4 m 土で円形を基調とする住居跡である。推定床面積は 11.0 m² である。



第55図 SA58住居跡状遺構

〈埋土〉黄褐色浮石細粒を含む黒色のシルト質土である。

〈壁・床面〉床面は平坦である。壁は北壁 33 cm・西壁 21 cm・南壁 15 cm・東壁 15 cm で外傾気味に湾曲して立ち上がっている。

〈柱穴〉P4・P7・P13 が主柱穴に相当し、P2・3・5・6・9・10・11・8 が壁柱穴に相当する。

〈炉〉住居跡のほぼ中央部に石囲炉検出された。直径 70 cm 位の円形を基調としており、東側部分が開口している。礫の抜き取りの痕跡も認められないことから、本来から「C」字状の形態の炉であったと考えられる。

〈その他〉P12 とした直径 22 cm・深さ 30 cm の小ピットに小形の鉢形土器が正立の状態で埋設されていた。炉南側の P 14 とした直径 55 cm・深さ 40 cm 土坑は、内部に熱を受けた礫や廃棄された焼土などが認められておりこの住居跡に伴う廃滓用の土坑と考えられる。

遺物 (第 291～293 図、写真図版 267・268)

〈土器・土製品〉1364 は無文の浅鉢である。1365 は低い山形突起が付された深鉢である。口縁部文様帯に 2 条の押圧状刻目列が巡り、胴部上半には間に横長楕円文を囲むような弧状文が展開している。1366 は 8 個の山形突起が付く鉢である。山形突起の頂部は放射状の溝が切られている。口縁部装飾帯は縄文帯、胴部上半には縄文が充填された右下がり入組帯状文が展開している。1367 は山形突起が付された平口縁の鉢である。口縁部装飾帯は縄文帯その下には櫛歯状の刻目帯、その下には入り組み状の帯状文が展開すると思われる。1368 は LR 縄文が施文された平口縁の鉢である。1369 は無文の鉢である。底部は上げ底風で、胴部には成形時の輪積みの痕跡が明瞭に残されている。1370 は無文の小型台付鉢である。1371 は RL 縄文が施文された小型壺である。1372 は異種原体による非結束羽状縄文が施文された深鉢である。口唇部は平坦に調整されている。1373 は頸部に軽い屈曲部を持つ無文の鉢である。1374 は 0 段多条の LR 縄文が施文された平口縁の深鉢である。1375 は異種原体による非結束羽状縄文が施文された深鉢である。1376～1379 は押圧状刻目列が施文されている。1389 は無文のミニチュアの浅鉢である。1390 は耳飾り、1391 は土製円盤、1392・1393 は焼成粘土である。

〈石器・石製品〉不定形石器 1 点、磨石 1 点、矢羽根状刻みのある石棒頭部 1 点が出土している。

〈時期〉出土土器の特徴から縄文時代後期後半田柄貝塚第 V～VI 群の時期に相当すると思われる。

SA61 住居跡

遺構 (第 58・59 図、写真図版 63)

〈位置〉B 調査区、HIX グリッドの南側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA65 住居跡より新しく、SA62・SA63 住居跡よりも古く位置づけられる。他の遺構に切られ住居跡の一部が残っているだけである。

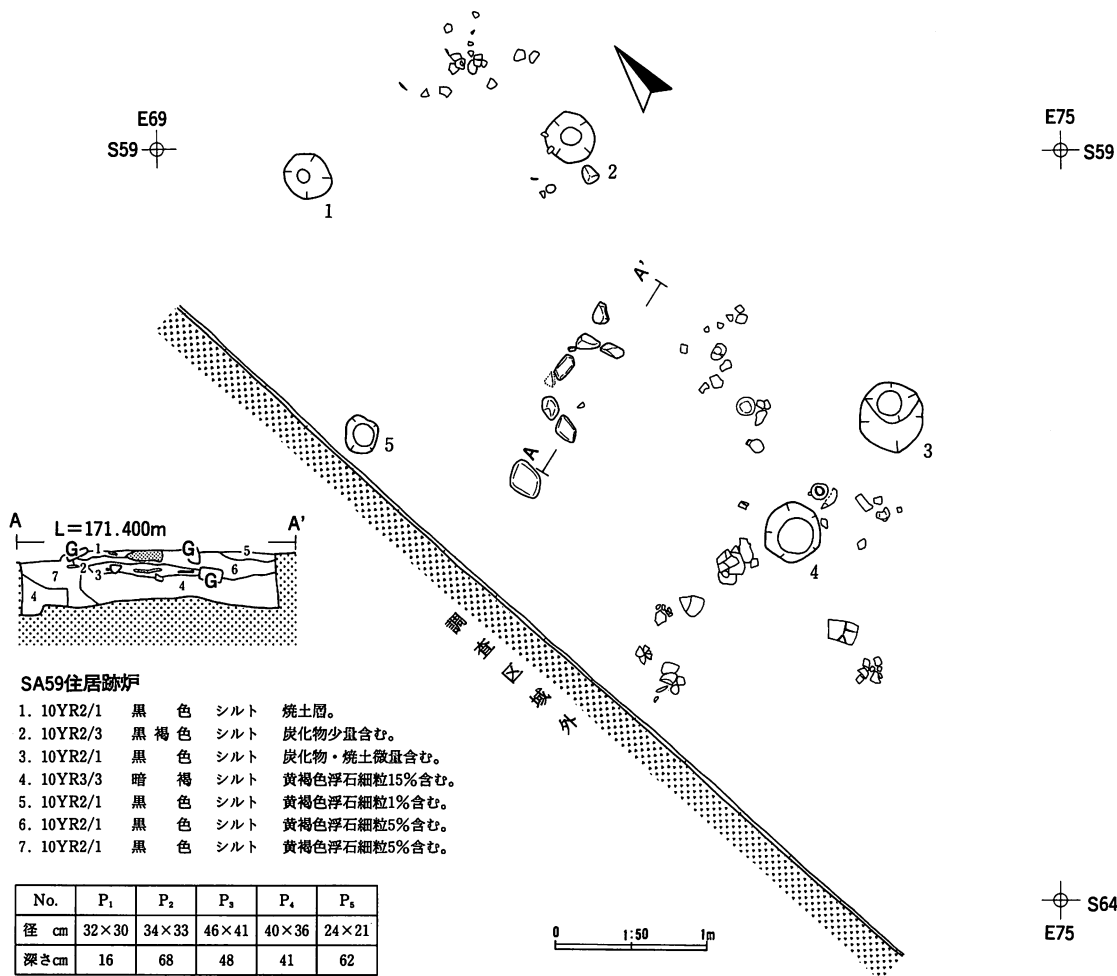
〈平面形・規模〉 推定で略円形、開口部の規模は径 4.0 m 程度と考えられる。推定床面積は 9.7 m²である。

〈埋土〉 埋土は、黄褐色浮石細粒が混じった黒色のシルト質土で構成されている。

〈壁・床面〉 壁は緩やかに立ち上がり、壁の残存値は北壁で 21 cm・東壁で 22 cm である。床面はほぼ平坦である。

〈柱穴〉 柱穴は P1～P7 まで検出されており、P1・P4 は壁柱穴、P3・5 は支柱穴、その他は間切り等の補助的な柱穴と考えられる。柱穴の埋土はしまりのない黄褐色浮石細粒混じりの黒色のシルト質土である。

〈炉〉 検出されていない。



第56図 SA59住居跡

遺物 (第 293 図、写真図版 268・269)

〈土器・土製品〉 1407 は切断土器の壺の蓋である。1408～1412 は土製円盤である。特に 1408・1409・1411 は中央部まで打ち欠きが見られる。1413・1414 は焼成粘土である。

〈石製品〉 石斧が 1 点出土している。

〈時期〉 縄文時代後期田柄貝塚第Ⅲ群期に相当する時期と考えられる。

SA62 住居跡

遺構 (第 58・59 図、写真図版 64)

〈位置〉 B 調査区、HIX グリッドの南側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA61 住居跡より新しく、SA63 住居跡より古く位置づけられる。

〈平面形・規模〉 推定で略円形、開口部の規模は径 3.0 m 程度と考えられる。推定床面積は 4.4 m²である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒の混じった黒色のシルト質土であり、埋土下部付近には特に多量の大粒の炭化材粒子が混じっており焼失を受けた住居跡と思われる。

〈壁・床面〉 壁は緩やかに立ち上がり、壁の残存値 (SA61 住居跡の床面より) は東壁で 20 cm 程度である。

〈柱穴〉 検出されていない。

〈炉〉 東壁から西側に向かって、約 1 m ほどの亜円礫を連ねた列状の石組が認められる。これらの礫には特に被熱の痕跡は認められず、炉の構成礫ではない。

遺物 (第 294 図、写真図版 269)

〈土器〉 1415 は LR 縄文が施文された深鉢の揚底風の底部である。

〈石器〉 石鏃 1 点、敲石 1 点が出土している。1422 の敲石は長軸方向の両端部にアバタ状の敲打痕が見られる。

〈時期〉 縄文時代後期と思われるが詳細については不明である。

SA63 住居跡

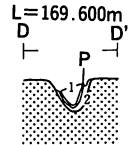
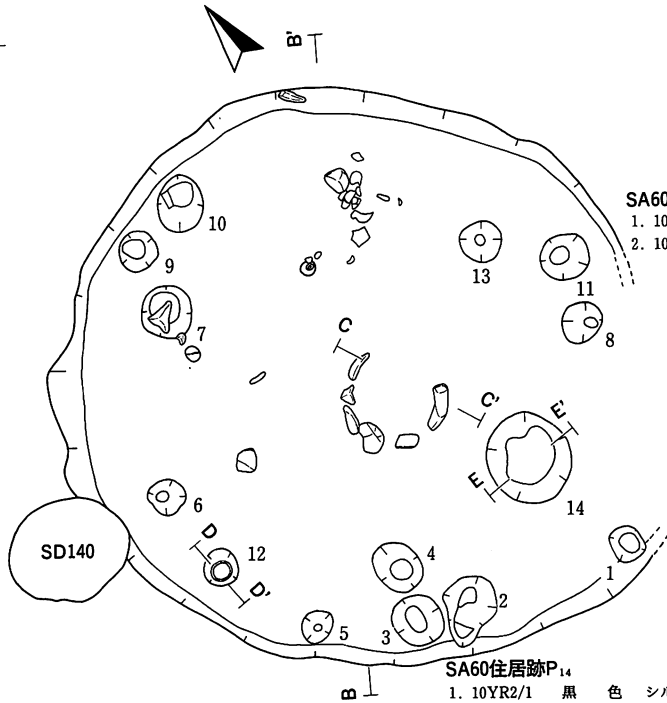
遺構 (第 58・59 図、写真図版 64～66)

〈位置〉 B 調査区、HIX・HX グリッドに位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA61・62 住居跡より新しく位置づけられる。

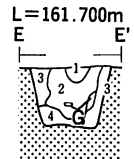
〈平面形・規模〉 平面形は略円形、規模は長軸方向 5.8 m・単軸方向 4.9 m である。推定床面積は 23.1 m²である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒混じりの黒色から黒褐色土のシルト質土で構成されており、部



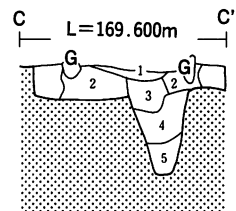
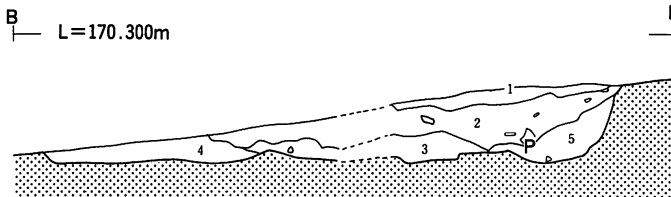
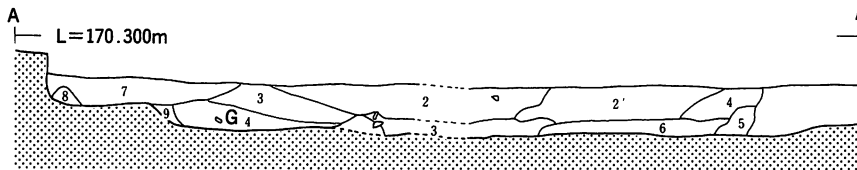
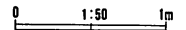
SA60住居跡P₁₂

- 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト φ5mm±の黄褐色浮石細粒含む。
- 2. 10YR3/3 暗褐色 シルト 汚れた黄褐色浮石細粒含む。



SA60住居跡P₁₄

- 1. 10YR2/1 黒色 シルト φ10mm±の黄褐色浮石細粒10%焼土・炭化物含む。
- 2. 10YR3/3 暗褐色 シルト 焼土多量含む。
- 3. 10YR2/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒2%含む。
- 4. 10YR2/1 黒色 シルト しまりなし。



SA60住居跡埋土断面

- 1. 10YR2/1 黒色 シルト φ5~10mmの黄褐色浮石細粒50%以上含む。
- 2. 10YR2/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒7%、焼土・炭化物を含む。
- 2'. 10YR2/1 黒色 シルト 2層より黄褐色浮石細粒多く含む。
- 3. 10YR2/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒2%以上、炭化物・焼土微量含む。
- 4. 10YR2/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒2%含む。
- 5. 10YR1.7/1 黒色 シルト 褐色土混じる。
- 6. 10YR1.7/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒7%含む。
- 7. 10YR1.7/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒30%含む。
- 8. 10YR4/4 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒50%含む。
- 9. 10YR3/2 黒褐色 砂質シルト

SA住居跡炉

- 1. 7.5YR5/8 明褐色 シルト 焼土層。
- 2. 10YR1.7/1 黒色 砂質シルト
- 3. SB21-P4覆土
- 4. SB21-P4覆土
- 5. SB21-P4覆土

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	23×21	48×37	34×32	35×28	23×19	25×23	35×32	29×25
深さcm	23	88	44	18	23	28	23	30

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄
径 cm	27×25	38×30	32×29	24×24	28×27	58×55
深さcm	15	7	38	22	28	41

第57図 SA60住居跡

分的に他の遺構を構築した際の廃土と思われる南部浮石の再堆積層が層状に見られる。

〈壁・床面〉壁は垂直に立ち上がり、北壁で 62 cm・西壁で 24 cm・南壁 26 cm・東壁で 44 cm (SA62 住居跡の床面より)の残存値である。炉を中心として南側部分には貼床が施されている。

〈柱穴〉柱穴は主柱穴と壁柱穴が確認されており、P1・2・3・4・5・6 が主柱穴に、P7・8 は出入口状施設に関わる柱穴に相当する。これら主柱穴のなかで、P3・4・5 からは明瞭な柱痕跡が認められた。

〈炉〉住居跡のほぼ中央部に 54 cm×50 cm、厚さ 5 cm の規模を持つ地床炉である。

〈その他〉東側の壁の部分に、住居跡の内部に入り込んだ南部浮石層の掘り残し部分が認められ、この部分が出入口に相当すると考えられる。

遺物 (第 294～298 図、写真図版 270～273)

〈土器・土製品〉1441 は平行帯縄文に縦の沈線が施文されている。1442 は平行沈線の間に斜位の沈線が見られる。1444 は反転平行沈線文である。1446 は台付の浅鉢である。刻みのある 4 単位の貫通孔のある山形突起が付されている。口縁部裝飾帯と台の接合部には連続する刻目が見られる。胴部には 3 本沈線による曲線文が施文されている。1447 は LR 縄文が施文された口唇部平坦調整の深鉢である。1448 は RL 縄文施文が施文された口唇部外反り平坦調整の深鉢である。1449 は 0 段多条の RL 縄文が施文された深鉢である。1450 は 0 段多条の RL 縄文が施文された深鉢である。1451 は LR 縄文が施文された深鉢である。1452 は口縁部に 2 本の沈線が巡る無文の浅鉢である。1453 は台付鉢の台部である。1454 は口縁部に刻みのある 2 個 1 対の低い山形突起がふされた鉢である。頸部文様帯には 4 単位の匹字文、胴部に LR 縄文が施文されている。1456 は押圧状刻目列が施文された縄文後期後葉の土器である。1462 は入組右下がりの入組帯縄文が施文された晩期初頭の土器である。1455・1457～1461 は縄文晩期終末から弥生初頭に相当する土器である。1463 は頸部に屈曲部をもち口縁部がすぼまる小型の壺である。頸部に太い沈線が 1 本巡り、口縁部文様帯は無文胴部には LR 縄文が施文されている。1464 はミニチュアの台付土器である。円形の小さい刺突文が施文される。1465 は胴部に刺突文が施文されたミニチュアの土器である。1466 はスタンプ形土製品である。つまみ部には横方向の貫通孔、印面部分には右巻きの渦巻沈線文が施文されている。1467 は耳飾り、1469～1470 は土製円盤である。1468 の土製円盤は中心部付近まで打ち欠かされている。

〈石器・石製品〉不定形石器 3 点、石鏃 4 点、石錐 2 点、石製円盤 1 点、石斧 2 点、敲石 1 点が出土している。1483 の敲石は多面体である。

〈時期〉埋土最上部から縄文時代晩期終末期の土器 (1452～1454) も出土しているが、床面および埋土下部の出土遺物から縄文時代後期田柄貝塚第 III 群～IV 群の時期に相当すると思われる。

SA64 住居跡

遺構（第 60-1・60-2 図、写真図版 67～69）

〈位置〉 B調査区、I IX・I Xグリッドの境界上に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SD134・SD137・SD136 土坑と重複している。

〈平面形・規模〉 平面形は円形、規模は開口部で長軸方向 4.9 m・短軸方向 4.8 m である。推定床面積は 16.3 m²である。

〈埋土〉 埋土の上部は黄褐色浮石細粒を含む黒褐色が主体で、埋土下部は焼土・炭化物を多量に含む黒色土で構成されている。

〈壁・床面〉 壁は湾曲するように立ち上がり、壁高は北壁 60 cm・東壁 44 cm・南壁 7 cm・西壁 17 cm の残存値である。炉の周辺を中心に主に北側部分に貼床が施されている。

〈柱穴〉 柱穴に相当するものは 40 個検出されておりそのなかで P1・P2・P5 が支柱穴を構成し、P6～P40 は壁柱穴である。壁柱穴の多くは住居跡の中央部に向かい内傾している。

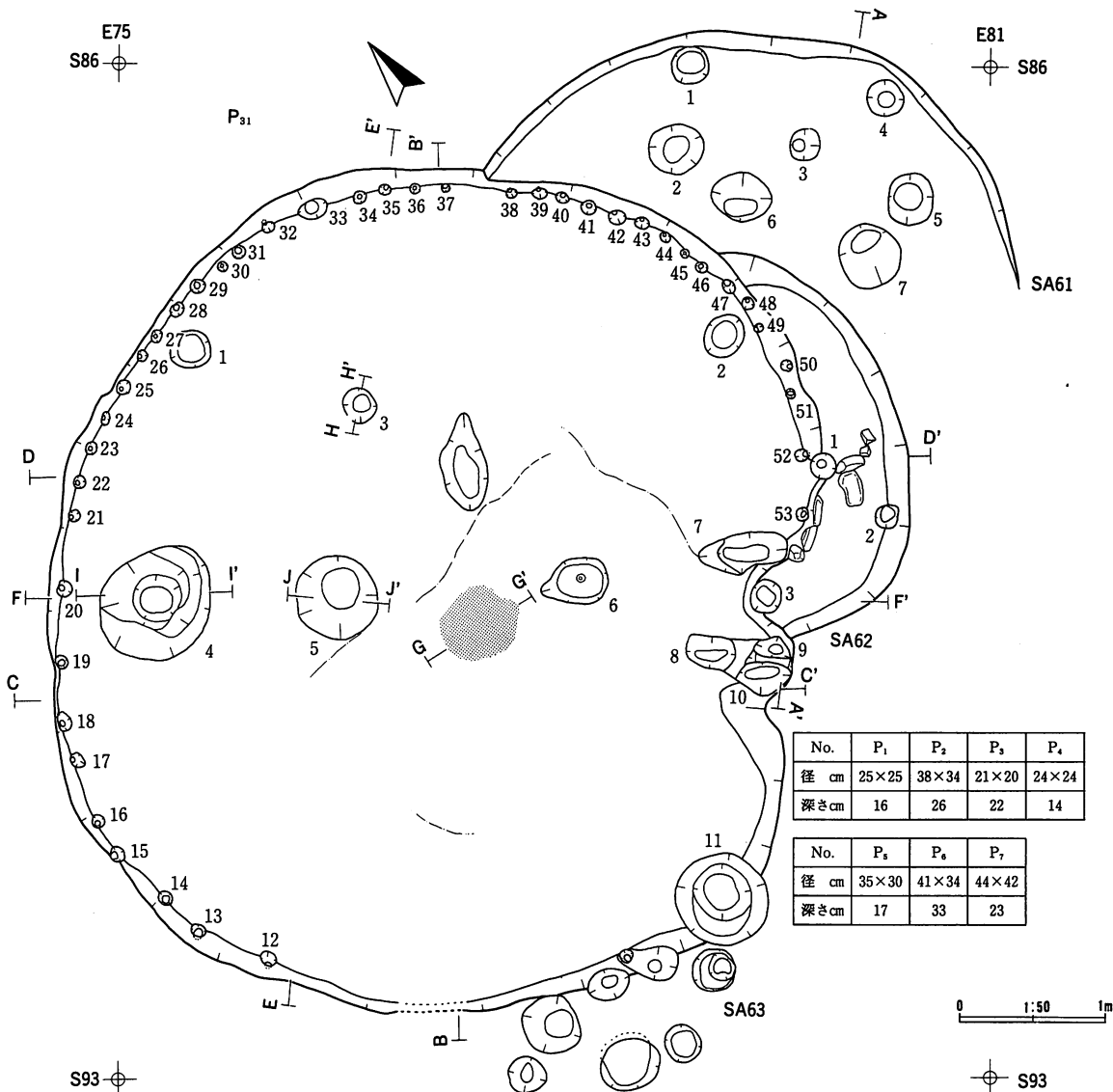
〈炉〉 炉はほぼ中央部にあり、90 cm×86 cm・厚さ 15 cm の規模を持つ地床炉である。

〈その他〉 埋土下部の土層の状況や床面上での炭化材の残状状況から焼失を受けた住居跡である。住居跡の南壁に内側に入り込んだ緩やかなスロープ状の南部浮石層の掘り残しがあり、この部分が P3・P4 とともに出入口状施設を構成している。炉の北東側にある SD158 土坑は、埋土上部に 20 cm ほどの層厚のしまりのない焼土が充填されており、炉で形成された焼土等の廃滓の施設と考えられる。炭化材は特に住居跡の中央部も床面から 10～15 cm 浮いた場所に集中しており、また北半を中心に埋土下部に 40 数個の拳大～頭大の礫が集中している。これらの礫には特に二次的な被熱は認められなかった。

遺物（第 299～302 図、写真図版 273～275）

〈出土状況〉 床面付近から炭化した堅果類が出土している。出入口状施設と反対側の北壁付近の床面から内部が空洞の単孔壺が出土している。

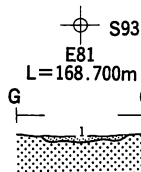
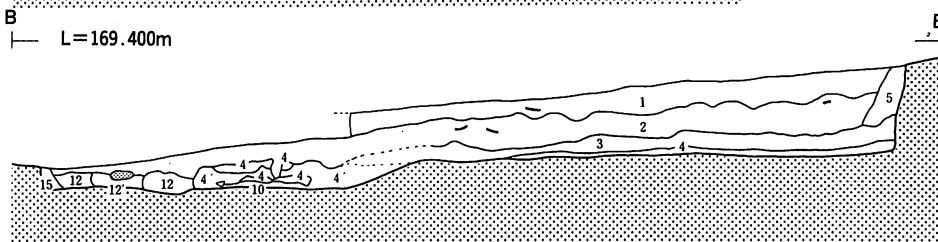
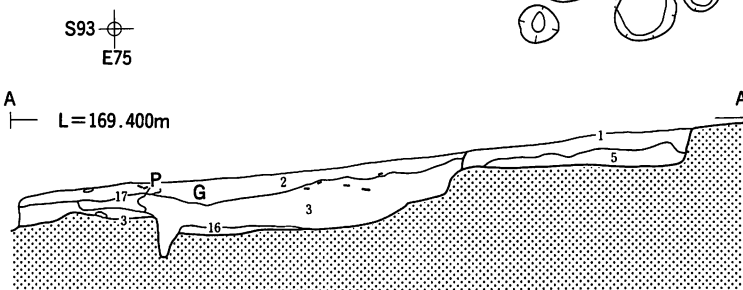
〈土器・土製品〉 1484 A は大波状縁の深鉢である。口縁部装飾帯は無文で、縄文帯で区画された胴部上半には単位の大きい曲線状文が施文され、胴部下半は無文である。1484 B は口縁部が欠損した単孔壺である。頸部に膨らみがあり、体部は胴長である。胴下半に穿たれた孔は焼成前に行われ、孔の周囲は若干盛り上がっている。胴部に 3 単位の曲線状無節縄文が施文されている。1485 は斜行縄文が施文された頸部の長い壺である。口唇部は平坦に調整されている。1486 は LR 縄文が施文された浅鉢である。1493 は平口縁で口縁部が内湾する深鉢である。口縁部文様帯には刺突文のある縦隆帯が貼付されている。下半部については不明であるが、上半部には縄文が施文された隆沈線で方形文・円文が展開している。1498 は頸部に大きめの刺突施された区画隆帯をもち、幅の広い口縁部と胴部には縦位の撚糸文が施文されている。1494～1497・1500



No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
径 cm	25×25	38×34	21×20	24×24
深さ cm	16	26	22	14

No.	P ₅	P ₆	P ₇
径 cm	35×30	41×34	44×42
深さ cm	17	33	23

0 1:50 1m



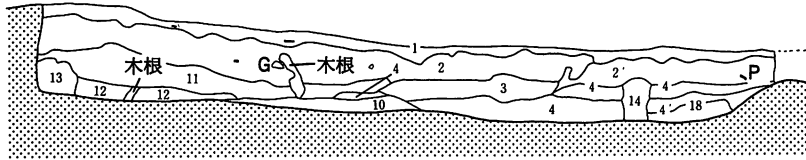
SA63住居跡炉

1. 5YR4/8 赤褐色 シルト 焼土層。

No.	P ₁	P ₂	P ₃
径 cm	17×17	15×15	23×20
深さ cm	37	17	22

第58図 SA61・62・63住居跡(1)

C L=169.400m



C'

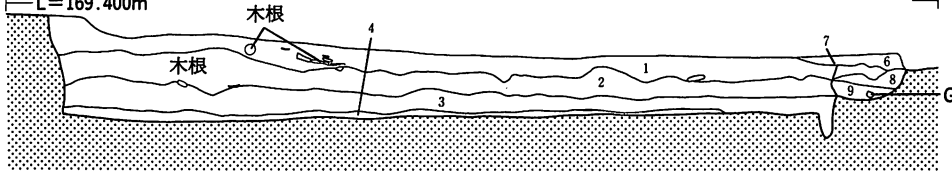
L=168.800m
H H'



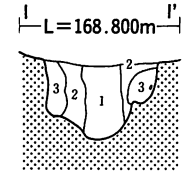
SA63住居跡 P₃

- 10YR1.7/1 黒色シルト 軟らかい、柱痕跡。
- 10YR2/1 明黄褐色シルト 軟らかい。

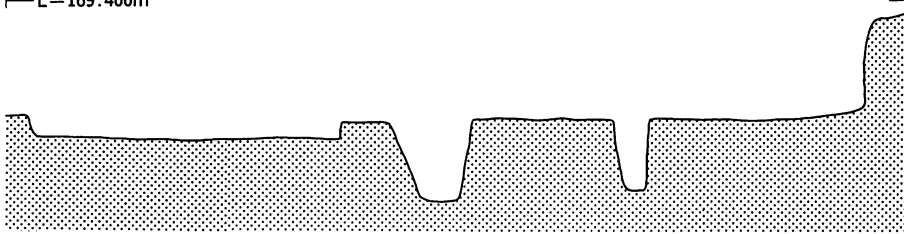
D L=169.400m



D'



E L=169.400m

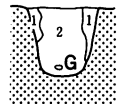


E'

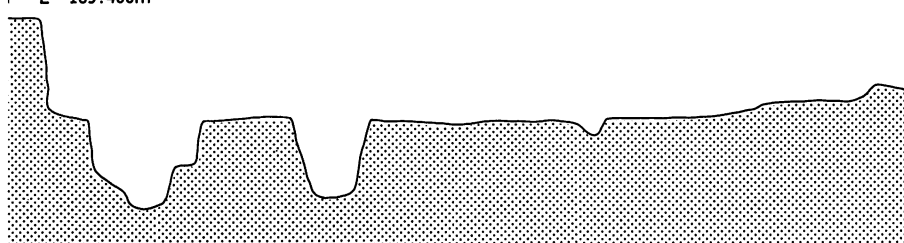
SA63住居跡 P₄

- 10YR1.7/1 黒色シルト
- 10YR2/1 黒色シルト
- 10YR1.7/1 黒色シルト
φ5mm±の黄褐色浮石細粒1%含む、柱痕跡。
ニブイ黄褐色土斑状に含む。
緻密、φ5mm±の黄褐色浮石細粒1%含む。

L=168.800m
J J'



F L=169.400m



F'

SA63住居跡 P₅

- 10YR1.7/1 黒色シルト
 - 10YR2/1 黒色シルト
- 緻密、黄褐色土ブロック状に含む。
軟らかい、柱痕跡。

0 1:50 1m

SA61・62・63住居跡埋土断面

- 10YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒2%含む。
- 10YR1.7/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒2%含む。
- 10YR1.7/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒1%含む。
- 10YR1.7/1 黒色シルト 堅緻、SA63住居跡の貼床。
- 10YR1.7/1 黒色シルト 4層に類似やや明るい。
- 10YR1.7/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒5%含む。
- 10YR1.7/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒2%含む。
- 10YR1.7/1 黒色シルト 7層に類似、黄褐色浮石細粒1%含む。
- 10YR1.7/1 黒色シルト 7層に類似やや堅い。
- 10YR2/1 黒色シルト
- 10YR1.7/1 黒色シルト 2層に類似、やや黒色味が強い。
- 10YR2/1 黒色シルト 堅い、貼床。
- 10YR2/1 黒色シルト 12層より黄褐色味強い。
- 10YR5/6 黄褐色浮石 汚れた黄褐色浮石細粒。
- 10YR2/2 黒褐色シルト しまりなし。
- 10YR1.7/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒含まない。
- 10YR6/6 明黄褐色シルト やや粘土っぽく、しまりあり。
- 7.5YR4/6 褐色シルト 焼土。
- 7.5YR2/3 暗褐色浮石 汚れた南部浮石。

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	25×14	37×23	64×63	11×9	10×8	10×9	11×10	8×8
深さ cm	37	46	22	20	3	3	8	4

No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径 cm	10×9	13×9	9×8	11×10	8×7	8×8	8×7	9×5
深さ cm	11	5	3	8	7	5	4	4

No.	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂
径 cm	10×9	7×6	9×7	10×8	10×9	6×6	8×8	8×6
深さ cm	5	8	10	6	16	11	10	14

No.	P ₃₃	P ₃₄	P ₃₅	P ₃₆	P ₃₇	P ₃₈	P ₃₉	P ₄₀
径 cm	20×13	9×8	8×7	7×6	5×5	7×6	10×7	9×7
深さ cm	10	16	8	5	6	7	6	5

No.	P ₄₁	P ₄₂	P ₄₃	P ₄₄	P ₄₅	P ₄₆	P ₄₇	P ₄₈
径 cm	10×9	11×9	10×8	7×6	6×6	8×7	10×7	8×8
深さ cm	5	12	11	8	18	2	4	24

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	27×26	31×25	24×23	80×75	58×57	45×32	60×28	34×23
深さ cm	6	7	48	57	52	15	29	30

No.	P ₄₉	P ₅₀	P ₅₁	P ₅₂	P ₅₃
径 cm	6×5	8×7	6×6	8×8	9×8
深さ cm	14	3	12	8	7

第59図 SA61・62・63住居跡(2)

は縄文後期前葉の土器である。1499・1501～1506 は縄文前期前半に相当する土器である。1507 は中央部に多少の凹部が見られる不明土製品である。1508 は土製の玉で特に穿孔は認められない。1509 は土製円盤である。

〈石器・石製品〉 石匙 2 点、不定形石器 2 点、石鏃 9 点、石錐 3 点、台石・石皿類 7 点、凹石 2 点、磨石 1 点、半円状偏平打製石器 1 点が出土している。1527 の台石の表面には赤色顔料の痕跡が認められた。1533・1536 の凹石は両面に凹部があり磨石と兼用されている。1535 の半円状偏平打製石器は、周囲を粗い敲打で成形し直線部分を擦面として使用している。

〈時期〉 縄文時代前期前半の土器 (1498～1506)、後期前葉の土器 (1493～1497) も出土しているが、床面出土の遺物などから縄文時代後期田柄貝塚第Ⅲ群期に相当する時期が考えられる。

SA65 住居跡

遺構 (第 61 図、写真図版 70)

〈位置〉 B 調査区、I IX グリッドに位置する。

〈検出状況・重複関係〉 住居跡の南側の部分の壁は既に失われており、炉と壁の一部を検出しただけである。SA68 住居跡・SA70 住居跡より新しく、SB21 掘立柱建物跡・SA61 住居跡・SA69 住居跡・SA66 住居跡より古く位置づけられる。

〈平面形・規模〉 平面形は円形を基調とするもので、規模は推定で径約 4.0 m 程度と思われる。推定床面積は 12.2 m²である。

〈埋土〉 壁は外傾気味に立ち上がり、壁の残存値は北壁 11 cm・北西壁 5 cm・北東壁 13 cm である。

〈壁・床面〉 埋土は黄褐色浮石細粒をやや多く含む黒～黒褐色のシルト質土で構成されている。床面は平坦であるが全体に南側に向かって傾斜している。

〈柱穴〉 柱穴に相当するものとして P1～4 が確認されている。

〈炉〉 炉は住居跡のほぼ中央部分に相当する場所に設けられており、亜角礫を長辺方向に曲線状に連ねた石囲炉である。炉の南東側には縁石は認められず開口しており、礫の抜き取り痕も確認されなかった。

遺物 (第 302・303 図、写真図版 276)

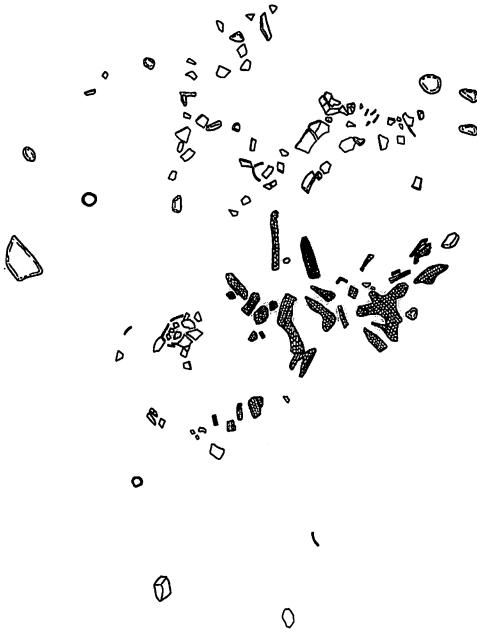
〈土器〉 1537 は無文のミニチュアの浅鉢である。

〈石器〉 石錐 1 点、石鏃 2 点、半円状偏平打製石器 1 点、凹石 1 点、台石 1 点が出土している。1529 は偏平な半月形となっており周縁には粗い剥離が加えられているが擦面は認められない。1541 の凹石は表裏面の長軸方向に凹部が並んでいる。

〈時期〉 縄文時代の遺構であるが詳細については不明である。

E84
S88

E89
S88



S94
E84

S94
E89

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	59×35	37×35	46×24	46×31	20×19	30×28	58×55	16×12
深さcm	13	39	26	25	16	16	38	12

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	15×15	12×10	16×13	14×13	18×12	14×12	13×9	13×10
深さcm	19	13	22	9	6	7	7	11

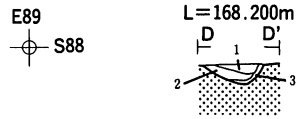
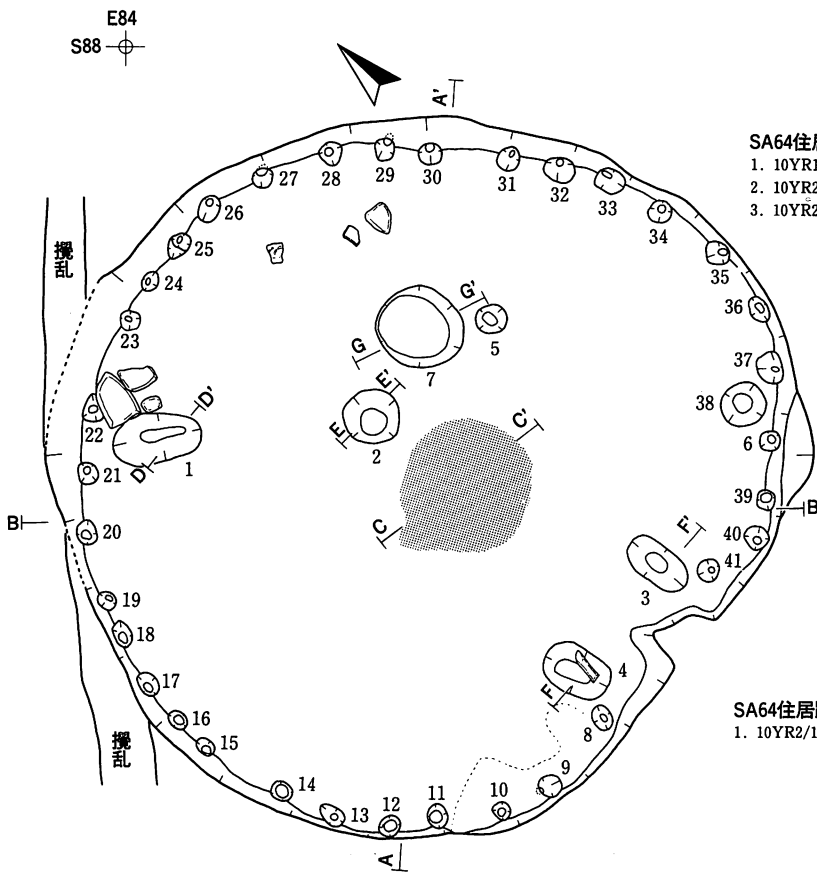
No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径 cm	16×12	16×12	12×11	16×13	14×13	18×13	13×13	14×10
深さcm	20	28	12	30	34	31	22	18

No.	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂
径 cm	18×13	18×13	14×12	15×14	14×12	15×13	16×14	20×16
深さcm	32	20	16	10	13	14	14	17

No.	P ₃₃	P ₃₄	P ₃₅	P ₃₆	P ₃₇	P ₃₈	P ₃₉	P ₄₀
径 cm	19×15	15×14	15×15	18×12	21×16	13×12	13×11	15×14
深さcm	19	11	16	8	14	19	10	12

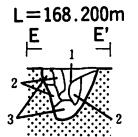
No.	P ₄₁
径 cm	15×14
深さcm	15

第60-1図 SA64住居跡



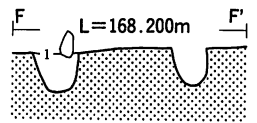
SA64住居跡 P₁

1. 10YR1.7/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒2%含む。
2. 10YR2/1 黒色シルト 粘土に近い、堅い。
3. 10YR2/2 黒褐色シルト 砂質。



SA64住居跡 P₂

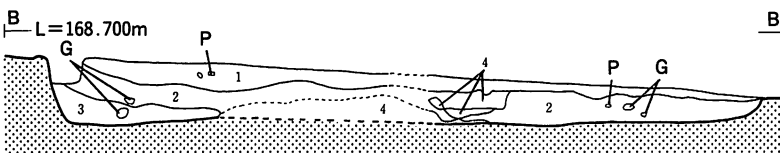
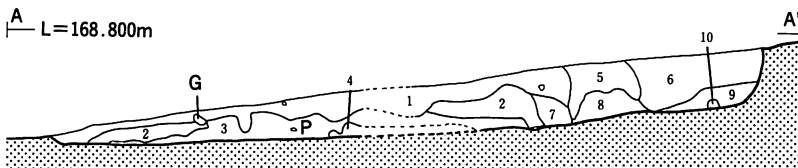
1. 10YR1.7/1 黒色シルト
2. 2.5YR4/6 オリーブ褐色
3. 10YR3/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒2%含む、柱痕跡。粘土質シルト 強く緻密。砂質。



SA64住居跡 P₄・P₃

1. 10YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒7%含む。

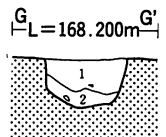
S94
E84



SA64住居跡埋土断面

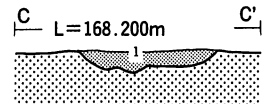
1. 10YR2/1 黒色シルト 堅い、φ3~10mmの黄褐色浮石細粒含む。
2. 10YR2/1 黒色シルト φ2~10mmの黄褐色浮石細粒多量含む。
3. 10YR2/1 黒色シルト 1層に類似、やや黒色味強い。
4. 10YR2/2 黒褐色シルト 炭化物・焼土、褐色土ブロック状に含む。
5. 10YR2/1 黒色シルト φ3~10mmの黄褐色浮石細粒含む。
6. 10YR2/1 黒色シルト φ3~10mmの黄褐色浮石細粒含む。
7. 10YR2/1 黒色シルト 1層に類似、褐色土・焼土含む。
8. 10YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒多量含む。
9. 10YR2/1 黒色シルト 砂質、黄褐色浮石細粒少量含む。
10. 10YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒含む。

S94
E89



SA64住居跡 P₇

1. 10YR1.7/1 黒色シルト
2. 10YR2/1 黒色シルト 焼土、黄褐色浮石細粒2%含む。黄褐色浮石細粒7%含む。



SA64住居跡炉

1. 5YR6/8 橙色シルト 焼土層、浮石被熱。

0 1:50 1m

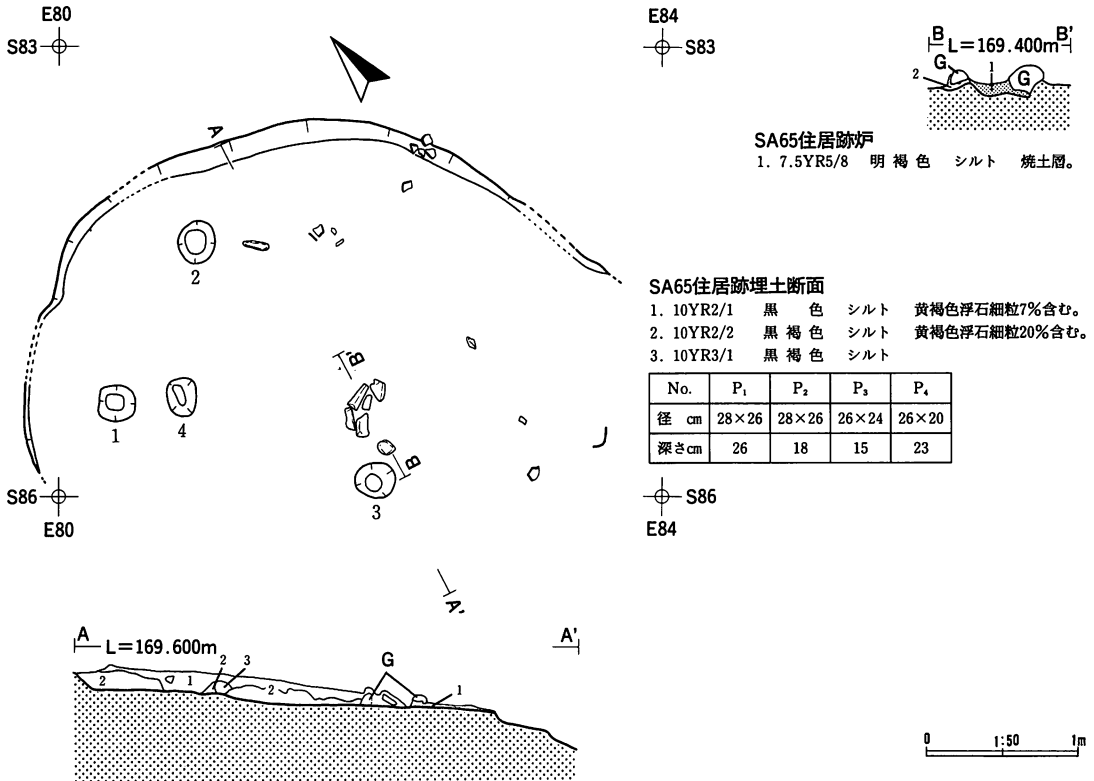
第60-2図 SA64住居跡

SA66 住居跡

遺構 (第 62 図、写真図版 71)

〈位置〉 B 調査区、I IX グリッドの中央部に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 斜面下方の住居跡の南壁については既に失われている。SA69 住居跡・SD135 土坑・SB06 掘立柱建物跡と重複しこれらより古い。



第61図 SA65住居跡

〈平面形・規模〉 推定で円形を基調とする、直径 3.0 m 程度の規模をもつ住居跡と思われる。推定床面積は 5.1 m² である。

〈埋土〉 φ 5 mm 土の黄褐色浮石細粒を 2～7% 含む黒色のシルト質土である。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味立ち上がっており、壁の残存値は西壁で 7 cm・東壁で 24 cm である。床面は南側に向かって緩やかに傾斜している。炉を中心とした場所に厚さ 5 cm 土の砂質シルトを用いた貼床が認められた。

〈柱穴〉 柱穴配置は不明であるが 2 個検出されている。

〈炉〉 中央よりやや南西に寄った場所に 70 cm×56 cm の規模の楕円形状の石囲炉が検出されて

いる。炉の縁石は礫の長軸方向を連結した状態で組まれている。

〈その他〉北西地域の床面～埋土下部から、特に被熱の痕跡は認められないが拳大～半頭大の礫が十数個出土している。

遺物 (第 303・304 図、写真図版 276・277)

〈土器〉1550～1552 は縄文後期前葉の土器である。1554～1558 は縄文前期前半の土器である。549 は無文の注口または鉢の下半部と思われる。

〈石器〉敲打磨石類が 2 点出土している。1559 は側縁部に磨面が認められる。1560 は凹石で表面の 2 ヶ所に凹部が認められる。

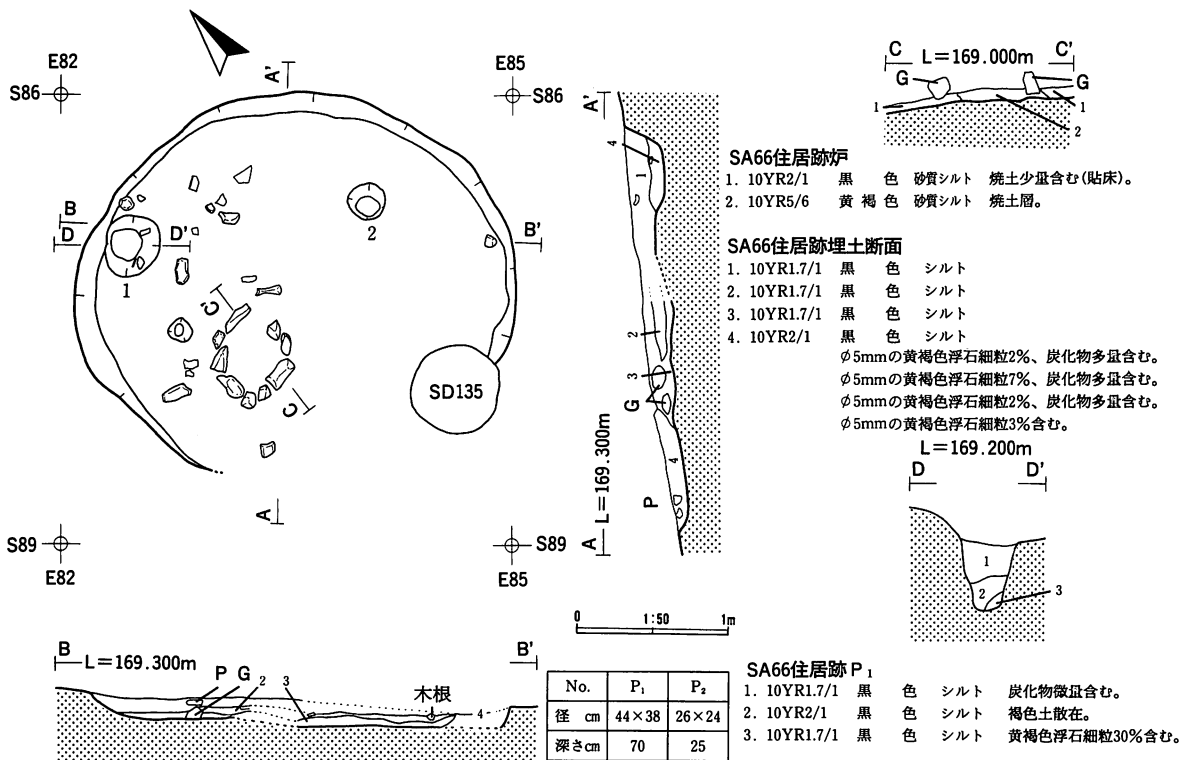
〈時期〉縄文時代の遺構であるが詳細については不明である。

SA67 住居跡状遺構

遺構 (第 63 図、写真図版 72)

〈位置〉B 調査区、I IX グリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA70 住居跡・SA69 住居跡・SB19 掘立柱建物跡土坑より新しく、SA67 住居跡 P1 土坑よりも古く位置づけられる。当遺構の東側に分布していた投げ捨ての焼土遺構の下部から検出された。



第62図 SA66住居跡

〈平面形・規模〉平面形は小判形、開口部の規模は東西4.0m・南北3.5mである。推定床面積は10.3m²である。

〈埋土〉埋土は、黄褐色浮石細粒・焼土・炭化物が混じった黒色～黒褐色のシルト質土で構成され人為堆積の様相をしめしている。

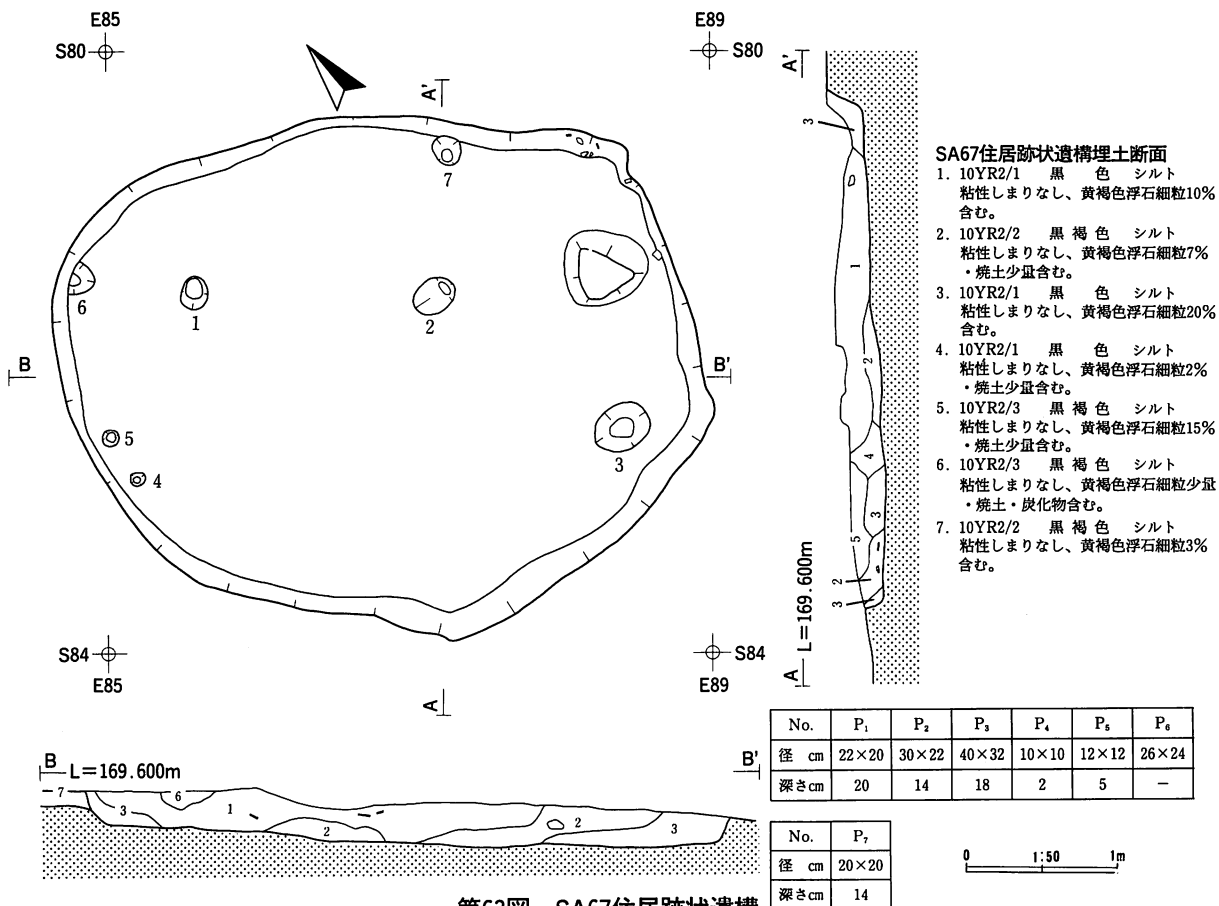
〈壁・床面〉壁は緩やかに立ち上がり、壁の残存値は北壁21cm・西壁13cm・南壁12cm・東壁20cmである。床面は凹凸が著しい。

〈柱穴〉柱穴に相当するものはP1～P7が確認されており、P1～P3が支柱穴・P4～P7が壁柱穴に相当する。柱穴の埋土は粘性・しまりのない黄褐色浮石細粒が混じった黒褐色～黒色のシルト質土である。

〈炉〉検出されていない。

〈その他〉住居跡の北東区域の埋土中部に投棄されたと考えられる頭大の亜円礫が数個認められた。東壁付近に56cm×52cm・厚さ10cmの南部浮石の盛り上がり認められた。

遺物（第304～307図、写真図版277・278）



第63図 SA67住居跡状遺構

〈土器・土製品〉 1561 は区画帯部分より外反している深鉢である。撚紐押捺が施された低い区画隆帯で区分され、幅の広い口縁部文様帯には葺瓦状不整綾線文、胴部には LR 縄文が施文されている。1562～1564 は口縁部に不整綾線文が施文された縄文時代前期前半の土器である。1565・1567 は縄文時代前期後半の土器である。1566・1569 は縄文時代後期後葉の土器である。1568 は撚紐が押捺された隆帯の特徴などから縄文時代中期前葉の円筒上層系の土器である。1570 は平口縁で口縁部が外傾する壺である。口縁部裝飾帯は縄文帯、頸部は無文帯となっている。胴部上半にも縄文帯が見られる。1571 は口縁部に縄文が施文された壺の口縁部である。特に沈線等により裝飾帯としての区画は見られない。1572 は頸部に括れのある無文の台付鉢である。非常に薄手で硬質である。1573 は広口の無文壺である。1574 は LR 縄文が施文された球胴に近い壺である。1575 は台付鉢の台部である。裾部の外端は縄文が施文され隆起している。1583 は胴部に雲形文が施文された大型の壺である。1584 は LR 縄文が施文された壺の下半部で、底部は凹状となっている。1585 は無文のミニチュアの台付鉢である。1586 は口縁部に小さな突起の見られる無文のミニチュアの浅鉢である。1587 は土偶の左脚部である。異種原体による非結束羽状縄文が施文された縄文帯と沈線で文様が構成されている。中実土偶で折損面にアスファルトが付着しており、その他の部分には赤色顔料の痕跡が認められる。1588 は中実土偶の右腕部である。1589 は完形の不明土製品である。棒状に成形され一端は膨らみをもっている。胎土は精選されたものが使用されている。1590～1592 は焼成粘土である。

〈石器・石製品〉 不定形石器 5 点、石鏃 5 点、石錐 3 点、石斧 1 点が出土している。1606 の石斧は刃部付近にアバタ状の敲打痕が見られる。

〈時期〉 縄文時代の遺構であるが詳細については不明である。

SA68 住居跡

遺構（第 64 図、写真図版 73）

〈位置〉 B 調査区、I IX グリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 新期の土坑・柱穴群・SA65 住居跡と重複しており、いずれの遺構よりも古く位置づけられる。

〈平面形・規模〉 推定で隅丸方形を基調とする、2.3 m×2.2 m の規模をもつ住居跡と思われる。推定床面積は 3.1 m² である。

〈埋土〉 直径 5 mm～20 mm の黄褐色浮石細粒を 2～15 % 含む黒褐色の砂質シルト質土である。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味に真っ直ぐに立上っており、壁の残存値は西壁で 38 cm・東壁で 58 cm・北壁 52 cm・南壁で 38 cm である。床面は本来は平坦であるが、新期の遺構の底面により各所に凹凸が見られる。

〈柱穴〉床面からは柱穴は検出されなかったが、直径 10 cm ± ・深さ 10 cm ± の壁柱穴が 11 個検出された。

〈壁溝〉部分的に途切れているが、幅 5 cm ~ 10 cm ・深さ 5 cm ± の壁溝が全周している。

〈炉〉検出されなかった。

遺物 (第 307 図、写真図版 278)

〈土器〉1607 は大きめの押圧がなされた隆帯で区画された深鉢である。幅の広い口縁部には LR 縄文、胴部には結束羽状縄文が施文されている。1608 は表面に条痕状の擦痕が施文された織織を含む深鉢である。1609 は口縁部に不整綾線文、胴部に LR 縄文が施文された深鉢である。1611 は地文が LR 縄文で口縁部に 4 条の沈線が巡っている。

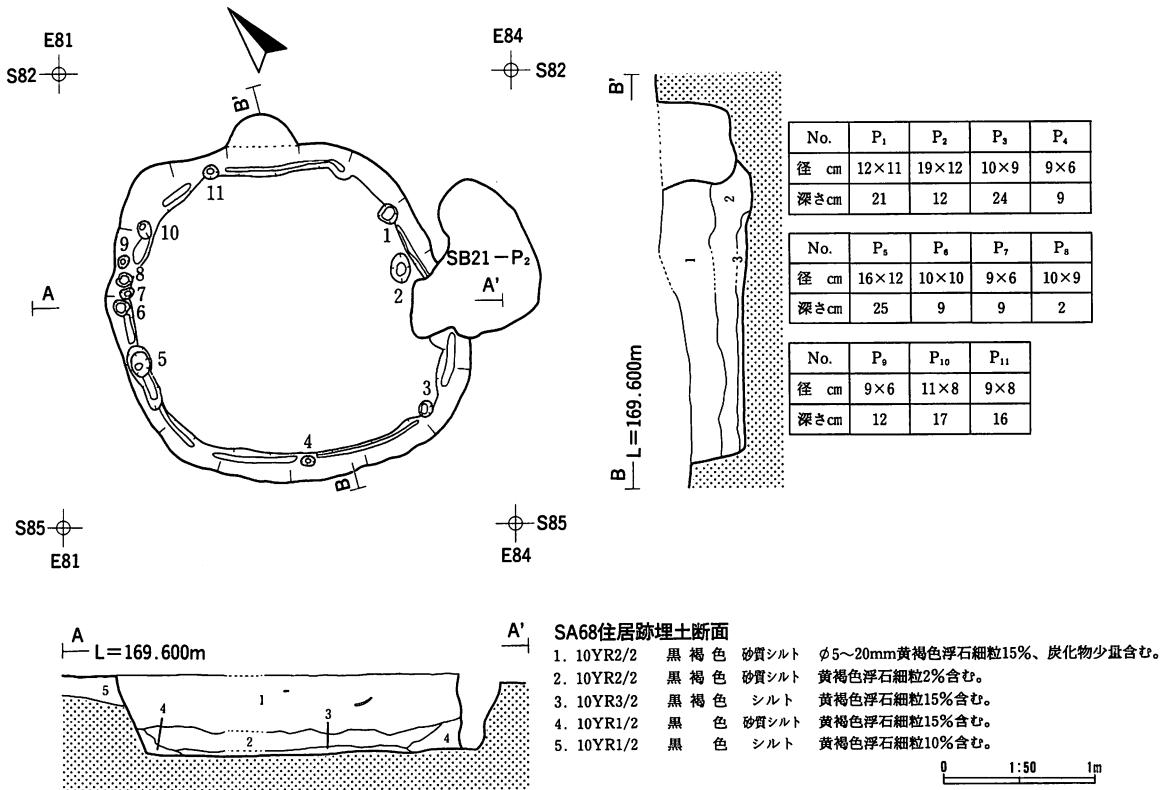
〈石器〉石鏃 4 点、敲石 1 点が出土している。

〈時期〉縄文時代前期前半の時期に相当すると思われる。

SA69 住居跡

遺構 (第 65 図、写真図版 74)

〈位置〉B 調査区、I IX グリッドの中央部に位置している。



第64図 SA68住居跡

〈検出状況・重複関係〉 炉と北西壁部分を検出したのみである。SA65・70 住居跡より新しく、SA66・67 住居跡より古く位置づけられる。

〈平面形・規模〉 推定で直径 5 m 土の規模の平面形が円形の住居跡と思われる。推定床面積は 26.0 m²である。

〈埋土〉 5～15%の黄褐色浮石細粒含む黒色～黒褐色の砂質シルトである。

〈壁・床面〉 壁の残存値は西壁で 6 cm・東壁で 8 cm・北壁 52 cm・北壁で 19 cm である。

〈柱穴〉 柱穴配置は不明であるが、P1・P2 が主柱穴、P3～P12 が支柱穴に相当する。

〈炉〉 中央部から南西よりの所から、64 cm×54 cm・厚さ 5 cm 土の規模で不整形の地床炉である。

遺物 (第 308 図、写真図版 280)

〈土器・土製品〉 1617 は結束羽状縄文が施文され胎土に繊維を含む深鉢である。1618 は無文の浅鉢である。1619 は広口の壺である。口縁部には 1 本の沈線が巡り口縁部裝飾帯は縄文帯となっている。頸部にも縄文帯が巡り胴部には幅の広い曲線状文が展開している。施文されている縄文は異種原体による非結束羽状縄文である。1620 は RL 縄文が施文された深鉢である。1621 は土製円盤、1622 は焼成粘土である。

〈石器〉 石鏃 3 点、不定形石器 2 点、磨石 1 点が出土している。

〈時期〉 縄文時代後期田柄貝塚第 IV 群期に相当する時期と考えられる。

SA70 住居跡

遺構 (第 66 図、写真図版 75)

〈位置〉 B 調査区、I IX グリッドのほぼ中央部に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 南部浮石層を切り込んで構築されている。SA67・SA69・SA68 住居跡・SB20 掘立柱建物跡と重複しており、いずれの遺構よりも古い。

〈平面形・規模〉 平面形は略円形、規模は開口部で 3.50 m×3.50 m である。推定床面積は 7.4 m²である。

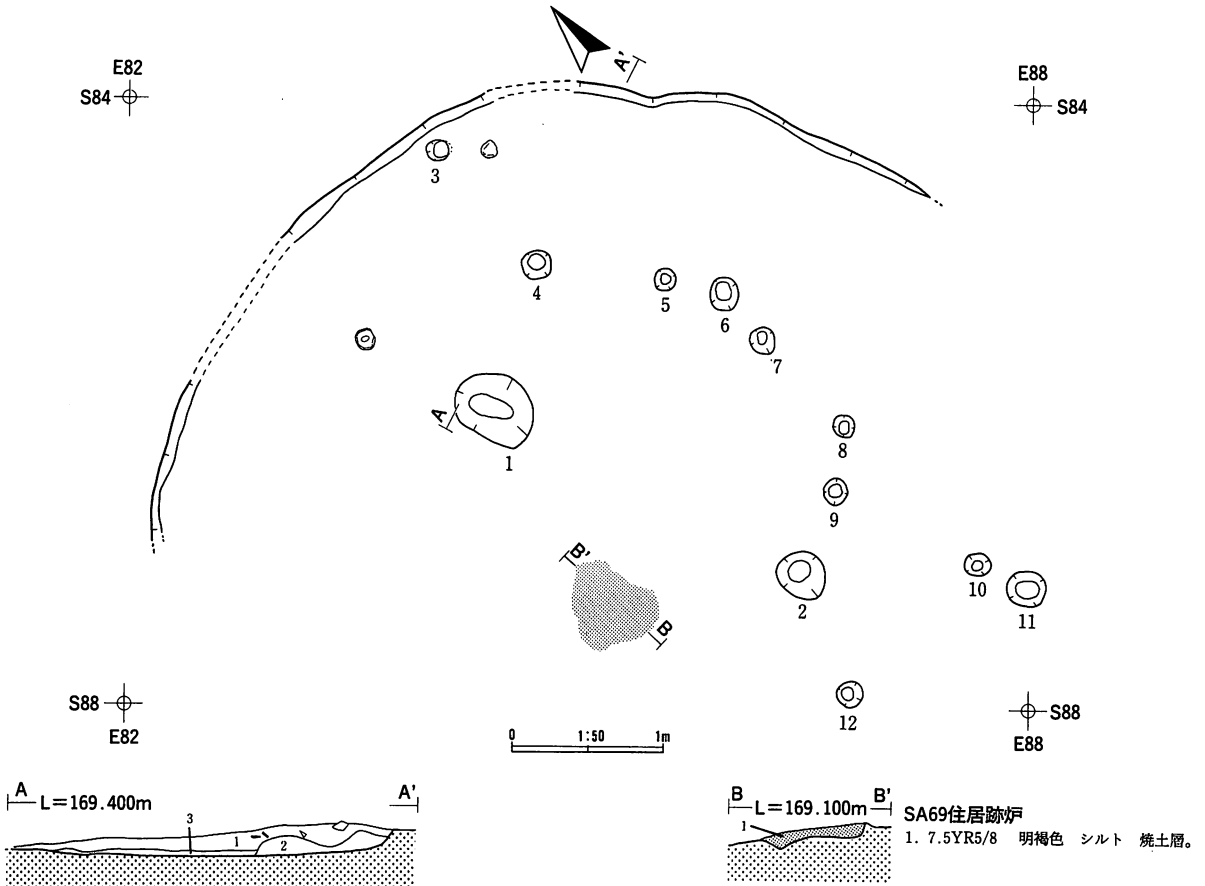
〈埋土〉 埋土は、汚れた黄褐色浮石細粒を多量に含む黒褐色土を主体にしている。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味に立ち上がり、東壁 38 cm・西壁 21 cm・南壁 36 cm・北壁 45 cm の残存値を示す。床面は当遺構より新しい土坑群の残存部で各所に凹凸が見られるが概して平坦である。

〈柱穴〉 検出されていない。

〈炉〉 検出されていない。

遺物 (第 309 図、写真図版 280)



SA69住居跡埋土断面

1. 10YR1.7/1 黒 色 シルト 黄褐色浮石細粒5%含む。
2. 10YR2/2 黒 褐色 砂質シルト 黄褐色浮石細粒5%含む。
3. 10YR2/1 黒 色 シルト 黄褐色浮石細粒15%含む。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	55×43	32×31	14×13	19×18	14×14	21×18	18×16	14×14
深さcm	15	46	30	15	8	14	19	7

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
径 cm	17×15	17×14	25×23	17×16
深さcm	9	12	15	14

第65図 SA69住居跡

〈土器〉1629 は胎土に微量の繊維が混入した深鉢である。胴部上半に括れをもち口縁部は外傾しながらやや内湾気味である。胴部の形状などから底部は尖底と思われる。内外面に条痕文が施文され口唇部は平坦に調整されている。

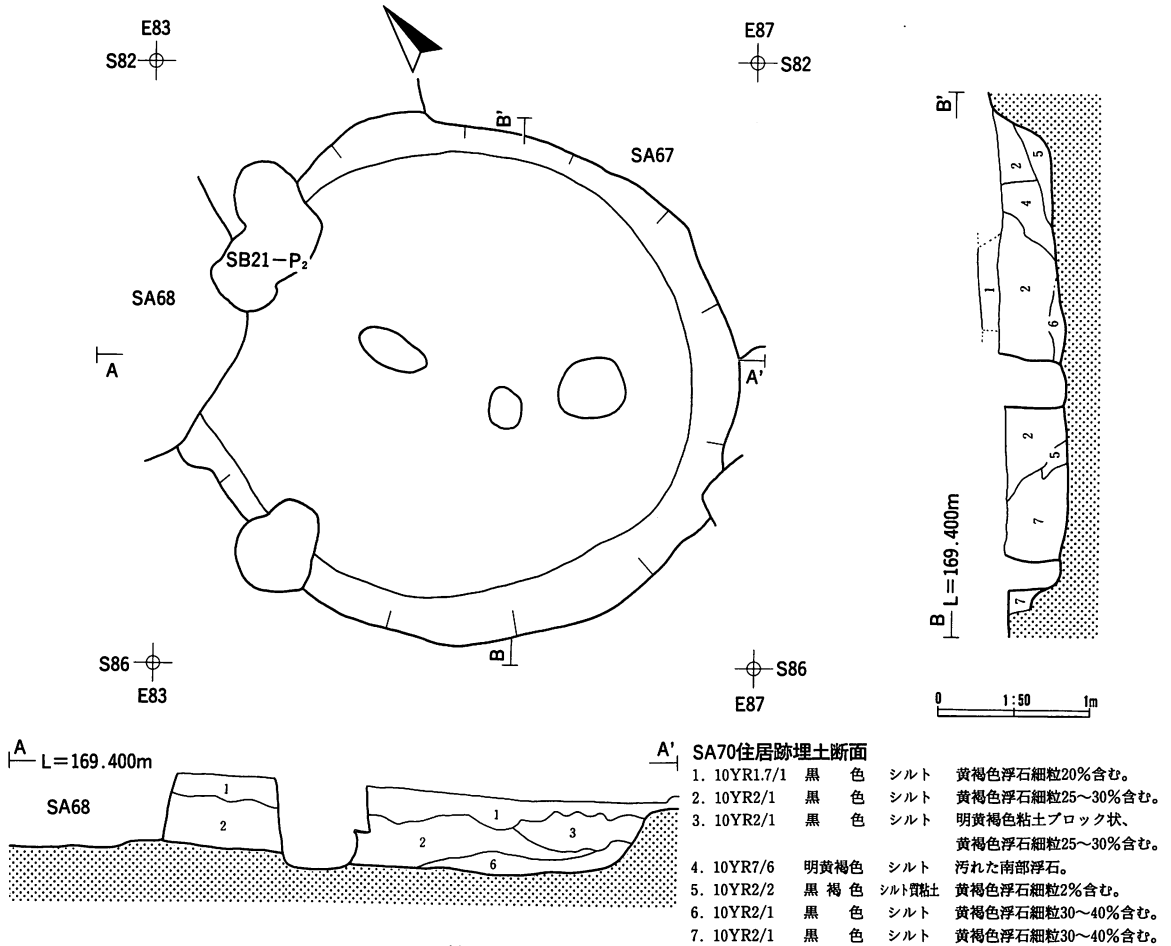
〈時期〉縄文時代早期後葉頃の時期と思われる。

SA71 住居跡

遺構 (第 67 図、写真図版 76)

〈位置〉B 調査区、I IXグリッドの北西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SD159 土坑より古く位置づけられる。III層下部で検出された。南半部分は既に失われており、また東側はパイプの敷設溝により破壊を受けており全貌については不



第66図 SA70住居跡

明である。

〈平面形・規模〉推定で平面形は不整円形、開口部で2.7m×3.1m程度の規模と思われる。推定床面積は5.9m²である。

〈埋土〉黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土である。

〈壁・床面〉壁は緩やかに立ち上がっており、壁の残存値は北壁23cm・西壁7cm・東壁21cmである。住居跡に伴う柱穴は検出されていないが、北壁部分に幅50cm・深さ40cm・長さ70cmほどの掘り込み部分が確認されたが壁溝などと同一視してよいか疑問が残る。

〈柱穴〉検出されなかった。

〈炉〉炉は中央部より南西よりの場所にあり、炉の縁石の一部と内部に埋設された土器が検出された。

遺物（第309図、写真図版280）

〈土器・土製品〉1634はLR縄文が施文された平口縁の深鉢である。口縁部は内湾し口唇部は

肥厚している。1635 は中空の遮光器土偶の肩の部分である。1636 は棒状土製品である。1637～1642 は焼成粘土である。

〈石器〉 石鏃が2点出土している。

〈時期〉 縄文時代晩期前半頃の時期と考えられる。

SA72 住居跡

遺構 (第 68 図、写真図版 77)

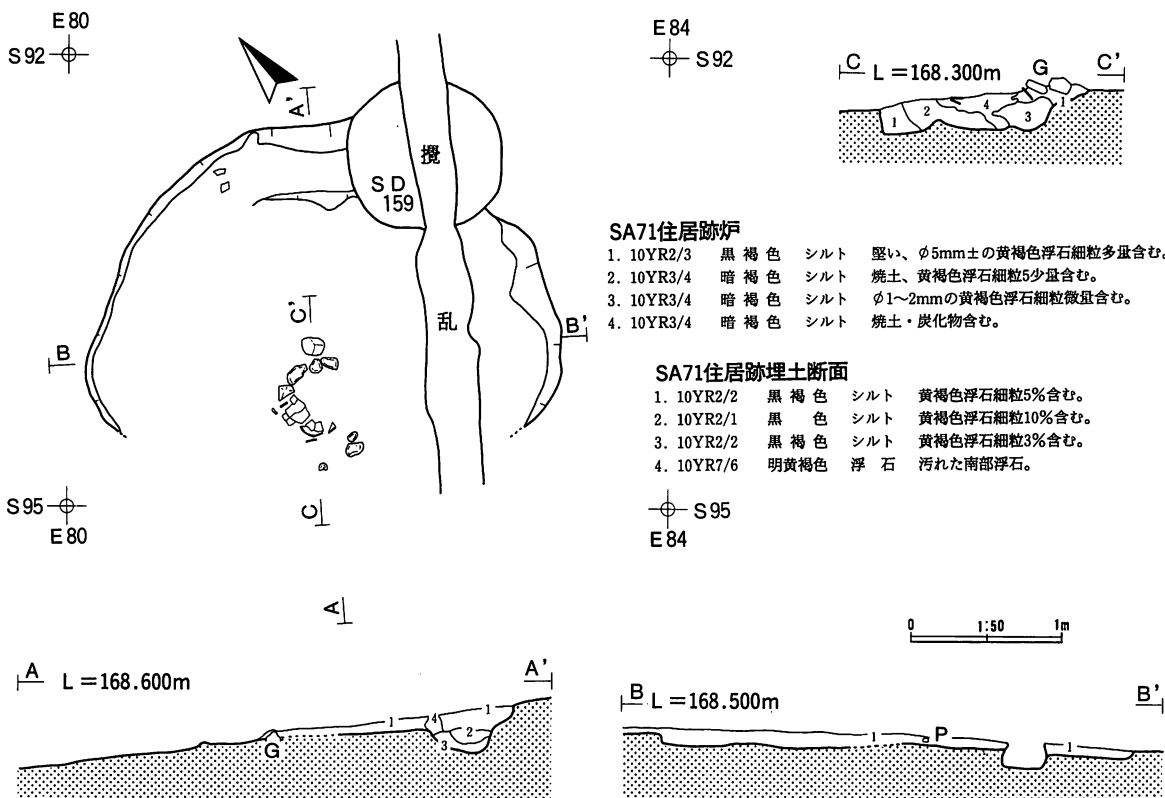
〈位置〉 B 調査区、I X グリッドの中央部に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA83 住居跡・SA73 住居跡と重複しており、SA73 住居跡より新しく SA83 住居跡との関係については不明である。

〈平面形・規模〉 一部を検出したのみで全貌については不明であるが、炉の位置や壁の残存状況から平面形は楕円形～小判形であると思われる。

〈埋土〉 炭化物・焼土を含む黒褐色のシルト質土が主体である。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味に立ち上がり、北壁 16 cm・東壁 21 cm の残存値である。床面はほぼ平坦であり、南半部分は失われている。



第67図 SA71住居跡

〈柱穴〉 柱穴は P1～P13 まで検出されており P2～P9・P10・P12 は壁柱穴を構成しており、他のものについては不明である。

〈炉〉 炉は石囲炉であり、縁石の一部が失われており形態については不明である。

遺物 (第 310・311 図、写真図版 280・281)

〈出土状況〉 炉の周辺から拳大の焼成粘土、P1 から石斧が出土している。

〈土器・土製品〉 1650 は縄文後期前葉、1645～1649 は縄文後期後葉の土器である。1651～1679 は焼成粘土である。

〈石器〉 石鏃 1 点、石斧 1 点、敲石 1 点が出土している。

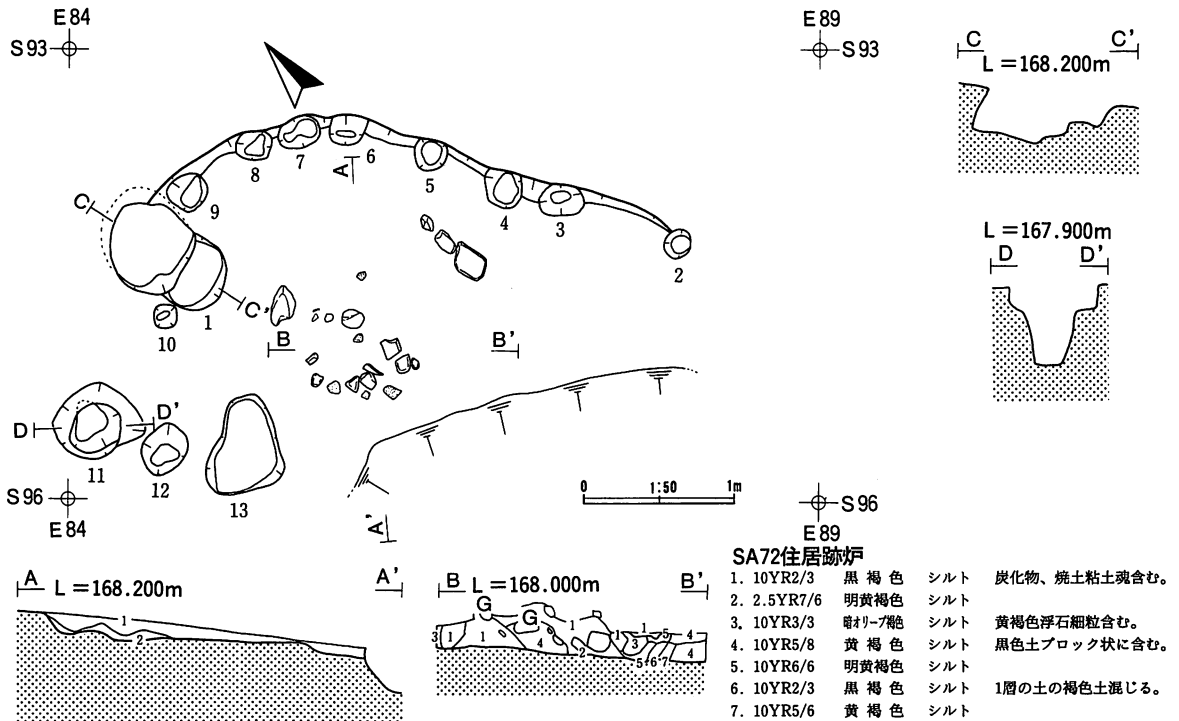
〈時期〉 縄文時代後期の遺構であるが詳細については不明である。

SA73 住居跡

遺構 (第 69・70 図、写真図版 78・79)

〈位置〉 B 調査区、I X グリッドの南側に位置する。

〈検出状況・重複関係〉 SA72 住居跡と重複しており SA72 住居跡より新しい。南半は既に失われており全貌については把握できなかった。



- SA72 住居跡埋土断面**
- 7.5YR2/1 黒色シルト
φ5mm 土の黄褐色浮石細粒、炭化物含む。
 - 10YR3/4 暗褐色シルト
褐色の粘土質土を50%以上含む。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
径 cm	47×47	19×18	30×21	30×24	23×21	28×23	28×20	25×22	27×25	15×15	60×50	34×27	61×52
深さ cm	11	28	17	10	2	16	13	15	21	21	48	11	10

第68図 SA72 住居跡

〈平面形・規模〉平面形は略円形、推定で規模は直径約6.0mの規模と思われる。推定床面積は24.7m²である。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石・八戸ローム混じりの黒褐色のシルト質土である。

〈壁・床面〉床面は平坦で、壁は垂直に立ち上がっており、北壁15cm・西壁20cm・東壁8cmの残存値である。

〈柱穴〉P1～14が検出されており、P1・14が主柱穴の一部と思われる。

〈炉〉炉は中央よりやや東側に片寄った場所に設けられている。炉は縁石の一部が失われているが礫を楕円状に配置した形態である。

遺物（第311～313図、写真図版281）

〈出土状況〉南側には土器を埋設した痕跡があり、土器の底部が残存していた。

〈土器・土製品〉2506は台付鉢である。装飾口縁で頸部に括れが見られる。頸部には2段の数珠文とC字状文、胴部にはLR縄文が施文されている。2507は口縁の一部に低い連続した山形突起が付され、胴部にLR縄文が施文された浅鉢である。1685はLR縄文が施文された深鉢で底部付近は磨り消されている。2508は口縁部が内湾し胴部にLR縄文が施文された深鉢である。1687～1693は縄文時代晩期初頭～前葉前半に相当する土器である。1695は中空土偶の腹部と思われる。1696は土偶の肩部で、中実となっている。1697は土偶の腕部で、中実となっている。1698は土偶の胸部で、中実である。1699・1700は土製円盤である。1701～1711は焼成粘土である。

〈石器〉石鏃5点、ヒスイ製玉1点、台石1点、石製円盤1点、凹石2点、半円状偏平打製石器1点、打製用具1点出土している。1722の半円状偏平打製石器は周縁の一部に粗い敲打を加え、直線部を擦面として使用している。1723の打製用具としたものは片面の両側縁に粗い剝離痕が見られる。

〈時期〉縄文時代晩期前半の時期と考えられる。

SA74 住居跡

遺構（第71図、写真図版79・80）

〈位置〉B調査区、JIXグリッドの西側に位置している。

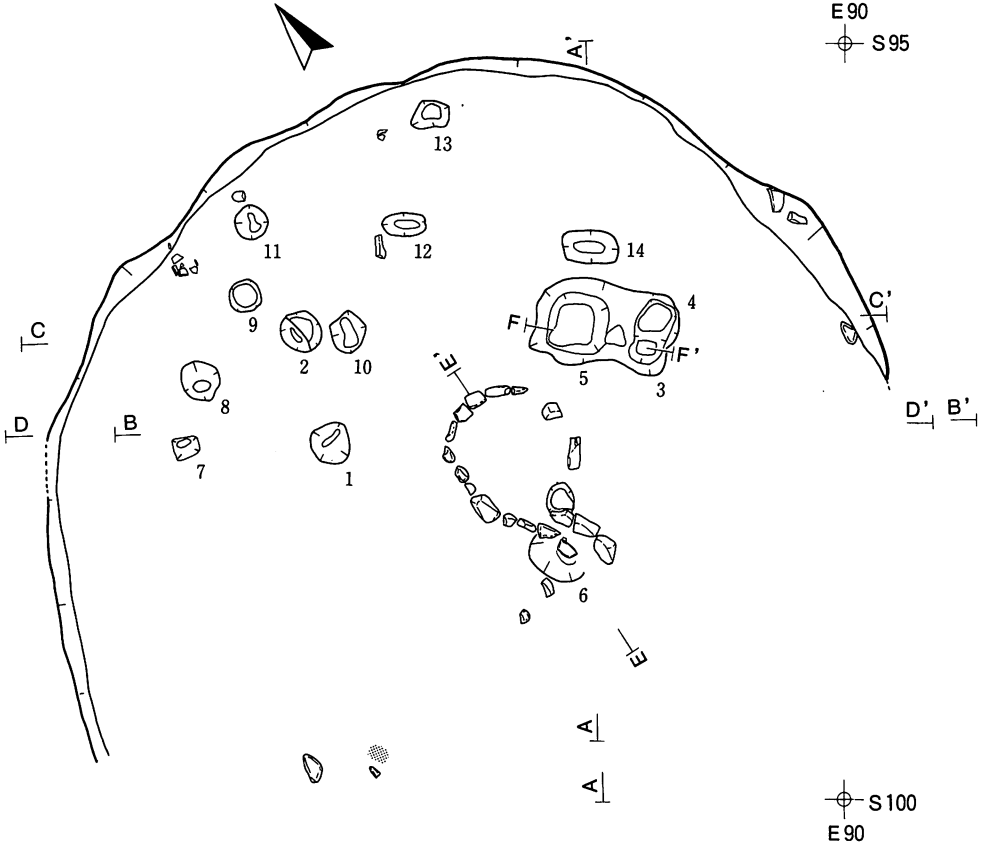
〈検出状況・重複関係〉SA75・SA76住居跡よりも新しく、SB18・19掘立柱建物跡より古い。斜面下方である住居跡の南側の壁はすでに失われており全貌を把握することはできなかった。

〈平面形・規模〉推定で平面形は略円形、規模は開口部で直径5.5m程度と考えられる。推定床面積は17.7m²である。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒混じりの黒色のシルト質土が主体である。

E 84
S 95

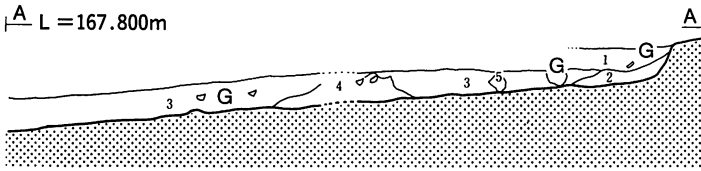
E 90
S 95



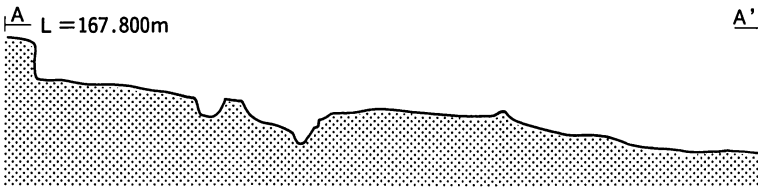
S 100
E 84

S 100
E 90

A L = 167.800m



A L = 167.800m

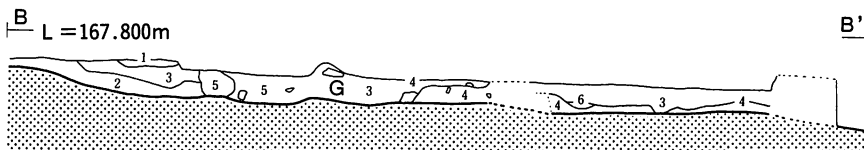


0 1:50 1m

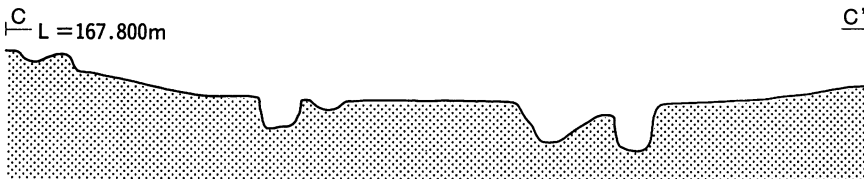
SA73住居跡埋土断面

1. 10YR2/2 黒褐色 シルト
φ2~5mmの黄褐色浮石細粒やや含む。
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト
にぶい黄褐色粘土含む。
3. 10YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒を多く含む。
4. 10YR2/2 黒褐色 シルト
にぶい黄褐色粘土、多量の炭化物含む。
5. 抜根による攪乱。
6. 10YR2/2 黒褐色 シルト
1層より黒色味強い。

B L = 167.800m



C L = 167.800m



第 69 図 SA73住居跡 (1)

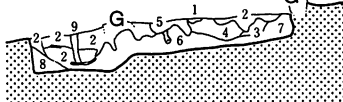
〈壁・床面〉壁は外傾気味に立ち上がり、北壁 31 cm・西壁 15 cm・東壁 8 cm の残存値である。床面はほぼ水平であり、そのなかでも炉の北東・北西区域は黄褐色浮石混じりの黒色のシルト質土で貼床が施されている。

D L = 167.800m

D'



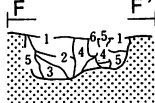
E L = 167.400m



SA73住居跡炉

- | | | | |
|-------------|------|-----|-------------------|
| 1. 7.5YR2/1 | 黒色 | シルト | 堅い。 |
| 2. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒・焼土含む。 |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒・炭化物含む。 |
| 4. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 焼土卓越する。 |
| 5. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 焼土含む。 |
| 6. 10YR3/2 | 黒褐色 | シルト | 堅い。 |
| 7. 10YR7/6 | 明褐色黄 | シルト | 黄褐色土との混土。 |
| 8. 10YR4/4 | 褐色 | シルト | にぶい黄褐色粘土ブロック状に含む。 |
| 9. 7.5YR2/1 | 黒色 | シルト | 抜痕。 |

L = 167.400m



SA73住居跡P5・P3

- | | | | |
|-------------|-----|-----|------------------------------|
| 1. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 炭化物、φ2~10mmの黄褐色浮石細粒含む。 |
| 2. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 1層より黄褐色浮石細粒減少。 |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 1層に類似。 |
| 4. 2.5YR3/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒・炭化物、褐色土の粘土をブロック状に含む。 |
| 5. 10YR8/6 | 黄色 | シルト | 黄褐色浮石細粒・焼土・炭化物含む。 |
| 6. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒・焼土微量含む。 |

0 1:50 1m

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄
径 cm	27×25	26×26	22×16	26×23	39×39	40×34	17×15	26×25	径 cm	20×20	26×24	22×21	29×15	24×20	37×21
深さcm	20	25	36	33	25	18	11	16	深さcm	4	7	10	7	8	15

第70図 SA73住居跡(2)

〈柱穴〉P1~43が検出されており、31・29・42・32が主柱穴に相当すると思われる。壁柱穴は黄褐色浮石細粒を含む黒色のシルト質土である。

〈炉〉炉は住居跡の中央部に設けられており、地床炉の形態のものである。規模は36 cm×28 cm、厚さ10 cmである。但しこの地床炉は床面を掘りくぼめたものではなく、この住居跡より古い柱穴に黒褐色のシルト質土を被覆して再利用している。

〈その他〉炉の周囲に展開する柱穴の様子から同心円状の拡張住居跡の可能性も考えられる。

遺物(第314図、写真図版282・283)

〈土器・土製品〉1724は胴部に緩やかな膨らみをもつLR縄文が施文された深鉢である。口縁部はやや外反し口唇部には斜めに粘土紐が貼付されている。括れのある頸部には3条の沈線が巡っている。胎土に繊維を含まれ、内面には指頭状の押圧痕が見られる。1733は無文鉢の底部である。1783は口縁部が内湾しRL縄文が施文された深鉢である。縄文時代前期前半(1725・1727・1728・1730)、前期後半(1729・1731・1732)、晩期前葉後半(1735~1737)に相当する土器が出土している。1793は土製円盤である。

〈石器〉 石匙1点、石鏃1点、石錐1点が出土している。

〈時期〉 縄文時代後期後半田柄貝塚第IV群に相当する時期と考えられる。

SA75 住居跡

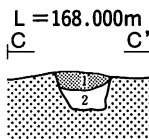
遺構 (第72図、写真図版81)

〈位置〉 B調査区、JIXグリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 果樹の植栽の跡と思われる掘り込みの埋土を除去している段階で炉と

E 89
S 83

E 94
S 83



SA74住居跡炉

- 10YR2/1 黒色シルト ϕ 10mm±の黄褐色浮石細粒5~10%、炭化物少量含む。
- 10YR2/1 黒色シルト 暗褐色のシルト質粘土、貼床。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	12×12	22×15	12×12	24×24	12×10	11×10
深さ cm	21	22	22	45	15	33

No.	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
径 cm	14×10	17×12	17×15	21×18	28×20	14×12
深さ cm	25	33	6	10	11	10

No.	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈
径 cm	14×13	13×13	17×14	13×12	12×12	15×13
深さ cm	48	36	23	9	15	17

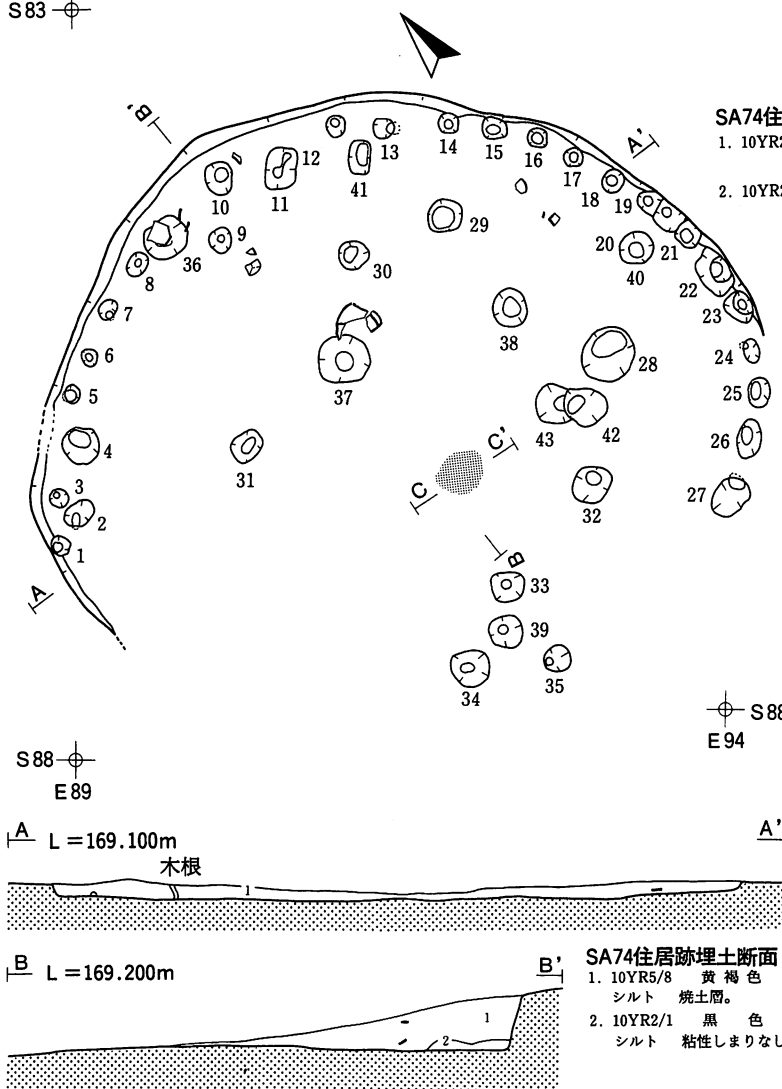
No.	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄
径 cm	19×16	20×20	18×16	30×21	21×17	16×10
深さ cm	23	15	48	54	47	42

No.	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀
径 cm	19×14	26×16	31×20	37×33	22×21	20×18
深さ cm	40	34	32	41	33	16

No.	P ₃₁	P ₃₂	P ₃₃	P ₃₄	P ₃₅	P ₃₆
径 cm	22×17	26×23	22×19	25×24	18×18	30×27
深さ cm	11	24	32	29	30	—

No.	P ₃₇	P ₃₈	P ₃₉	P ₄₀	P ₄₁	P ₄₂
径 cm	34×32	25×22	23×21	22×20	22×14	28×24
深さ cm	10	10	22	9	10	48

No.	P ₄₃
径 cm	27×25
深さ cm	33



SA74住居跡埋土断面

- 10YR5/8 黄褐色シルト 焼土層。
- 10YR2/1 黒色シルト 粘性しまりなし。

第71図 SA74住居跡

壁の一部が確認され住居跡と認定した。削平・他遺構との重複が著しく炉と壁の一部を検出したのみである。SA74 住居跡・SA76 住居跡・SA77 住居跡・SD130 土坑と重複しており、いずれの遺構よりも新しい。

〈平面形・規模〉 推定で、直径 3.5 m 前後の規模を持つ円形基調の住居跡と思われる。

〈埋土〉 黄褐色浮石細粒を含む黒色のシルト質土を主体としている。

〈壁・床面〉 汚れた南部浮石を床面としている。壁の一部は僅かに北側部分で約 7 cm の残存部を確認しただけである。

〈柱穴〉 床面から柱穴に相当すると思われるものが 3 個検出されているが、柱穴配置については不明である。北壁部分から、壁溝と重複した壁柱穴が検出された。

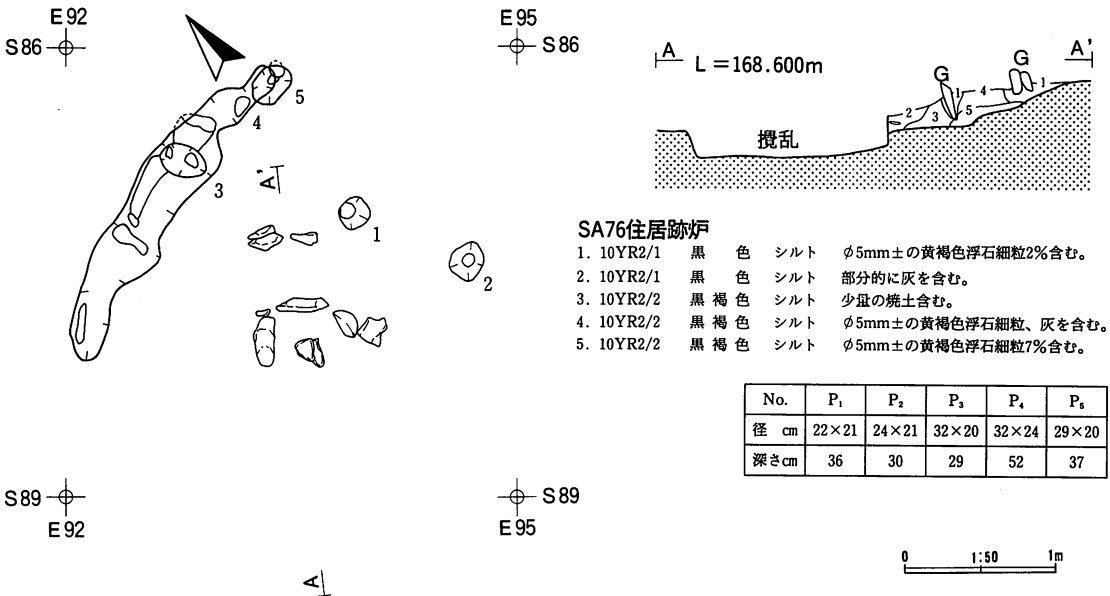
〈炉〉 推定であるが、中央よりやや北側に寄った所に位置しており、炉の構成礫の中央部に土器を直立に埋設した土器埋設石囲炉である。炉の構成礫の南側部分が確認されなかったが、残存している構成礫及び炉の埋土に垂直方向のずれが見られることなどから耕作の攪乱により遺失したと考えられる。

〈壁溝〉 幅 30 cm 前後、床面からの深さ 30 cm 程度の壁溝が一部、北壁部分で確認されている。

遺物 (第 315 図、写真図版 283)

〈出土状況〉 炉の埋土、住居跡の埋土および壁柱穴部分から出土している。

〈土器・土製品〉 1743 は口縁部が内湾し、同一原体による非結束羽状縄文が施文された深鉢である。1774 は LR 縄文が施文された深鉢である。1745 は口縁部に 1 単位と思われる叉状の低い山形突起が付された深鉢である。1746~1757 は縄文晩期前葉・中葉の土器である。1758 は小破



第72図 SA75住居跡

状縁の無文の皿である。1759・1760 は土製円盤である。1761～1763 は焼成粘土である。

〈石器〉 石鏃 3 点、石匙 1 点、異形石器 1 点が出土している。

〈時期〉 炉の埋土から出土した土器などから、縄文時代晩期中葉頃と思われる。

SA76 住居跡

遺構（第 73 図、写真図版 78・79）

〈位置〉 B 調査区、JIX グリッドに位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA 75 住居跡の炉を精査中に炉の下部より汚れた南部浮石層と当住居跡の床面に密着した状態の土器が確認された。斜面下方の南側部分及び、床面の東側は植栽による攪乱を受けている。SA75・SA77・SA80 住居跡と重複関係にあり、いずれの住居跡よりも古く位置づけられる。

〈平面形・規模〉 推定で、長軸方向 5.5 m、単軸方向 2.8 m 前後の規模を持つ東西方向に長い小判型の住居跡である。

〈埋土〉 多量の南部浮石を含む汚れた黒褐色土で構成されている。

〈壁・床面〉 南側部分は既に失われているが、北壁部分で 34 cm・西壁部分で 15 cm が確認された。残存部分での壁は、湾曲するように緩やかに立ち上がっている。

〈柱穴〉 この住居跡に伴う柱穴は検出されていない。

〈炉〉 炉に相当するものは検出されていない。

遺物（第 316 図、写真図版 284）

〈出土状況〉 住居跡の埋土及び床面に密着した状態で出土している。

〈土器〉 1769～1774 は同一個体である。口縁部は直線的に外傾しており、底部は尖底と思われる。内外面に条痕文が施文され、口唇部には絡条体の押捺が見られ口縁部付近には横方向に 1 状の粘土紐が貼付されている（1770・1711）。胴部下半付近と思われるが条痕文上に絡条体の圧痕文も見られる（1772）。胎土に少量の繊維を含み焼成は良く硬質である。

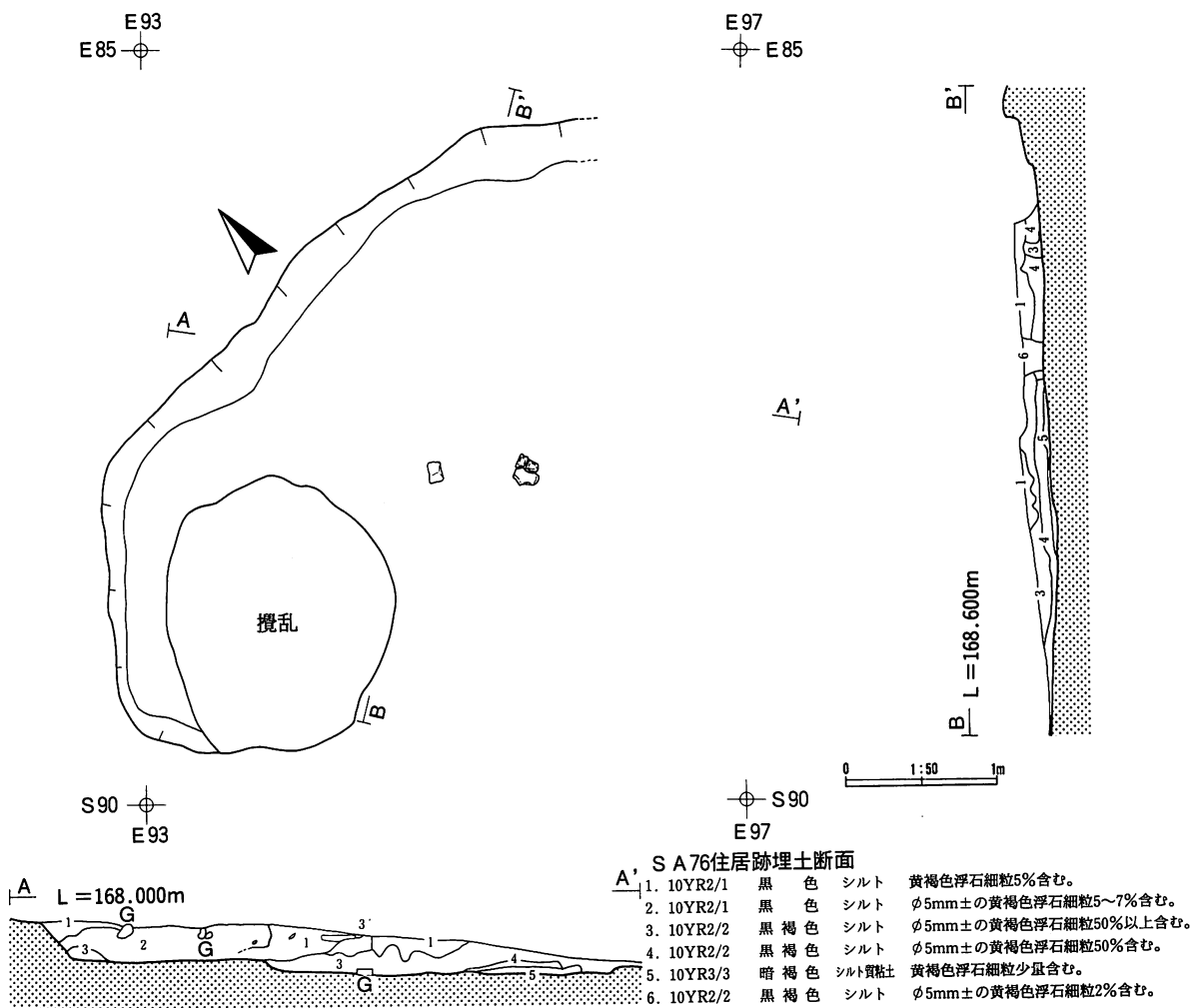
〈時期〉 床面から出土した土器から縄文時代早期後葉、ムシリ I 式期頃と思われる。

SA77 住居跡

遺構（第 74 図、写真図版 83）

〈位置〉 B 調査区、JIX グリッドに位置している。

〈検出状況・重複関係〉 重複が著しく全貌は把握できなかった。床面・壁・壁柱穴の存在から住居跡と認定した。SA76・SA78・SA80 住居跡より新しく、SA75 住居跡・SB18 掘立柱建物跡より古く位置づけられる。



第73図 S A 76住居跡

〈平面形・規模〉円形を基調とした住居跡と思われる。

〈埋土〉黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土で構成されている。

〈壁・床面〉北壁の一部を検出したのみであり、壁は比較的垂直気味に立ち上がっている。残存値は26cmである。八戸火山灰層を床面としており、比較のかたく平坦である。

〈柱穴〉床面から柱穴に相当すると思われるものが4個検出されているが、柱穴配置については不明である。P5~18は壁柱穴に相当する。

〈炉〉検出されなかった。

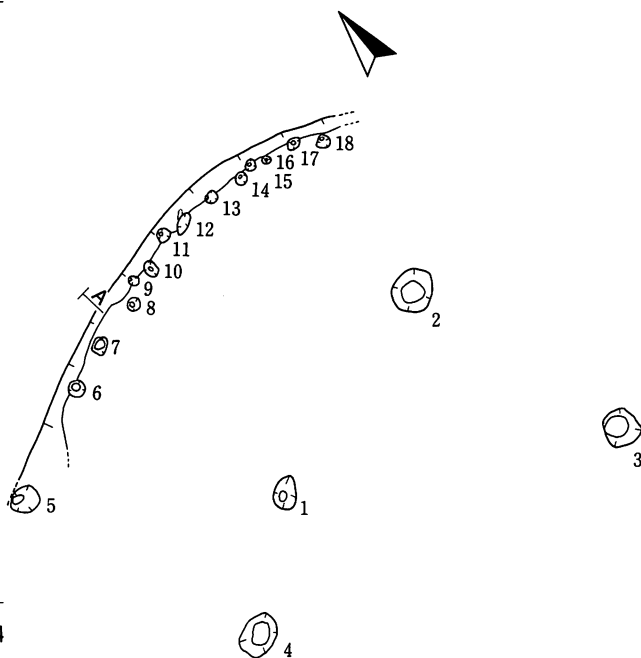
遺物 (第316・317図、写真図版284・285)

〈土器・土製品〉1775は広口の鉢である。口縁部に1条の沈線が巡り口縁部裝飾帯は縄文帯、

胴部には幅の広い曲線縄文帯が展開している。異種原体による非結束羽状縄文が施文されている。1776 は広口の壺である。低い山形突起が付された口縁部は内湾している。口縁部裝飾帯には縄文帯、頸部は無文帯、胴部は平行縄文帯と幅の広い曲線縄文帯が展開している。異種原体による非結束羽状縄文が施文されている。1777 は壺の口縁部である。口縁部裝飾帯には縄文帯、頸部には平行縄文帯と無文帯が展開している。異種原体による非結束羽状縄文が施文されている。1778 は0段多条のRL縄文が施文された深鉢で、口縁部は内湾し短く肥厚している。1779 は異種原体による非結束羽状縄文が施文された鉢である。1780 は三角状の口縁部無文の深鉢である。1781 は口縁部外端に刻みの施された波状縁の深鉢である。1782 はミニチュアの鉢である。

E 94
S 83

E 99
S 83



No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	22×15	29×26	24×23	28×22	20×17	11×10
深さcm	14	46	45	48	13	5

No.	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
径 cm	12×9	9×8	7×6	11×8	9×8	15×7
深さcm	6	7	11	6	2	5

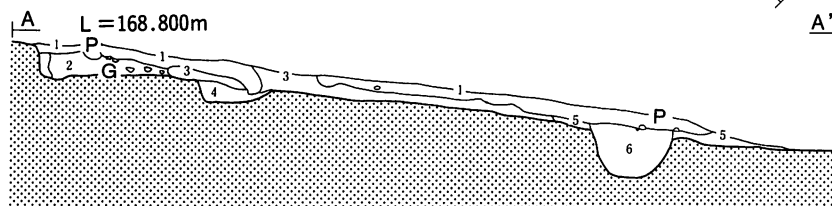
No.	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈
径 cm	8×7	8×7	7×7	6×4	10×6	9×8
深さcm	8	6	5	2	10	9

S 87
E 94

S 87
E 99

SA77住居跡埋土断面

- | | | | |
|------------|-----|-----|-----------------------|
| 1. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | φ2~7mmの黄褐色浮石細粒、炭化物含む。 |
| 2. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | φ2~4mm±の黄褐色浮石細粒含む。 |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | |
| 4. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | φ3mm±の黄褐色浮石細粒50%以上含む。 |
| 5. 10YR3/4 | 暗褐色 | シルト | φ1mm±の黄褐色浮石細粒少量含む。 |
| 6. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | φ5mm±の黄褐色浮石細粒2%含む。 |



0 1:50 1m

第74図 SA77住居跡

口縁部に1条の沈線が巡り、地文としてRL縄文が施文されている。胴部上半には沈線で横長列点文方向の曲線状文が施文されている。1783は土製円盤である。

〈石器〉石鏃6点、石匙1点、不定形石器1点、敲石1点、凹石1点が出土している。1792は表裏面に凹部があり、側縁部にアバタ状の細かい敲打痕が見られる。

〈時期〉縄文時代後期田柄貝塚第IV群の時期が考えられる。

SA78 住居跡

遺構（第75図、写真図版83・84）

〈位置〉B調査区、JIXグリッドに位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA77・SA79・SA80住居跡と重複しており、いずれの住居跡も古く位置づけられる。

〈平面形・規模〉推定で、直径4.5m前後の円形を呈する住居跡と思われる。推定床面積は16.9m²である。

〈埋土〉黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土で構成されている。

〈壁・床面〉壁はほぼ垂直気味に立ち上がっており、北壁で41cm・東壁で10cm・西壁で37cm・南壁で11cmである。八戸火山灰層を床面としており、比較的かたく平坦であり重複関係にあるSA80住居跡の床面と高低差はない。

〈柱穴〉規模・深さからP1～P5主柱穴に相当し、五角形の柱穴配置である。壁溝が巡る部分からは壁溝と重複した壁柱穴が検出されている。

〈炉〉南壁に接した部分に南北に主軸方向をもつ125cm×100cm、深さ20cm程度の方形の掘り込みがあり、部分的ではあるが落ち込み部分の壁に礫が残存していた。掘り込み部分の内側は、他から持ち込まれた灰白色粘土で覆われていた。

〈壁溝〉北側及び南側の壁部分に、幅15cm、床面からの深さ10cm程度の壁溝が検出されている。

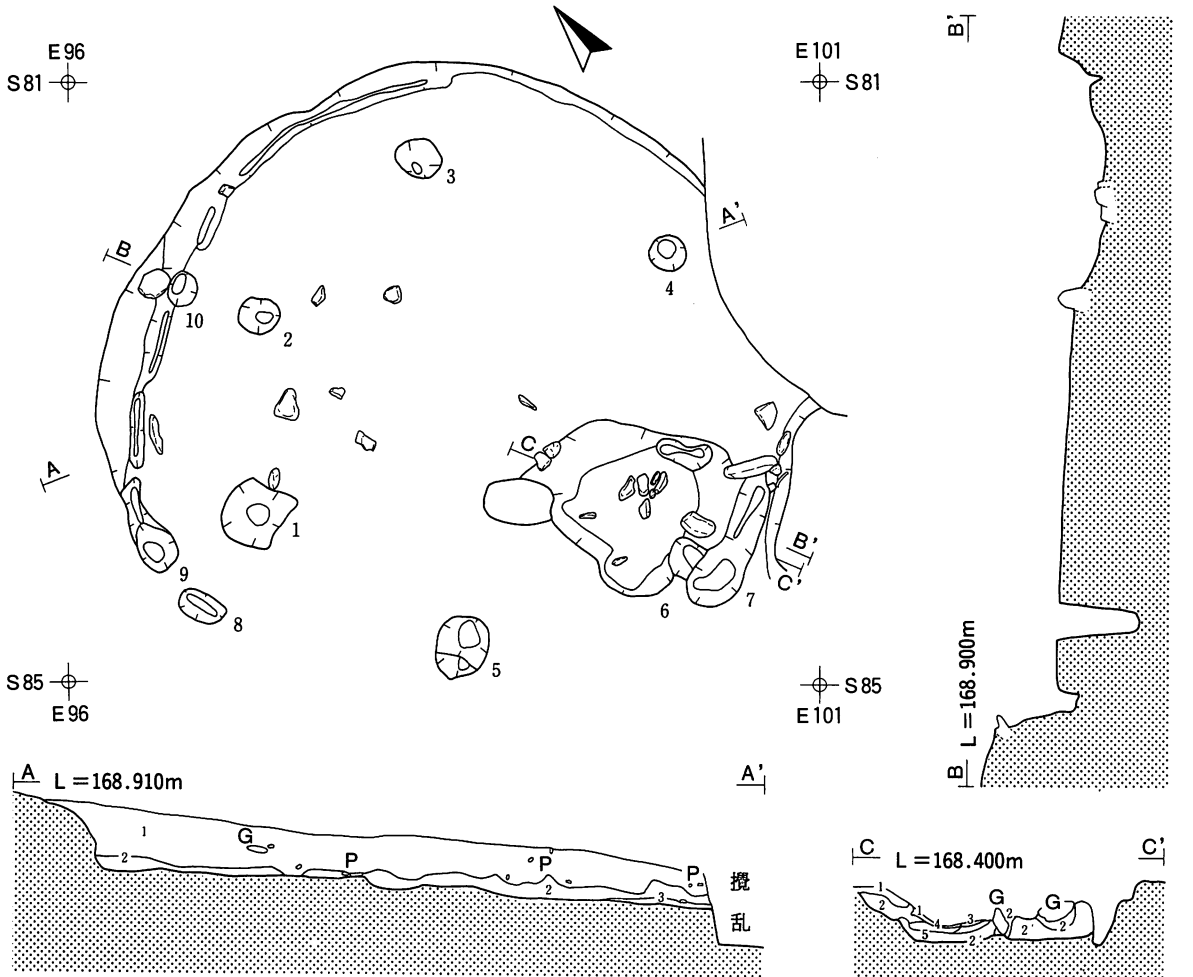
遺物（第318～320図、写真図版285・286）

〈土器・土製品〉1794は隆帯で区画され口縁部が外反する深鉢である。口縁部文様帯に複節縄文、胴部に撚糸文が施文されている。口縁部内面にも複節縄文が施文されている。1795は組み紐の回転文、1796・1803・1805は口縁部に山形の太い沈線が施文されている。1810は口唇部に撚紐押捺、胴部に縦位撚糸文が施文された深鉢である。胎土に少量の繊維が含まれている。1813は小破状縁の深鉢である。口縁部装飾帯は縄文帯、頸部・胴部には縄文が施文された隆帯・円文・方形区画文が展開している。1818は0段多条のRL縄文が施文された深鉢である。口縁部は内湾し口唇部は肥厚している。1819は土製円盤、1821は焼成粘土である。1820はつまみ部の

ような部分に横方向の焼成前の穿孔が見られる。

〈石器〉 1822・1823 は片面加工の石器である。他に石鏃 5 点、敲石 1 点が出土している。1829 の敲石は側縁部にアバタ状の細かい敲打痕が見られる。

〈時期〉 床面及び埋土の土器から縄文時代中期末葉、大木 10 式期の時期と思われる。



SA78住居跡埋土断面

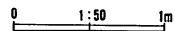
1. 10YR2/2 黒褐色 シルト φ2~5mmの黄褐色浮石細粒少量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト φ3~8mm±の黄褐色浮石細粒少量含む。
3. 10YR5/6 黄褐色 シルト

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	52×46	27×23	28×26	24×23	43×34	30×25	43×32	
深さcm	70	54	61	63	56	12	20	21

No.	P ₉	P ₁₀
径 cm	32×18	23×18
深さcm	19	28

SA78住居跡炉

1. 10YR3/4 濃い黄褐色 シルト 黒褐色土と黄褐色土の混土。
2. 10YR6/4 褐色 粘土質シルト
3. 10YR4/4 褐色 シルト 焼土層。
4. 5YR8/4 赤褐色 シルト 焼土層。
5. 7.5YR6/4 褐色 シルト やや被熱。



第75図 SA78住居跡

SA79 住居跡

遺構（第76図、写真図版84）

〈位置〉 B調査区、KIXグリッドの北側に位置している。

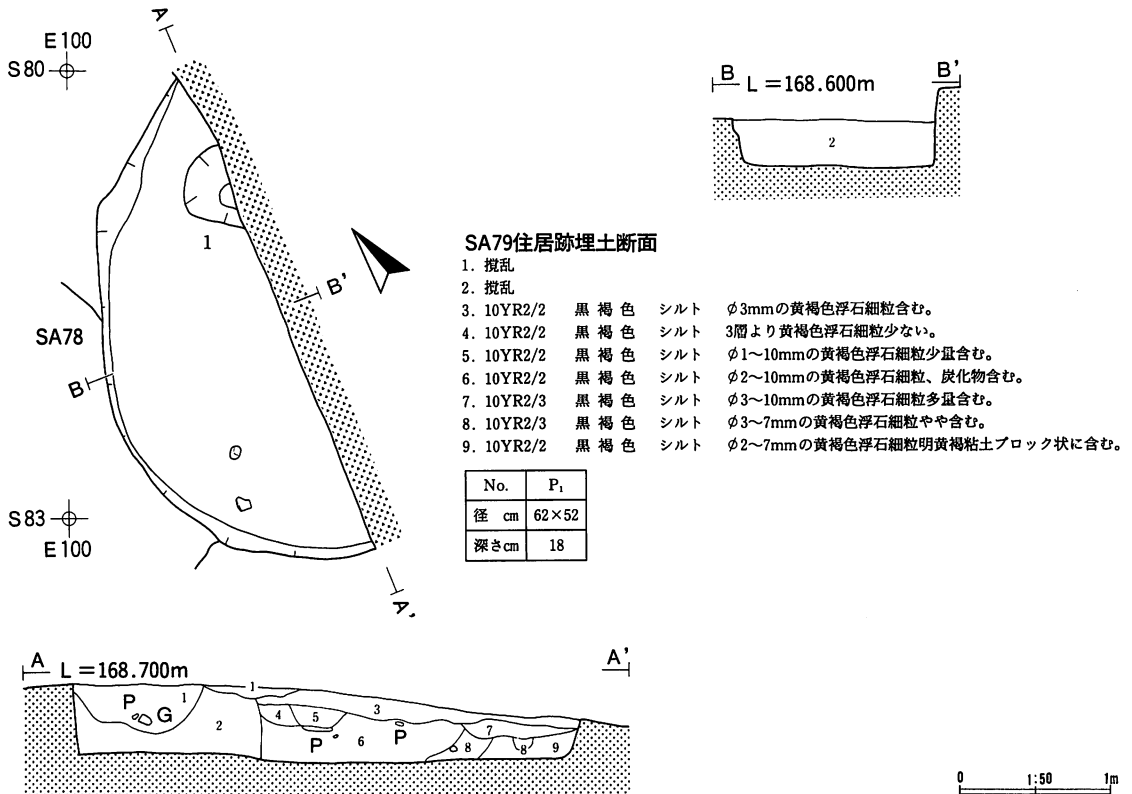
〈検出状況・重複関係〉東側の大半が調査区外にのびており全貌については不明である。SA 47・SA 48 住居跡と重複しており、いずれの住居跡も新しく位置づけられる。

〈平面形・規模〉推定で、直径3.5m前後の円形を基調とした住居跡と思われる。推定床面積は7.3m²である。

〈埋土〉北側の一部が攪乱を受けている。微量の炭化物、黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土が主体で、壁際には直径3cm±の八戸火山灰をブロック状に含んだ黒褐色のシルト質土が見られる。

〈壁・床面〉壁はほぼ垂直気味に立ち上がっており、北壁で26cm・西壁で16cm・南壁で19cmである。八戸火山灰層を床面としており、比較的たたく平坦であり重複関係にあるSA 80住居跡の床面と高低差はない。

〈柱穴〉規模・深さからP1が支柱穴の一部に相当すると思われる。柱穴配置については不明である。



第76図 SA79住居跡

〈炉〉 調査範囲内からは検出されていない。

遺物（第 320 図、写真図版 287）

〈土器〉 1830 は壺である。頸部は縄文帯、頸部には幅の狭い縄文帯、胴部にはタスキ掛け状入組文が展開している。縄文は異種原体による非結束羽状縄文である。1831 は長頸の壺である。口縁部には刻みのある低い山形突起が 4 個付されている。口縁部・頸部文様帯には幅の狭い縄文帯と幅の広い無文帯が交互に展開している。縄文は異種原体による非結束羽状縄文である。1832 は全面に異種原体による非結束羽状縄文が施文された壺である。口唇部は平坦に調整されている。

〈石器〉 1837 は交差する 2 辺に加工痕のある不定形石器である。

〈時期〉 縄文時代後期田柄貝塚第IV群に相当する時期が考えられる。

SA80 住居跡

遺構（第 77 図、写真図版 85）

〈位置〉 B 調査区、JIX グリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA75・SA77 住居跡より古く、SA76・SA78 住居跡より新しく位置づけられる。

〈平面形・規模〉 推定で、直径 5.2 m×5.0 m 前後の規模を持つ略円形～楕円形を基調とした住居跡と思われる。推定床面積は 24.0 m²である。

〈埋土〉 黄褐色浮石細粒を含んだ黒褐色のシルト質土で構成されている。

〈壁・床面〉 壁はほぼ垂直気味に立ち上がっており、重複関係にある SA77 住居跡の床面との差は 10 cm 程度である。八戸火山灰層を床面としており、比較的かたく平坦であり重複関係にある SA78 住居跡の床面と高低差はない。

〈柱穴〉 規模・深さから P1～P5 が支柱穴の一部に相当すると思われる。五角形の柱穴配置である。一部壁溝と重複して壁柱穴が検出されている。

〈炉〉 住居跡の南壁に相当する部分から、135 cm×100 cm、深さ 12 cm の南北に長い長方形の掘り込みがあり、内側の壁に沿って礫が埋置されている。炉の構成礫は東辺には残存していたが、北辺・南辺では確認されなかった。

〈壁溝〉 北側及び西側部分の一部から、幅 15 cm・深さ 5 cm 程度の規模をもつ壁溝が検出されている。

遺物（第 321 図、写真図版 287）

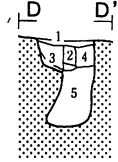
〈土器〉 1838 は縦位撚糸文が施文された深鉢である。1839 は RL 縄文が施文された鉢である。

〈時期〉 縄文時代中期末葉の時期と考えられる。

E 96
S 83

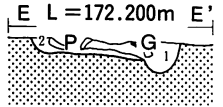
E 101
S 83

L = 168.300m



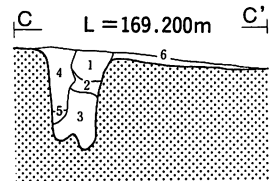
SA80住居跡 P 3

1. 10YR2/1 黒色 シルト
 2. 10YR2/3 黒褐色 シルト
 3. 10YR3/4 暗褐色 シルト
 4. 10YR2/3 黒褐色 シルト
 5. 10YR2/1 黒色 シルト
- φ3mmの黄褐色浮石細粒含む。
 φ2mmの黄褐色浮石細粒含む。
 φ3mmの黄褐色浮石細粒含む。
 堅い。
 炭化物少量含む。



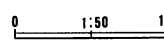
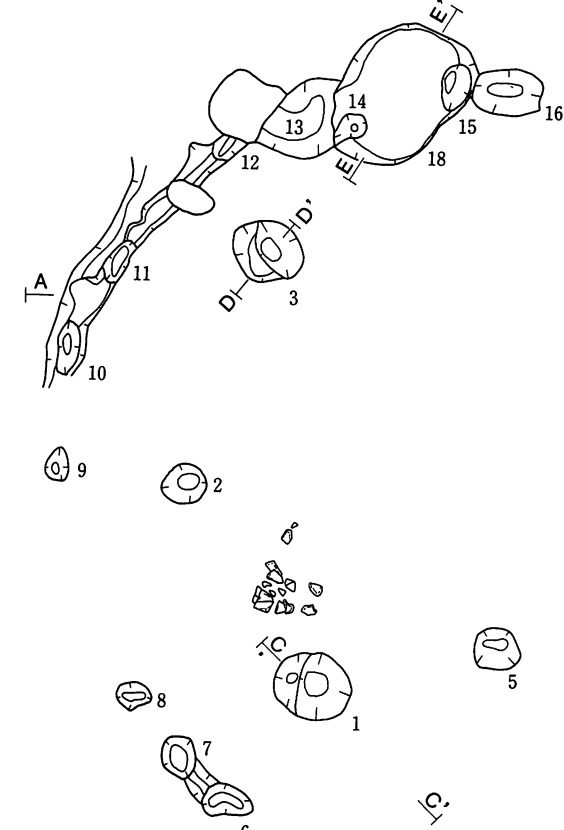
SA80住居跡 P 18

1. 10YR2/2 黒褐色 シルト
 2. 10YR2/3 黒褐色 シルト
- φ3mmの黄褐色浮石細粒含む。
 黄褐色浮石細粒、炭化物含む。

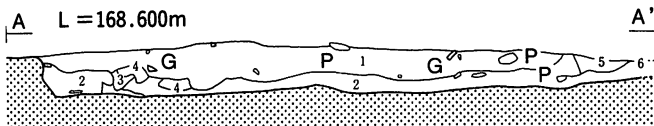


SA80住居跡 P 1

1. 10YR2/1 黒色 シルト
 2. 10YR4/6 褐色 シルト
 3. 10YR2/2 黒褐色 シルト
 4. 10YR2/3 黒褐色 シルト
 5. 10YR7/6 明黄褐色 シルト
 6. 10YR3/4 暗褐色 シルト
- 堅い、φ5mmの黄褐色浮石細粒含む。
 粘土質。
 軟らかい、柱痕跡。
 軟らかい、φ3mmの黄褐色浮石細粒含む。
 粘土質。
 堅い、φ4mmの黄褐色浮石細粒含む。



S 89
E 96

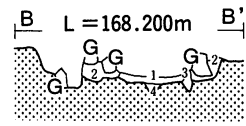


SA80住居跡埋土断面

1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 白色ローム、φ2~5mmの黄褐色浮石細粒含む。
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト 黄褐色粘土粒ブロック状に含む。
3. 10YR5/6 黄褐色 シルト 木根による攪乱。
4. 10YR2/2 黒褐色 シルト 炭化物含む。
5. 10YR2/2 黒褐色 シルト φ3~10mmの黄褐色浮石細粒含む。
6. 10YR2/2 黒褐色 シルト φ2~5mmの黄褐色浮石細粒少量含む。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	51×45	28×26	44×41	40×36	30×27	33×21	27×22	23×19
深さ cm	75	66	57	72	18	13	12	8

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	22×17	35×24	30×17	24×18	61×55	18×15	30×19	45×31
深さ cm	13	14	13	20	12	26	19	27



SA80住居跡炉

1. 5YR8/5 明褐色 シルト 焼土層。
2. 10YR6/4 褐色 シルト
3. 10YR3/3 暗褐色 シルト
4. 10YR2/3 黒褐色 シルト

No.	P ₁₇	P ₁₈
径 cm	24×20	100×80
深さ cm	12	5

第77図 SA80住居跡

SA81 住居跡

遺構 (第 78 図、写真図版 86)

〈位置〉 B 調査区、JIXグリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 III層下部で検出された。SA74 住居跡と重複しておりこれより古く位置づけられる。

〈平面形・規模〉 約半分ほどしか検出されなかったが、平面形は円形を基調とし直径約 3 m ほどの規模をもつと思われる。推定床面積は 5.2 m²である。

〈埋土〉 焼土・浮石を含む暗褐色のシルト質土である。

〈壁・床面〉 南部浮石層を床面としており軟らかい。

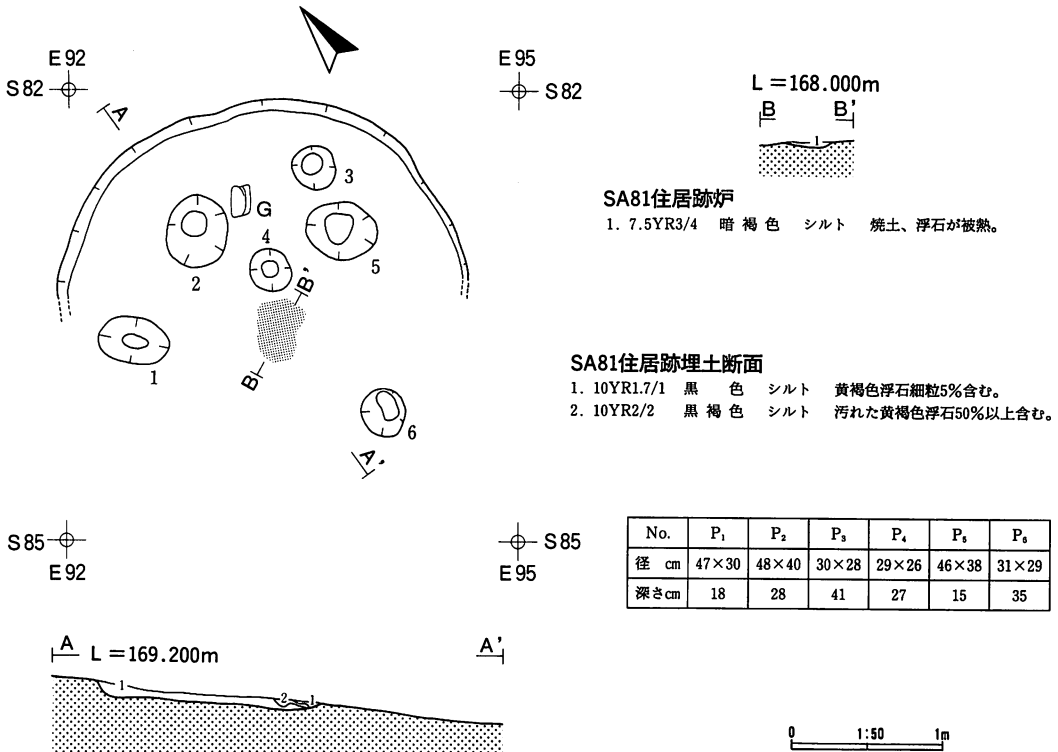
〈柱穴〉 柱穴配置は不明であるが、P1~P7 まで検出されており多量の黄褐色浮石細粒を含む黒色~黒褐色のシルト質土が埋土である。

〈炉〉 ほぼ中央部に設けられており、不整形をした地床炉である。

遺物 (第 321 図、写真図版 287)

〈土器〉 1846~1850 は胎土に繊維が含まれている。1847 は多軸絡条体回転文が施文されている。

〈時期〉 縄文時代前期前半の時期と考えられる。



SA82 住居跡

遺構 (第79図、写真図版86・87)

〈位置〉 B調査区、KIXグリッドに位置している。

〈検出状況・重複関係〉 大半が調査区外に延びており、しかも検出された北側の部分も重機により大きく破壊を受けている。遺構の上部も耕作等により後世の攪乱を受けている。

〈平面形・規模〉 推定で直径3.2m程度の規模を持つ、円形を基調とする住居跡である。推定床面積は8.4m²である。

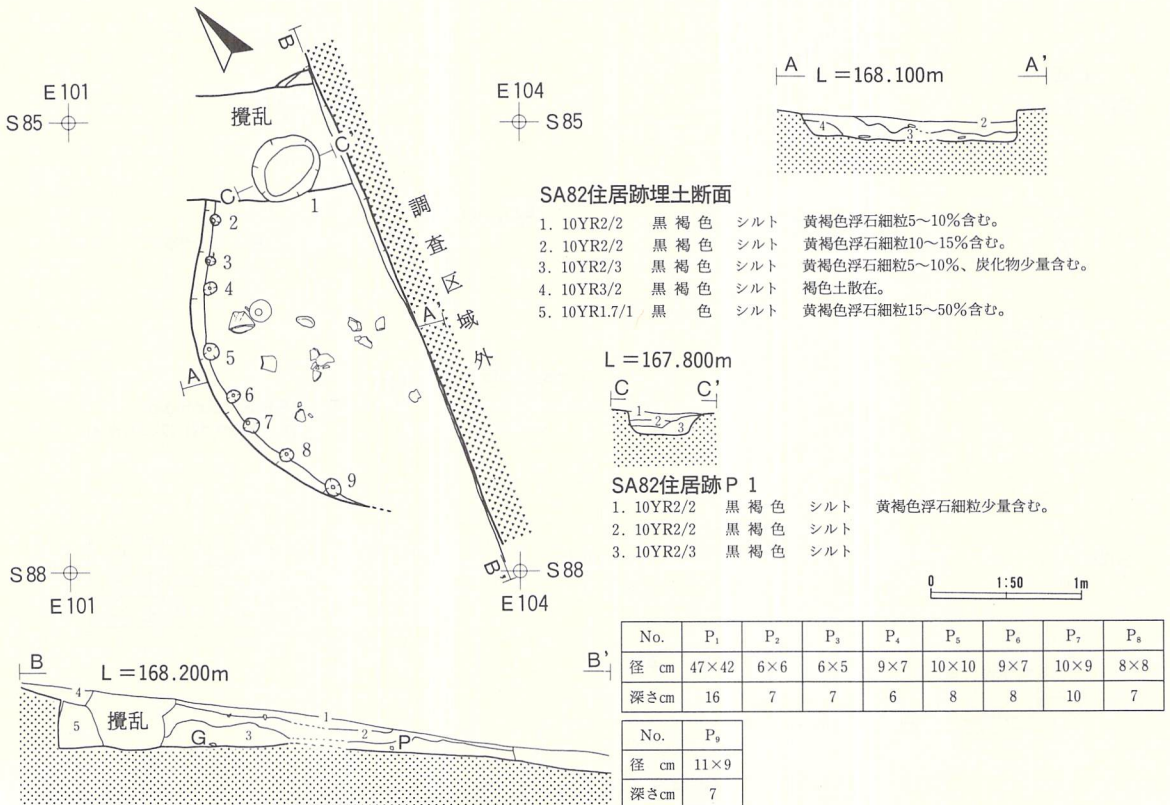
〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒が混じる黒褐色のシルト質土を基調としている。

〈壁・床面〉 壁は外傾気味に立ち上がり、北壁で32cm、西壁で27cmの残存値である。壁の南側は既に失われている。八戸ロームを床面としており、ほぼ水平である。

〈柱穴〉 9個の柱穴が確認され、攪乱の下部から見つかったP1は主柱穴の一部を構成し他は壁柱穴であり、これら壁柱穴は中心に向かい内傾している。

〈炉〉 炉は検出されていないが、東側の調査区外の部分に存在すると思われる。

〈その他〉 床面から5cm~15cm浮いた埋土下部から拳大~半頭大の亜円礫十数個認められたが、投棄されたものと思われる。



第79図 SA82住居跡

遺物 (第 321・322 図、写真図版 288)

〈土器・土製品〉 1852 は広口壺と思われる。頸部に屈曲部をもち胴部には密着した幅の広い曲線状文が施文される。文様の結節部に瘤が貼付されている。縄文は異種原体による非結束羽状縄文である。1853 は曲線状文の内部に異種原体による非結束羽状縄文が充填された注口である。胴部最大径を肩部にもち、その部分に短い注口部が付されている。胴部中央・胴部上半には瘤を中心に放射状に曲線状文が展開している。胴部文様帯の縄文が見られない部分には赤色顔料の痕跡が見られる。1854 は球胴の壺である。胴部には入り組み状の曲線状文が展開している。縄文は異種原体による非結束羽状縄文である。1855 は LR 縄文が施文された小型の壺である。1856 は無文の鉢である。1861 は比較的大きく打ち欠きの見られる土製円盤である。1862 は焼成粘土である。

〈時期〉 縄文時代後期田柄貝塚第IV群に相当する時期と考えられる。

SA83 住居跡

遺構 (第 80 図、写真図版 88)

〈位置〉 B 調査区、J X グリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 壁の南側は既に失われている。SD158 土坑と重複しており、土坑より古く位置づけられる。

〈平面形・規模〉 推定で 6.1 m×3.3 m 前後の規模を持つ平面形が楕円形の住居跡と思われる。推定床面積は 18.6 m²である。

〈埋土〉 黄褐色浮石細粒を含んだ黒褐色のシルト質土で構成されている。

〈壁・床面〉 壁はほぼ垂直気味に立ち上がっており、東壁 17 cm・北壁 19 cm・西壁 25 cm が残存している。床面は南側に向かい緩やかに傾斜しており、八戸火山灰層を床面としている。

〈柱穴〉 明確な柱穴配置は不明であるが、P1・4 が支柱穴、P7～P23 が壁柱穴に相当する。

〈炉〉 住居跡の東壁に寄った位置に 56 cm×54 cm の規模の円形の石囲炉が検出された。

〈その他〉 住居跡の全域から流れ込みと思われる拳大～半頭大の礫が多数出土している。

遺物 (第 322・323 図、写真図版 288・289)

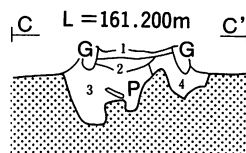
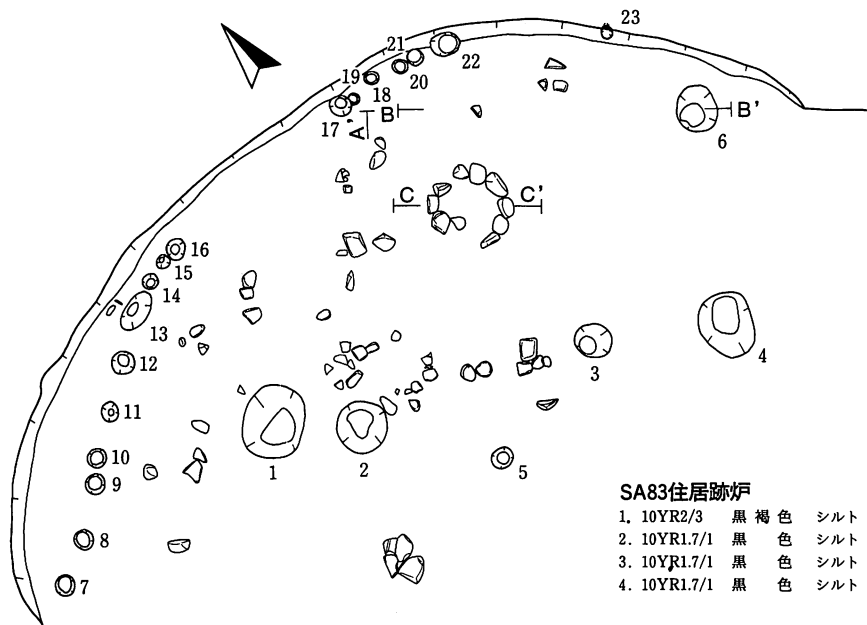
〈土器〉 1863 は折り返し口縁の深鉢である。頸部付近に緩やかな括れをもち胴部には RL 縄文が施文されている。1864～1866 は縄文後期前葉の土器である。1867 は刺突された隆帯で区画され、口縁部には絡条体の押捺、胴部には LR 縄文が施文されている。1868 は口縁部に不整綾線文が施文されている。

〈石器・石製品〉 石鏃 1 点、石製円盤 1 点が出土している。

〈時期〉 縄文時代後期初頭の時期と考えられる。

E 88
S 89

E 93
S 89



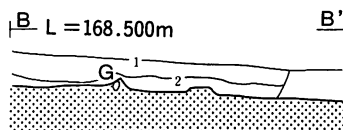
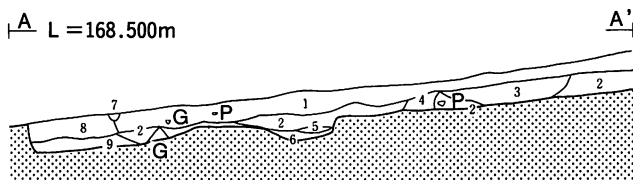
SA83住居跡炉

- 1. 10YR2/3 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒2%、炭化物微量含む。
- 2. 10YR1.7/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒1%含む。
- 3. 10YR1.7/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒1%含む。
- 4. 10YR1.7/1 黒色 シルト 3層に類似黄褐色浮石細粒1%含む。

S 94
E 88

S 94
E 93

0 1:50 1m



SA83住居跡埋土断面

- 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト ϕ 3~5mmの黄褐色浮石細粒、 ϕ 5mmの炭化物含む。
- 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト ϕ 3~10mmの黄褐色浮石細粒含む。
- 3. 10YR2/1 黒色 シルト ϕ 5mmの黄褐色浮石細粒、炭化物を含む。
- 4. 10YR2/3 黒褐色 シルト ϕ 5mmの黄褐色浮石細粒含む。
- 5. 10YR2/2 黒褐色 シルト ϕ 5mmの黄褐色浮石細粒多量含む。
- 6. 10YR3/2 黒褐色 シルト ϕ 3mm±の黄褐色浮石細粒少量含む。
- 7. 10YR2/2 黒褐色 シルト ϕ 3mmの黄褐色浮石細粒含む。
- 8. 10YR2/2 黒褐色 シルト ϕ 3mmの黄褐色浮石細粒含む。
- 9. 10YR2/2 黒褐色 シルト ϕ 2~10mmの黄褐色浮石細粒50%以上含む。

No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	49×40	34×33	24×21	43×35	15×13	30×27	14×12	13×12
深さcm	55	45	44	53	11	17	23	25

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	14×13	12×12	12×11	15×15	28×15	10×10	9×8	14×12
深さcm	18	16	17	22	24	10	10	10

No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃
径 cm	15×13	7×7	10×8	10×9	10×10	18×15	8×7
深さcm	25	6	4	5	6	16	5

第80図 SA83住居跡

SA84 住居跡

遺構（第 81 図、写真図版 88・89）

〈位置〉 B 調査区、J X グリッドの中央部斜面変換点付近に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 大半の壁は既に失われており、壁の一部と炉を検出しただけである。

〈平面形・規模〉 規模は不明であるが、楕円形を基調とした平面形と考えられる。

〈埋土〉 埋土は、地山である八戸ロームの粒子を含む黒褐色から褐色のシルト質土・砂質のシルト質土で構成されている。

〈壁・床面〉 壁は北東側部分でのみ確認され外傾気味に立ち上がっており、壁の残存値は北壁で 15 cm・東壁で 11 cm である。八戸ロームを床面としており、住居跡の南側にあたる斜面下方向かって緩やかに傾斜している。

〈柱穴〉 柱穴に相当するものは 7 個検出されており、この中で P1・2 は支柱穴、その他の柱穴は支柱穴や補助的な柱穴と考えられる。

〈炉〉楕円形の長軸線上と考えられる部分に、炉に相当する焼土が確認されている。40 cm×30 cm、厚さ 10 cm 程度の規模を持つ地床炉である。

遺物（第 323・324 図、写真図版 289）

〈土器・土製品〉 1880 は組み紐の回転文である。1882 は縄文前期後半の土器で口縁部には絡条体の押捺、胴部には結束羽状縄文が施文されている。1875 は口縁部が外反する深鉢である。口唇部には爪形状の刺突文、口縁部の一部と胴部には LR 縄文、口縁部には不整綾線文が施文されている。1887・1889 は縄文後期初頭・前葉の時期に相当するものである。土製円盤 1 点、焼成粘土 2 が出土している。

〈石器・石製品〉 台石 1 点、石鏃 1 点、石匙 1 点、石製円盤 1 点が出土している。

〈時期〉 詳細は不明であるが縄文時代前期の時期と考えられる。

SA85 住居跡

遺構（第 82 図、写真図版 89・90）

〈位置〉 B 調査区、H XI グリッドの北側に位置している。

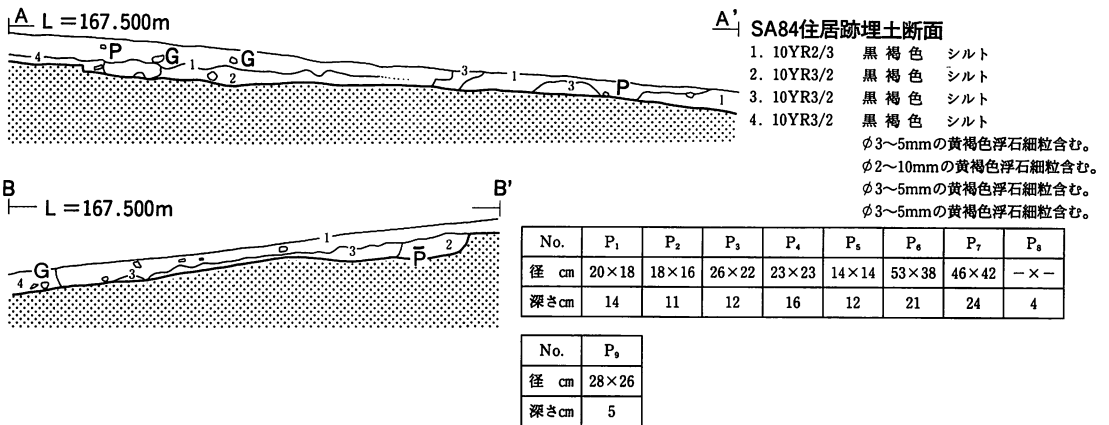
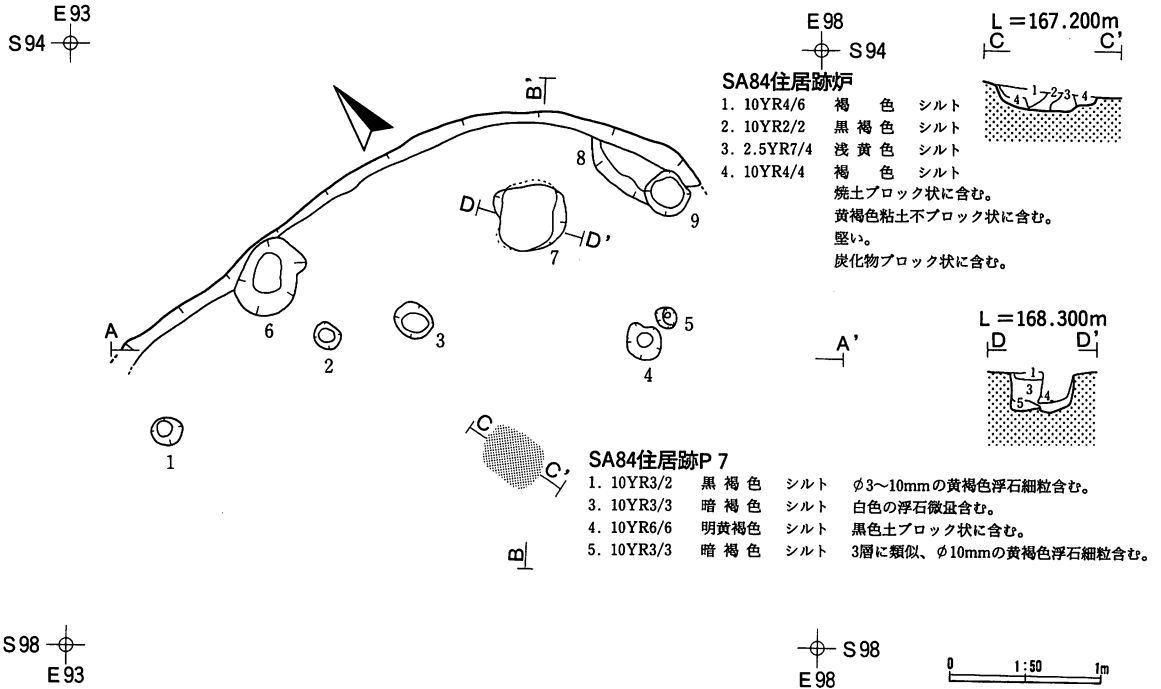
〈検出状況・重複関係〉 炉・柱穴、壁の一部が確認されただけである。北西側は大きく攪乱をうけており、南側は沢に落ちる部分である。

〈平面形・規模〉 推定で 8.0 m 前後の規模を持つ平面形が円形～楕円形を基調とする住居跡と思われる。

〈埋土〉 褐色の砂質シルト質土で構成されている。

〈壁・床面〉 床面は凹凸が激しい。

〈柱穴〉 明確な柱穴配置は不明であるが、P1～P5が主柱穴、P6～P17が支柱穴、P18・P19が



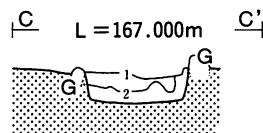
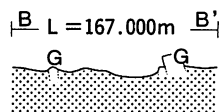
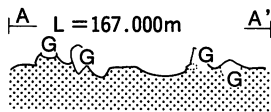
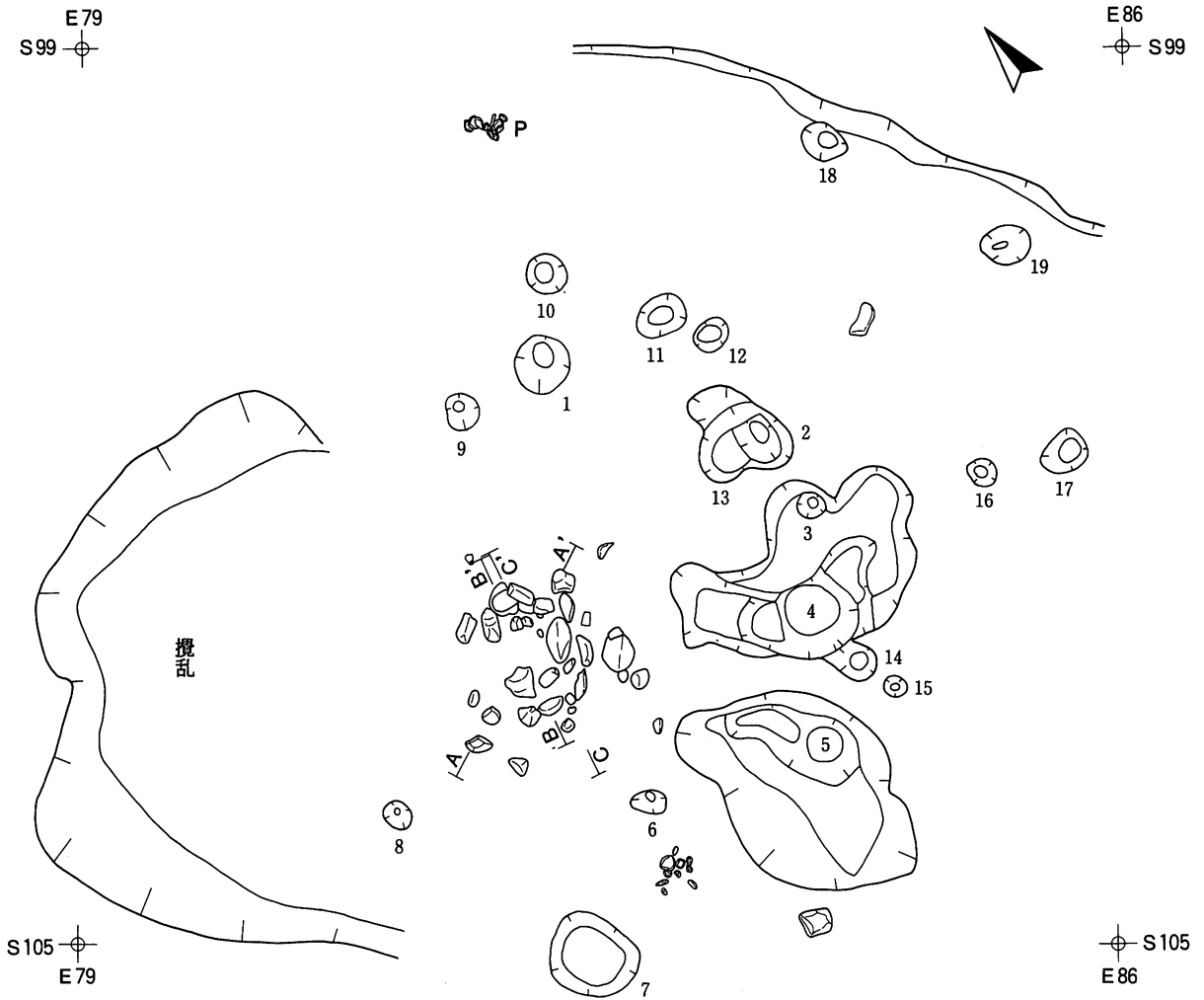
第81図 SA84住居跡

壁柱穴に相当する。

〈炉〉直径 100 cm 土の規模で円形を基調として組まれている。炉の縁石は東側では密に組まれているが西半部分では疎らである。

〈その他〉住居跡の全域から流れ込みと思われる拳大～半頭大の礫が多数出土している。

遺物 (第 324・325 図、写真図版 290)



No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	38×37	54×37	19×18	55×54	47×42	24×15	62×53	20×16
深さcm	30	31	33	57	58	17	11	15

No.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
径 cm	24×22	27×27	34×25	24×20	63×48	25×24	15×13	20×18
深さcm	16	14	15	14	23	10	7	14

No.	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉
径 cm	32×25	30×24	34×26
深さcm	17	12	20

SA85住居跡炉

- 10YR3/2 黒褐色 シルト 部分的に焼土含む。
- 10YR6/6 明褐色黄 シルト 砂質、φ5cm±の瓦円礫含む。

第82図 SA85住居跡

〈土器〉1893 は壺である。口縁部は中に沈線を持つ隆帯で、口唇部には沈線が1条巡っている。頸部は無文帯で胴部上半には刻みを持つ工字文が展開するようである。1984 は肩部に最大径を持つ無文の壺である。1895 は中央部よりやや上に最大径をもつ無文の壺である。1897 は胴部上半に横位の平行沈線が施文された無文の壺である。

〈石器〉 1909 は台石である。

〈時期〉 縄文時代晩期後半の時期と思われる。

2. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡とした遺構は、通常の住居跡の床面に見られる柱穴よりも大型のもので、埋土の断面に柱痕跡が残されていたり、柱穴の底面に明らかに柱当たりと思われる円形の酸化鉄の集積が認められるものが多い。一般に見られる竪穴住居跡とは異なり壁や炉に相当するものが見られない。調査の過程で柱穴配置が確認できた掘立柱建物跡もあるが、特にB調査区では多年度にわたって調査した事情などから、規模・埋土の状況の検討から机上で復元作業を行った掘立柱建物跡もある。

SB01 掘立柱建物跡

遺構（第 83 図、写真図版 91）

〈位置〉 A 調査区、J XV グリッドに位置している。

〈重複関係〉 SA05 住居跡より古く、SA06 住居跡より新しい。

〈柱穴配置〉 6 本構成で、東西に長軸方向を持ち平面形が亀甲状である。

〈埋土〉 明瞭に柱痕跡が認められるものはなかったが、全体に炭化物や焼土を多く含む層で構成されている。P6 の側壁には土坑構築の際の工具の痕跡と思われる縦方向の溝がみられた。P4 土坑底面には直径 30 cm ほどの周囲とは色調・堅さが異なる面が認められ、柱の痕跡部分と思われる。

〈柱穴深度〉 P1 (74 cm)・P2 (56 cm)・P3 (90 cm)・P4 (104 cm)・P5 (54 cm)・P6 (88 cm) であり相対的に斜面下方側の柱穴が浅くなっている。

〈柱穴間隔〉 P1-P2 (2.2 m)・P2-P3 (2.6 m)・P3-P4 (3.6 m)・P4-P5 (2.6 m)・P5-P6 (2.8 m)・P6-P1 (2.6 m)、長軸方向では P2-P5 (6.7 m)、短軸方向では P1-P3 (3.5 m)・P6-P4 (3.4 m) である。

〈主軸方位〉 N 82° W

遺物（第 326・331 図、写真図版 291・296）

〈土器・土製品〉 1911 は口唇部に突起が付き、口縁部装飾帯は無文となっている。2031 は土製円盤である。

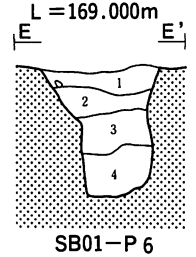
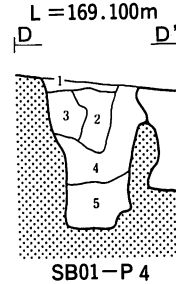
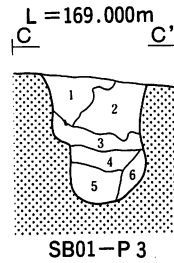
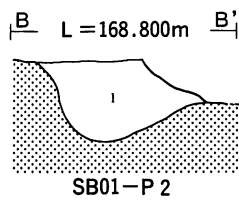
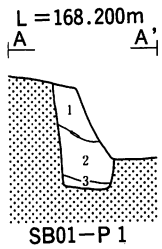
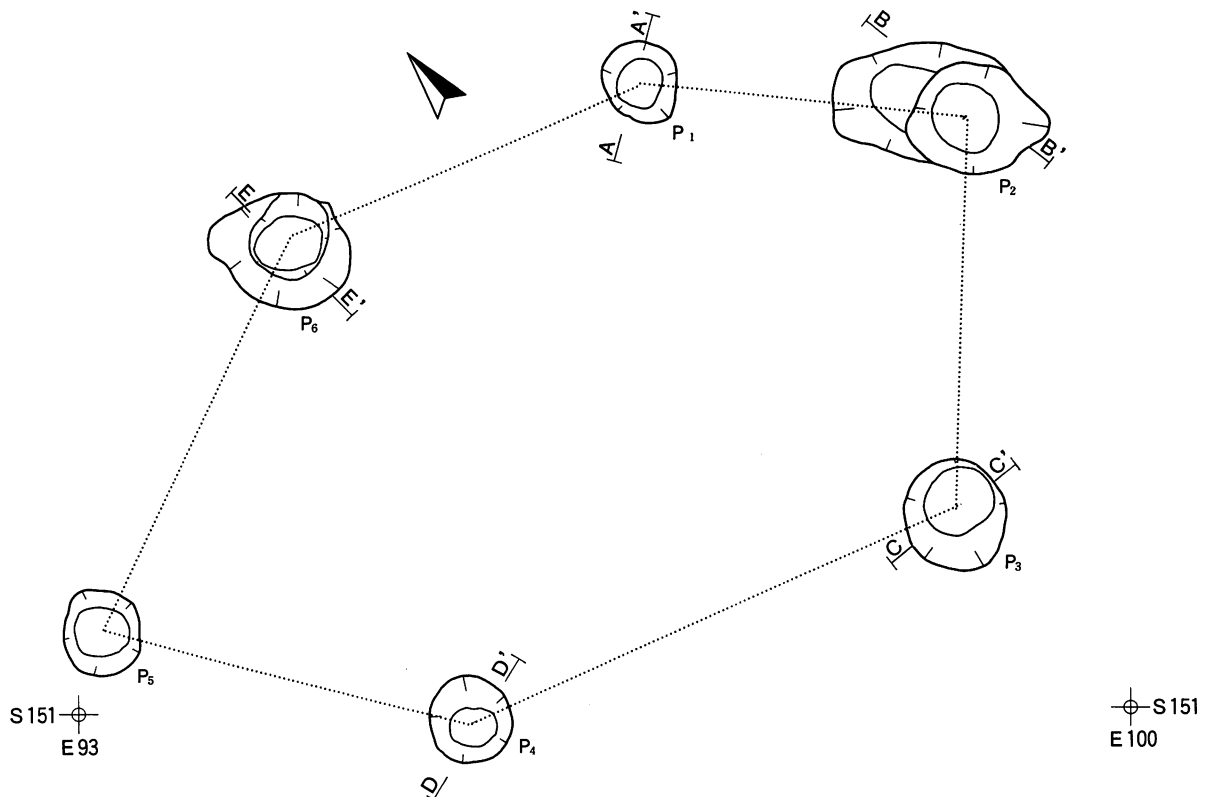
SB02 掘立柱建物跡

遺構（第 84 図、写真図版 92）

〈位置〉 A 調査区、HVI グリッドに位置している。

〈重複関係〉 縄文時代晩期前葉の遺物包含層下位で検出されている。SA56 住居跡より新しい。

〈柱穴配置〉 推定で 4 本柱構成、南北に長軸方向を持ち平面形が長方形である。4 本目に相当



SB01-P1

- | | | | | |
|----|---------|-----|-----|---------------|
| 1. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒少量含む。 |
| 2. | 10YR3/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色土・灰黄褐色土含む。 |
| 3. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒微量含む。 |

SB01-P2

- | | | | | |
|----|---------|----|-----|--------------|
| 1. | 10YR3/2 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒多量含む。 |
|----|---------|----|-----|--------------|

SB01-P3

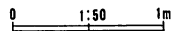
- | | | | | |
|----|-----------|-----|-----|---------------------|
| 1. | 7.5YR2/3 | 黒褐色 | シルト | φ10mmの黄褐色浮石細粒多量含む。 |
| 2. | 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 1層に類似、黄褐色浮石細粒やや少ない。 |
| 3. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒少量含む。 |
| 4. | 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒少量含む。 |
| 5. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒含む。 |
| 6. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | |

SB01-P4

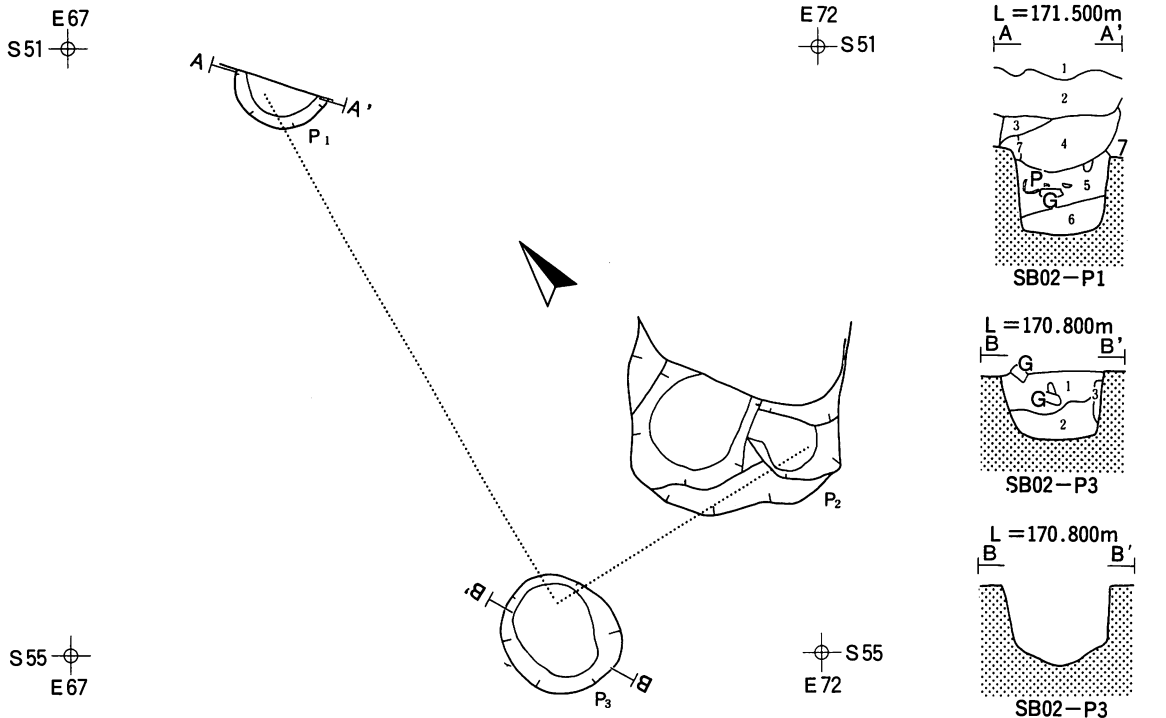
- | | | | | |
|----|-----------|-----|-----|--------------------|
| 1. | 10YR1.7/1 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒少量含む。 |
| 2. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 炭化物・焼土多量含む。 |
| 3. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | φ10mm±黄褐色浮石細粒多量含む。 |
| 4. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | φ10mm±黄褐色浮石細粒多量含む。 |
| 5. | 10YR2/1 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒多量含む。 |

SB01-P6

- | | | | | |
|----|-----------|-----|-----|----------------------|
| 1. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | φ5mm黄褐色浮石細粒多量含む。 |
| 2. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 1層に類似、黄褐色浮石細粒少量含む。 |
| 3. | 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 黒色主体に汚れた黄褐色浮石細粒含む。 |
| 4. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黒褐色主体に八戸火山灰ブロック状に含む。 |



第83図 SB01掘立柱建物跡



SB02-P1

- | | | | | |
|----|---------|------|-----|-------------------------|
| 1. | 10YR3/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒5~7%、焼土・炭化物微量含む。 |
| 2. | 10YR3/3 | 暗褐色 | シルト | 焼土・炭化物多量・黄褐色浮石細粒含む。 |
| 3. | 10YR6/6 | 明黄褐色 | シルト | 八戸火山灰15%含む。 |
| 4. | 10YR3/1 | 黒褐色 | シルト | 焼土・炭化物散在。 |
| 5. | 10YR6/6 | 明黄褐色 | シルト | 八戸火山灰、焼土炭化物散在。 |
| 6. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 南部浮石再堆積。 |
| 7. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒10~15mm含む。 |

SB02-P3

- | | | | | |
|----|----------|-----|-----|--------------|
| 1. | 7.5YR4/6 | 褐色 | シルト | 炭化物多量含む。 |
| 2. | 7.5YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 炭化物・焼土多量含む。 |
| 3. | 7.5YR5/6 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒2%含む。 |

0 1:50 1m

第84図 SB02掘立柱建物跡

する柱穴は調査区外に存在すると思われる。

〈埋土〉 しまりなく焼土・炭化物・灰白色のローム粒が混じる黒~黒褐色のシルト質土である。

〈柱穴深度〉 P1 (56 cm)・P2 (73 cm)・P3 (54 cm) である。

〈柱穴間隔〉 P1-P3 (4.0 m)・P3-P2 (2.0 m) である。

〈主軸方位〉 N 10° E

遺物 (第 326・331 図、写真図版 291・296)

〈土器〉1919 は胴部に瘤が貼付され、入組状の曲折状文が展開する注口と思われる。1915 は異種原体による非結束羽状縄文が施文された深鉢である。

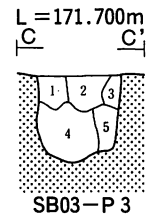
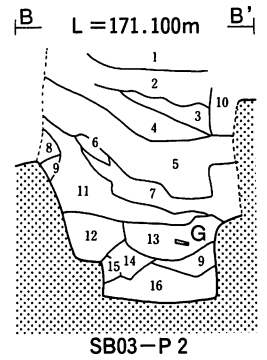
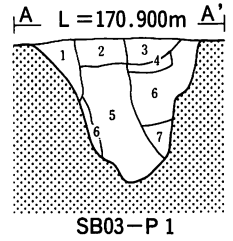
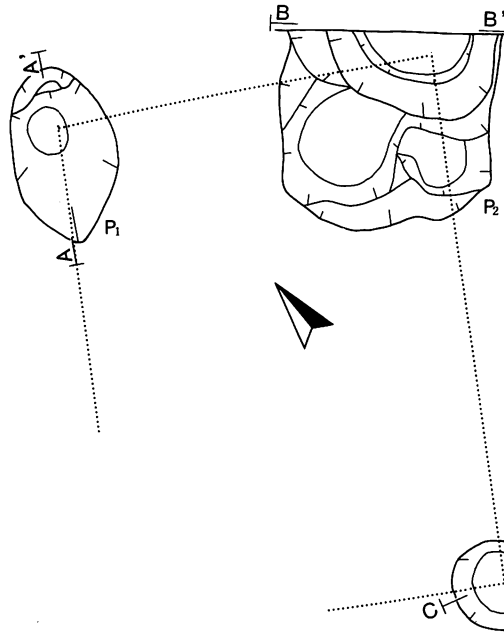
〈石器〉 石匙 1 点、台石 1 点が出土している。

SB03 掘立柱建物跡

遺構 (第 85 図、写真図版 92)

E 68
S 52

E 73
S 52



S 57
E 68

SB03-P1

- | | | | |
|----|---------|--------|-----------------|
| 1. | 10YR2/1 | 黒色シルト | 八戸火山灰散在。 |
| 2. | 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 炭化物1%含む。 |
| 3. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 炭化物多量含む。 |
| 4. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 焼土多量に含む。 |
| 5. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 焼土・炭化物1%含む。 |
| 6. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 炭化物・焼土・八戸火山灰散在。 |
| 7. | 10YR2/1 | 黒色シルト | 焼土1%含む。 |

SB03-P3

- | | | | |
|----|---------|--------|-------------------------------------|
| 1. | 10YR2/1 | 黒色シルト | 粘性しまりなし、炭化物1%
・黄褐色浮石細粒3%含む。 |
| 2. | 10YR3/1 | 黒褐色シルト | 粘性しまりなし、黄褐色浮石細粒7%含む。 |
| 3. | 10YR2/1 | 黒褐色シルト | 粘性しまりなし、黄褐色浮石細粒20%含む。 |
| 4. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 粘性しまりなし、黄褐色浮石細粒5%
八戸火山灰ブロック状に含む。 |
| 5. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 粘性しまりなし、八戸火山灰帯状に含む。 |

SB03-P2

- | | | | |
|-----|-----------|--------|-------------------------|
| 1. | 10YR3/2 | 黒褐色シルト | 黄褐色浮石細粒5~7%、焼土・炭化物微量含む。 |
| 2. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 黄褐色浮石細粒3%、炭化物・焼土少量含む。 |
| 3. | 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 黄褐色粘土散在。 |
| 4. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 1層より炭化物多量含む。 |
| 5. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 黄褐色浮石細粒、炭化物・焼土3%含む。 |
| 6. | 10YR1.7/1 | 黒色シルト | 黄褐色浮石細粒1%含む。 |
| 7. | 10YR2/1 | 黒色シルト | 炭化物多量含む。 |
| 8. | 10YR2/1 | 黒色シルト | 黄褐色浮石細粒10~15%含む。 |
| 9. | | | 汚れた黄褐色浮石細粒 |
| 10. | | 黒色土 | 攪乱。 |
| 11. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 黄褐色粘土散在。 |
| 12. | 10YR3/2 | 黒褐色シルト | 黄褐色粘土ブロック状に含む。 |
| 13. | 10YR1.7/1 | 黒色シルト | 黄褐色浮石細粒3%含む。 |
| 14. | 10YR3/2 | 黒褐色シルト | 8層に灰白色粘土混じる。 |
| 15. | 10YR4/4 | 褐色粘土 | |
| 16. | 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 灰白色粘土ブロック状に含む。 |

S 57
E 73

第85図 SB03掘立柱建物跡

0 1:50 1m

〈位置〉 A調査区、HVIグリッドに位置している。

〈重複関係〉 縄文晩期前葉の遺物包含層の下位で検出されている。SA56 住居跡より新しい。

〈柱穴配置〉 推定で4本柱構成、南北に長軸方向を持ち平面形が長方形である。4本目に相当する柱穴は攪乱部分に存在したと思われる。

〈埋土〉 P1では柱痕跡に相当すると思われる幅30cm・深さ90cm程度の黒褐色土が認められた。これらの柱穴の埋土には焼土・炭化物・灰白色のローム粒の混じりが顕著であった。

〈柱穴深度〉 P1 (96 cm) ・ P2 (74 cm) ・ P3 (57 cm) である。

〈柱間〉 P1-P2 (2.6 m) ・ P2-P3 (3.5 m) である。

〈主軸方位〉 N 32° E

遺物 (第 326 図、写真図版 291)

〈土器〉縄文時代後期中葉頃の土器が出土している(1920~1922)。1921 は頸部に刻みが施され、口縁部文様帯・胴部には曲折状文が施文されている。

SB04 掘立柱建物跡

遺構 (第 86 図、写真図版 93)

〈位置〉 B 調査区、HVIIグリッドに位置している。

〈重複関係〉縄文時代晩期前葉の遺物包含層の下位で検出されている。SA56 住居跡より新しい。

〈柱穴配置〉 4 本柱構成、平面形は長方形である。1 本は調査区外に存在すると思われる。

〈埋土〉 P3 では幅 50 cm±・深さ 110 cm の柱痕跡に相当する黒褐色土が見られた。P2・3 の底面は非常に堅緻であった。埋土は一般にしまりなく焼土・炭化物・黄褐色浮石細粒・ローム粒を含む層で構成されている。

〈柱穴深度〉 P1 (149 cm) ・ P2 (125 cm) ・ P3 (143 cm) である。

〈柱穴間隔〉 P1-P2 (5.6 m) ・ P2-P3 (4.8 m) である。

〈主軸方位〉 N 0° W

遺物 (第 326 ・ 327 図、写真図版 291 ・ 292)

〈土器〉縄文時代後期中葉・後葉の土器が出土している。1936 は平口縁の壺である。口縁部装飾帯には幅の狭い平行縄文帯、頸部には玉抱き三叉文風の文様が展開している。口唇部は内反りで平坦調整されている。

SB05 掘立柱建物跡

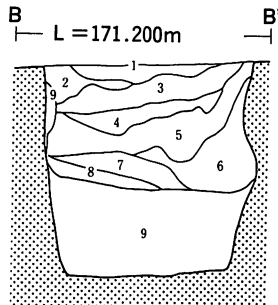
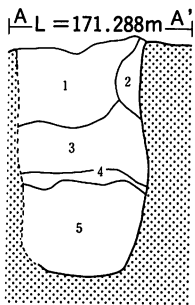
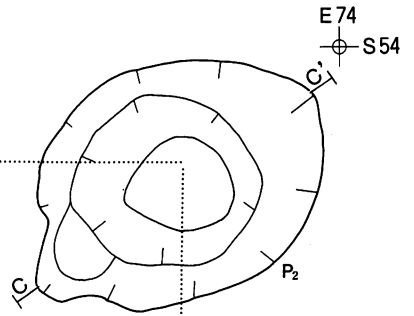
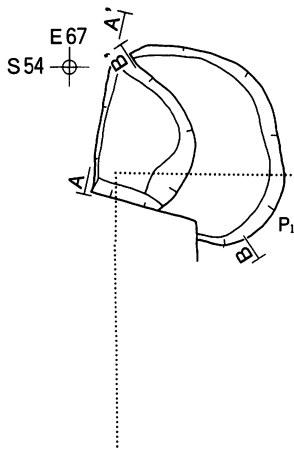
遺構 (第 87 図、写真図版 93 ・ 94)

〈位置〉 B 調査区、GVIグリッドに位置している。

〈重複関係〉縄文時代晩期前葉の遺物包含層の下位から検出されている。SA56 住居跡より新しい。

〈柱穴配置〉 推定で 4 本柱構成、平面形は長方形と思われる。

〈埋土〉 P1 では幅 40 cm±・深さ 130 cm±、P2 では 50 cm±の柱痕跡に相当する層が認められた。また底面には厚さ 20 cm±の汚れた黄褐色浮石粒を突き固めたような堅緻な部分が見られる。掘り方に相当する部分には焼土・炭化物・ローム粒を含む層で構成されており人為的に埋



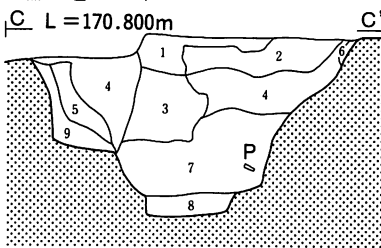
SB04-P1 A-A'

SB04-P1

- 1. 10YR2/1 黒色シルト 炭化物・焼土。
- 2. 10YR2/3 黒褐色シルト 炭化物・焼土・黄褐色浮石細粒・灰白色粘土含む。
- 3. 10YR1.7/1 黒色シルト 明黄褐色粘土ブロック状に含む。
- 4. 10YR3/2 黒褐色シルト 2層に類似、灰白色粘土多量含む。
- 5. 10YR1.7/1 黒色シルト
- 6. 10YR3/2 黒褐色シルト 2層に類似、灰白色粘土ブロック状に含む。

SB04-P1 B-B'

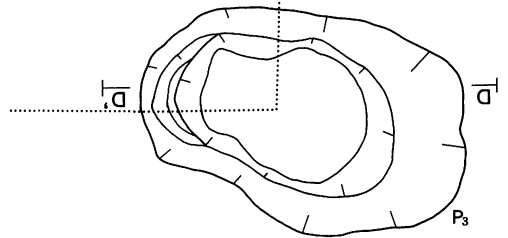
- 1. 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土・炭化物1%、5mm±の黄褐色浮石細粒2%含む。
- 2. 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土・炭化物3%、灰白色粘土1%含む。
- 3. 10YR2/1 黒色シルト 焼土・炭化物3%、灰白色粘土5%含む。
- 4. 10YR3/3 暗褐色シルト 大粒の炭化物15%、焼土含む。
- 5. 10YR3/2 黒褐色シルト 大粒の炭化物10%、焼土含む。
- 6. 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土・炭化物15%、灰白色粘土7%含む。
- 7. 10YR1.7/1 黒色シルト
- 8. 10YR3/3 黒褐色シルト 焼土、炭化物3%、灰白色粘土3%含む。
- 9. 10YR2/1 黒色シルト



SB04-P2

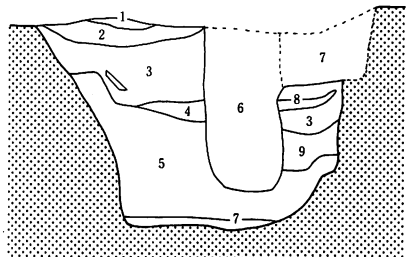
SB04-P2

- 1. 10YR2/2 黒褐色シルト 炭化物・焼土1%、極少黄褐色浮石細粒2%含む。
- 2. 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土1%・炭化物2%、黄褐色浮石細粒15%含む。
- 3. 10YR2/2 黒褐色シルト 炭化物1%、極少黄褐色浮石細粒2%含む。
- 4. 10YR2/1 黒色シルト 極少黄褐色浮石細粒15%、褐色土ブロック状に含む。
- 5. 10YR4/6 褐色シルト
- 6. 10YR2/1 黒褐色シルト 極少黄褐色浮石細粒含む。
- 7. 10YR2/2 黒褐色シルト φ10mmの炭化物10%、極少黄褐色浮石細粒15%含む。
- 8. 10YR1.7/1 黒色シルト 炭化物1%、灰黄褐色土ブロック状に含む。
- 9. 10YR2/1 黒色シルト 極少黄褐色浮石細粒5%含む。



D L = 171.100m

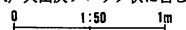
D'



SB04-P3

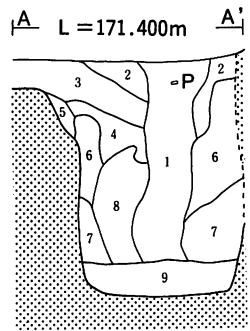
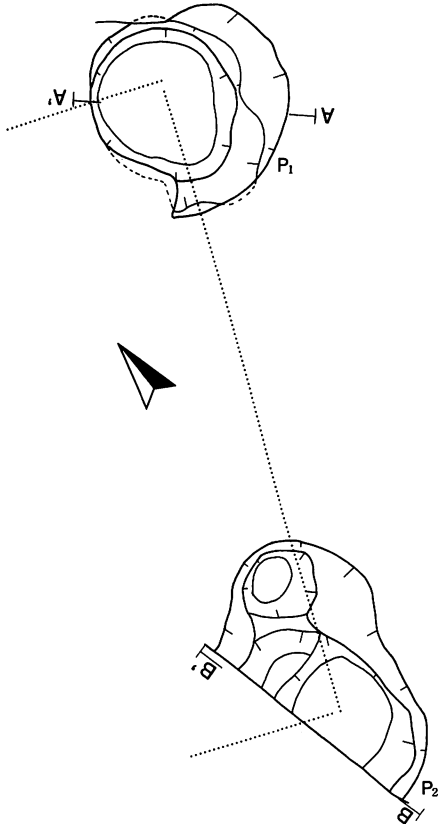
SB04-P3

- 1. 10YR6/6 明褐色浮石
- 2. 10YR2/2 黒褐色シルト 焼土・炭化物少量、黄褐色浮石細粒3%含む。
- 3. 10YR2/1 黒色シルト 焼土・炭化物少量、黄褐色浮石細粒3%含む。
- 4. 10YR2/3 黒褐色シルト 焼土少量含む。
- 5. 10YR2/1 黒色シルト 焼土・炭化物少量、黄褐色浮石細粒少量含む。
- 6. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりなし、焼土・炭化物含む（柱痕跡）。
- 7. 10YR1.7/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒多量含む。
- 8. 10YR1.7/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒2%含む。
- 9. 10YR2/1 黒色シルト 炭化物少量、八戸火山灰ブロック状に含む。

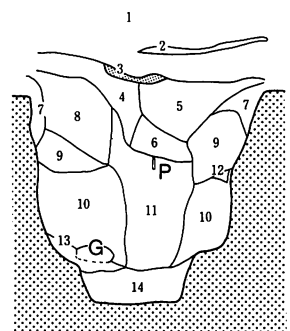


第86図 SB04掘立柱建物跡

E 70
 ⊕ S 56



SB05-P1
 B L = 171.000m B'



SB05-P2

SB05-P1

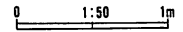
- | | | | |
|--------------|-----|-----|------------------------|
| 1. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | しまりなし、炭化物・焼土少量含む（柱痕跡）。 |
| 2. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 炭化物1%含む。 |
| 3. 10YR3/3 | 暗褐色 | シルト | 炭化物・焼土・八戸火山灰散在。 |
| 4. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 焼土・炭化物少量・黄褐色浮石細粒2%含む。 |
| 5. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 褐色浮石細粒3%含む（V層相当）。 |
| 6. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 焼土・炭化物少量・八戸火山灰散在。 |
| 7. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 炭化物・焼土含む。 |
| 8. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 炭化物・焼土・黄褐色浮石細粒散在。 |
| 9. 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | しまりあり、非常に堅い。 |

⊕ S 61
 E 70

SB05-P2

- | | | | |
|-------------|------|-----|--------------------------|
| 1. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 焼土・炭化物少量、黄褐色浮石細粒3%含む。 |
| 2. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒2%、灰色粘土5%ブロック状含む。 |
| 3. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 焼土層。 |
| 4. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 焼土40%、炭化物3%・黄褐色浮石細粒2%含む。 |
| 5. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 焼土2%・炭化物1%含む。 |
| 6. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒2%含む。 |
| 7. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒1%含む。 |
| 8. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒15%含む。 |
| 9. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒15%・炭化物1%褐色土含む。 |
| 10. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 褐色土3%ブロック状に含む。 |
| 11. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | しまりなし、黄褐色浮石細粒・炭化物1%含む。 |
| 12. 5YR2/4 | 極暗赤褐 | シルト | ブロック状の焼土。 |
| 13. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒1%含む。 |
| 14. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 八戸火山灰帯状に含む。 |

第87図 SB05掘立柱建物跡



め戻されている。

〈柱穴深度〉 P1 (144 cm)・P2 (136 cm) である。

〈柱穴間隔〉 P1-P2 (4.3 m) である。

〈主軸方位〉 N 25° E

遺物 (第 327・331 図、写真図版 292・296)

〈土器〉 縄文時代後期後葉の土器 (1944) と他に粗製深鉢の口縁部が出土している。

SB06 掘立柱建物跡

遺構 (第 88 図、写真図版 94)

〈位置〉 B調査区、HVIIグリッドに位置している。

〈検出状況〉 縄文時代晩期前葉の遺物包含層、SA54・59 住居跡の下位から検出されている。

〈柱穴配置〉 推定で4本柱構成、平面形は長方形と思われる。他の2本は調査区外に存在すると思われる。

〈埋土〉P1 では幅 40 cm の柱痕跡と底面部分に厚さ 20 cm の堅緻な層が認められた。これらの柱穴は焼土・炭化物・ローム粒・黄褐色浮石粒などが多く含まれた層で構成されている。

〈柱穴深度〉 P1 (103 cm)・P2 (109 cm) である。

〈柱穴間隔〉 P1-P2 (2.6 m)

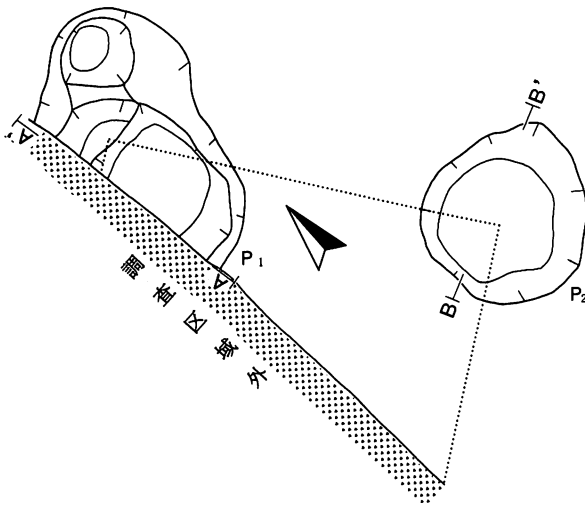
〈主軸方位〉 N 55° E

遺物 (第 327・331 図、写真図版 292・296)

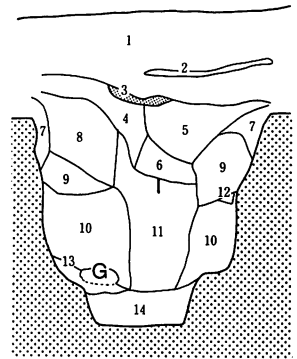
〈土器・土製品〉縄文時代後期後葉の土器(1946~1948)が出土している。2033は土製円盤である。

E 68
S 59

E 72
S 59

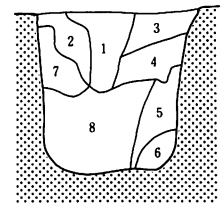


A L = 171.000m A'



SB06-P1

B L = 171.100m B'



SB06-P2

SB06-P1

- | | | | |
|-------------|------|-----|------------------------------|
| 1. 10YR3/2 | 暗褐色 | シルト | 炭化物・焼土多量、黄褐色浮石細粒含む。 |
| 2. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒 2%、灰色粘土 5% ブロック状含む。 |
| 3. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 焼土層。 |
| 4. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 焼土 40%・炭化物 3%・黄褐色浮石細粒 2% 含む。 |
| 5. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 焼土 2%・炭化物 1% 含む。 |
| 6. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 焼土 5%・炭化物 1% 含む。 |
| 7. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒 2% 含む。 |
| 8. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒 15% 含む。 |
| 9. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒 15%・炭化物 1% 褐色土含む。 |
| 10. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 褐色土 3% ブロック状に含む。 |
| 11. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | しまりなし、黄褐色浮石細粒・炭化物 1% 含む。 |
| 12. 5YR2/4 | 極暗赤褐 | シルト | ブロック状の焼土。 |
| 13. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒 1% 含む。 |
| 14. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 八戸火山灰帯状に含む。 |

SB06-P2

- | | | | |
|------------|-----|-----|---------------------------|
| 1. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 炭化物・焼土・黄褐色浮石細粒 2% 含む。 |
| 2. 10YR3/4 | 黒褐色 | シルト | 炭化物・焼土・黄褐色浮石細粒 1% 含む。 |
| 3. 10YR2/1 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒 10% 含む。 |
| 4. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒 2% 含む。 |
| 5. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒 5%・八戸火山灰ブロック状に含む。 |
| 6. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | しまりなし。 |
| 7. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒・炭化物・焼土少量含む。 |
| 8. 10YR3/3 | 暗褐色 | シルト | しまりなし、黄褐色浮石細粒 2% 含む。 |

第88図 SB06掘立柱建物跡

〈石器〉 石斧が2点出土している。

SB07 掘立柱建物跡

遺構 (第89図)

〈位置〉 B調査区、HVIIグリッドに位置している。

〈検出状況〉 縄文時代晩期前葉の遺物包含層の下位から検出されている。

〈柱穴配置〉 4本柱構成、やや歪んだ方形である。

〈埋土〉 掘り方に相当するものは見られなかったが柱穴の埋土には焼土・炭化物が比較的多く含まれている。

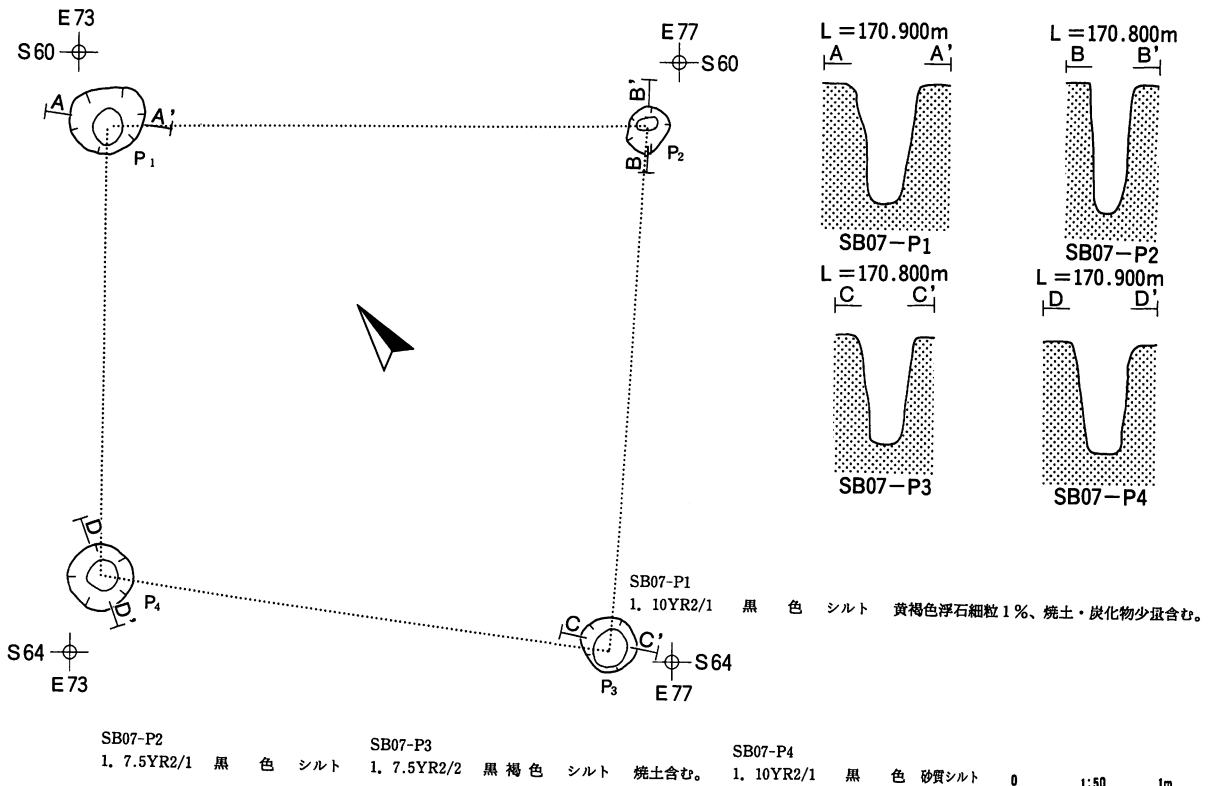
〈柱穴深度〉 P1 (82 cm)・P2 (87 cm)・P3 (73 cm)・P4 (75 cm) である。

〈柱穴間隔〉 P1-P2 (3.6 m)・P2-P3 (3.5 m)・P3-P4 (3.4 m)・P4-P1 (3.0 m) である。

〈主軸方位〉 N 54° W

遺物 (第327図、写真図版292)

〈土器〉 縄文時代後期中葉・後葉の土器 (1949・1950) が出土している。



第89図 SB07掘立柱建物跡

SB08 掘立柱建物跡

遺構（第 90 図、写真図版 94・95）

〈位置〉 B 調査区、HVII グリッドに位置している。

〈検出状況〉 縄文時代晩期の包含層の下位から検出されている。SA50 住居跡よりも新しい。

〈柱穴配置〉 4 本柱構成、平面形は正方形である。他の 1 本は調査区外に存在すると思われる。

〈埋土〉 P1 では幅 45 cm ± ・深さ 120 cm、P3 では幅 40 cm ± ・深さ 110 cm ± の柱痕跡に相当する層、P2・P3 の底面に 10～20 cm の堅緻な層が認められた。掘り方に相当する部分には焼土・炭化物・黄褐色浮石粒・ローム粒が比較的多く含まれている。

〈柱穴深度〉 P1 (149 cm) ・ P2 (123 cm) ・ P3 (124 cm) である。

〈柱穴間隔〉 P1－P2 (4.5 m) ・ P2－P3 (4.5 m) である。

〈主軸方位〉 N 47° E

遺物（第 327・331 図、写真図版 292・296）

〈土器〉 縄文時代後期中葉・後葉の土器（1952・1954～1956）が出土している。

〈石器・石製品〉 2040 は扁平な小判形に近い軽石製品である。2041 は半月状偏平打製石器である。半月形で直線部に擦面が認められる。

SB09 掘立柱建物跡

遺構（第 91 図、写真図版 95）

〈位置〉 B 調査区、HVII グリッドに位置している。

〈検出状況・重複関係〉 縄文時代晩期の遺物包含層、この時期の住居跡の下位から検出されている。

〈柱穴配置〉 4 本柱構成、平面形は長方形である。他の 1 本は調査区外に存在すると思われる。

〈埋土〉 3 個の柱穴とも柱痕跡に相当する層が認められた。掘り方相当部分には多量の炭化物・焼土・黄褐色浮石細粒が含まれている。

〈柱穴深度〉 P1 (95 cm) ・ P2 (114 cm) ・ P3 (102 cm) である。

〈柱穴間隔〉 P1－P2 (3.8 m) ・ P2－P3 (3.9 m) である。

〈主軸方位〉 N 40° E

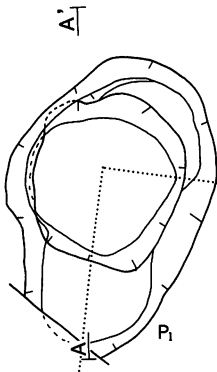
遺物（第 328 図、写真図版 293）

〈土器〉 縄文時代後期後半の土器（1958～1960）が出土している。

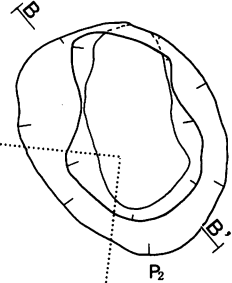
SB10 掘立柱建物跡

遺構（第 92 図、写真図版 95・96）

E 72
S62

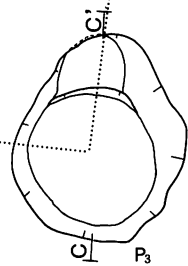


E 78
S62

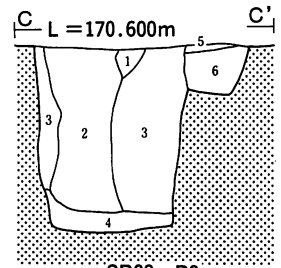
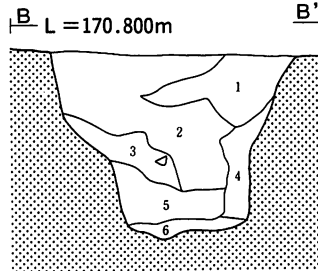
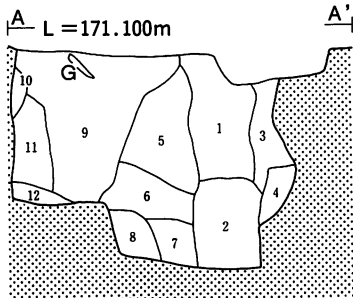


0 1:50 1m

S68
E 72



S68
E 78

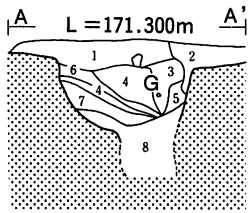
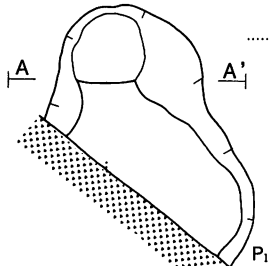


- | | | | |
|----------------|--------|---------------------|--|
| SB08-P1 | | SB08-P1 | |
| 1. 10YR2/3 | 黒褐色シルト | しまり弱い、炭化物・焼土2%含む。 | |
| 2. 10YR2/3 | 黒褐色シルト | しまりなし。 | |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | φ10mmの黄褐色浮石細粒2%含む。 | |
| 4. 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 黄褐色浮石細粒5%含む。 | |
| 5. 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 炭化物、黄褐色浮石細粒10%含む。 | |
| 6. 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 黄褐色浮石細粒2%含む。 | |
| 7. 10YR4/6 | 褐色シルト | 黄褐色浮石細粒3%含む。 | |
| 8. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 黄褐色浮石細粒1%含む。 | |
| 9. 10YR3/3 | 暗褐色シルト | 黄褐色浮石細粒・炭化物・焼土含む。 | |
| 10. 10YR2/1 | 黒色シルト | 黄褐色浮石細粒1%含む。 | |
| 11. 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 黄褐色浮石細粒3%、焼土・炭化物含む。 | |
| 12. 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 黄褐色浮石細粒2%、八戸火山灰含む。 | |

- | | | | |
|------------------------|---------|------------------------------|--|
| SB08-P2 SB08-P2 | | SB08-P2 SB08-P2 | |
| 1. 7.5YR4/3 | 褐色シルト | 炭化物・焼土含む。 | |
| 2. 7.5YR2/2 | 黒褐色シルト | しまりなし、φ10mm黄褐色浮石・焼石・炭化物少量含む。 | |
| 3. 7.5YR2/2 | 黒褐色シルト | 褐色土ブロック状、炭化物・焼土多量含む。 | |
| 4. 7.5YR4/6 | 褐色シルト | 褐色土ブロック状に含む。 | |
| 5. 7.5YR2/1 | 黒色シルト | 焼土・炭化物微量含む。 | |
| 6. 7.5YR2/1 | 黒色シルト | 焼土少量含む。 | |
| SB08-P3 | | SB08-P3 | |
| 1. 7.5YR2/2 | 黒褐色シルト | 炭化物・焼土微量、φ5mm黄褐色浮石細粒含む。 | |
| 2. 7.5YR2/3 | 極暗褐色シルト | しまりなし、焼土・炭化物含む。 | |
| 3. 7.5YR2/2 | 黒褐色シルト | 褐色土ブロック状、炭化物・焼土多量含む | |
| 4. 7.5YR3/1 | 黒褐色シルト | 焼土・炭化物多量、黄褐色浮石細粒・褐色土含む、堅い。 | |
| 5. 7.5YR2/2 | 黒褐色シルト | 焼土・炭化物多量含む。 | |
| 6. 7.5YR2/1 | 黒色シルト | φ10mm±の黄褐色浮石多量含む。 | |

第90図 SB08掘立柱建物跡

E 68
S 59

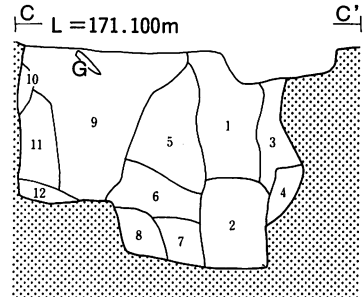
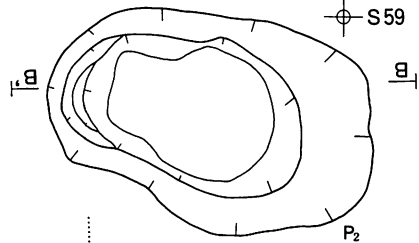


SB09-P1

SB09-P1

- | | | | |
|--------------|-----|-----|---------------------------------|
| 1. 10YR3/3 | 暗褐色 | シルト | 粘性しまりなし、焼土・炭化物多量含む。 |
| 2. 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | ブロック状の黒褐色土・粘性しまりなし、黄褐色浮石細粒1%含む。 |
| 3. 10YR3/2 | 黒褐色 | シルト | 粘性しまりなし、褐色ロームを多量含む。 |
| 4. 10YR3/2 | 黒褐色 | シルト | 3層に類似する、大量の褐色ローム含む。 |
| 5. 10YR3/2 | 黒褐色 | シルト | 3層に類似する、大量の褐色ローム含む。 |
| 6. 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 粘性しまりなし。 |
| 7. 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 粘性しまりなし。 |
| 8. 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 粘性しまりなし。 |

S 64
E 74

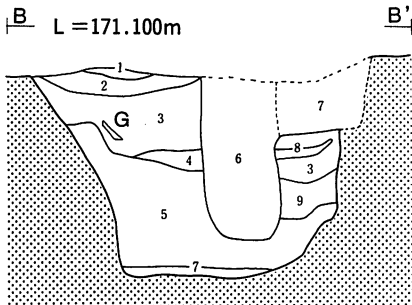


SB09-P3

SB09-P3

- | | | | |
|-------------|-----|-----|---------------------|
| 1. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | しまり弱い、炭化物・焼土2%含む。 |
| 2. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | しまりなし。 |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | φ10mmの黄褐色浮石細粒2%含む。 |
| 4. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒5%含む。 |
| 5. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 炭化物、黄褐色浮石細粒10%含む。 |
| 6. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒2%含む。 |
| 7. 10YR4/6 | 褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒3%含む。 |
| 8. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒1%含む。 |
| 9. 10YR3/3 | 暗褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒1%含む。 |
| 10. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒1%含む。 |
| 11. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒2%、焼土・炭化物含む。 |
| 12. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒2%、八戸火山灰含む。 |

0 1:50 1m

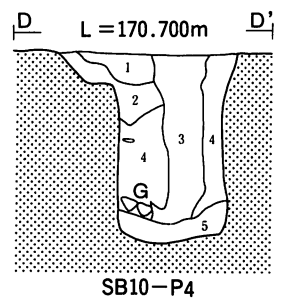
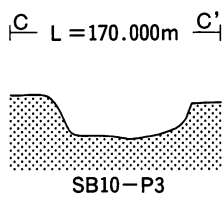
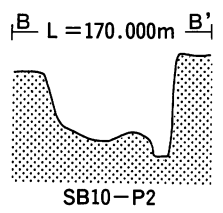
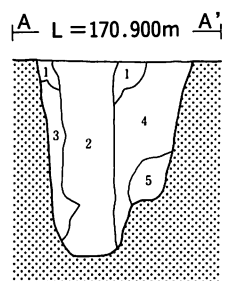
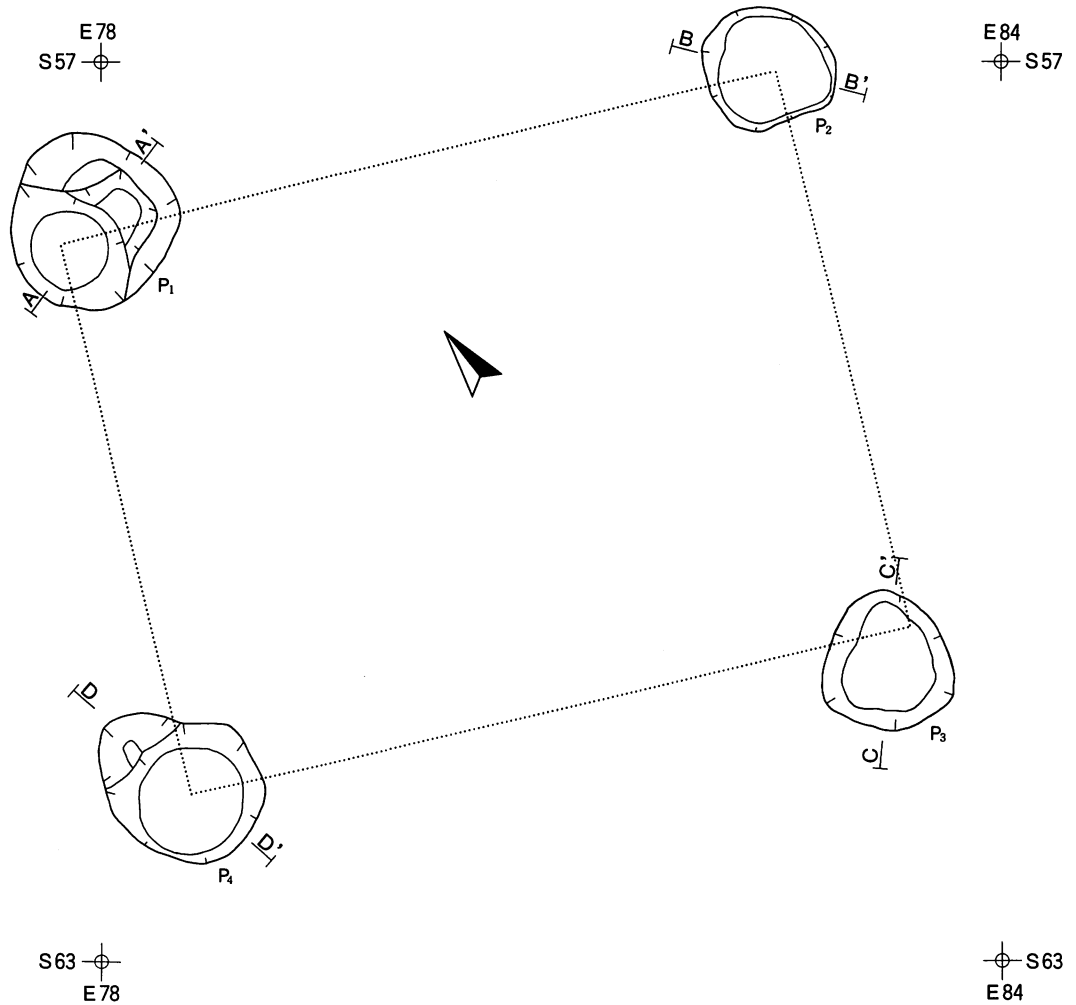


SB09-P2

SB09-P2

- | | | | |
|--------------|-----|-----|-----------------------|
| 1. 10YR6/6 | 明褐色 | 浮石 | |
| 2. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 焼土・炭化物少量、黄褐色浮石細粒3%含む。 |
| 3. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 焼土・炭化物少量、黄褐色浮石細粒3%含む。 |
| 4. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 焼土少量含む。 |
| 5. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 焼土・炭化物少量、黄褐色浮石細粒少量含む。 |
| 6. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | しまりなし、焼土・炭化物含む(柱痕跡)。 |
| 7. 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒多量含む。 |
| 8. 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒2%含む。 |
| 9. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 炭化物少量、八戸火山灰ブロック状に含む。 |

第91図 SB09掘立柱建物跡

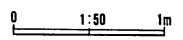


SB10-P1 SB10-P1

- | | | | |
|-------------|-----|-----|-----------------------------|
| 1. 7.5YR2/3 | 暗褐色 | シルト | 炭化物・焼土・黄褐色浮石細粒多量含む。 |
| 2. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | しまりなし、焼土・炭化物少量含む。 |
| 3. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 褐色土ブロック状に含む。 |
| 4. 7.5YR3/3 | 暗褐色 | シルト | 焼土・炭化物・黄褐色浮石細粒多量、褐色土細粒含む堅い。 |
| 5. 7.5YR2/2 | 黄橙色 | 浮石 | 汚れた黄褐色浮石細粒。 |

SB10-P4

- | | | | |
|-------------|------|-----|-----------------------------|
| 1. 7.5YR3/4 | 暗褐色 | シルト | 炭化物・焼土・黄褐色浮石細粒少量含む。 |
| 2. 7.5YR3/4 | 暗褐色 | シルト | φ10mm±の黄褐色浮石細粒多量含む。 |
| 3. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | しまりなし、焼土炭化物細粒含む。 |
| 4. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 焼土・炭化物・黄褐色浮石細粒多量、褐色土細粒含む堅い。 |
| 5. 7.5YR2/3 | 極暗褐色 | 浮石 | 非常にかたい、φ5~30mm±の黄褐色浮石細粒。 |



第92図 SB10掘立柱建物跡

〈位置〉 B調査区、I VII・HVIIグリッドに位置している。

〈検出状況・重複関係〉 縄文時代晩期の遺物包含層の下位から検出されている。P4はSA50住居跡より新しく、SA51住居跡の床面下より検出されたP2はこの住居跡より古い。

〈柱穴配置〉 4本柱構成、平面形は長方形である。

〈埋土〉 P1では幅30cm±・深さ130cm±、P4では幅25cm±・深さ110cm±の柱痕跡に相当する部分が見られる。P4の底面には厚さ20cm±の堅緻な層が認められた。

〈柱穴深度〉 P1 (134 cm)・P2 (58 cm)・P3 (35 cm)・P4 (132 cm) である。

〈柱穴間隔〉 P1-P2 (4.9 m)・P2-P3 (3.8 m)・P3-P4 (4.9 m)・P4-P1 (3.75 m) である。

〈主軸方位〉 N 63° W

遺物 (第328・331図、写真図版293・296)

〈土器〉 縄文時代後期中葉・後葉の土器(1961～1976)が出土している。1961は注口の口縁部である。口縁部装飾帯、頸部文様帯には瘤が貼付された無文帯が巡っている。2034は無文でつまみ部分が欠損した球状土製品である。

SB11 掘立柱建物跡

遺構 (第93図、写真図版96)

〈位置〉 B調査区、HVII・I VIIグリッドに位置している。

〈検出状況〉 縄文時代晩期の遺物包含層の下位から検出された。

〈柱穴配置〉 4本柱構成で、平面形は長方形である。

〈埋土〉 埋土は全体にしまりがなく軟らかい焼土・炭化物を含む層で構成されている。

〈柱穴深度〉 P1 (78 cm)・P2 (65 cm)・P3 (83 cm)・P4 (66 cm) である。

〈柱穴間隔〉 P1-P2 (5.02 m)・P2-P3 (3.05 m)・P3-P4 (5.35 m)・P4-P1 (3.05 m) である。

〈主軸方位〉 N 44° W

遺物 (第328図、写真図版293)

〈土器〉 縄文時代後期中葉頃の土器(1978)が出土している。

SB12 掘立柱建物跡

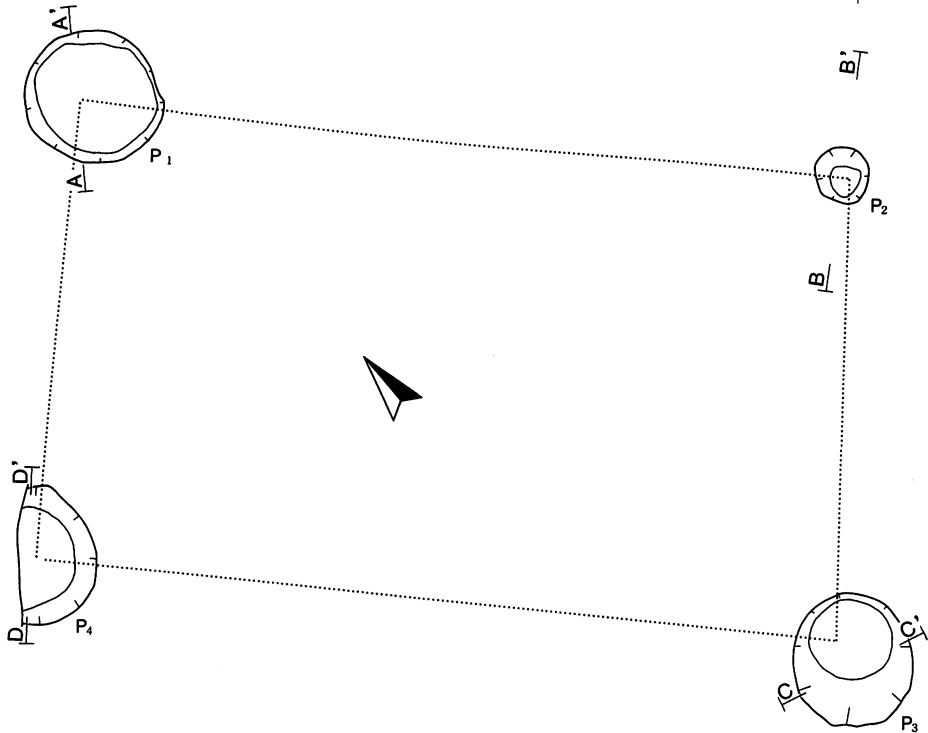
遺構 (第94図、写真図版97)

〈位置〉 B調査区、I VII・HVIIグリッドに位置している。

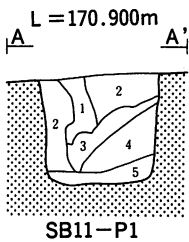
〈検出状況〉 縄文時代晩期の遺物包含層の下位から検出された。

E74
S63

E80
S63

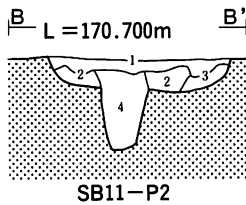


S68
E74



SB11-P1

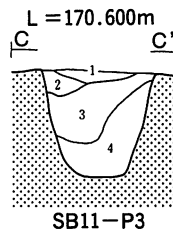
- | | | | |
|-------------|------|-----|-----------------|
| 1. 7.5YR3/3 | 暗褐色 | シルト | しまりなし、焼土多量含む。 |
| 2. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒・焼土多量含む。 |
| 3. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒・焼土少量含む。 |
| 4. 7.5YR2/3 | 極暗褐色 | シルト | 焼土、黄褐色浮石細粒少量含む。 |
| 5. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | |



SB11-P2

SB11-P3

- | | | | |
|-------------|------|-----|---------------------------|
| 1. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 炭化物・焼土微量含む。 |
| 2. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒・焼土・炭化物微量含む。 |
| 3. 7.5YR2/3 | 極黒褐色 | シルト | しまりなし、黄褐色浮石細粒、焼土微量含む。 |
| 4. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | しまりなし、焼土・炭化物微量、黄褐色浮石細粒含む。 |

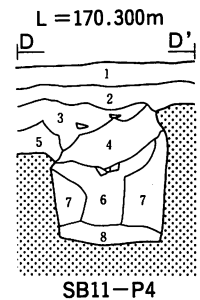


SB11-P2

- | | | | |
|---------------|-----|-----|------------------------|
| 1. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒少量含む。 |
| 2. 7.5YR1.7/1 | 黒色 | シルト | φ10mm±の黄褐色浮石細粒、焼土微量含む。 |
| 3. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | |
| 4. 7.5YR2/1 | 黒色 | シルト | しまりなし。 |

SB11-P4

- | | | | |
|--------------|-----|-----|------------------------|
| 1. 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 耕作土。 |
| 2. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒7~10%、焼土・炭化物含む。 |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒10%、炭化物・焼土5%含む。 |
| 4. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 炭化物、黄褐色浮石細粒5%含む。 |
| 5. 7.5YR2/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒15%含む。 |
| 6. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒10%含む。 |
| 7. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒含む。 |
| 8. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 焼土、黄褐色浮石細粒含む。 |

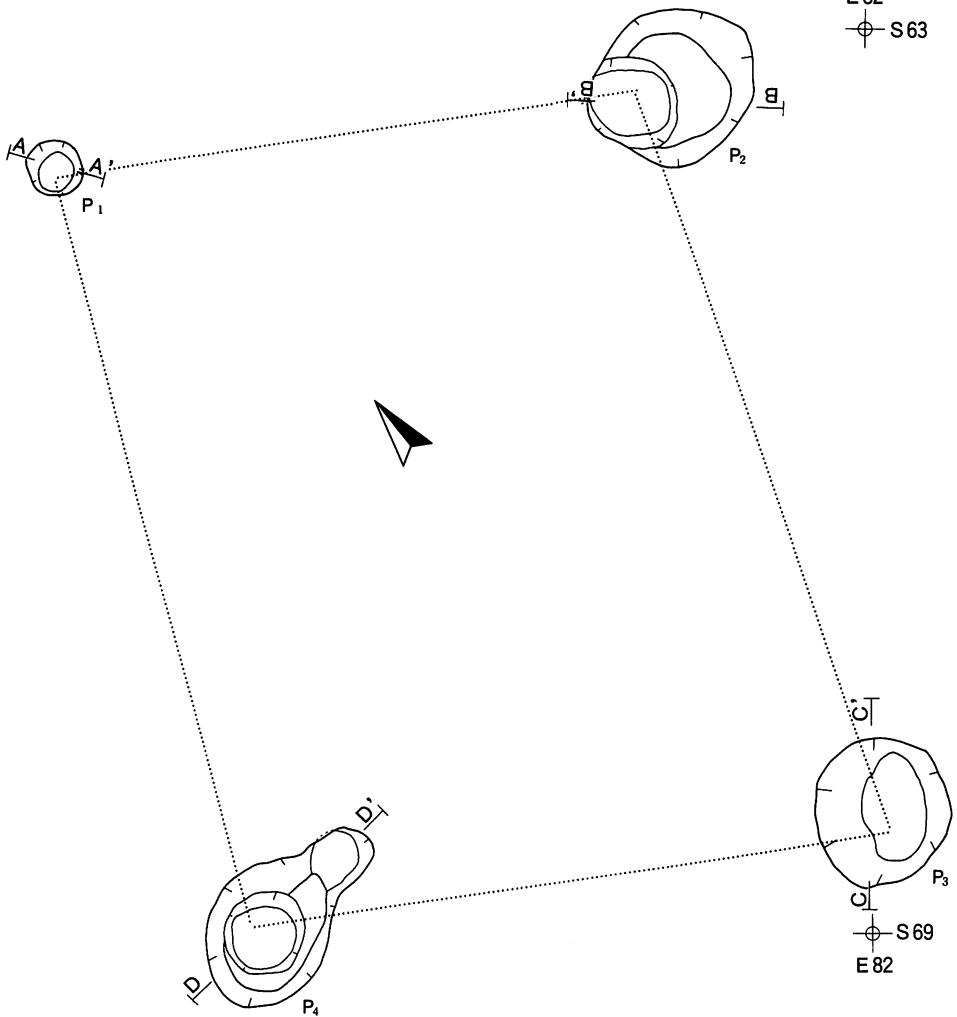


0 1:50 1m

第93図 SB11掘立柱建物跡

E 76
S 63

E 82
S 63

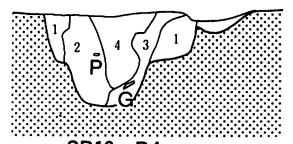
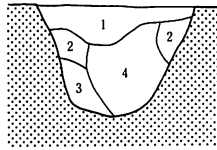
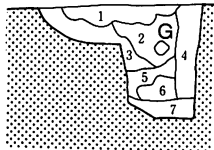
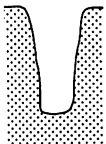


L = 170.800m
A A'

B L = 170.700m B'

C L = 170.400m C'

D L = 170.600m D'



SB12-P1

SB12-P2

SB12-P3

SB12-P4

SB12-P1

1. 7.5YR2/2 黒色シルト 焼土含む。

SB12-P4

1. 7.5YR2/2 黒色シルト ϕ 5mm±黄褐色浮石細粒含む。
2. 7.5YR2/2 黒褐色シルト ϕ 5mm±黄褐色浮石細粒少量含む。
3. 7.5YR2/2 黒褐色シルト しまりなし、 ϕ 5mm±の黄褐色浮石細粒少量含む。
4. 7.5YR2/2 黒褐色シルト しまりなし、焼土・ ϕ 5mm±の黄褐色浮石細粒少量含む。

SB12-P2

1. 7.5YR3/3 暗褐色シルト 炭化物・焼土多量含む。
2. 7.5YR2/2 黒褐色シルト しまりなし、焼土・大粒の炭化物多量含む。
3. 7.5YR2/2 黒褐色シルト しまりなし、細粒の炭化物含む。
4. 7.5YR3/1 黒褐色シルト 焼土・炭化物含む。
5. 7.5YR2/2 黒褐色シルト 炭化物・焼土含む。
6. 7.5YR4/6 黒褐色シルト しまりなし、焼土含む。
7. 7.5YR2/2 黒褐色シルト 堅緻、 ϕ 10mm±の黄褐色浮石細粒含む。

SB12-P3

1. 7.5YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒、焼土含む。
2. 7.5YR2/1 黒色シルト しまりなし、黄褐色浮石細粒多量含む。
3. 7.5YR3/1 黒褐色シルト しまりなし、黄褐色浮石細粒多量含む。
4. 7.5YR2/1 黒色シルト しまりなし、黄褐色浮石細粒多量含む。

0 1:50 1m

第94図 SB12掘立柱建物跡

〈柱穴配置〉 4本柱構成、やや歪んだ長方形である。

〈埋土〉 埋土は全体にしまりがなく軟らかい焼土・炭化物を含む層で構成されている。

〈柱穴深度〉 P1 (73 cm)・P2 (75 cm)・P3 (89 cm)・P4 (60 cm) である。

〈柱穴間隔〉 P1-P2 (3.9 m)・P2-P3 (5.2 m)・P3-P4 (4.3 m)・P4-P1 (5.1 m) である。

〈主軸方位〉 N 22° E

遺物 (第 328・329・331 図、写真図版 293・294・296)

〈土器〉 縄文時代前期前半 (1984~1987) と後期後葉 (1980~1983) の土器が出土している。

〈石器〉 両面加工の不定形石器が 1 点出土している。

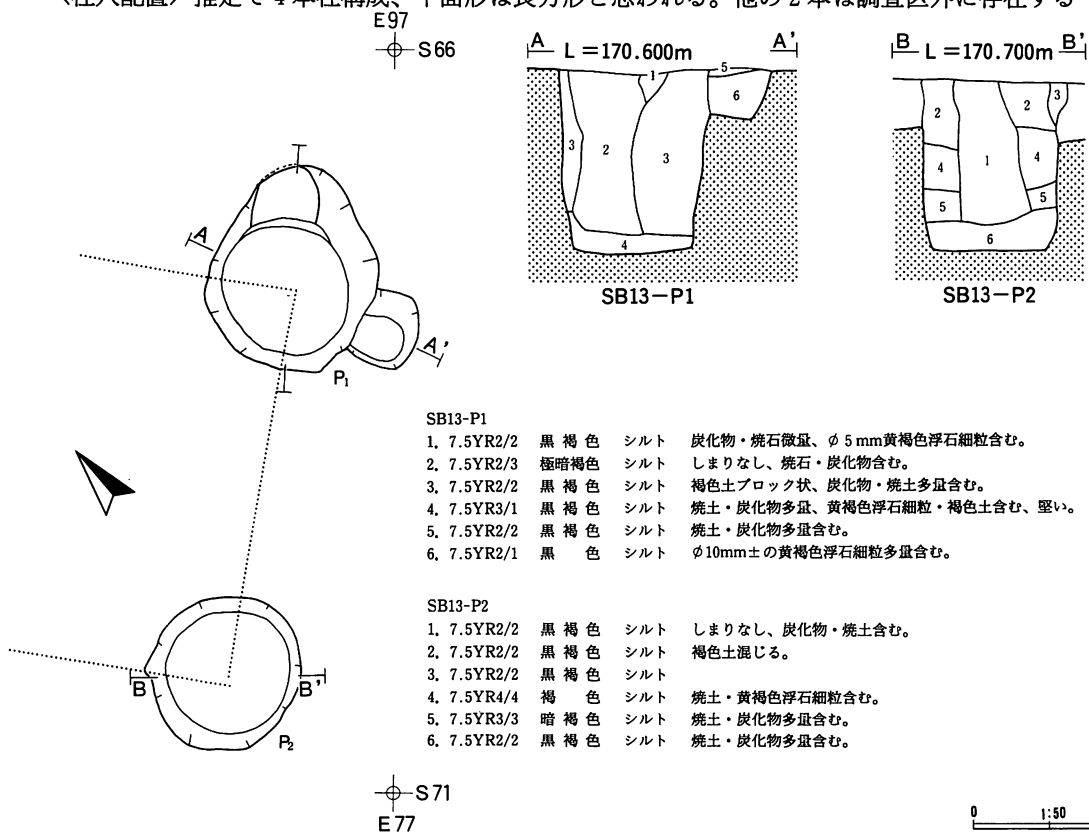
SB13 掘立柱建物跡

遺構 (第 95 図、写真図版 97)

〈位置〉 B 調査区、HVII グリッドに位置している。

〈検出状況〉 縄文時代晩期の遺物包含層の下位から検出された。

〈柱穴配置〉 推定で 4 本柱構成、平面形は長方形と思われる。他の 2 本は調査区外に存在する



第95図 SB13掘立柱建物跡

と思われる。

〈埋土〉 P1 では幅 40 cm±・深さ 100 cm±、P2 では幅 40 cm±・深さ 100 cm±の柱痕跡が認められる。底面には堅緻な層が認められた。掘り方に相当する部分の埋土には多量の焼土・炭化物が含まれている。

〈柱穴深度〉 P1 (124 cm)・P2 (115 cm) である。

〈柱穴間隔〉 P1-P2 (2.65 m) である。

〈主軸方位〉 N 40° W

遺物 (第 329 図、写真図版 294)

〈土器〉 縄文時代後期後葉 (1989・1990) の土器が出土している。

SB14 掘立柱建物跡

遺構 (第 96 図、写真図版 98)

〈位置〉 B 調査区、HⅧグリッドに位置している。

〈検出状況〉 縄文時代後期後半の土器が比較的密に分布するレベルとほぼ同レベルでこれらの構成柱穴は検出されている。

〈柱穴配置〉 推定で 4 本柱構成、平面形は長方形と思われる。他の 1 本は調査区外に存在すると思われる。

〈埋土〉 焼土・炭化物を含みしまりがなく軟らかいシルト質土で構成されている。

〈柱穴深度〉 P1 (88 cm)・P2 (85 cm)・P3 (68 cm) である。

〈柱穴間隔〉 P1-P2 (3.1 m)・P2-P3 (3.7 m) である。

〈主軸方位〉 N 52° W

遺物 (第 329 図、写真図版 294)

〈土器〉 縄文時代後期中葉 (1991~1993) の土器が出土している。

SB15 掘立柱建物跡

遺構 (第 97 図、写真図版 98・99)

〈位置〉 B 調査区、IⅧ・HⅧグリッドに位置している。

〈重複関係〉 構成柱穴の P3 が SA41 住居跡の床面より検出されている。

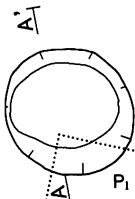
〈柱穴配置〉 4 本柱構成、平面形は正方形である。

〈埋土〉 焼土・炭化物を含みしまりがなく軟らかいシルト質土で構成されている。

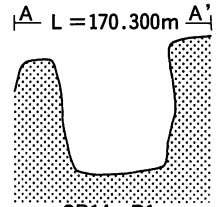
〈柱穴深度〉 P1 (73 cm)・P2 (57 cm)・P3 (78 cm)・P4 (77 cm) である。

〈柱穴間隔〉 P1-P2(4.0 m)・P2-P3(3.95 m)・P3-P4(4.0 m)・P4-P1(3.95 m)である。

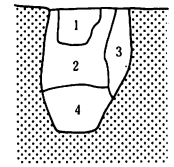
E 74
S 69



E 79
S 69



SB14-P1
L = 170.000m

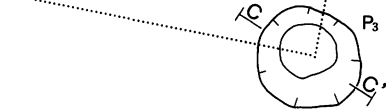


SB14-P2

SB14-P2

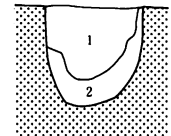
- | | | | | |
|----|----------|-----|-----|----------------------|
| 1. | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | シルト | しまりなし、焼土微量含む。 |
| 2. | 7.5YR3/2 | 黒褐色 | シルト | φ 5 mm 土の黄褐色浮石細粒含む。 |
| 3. | 7.5YR3/2 | 黒褐色 | シルト | 明褐色土が混じる。 |
| 4. | 7.5YR3/2 | 黒褐色 | シルト | φ 5 mm の黄褐色浮石細粒微量含む。 |

S 74
E 74



S 74
E 79

L = 170.100m



SB14-P3

SB14-P3

- | | | | | |
|----|---------|-----|-----|------------|
| 1. | 10YR2/1 | 赤黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒散在。 |
| 2. | 10YR2/1 | 赤黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒含む。 |

0 1:50 1m

第96図 SB14掘立柱建物跡

〈主軸方位〉 N 40° W

遺物 出土していない。

SB16 掘立柱建物跡

遺構 (第 98 図、写真図版 99)

〈位置〉 B 調査区、J VIII グリッドに位置している。

〈重複関係〉 構成柱穴が SA38・45・49 住居跡と重複しているがその新旧関係は明確にできなかった。

〈柱穴配置〉 4 本柱構成、平面形は長方形である。

〈埋土〉 焼土・炭化物を含みしまりがなく軟らかいシルト質土で構成されている。

〈柱穴深度〉 P1 (104 cm) ・ P2 (91 cm) ・ P3 (82 cm) ・ P4 (51 cm) である。

〈柱穴間隔〉 P1-P2 (3.95 m)・P2-P3 (3.7 m)・P3-P4 (3.9 m)・P4-P1 (3.75 m) である。

〈主軸方位〉 N 69° W

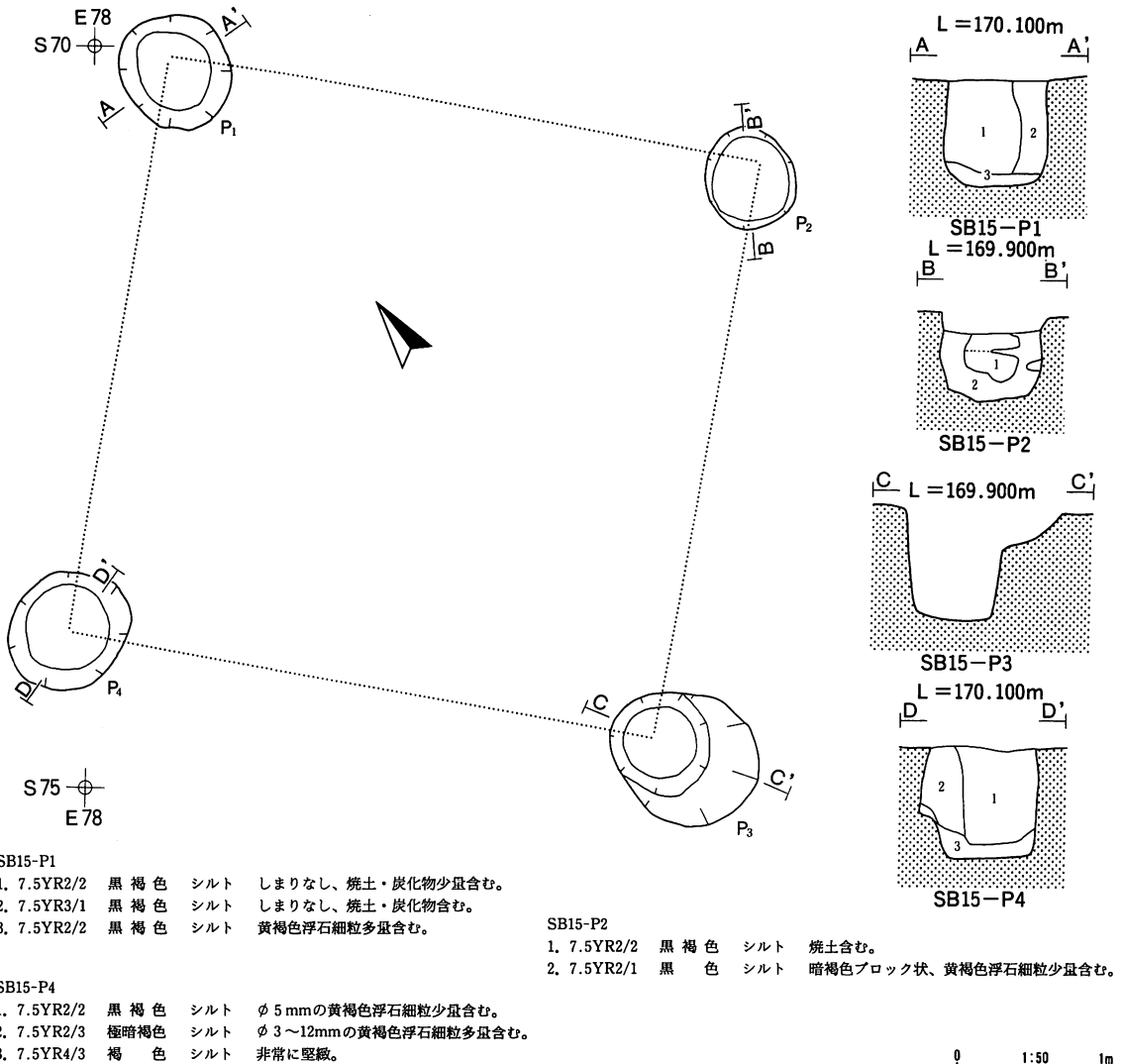
遺物 (第 329 図、写真図版 294)

〈土器〉 縄文時代後期後葉 (1994~1996) の土器が出土している。

SB17 掘立柱建物跡

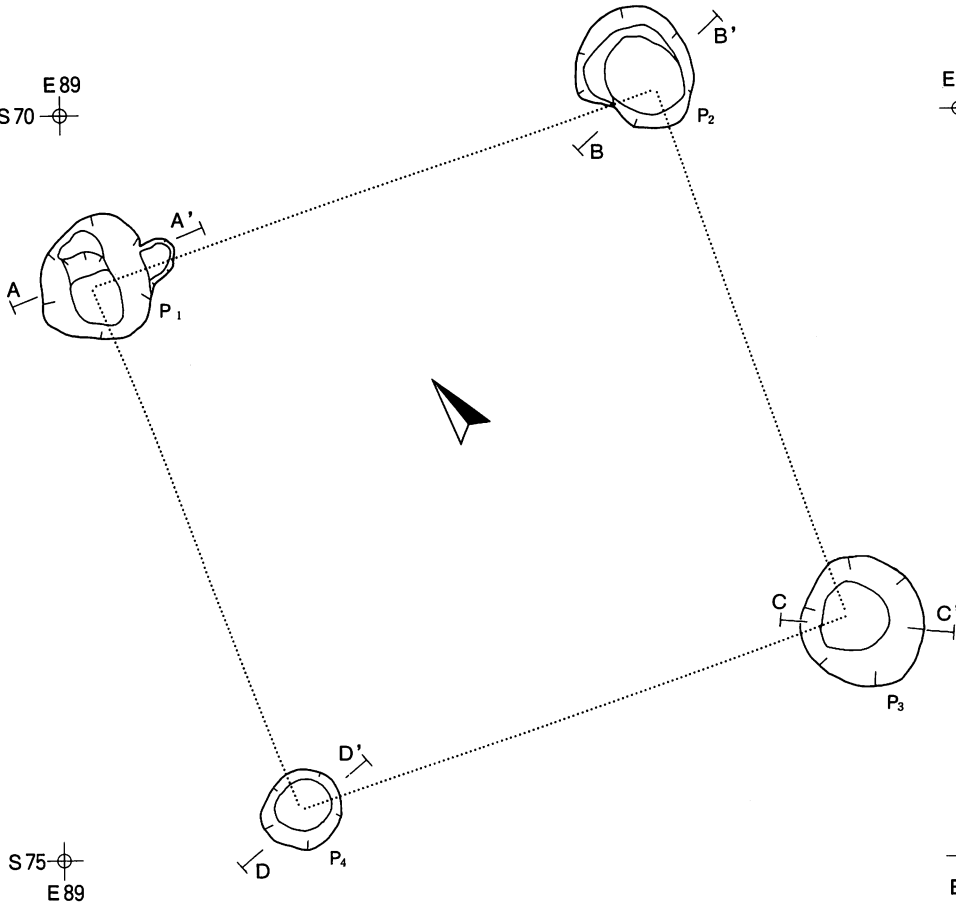
遺構 (第 99 図、写真図版 100)

〈位置〉 B 調査区、HVII グリッドの北側に位置している。



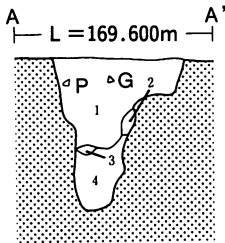
E 89
S 70

E 95
S 70



S 75
E 89

S 75
E 95



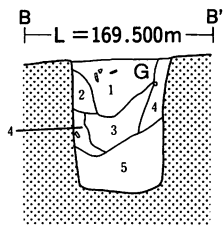
SB16-P1

SB16-P1

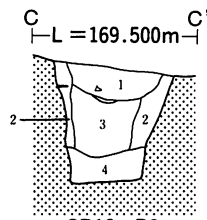
- | | | | |
|-------------|-------|-----|------------|
| 1. 2.5YR2/1 | 赤黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒含む。 |
| 2. 10YR4/6 | 褐色 | シルト | |
| 3. 10YR2/3 | 黒暗赤褐色 | シルト | |
| 4. 10YR2/1 | 赤黒色 | シルト | 明黄褐色粘土含む。 |

SB16-P3

- | | | | |
|-------------|-----|-----|-------------------|
| 1. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 焼土・炭化物多量含む。 |
| 2. 7.5YR2/1 | 黒色 | シルト | φ10mm±の黄褐色浮石細粒含む。 |
| 3. 7.5YR3/3 | 暗褐色 | シルト | 焼土多量含む。 |
| 4. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒微量含む。 |



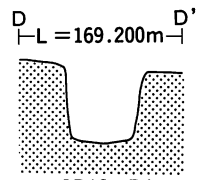
SB16-P2



SB16-P3

SB16-P2

- | | | | |
|---------------|-----|-----|---------------|
| 1. 2.5YR2/1 | 赤黒色 | シルト | 焼土・炭化物含む。 |
| 2. 2.5YR2/1 | 赤黒色 | シルト | |
| 3. 2.5YR2/1 | 赤黒色 | シルト | 明黄褐色土が混じる。 |
| 4. 2.5YR2/1 | 赤黒色 | シルト | 焼土含む。 |
| 5. 2.5YR1.7/1 | 赤黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒・焼土含む。 |



SB16-P4

0 1:50 1m

第98図 SB16掘立柱建物跡

〈検出状況〉 縄文時代晩期前半期の包含層の下位から検出された。

〈柱穴配置〉 4本柱構成、平面形はやや歪んだ正方形である。

〈埋土〉 焼土・炭化物を含みしまりがなく軟らかいシルト質土で構成されている。

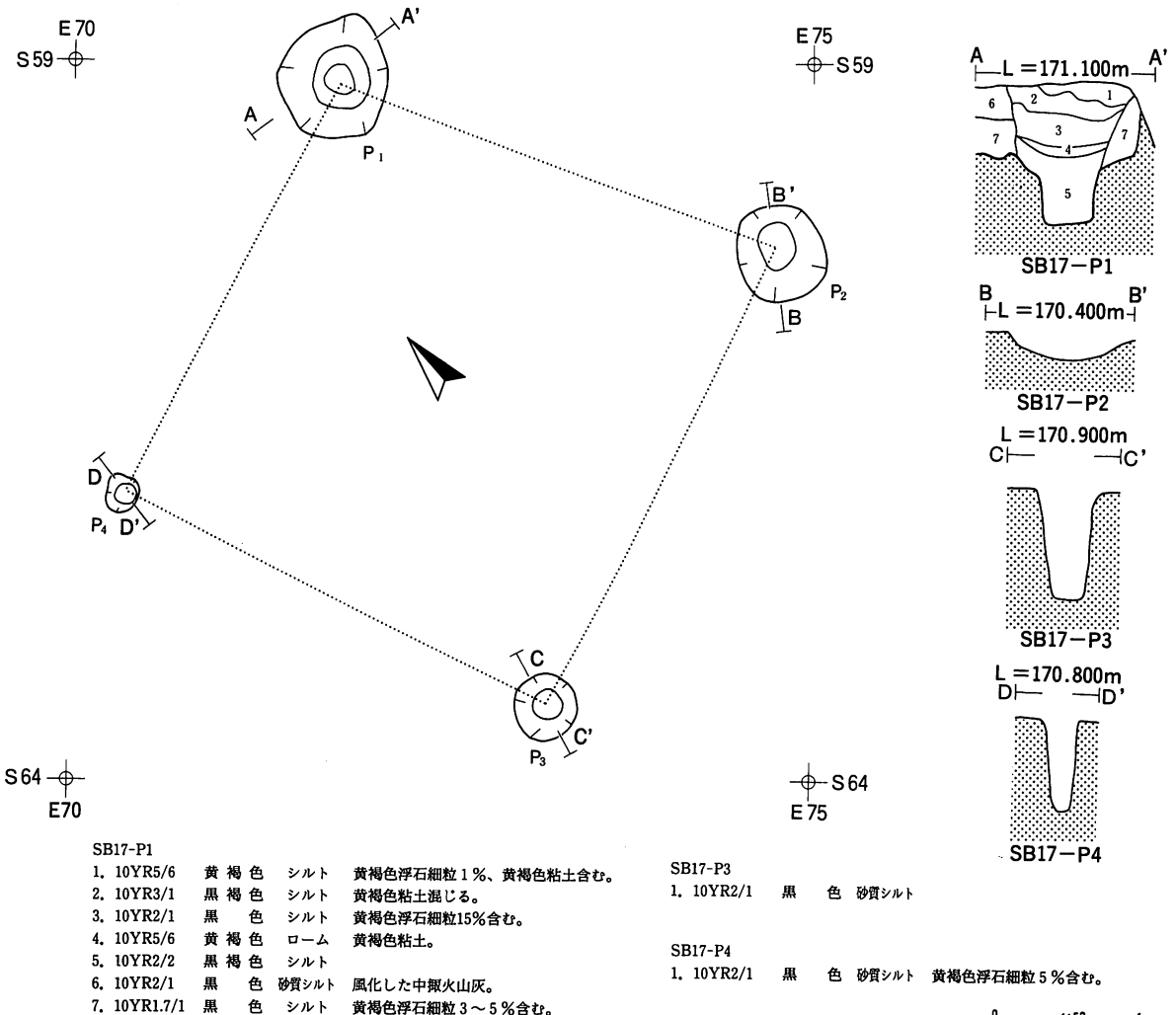
〈柱穴深度〉 P1 (85 cm)・P2 (67 cm)・P3 (73 cm)・P4 (59 cm) である。

〈柱穴間隔〉 P1-P2 (3.2 m)・P2-P3 (3.5 m)・P3-P4 (3.2 m)・P4-P1 (3.1 m) である。

〈主軸方位〉 N 67° E

遺物 (第 329 図、写真図版 294)

〈土器〉 2001 は無文の壺である。縄文時代後期後半の粗製深鉢 (1997~2000) が出土している。



SB17-P1

- | | | | |
|--------------|-----|-------|--------------------|
| 1. 10YR5/6 | 黄褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒1%、黄褐色粘土含む。 |
| 2. 10YR3/1 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色粘土混じる。 |
| 3. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒15%含む。 |
| 4. 10YR5/6 | 黄褐色 | ローム | 黄褐色粘土。 |
| 5. 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | |
| 6. 10YR2/1 | 黒色 | 砂質シルト | 風化した中礫火山灰。 |
| 7. 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒3~5%含む。 |

SB17-P3

- | | | |
|------------|----|-------|
| 1. 10YR2/1 | 黒色 | 砂質シルト |
|------------|----|-------|

SB17-P4

- | | | | |
|------------|----|-------|--------------|
| 1. 10YR2/1 | 黒色 | 砂質シルト | 黄褐色浮石細粒5%含む。 |
|------------|----|-------|--------------|

第99図 SB17掘立柱建物跡

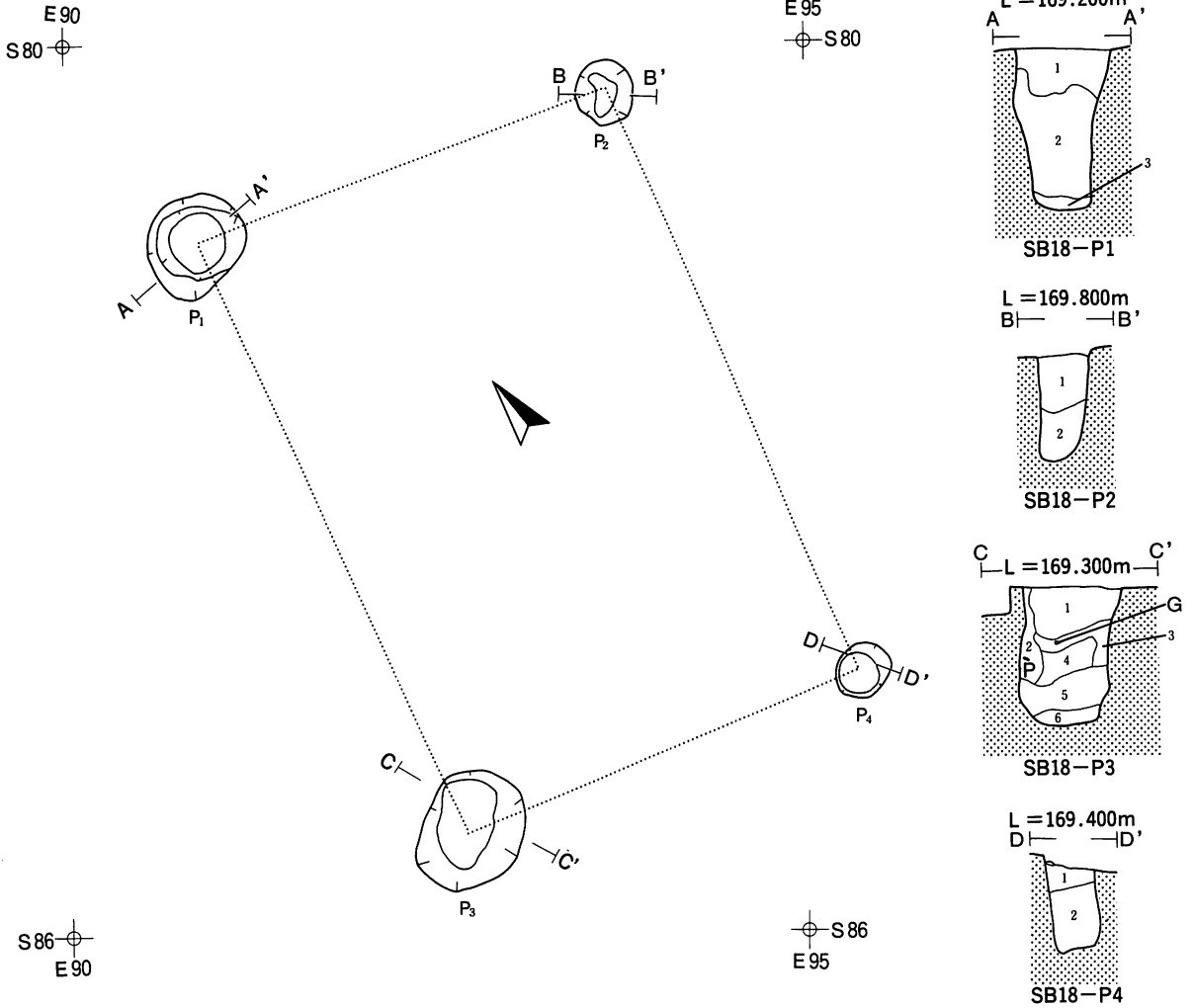
SB18 掘立柱建物跡

遺構 (第 100 図、写真図版 100・101)

〈位置〉 B 調査区、J VIII グリッドの北側に位置している。

〈重複関係〉 構成柱穴が SA77・74 住居跡と重複しこれらより新しい。

〈柱穴配置〉 4 本柱構成、平面形は長方形である。



SB18-P1

- 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒 7% 含む。
- 2. 10YR2/2 黒褐色 シルト 褐色粘土混じる。
- 3. 10YR1.7/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒 10% 含む。

SB18-P3

- 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘土多量含む。
- 2. 10YR2/1 黒色 シルト
- 3. 10YR2/1 黒色 シルト
- 3. 10YR2/1 黒色 シルト 焼土多量含む。
- 5. 10YR2/1 黒色 シルト 焼土多量含む。
- 6. 10YR1.7/1 黒色 シルト 明黄褐色粘土 10% 含む。

SB18-P2

- 1. 10YR2/2 黒褐色 シルト 明黄褐色粘土 10% 含む。
- 2. 10YR2/1 黒色 シルト 砂っぽい。

SB18-P4

- 1. 10YR1.7/1 黒色 砂質シルト
- 2. 10YR2/1 黒色 シルト 黄褐色浮石細粒 40% 含む。

0 1:50 1m

第100図 SB18掘立柱建物跡

〈埋土〉 焼土・炭化物を含みしまりがなく軟らかいシルト質土で構成されている。

〈柱穴深度〉 P1 (111 cm)・P2 (77 cm)・P3 (62 cm)・P4 (96 cm) である。

〈柱穴間隔〉 P1-P2 (2.95 m)・P2-P3 (4.25 m)・P3-P4 (2.85 m)・P4-P1 (4.35 m) である。

〈主軸方位〉 N 17° W

遺物 (第 329・330 図、写真図版 294・295)

〈土器〉 縄文時代前期前半 (2005)、前期後半 (2008・2009)、後期後葉 (2006・2007・2010) が出土している。

SB19 掘立柱建物跡

遺構 (第 101 図、写真図版 101)

〈位置〉 B 調査区、I IX・J IXグリッドに位置している。

〈重複関係〉 構成柱穴が SA67・74 住居跡と重複し、SA67 より古く SA74 住居跡より新しい。

〈柱穴配置〉 4 本柱構成、やや歪んだ正方形である。

〈埋土〉 焼土・炭化物を含みしまりがなく軟らかいシルト質土で構成されている。

〈柱穴深度〉 P1 (90 cm)・P2 (111 cm)・P3 (96 cm)・P4 (84 cm) である。

〈柱穴間隔〉 P1-P2 (4.7 m)・P2-P3 (4.45 m)・P3-P4 (4.8 m)・P4-P1 (5.25 m) である。

〈主軸方位〉 N 16° W

遺物 (第 330 図、写真図版 295)

〈土器〉 2011 は沈線で入り組み状の文様が施文された注口である。口縁部には 2 個 1 対で 4 単位の山形突起が付され、突起の下には瘤が付される。頸部文様帯は平行沈線が施文され頸部には瘤が貼付される。胴部最大径を中央部にもち注口部と瘤が付されている。

SB20 掘立柱建物跡

遺構 (第 102 図、写真図版 101・102)

〈位置〉 B 調査区、I IXグリッドに位置している。

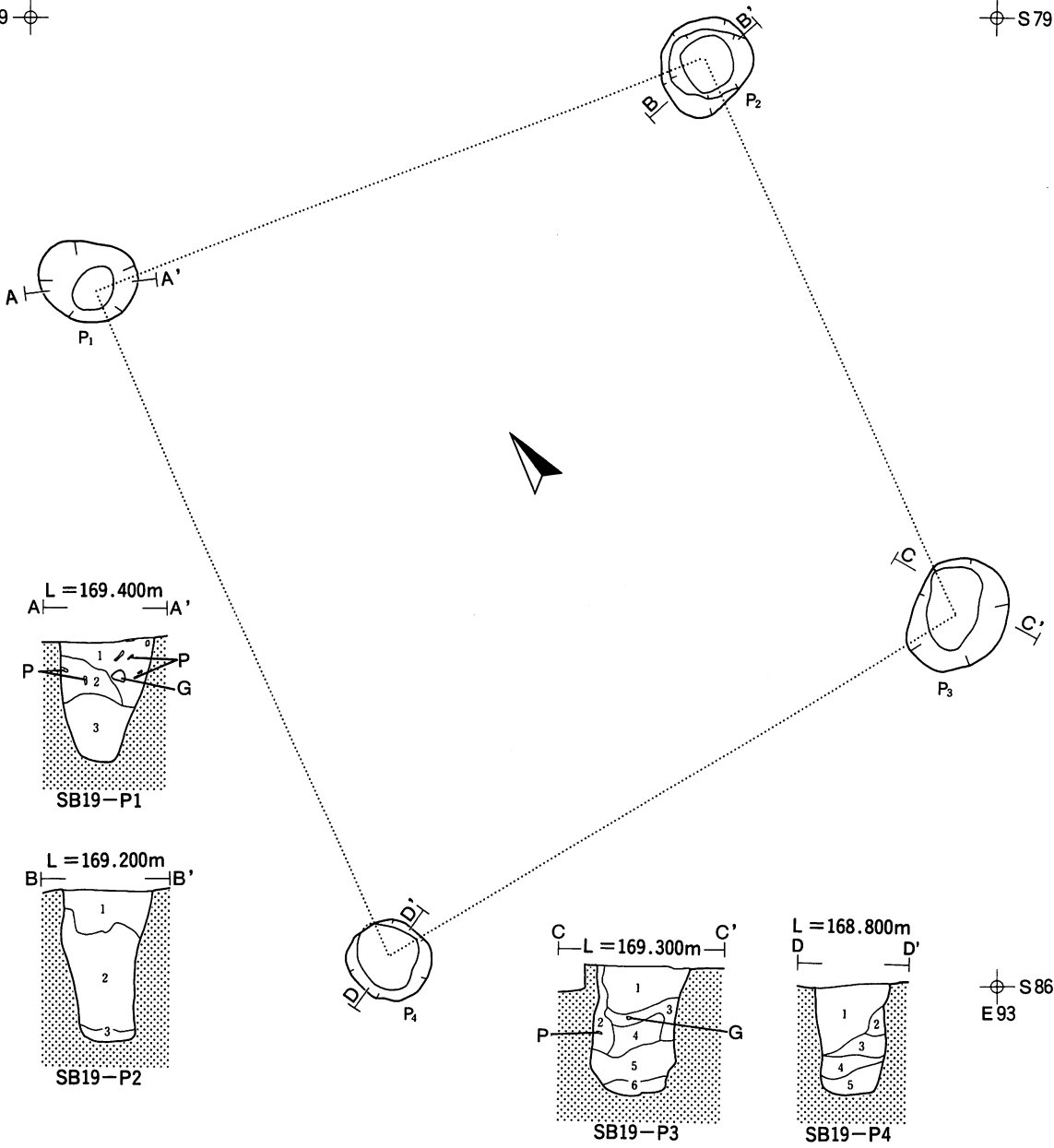
〈重複関係〉 構成柱穴が SA70・66 住居跡と重複しておりこれらより新しい。

〈柱穴配置〉 4 本柱構成、やや歪んだ長方形である。

〈埋土〉 焼土・炭化物を含みしまりがなく軟らかいシルト質土で構成されている。

〈柱穴深度〉 P1 (95 cm)・P2 (106 cm)・P3 (84 cm)・P4 (72 cm) である。

〈柱穴間隔〉 P1-P2 (5.3 m)・P2-P3 (3.9 m)・P3-P4 (5.5 m)・P4-P1 (3.5 m) である。



SB19-P1

- | | | | | |
|----|---------|-----|-----|--------------|
| 1. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒7%含む。 |
| 2. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 焼土・炭化物少量含む。 |
| 3. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 炭化物少量含む。 |

SB19-P3

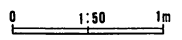
- | | | | | |
|----|-----------|-----|-----|--------------|
| 1. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 粘土多量含む。 |
| 2. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | |
| 3. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | |
| 4. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 焼土多量含む。 |
| 5. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 焼土多量含む。 |
| 6. | 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 明黄褐色粘土10%含む。 |

SB19-P2

- | | | | | |
|----|-----------|-----|-----|---------------|
| 1. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒7%含む。 |
| 2. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 褐色粘土混じる。 |
| 3. | 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒10%含む。 |

SB19-P4

- | | | | | |
|----|-----------|-----|-----|------------------------|
| 1. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 焼土15%・炭化物・黄褐色浮石細粒3%含む。 |
| 2. | 10YR3/4 | 暗褐色 | シルト | 八戸火山灰の再堆積。 |
| 3. | 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 砂っぽい。 |
| 4. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 暗褐色土ブロック状に混じる。 |
| 5. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | φ5mmの黄褐色浮石細粒30%含む。 |

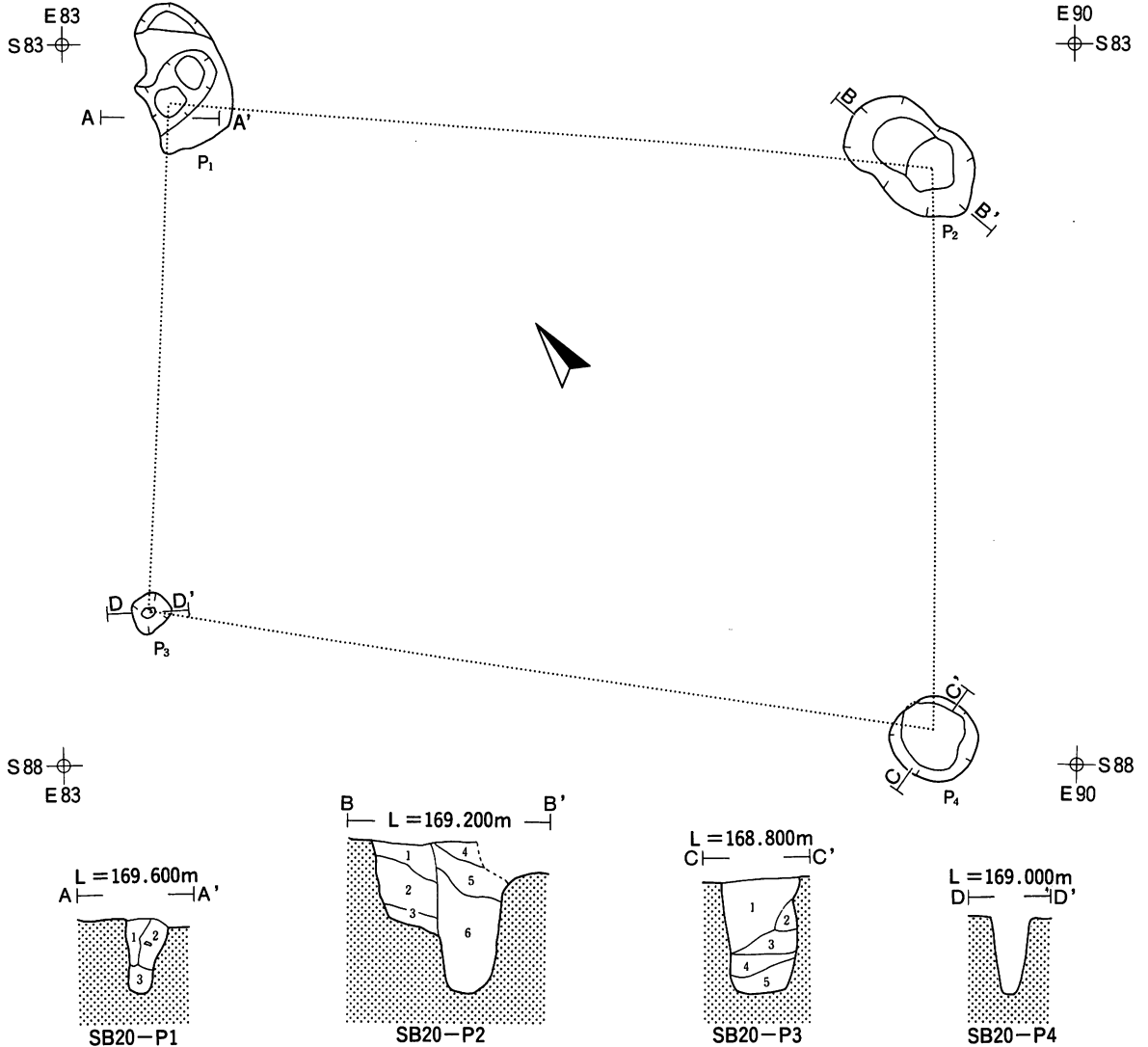


第101図 SB19掘立柱建物跡

〈主軸方位〉 N 45° W

遺物 (第 330・331 図、写真図版 295・296)

〈土器・土製品〉 縄文時代前期前半 (2016~2019)、後期中葉 (2014・2015) の土器が出土して



SB20-P1

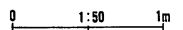
- | | | | | |
|----|---------|-----|-----|---------------|
| 1. | 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒25%含む。 |
| 2. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒15%含む。 |
| 3. | 10YR2/1 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒5%含む。 |

SB20-P3

- | | | | | |
|----|-----------|-----|-----|------------------------|
| 1. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 焼土15%・炭化物・黄褐色浮石細粒3%含む。 |
| 2. | 10YR3/4 | 暗褐色 | シルト | 八戸火山灰の再堆積。 |
| 3. | 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 砂っぽい。 |
| 4. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 暗褐色土ブロック状に混じる。 |
| 5. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | φ5mmの黄褐色浮石細粒30%含む。 |

SB20-P2

- | | | | | |
|----|---------|-----|-----|---------------------|
| 1. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 全面に焼土含む。 |
| 2. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒2%含む。 |
| 3. | 10YR3/1 | 黒褐色 | シルト | 褐色土ブロック状に混じる。 |
| 4. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 焼土・炭化物少量含む。 |
| 5. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | しまりなし、φ5mmの黄褐色浮石散在。 |
| 6. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | しまりなし、褐色土ブロック状に混じる。 |



第102図 SB20掘立柱建物跡

いる。2035 は棒状土製品である。

SB21 掘立柱建物跡

遺構（第 103 図、写真図版 102）

〈位置〉 B 調査区、I IX・HIX グリッドに位置している。

〈重複関係〉 構成柱穴の重複から SA65 住居跡より新しく、SA60 住居跡より古い。

〈柱穴配置〉 4 本柱構成、やや歪んだ方形である。

〈埋土〉 焼土・炭化物を含みしまりがなく軟らかいシルト質土で構成されている。

〈柱穴深度〉 P1（42 cm）・P2（131 cm）・P3（95 cm）・P4（82 cm）である。

〈柱穴間隔〉 P1-P2（5.2 m）・P2-P3（4.45 m）・P3-P4（4.6 m）・P4-P1（4.5 m）である。

〈主軸方位〉 N 4° E

遺物（第 330 図、写真図版 295）

〈土器〉 縄文時代前期前半（2022・2021・2023）、晩期初頭（2024・2025）の土器が出土している。2020 は口唇部に刺突文、胴部に撚糸文が施文された深鉢である。2021 は胴部に縦位撚糸文、底部付近に絡条体の条痕が施文された深鉢である。2022 は無文の壺である。頸部に突起が貼付され赤色塗彩の痕跡が認められる。

SB22 掘立柱建物跡

遺構（第 104 図、写真図版 102・103）

〈位置〉 B 調査区、HIX グリッドに位置している。

〈重複関係〉 構成柱穴が SA60 住居跡と重複しているが新旧関係は明確に把握できなかった。

〈柱穴配置〉 4 本柱構成、平面形は長方形と思われる。他の 1 本の柱穴は調査区外に存在すると思われる。

〈埋土〉 焼土・炭化物を含みしまりがなく軟らかいシルト質土で構成されている。

〈柱穴深度〉 P1（112 cm）・P2（98 cm）・P3（78 cm）である。

〈柱穴間隔〉 P1-P2（3.15 m）・P2-P3（5.05 m）である。

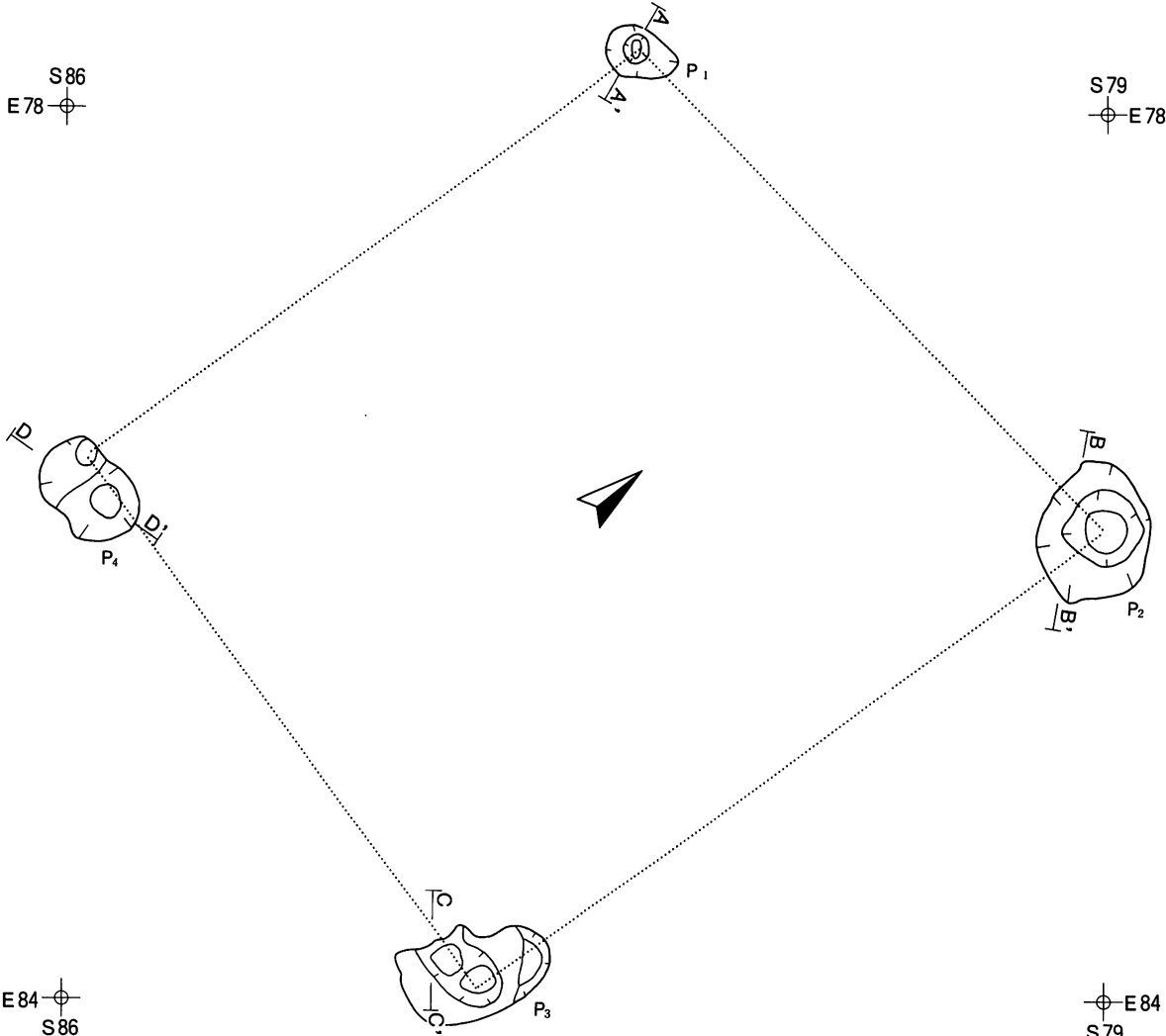
〈主軸方位〉 N 77° E

遺物（第 330 図、写真図版 295）

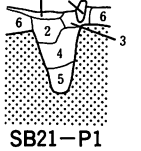
〈土器〉 縄文時代後期後葉（2026～2030）の土器が出土している。

S86
E 78

S79
E 78

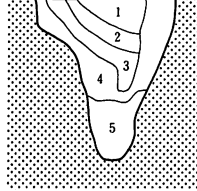


E 84
S86
L = 169.600m
A—G—A'



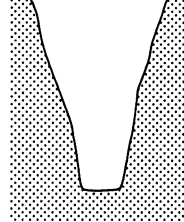
SB21-P1

B—L = 170.300m—B'



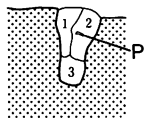
SB21-P2

B—L = 170.300m—B'



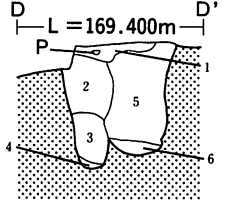
SB21-P2

L = 169.600m
C—C'



SB21-P3

E 84
S79
D—L = 169.400m—D'



SB21-P4

SB21-P2

- | | | | |
|-------------|-----|-----|-------------------|
| 1. 7.5YR3/1 | 黒褐色 | シルト | 明褐色土ブロック状、焼土微量含む。 |
| 2. 7.5YR3/3 | 暗褐色 | シルト | 焼土微量含む。 |
| 3. 7.5YR5/6 | 明褐色 | シルト | |
| 4. 7.5YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 焼土多量含む。 |
| 5. 7.5YR5/6 | 明褐色 | 粘土 | しまりなし。 |

SB21-P3

- | | | | |
|------------|-----|-----|---------------|
| 1. 10YR2/3 | 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒25%含む。 |
| 2. 10YR2/2 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒15%含む。 |
| 3. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒5%含む。 |

SB21-P4

- | | | | |
|--------------|----|-----|--------------------|
| 1. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | しまりなし、黄褐色浮石細粒2%含む。 |
| 2. 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒2%含む。 |
| 3. 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | しまりなし。 |
| 4. 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 堅緻、黄褐色浮石細粒3%含む。 |
| 5. 10YR2/1 | 黒色 | シルト | しまりなし。 |
| 6. 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 堅緻。 |

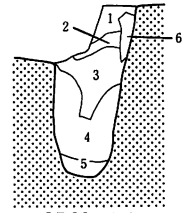
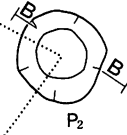
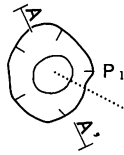
0 1:50 1m

第103図 SB21掘立柱建物跡

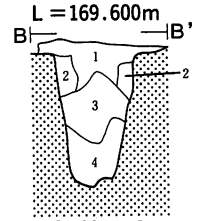
E75
S80

E80
S80

A-L = 170.000m-A'

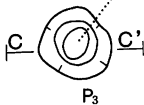


SB22-P1

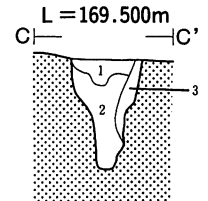


SB22-P2

S86
E75



S86
E80



SB22-P3

SB22-P1

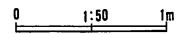
- | | | | | |
|----|-----------|-----|-----|------------------------------|
| 1. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | 焼土・炭化物、黄褐色浮石細粒3%含む。 |
| 2. | 10YR3/1 | 黒褐色 | シルト | 焼土・炭化物微量、黄褐色浮石細粒2%含む。SB22-P2 |
| 3. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | φ5~10%の黄褐色浮石細粒含む。 |
| 4. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 炭化物少量含む。 |
| 5. | 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | 堅緻、黄褐色浮石細粒10%含む。 |
| 6. | 明黄褐色 | 浮石 | | 汚れた黄褐色浮石。 |

- | | | | | |
|----|---------|-----|-----|--------------------|
| 1. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | 焼土多量、黄褐色浮石細粒1%含む。 |
| 2. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | しまりなし、黄褐色浮石細粒1%含む。 |
| 3. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | しまりなし、焼土多量含む。 |
| 4. | 10YR2/2 | 黒褐色 | シルト | しまりなし、焼土少量含む。 |

SB22-P3

- | | | | | |
|----|-----------|----|-----|------------------------|
| 1. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | φ5mmの黄褐色浮石細粒3%含む。 |
| 2. | 10YR1.7/1 | 黒色 | シルト | しまりなし、φ5mm黄褐色浮石細粒7%含む。 |
| 3. | 10YR2/1 | 黒色 | シルト | しまりなし、黄褐色浮石細粒3%含む。 |

第104図 SB22掘立柱建物跡



3. 土坑類

SD001 土坑

遺構 (第 105 図、写真図版 105)

〈位置〉 A 調査区の K XVI グリッドに位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA01 住居跡と SA02 住居跡に隣接している。II 層を掘り下げている過程で検出された。

〈規模・形状〉 開口部は 96 cm×96 cm・深さ 42 cm、平面形は円形で断面形は箱形である。壁は外傾気味で、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は 2 層で構成され、黄褐色浮石細粒が混入した黒色のシルト質土である。

遺物 (第 332・347 図、写真図版 297・309)

〈土器〉 縄文時代前期前半 (2045)、後期前葉 (2044) の土器が出土している。

〈石器〉 2421 の石鏃が 1 点出土している。

SD002 土坑

遺構 (第 105 図、写真図版 105)

〈位置〉 A 調査区の K XVI グリッドの北西隅に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 II 層を掘り下げている過程で検出された。

〈規模・形状〉 開口部は 60 cm×50 cm・深さ 21 cm、平面形は略円形で断面形は逆台形を呈する。壁は外傾気味で、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は 2 層で、黄褐色浮石細粒が混入した黒色のシルト質土で構成されている。

遺物 出土していない。

SD003 土坑

遺構 (第 105 図、写真図版 105)

〈位置〉 A 調査区の K XVI グリッドの北西隅に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 II 層を掘り下げている過程で検出された。

〈規模・形状〉 開口部で 110 cm×77 cm・深さ 21 cm、平面形は楕円形で断面形は浅皿形である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦でかたい。

〈埋土〉 埋土は 3 層で、黄褐色浮石細粒が混入した黒色のシルト質土で構成されている。特に、2 層中には多量の黄褐色浮石細粒が混入している。

遺物 出土していない。

SD004 土坑

遺構（第 105 図、写真図版 105）

〈位置〉 A 調査区の K XVI グリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 八戸火山灰層直上で検出された。

〈規模・形状〉 開口部で 80 cm×60 cm・深さ 15 cm、平面形は楕円形で断面形はすり鉢形である。

〈埋土〉 埋土は 2 層で、黄褐色浮石細粒が混入した黒色のシルト質土で構成されている。

遺物 出土していない。

SD005 土坑

遺構（第 105 図、写真図版 106）

〈位置〉 A 調査区の K XVI グリッドのほぼ中央部に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 八戸火山灰層直上で検出された。

〈規模・形状〉 開口部で径 68 cm×49 cm・深さ 28 cm、平面形は小判形で断面形は箱形である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は 3 層で、黄褐色浮石細粒が混入した黒色のシルト質土で構成されている。

遺物（第 347 図、写真図版 309）

〈石器〉 2422 の石匙が 1 点出土している。

SD006 土坑

遺構（第 105 図、写真図版 106）

〈位置〉 A 調査区の K XVI グリッドのほぼ中央部に位置している。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉 開口部で 40 cm×37 cm・深さ 27 cm、平面形は円形、壁は垂直に立ち上がり断面形は筒形である。底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は 2 層で、黄褐色浮石細粒が混入した黒色のシルト質土で構成されている。2 層は軟らかい土で、灰白色粘土がブロック状に混入している。人為堆積と考えられる。

遺物 出土していない。

SD007 土坑

遺構（第 105 図、写真図版 106）

〈位置〉 A 調査区の K XVI グリッドの北側に位置し、SD003 に隣接している。

〈検出状況・重複関係〉 八戸火山灰層直上で検出された。

〈規模・形状〉 開口部で 70 cm×32 cm・深さ 21 cm、平面形は小判形で断面形は箱形である。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は単層で黒色のシルト質土が主体で、灰白色粘土が微量混入している。

遺物（第 332 図、写真図版 297）

〈土器〉 縄文時代後期後半と思われる粗製深鉢が出土している（2046・2047）。

SD008 土坑

遺構（第 105 図、写真図版 106）

〈位置〉 A 調査区の J XVI グリッドのほぼ中央部に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 II 層を掘り下げている段階で検出された。SA04 住居跡・SD019 土坑と重複しており、当土坑はいずれの遺構よりも新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉 開口部で 92 cm×84 cm・深さ 82 cm、平面形は小判形で断面形は箱形である。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む量に違いはあるが、類似した黒色のシルト質土で構成されている。埋土中位付近に礫が見られた。人為堆積と考えられる。

遺物（第 332 図、写真図版 297）

〈土器〉 縄文時代後期後葉の土器が出土している（2048～2051）。

SD009 土坑

遺構（第 105 図、写真図版 107）

〈位置〉 A 調査区の J XVI グリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 II 層を掘り下げている段階で検出された。SA04 住居跡と重複関係にあり、当土坑が新しい。

〈規模・形状〉 開口部で 84 cm×80 cm・深さ 53 cm、平面形は小判形で断面形は箱形である。壁は外傾気味に立ち上がり、底面は平坦でかたい。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む類似した黒色のシルト質土で構成されている。開口部周辺に頭大の亜角礫が見られたが、当遺構との関係は不明である。人為堆積と考えられる。

遺物（第 332 図、写真図版 297）

〈土器〉 2052 は口唇部が肥厚する LR 縄文施文の深鉢である。

SD010 土坑

遺構（第 106 図、写真図版 107）

〈位置〉 A 調査グリッドの J XVI グリッドの東側にあり、SD017 土坑と隣接している。

〈検出状況・重複関係〉 II 層を掘り下げている初期の段階で検出された。

〈規模・形状〉 開口部で 66 cm×60 cm・深さ 23 cm、平面形は円形で断面形は逆台形を呈する。壁は外傾気味に立ち上がり、底面は平坦でかたい。

〈埋土〉 埋土は微量の黄褐色浮石細粒と炭化物を含む黒色のシルト質土で構成されている。底面中央部で底面に密着した状態で径 17 cm ほどの角礫が見られる。

遺物（第 332 図、写真図版 297）

〈土器・土製品〉 2053 は壺の下半である。胴部下半に 2 条の平行沈線が見られるが全容については不明である。2054～2057 は縄文時代後期後半の土器と思われる。

SD011 土坑

遺構（第 106 図、写真図版 107）

〈位置〉 A 調査区の J XVI グリッドの東側にあり、SD017 土坑と隣接している。

〈検出状況・重複関係〉 II 層を掘り下げている初期の段階で検出された。SD 020 土坑と重複しており、当遺構が新しい。

〈規模・形状〉 開口部で 104 cm×103 cm・深さ 66 cm、平面形は円形で断面形は円筒形である。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦でかたい。

〈埋土〉 埋土は微量の黄褐色浮石細粒と炭化物を含む黒色のシルト質土で構成されており、底面から約 20 cm 上位に 5 cm 土の層厚をもつ赤色顔料が平面的な広がりで確認された。

遺物（第 332 図、写真図版 297）

〈出土状況〉 土坑の南壁に接するように、中型の台付鉢が正立の状態出土している。

〈土器〉 2058 は台付鉢である。口縁部は小波状縁で、口縁部はやや内湾している。頸部に 2 本の沈線が巡り口縁部文様帯には入組三叉文、胴部文様帯には LR 縄文が施文されている。内面底部から胴部に赤色顔料の集積がみられた。

SD012 土坑

遺構（第 106 図、写真図版 108）

〈位置〉 A 調査区、J XVI グリッドの西側にあり、SA03・SA04 住居跡と隣接している。

〈検出状況・重複関係〉 II 層上面を掘り下げている初期の段階で検出された。

〈規模・形状〉 開口部で 102 cm×92 cm・深さ 35 cm、平面形は円形で断面形は箱形である。壁

は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦でかたい。

〈埋土〉埋土は微量の黄褐色浮石細粒と炭化物を含むしまりのある黒色のシルト質土で構成されており、2層中には多くの小礫を含んでいる。自然堆積相を示す。

遺物（第 332 図、写真図版 297）

〈土器〉縄文時代後期後半の土器である。

SD013 土坑

遺構（第 106 図、写真図版 108）

〈位置〉A 調査区、J XVI グリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SD023 土坑と重複しており、当遺構が新しい。

〈規模・形状〉開口部で 122 cm×110 cm・深さ 45 cm、平面形は円形、断面形は逆台形状である。壁は外傾気味に真っ直ぐに立ち上がり、底面は平坦である。西側の壁際の底面から 10 cm 程度浮いた所から、完形に近い注口土器が出土している。

〈埋土〉 ϕ 10 mm 土の黄褐色浮石細粒を少量含んだ砂っぽい黒色のシルト質土である。

遺物（第 332 図、写真図版 297）

〈土器〉2061 は丸底の注口である。口縁部は外反し胴部は算盤形である。口縁部には 2 条の刻目帯、頸部には入り組み状の C 字文が展開し、胴部は無文となっている。

SD014 土坑

遺構

〈位置〉A 調査区、J XVI グリッドの北側 SA03 住居跡内に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA03 住居跡と重複しており、住居跡と同時期である。

〈規模・形状〉開口部で 74 cm×72 cm・深さ 20 cm、平面形は円形、断面形は逆台形状である。

〈埋土〉埋土は ϕ 5～10 mm の黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土である。

遺物 出土していない。

SD015 土坑

遺構（第 106 図、写真図版 108）

〈位置〉A 調査区、J XVI グリッドの北西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA03 住居跡の床面を精査中に地床炉の下位から検出された。したがって、本土坑は SA03 住居跡よりも古く位置づけられる。

〈規模・形状〉開口部で 95 cm×95 cm・深さ 25 cm、平面形は円形で断面形は箱形である。壁

は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦でかたい。

〈埋土〉埋土は微量の黄褐色浮石細粒と炭化物を含むしまりのある黒色のシルト質土で構成されており、特に最下層の4層は南部浮石の最堆積層で他の遺構を開削した際の排土と考えられる。人為堆積相である。

遺物 (第 332 図、写真図版 297)

〈土器〉縄文時代後期前葉の土器が出土している。

SD016 土坑

遺構 (第 106 図、写真図版 109)

〈位置〉A調査区、J XVI グリッドの南側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉開口部で 116 cm×110 cm・深さ 20 cm、平面形は円形で断面形は箱形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉埋土は少量の黄褐色浮石細粒が含まれた黒色のシルト質土で構成されている。

遺物 出土していない。

SD017 土坑

遺構 (第 106 図、写真図版 109)

〈位置〉A調査区、J XVI グリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA17 住居跡と重複しており、当遺構が新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉開口部径 125 cm×110 cm・深さ 15 cm、平面形は円形で断面形は浅皿形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉埋土は少量の黄褐色浮石細粒が含まれた黒褐色のシルト質土で構成されている。

遺物 (第 332 図、写真図版 297)

〈土器〉2065 は横走縄文が施文されている。

SD018 土坑

遺構 (第 106 図、写真図版 109)

〈位置〉A調査区、J XVI グリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA05・SA17 住居跡と重複しており、当遺構が両住居跡より新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉開口部で 57 cm×54 cm・深さ 17 cm、平面形は円形で断面形は漏斗形である。

壁は外傾気味に立ち上がっている。

〈埋土〉埋土は少量の黄褐色浮石細粒が含まれた黒褐色のシルト質土で構成されている。

遺物（第 332 図、写真図版 297）

〈土器〉2066 は縄文時代後期後半の土器である。

SD019 土坑

遺構（第 106 図、写真図版 109）

〈位置〉A 調査区、J XVI グリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA04 住居跡と重複しており、当遺構が住居跡より古く位置づけられる。

〈規模・形状〉開口部で 125 cm×120 cm・深さ 40 cm、平面形は円形で断面形はフラスコ形である。

〈埋土〉埋土は少量の黄褐色浮石細粒が含まれた黒褐色のシルト質土で構成されている。

遺物（第 332 図、写真図版 297）

〈土器〉2068 は縄文時代中期末葉の土器である。

SD020 土坑

遺構（第 107 図、写真図版 110）

〈位置〉A 調査区、J XVI グリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SD011 土坑と重複しており、当遺構が土坑より古く位置づけられる。

〈規模・形状〉開口部で 132 cm×128 cm・深さ 32 cm、平面形は略円形で断面形は箱形である。底面は中央部に行くにつれ周囲より若干低くなっている。

〈埋土〉埋土はII層起源と思われる黒褐色のシルト質土で構成されている。

遺物（第 332 図、写真図版 297）

〈土器〉2069 は縄文時代晩期前葉の注口である。

SD021 土坑

遺構（第 107 図、写真図版 110）

〈位置〉A 調査区、J XVI グリッドの SA05 住居跡内に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA05 住居跡と SB01-P4 と重複しており、いずれの遺構よりも古く位置づけられる。

〈規模・形状〉開口部で 137 cm×130 cm・深さ 70 cm、平面形は略円形で断面形は頸部に括れをもつフラスコ形である。底面は平坦であり、中央部に径 22 cm×22 cm・底面からの深さ 10 cm

の規模をもつ副穴がある。

〈埋土〉埋土は少量の黄褐色浮石細粒が含まれた黒色～黒褐色のシルト質土で構成されており、最下層の5層は開口部付近の壁が崩落したと考えられるしまりのないローム質土である。

遺物 出土していない。

SD022 土坑

遺構（第107図、写真図版110）

〈位置〉 A調査区、J XVIグリッドのSA05住居跡内に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA05住居跡と重複しており住居跡よりも古く位置づけられる。

〈規模・形状〉 開口部で86 cm×64 cm・深さ40 cm、平面形は楕円形で断面形は箱形である。壁は外傾気味に立ち上がり、底面は溝状となっている。

〈埋土〉 埋土は南部浮石の細粒が混入した暗褐色のシルト質土が主体をなし、部分的に南部浮石がブロック状に入り込んでいる。人為堆積と考えられる。

遺物 出土していない。

SD023 土坑

遺構（第107図、写真図版110）

〈位置〉 A調査区、J XVIグリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SD013土坑と重複しており土坑よりも古く位置づけられる。

〈規模・形状〉 開口部で94 cm×66 cm・深さ64 cm、平面形は楕円形で断面形はピーカー形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は溝状となっている。

〈埋土〉 埋土の断面に幅30 cm、深さ64 cmの柱痕跡が認められ、周囲は黄褐色浮石細粒混じりの黒褐色系のシルト質土で埋められている。

遺物 出土していない。

SD024 土坑

遺構（第107図、写真図版111）

〈位置〉 A調査区、J XVIグリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉 開口部で115 cm×113 cm・深さ33 cm、平面形は円形で断面形はフラスコ形である。底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒混じりの黒色～黒褐色のシルト質土であり、自然堆積相を示し

ている。南西壁際の底面付近から略完形の土器が出土している。

遺物（第 332・333 図、写真図版 297・298）

〈土器・土製品〉 2070 は RL 縄文が施文された小型の平底鉢である。2071 は頸部がしまり口縁部に屈曲をもつ鉢である。口縁部装飾帯は縄文帯、頸部は無文帯、胴部には異種原体による非結束羽状縄文が施文されている。2075 は異種原体による非結束羽状縄文が施文された深鉢の胴部下半である。

SD025 土坑

遺構（第 107 図、写真図版 111）

〈位置〉 A 調査区、J XV グリッドの SA06 住居跡の南側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SB01 掘立柱建物跡を構成する SB01-P1 と重複関係にあり本土坑が古く位置づけられる。

〈規模・形状〉 推定で開口部 80 cm×58 cm・深さ 30 cm、平面形は長円形、断面形はすり鉢状を呈すると思われる。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を多量に含む黒褐色のシルト質土である。

遺物（第 333 図、写真図版 297）

〈土器〉 LR 縄文が施文された土器が 1 点出土している。

SD026 土坑

遺構（第 107 図、写真図版 111）

〈位置〉 A 調査区、I XIV グリッドの SA14 住居跡内に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA14 住居跡の床面を精査中に検出され、本土坑が古く位置づけられる。

〈規模・形状〉 開口部で 92 cm×58 cm・深さ 27 cm、平面形は略円形、断面形は逆台形状を呈する。壁は外傾気味に立ち上がり、床面の中央部は周囲よりやや低くなっている。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土である。

遺物 出土していない。

SD027 土坑

遺構（第 108 図、写真図版 111）

〈位置〉 A 調査区、I XIV グリッドの SA14 住居跡の西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉 開口部で 222 cm×211 cm・深さ 75～80 cm、平面形は略円形、断面形はフラス

コ形である。底面は平坦であり、中央部に 40 cm×35 cm・深さ 15 cm の副穴がある。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色のシルト質土が埋土の上部に堆積し、それより下位は明黄褐色の南部浮石を主体に厚さ数 cm の黒色土が互相をなしており自然堆積相を示している。埋土は全体に軟らかくしまりがない。このような堆積状況はこの土坑が空の状態に放置されていたことを意味し、一定期間にわたって壁の崩落と土坑周辺からの自然の営力による土壌の供給が繰り返しなされた結果形成されたと考えられる。

遺物 (第 333 図、写真図版 297)

〈土器〉2077 は LR 縄文が施文された土器である。

SD028 土坑

遺構 (第 108 図、写真図版 112)

〈位置〉A 調査区、K XVI グリッドの南東側の傾斜変換点付近に位置している。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉斜面下方の北東側の壁は既に失われている。推定で、開口部 288 cm×250 cm・深さ 98 cm、平面形は略円形、断面形は箱形である。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土で構成されており、斜面上方からの流れ込みによる自然堆積相を示している。底面には、極端な凹凸がみられるがこれは個々の単独の土坑に対応するものではないと考えられる。

遺物 (第 333 図、写真図版 298)

〈土器〉縄文時代後期後葉の土器 (2078～2081) が出土している。

SD029 土坑

遺構 (第 107 図、写真図版 112)

〈位置〉A 調査区、I XV グリッドの南側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉開口部で 114 cm×110 cm・深さ 24 cm、平面形は円形、断面形は箱形を呈する。壁は外傾気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦であり東側に向かって緩やかに傾斜している。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色のシルト質土で構成されている。

遺物 出土していない。

SD030 土坑

遺構 (第 108 図、写真図版 112)

〈位置〉 A調査区、I XVグリッドの北東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA12住居跡と重複関係にあり、SA12住居跡より新しい。

〈規模・形状〉 開口部で142 cm×122 cm・深さ26 cm、平面形は小判形、断面形は浅皿状である。壁は外傾気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色土の軟らかいシルト質土で構成され、褐色のシルト質土がブロック状に混入している。

遺物 出土していない。

SD031 土坑

遺構 (第108図、写真図版112)

〈位置〉 A調査区、I XVグリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA12住居跡と重複関係にあり、SA12住居跡より古く位置づけられる。

〈規模・形状〉 開口部での残存値は長軸73 cm・深さ15 cm、平面形は略円形、断面形は浅皿状を呈する。壁は外傾気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色土の軟らかいシルト質土で構成されている。

遺物 (第333図、写真図版298)

〈土器〉 縄文時代後期後葉の土器が出土している

SD032 土坑

遺構 (第108図、写真図版113)

〈位置〉 A調査区、I XVグリッドのほぼ中央部に位置し、SA11住居跡と接している。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉 開口部で94 cm×70 cm・深さ56 cm、平面形は楕円形、断面形は箱形である。壁は全体に垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土で構成されている。自然堆積相を示している。

遺物 (第333図、写真図版298)

〈土器〉 2084はLR縄文が施文された深鉢である。

SD033 土坑

遺構 (第109図、写真図版113)

〈位置〉 A調査区、I XVグリッドのほぼ中央部に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA11 住居跡の南壁に接しており SA11 住居跡より新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉 開口部で 52 cm×46 cm・深さ 46 cm、平面形は円形、断面形は筒形である。壁は全体に垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色～暗褐色のシルト質土で構成されている。自然堆積相を示している。

遺物（第 333 図、写真図版 298）

〈土器〉 2085 は RL 縄文が施文された深鉢である。

SD034 土坑

遺構（第 109 図、写真図版 113）

〈位置〉 A 調査区、I XV グリッドのほぼ中央部 SA10 住居跡内に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA10 住居跡より新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉 開口部で 60 cm×58 cm・深さ 80 cm、平面形は円形、断面形は筒形である。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土が主体をなし、ブロック状に焼土や南部浮石細粒が混入している。人為堆積相を示している。

遺物（第 333 図、写真図版 298）

〈土器〉 2086 は LR 縄文が施文された深鉢である。

SD035 土坑

遺構（第 109 図、写真図版 113）

〈位置〉 A 調査区、I XV グリッドのほぼ中央部 SA10 住居跡内に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA10 住居跡より古く位置づけられる。

〈規模・形状〉 開口部で 76 cm×74 cm・深さ 81 cm、平面形は円形、断面形はフラスコ形を呈する。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土が主体をなし、ブロック状に焼土や南部浮石細粒が混入している。人為堆積相を示している。

遺物（第 333・345・346 図、写真図版 298・309）

〈土器・土製品〉 2385 は重層する弧状沈線文が施文された壺である。双口土器の可能性が考えられる。2388 はつまみ部のようなところに貫通孔のある土製品である。蓋の可能性も考えられる。縄文時代前期前半（2089）、後期前葉（2090）の土器が出土している。

SD036 土坑

遺構（第 109 図、写真図版 114）

〈位置〉 A 調査区、I XV グリッドのほぼ中央部 SA10 住居跡内に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA10 住居跡より古く位置づけられる。

〈規模・形状〉 開口部で 60 cm×56 cm・深さ 37 cm、平面形は円形、断面形は箱形である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土が主体をなし、ブロック状に焼土や南部浮石細粒が混入している。人為堆積相を示している。

遺物 出土していない。

SD037 土坑

遺構（第 109 図、写真図版 114）

〈位置〉 A 調査区、I XVI グリッドのほぼ中央部 SA08 住居跡内に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA08 住居跡・SD040 土坑と重複しており、いずれの遺構よりも古く位置づけられる。

〈規模・形状〉 開口部で 96 cm・床面からの深さ 70 cm、平面形は略円形、断面形はフラスコ形である。底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土が主体をなし、最下部には壁の崩落土と考えられるしまりのない八戸ルームが見られる。自然堆積相を示す。

遺物（第 333 図、写真図版 298）

〈土器〉 縄文時代後期前葉（2091）の土器が出土している。

SD038 土坑

遺構（第 109 図、写真図版 114）

〈位置〉 A 調査区、SA08 住居跡内の中央部に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA08 住居跡と重複しており、SA08 住居跡よりも古く位置づけられる。

〈規模・形状〉 開口部で直径 75 cm・床面からの深さ 39 cm、平面形は略円形、断面形はすり鉢状である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を多量に含む黒褐色のシルト質土が主体をなしている。

遺物 出土していない。

SD039 土坑

遺構（第 109 図、写真図版 114）

〈位置〉 A調査区、I XVIグリッド SA08 住居跡内の西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA08 住居跡と重複しており、SA08 住居跡よりも古く位置づけられる。

〈規模・形状〉 開口部で 124 cm×106 cm・床面からの深さ 18 cm、平面形は略円形、断面形は皿形である。壁は緩やかに外傾し、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土である。自然堆積である。

遺物 出土していない。

SD040 土坑

遺構 (第 109 図、写真図版 115)

〈位置〉 A調査区、I XVIグリッド SA08 住居跡内の西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA08 住居跡・SD037 土坑と重複しており、SA08 住居跡よりも古く SD 037 土坑より新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉 開口部は推定で径 130 cm～150 cm・床面からの深さ 34 cm、平面形は略円形、断面形はフラスコ形である。底面外端の壁は奥に入り込み、底面は凹凸が著しい。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒褐色～明黄褐色のシルト質土である。人為堆積相を示す。

遺物 (第 333 図、写真図版 298)

〈土器〉 2093 は沈線文の縄文時代後期前葉の土器である。

SD041 土坑

遺構 (第 109 図、写真図版 115)

〈位置〉 A調査区、I XVIグリッド SA08 住居跡内の出入口状施設付近に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA08 住居跡と重複しており、SA08 住居跡よりも古く位置づけられる。

〈規模・形状〉 開口部は径 76 cm×62 cm・床面からの深さ 92 cm、平面形は略円形、断面形はフラスコ形である。底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒褐色～明黄褐色のシルト質土が主体で、最下層には焼土がブロック状に入り込んでいる。人為堆積相を示す。

遺物 出土していない。

SD042 土坑

遺構 (第 109 図、写真図版 115)

〈位置〉 B調査区、UVIグリッドの南東側、SF01 溝の北東側に位置している。大半は調査外に

延びている。

〈規模・形状〉 推定で開口部 85 cm×75 cm・深さ 37 cm、平面形はほぼ略円形、断面形は逆台形状である。壁は外傾気味に立ち上がり、底面は凹凸が著しい。

〈埋土〉 単層で黒色土である。

遺物 出土していない。

SD043 土坑

遺構 (第 110 図、写真図版 115)

〈位置〉 B 調査区、UVI グリッドの南東側、SF01 溝の北東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉 開口部で径 73 cm×65 cm・深さ 46 cm、平面形は略円形を呈し、断面形では逆台形状である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面には凹凸が見られる。この土坑の南東壁に径 24 cm×22 cm、深さ 30 cm の小ピットがありこれはこの土坑に附属するものである。

〈埋土〉 埋土は黒色土である。

遺物 出土していない。

SD044 土坑

遺構 (第 110 図、写真図版 115)

〈位置〉 B 調査区、UVI グリッドの南東側、SF01 溝の北東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉 開口部で 88 cm×72 cm・深さ 42 cm、平面形は略円形である。断面形は逆台形状である。壁は垂直に立ち上がり、底面には凹凸が見られる。

〈埋土〉 埋土は黒色土である。

遺物 出土していない。

SD045 土坑

遺構 (第 110 図、写真図版 116)

〈位置〉 B 調査区、UVI グリッドの南東側、SF01 溝の北東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉 開口部で径 74 cm×74 cm・深さ 34 cm、平面形は略円形、断面形は箱形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黒色土である。

遺物 出土していない。

SD046 土坑

遺構 (第 110 図、写真図版 116)

〈位置〉 B 調査区、UVI グリッドの南東側、SF01 溝の北東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉 開口部で 84 cm×74 cm・深さ 56 cm、平面形は略円形、断面形は箱形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は水平である。この土坑の南西壁に径 28 cm×20 cm、深さ 46 cm の小ピットがありこれはこの土坑に附属するものである。

〈埋土〉 埋土は黒色土である。

遺物 (第 333 図、写真図版 298)

〈土器〉 2094 は弥生時代初頭の土器である。

SD047 土坑

遺構 (第 110 図、写真図版 116)

〈位置〉 B 調査区、UVI グリッドの南東側、SF01 溝の北東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉 規模は開口部で径 96 cm×74 cm・深さ 80 cm、平面形は小判形、断面形はピーカー形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黒色土である。

遺物 出土していない。

SD048 土坑

遺構 (第 110 図、写真図版 116)

〈位置〉 B 調査区、TVI グリッドの南東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA24・25 住居跡と重複しており、いずれの住居跡よりも新しい。

〈規模・形状〉 開口部で 126 cm×94 cm・深さ 40 cm、平面形は不整形、断面形は箱形である。壁は外傾気味に立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黒色土である。

遺物 (第 333 図、写真図版 298)

〈土器〉 2095～2098 は弥生時代初頭の土器である。

SD049 土坑

遺構（第 110 図、写真図版 116）

〈位置〉 B 調査区、TVI グリッドの南東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA24 住居跡と重複しており、住居跡よりも新しい。

〈規模・形状〉 開口部で 192 cm×136 cm・深さ 14 cm、平面形は不整形、断面形は浅皿状である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。南壁に頭大の偏平な礫が見られるが、関係については不明である。

〈埋土〉 埋土は黒色土である。

遺物（第 333・347 図、写真図版 298・310）

〈土器〉 2099 は無文壺の口縁部である。

〈石器〉 不定形石器 2 点（2423・2424）が出土している。

SD050 土坑

遺構（第 110 図、写真図版 117）

〈位置〉 B 調査区、TVI グリッドの北東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 遺構のほぼ半分は調査区外に延びている。SA24 住居跡と重複しており、住居跡よりも新しい。

〈規模・形状〉 推定で開口部 120 cm×118 cm・深さ 120 cm、平面形は略円形、断面形はすり鉢状である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黒色土である。

遺物（第 334 図、写真図版 298）

〈土器〉 2101～2103 は弥生時代初頭の土器である。

SD051 土坑

遺構（第 110 図、写真図版 117）

〈位置〉 B 調査区、TVI グリッドの北西側に位置している。遺構のほぼ半分は調査区外に延びている。

〈規模・形状〉 推定で開口部 130 cm×100 cm・深さ 36 cm、平面形は楕円形、断面形は箱形である。壁は直立気味立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黒色土である。

遺物（第 334・347 図、写真図版 298・310）

〈土器〉 2104・2105 は弥生時代初頭の土器である。

〈石器〉石鏃1点(2425)が出土している。

SD052 土坑

遺構(第111図、写真図版117)

〈位置〉B調査区、SVIグリッドの北東SA26・29住居跡の間に位置する。

〈規模・形状〉推定で開口部128cm×124cm・深さ22cm、平面形は円形、断面形は箱形である。壁は外傾気味立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉埋土は黒色土である。

遺物(第334図、写真図版298・299)

〈土器〉2106は縄文時代早期の押型文土器である。2107～2116は弥生時代後半の土器である。

SD053 土坑

遺構(第111図、写真図版117)

〈位置〉B調査区、SVIグリッドの南東側に位置する。

〈検出状況・重複関係〉SA26住居跡と重複しており、住居跡より新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉推定で、開口部108cm×104cm・深さ20cm、平面形は円形、断面形は逆台形状である。壁は外傾気味立ち上がり、底面は平坦である。土坑の西側壁に径40cm大の礫が載っているが、土坑との関係については不明である。

〈埋土〉埋土は黒色土である。

遺物(第334図、写真図版299)

〈土器〉2117～2121は弥生時代初頭の土器である。

SD054 土坑

遺構(第111図、写真図版117)

〈位置〉B調査区、SVIグリッドの南東側に位置する。

〈検出状況・重複関係〉遺構の大半は調査区外に延びている。SA26住居跡と重複しており、住居跡より新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉推定で、開口部120cm×120cm・深さ23cmである。平面形は円形、断面形は逆台形状である。壁は外傾気味立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉埋土は黒色土である。

遺物(第334図、写真図版299)

〈土器〉2122～2125は弥生時代初頭の土器である。

SD055 土坑

遺構 (第 111 図、写真図版 117)

〈位置〉 B 調査区、Q VII グリッドの南東側に位置する。遺構の大半は調査区外に延びている。

〈規模・形状〉 推定で開口部 183 cm×130 cm・深さ 24 cm、平面形は楕円形、断面形は浅皿状である。壁は外傾気味立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黒色土の単層である。

遺物 (第 334・335・347 図、写真図版 299・310)

〈土器〉 2126～2133 は弥生初頭の土器である。2126 は底部の法量などから無文の浅鉢と考えられる。2130 は LR 縄文が施文された鉢の下半部である。

〈石器・石製品〉 「く」の字状の石器 1 点 (2426) と片面加工の不定形石器 1 点 (2427) が出土している。

SD056 土坑

遺構 (第 111 図、写真図版 117)

〈位置〉 B 調査区、Q VII グリッドの北東側に位置する。

〈規模・形状〉 開口部で 70 cm×70 cm・深さ 28 cm、平面形は円形、断面形は皿形である。壁は外傾気味立ち上がり、底面は平坦である。西側は柱穴状ピットに切られている。

〈埋土〉 埋土は黒色土の単層である。

遺物 (第 335・347 図、写真図版 299)

〈土器〉 2134～2137 は弥生初頭の土器である。

〈石器〉 先鋭な不定形石器 1 点 (2428) が出土している。

SD057 土坑

遺構 (第 111 図、写真図版 117)

〈位置〉 B 調査区、Q VII グリッドの北東側に位置する。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉 開口部で 68 cm×62 cm・深さ 54 cm、平面形は円形、断面形は筒形である。壁は外傾気味に立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黒色土の単層である。

遺物 出土していない。

SD058 土坑

遺構（第 111 図、写真図版 118）

〈位置〉 B 調査区、Q VII グリッドの東側に位置する。

〈検出状況・重複関係〉 SD056 土坑と重複しており、本土坑が古く位置づけられる。

〈規模・形状〉 推定で開口部 104 cm×84 cm、深さ 10 cm である。壁は外傾気味に緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。一部調査区外に延びるが平面形は円形で、断面形は逆台形状を呈する。

〈埋土〉 埋土は黒色土の単層である。

遺物 出土していない。

SD059 土坑

遺構（第 111 図、写真図版 118）

〈位置〉 B 調査区、N VII グリッドの北東側に位置する。

〈規模・形状〉 一部調査区外に延びるが平面形は円形で、断面形は浅皿状を呈する。規模は推定で開口部 150 cm×114 cm、深さ 10 cm である。壁は外傾気味に緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黒色土の単層である。

遺物 出土していない。

SD060 土坑

遺構（第 111 図、写真図版 118）

〈位置〉 B 調査区、U VI グリッドの南側に位置する。

〈規模・形状〉 平面形は円形で、断面形は箱形である。規模は開口部で 72 cm×72 cm、深さ 44 cm である。壁は外傾気味に緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黒色土の単層である。

遺物 出土していない。

SD061 土坑

遺構（第 112 図、写真図版 118）

〈位置〉 B 調査区、K VII グリッドの南側に位置する。

〈規模・形状〉 平面形は円形で、断面形は箱形である。規模は開口部で 80 cm×71 cm、深さ 23 cm である。壁は外傾気味に緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。土坑の検出段階で埋土上

部に 20 cm 大の礫が数個あり、礫の下位からは 1 個体分の深鉢形土器がおしつぶされた状態で出土している。

〈埋土〉埋土はシルト質土の黒色土の単層である。

遺物（第 335 図、写真図版 299）

〈土器〉2138 は口縁部が 4 単位波状の深鉢である。波頂部には 3 個の孔を持つ円形の貼付け、波底部の口縁部装飾帯には縦の短い隆帯が貼付されている。胴部下半に 1 条の沈線が巡り、沈線より下は縄文、上には方形の区画文と中心部に円文が展開している。

SD062 土坑

遺構（第 112 図、写真図版 118）

〈位置〉B 調査区、K VII グリッドの北西側に位置する。

〈規模・形状〉平面形は略円形で、断面形は皿形である。規模は開口部で 110 cm×91 cm、深さ 25 cm である。壁は外傾気味に緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉埋土は多量の黄褐色浮石細粒を含むシルト質土の黒褐色土である。

遺物（第 335 図、写真図版 299）

〈土器〉縄文時代後期前葉（2139・2140）の土器が出土している。

SD063 土坑

遺構（第 112 図、写真図版 119）

〈位置〉B 調査区、K VII グリッドの中央部に位置する。

〈検出状況・重複関係〉SD064 土坑と重複しており、当土坑が新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉平面形は円形で、断面形は逆台形である。規模は開口部で 195 cm×174 cm、深さ 47 cm である。壁は外傾気味に緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉1・2 層とも黒～黒褐色のシルト質土で構成されており、特に 2 層には多量の黄褐色浮石細粒が含まれており、他の遺構を構築するさいの廃土が投棄されたものと思われる。

遺物（第 335・336・350 図、写真図版 300・311）

〈土器〉縄文時代後期中葉・後葉の土器が出土している。

〈石器・石製品〉磨石が 1 点（2456）、石匙が 1 点（2457）出土している。

SD064 土坑

遺構（第 112 図、写真図版 119）

〈位置〉B 調査区、K VII グリッドの中央部に位置する。

〈検出状況・重複関係〉SD063 土坑と重複しており、当土坑が古く位置づけられる。

〈規模・形状〉平面形は楕円形で、断面形は逆台形形である。規模は推定で開口部で180 cm×82 cm、深さ60 cmである。壁は外傾気味に緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが西側部分がやや高くなっている。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒褐色～暗褐色のシルト質土で構成されており、特に西側部分の底面には5 cm程度の厚さの赤色顔料を多量に含む層が確認されている。

遺物（第336・347図、写真図版300・310）

〈土器〉縄文時代前期前半（2150・2151）、後期前葉（2152）、晩期中葉（2153・2154）が出土している。

〈石器〉2429の石鏃が1点出土している。

SD065 土坑

遺構（第112図、写真図版119）

〈位置〉B調査区、KⅦグリッドの南側に位置する。SD061土坑と隣接している。

〈規模・形状〉平面形は楕円形で、断面形は逆台形形である。規模は推定で開口部で150 cm×76 cm、深さ41 cmである。壁は外傾気味に緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが北側部分がやや高くなっている。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土で構成されている。

遺物 出土していない。

SD066 土坑

遺構（第112図、写真図版119）

〈位置〉B調査区、KⅦグリッドの東側に位置する。

〈規模・形状〉平面形は小判形で、断面形は箱形である。規模は推定で開口部で156 cm×74 cm、深さ60 cmである。壁は外傾気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが西側部分がやや高くなっている。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土で構成されており、特に北西壁際の底面上には平面的な広がりを見せる赤色顔料が確認された。

遺物（第336図、写真図版300）

〈土器〉2155～2157は縄文時代後期後葉の土器である。

SD067 土坑

遺構（第 113 図、写真図版 121）

〈位置〉 B 調査区、K VII グリッドのほぼ中央部に位置する。

〈規模・形状〉 平面形は略円形で、断面形はすり鉢状である。規模は推定で開口部で 126 cm × 90 cm、深さ 33 cm である。壁は外傾気味に緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を多量に含む黒色のシルト質土で構成されている。

遺物 出土していない。

SD068 土坑

遺構（第 112 図、写真図版 120）

〈位置〉 B 調査区、K VII グリッドのほぼ中央部に位置する。

〈規模・形状〉 平面形は楕円形で、断面形は箱形である。規模は推定で開口部で 120 cm × 76 cm、深さ 44 cm である。壁は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが北東側がいくぶん高くなっている。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土で構成されている。

遺物 出土していない。

SD069 土坑

遺構（第 112 図、写真図版 120）

〈位置〉 B 調査区、K VII グリッド区のほぼ中央部に位置する。

〈規模・形状〉 平面形は楕円形で、断面形は箱形である。規模は推定で開口部で 162 cm × 68 cm、深さ 35 cm である。壁は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが北西側がいくぶん高くなっている。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を多量に含む黒色のシルト質土で構成されている。

遺物（第 336 図、写真図版 300）

〈土器〉 2158 は無文の大型壺である。2159 は捺糸文が施文されている。

SD070 土坑

遺構（第 113 図、写真図版 121）

〈位置〉 B 調査区、K VII グリッドのほぼ中央部に位置する。

〈検出状況・重複関係〉 SD067・071 土坑と重複関係にあり、いずれの土坑よりも古く位置づけられる。

〈規模・形状〉平面形は楕円形で、断面形は箱形である。規模は推定で開口部で 152 cm×54 cm、深さ 36 cm である。壁は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが北側がいくぶん高くなっている。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒を多量に含む黒色のシルト質土で構成されている。

遺物 (第 336 図、写真図版 300)

〈土器〉2160 は縄文時代後期前葉の土器である。

SD071 土坑

遺構 (第 113 図、写真図版 121)

〈位置〉B 調査区、KVII グリッドのほぼ中央部に位置する。

〈検出状況・重複関係〉SD 060・071 土坑と重複関係にあり、いずれの土坑よりも新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉平面形は隅丸長方形で、断面形は皿形である。規模は推定で開口部で 124 cm×100 cm、深さ 4 cm である。壁は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。北西部分でしか確認されなかったが、幅 10 cm、深さ 25 cm 土の周溝状の溝が認められた。なお、この土坑の上部に頭大の礫が認められたが両者の関係については不明である。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色のシルト質土で構成されている。

遺物 出土していない。

SD072 土坑

遺構 (第 112 図、写真図版 121)

〈位置〉B 調査区、SA35 住居跡内に位置している。

〈検出状況・重複関係〉赤色顔料のみを確認しただけであるが、他の類例から土坑と判断して記述を進める。この遺構は当初 SA35 住居跡床面精査中に検出され、住居跡に伴うものと考えていたが、周囲の遺構精査が進行している段階で、土壌墓に伴う赤色顔料と考えられ、赤色顔料だけであるが土壌墓と認定することにした。

〈規模・形状〉本来赤色顔料を伴う土壌墓は、SA35 住居跡の埋土を切り込んで構築されていたことになる。この土壌墓は SA35 住居跡の壁を破壊していないことから、ほぼ南北に長い楕円形の形状であったと思われる。

遺物 出土していない。

SD073 土坑

遺構（第 113 図、写真図版 121）

〈位置〉 B 調査区、J VII 調査グリッドのほぼ西側に位置する。

〈検出状況・重複関係〉 SA38 住居跡と重複関係にあり、いずれの住居跡よりも新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉平面形は略円形で、断面形は逆台形形である。規模は開口部で 202 cm×174 cm、深さ 116 cm である。壁は外傾気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土で構成されている。全体に自然堆積様を示しているが、部分的に焼土などの人為的な投棄も認められる。

遺物 出土していない。

SD074 土坑

遺構（第 113 図、写真図版 121）

〈位置〉 B 調査区、J VII グリッドのほぼ西側に位置する。

〈検出状況・重複関係〉 SA38 住居跡と重複関係にあり、いずれの住居跡よりも新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉平面形は略円形で、断面形は逆台形形である。規模は開口部で 106 cm×106 cm、深さ 39 cm である。壁は外傾気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色～極暗褐色のシルト質土で構成されており、部分的にブロック状に南部浮石が入り込む。

遺物（第 336 図、写真図版 300・301）

〈土器〉縄文時代後期前葉（2162・2163・2168）、後期後葉の（2161）土器が出土している。

SD075 土坑

遺構（第 113 図、写真図版 121）

〈位置〉 B 調査区、J VII グリッドのほ南側に位置する。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉平面形は略円形で、断面形は箱形状である。規模は推定で開口部で径 112 cm×106 cm、深さ 30 cm である。壁は外傾気味に立ち上がり、底面は中央部がやや高くなっているがほぼ平坦である。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒を少量含む黒褐色のシルト質土で構成されている。

遺物（第 336・345・346・348 図、写真図版 300・301・309・310）

〈土器・土製品〉 縄文時代前期前半（2169・2170）、後期後葉（2164～2167）が出土している。2384 は LR 縄文が施文された深鉢の底部である。2386 は口縁部に刻みを持つ突起が付された壺である。口縁部装飾帯は縄文帯、頸部文様帯には幅の狭い入り組み状の曲線状文が施文されている。口縁部装飾帯、頸部文様帯の文様の結節点、胴部との境に刻みのある瘤が付されている。施文されている縄文は異種原体による非結束羽状縄文である。2988 は土製円盤、2390 は無文のミニチュア土器、2391 は異種原体による非結束羽状縄文が施文されたミニチュアの注口である。〈石器〉 2430 の円形で偏平な石器が出土している。周縁に両面からの粗い敲打痕が見られる。

SD076 土坑

遺構（第 113 図、写真図版 122）

〈位置〉 B 調査区、J VII グリッドの南側に位置する。

〈検出状況・重複関係〉 SA53 住居跡と重複関係にあり、住居跡よりも古く位置づけられる。

〈規模・形状〉 平面形は楕円形で、断面形は箱形状である。規模は推定で開口部で 183 cm×106 cm、深さ 32 cm である。壁は外傾気味に立ち上がり、底面は中央部がやや高くなっているがほぼ平坦である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を少量含む黒褐色のシルト質土で構成されており、拳大の礫が数個混入している。

遺物（第 337 図、写真図版 301）

〈土器〉 縄文時代前期前半（3174・2175）、後期後葉（2171～2173）の土器が出土している。

SD077 土坑

遺構（第 114 図、写真図版 122）

〈位置〉 B 調査区、J VII グリッドの北側に位置している。

〈規模・形状〉 平面形は細長い不整楕円形である。規模は 212 cm×108 cm で深さは 5 cm 程度しか確認できなかった。長軸方向の両端と西壁部分には壁に沿うように幅 25 cm 前後、深さ 10 cm 程度の壁溝が巡っている。また、長軸方向の両端と東西の壁際には、直径 15 cm・深さ 20～40 cm の柱穴状の小さいピットが認められる。長軸方向の南端には、径 40 cm の偏平な垂角礫が南側に約 30° 傾いた状態で検出された。

遺物（第 350 図、写真図版 311）

〈石製品〉 2458 は墓標と思われる偏平な礫で、片面に部分的に赤色顔料の痕跡が認められる。

SD078 土坑

遺構 (第 114 図、写真図版 122)

〈位置〉 B 調査区、J VII グリッドの南側に位置している。

〈規模・形状〉 開口部で 130 cm×114 cm、深さ 50 cm の規模を持つ平面形が略円形の土坑である。

〈埋土〉 2 層で構成され、黄褐色浮石細粒を多量に含む黒褐色～暗褐色のシルト質土である。

遺物 (第 337 図、写真図版 301)

〈土器〉 2176・2177 は縄文時代前期前半の土器である。

SD079 土坑

遺構 (第 114 図、写真図版 123)

〈位置〉 B 調査区、J VI グリッドの南側に位置している。

〈規模・形状〉 調査区外延びており詳細については不明である。平面形は不整形、開口部では南北 240 cm、深さ 50 cm 程度である。土坑内には、直径 60 cm・深さ 4～30 cm の不整形な落ち込みが 2 カ所に見られる。土坑の南壁には幅 10 cm・長さ 25 cm の立石が直立に埋置されていた。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒が 5～20 % 含まれた黒褐色のシルト質土である。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がっている。

遺物 (第 337 図、写真図版 301)

〈土器〉 縄文時代後期後葉 (2178・2179～2181) の土器が出土している。

SD080 土坑

遺構 (第 114 図、写真図版 122)

〈位置〉 B 調査区、J VI グリッドの北西側に位置している。

〈規模・形状〉 調査区外に延びており詳細については不明である。推定で平面形が円形、開口部で直径 130 cm、深さ 30 cm の円形の土坑と思われる。断面形は箱形で、底面は平坦であり壁は外傾気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は 2～8 % の黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土である。

遺物 (第 337 図、写真図版 301)

〈土器〉 2183 は縄文時代晩期前葉の注口である。

SD081 土坑

遺構 (第 115 図、写真図版 123)

〈位置〉 B 調査区、J VI グリッドの北西側に位置している。

〈規模・形状〉 開口部で 144 cm×86 cm・深さ 37 cm の規模の不整楕円形を呈する土坑である。断面形は箱形で、底面は東側に向かってやや傾斜しており、壁は外傾気味に立ち上がっている。南壁の西端と東端に、直径 25 cm・深さ 18～25 cm の小ピットが検出された。

〈埋土〉 埋土は 2～8% の黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土である。

遺物 (第 337 図、写真図版 301)

〈土器〉 2184 は不整綾線文が施文された土器である。

SD082 土坑

遺構 (第 115 図、写真図版 123)

〈位置〉 B 調査区、J VI グリッドの西側に位置している。

〈規模・形状〉 開口部で 228 cm×146 cm・深さ 33 cm の規模で平面形は不整形である。底面の北端と西端、東側の半分は約 5 cm ほど周囲より低くなっている。壁は緩やかに外湾気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 黄褐色浮石細粒が混じった黒色のシルト質土である。

遺物 (第 337 図、写真図版 301)

〈土器〉 2185 は RL 縄文が施文されている。2186 は異種原体による非結束羽状縄文が施文された壺である。

SD083 土坑

遺構 (第 115 図、写真図版 123)

〈位置〉 B 調査区、I VI グリッドの南側に位置している。

〈規模・形状〉 一部が調査区外に延びているため全貌については不明である。深さ 33 cm の規模で平面形が不整形の土坑である。底面は平坦で、南側の壁は外傾気味に立ち上がり、西側の壁は内側に入り込んでいる。

〈埋土〉 部分的に焼土層を形成しているが、主体となっているのは焼土・黄褐色浮石細粒混じりの黒褐色～暗褐色のシルト質土である。

遺物 (第 337・346・348 図、写真図版 301・309・310)

〈土器・土製品〉 2187～2195 は縄文時代後期中葉・後葉の土器である。1853 は壺の胴部である。頸部には 4 個の瘤が貼付され沈線で連結されている。胴部最大径は中央部にありその部位には

瘤が貼付されている。胴部上半には4単位のタスキ掛け状入組文、下半は無文となっている。2392・2393A・2393Bは焼成粘土である。2394は土偶の下顎に相当する部分で、口は貼付けられている。2395は土製円盤である。

〈石器・石製品〉石鏃1点(2431)、石匙1点(2433)、石斧1点(2435)が出土している。

SD084 土坑

遺構(第115・126図、写真図版123~125)

〈位置〉B調査区、I VIグリッドのSA51住居跡内に位置している。

〈検出状況・重複関係〉住居跡の床面を精査中に頭蓋骨と赤色顔料が塗布された礫が検出された。

〈規模・形状〉開口部で178 cm×112 cm、深さ20 cmの規模で平面形は小判形である。土坑内からは屈葬状態の埋葬人骨が検出された。土坑の上面のほぼ中央部には、赤色顔料の塗布された偏平な角礫が置かれていた。埋葬人骨は骨の劣化が著しく非常に脆弱な状況であった。顔面を西側に向け、頭蓋骨は東方向、体軸の方向はN 0° Eである。前頭骨部分は土圧により押しつぶされた状態であった。上顎骨に抜歯の痕が認められ、頭蓋骨には赤色顔料の痕跡が認められた。椎骨はほぼまっすぐであったが、腰椎の部分で若干の乱れが認められる。上腕骨・橈骨・尺骨は肩からまっすぐのびている。寛骨は体軸に対して、傾きをもっており埋葬当時の状況を表している。膝が約60°の角度で折曲げられており、屈葬の状況を示している。人骨の各部位の形状が比較的良好な状態で出土しているなかで、右足の腓骨のみが本来の部分から若干欠けている。副葬品としては、左手の親指付近に口縁部が一部欠損したミニチュア土器が置かれていた。人骨の腹部の上に、上述した礫が置かれていたが骨と礫の間には数 cmの埋土が認められ直接人体の上に置かれた状況ではない。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒が混じった黒褐色のシルト質土である。

遺物(第337・346図、写真図版301・309)

〈土器・土製品〉2396は埋葬人骨の左手の部分に残されていた無文のミニチュア鉢である。全体に歪みがある。薄手にしては硬質で手づくね成形の際の指頭痕が見られる。

SD085 土坑

遺構(第115図、写真図版126)

〈位置〉B調査区、I VIIグリッドのSA39住居跡状遺構内に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA 39住居跡状遺構の床面を精査中に検出された。SA39住居跡状遺構より古い。

〈規模・形状〉 開口部で 112 cm×110 cm、深さ 17 cm の規模で平面形は円形である。底面は平坦、壁は外傾気味に立ち上がっており、断面形は浅皿状である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒が散在する黒色のシルト質土である。

遺物 (第 338・346 図、写真図版 302・309)

〈土器・土製品〉 2199 は縄文時代後期前葉の土器である。2397 は無文の壺で頸部に軽い段が見られる。

SD086 土坑

遺構 (第 115 図、写真図版 125)

〈位置〉 B 調査区、I VII グリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 III 層下面縄文時代前期前半の土器を除去した段階で検出された。

〈規模・形状〉 開口部で 94 cm×86 cm、深さ 50 cm の規模で平面形は略円形である。底面は平坦、壁は外傾気味に立ち上がっており、断面形は箱形である。埋土上部に頭大の礫が数個見られる。

〈埋土〉 埋土は多量の焼土が混じった極暗褐色のシルト質土である。

遺物 出土していない。

SD087 土坑

遺構 (第 115 図、写真図版 125)

〈位置〉 B 調査区、I VII グリッドの北西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SB11 掘立柱建物跡を構成している SB P2 より古い。

〈規模・形状〉 開口部で 124 cm×86 cm、深さ 22 cm の規模で平面形は隅丸長方形である。底面は平坦、壁は垂直気味に立ち上がり、断面形は箱形である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を少量含む黒色～黒褐色のシルト質土である。

遺物 (第 338 図、写真図版 302)

〈土器〉 2201～2202 は縄文時代後期後葉の土器である。

SD088 土坑

遺構 (第 116 図、写真図版 126)

〈位置〉 B 調査区、I VII グリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA50 住居跡と重複しており、住居跡より新しい。

〈規模・形状〉 開口部で 90 cm×74 cm、深さ 45 cm の規模で平面形は略円形である。底面は平

坦、壁は垂直気味に立ち上がっており、断面形は箱形である。

〈埋土〉埋土は多量の黄褐色浮石細粒と微量の焼土が混じった黒色のシルト質土である。

遺物 (第 338・346 図、写真図版 302・309)

〈土器・土製品〉2203 は不整綾線文が施文されている。2398 は焼成粘土である。

SD089 土坑

遺構 (第 116 図、写真図版 126)

〈位置〉B 調査区、I VII グリッドの南側に位置している。

〈規模・形状〉開口部で 152 cm×150 cm、深さ 30 cm の規模で平面形は円形である。底面は平坦、壁は外傾気味に立ち上がり、断面形は箱形である。

〈埋土〉埋土は径 1 cm 大の大粒の黄褐色浮石細粒が混じった黒色～黒褐色のシルト質土である。

遺物 (第 338・348 図、写真図版 302・310)

〈土器〉2206・2207 は縄文時代前期前半の土器である。

〈石器〉石鏃が 1 点 (2432) 出土している。

SD090 土坑

遺構 (第 116 図、写真図版 126)

〈位置〉B 調査区、I VII グリッドの南側に位置している。

〈規模・形状〉開口部で 80 cm×66 cm、深さ 42 cm の規模で平面形は円形である。底面は平坦、壁は外傾気味に立ち上がっており、断面形は箱形である。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色のシルト質土である。

遺物 出土していない。

SD091 土坑

遺構 (第 116 図、写真図版 127)

〈位置〉B 調査区、I VII グリッドの南側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉埋土の上部には SG02 土器埋設遺構がある。

〈規模・形状〉開口部で 134 cm×128 cm、深さ 44 cm の規模で平面形は円形である。底面は平坦、壁は垂直気味に立ち上がっており、断面形は箱形である。

〈埋土〉埋土は少量の黄褐色浮石細粒を含んだ黒色のシルト質土である。

遺物 (第 338・348 図、写真図版 302・310)

〈土器・土製品〉2209～2214 は縄文時代前期前半の土器である。2208 は畝状の装飾口縁の鉢で

ある。口縁部には1条の刻目帯と1段の羊歯状文、胴部にはLR縄文が施文されている。2210はLR縄文が施文された平口縁の深鉢である。

〈石器〉先端部が欠損した石鏃が1点(2441)出土している。

SD092 土坑

遺構(第116図、写真図版127)

〈位置〉B調査区、I VIIグリッドの北側に位置している。

〈規模・形状〉開口部で96 cm×80 cm、深さ20 cmの規模で平面形は略円形、断面形は浅皿形である。土坑の上面には44 cm×42 cm×20 cm大の垂角礫が西側に傾いた状態で検出された。土坑内からは骨片と、礫の下部から破損した香炉形土器・粗製の深鉢形土器が出土している。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒が散在した黒色のシルト質土である。

遺物(第338・339・346・348・351図、写真図版302・303・309～311)

〈土器・土製品〉2215は口縁部に低い叉状の突起が付された壺である。頸部には小粒の瘤が貼付されLR縄文が施文されている。胴部上半は無文となっている。2216は香炉の上半である。頂部には横方向の貫通孔と縁の隆起した円窓が見られる。2217は異種原体による非結束羽状縄文が施文された深鉢の底部である。2218は無文の注口である。頸部に膨らみをもち、胴部最大径は肩部にもちその部位に急角度の注口部が付されている。2219はLR縄文が施文された深鉢の底部である。2220・2221は縄文時代後期後葉の土器である。2399は環状の不明土製品である。表面には縄文が施文され裏面は無文である。

〈石器〉石鏃が1点(2434)出土している。また、2464は開口部に置かれていた巨礫である。

SD093 土坑

遺構(第116図、写真図版127)

〈位置〉B調査区、HVIグリッドの南側に位置している。

〈規模・形状〉開口部で74 cm×64 cm、深さ27 cmの規模で平面形は円形である。明瞭な壁は認められなかったが、底部から湾曲してそのまま開口部に続いている。断面形は浅皿形である。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒が混入した黒色のシルト質土である。

遺物(第350図、写真図版311)

〈石製品〉石皿が1点(2459)出土している。

SD094 土坑

遺構(第116図)

〈位置〉 B調査区、HVIグリッドの中央部に位置している。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉 開口部で 86 cm×70 cm、深さ 52 cm の規模で平面形は略円形である。底面は平坦、壁は外傾し直線的に立ち上がっており、断面形は逆台形状である。埋土の上部には破碎した石皿を含む頭大の数個の礫が認められた。

〈埋土〉

遺物 出土していない。

SD095 土坑

遺構 (第 116 図、写真図版 128)

〈位置〉 B調査区、HVIグリッドの南側に位置している。

〈規模・形状〉 開口部で 156 cm×88 cm、深さ 30 cm の規模で平面形は小判形である。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がり、断面形は箱形である。

〈埋土〉 埋土は少量の黄褐色浮石細粒を含む赤黒色のシルト質土である。

遺物 (第 339 図、写真図版 303)

〈土器〉 縄文時代晩期前葉後半の土器が出土している。

SD096 土坑

遺構 (第 116 図、写真図版 128)

〈位置〉 B調査区、HVIグリッドの中央部に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 土坑は、2.5 m×2.5 m の広がりを持つ南部浮石の再堆積層を掘り込んで構築されている。

〈規模・形状〉 推定で、開口部が 156 cm×88 cm、深さ 30 cm の規模で平面形は小判形である。長軸方向の断面形は浅皿状である。

〈埋土〉 埋土は多量の黄褐色浮石細粒を含む赤黒色のシルト質土である。西端の埋土上部に微量の骨片が認められた。

遺物 (第 339 図、写真図版 303)

〈土器〉 2225～2228 は縄文時代後期中葉の土器である。

SD097 土坑

遺構 (第 117 図、写真図版 128)

〈位置〉 B調査区、HVIグリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA50 住居跡と重複しており、住居跡より新しい。

〈規模・形状〉 開口部で 266 cm×200 cm、深さ 30 cm の規模で平面形は不整円形である。明瞭な壁は形成されず、断面は掘り鉢状である。

〈埋土〉埋土は焼土と炭化物を含む層厚 5 cm 程度の層が繰り返して堆積している。全体に埋土はしまりがあり突き固めたように堅い。南東壁の底面から石棒の東部が出土している。

遺物 (第 348 図、写真図版 310)

〈石製品〉 綾杉状の細い沈刻のある石棒の頭部が 1 点 (2436) 出土している。

SD098 土坑

遺構 (第 117 図、写真図版 129)

〈位置〉 B 調査区、HVIグリッドの東側に位置しており一部が調査区外に延びている。

〈規模・形状〉 推定で開口部 94 cm×80 cm、深さ 30 cm の規模で平面形は略円形である。明瞭な壁は形成されず、断面は掘り鉢状である。

〈埋土〉 黄褐色浮石細粒を含む黒色のシルト質土である。

遺物 出土していない。

SD099 土坑

遺構 (第 117・126 図、写真図版 129)

〈位置〉 B 調査区、HVIグリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 縄文晩期初頭の土器群を除去した段階で検出した。

〈規模・形状〉 平面形は小判形で、断面形は箱形である。規模は開口部で 175 cm×95 cm、深さ 40 cm である。土坑の埋土上部のほぼ中央部に、破碎された石皿と裏面全体に赤色顔料が塗布された偏平な礫が置かれてあった。坑底部に密着した状態で埋葬された人骨が発見された。骨の状態は良好ではなかったが、頭蓋骨・上腕骨・腰椎・大腿骨・脛骨・仙骨・寛骨・ひ骨・足骨の一部が残存していた。頭蓋骨・寛骨の状態から、西頭位で膝を縦に折り曲げ仰向けで埋葬されていた。頭蓋骨は土圧で押しつぶされ、顔面の形状を明瞭に止めていない。膝は北側に折り曲がった状態であるが、これも土圧で押しつぶされたものである。土坑墓は、長軸 175 cm・短軸 95 cm・深さ 40 cm の規模で、平面形は小判型である。土坑墓の開口部のほぼ中央部からは厚さ 5 cm・幅 40 cm の偏平な礫と熱を受け破碎された石皿が置かれており、検出の段階ではマウンドなどは認められなかった。偏平な礫の裏面(土坑の坑底に面した面)には、赤色顔料が一面に擦り込まれていた。土坑墓の長軸方向は、ほぼ東西方向を示し、埋葬人骨の頭位方向は西方向である。土坑墓は縄文時代晩期初頭の包含層の下位で検出され、この時期、以前ないし

近い時期にこれらの墓域は形成されている。埋土中からは特に副葬品などは検出されなかったが、埋土は一期に埋め戻された層相を示しており、埋土中からは埋め戻しの過程で同時に混入したと思われる細粒の赤色顔料片も各所に認められた。人骨は、墳底部に密着した状態で発見され、残存状況は良好ではなかったが、頭蓋部・上腕部・腰椎・仙骨・寛骨・大腿骨・ひ骨・脛骨・足骨の一部が残っていた。人骨は頭蓋骨・寛骨の位置から、膝を縦におり曲げ、仰向けの状態で埋葬されたようである。頭蓋部は土圧により押しつぶされ、顔面の形状を明瞭に止めていない。脚部の検出の状況は膝を北側に折り曲げた屈葬状態を示しているが、これも土圧により本来の形状を止めていないものである。人骨の頸部に2点、左右の腰骨端に各1点、計4点の装飾品が骨に密着した状態で発見された。これらの装飾品は現位置で発見されており、それぞれ首飾り・腰飾りに相当するものと思われる。正式な鑑定結果によると、4点とも石材はヒスイである。4点とも形状が一律でなく非常に小型の製品であるが、孔の形状・サイズ・穿孔方法に共通性がみられ、同じ技術体系のもとで製作されたものと思われる。

〈埋土〉埋土は少量の炭化物と5～7%の黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土である。

遺物（第339・346・348・350図、写真図版303・309～311）

〈出土状況〉埋土の最上部から破砕した石皿の破片と赤色顔料が塗布された偏平な礫が出土している。人骨の頸部に2点、腰の部分に左右から各1点、計4点のヒスイが出土している。

〈土器・土製品〉縄文時代後期後葉（2229～2233）、晩期前葉（2243・2235）の土器が出土している。2400はスタンプ形の土製品である。つまみ部にはやや斜めの貫通孔が見られる。印面部分は楕円形で沈線により十字状の文様が施されている。

〈石製品〉2437～2440は埋葬人骨に装着していたヒスイ製の玉である。頸の部分に2点（2439・2440）、左腰に1点（2437）、右腰に1点（2438）が残存していた。4点とも片面穿孔である。2460は破砕された石皿である。割口に熱を受け煤が付着した痕跡が認められる。2462は土墳墓の開口部に認められた偏平な礫である。片面に赤色顔料の痕跡が認められた。

SD100 土坑

遺構（第117図、写真図版129）

〈位置〉B調査区、HVIグリッドの北側に位置している。

〈規模・形状〉開口部50cm×46cm、深さ32cmの規模で平面形は略円形である。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がり断面は箱形である。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒と微量の炭化物を含む黒褐色のシルト質土が主体で、ブロック状に黒色のシルト質土を含んでいる。

遺物（第339・348図、写真図版303・310）

〈土器〉 縄文時代後期中葉（2236）、晩期前葉（2237）の土器が出土している。

〈石製品〉 2443 は石製円盤である。

SD101 土坑

遺構（第 117 図、写真図版 130）

〈位置〉 B 調査区、HVI グリッドの中央部に位置している。

〈規模・形状〉 開口部 56 cm×54 cm、深さ 17 cm の規模で平面形は略円形である。底面は平坦で、壁は外傾気味に立ち上がり断面は浅皿状である。

〈埋土〉 埋土は炭化物・焼土を含む黒色～黒褐色のシルト質土である。

遺物（第 339 図、写真図版 303）

〈土器・土製品〉 2238 は頸部文様帯に 2 段の入組三叉文が施文された鉢である。頸部に緩やかな括れをもち口縁部は外反している。胴部には RL 縄文が施文され、底部は平底となっている。

SD102 土坑

遺構（第 117 図、写真図版 133）

〈位置〉 B 調査区、HVI グリッドに位置している。

〈規模・形状〉 開口部 70 cm×70 cm、深さ 27 cm の規模で平面形は円形である。底面は平坦で、壁は外傾気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は微量の炭化物・焼土を含む黒色のシルト質土である。

遺物（第 339 図、写真図版 303）

〈土器・土製品〉 2241 底面から胴部下半に LR 縄文が施文された深鉢である。2242 は口縁部外端に刻みを施された壺である。2243 は無文の深鉢である。

SD103 土坑

遺構（第 117 図、写真図版 130）

〈位置〉 B 調査区、HVI グリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SB04 掘立柱建物跡を構成する柱穴と重複しており、柱穴より古い。

〈規模・形状〉 開口部 188 cm×93 cm、深さ 11 cm の規模で平面形は小判形である。底面に密着した状態で屈葬状態の埋葬人骨が検出された。骨の残存状態は良好でなく、頭蓋骨・右の上腕骨・大腿骨の一部が残っている程度である。頭蓋骨部分から赤色顔料が検出された。土坑の長軸方位は N 36° W、膝の屈曲の角度は 27° である。

〈埋土〉 少量の黄褐色浮石細粒・焼土・炭化物を含む黒褐色のシルト質土である。

遺物 (第 339 図、写真図版 303)

〈土器〉 2244 は縄文時代晩期前葉の土器である。

SD104 土坑

遺構 (第 118 図、写真図版 130)

〈位置〉 B 調査区、HVII グリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉 推定で開口部 114 cm×68 cm、深さ 79 cm の規模で平面形は楕円形である。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がり断面形は筒形である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土である。

遺物 (第 340 図、写真図版 303)

〈土器〉 2245・2246 縄文時代後期中葉の土器が出土している。

SD105 土坑

遺構 (第 118 図、写真図版 130)

〈位置〉 B 調査区、HVI グリッドの西側に位置している。

〈規模・形状〉 開口部 108 cm×106 cm、深さ 61 cm の規模で平面形は略円形である。底面は平坦で、西壁は垂直気味に、東壁は外傾気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は焼土・炭化物を含む黒色～黒褐色のシルト質土である。

遺物 (第 340・346 図、写真図版 303・309)

〈土器・土製品〉 2247 は縄文時代後期後葉の土器である。2401 は焼成粘土である。

SD106 土坑

遺構 (第 118 図、写真図版 132)

〈位置〉 B 調査区、HVII グリッドの西側に位置している。

〈規模・形状〉 開口部 102 cm×64 cm、深さ 31 cm の規模で平面形は小判形である。壁は外傾気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は焼土・炭化物を含む黒色～黒褐色のシルト質土である。

遺物 出土していない。

SD107 土坑

遺構 (第 118 図、写真図版 131)

〈位置〉 B調査区、HVIグリッドの中央部に位置している。

〈規模・形状〉 開口部 86 cm×86 cm、深さ 23 cm の規模で平面形は円形である。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は風化の進んだ中礫浮石の二次堆積と考えられる黒色の砂質シルトである。

遺物 (第 340・348 図、写真図版 303・304・310)

〈土器〉 縄文が施文された深鉢が出土している。

〈石器〉 2442 は横型の石匙である。

SD108 土坑

遺構 (第 118 図、写真図版 131)

〈位置〉 B調査区、GVIグリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SD109 土坑の上位に位置しており、当遺構が新しい。

〈規模・形状〉 開口部 99 cm×99 cm、深さ 5 cm の規模で平面形は円形である。底面は平坦で、浅皿状である。土坑内の中央部からやや北側に寄った所から頭蓋骨と椎骨の一部が検出された。北頭位で顔面は西側を向いている。

〈埋土〉 埋土は炭化物・焼土を含んだ黒色のシルト質土であり、埋土の中位に層厚 1 cm の灰白粘土の薄層が見られる。

遺物 (第 340・346 図、写真図版 304・309)

〈出土状況〉 頭蓋骨の西側から頭蓋骨に接した状態で、深鉢形土器の下半部が倒立状態で出している。周囲から多数の円盤状土製品と円盤状石製品が出土している。

〈土器・土製品〉 縄文時代後期後葉 (2250)、晩期前葉 (2251・2252) が出土している。2402・2403 は焼成粘土である。

SD109 土坑

遺構 (第 118 図、写真図版 131)

〈位置〉 B調査区、GVIグリッドの東側に位置しており、一部が調査区外に延びている。

〈検出状況・重複関係〉 SD109 土坑の下位に位置しており、当遺構が古い。

〈規模・形状〉 推定で開口部 126 cm×84 cm、深さ 20 cm の規模で平面形は不整楕円形である。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がり断面形は播り鉢状である。

〈埋土〉 埋土は少量の炭化物・焼土を含んだ黒褐色～暗褐色のシルト質土である。

遺物 (第 340 図、写真図版 304)

〈土器〉 縄文時代後期後葉 (2253・2254) が出土している。

SD110 土坑

遺構（第 118 図、写真図版 132）

〈位置〉 B 調査区、G VI グリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 一部が調査区外に延びており全体については不明である。

〈規模・形状〉 推定で開口部 55 cm×41 cm、深さ 58 cm の規模で平面形は略円形である。底面は凹凸があり断面形はフラスコ形である。

〈埋土〉 全体に黄褐色浮石細粒を含むシルト質土で構成され、1 層には焼土・炭化物が含まれている。

遺物（第 346・348 図、写真図版 309・310）

〈土製品〉 2404 は棒状の土製品で胎土は精選されたものが使用されている。

〈石器〉 2444 は不定形石器である。

SD111 土坑

遺構（第 118 図、写真図版 132）

〈位置〉 B 調査区、G VI グリッドの北側に位置している。

〈規模・形状〉 開口部の規模 116 cm×106 cm・深さ 31 cm、平面形は円形である。壁は外傾気味に直線的に立ち上がり、断面形は箱形である。底面は水平である。

〈埋土〉 埋土は微量の炭化物・焼土・黄褐色浮石細粒を含んだ黒色～黒褐色のシルト質土である。

遺物（第 340 図、写真図版 304）

〈土器〉 2256～2258 は縄文時代後期中葉の土器である。

SD112 土坑

遺構（第 118 図）

〈位置〉 B 調査区、G VI グリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SD110 土坑の下位にあり、SD110 より古い。

〈規模・形状〉 開口部の規模 70 cm×60 cm・深さ 5 cm、平面形は円形である。壁は垂直気味に立ち上がり、断面形は箱形である。底面は水平である。

〈埋土〉 埋土は単層で黄褐色浮石細粒を含んだ黒褐色のシルト質土である。

遺物 出土していない。

SD113 土坑

遺構 (第 119 図、写真図版 132)

〈位置〉 B 調査区、HVII グリッドの北東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SD097 土坑の上位にあり、SD097 土坑より新しい。

〈規模・形状〉 開口部の規模 116 cm×112 cm・深さ 29 cm、平面形は円形である。壁は外傾して直線的に立ち上がっている。底面は水平である。

〈埋土〉 埋土は 3 層で構成され全体に炭化物・焼土を多量に含んだ黒褐色系のシルト質土が主体である。

遺物 出土していない。

SD114 土坑

遺構 (第 119 図、写真図版 132)

〈位置〉 B 調査区、HVII グリッドの南側に位置している。

〈規模・形状〉 開口部の規模 174 cm×162 cm・深さ 54 cm、平面形は略円形である。壁は垂直気味に立ち上がり、断面形は箱形である。底面は水平である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含んだ黒色のシルト質土が主体である。

遺物 (第 340・349 図、写真図版 304・310)

〈土器〉 RL 縄文が施文された深鉢が出土している。

〈石器〉 石鏃が 1 点 (2445) 出土している。

SD115 土坑

遺構 (第 119 図、写真図版 134)

〈位置〉 B 調査区、HVII グリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA50 住居跡と重複しており住居跡より新しい。

〈規模・形状〉 開口部の規模 70 cm×66 cm・深さ 24 cm、平面形は円形である。壁は外傾気味に立ち上がり、断面形は逆台形状である。底面は水平である。

〈埋土〉 埋土は黒色のシルト質土である。土坑内から人骨の頭部と思われる部分が出土している。

遺物 (第 340 図、写真図版 340)

〈土器〉 2260 は縄文時代後期前葉の土器である。

SD116 土坑

遺構 (第 119 図)

〈位置〉 B調査区、HVIIグリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA50 住居跡と重複しており住居跡より新しい。

〈規模・形状〉 開口部の規模 70 cm×69 cm・深さ 27 cm、平面形は円形である。壁は外傾して直線的に立ち上がり、断面形は逆台形状である。底面は水平である。

〈埋土〉 埋土は黒色のシルト質土である。

遺物 (第 340 図、写真図版 304)

〈土器〉 2262 は縄文時代後期後葉の土器である。

SD117 土坑

遺構 (第 119 図、写真図版 133)

〈位置〉 B調査区、HVIIグリッドの中央部に位置している。

〈規模・形状〉 開口部の規模 178 cm×146 cm・深さ 26 cm、平面形は小判形である。壁は外傾気味に立ち上がっている。底面は水平である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土である。

遺物 (第 340 図、写真図版 304)

〈土器〉 2264 は縄文時代晩期前葉の土器である。

SD118 土坑

遺構 (第 119 図、写真図版 133)

〈位置〉 B調査区、HVIIグリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SD119 土坑と重複し、SD119 より新しい。

〈規模・形状〉 開口部の規模 66 cm×56 cm・深さ 23 cm、平面形は略円形、断面形は浅皿状である。

〈埋土〉 埋土は明褐色のローム粒をブロック状に含む黒褐色系のシルト質土である。

遺物 (第 340 図、写真図版 304)

〈出土状況〉 埋土の最下部から炭化した栗が出土している。

〈土器・土製品〉 2266 は無文丸底の注口である。胴部の最大径に注口部と懸垂孔が付されている。

SD119 土坑

遺構 (第 119 図、写真図版 133)

〈位置〉 B調査区、HVIIグリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SD118 土坑と重複し、SD118 より古い。

〈規模・形状〉 開口部の規模 80 cm×78 cm・深さ 28 cm、平面形は円形である。壁は外傾気味に立ち上がっており、底面は水平である。

〈埋土〉 埋土はしまりのないやや砂っぽい黒色のシルト質土である。

遺物 (第 340 図、写真図版 304)

〈土器〉 2268 は 0 段多条の RL 縄文が施文された深鉢である。

SD120 土坑

遺構 (第 119 図、写真図版 133)

〈位置〉 B 調査区、HVII グリッドの北側に位置している。

〈規模・形状〉 開口部の規模 86 cm×80 cm・深さ 49 cm、平面形は円形、断面形は漏斗状である。

〈埋土〉 埋土は焼土・炭化物・黄褐色浮石細粒を含んだ黒色～黒褐色のシルト質土である。

遺物 (第 340 図、写真図版 304)

〈土器〉 2269 は縄文時代後期中葉の土器である。

SD121 土坑

遺構 (第 119 図、写真図版 134)

〈位置〉 B 調査区、HVII グリッドの南東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 一部調査区外に延びており、全体については不明である。

〈規模・形状〉 推定で、開口部の規模 120 cm×100 cm・深さ 32 cm、平面形は不整形、壁は外傾気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は炭化物を含んだ黒色の砂っぽいシルト質土である。

遺物 (第 341 図、写真図版 304)

〈土器〉 2271・2273 は縄文時代晩期前葉前半の土器である。

SD122 土坑

遺構 (第 120 図、写真図版 134)

〈位置〉 B 調査区、JVIII グリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA49 住居跡の上位で検出された。

〈規模・形状〉 開口部の規模 86 cm×68 cm・深さ 72 cm、平面形は略円形、壁は垂直気味に立ち上がり、底面は丸みをもっている。

〈埋土〉 黄褐色浮石細粒を含む暗褐色～黒褐色のシルト質土である。

遺物（第 341 図、写真図版 305）

〈土器〉 2275 は口縁部に不整綾線文が施文された土器である。

SD123 土坑

遺構（第 120 図、写真図版 134）

〈位置〉 B 調査区、I VIII グリッドの東側に位置している。

〈規模・形状〉 開口部の規模 108 cm×96 cm・深さ 19 cm、平面形は略円形、壁は外傾気味に立ち上がり、断面形は浅皿状で底面は水平である。

〈埋土〉 黄褐色浮石細粒・炭化物を含む黒色のシルト質土である。

遺物（第 341 図、写真図版 305）

〈土器〉 縄文時代前期前半（2276）、前期後半（2271・2279）、中期末葉（2278）、後期前葉（2280）、後期後葉（2281）の土器が出土している。

SD124 土坑

遺構（第 120 図、写真図版 134）

〈位置〉 B 調査区、I VIII グリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA42・43 住居跡を精査中に検出された。いずれの住居跡よりも新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉 開口部の規模 110 cm×104 cm・深さ 77 cm、平面形は略円形、壁は外傾気味に立ち上がり底面は水平である。

〈埋土〉 黄褐色浮石細粒・炭化物を含む黒色から黒褐色のシルト質土が主体であり、全体に汚れた黄褐色浮石細粒であり人為堆積と考えられる。

遺物（第 341・349 図、写真図版 305・310）

〈土器〉 縄文時代早期前葉の押型文と共伴する縄文と平行沈線文が施文された土器（2283）が出土している。

〈石器〉 石斧が 2 点（2446・2447）出土している。

SD125 土坑

遺構（第 120 図、写真図版 135）

〈位置〉 B 調査区、I VIII グリッドのほぼ中央部 SA42 住居跡内に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA42・43 住居跡を精査中に検出された。SA42 住居跡より古く、SD126 土坑より新しい。

〈規模・形状〉 開口部の規模 150 cm×146 cm・深さ 17 cm、平面形は円形・断面形はフラスコ形、壁は内傾気味に立ち上がり底面は水平である。フラスコ形土坑の下部が残存したものである。

〈埋土〉 黄褐色浮石細粒・炭化物を含む黒褐色～極黒褐色のシルト質土が主体である。

遺物 (第 341 図、写真図版 305)

〈土器〉 縄文時代後期前葉の土器が出土している。2287 は反転平行沈線文が施文された浅鉢である。

SD126 土坑

遺構 (第 120 図、写真図版 135)

〈位置〉 B 調査区、I VIII グリッドのほぼ中央部 SA42 住居跡内に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA42 住居跡を精査中に検出された。SA42 住居跡・SD125 土坑より古い。

〈規模・形状〉 開口部の規模 166 cm×164 cm・深さ 27 cm、平面形は円形・断面形はフラスコ形、壁は内傾気味に立ち上がり底面は水平である。フラスコ形土坑の下部が残存したものである。

〈埋土〉 少量の黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土である。

遺物 (第 341・349 図、写真図版 305・310)

〈土器〉 2287 は反転平行沈線文が施文された浅鉢である。

〈石器〉 石鏃が 1 点 (2448) 出土している。

SD127 土坑

遺構 (第 120 図、写真図版 135・136)

〈位置〉 B 調査区、J IX グリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA78 住居跡より新しい。

〈規模・形状〉 開口部の規模 155 cm×70 cm・深さ 37 cm、平面形は長楕円形・長軸方向の断面形は逆台形、壁は外傾気味に立ち上がり底面は水平である。開口部の長軸方向東端部分に頭大の垂円礫が 1 個検出されている。土坑の内部から頭位方向を違え上下に重なった 2 体の埋葬人骨が検出されている。2 体とも骨の劣化が著しく部分的に残存している状況である。上位にある人骨は頭蓋骨・椎骨・腰骨が残存しており、東頭位・北顔で屈葬状態を示している。下位に位置する人骨は底面に密着した状態で頭蓋骨と椎骨部分が検出されており、西頭位・北顔と推定される。両者の埋葬人骨の間には若干の埋土が認められるが、2 体を同時に埋葬したと考えられる。両者とも顔料等の付着は認められなかった。

〈埋土〉 少量の黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土である。

遺物 (第 341・346 図、写真図版 305・309)

〈土器・土製品〉 2290 は無文の注口の底部である。その他、縄文時代後期中葉 (2291・2292) が出土している。2405 は球状土製品つまみ部である。横方向に貫通孔がみられ、つまみ部上面に 1 条の沈線が見られる。LR 縄文が施文されている。2406 は耳飾りである。これらの遺物と人骨の関係については不明である。

SD128 土坑

遺構 (第 121 図、写真図版 136)

〈位置〉 B 調査区の J IX グリッドと J VIII グリッドの境界付近に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 土坑の南西側はパイプの布設溝で壊されている。

〈規模・形状〉 平面形は略円形で、断面形は箱形である。推定、開口部で 94 cm×86 cm、深さ 40 cm の規模をもつ。底面は水平で壁は垂直気味に立ち上がっている。土坑内から底面に付着した状態の 20 cm 大の亜角礫が 10 個前後と石とほぼ同じ層から土坑の東側部分にはほぼ 1 個体分の土器が折り重なるような状態で出土している。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石を含む黒褐色のシルト質土で構成されている。

遺物 (第 341・349 図、写真図版 305・310)

〈土器〉 縄文時代後期前葉 (2293) の土器が出土している。

〈石器〉 2449 は稜線の一部に磨面が見られる。

SD129 土坑

遺構 (第 121 図、写真図版 136)

〈位置〉 B 調査区、J IX グリッドのほぼ中央部に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA70 住居跡より新しい。

〈規模・形状〉 開口部の規模 82 cm×76 cm・深さ 86 cm、平面形は円形・断面形は筒形、壁は垂直気味に立ち上がり底面は水平である。

〈埋土〉 埋土上半は少量の黄褐色浮石細粒・焼土・炭化物を含む黒色～黒褐色のシルト質土、下半は黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土である。人為堆積である。

遺物 (第 342・346・349 図、写真図版 305・309・310)

〈土器・土製品〉 縄文時代前期前半 (2295)、前期後半 (2297) が出土している。2407 A・2407 B は焼成粘土である。2408 は土偶の肩部である。沈線文と異種原体による非結束羽状縄文が施されている。2409 は土製円盤である。2410 は無文のミニチュア壺である。

〈石器〉 2450 は直線部に磨面が見られる半円状偏平打製石器である。

SD130 土坑

遺構 (第 121 図、写真図版 136)

〈位置〉 B 調査区、J IX グリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA74・SA75 住居跡と重複しておりいずれの住居跡よりも古い。

〈規模・形状〉 平面形は正円に近く断面形は箱形である。規模は開口部で 142 cm×142 cm、深さ 28 cm である。北東壁と西壁の一部が抜根により破壊を受けている。床面は水平で、壁は外傾気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒混じりの黒褐色のシルト質土構成されている。

遺物 (第 342・346 図、写真図版 305・306・309)

〈土器・土製品〉 2298 は胴部に縄の束が押捺された深鉢の下半である。底部付近には横位の綾線文が施文されている。2299 は LR 縄文が施文された壺である。頸部に軽い段が認められる。2411 は環状土製品で、内側を除いた外面はていねいに磨かれている。2412 は無文のミニチュアの台付鉢である。2300～2303 は縄文時代後期最終末から晩期前葉前半の時期である。

SD131 土坑

遺構 (第 121 図、写真図版 136・137)

〈位置〉 B 調査区、J IX グリッドの南西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉 開口部の規模 124 cm×110 cm・深さ 30 cm、平面形は円形・断面形は逆台形形、壁は外傾気味に立ち上がり底面は水平である。土坑との関係は不明であるが底面に密着した状態で頭大の亜角礫が出土している。

〈埋土〉 埋土は少量の黄褐色浮石細粒・炭化物を含む黒褐色のシルト質土である。

遺物 (第 342・346 図、写真図版 306・309)

〈土器・土製品〉 縄文時代前期前半 (2304・2305)、後期後半 (2307・2308) の土器が出土している。2413 は土製円盤である。

SD132 土坑

遺構 (第 121 図、写真図版 137・138)

〈位置〉 B 調査区の I IX グリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 土坑の上部はパイプの布設溝で破壊を受けている。

〈規模・形状〉平面形は略円形で、断面形はフラスコ形である。規模は開口部で160 cm×160 cm、底面で170 cm×174 cm、深さ84 cmである。底面はほぼ水平であり、壁は上端から20 cm付近まで垂直に下がり、裾広がりのように両端に入り込んでいる。

〈埋土〉埋土の上面は黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土で構成されレンズ状の堆積状況を示している。埋土中部には投棄されたと考えられる灰白色粘土・焼土等が見られる。焼土より下部の層は黄褐色粘土・黄褐色浮石混じりの黒褐色のシルト質が堆積しており、これらは他の遺構を構築した際の廃土と考えられる。層の堆積状況から東側から投棄されたとと思われる。

遺物（第342・343・347・349図、写真図版306・309～311）

〈土器・土製品〉縄文時代前期前半（2311～2313・2320・2321）、後期中葉（2308～2310・2314～2319）の土器が出土している。2414はスタンプ形土製品である。つまみ部には横方向の貫通孔が見られる。印面部分は円形で沈線で双眼状の文様が施文されている。

〈石器・石製品〉稜線上に磨面を持つ磨石1点（2451）、石匙1点（2453）、両面加工の不定形石器1点（2452）、石皿1点（2461）が出土している。

SD133 土坑

遺構（第121図、写真図版137）

〈位置〉B調査区、IⅨグリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA67住居跡状遺構の床面を精査中に検出された。住居跡状遺構より古い。複数の土坑の重複とも考えられる。

〈規模・形状〉開口部の規模164 cm×108 cm・深さ16 cm、平面形は不整形・断面形は浅皿状、壁は外傾気味に立ち上がり底面は水平である。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒・炭化物・焼土を含む黒色のシルト質土である。

遺物 出土していない。

SD134 土坑

遺構（第122図、写真図版137）

〈位置〉B調査区、IⅨグリッドの南側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA64住居跡より古い。

〈規模・形状〉推定で開口部の規模54 cm×52 cm・深さ46 cm、平面形は円形・断面形は筒形、壁は垂直気味に立ち上がっている。

〈埋土〉埋土は黄褐色浮石細粒を含む黒色のシルト質土である。

遺物（第343図、写真図版306）

〈土器〉 2322 は頸部無文の深鉢である。

SD135 土坑

遺構 (第 122 図、写真図版 137)

〈位置〉 B 調査区、I IX グリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA66 住居跡より新しい。

〈規模・形状〉 開口部の規模 62 cm×62 cm・深さ 32 cm、平面形は円形・断面形は箱形、壁は外傾気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は黒褐色のシルト質土である。

遺物 (第 343 図、写真図版 307)

〈土器〉 縄文時代後期後葉 (2324)、晩期前葉 (2323) が出土している。

SD136 土坑

遺構 (第 122 図、写真図版 138)

〈位置〉 B 調査区の I IX グリッドの南西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA64 住居跡・SD137 土坑よりも新しい。

〈規模・形状〉 平面形は円形で、断面形は箱形である。開口部で 80 cm×74 cm、深さ 20 cm の規模をもつ。底面は水平で壁は垂直に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石を含む黒褐色のシルト質土で構成されている。

遺物 (第 343 図、写真図版 307)

〈土器〉 縄文時代後期後半の土器が出土している。

SD137 土坑

遺構 (第 122 図、写真図版 138)

〈位置〉 B 調査区の I IX グリッドの南西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SD136 土坑よりも古い。

〈規模・形状〉 平面形は円形で、断面形は筒形である。推定で開口部で 72 cm×72 cm、深さ 44 cm の規模をもつ。底面は水平で壁は垂直に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石・微量の焼土を含む黒褐色のシルト質土で構成されている。埋土の中部から頭大の熱を受けた亜円礫が数個出土している。これらの礫は特に意識的に組み合わせたというような状況ではなかった。

遺物 (第 343・350 図、写真図版 307・311)

〈土器〉 縄文時代前期前半 (2328)、後期中葉 (2327) が出土している。

〈石器〉 石鏃が1点 (2454) 出土している。

SD138 土坑

遺構 (第 122 図、写真図版 138)

〈位置〉 B調査区の IIXグリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA61 住居跡より新しい。土坑上部の東側はパイプの布設溝で破壊を受けている。

〈規模・形状〉 平面形は円形で、断面形は筒形である。開口部で 90 cm×84 cm、深さ 84 cm の規模をもつ。底面は水平で壁は垂直に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石・微量の焼土・炭化物を含む黒色～黒褐色のシルト質土で構成されており、全体にしまりがない。埋土最下部は多量の黄褐色浮石細粒を含み非常に堅緻である。

遺物 (第 343・347 図、写真図版 307・309)

〈土器・土製品〉 縄文時代前期前半 (2329)、後期前葉 (2330)、後期中葉から後葉 (2331～2334) が出土している。2415 は土製円盤である。

SD139 土坑

遺構 (第 122 図、写真図版 139)

〈位置〉 B調査区の HIXグリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SD145 土坑より新しい。

〈規模・形状〉 推定で、平面形は円形で、断面形は箱形である。規模は開口部で 108 cm×106 cm、深さ 38 cm である。底面はほぼ水平で、壁は垂直気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は微量の焼土・黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質～シルト質粘土で構成されている。

遺物 (第 343 図、写真図版 307)

〈土器〉 縄文時代晩期中葉の土器が出土している。

SD140 土坑

遺構 (第 122 図、写真図版 139)

〈位置〉 B調査区の HIXグリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA60 住居跡より古い。

〈規模・形状〉 平面形は楕円形で、断面形は筒形である。規模は開口部で 82 cm×66 cm、深さ

55 cm である。底面はすり鉢状、壁は垂直気味に立ち上がっている。

〈埋土〉埋土は微量の焼土・炭化物・黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土が主体である。

遺物（第 343 図、写真図版 307）

〈土器〉縄文時代前期後半の土器が出土している。

SD141 土坑

遺構（第 122 図、写真図版 139）

〈位置〉B 調査区の HIX グリッドの西側に位置している。

〈規模・形状〉平面形は円形で、断面形はすり鉢状である。規模は開口部で 72 cm×72 cm、深さ 27 cm である。壁は外傾気味に立ち上がっている。

〈埋土〉埋土は少量の黄褐色浮石細粒を含む黒色のシルト質土である。

遺物（第 343 図、写真図版 307）

〈土器〉2340 は燃糸文が施文されている。

SD142 土坑

遺構（第 122 図、写真図版 139）

〈位置〉B 調査区の HIX グリッドのほぼ中央部に位置している。

〈規模・形状〉平面形は円形で、断面形はすり鉢状である。規模は開口部で 58 cm×56 cm、深さ 41 cm である。壁は垂直気味に立ち上がっている。

〈埋土〉埋土は少量の黄褐色浮石細粒を含む黒色のシルト質土が主体で、埋土上部には微量の焼土・炭化物が含まれている。

遺物（第 343 図、写真図版 307）

〈土器〉縄文時代後期後葉の土器が出土している。

SD143 土坑

遺構（第 123 図、写真図版 140）

〈位置〉B 調査区、HIX グリッドの SA60 住居跡内に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SA60 住居跡の床面精査中に検出され、住居跡より古い。

〈規模・形状〉平面形は円形で、断面形はすり皿状である。規模は開口部で 104 cm×96 cm、深さ 20 cm である。

〈埋土〉埋土は少量の黄褐色浮石細粒を含む黒色のシルト質土が主体で、埋土上部には微量の

焼土が含まれている。

遺物（第 344 図、写真図版 307）

〈土器〉 2343 は異種原体による非結束羽状縄文が施文された曲折状文である。

SD144 土坑

遺構（第 123 図、写真図版 140）

〈位置〉 B 調査区、HIXグリッドの SA60 住居跡内に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA60 住居跡の床面精査中に検出され、住居跡より古い。

〈規模・形状〉 平面形は円形で、断面形は皿状である。規模は開口部で 110 cm×96 cm、深さ 15 cm である。

〈埋土〉 埋土は少量の黄褐色浮石細粒を含む黒色のシルト質土が主体である。

遺物（第 344 図、写真図版 307）

〈土器〉 2345 は縄文時代後期後葉の土器である。

SD145 土坑

遺構（第 123 図、写真図版 140）

〈位置〉 B 調査区、HIXグリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SD139 土坑より古い。

〈規模・形状〉 推定で平面形は円形で、断面形はフラスコ形である。規模は開口部で 56 cm×56 cm、深さ 39 cm である。フラスコ形土坑の一部と考えられる。

〈埋土〉 埋土は少量の黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土が主体で、最下部はシルト質の粘土で非常に堅緻である。

遺物（第 344 図、写真図版 307）

〈土器〉 2345・2346 は縄文時代後期後葉の土器である。

SD146 土坑

遺構（第 123 図、写真図版 140）

〈位置〉 B 調査区、HIXグリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SD147 土坑より新しい。

〈規模・形状〉 平面形は円形で、断面形は筒形である。規模は開口部で 56 cm×56 cm、深さ 41 cm である。底面は凹凸があり、壁は垂直気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は少量の焼土・黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土である。

遺物 (第 344 図、写真図版 307)

〈土器〉 2348 は結束羽状縄文が施文されている。

SD147 土坑

遺構 (第 123 図、写真図版 141)

〈位置〉 B 調査区、HIXグリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SD146 土坑より古い。

〈規模・形状〉 平面形は略円形、断面形は皿形、規模は開口部で 90 cm×82 cm・深さ 32 cm である。底面はくぼみ、壁は緩やかに立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は多量の黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土である。

遺物 (第 344 図、写真図版 307)

〈土器〉 2349 は LR 縄文が施文されている。

SD148 土坑

遺構 (第 123 図、写真図版 141)

〈位置〉 B 調査区、HIXグリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SD151 土坑より古い。

〈規模・形状〉 ごく一部を検出したのみで全体については不明である。

〈埋土〉 埋土は少量の黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土である。

遺物 出土していない。

SD149 土坑

遺構 (第 123 図、写真図版 141)

〈位置〉 B 調査区、HIXグリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 調査区外に延びており一部を検出したのみである。

〈規模・形状〉 開口部幅 100 cm、底面幅 50 cm・深さ 30 cm の溝状の遺構である。約 1 m ほどを検出したのみで自然に消滅している。底面は水平で、壁は外傾気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は少量の黄褐色浮石細粒を含む黒褐色の砂っぽいシルト質土である。

遺物 (第 344 図、写真図版 307)

〈土器〉 2350・2351 は RL 縄文が施文されている。

SD150 土坑

遺構 (第 123 図、写真図版 141)

〈位置〉 B 調査区、HIXグリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA65 住居跡より古い。

〈規模・形状〉 平面形は円形で、断面形は鉢状である。規模は開口部で 56 cm×54 cm、深さ 46 cm である。底面はすり鉢状、壁は外傾気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は焼土・黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土である。

遺物 (第 344・347 図、写真図版 307・309)

〈土器・土製品〉 2350 は無文の壺である。2416 は中実土偶の左腕と思われる。

SD151 土坑

遺構 (第 123 図、写真図版 142)

〈位置〉 B 調査区、HIXグリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SD148 土坑より新しい。

〈規模・形状〉 平面形は小判形で、断面形は箱形である。規模は開口部で 90 cm×56 cm、深さ 16 cm である。底面は水平で、壁は外傾気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は少量の黄褐色浮石細粒を含む砂っぽい黒色のシルト質土である。

遺物 (第 344 図、写真図版 307)

〈土器〉 2353 は細密な LR 縄文が施文されている。

SD152 土坑

遺構 (第 124 図、写真図版 142)

〈位置〉 B 調査区、HIXグリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉 平面形は円形で、断面形は筒形である。規模は開口部で 58 cm×56 cm、深さ 60 cm である。底面は南側に向かい高くなっており、壁は垂直気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は少量の黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土である。

遺物 (第 344 図、写真図版 307)

〈土器〉 2354 は縦位・横位撚糸文が施文されている。

SD153 土坑

遺構 (第 124 図、写真図版 142)

〈位置〉 B調査区、K Xグリッドの北側に位置する。

〈規模・形状〉 平面形は円形で、断面形は箱形である。規模は開口部で 94 cm×88 cm・深さ 44 cm である。底面は水平で壁は外傾気味に立ち上がっている。底面には拳大～頭大の礫が数個認められ、特に赤色顔料の塗布された偏平な礫が土坑底面に密着した状態で検出されている。

〈埋土〉 埋土は単層で黄褐色浮石細粒が混じる黒色のシルト質土で構成されている。

遺物 (第 344・345・350 図、写真図版 308・309・311)

〈土器〉 2355 は赤色塗彩の痕跡の残る壺である。胴部最大径を肩付近にもちこの部位に懸垂孔が 2 個付されている。肩部より下半には渦巻状の文様が展開している。他に縄文前期前半(2357)、後期後葉(2356)が出土している。2387 は 0 段多条の RL 縄文が施文された深鉢である。口唇部は平坦に調整されている。

〈石器〉 石鏃が 1 点(2455)、赤色顔料が塗布された偏平な礫(2463)が出土している。

SD154 土坑

遺構 (第 124 図、写真図版 142)

〈位置〉 B調査区、K Xグリッドの北西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 斜面下方である南壁はすべて失われている。

〈規模・形状〉 平面形は略円形、開口部で 148 cm×134 cm・深さ 16 cm の規模をもつ略円形で、断面形は浅皿形である。壁は外傾気味に立ち上がり、底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒が混じった黒色のシルト質土が主体である。

遺物 (第 344 図、写真図版 308)

〈土器〉 2358 は RL 縄文が施文された深鉢である。

SD155 土坑

遺構 (第 124 図、写真図版 143)

〈位置〉 B調査区、K Xグリッドの東側に位置している。

〈規模・形状〉 平面形は略円形、断面形はフラスコ形、開口部で 84 cm×80 cm・深さ 36 cm の規模である。底面は平坦である。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石細粒が混じった黒褐色のシルト質土が主体である。

遺物 出土していない。

SD156 土坑

遺構 (第 124 図、写真図版 143)

〈位置〉 B調査区の J X グリッドに位置している。

〈規模・形状〉 平面形は楕円形で、断面形は皿形である。開口部で 126 cm×76 cm、深さ 24 cm の規模をもつ。底面は水平で壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黄褐色浮石を含む黒褐色のシルト質土を主体に構成されている。埋土の中部に拳大から頭大の亜円礫が十数個見られる。

〈埋土〉 黄褐色浮石細粒・焼土を含んだ黒褐色のシルト質土である。

遺物 (第 344 図、写真図版 308)

〈土器〉 2359 は縄文時代早期の押型文、2360 は晩期前葉の土器である。

SD157 土坑

遺構 (第 124 図、写真図版 143)

〈位置〉 B調査区の J X グリッドの西側に位置している。

〈規模・形状〉 平面形は不整形で、断面形は箱形である。推定で開口部 136 cm×132 cm、深さ 32 cm の規模をもつ。底面はほぼ水平であるが東側部分が若干下がっている。壁は外傾気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は少量の黄褐色浮石・炭化物・焼土を含む黒褐色のシルト質土で構成されている。

遺物 (第 344 図、写真図版 308)

〈土器〉 縄文時代前期前半 (2364・2365)、後期後葉 (2361~2383) の土器が出土している。

SD158 土坑

遺構 (第 124 図、写真図版 143)

〈位置〉 B調査区の I X グリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA83 住居跡より新しい。

〈規模・形状〉 平面形は円形で、断面形は箱形である。推定で開口部 64 cm×64 cm、深さ 34 cm の規模をもつ。底面はほぼ水平で、壁は垂直気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は少量の黄褐色浮石・炭化物・焼土を含む黒褐色のシルト質土で構成されている。

遺物 (第 344・347 図、写真図版 308)

〈土器・土製品〉 2366 は縄文時代後期中葉の粗製深鉢、2367 は中期前半の土器と思われる。2417 は焼成粘土である。

SD159 土坑

遺構 (第 125 図、写真図版 144)

〈位置〉 B調査区の I X グリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA77 住居跡よりも新しい。

〈規模・形状〉 土坑の中央部はパイプの布設溝で壊されている。平面形は円形で、断面形は箱形である。開口部で 106 cm×102 cm、深さ 30 cm の規模をもつ。底面は水平で壁は垂直気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は黄褐色浮石を含む黒色のシルト質土で構成されており、全体にしまりがなく軟らかい。

遺物（第 344・347 図、写真図版 308・309）

〈土器・土製品〉 縄文時代前期後半（2369）、後期後葉（2368・2370）の土器が出土している。2418・2419 は土製円盤で、2419 は中央付近まで打ち欠かれている。2420 は焼成粘土である。

SD160 土坑

遺構（第 124 図）

〈位置〉 B 調査区の H X グリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA63 住居跡よりも古い。

〈規模・形状〉 平面形は円形で、断面形は箱形である。開口部で 66 cm×64 cm、深さ 28 cm の規模をもつ。底面は水平で壁は垂直気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は少量の黄褐色浮石を含む黒色のシルト質土である。

遺物（第 344 図、写真図版 308）

〈土器〉 2371 は LR 縄文が施文された深鉢である。2372 は頸部無文の深鉢である。

SD161 土坑

遺構（第 125 図、写真図版 144）

〈位置〉 B 調査区の H X グリッドの北西側に位置している。

〈規模・形状〉 平面形は円形で、断面形は箱形である。開口部で 72 cm×66 cm、深さ 36 cm の規模をもつ。底面は凹凸があり、壁は垂直気味に立ち上がっている。埋土最上部に拳大の礫が数個認められた。

〈埋土〉 埋土は少量の黄褐色浮石を含む黒色～黒褐色のシルト質土である。

遺物（第 345 図、写真図版 308）

〈土器〉 2373 は結束羽状縄文が施文されている。2374～2376 は縄文時代後期後葉の特徴をもつ土器である。

SD162 土坑

遺構 (第 125 図、写真図版 144)

〈位置〉 B 調査区の H X グリッドのほぼ中央部に位置している。

〈規模・形状〉 平面形は略円形で、断面形は筒形である。開口部で 58 cm×54 cm、深さ 38 cm の規模をもつ。底面は凹凸があり、壁は垂直気味に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は黒色のシルト質土であり、黄褐色の粘土をブロック状に含んでいる。

遺物 (第 345 図、写真図版 308)

〈土器〉 2377 は地文が LR 縄文で横位の平行沈線文が施文されている。

SD163 土坑

遺構 (第 125 図、写真図版 144)

〈位置〉 B 調査区の J XI グリッドの北西側、沢に下る斜面の傾斜変換点付近に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SD164 土坑と重複しており、この土坑よりも古く位置づけられる。

〈規模・形状〉 推定で、平面形は円形で径 100 cm 程度である。底面はほぼ水平で、壁は垂直に立ち上がっている。

〈埋土〉 埋土は、黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質～砂質シルトを主体としており、全体にしまりがなく軟らかい。

遺物 出土していない。

SD164 土坑

遺構 (第 125 図、写真図版 144)

〈位置〉 B 調査区の J XI グリッドの北西側、沢に下る斜面の傾斜変換点付近に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SD163 土坑と重複しており、この土坑よりも新しく位置づけられる。

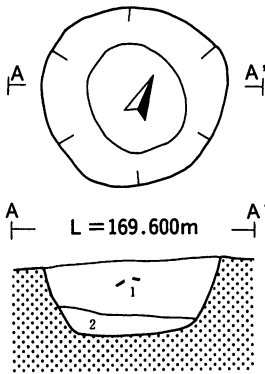
〈規模・形状〉 平面形は隅丸長方形で、断面形箱形である。規模は 150 cm×114 cm、深さ 64 cm の規模である。

〈埋土〉 埋土は、黄褐色浮石細粒を含む黒色～黒褐色のシルト質土を主体としており、全体にしまりがなくやわらかである。底面は斜面上方である東側のほうが若干くぼんでおり、壁は四周ともほぼ垂直に立ちあがっている。遺構を確認した段階で埋土の上部に頭大～50 cm 大の垂角礫が数個認められたが当遺構との関係は不明である。

遺物 (第 345・351 図、写真図版 308・311)

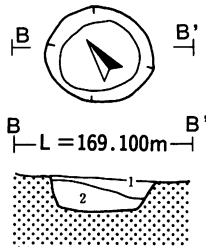
〈土器〉 縄文時代後期中葉・後葉 (2380・2381)、晩期前葉 (2383)、弥生時代前半 (2379)、中期 (2382) の土器が出土している。

〈石製品〉 磨石が1点（2465）出土している。



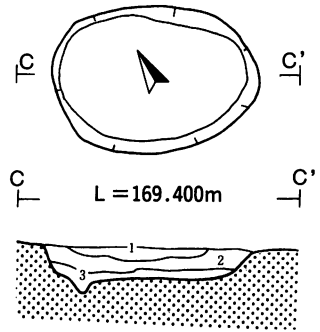
SD001

- 10YR1.7/1 黒色シルト
φ10mm±の黄褐色浮石細粒微量含む。
- 10YR1.7/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒1層より多い。



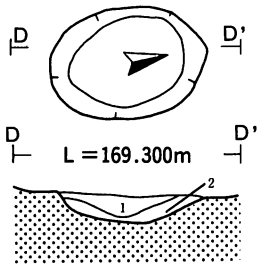
SD002

- 10YR2/2 黒褐色シルト
黄褐色浮石細粒微量含む。
- 10YR3/3 黒褐色シルト
汚れた黄褐色浮石細粒多量含む。



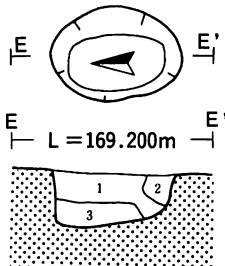
SD003

- 10YR2/2 黒褐色シルト
- 10YR3/3 暗褐色シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。
- 7.5YR7/6 橙色浮石



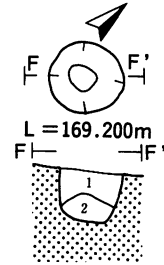
SD004

- 10YR1.7/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒少量含む。
- 10YR2/2 黒褐色シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。



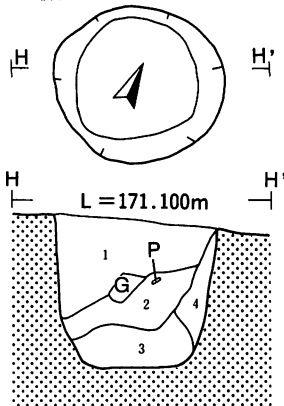
SD005

- 10YR1.7/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒少量含む。
- 10YR2/2 黒褐色浮石
汚れた南部浮石。
- 10YR2/1 黒色シルト
軟らかい。



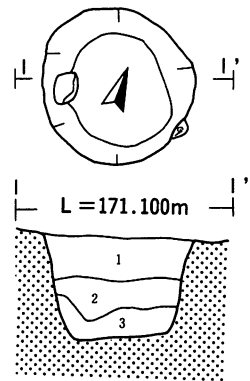
SD006

- 10YR2/1 黒色シルト
φ5mm±の黄褐色浮石細粒少量含む、軟。
- 10YR1.7/1 黒色シルト
灰白色粘土ブロック状に含む、軟。



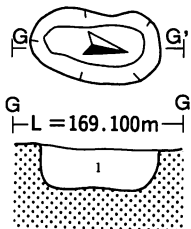
SD008

- 10YR1.7/1 黒色シルト
炭化物微量、φ2mmの黄褐色浮石細粒多量含む。
- 10YR1.7/1 黒色シルト
1層より黄褐色浮石細粒少ない。
- 10YR1.7/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。
- 10YR1.7/1 黒色シルト
2層に類似、浮石2層より少ない。



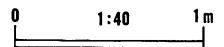
SD009

- 10YR1.7/1 黒色シルト
φ5mmの黄褐色細粒多量含む。
- 10YR1.7/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒ほとんど含まない。
- 10YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒少量含む。

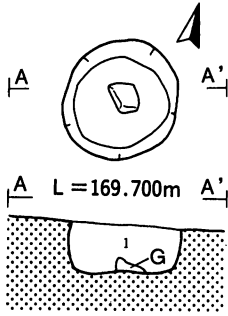


SD007

- 10YR1.7/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒少量・炭石微量、
灰白色粘土ブロック状に含む。

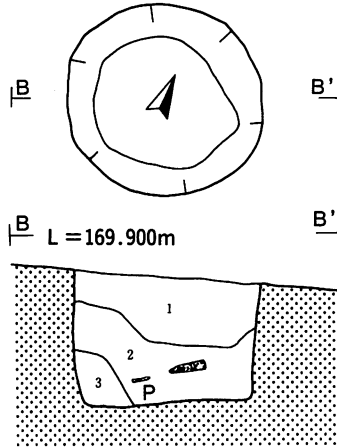


第105図 土坑類 (1)



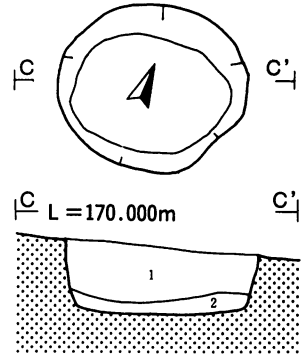
SD010

- 10YR1.7/1 黒色シルト
炭化物・黄褐色浮石細粒少量含む。



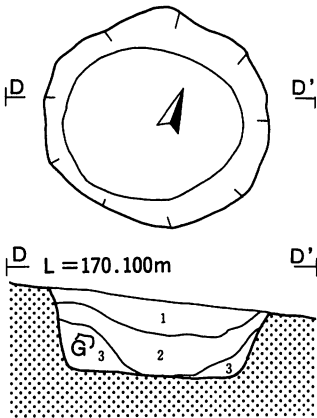
SD011

- 10YR1.7/1 黒色シルト
φ3~5mmの黄褐色浮石細粒多量含む。
- 10YR1.7/1 黒色シルト
- 10YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒大量含む。



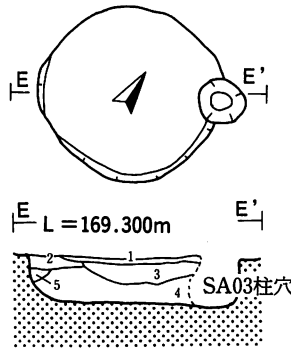
SD012

- 10YR1.7/1 黒色シルト
φ5~10mmの黄褐色浮石細粒散在。
- 10YR2/1 黒色シルト
小礫を多量に含む。



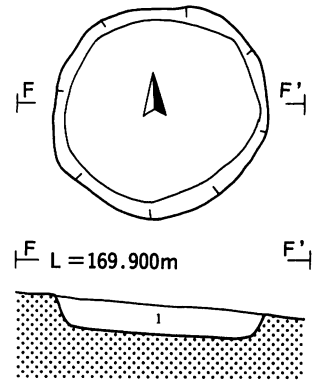
SD013

- 10YR1.7/1 黒色シルト
砂っぽい
- 10YR1.7/1 黒色シルト
φ10mm黄褐色浮石細粒の少量含む。
- 10YR1.7/1 黒色シルト



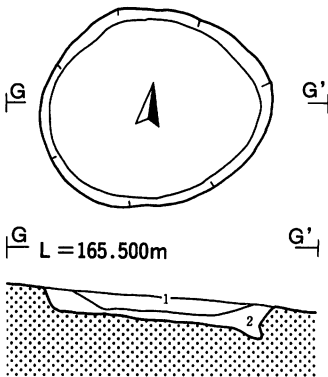
SD015

- 10YR2/2 黒褐色シルト SA03住居跡炉灰含む。
- 10YR1.7/2 黒色シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
- 10YR5/6 明褐色シルト SA03住居跡炉灰土。
- 10YR1.7/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒微量含む。
- 10YR1.7/1 黒色シルト 汚れた黄褐色浮石細粒含む。



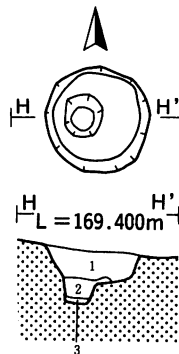
SD016

- 10YR2/2 黒褐色シルト
黄褐色浮石細粒少量含む。



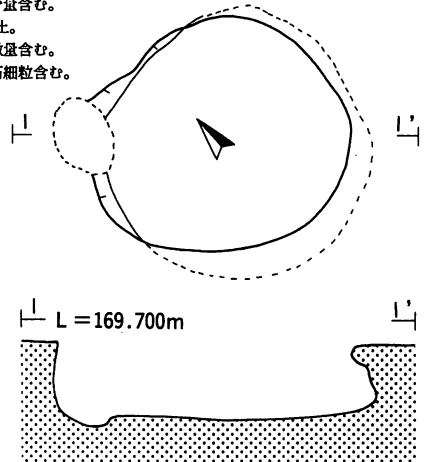
SD017

- 10YR2/2 黒褐色シルト
黄褐色浮石細粒少量含む。
- 10YR2/2 黒褐色シルト
黄褐色浮石細粒少量含む。



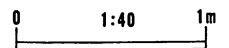
SD018

- 10YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
- 10YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒微量含む。
- 10YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。

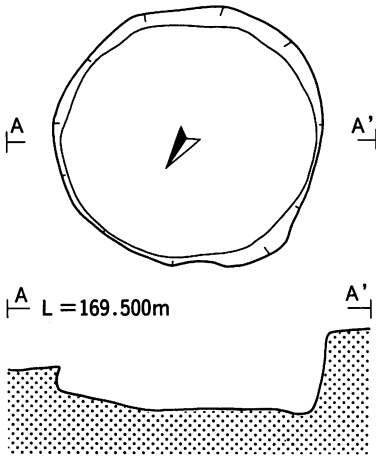


SD019

- 10YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒含む。

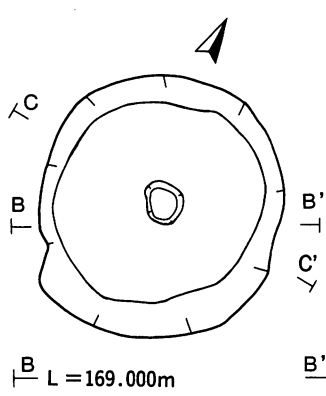


第106図 土坑類(2)

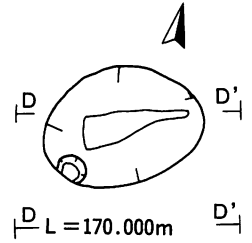
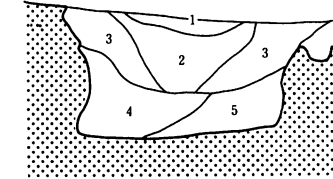


SD020

- 10YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒含む。



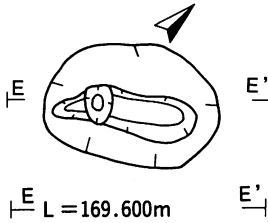
L = 169.000m



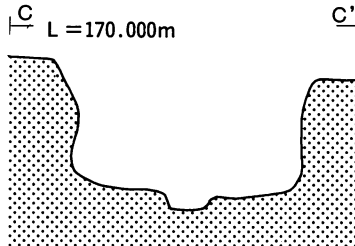
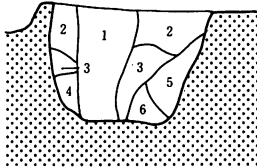
L = 170.000m

SD022

- 10YR3/3 暗褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。
- 10YR5/8 黄褐色 浮石
汚れた黄褐色浮石。



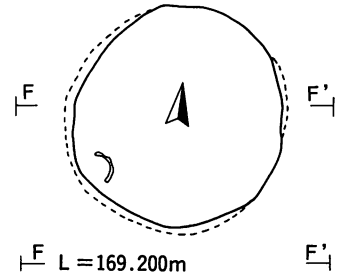
L = 169.600m



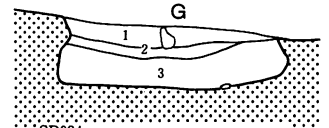
L = 170.000m

SD021

- 10YR2/1 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
- 10YR2/2 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒含む。
- 10YR1.7/1 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
- 10YR1.7/1 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
- 10YR2/1 黒褐色 シルト しまりなし、やわらかい。



L = 169.200m

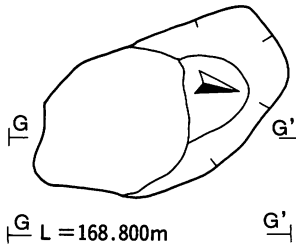


SD024

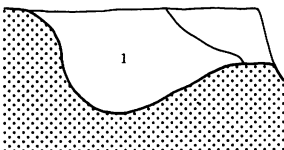
- 10YR2/1 黒色 シルト
黄褐色浮石細粒少量含む。
- 10YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒少量含む。
- 10YR2/1 黒色 シルト
黄褐色浮石細粒含少量含む。

SD023

- 10YR3/2 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒含む。
- 10YR3/2 黒褐色 シルト 黄褐色浮石細粒含む。
- 10YR3/3 暗褐色 シルト 黄褐色浮石細粒含む。
- 10YR5/8 黄褐色 シルト 汚れた黄褐色浮石細粒。
- 10YR3/4 暗褐色 シルト 黄褐色浮石細粒多量含む。
- 10YR3/3 暗褐色 シルト

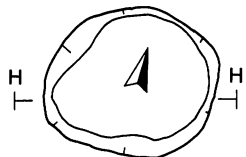


L = 168.800m



SD025

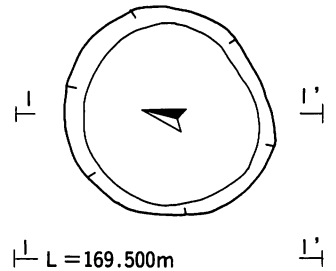
- 10YR3/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。



L = 169.800m



SD026

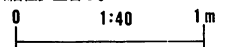


L = 169.500m

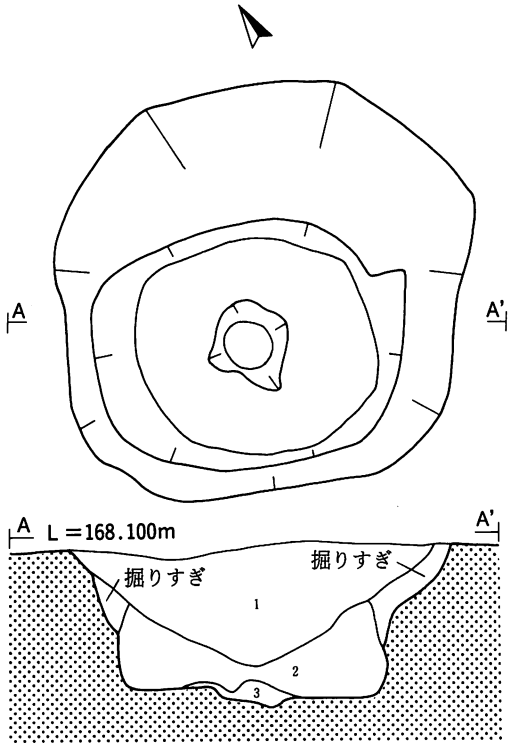


SD029

- 10YR1.7/1 黒色 シルト
黄褐色浮石細粒少量含む。

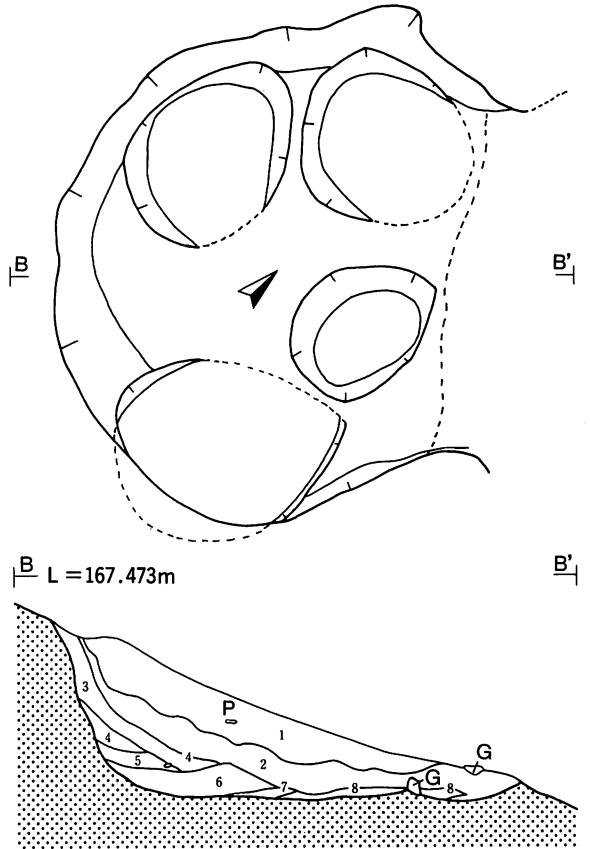


第107図 土坑類(3)



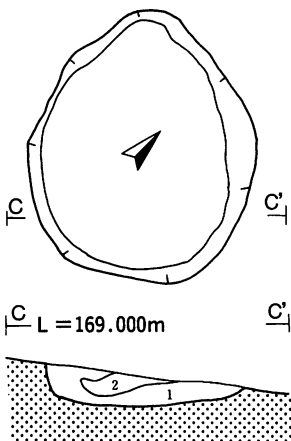
SD027

1. 10YR1.7/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。
2. 10YR2/1 黄褐色シルト
黄褐色浮石細粒主体、黒色シルト質土帯状に含む。
3. 10YR3/3 暗褐色シルト



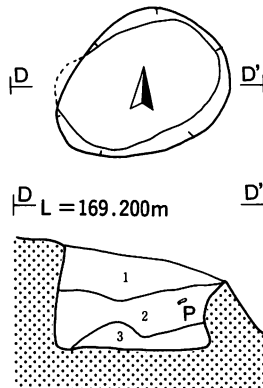
SD028

- | | | |
|------------|----------|-------------------|
| 1. 10YR2/1 | 黒色シルト | 黄褐色浮石細粒少量含む。 |
| 2. 10YR2/1 | 黒色シルト | 1層より黄褐色浮石細粒多く含む。 |
| 3. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | 褐色シルト質土ブロック状に含む。 |
| 4. 10YR4/6 | 褐色シルト | 黒褐色シルト質土ブロック状に含む。 |
| 5. 10YR2/1 | 黒色シルト | 黄褐色浮石細粒少量含む。 |
| 6. 10YR2/3 | 黒褐色シルト | 暗褐色シルト質土ブロック状に含む。 |
| 7. 10YR2/2 | 黒褐色シルト | |
| 8. 10YR6/4 | にぶ黄褐色シルト | |



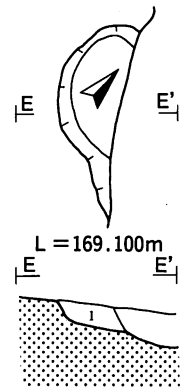
SD030

1. 10YR2/2 黒色シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。
2. 10YR4/6 褐色シルト
軟らかい、黄褐色浮石細粒少量含む。



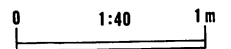
SD032

1. 10YR2/1 黒色シルト
φ10~20mmの黄褐色浮石細粒少量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト
黄褐色浮石細粒少量含む、1層より少ない。
3. 10YR3/3 暗褐色シルト

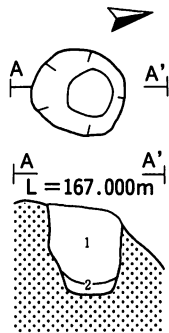


SD031

1. 10YR2/2 黒色シルト
軟らかい、黄褐色浮石細粒多量含む。

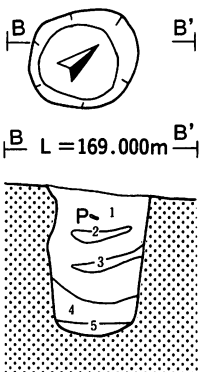


第108図 土坑類(4)



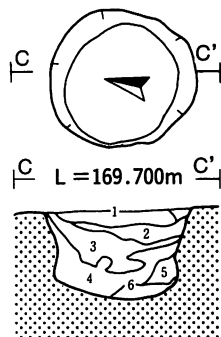
SD033

- 10YR1.7/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒少量含む。
- 10YR3/4 黒褐色シルト
黄褐色浮石細粒微量含む。

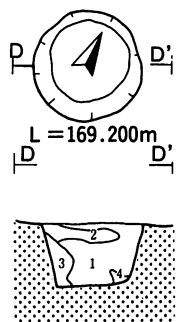


SD034

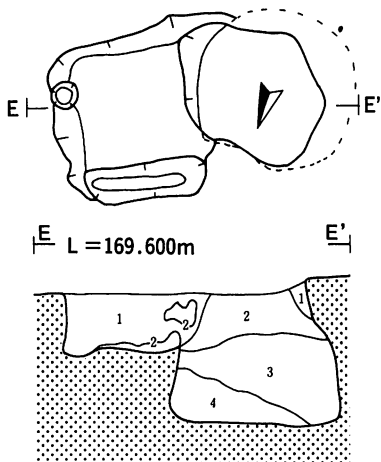
- 10YR2/1 黒色シルト
φ10mmの黄褐色浮石細粒少量含む。
- 10YR3/4 暗褐色シルト
投げ捨ての焼土。
- 10YR2/2 黒褐色浮石
汚れた黄褐色浮石細粒含む。
- 10YR2/3 黒褐色浮石
汚れた黄褐色浮石細粒含む。
- 10YR1.7/1 黒褐色シルト



SD035

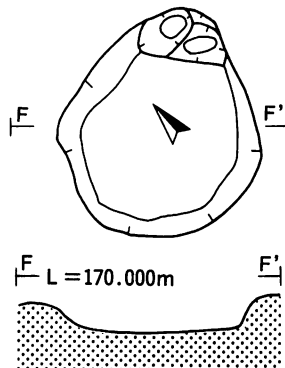


SD036



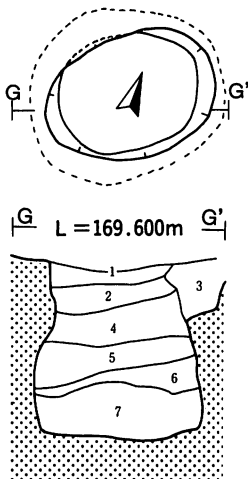
SD037

- 10YR2/2 黒褐色シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。
- 10YR1.7/1 黒色シルト
- 10YR3/1 黒褐色浮石
黄褐色浮石細粒少量含む。
- 10YR3/4 暗褐色シルト
八戸火山灰の再堆積、壁の崩落土。



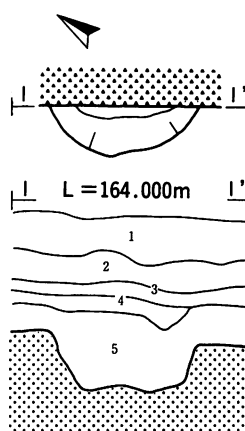
SD039

- 10YR2/2 黒褐色浮石
黄褐色浮石細粒多量含む。



SD040

- 10YR2/2 黒褐色シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。
- 10YR6/8 明黄褐色浮石
南部浮石の再堆積。

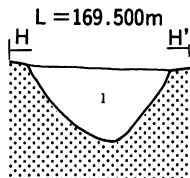


SD042

- 7.5YR2/1 黒色シルト 耕作土。
- 7.5YR1.7/1 黒色シルト 一部に黄褐色浮石細粒含む。
- 7.5YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒含む。
- 7.5YR2/2 黒褐色シルト 十和田a火山灰を含む。
- 7.5YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒多量含む。

SD041

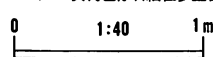
- 7.5YR4/6 褐色シルト 焼土。
- 7.5YR4/4 褐色シルト
- 7.5YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒多量含む。
- 10YR3/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒多量含む。
- 10YR2/2 黒褐色シルト 汚れた黄褐色浮石細粒多量含む。
- 7.5YR2/1 黒色シルト
- 10YR4/6 褐色シルト ブロック状に焼土含む。

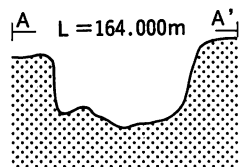


SD038

- 10YR2/2 黒褐色浮石
黄褐色浮石細粒多量含む。

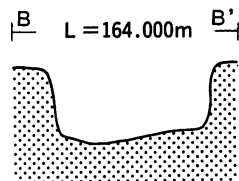
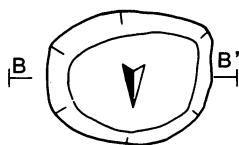
第109図 土坑類(5)





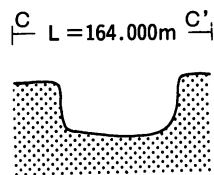
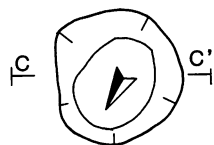
SD043

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。



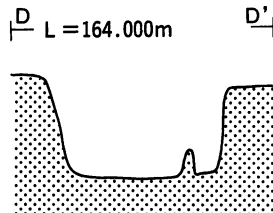
SD044

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。



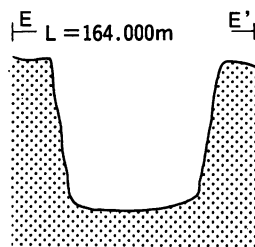
SD045

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。



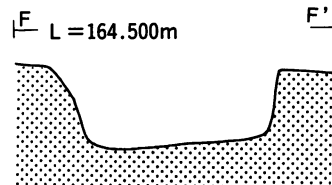
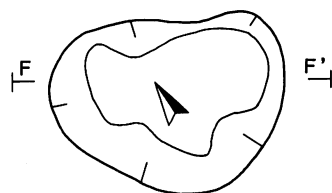
SD046

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。



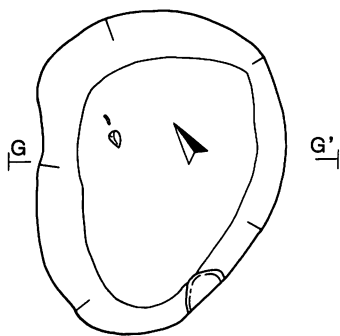
SD047

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。



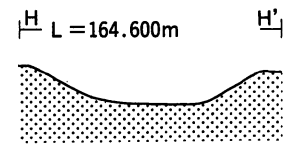
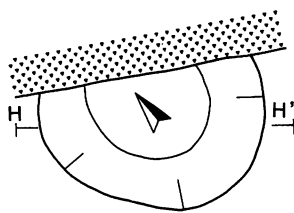
SD048

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。



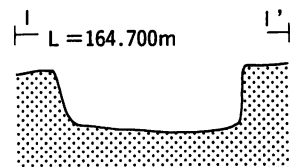
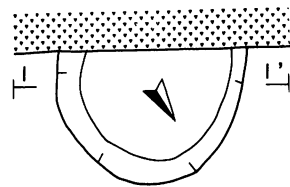
SD049

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。



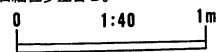
SD050

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。

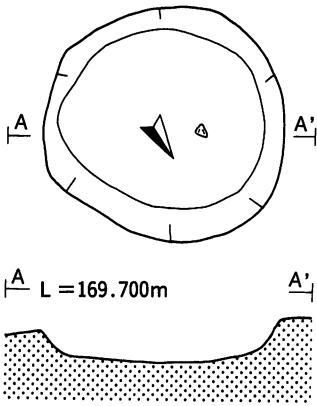


SD051

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。

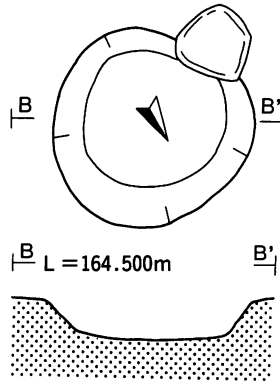


第110図 土坑類(6)



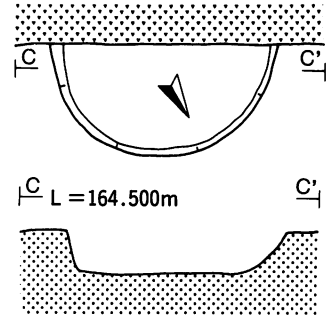
SD052

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。



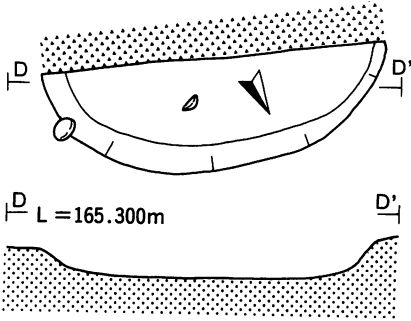
SD053

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。



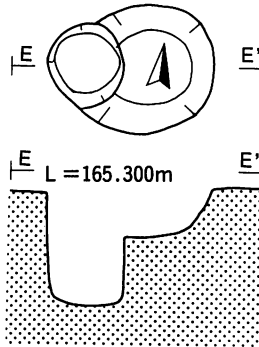
SD054

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。



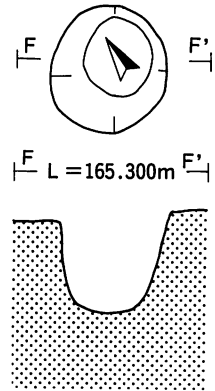
SD055

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。



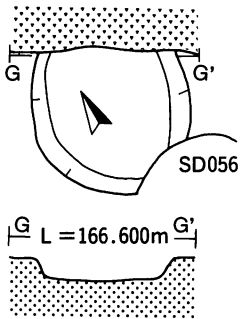
SD056

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。



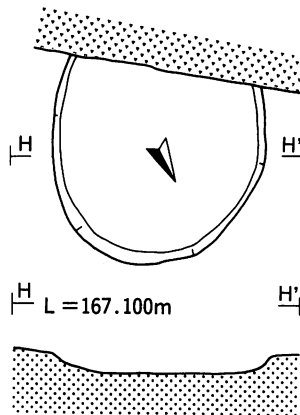
SD057

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。



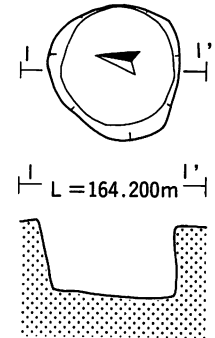
SD058

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。



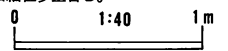
SD059

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。

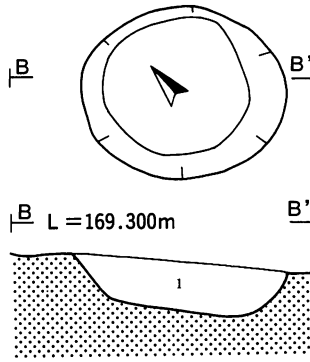
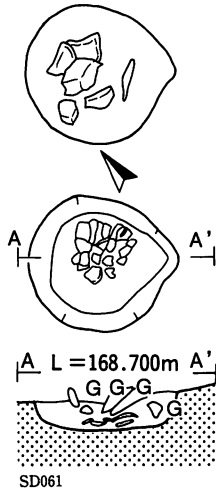


SD060

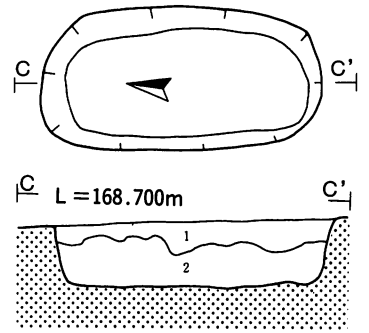
1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒多量含む。



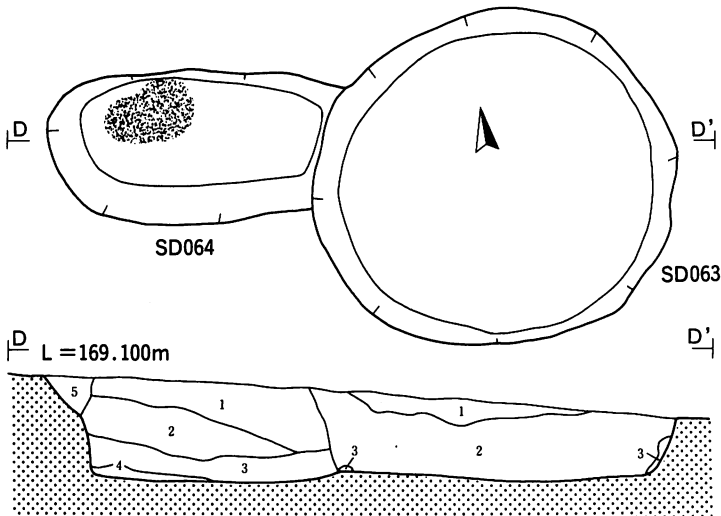
第111図 土坑類(7)



1. 7.5YR3/1 黒褐色 シルト
 φ20mmの黄褐色浮石細粒多量含む。

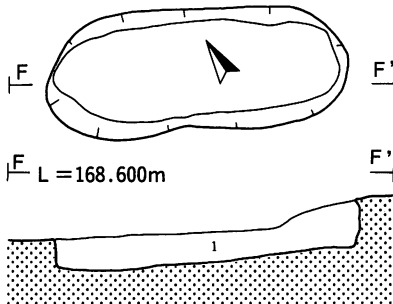


1. 7.5YR2/1 黒色 シルト
 φ5~10mmの黄褐色浮石細粒含む。
 2. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
 φ5~10mmの黄褐色浮石細粒多量含む。

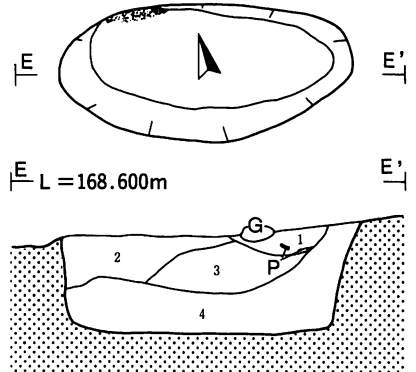


- SD064
- 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
 φ5mm~10mmの黄褐色浮石細粒多量含む。
 - 7.5YR2/3 極暗褐 シルト
 φ10mm±の黄褐色浮石細粒多量含む。
 - 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
 φ5~10mmの黄褐色浮石細粒少量含む。
 - 7.5YR3/4 暗褐色 シルト
 多量の赤色顔料含む。
 - 10YR6/8 明黄褐色 浮石
 汚れた黄褐色浮石。

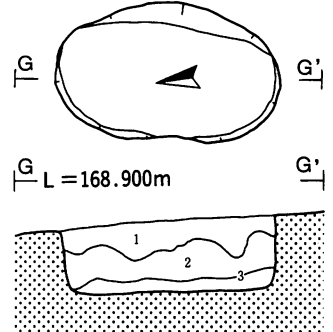
- SD063
- 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
 φ10mmの黄褐色浮石細粒多量含む。
 - 7.5YR2/1 黒色 シルト
 φ10mmの黄褐色浮石細粒多量含む。
 - 7.5YR4/4 褐色 シルト
 ブロック状に含む。



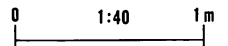
- SD069
- 7.5YR1.7/1 黒色 シルト
 φ5~10mmの黄褐色浮石細粒多量含む。



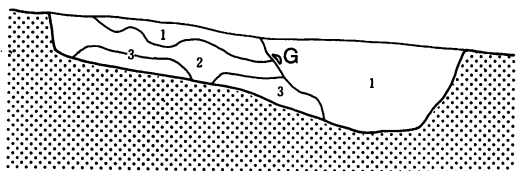
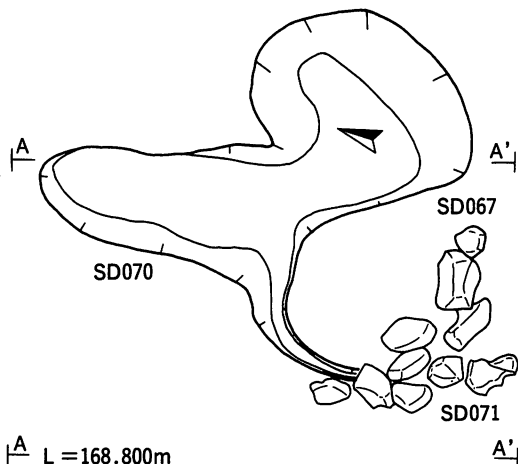
- SD066
- 7.5YR3/1 黒褐色 シルト
 焼土微量含む。
 - 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
 φ5mmの黄褐色浮石細粒少量含む。
 - 7.5YR2/2 極暗褐 シルト
 極暗褐褐色の混土。
 - 7.5YR3/2 黒褐色 シルト
 褐色土と暗褐色土の混土。



- SD068
- 7.5YR1.7/1 黒色 シルト
 φ5~10mm±の黄褐色浮石細粒少量含む。
 - 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
 φ5mm±の黄褐色浮石細粒多量含む。
 - 7.5YR2/3 極暗褐 シルト
 汚れ八戸火山灰



第112図 土坑類(8)

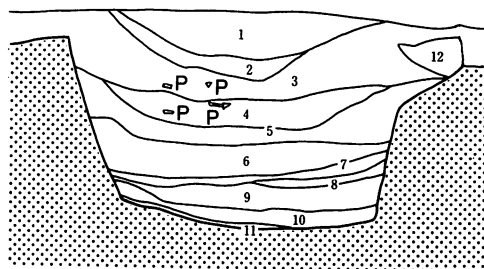
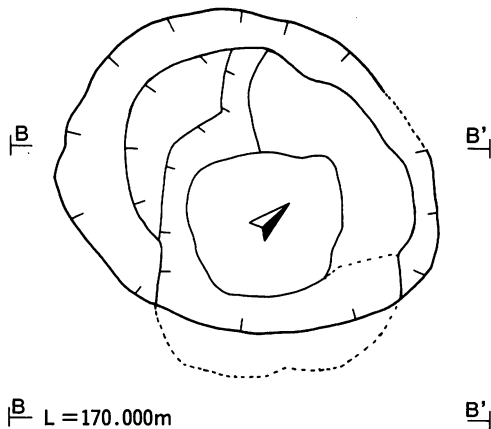


SD067

1. 7.5YR2/1 黒色シルト
φ 2~15mmの黄褐色浮石細粒多量含む。
2. 10YR6/8 明黄褐色 浮石
汚れた黄褐色浮石。
3. 7.5YR2/3 極暗褐色シルト
φ 5mm±の黄褐色浮石細粒、黒色土ブロック状に含む。

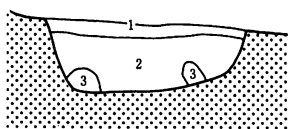
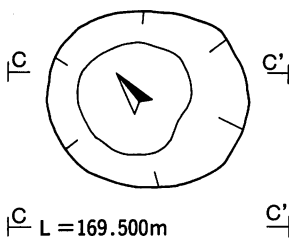
SD070

1. 7.5YR2/1 黒色シルト
φ 2~15mm±の黄褐色浮石細粒多量含む。



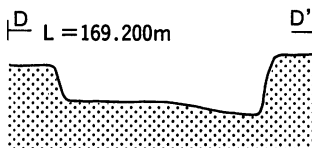
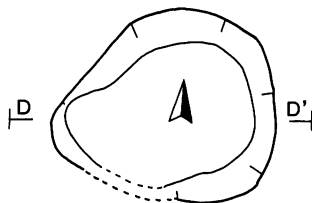
SD073

1. 7.5YR2/1 黒色シルト φ 5mm±の黄褐色浮石細粒含む。
2. 7.5YR2/1 黒色シルト 焼土多量含む。
3. 7.5YR2/1 黒色シルト 焼土・炭化物少量含む。
4. 7.5YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒・焼土・炭化物少量含む。
5. 7.5YR1.7/1 黒色シルト φ 10~20mm±の黄褐色浮石細粒含む。
6. 7.5YR1.7/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒含む。
7. 7.5YR4/6 褐色シルト 黄褐色浮石細粒多量含む。
8. 7.5YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
9. 7.5YR4/6 灰黄褐色 浮石 黄褐色浮石細粒多量含む。
10. 7.5YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒含む。
11. 7.5YR6/8 明黄褐色 浮石 汚れた黄褐色浮石。



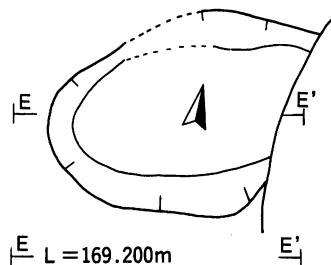
SD074

1. 7.5YR2/1 黒色シルト
φ 5mmの黄褐色浮石細粒含む。
2. 7.5YR2/3 極暗褐色シルト
φ 10mm±の黄褐色浮石細粒多量含む。
3. 10YR6/8 明黄褐色 浮石
汚れた黄褐色浮石。



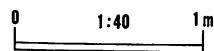
SD075

1. 7.5YR2/2 黒褐色シルト
φ 5~12mmの黄褐色浮石細粒少量、焼土少量含む。

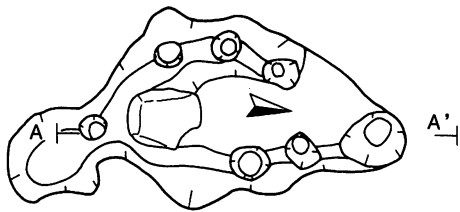


SD076

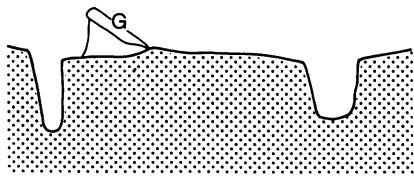
1. 7.5YR2/2 黒褐色シルト
φ 3~12mmの黄褐色浮石細粒少量、小礫少量含む。



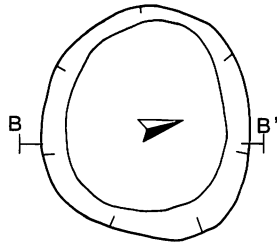
第113図 土坑類(9)



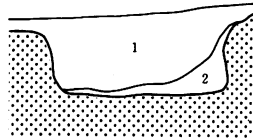
A L = 168.700m A'



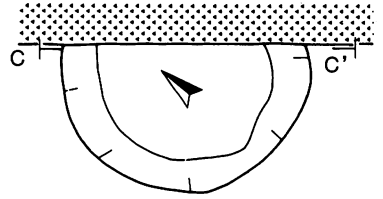
SD077



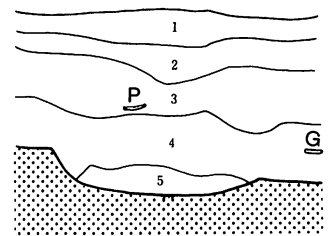
B L = 169.900m B'



SD078

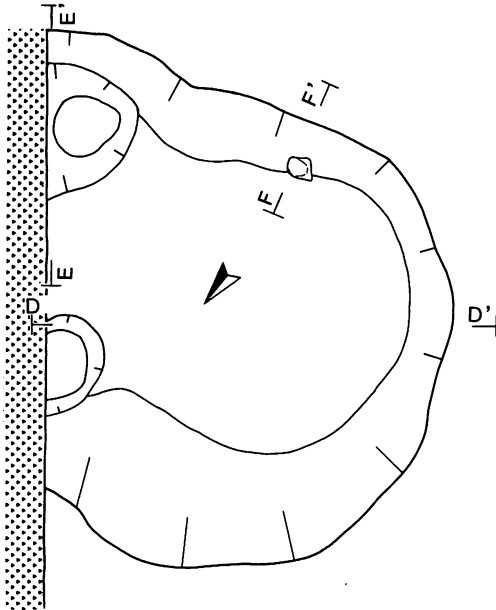


C L = 170.800m C'

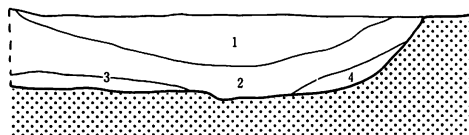


SD080

1. 7.5YR1.7/1 黒色シルト
2. 7.5YR4/4 褐色シルト
φ10mm±の黄褐色浮石細粒少量含む。
3. 7.5YR2/1 黒色シルト
φ5mm±の黄褐色浮石細粒少量含む。
4. 7.5YR2/1 黒色シルト
φ5mm±の黄褐色浮石細粒少量含む。
5. 7.5YR3/2 黒褐色シルト
φ5mm±の黄褐色浮石細粒少量含む。

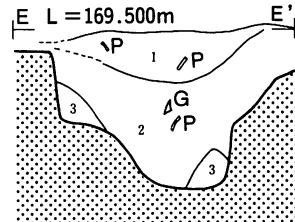


D L = 169.500m D'

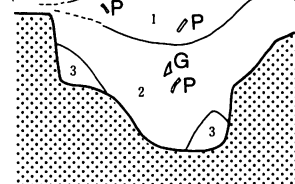


SD079

1. 7.5YR2/1 黒色シルト φ5~20mmの黄褐色浮石細粒多量含む。
2. 7.5YR3/1 黒褐色シルト φ3~15mmの黄褐色浮石細粒多量含む。
3. 7.5YR3/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
4. 7.5YR2/1 黒色シルト 汚れた黄褐色浮石細粒含む。



E L = 169.500m E'



SD079

1. 7.5YR2/3 極暗褐色シルト
2. 7.5YR3/1 黒褐色シルト
φ5~10mmの黄褐色浮石細粒含む。
3. 7.5YR3/4 暗褐色シルト

L = 169.400m F F'

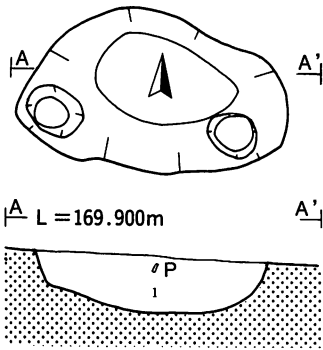


SD079

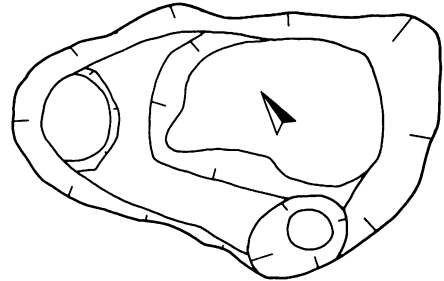
1. 7.5YR3/1 黒色シルト
砂質、黄褐色浮石細粒微量含む。
2. 7.5YR2/1 黒褐色シルト
φ3~5mmの黄褐色浮石細粒少量含む。
3. 7.5YR2/2 黒褐色シルト
φ3~5mmの黄褐色浮石細粒多量、炭化物含む。

0 1:40 1m

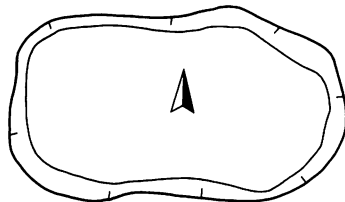
第114図 土坑類(10)



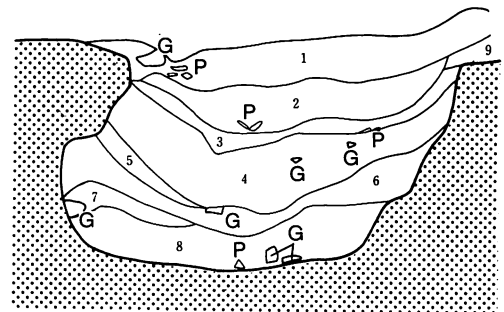
SD081
1. 7.5YR1.7/1 黒色シルト ϕ 2~8mmの黄褐色浮石細粒含む。



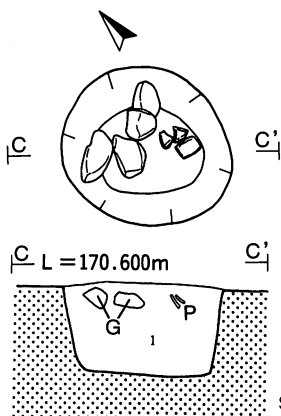
SD082
1. 7.5YR1.7/1 黒色シルト ϕ 2~5mmの黄褐色浮石細粒含む。



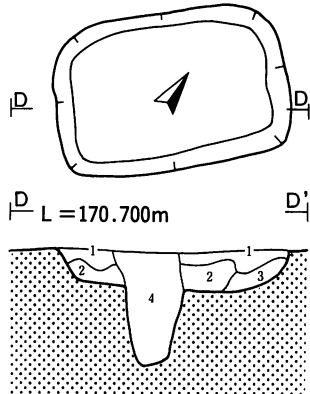
SD084



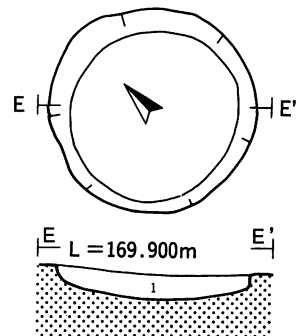
SD083
1. 7.5YR3/1 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒少量、炭化物含む。
2. 7.5YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒少量、炭化物多量含む。
3. 7.5YR5/6 明褐色シルト 黄褐色浮石細粒主体、灰・焼土・多量多量含む。
4. 7.5YR2/2 黒褐色シルト 砂質、炭化物・焼土・黄褐色浮石細粒含む。
5. 7.5YR2/1 黒色シルト 炭化物含む。
6. 7.5YR3/4 暗褐色シルト 廃棄焼土層。
7. 7.5YR2/1 黒色シルト 部分的に黄褐色浮石細粒含む。
8. 7.5YR3/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒含む。
9. 7.5YR2/1 黒色シルト ϕ 5~8mmの黄褐色浮石細粒多量含む。



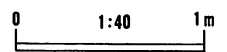
SD086
1. 7.5YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒含む。



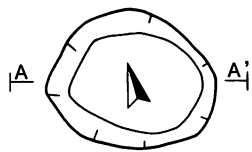
SD087
1. 7.5YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
2. 7.5YR1.7/1 黒色シルト ϕ 10mmの黄褐色浮石細粒、焼土微量含む。
3. 7.5YR2/2 黒褐色シルト
4. 7.5YR2/1 黒色シルト



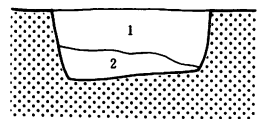
SD085
1. 7.5YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒散在。



第115図 土坑類(11)

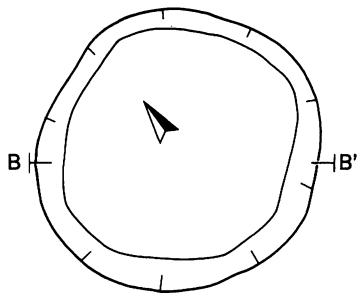


A L = 170.500m A'

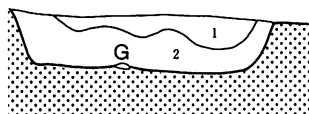


SD088

1. 7.5YR2/1 黒色 シルト
黄褐色浮石細粒多量、焼土少量含む。
2. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒含む。

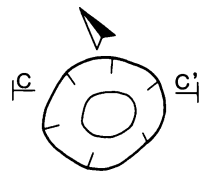


B L = 170.100m B'

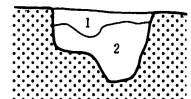


SD089

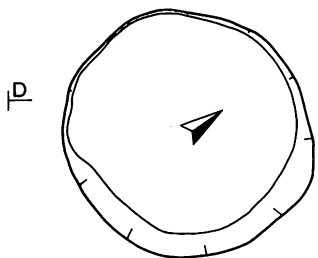
1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト φ10mm黄褐色浮石細粒含む。
2. 7.5YR2/1 黒色 シルト



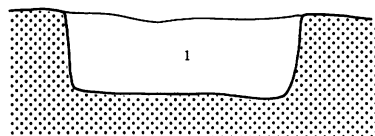
C L = 170.000m C'



SD090

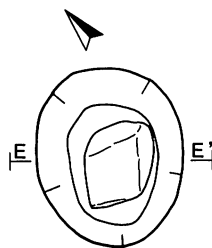


D L = 170.000m D'

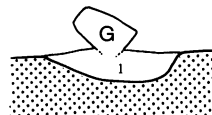


SD091

1. 7.5YR2/1 黒色 シルト
φ 2cm±の黄褐色浮石細粒少量含む。

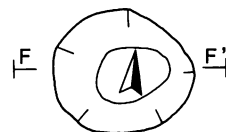


E L = 170.500m E'

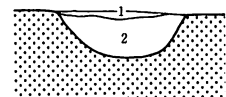


SD092

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
φ 5~10mmの黄褐色浮石細粒散在。

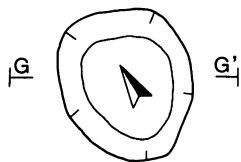


F L = 170.700m F'

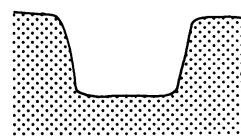


SD093

1. 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒含む。
2. 7.5YR1.7/1 黒色 シルト
1層より黄褐色浮石細粒含む。



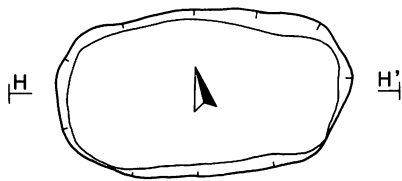
G L = 171.000m G'



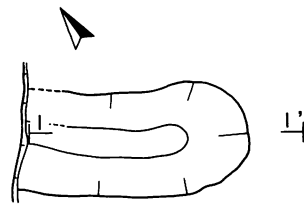
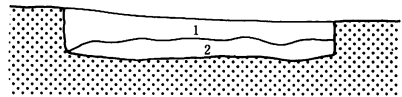
SD094

SD095

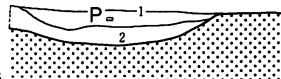
1. 10YR2/1 赤黒色 シルト 黄褐色浮石細粒少量含む。
2. 7.5YR2/1 赤黒色 シルト 1層より黄褐色浮石細粒含む。



H L = 170.800m H'

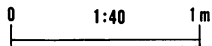


I L = 170.900m I'

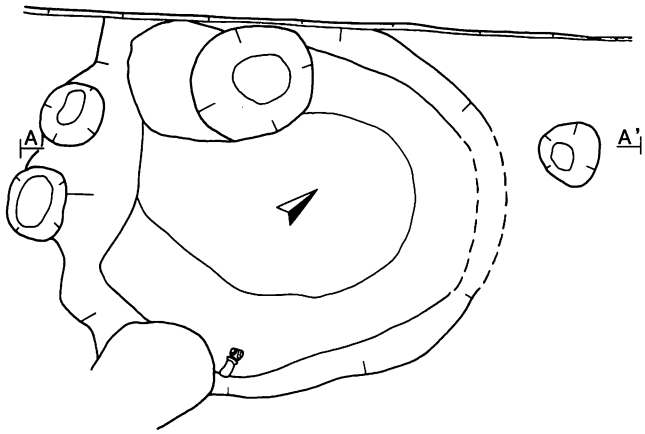


SD096

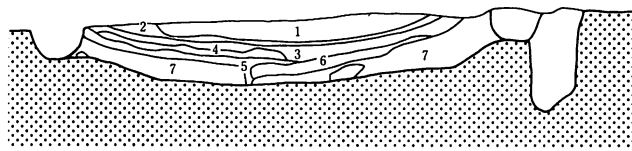
1. 10YR2/1 赤黒色 シルト
黄褐色浮石細粒少量含む。
2. 10YR4/6 明黄褐色 浮石
汚れた黄褐色浮石。



第116図 土坑類(12)

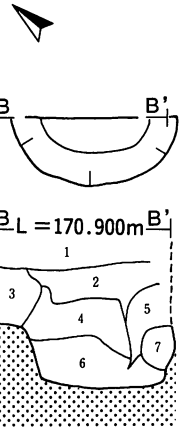


A L = 170.000m

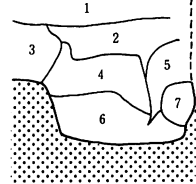


SD097

- | | | |
|-------------------|-----|------------------|
| 1. 7.5YR2/3 極暗褐色 | シルト | 焼土・炭化物多量含む。 |
| 2. 7.5YR5/6 明褐色 | シルト | 炭化物含む。 |
| 3. 7.5YR1.7/1 黒褐色 | シルト | 炭化物・焼土含む。 |
| 4. 7.5YR5/6 明褐色 | シルト | 炭化物含む。 |
| 5. 7.5YR2/2 黒褐色 | シルト | 炭化物・焼土含む。 |
| 6. 7.5YR1.7/1 黒色 | シルト | 炭化物・焼土多量含む。 |
| 7. 7.5YR2/1 黒色 | シルト | φ10mmの黄褐色浮石細粒含む。 |

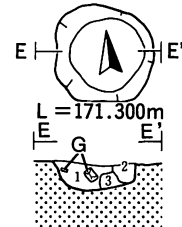


B L = 170.900m B'

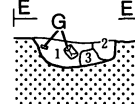


SD098

- | | | |
|----------------|-------|--------------------------|
| 1. | シルト | 盛土。 |
| 2. 10YR2/1 黒色 | 砂質シルト | 中礫火山灰の風土層。 |
| 3. 10YR2/1 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒10~15%含む。 |
| 4. 10YR2/1 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒15%含む。 |
| 5. 10YR2/1 黒色 | シルト | 黄褐色浮石細粒少量含む。 |
| 6. 10YR2/2 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒2%、八戸火山灰ブロック状に含む。 |
| 7. 10YR2/2 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒2%含む。 |

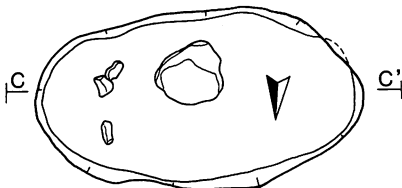


L = 171.300m

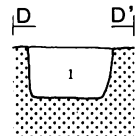


SD101

- | | | |
|----------------|-----|----------------|
| 1. 10YR2/1 黒色 | シルト | φ10mmの炭化物1%含む。 |
| 2. 10YR2/1 黒色 | シルト | 炭化物層状に含む。 |
| 3. 10YR2/2 黒褐色 | シルト | 焼土・炭化物1%含む。 |

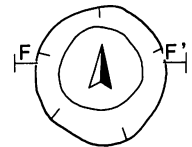


L = 171.200m

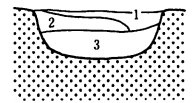


SD100

- | | | |
|----------------|-----|------------------------------|
| 1. 10YR2/2 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒7%・炭化物3%・黒色土ブロック状に含む。 |
|----------------|-----|------------------------------|



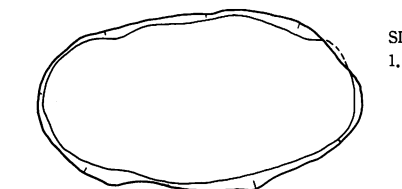
F L = 171.300m F'



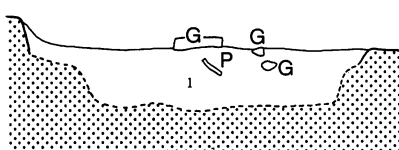
SD102

- | | | |
|----------------|-----|-------------------------|
| 1. 10YR2/1 黒色 | シルト | 炭化物1%・黄褐色浮石細粒1%含む。 |
| 2. 10YR2/2 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒5%含む。 |
| 3. 10YR2/1 黒色 | シルト | 炭化物1%・焼土1%・黄褐色浮石細粒3%含む。 |

0 1:40 1m

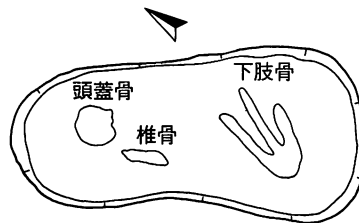


C L = 171.100m



SD099

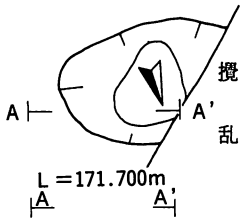
- | | | |
|----------------|-----|---------------------------|
| 1. 10YR2/2 黒褐色 | シルト | φ5mmの黄褐色浮石細粒5~7%、炭化物少量含む。 |
|----------------|-----|---------------------------|



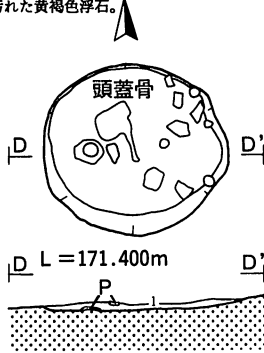
SD103

- | | | |
|----------------|-----|-----------------------|
| 1. 10YR2/2 黒褐色 | シルト | 黄褐色浮石細粒5%・焼土・炭化物少量含む。 |
|----------------|-----|-----------------------|

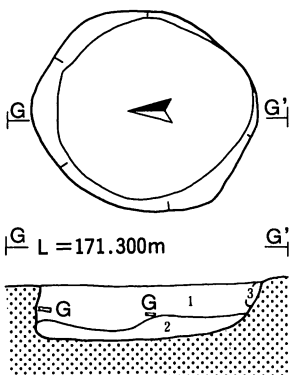
第117図 土坑類(13)



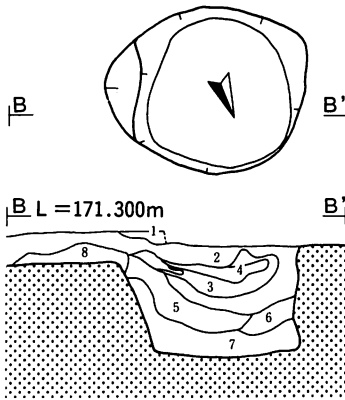
- SD104
- 10YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒7%含む。
 - 10YR2/2 黒褐色シルト
黄褐色浮石細粒7~10%、八戸火山灰散在。
 - 10YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒1%含む。
 - 10YR4/4 褐色浮石
南部浮石。
 - 10YR4/6 明黄褐色浮石
汚れた黄褐色浮石。



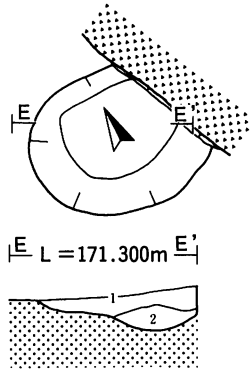
- SD108
- 10YR2/1 シルト
炭化物・焼土2%、灰色粘土厚さ1cm層状に含む。



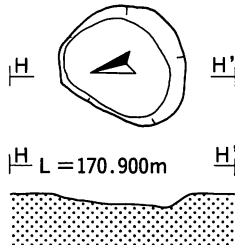
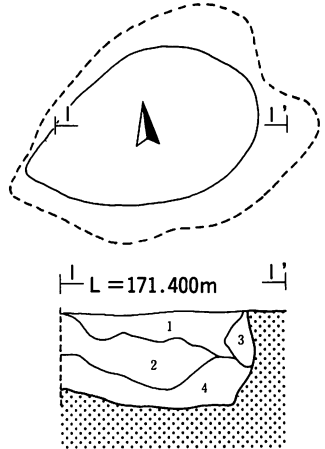
- SD109
- 10YR3/3 明褐色シルト
炭化物・焼土5%、褐色粘土含む。
 - 10YR2/2 黒褐色シルト
炭化物・焼土3%含む。
- SD110
- 10YR2/2 黒褐色シルト
炭化物・焼土散在。
 - 10YR1.7/1 黒色シルト
φ5mmの黄褐色浮石細粒7%含む。
 - 10YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒1%含む。
 - 10YR2/1 黒色シルト
φ5~10mm黄褐色浮石細粒15%含む。



- SD105
- 10YR2/2 黒褐色シルト
炭化物・焼土含む。
 - 10YR2/3 黒褐色シルト
全体に多量の炭化物・焼土含む。
 - 7.5YR4/6 褐色シルト
焼土(投棄)。
 - 10YR2/3 黒褐色シルト
炭化物・焼土含む。
 - 10YR1.7/1 黒色シルト
大粒の炭化物含む。
 - 10YR1.7/1 黒色シルト
八戸火山灰ブロック状に含む。
 - 10YR1.7/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒5~7%含む。
 - 10YR1.7/1 黒色シルト
粘性しまりなし。

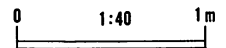


- SD107
- 10YR2/1 黒色砂質シルト ややしまりあり。

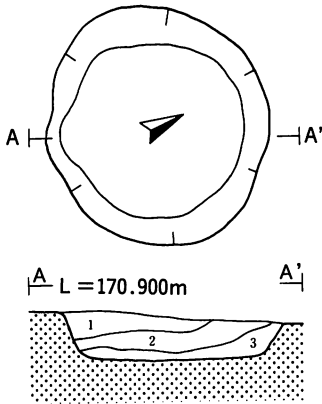


- SD112
- 10YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒3%含む。

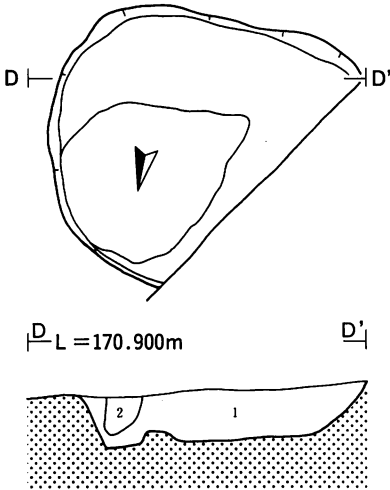
- SD110
- 10YR2/2 黒褐色シルト
炭化物・焼土散在。
 - 10YR1.7/1 黒色シルト
φ5mmの黄褐色浮石細粒7%含む。
 - 10YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒1%含む。
 - 10YR2/1 黒色シルト
φ5~10mm黄褐色浮石細粒15%含む。



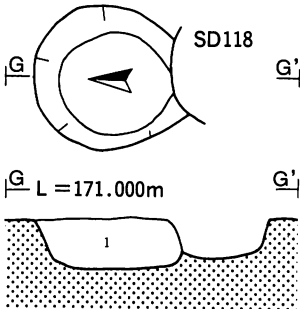
第118図 土坑類(14)



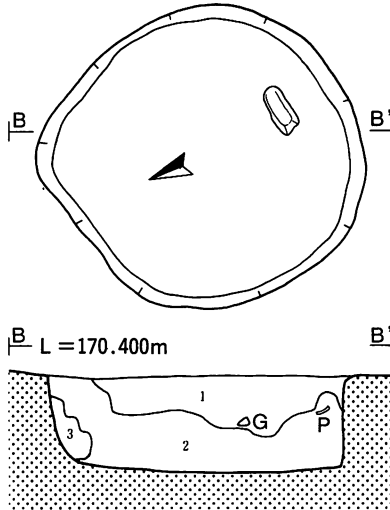
- SD113
- 7.5YR5/6 明褐色 シルト
炭化物・焼土多量、黄褐色浮石細粒少量含む。
 - 7.5YR3/5 暗褐色 シルト
炭化物・焼土多量含む。
 - 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒散在。



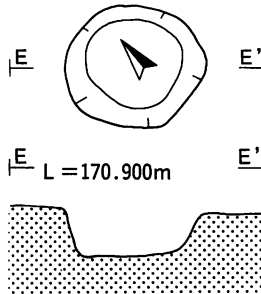
- SD117
- 7.5YR2/1 黒色 シルト
黄褐色浮石細粒含む。
 - 7.5YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒少量含む。



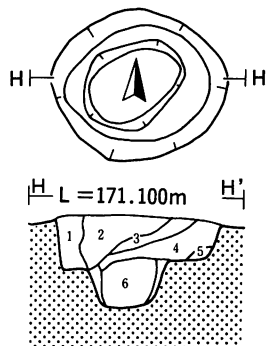
- SD119
- 10YR2/1 黒色 シルト
黄褐色浮石細粒 1%含む。



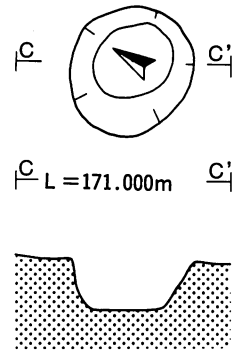
- SD114
- 7.5YR2/1 黒色 シルト
φ5~20mmの黄褐色浮石細粒散在。
 - 7.5YR2/1 黒色 シルト
1層に比べ黄褐色浮石細粒が少ない。
 - 10YR4/6 明黄褐色 浮石
南部浮石の再堆積。



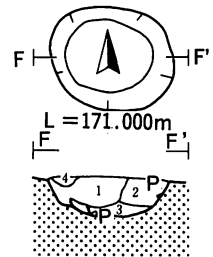
- SD116
- 7.5YR2/1 黒色 シルト



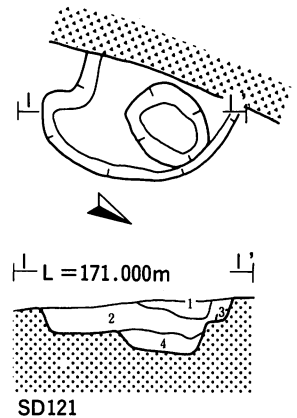
- SD120
- 10YR2/3 黒褐色 シルト
焼土・炭化物散在。
 - 10YR2/3 黒褐色 シルト
炭化物・焼土少量、φ5mm黄褐色浮石細粒 1%含む。
 - 10YR2/1 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒 7%含む。



- SD115
- 7.5YR2/1 黒色 シルト

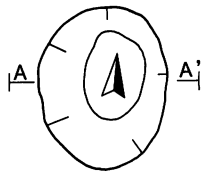


- SD118
- 10YR2/2 黒褐色 シルト
明褐色ロームブロック状に含む。
 - 10YR2/2 黒褐色 シルト
粘性しまりなし、黄褐色浮石細粒 1%含む。
 - 10YR2/1 黒色 シルト
やや砂っぽい
 - 10YR6/6 明黄褐 シルト
粘土φ5mm黄褐色浮石細粒 3%・炭化葉含む。

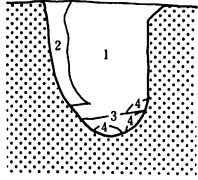


- SD121
- 10YR2/2 黒色 シルト
黄褐色浮石細粒 1%含む。
 - 10YR2/1 黒色 シルト
炭化物・焼土含む。
 - 10YR1.7/1 黒色 シルト
黄褐色浮石細粒 7%含む。

第119図 土坑類(15)

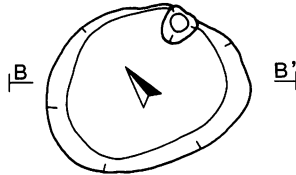


A L = 169.900m A'



SD122

1. 10YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒・炭化物12%含む、砂質
2. 10YR2/2 黒色シルト 黄褐色浮石細粒1%含む、砂質。
3. 10YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒7%含む。
4. 10YR2/2 黒色シルト 砂質。



B L = 169.800m B'

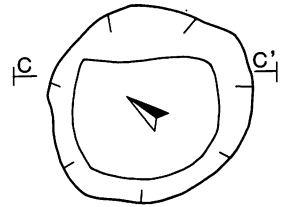


SD123

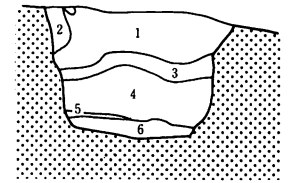
1. 10YR3/3 暗褐色シルト 黄褐色浮石細粒含む。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石含む。
3. 10YR2/3 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒含む。
4. 7.5YR2/2 黒色シルト

SD123

1. 7.5YR2/1 黒色シルト 炭化物少量・黄褐色浮石細粒含む。

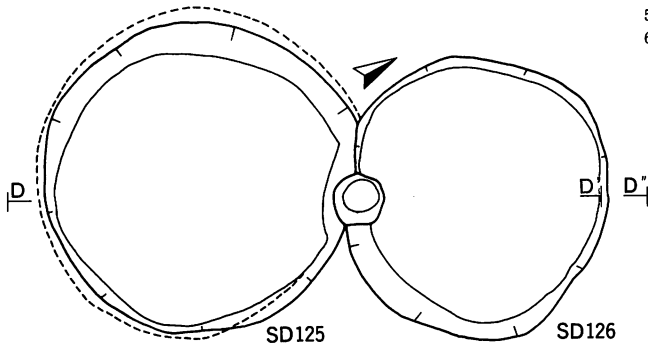


C L = 169.900m C'



SD124

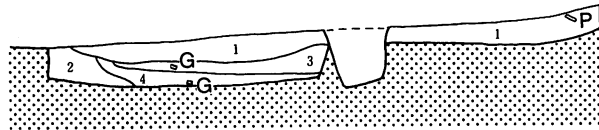
1. 10YR4/4 褐色シルト 炭化物少量、黄褐色浮石細粒含む。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石含む。
3. 10YR4/4 黒褐色シルト 黄褐色浮石含む。
4. 10YR6/6 明黄褐色シルト 汚れた黄褐色浮石細粒含む。
5. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
6. 10YR2/2 黒褐色シルト



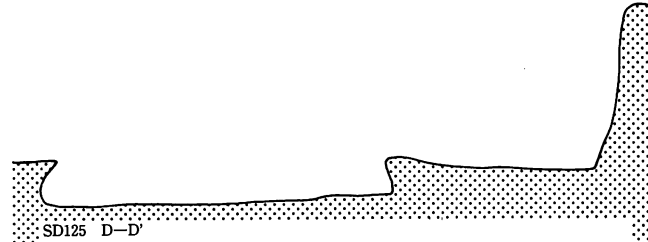
SD125

SD126

D L = 169.600m D'



D L = 170.000m D'

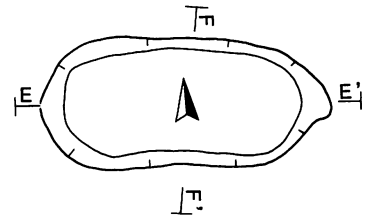


SD125 D-D'

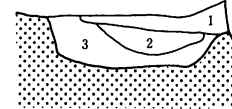
1. 7.5YR2/2 黒褐色シルト 炭化物、黄褐色浮石細粒少量含む。
2. 7.5YR2/3 極暗褐色シルト 砂っぽい、φ8mmの黄褐色浮石細粒多量含む。
3. 7.5YR2/3 極暗褐色シルト φ3~10mmの黄褐色浮石、炭化物少量含む。
4. 7.5YR2/1 黒色シルト 炭化物・黄褐色浮石細粒少量含む。

SD126 D-D''

1. 7.5YR2/2 黒褐色シルト 炭化物、黄褐色浮石細粒少量含む。



E L = 168.900m E'



SD127

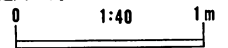
1. 10YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒10%含む。

E L = 168.900m E'

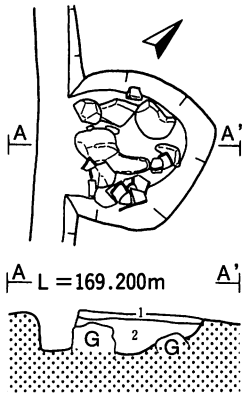


SD127

1. 10YR1/2 黒色シルト 粘性しまりなし、YP5%、骨込入る。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 粘性しまりなし、YP30%(よごれ、ゴロク)
3. 10YR1/2 シルト 粘性しまりなし、YP15%、骨込入る。

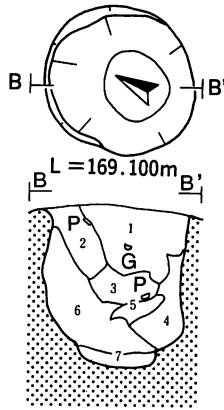


第120図 土坑類(16)



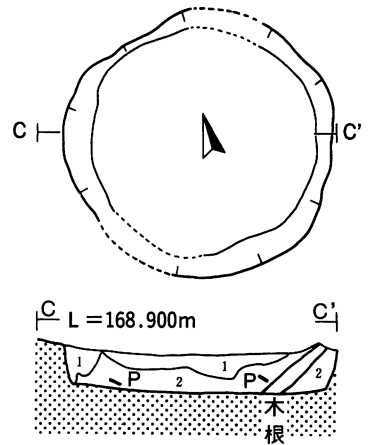
SD128

1. 10YR2/2 黒褐色シルト
φ 3mmの黄褐色浮石細粒 2%含む。
2. 10YR2/3 黒褐色シルト
φ 3mmの黄褐色浮石細粒10%含む。



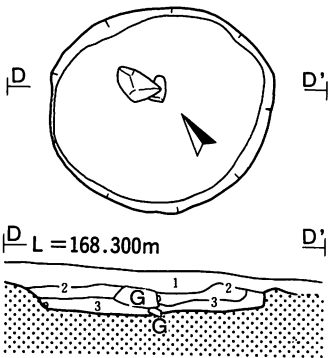
SD129

1. 10YR1/1 黒色シルト
φ 5mmの黄褐色浮石細粒 7%、炭化物・焼土含む。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト
炭化物・焼土少量含む。
3. 10YR2/2 黒褐色シルト
φ 5mm黄褐色浮石細粒10%含む。
4. 10YR2/1 黒色シルト
φ 5mm黄褐色浮石細粒10%含む。
5. 10YR2/2 黒褐色シルト
焼土大量含む。
6. 10YR2/2 黒褐色シルト
φ 5mm黄褐色浮石細粒 1%含む。
7. 10YR2/3 黒褐色シルト
φ 10mm黄褐色浮石細粒25%含む。



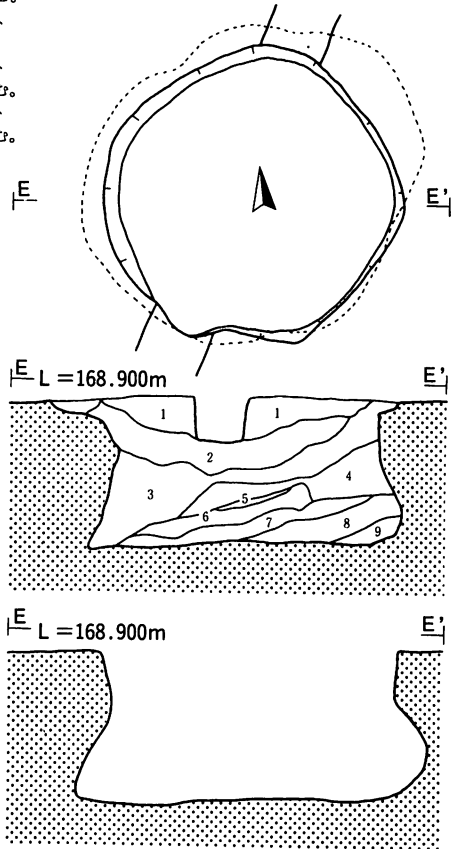
SD130

1. 10YR1.7/1 黒色シルト
しまりあり、住居跡の貼床。
2. 10YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒 2~3%含む。



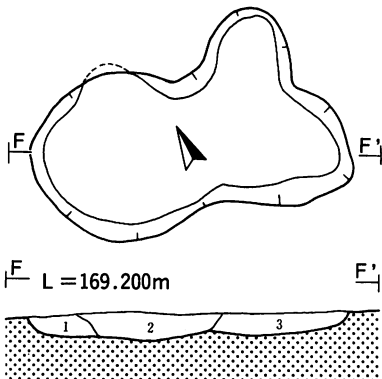
SD131

1. 10YR2/2 黒褐色シルト φ 2~5%の黄褐色浮石細粒含む。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト φ 3mmの黄褐色浮石細粒含む。
3. 10YR2/2 黒褐色シルト φ 5mm黄褐色浮石細粒・炭化物含む。



SD132

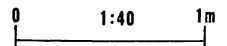
1. 7.5YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒・十和田a火山灰含む。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト
φ 2mm黄褐色浮石細粒含む。
3. 7.5YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒 1%含む。
4. 7.5YR2/2 黒色砂質シルト
黄褐色浮石細粒・十和田a火山灰含む。
5. 10YR2/2 黒褐色シルト
灰白色土含む。
6. 黄橙色シルト
砂粒状。
7. 10YR2/2 黒褐色シルト質粘土
ブロック状暗褐色土含む。
8. 10YR2/2 暗褐色シルト
9. 2.5YR2/2 浅黄色

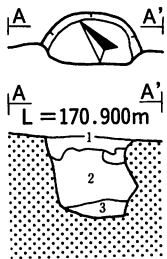


SD133

1. 10YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒 7%、炭化物・焼土含む。
2. 10YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒 2%含む。
3. 10YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒 7%含む。

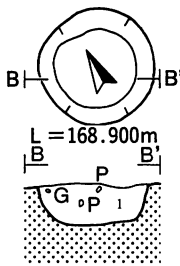
第121図 土坑類(17)





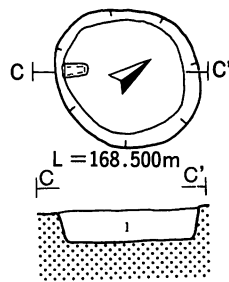
SD134

1. 10YR2/1 黒色シルト 20%のYP含む。
2. 10YR2/1 黒色シルト 5~7%のYP含む。
3. 10YR2/1 黒色シルト 25%のYP含む。



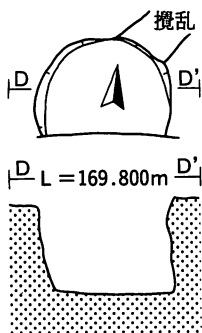
SD135

1. 10YR2/2 黒褐色シルト しまりなし。



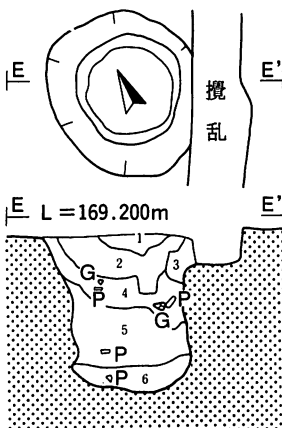
SD136

1. 10YR2/2 黒褐色シルト ブロック状に焼土含む。



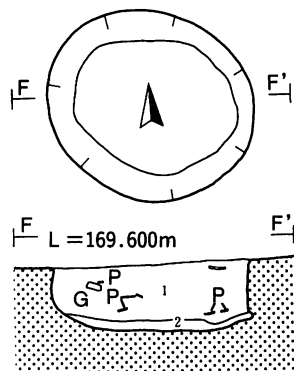
SD137

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒、焼土微量含む。



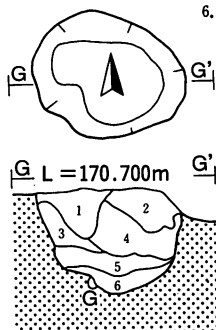
SD138

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒1%、焼土微量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒5%、炭化物微量含む。
3. 10YR2/1 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒5%含む。
4. 10YR1.7/1 黒褐色シルト 黄褐色浮石細粒7%含む。
5. 10YR2/1 黒褐色シルト 炭化物微量含む。
6. 10YR1.7/1 黒褐色シルト 堅緻、黄褐色浮石細粒50%含む。



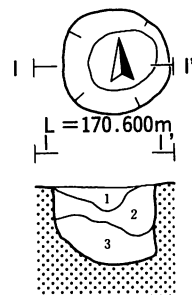
SD139

1. 10YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒1%、焼土微量含む。
2. 10YR2/3 黒褐色シルト質粘土 黄褐色浮石細粒5%含む。



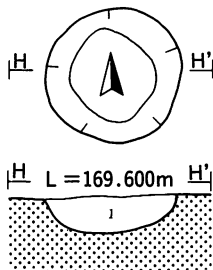
SD140

1. 10YR1.7/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒10%、焼土・炭化物微量含む。
2. 10YR1.7/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒5%含む。
3. 10YR1.7/1 黒色シルト しまりなし。



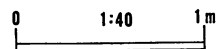
SD142

1. 10YR1.7/1 黒色シルト 軟、黄褐色浮石細粒2%・上部に焼土・炭化物含む。
2. 10YR1.7/1 黒色シルト 軟、黄褐色浮石細粒2%含む。
3. 10YR1.7/1 黒色シルト 軟、黄褐色浮石細粒2%・炭化物含む。

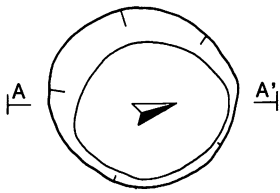


SD141

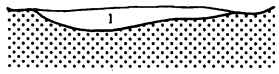
1. 10YR2/1 黒色シルト 黄褐色浮石細粒5~7%含む。



第122図 土坑類(18)

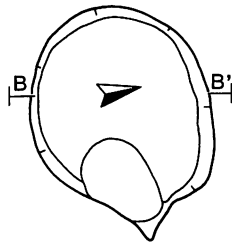


A L = 169.700m A'



SD143

- 10YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒3%・上部に焼土微量含む。



B L = 169.600m B'

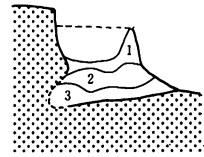


SD144

- 10YR2/2 黒褐色シルト
炭化物微量含む。
- 10YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒1%含む。



C L = 169.700m C'



SD145

- 10YR2/3 黒褐色シルト
φ5mmの黄褐色浮石細粒5%炭化物含む。
- 10YR2/3 黒褐色シルト
φ5mmの黄褐色浮石細粒10%含む。
- 10YR2/2 黒褐色シルト質粘土
堅緻。

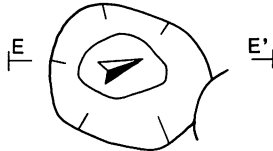


D L = 169.600m D'

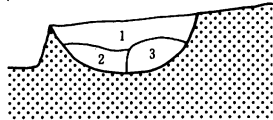


SD146

- 10YR2/2 黒色シルト
軟、黄褐色浮石細粒2%・焼土含む。
- 10YR2/1 黒色シルト
軟、黄褐色浮石細粒5%含む。
- 10YR2/2 黒褐色シルト
軟、黄褐色浮石細粒2%含む。
- 10YR2/2 黒褐色シルト
黄褐色土ブロック状、黄褐色浮石細粒20%。

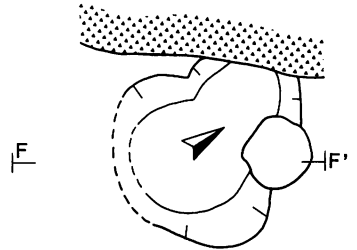


E L = 169.500m E'

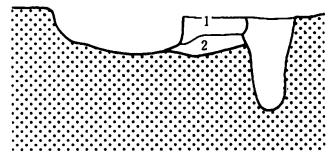


SD147

- 10YR2/1 黒色浮石
黄褐色浮石細粒30%含む。
- 10YR2/3 黒褐色浮石
黄褐色浮石細粒50%含む。
- 10YR2/1 黒色浮石
黄褐色浮石細粒50%含む。

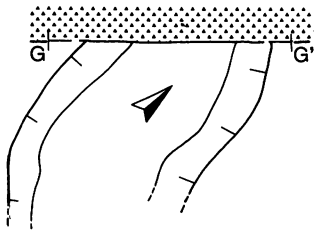


F L = 169.800m F'

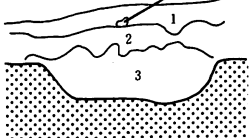


SD148

- 10YR2/2 黒褐色シルト
黄褐色浮石細粒15%含む。
- 10YR2/3 黒褐色シルト
黄褐色浮石細粒15%含む。

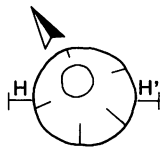


G L = 169.900m G G'

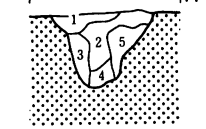


SD149

- 10YR2/2 黒褐色シルト
φ5mmの黄褐色浮石細粒1%含む。
- 10YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒5%含む。
- 10YR3/3 暗褐色シルト
黄褐色浮石細粒25%含む。



H L = 169.500m H'

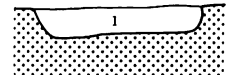


SD150

- 10YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒3%・焼土少量含む。
- 10YR2/2 黒褐色シルト
焼土少量含む。
- 10YR1.7/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒2%含む。
- 10YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒2%含む。
- 10YR2/2 黒褐色シルト
黄褐色浮石細粒2%含む。



I L = 169.800m I'

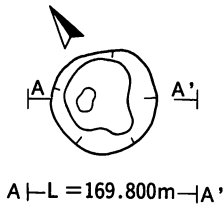


SD151

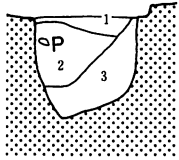
- 10YR1.7/1 黒色砂質シルト
黄褐色浮石細粒2%含む。

0 1:40 1m

第123図 土坑類(19)

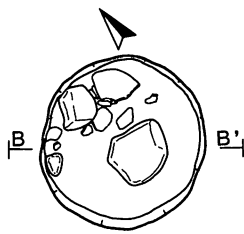


A-L = 169.800m - A'



SD152

1. 10YR2/1 黒色 シルト
黄褐色浮石細粒 2% 含む。
2. 10YR2/1 黒色 シルト
3. 10YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒 3% 含む。



B-L = 167.400m B'

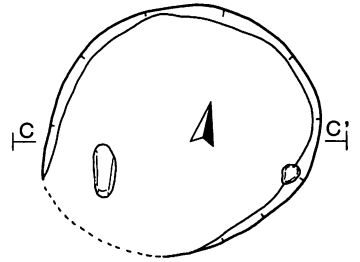


B-L = 167.900m B'

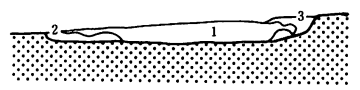


SD153

1. 7.5YR2/1 黒色 シルト
φ 3mmの黄褐色浮石細粒10% 含む。

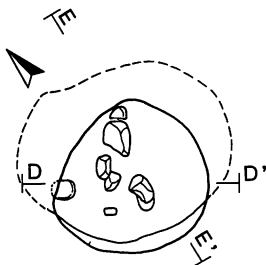


C-L = 167.300m C'

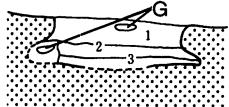


SD154

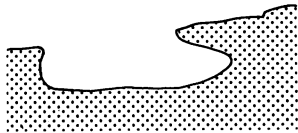
1. 10YR2/1 黒色 シルト
黄褐色浮石細粒 5%、炭化物微量含む。
2. 10YR2/1 黒色 シルト
黄褐色粘土ブロック状に混じる。
3. 2.5YR8/6 黄色 粘土質シルト



D-L = 167.900m D'

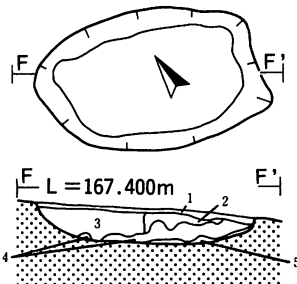


E-L = 168.000m E'

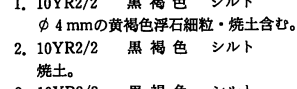


SD155

1. 10YR2/2 黒褐色 シルト
φ 2~10mmの黄褐色浮石細粒50% 含む。
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト
φ 2mmの黄褐色浮石細粒少量含む。
3. 10YR4/6 明黄褐色 浮石
汚れた南部浮石。



F-L = 167.400m F'

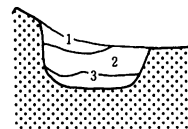


SD156

1. 10YR2/2 黒褐色 シルト
φ 4mmの黄褐色浮石細粒・焼土含む。
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト
焼土。
3. 10YR2/2 黒褐色 シルト
φ 5mmの黄褐色浮石細粒含む。
4. 10YR3/2 黒褐色 シルト
φ 5mmの黄褐色浮石細粒含む。
5. 2.5YR3/3 暗オリーブ褐色 シルト

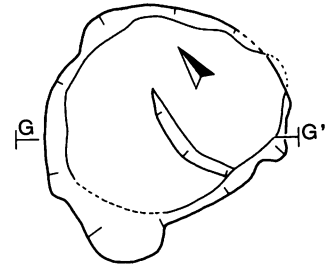


H-L = 168.200m H'

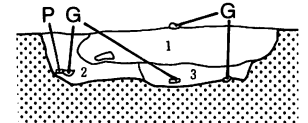


SD158

1. 10YR2/2 黒褐色 シルト
φ 3mm黄褐色浮石細粒・炭化物含む。

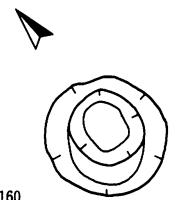


G-L = 167.800m G'



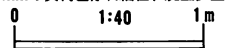
SD157

1. 10YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒・焼土・炭化物含む。
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト
φ 10mmの黄褐色浮石細粒含む。
3. 10YR2/2 黒褐色 シルト
黄褐色浮石細粒、焼土・炭化物ブロック状に含む。

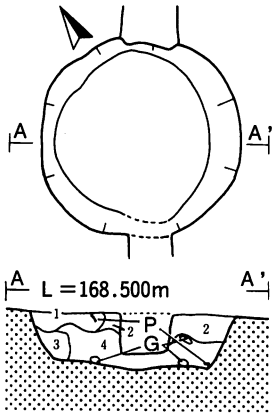


SD160

1. 10YR2/1 黒色 シルト
黄褐色浮石細粒 2% 含む。
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト
暗褐色粘土ブロック状に混じる。
3. 10YR2/2 黒褐色 シルト
φ 5~8mmの黄褐色浮石細粒、焼土少量含む。

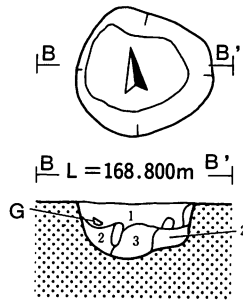


第124図 土坑類(20)



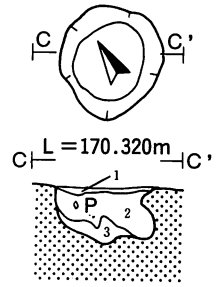
SD159

1. 10YR2/1 黒色シルト
φ10mmの黄褐色浮石細粒含む。
2. 10YR2/2 黒色シルト
1層より黄褐色浮石細粒少ない。
3. 10YR2/1 黒色シルト
暗褐色シルト混じる。
4. 10YR2/1 黒色シルト



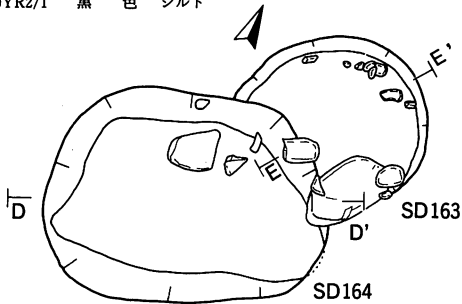
SD161

1. 10YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒5%含む。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト
黄褐色浮石細粒少量含む。
3. 10YR1.7/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒5%、焼土ブロック状に含む。

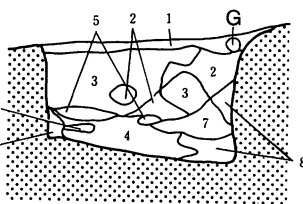


SD162

1. 7.5YR2/1 黒色シルト
しまりあり。
2. 7.5YR2/1 黒色シルト
3. 7.5YR2/1 黒色シルト
黄褐色シルト質粘土ブロック状に含む。

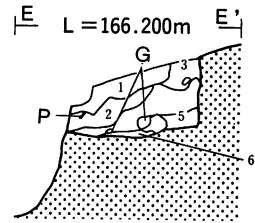


SD163



SD164

1. 10YR2/2 黒褐色シルト
φ2~7mmの黄褐色浮石細粒、少量の炭化物含む。
2. 10YR2/3 黒褐色シルト
φ2~5mmの黄褐色浮石細粒含む。
3. 10YR4/4 褐色砂質シルト
黄褐色浮石細粒含む。
4. 10YR2/3 黒褐色砂質シルト
φ5mmの黄褐色浮石細粒含む。
5. 10YR5/6 黄褐色シルト質粘土
黄褐色粘土ブロック状に含む。
6. 10YR2/3 黒褐色シルト
黄褐色粘土ブロック状に含む。

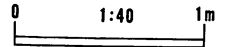


SD166

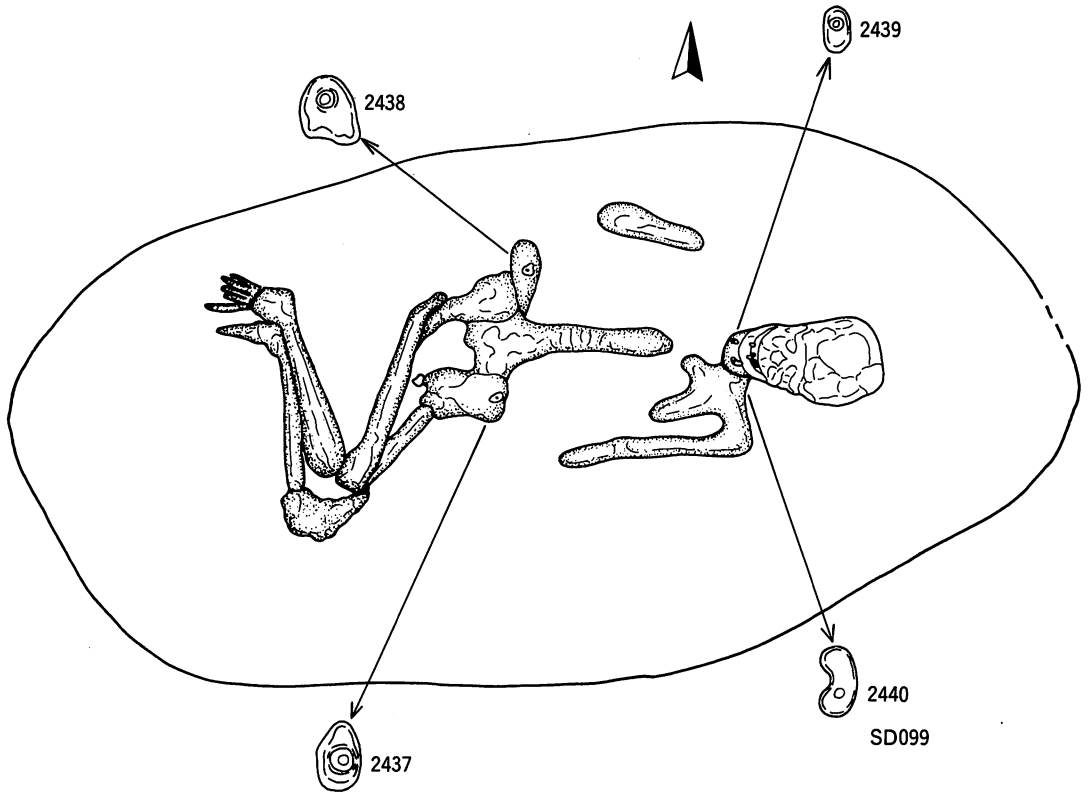
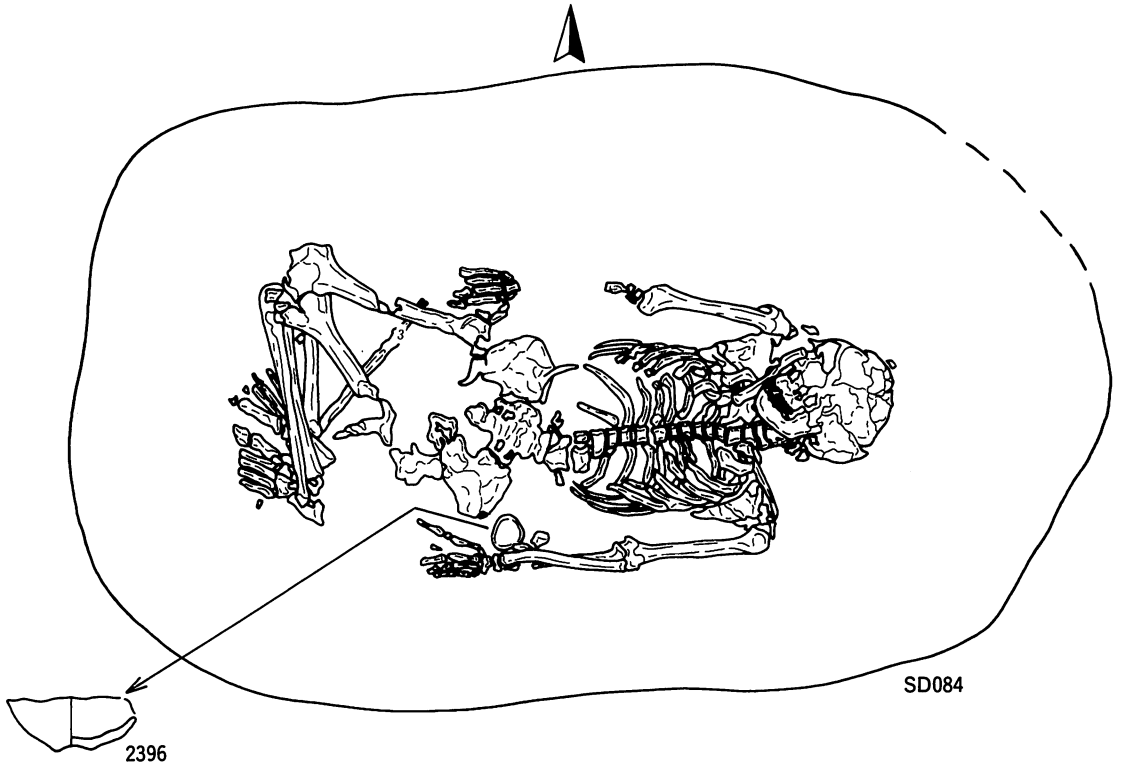


SD167

1. 7.5YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒、灰白色浮石含む。
2. 10YR2/2 黒褐色シルト
φ2mm黄褐色浮石細粒含む。
3. 7.5YR2/1 黒色シルト
黄褐色浮石細粒少量含む。
4. 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
軟らかい。
5. 10YR2/2 黒褐色シルト
6. 黄橙色砂
7. 10YR2/2 黒褐色シルト質粘土
暗褐色土ブロック状に含む。
8. 10YR3/3 暗褐色シルト
9. 2.5Y8/4 淡黄色粘土



第125図 土坑類(2)



第126図 土坑類(2)

4. 炉・焼土遺構

この項で扱う炉・焼土は、検出時点では住居跡の附属施設と認識して精査を続行したが住居跡としての認定条件である壁や柱穴の存在が確認できなかった現地性のものを対象としている。しかし、前述したように当遺跡は黒色土中での遺構検出のため非常に困難を窮め、本来は住居跡の施設であったものも含まれている可能性がある。

SC01 焼土遺構

遺構（第 127 図、写真図版 145）

〈位置〉 A 調査区、K XVI グリッドの西側に位置している。

現地性の焼土であり、検出面はII層上面である。

〈規模・形状〉 平面形は不整形、規模は 76 cm×76 cm、焼土の厚さは 12 cm である。焼土は水平に形成されている。

遺物 出土していない。

〈時期〉 検出面から縄文時代晩期前葉の時期と思われる。

SC02 焼土遺構

遺構（第 127 図、写真図版 145）

〈位置〉 A 調査区、I XVI グリッドの南西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 現地性の焼土であり、検出面はII層中である。

〈規模・形状〉 平面形は不整形で規模は 44 cm×37 cm、焼土の厚さは 5 cm である。焼土は水平に形成されている。焼土内に円礫が 1 個みとめられたが、炉の構成礫とは認めがたい。

遺物 出土していない。

〈時期〉 検出面から縄文時代晩期前葉の時期と思われる。

SC03 焼土遺構

遺構（第 127 図、写真図版 145）

〈位置〉 A 調査区、J XVI グリッドの西側に位置しており

〈検出状況・重複関係〉 現地性の焼土であり、当焼土の下位には SA04 住居跡がある。検出面はII層上面である。

〈規模・形状〉 平面形は不整形で規模は 112 cm×90 cm、焼土の厚さは 10 cm を測る。焼土は水平に形成されている。

遺物 出土していない。

〈時期〉 検出面から縄文時代晩期前葉の時期と思われる。

SC04 焼土遺構

遺構（第 127 図、写真図版 146）

〈位置〉 B 調査区、UVI グリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉

〈規模・形状〉 平面形は不整形を呈する。規模は 55 cm×63 cm で、中央部に鉢形土器が埋設されている。内部の焼成最大層厚は 5 cm である。

遺物（第 352・357 図、写真図版 312・316）

〈土器〉 2466 は LR 縄文が施文された甕の下半部である。

〈石器〉 2561 は多面体の一稜線に磨面を持った磨石である。

〈時期〉 検出状況から弥生時代前半の時期と考えられる。

SC05 焼土遺構

遺構（第 127 図、写真図版 146）

〈位置〉 B 調査区、UVI グリッドの西側に位置している。

〈規模・形状〉 平面形は不整形を呈する。規模は径 40 cm×45 cm で、内部の焼成最大層厚は 6 cm である。

遺物 出土していない。

〈時期〉 検出状況から弥生時代前半の時期と考えられる。

SC06 焼土遺構

遺構（第 128 図、写真図版 147）

〈位置〉 B 調査区、RVII グリッドの北東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 当焼土の下位には SA30 住居跡があり、住居跡より新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉 平面形は北東から南西に長軸をもつ不整楕円形を呈する。規模は径 25 cm×85 cm で、内部の焼成最大層厚は 5 cm である。

遺物（第 352 図、写真図版 312）

〈土器〉 2467 は縄文時代後期前葉の土器である。2468 は LR 縄文が施文された壺である。

〈時期〉 検出状況から弥生時代前半の時期と考えられる。

SC07 焼土遺構

遺構（第 128 図、写真図版 146）

〈位置〉 B 調査区、RVII グリッドの北東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉当焼土の下位には SA30 住居跡があり、住居跡より新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉平面形は北東から南西に長軸をもつ不整楕円形を呈する。規模は径 42 cm×65 cm で、内部の焼成最大層厚は 6 cm である。

遺物（第 352 図、写真図版 312）

〈土器・土製品〉 2469 は無文の壺である。2541 は鐔形土製品の上半である。

〈時期〉 検出状況から弥生時代前半の時期と考えられる。

SC08 焼土遺構

遺構（第 128 図、写真図版 147）

〈位置〉 B 調査区、R VII グリッドの北東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉当焼土の下位には SA30 住居跡があり、住居跡より新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉平面形はほぼ円形を呈する。規模は径 28 cm×33 cm で、内部の焼成最層厚は 6 cm である。

遺物（第 352 図、写真図版 312）

〈土器〉 2473 は縄文時代後期前葉の土器である。

〈時期〉 検出状況から弥生時代前半の時期と考えられる。

SC09 焼土遺構

遺構（第 128 図、写真図版 147）

〈位置〉 B 調査区、R VII グリッドの北東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉当焼土の下位には SA30 住居跡があり、住居より新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉平面形は南北に長軸をもつ不整形を呈する。規模は径 30 cm×47 cm で、内部の焼成最大層厚は 6 cm である。

遺物（第 352 図、写真図版 312）

〈土器〉 2470 は弥生時代初頭の土器と思われる。

〈時期〉 検出状況から弥生時代前半の時期と考えられる。

SC10 焼土遺構

遺構（第 128 図、写真図版 147）

〈位置〉 B 調査区、R VII グリッドの北東側、SH02 配石遺構の北東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉当焼土の下位には SA31 住居跡があり、住居より新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉平面形は不整円形を呈する。規模は径 43 cm×52 cm で、内部の焼成最大層厚は 5 cm である。

遺物 (第 352 図、写真図版 312)

〈土器〉 2471・2472 は弥生時代初頭の土器である。

〈時期〉 検出状況から弥生時代前半の時期と考えられる。

SC11 焼土遺構

遺構 (第 128 図、写真図版 147)

〈位置〉 B 調査区、RVIIグリッドの北東側、SH02 配石遺構の南側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 当焼土の下位には SA31 住居があり住居跡より新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉平面形は不整円形を呈する。規模は径 33 cm×50 cm で、内部の焼成最大層厚は 5 cm である。

遺物 出土していない。

〈時期〉 検出状況から弥生時代前半の時期と考えられる。

SC12 焼土遺構

遺構 (第 128 図、写真図版 148)

〈位置〉 B 調査区、RVIIグリッドの北東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 当焼土の下位には SA31 住居があり住居跡より新しく位置づけられる。

〈規模・形状〉平面形は南北に長軸をもつ楕円形を呈する。規模は径 33 cm×60 cm で、内部の焼成最大層厚は 5 cm である。

遺物 (第 352 図、写真図版 312)

〈土器〉 2474 は縄文時代晩期前葉の土器である。

〈時期〉 検出状況から弥生時代前半の時期と考えられる。

SC13 炉跡

遺構 (第 127 図、写真図版 148)

〈位置〉 B 調査区、OVIIグリッドの北東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA34 住居跡に隣接している。検出面はII層下位(黒色土)である。

〈規模・形状〉炉は石囲い炉で、直径 62 cm に 14 cm~24 cm 大の角礫を東を開く形に「コ」の字状に埋置しているものである。炉内は赤褐色土に焼成化している。焼成最大層厚は 5 cm である。この炉に対応する住居跡の壁・柱穴が検出されていないことから単独の炉として認定した。

遺物 (第 352 図、写真図版 312)

〈土器〉 縄文時代前期前葉 (2475)、中期前半 (2476・2477)、後期前葉 (2478) が出土している。
〈時期〉 縄文時代の遺構であるが時期の詳細については不明である。

SC14 炉跡

遺構 (第 127 図、写真図版 148)

〈位置〉 B 調査区、UVI グリッドの西側に位置している。

〈規模・形状〉 炉は石囲い炉で、8～16 cm 大の角礫を北東側を開く形に径 60 cm の半円状に埋置している。炉内に焼成痕は認められない。

遺物 出土していない。

〈時期〉 検出状況から弥生時代前半の時期と考えられる。

SC15 焼土遺構

遺構 (第 129 図、写真図版 148)

〈位置〉 B 調査区、I VI グリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 約半分ほどが調査グリッド外に延びている。SA51 住居跡の上位にあり、この住居跡より新しい。投棄された焼土群である。

〈規模・形状〉 170 cm×56 cm ほどの規模で、平面形は不整形である。

遺物 (第 352・353・356・357 図、写真図版 312・313・315・316)

〈土器・土製品〉 口縁部文様帯に貼瘤、頸部は無文、胴部上半に雲形文が施文されている。ネガ部はポジ部より低くなっている。2482 は口縁部文様帯には平行沈線文、胴部に雲形文が施文された浅鉢である。2483 は無文の壺である。2484 は頸部が無文、胴部に LR 縄文が施文された LR 縄文が施文された壺である。頸部に軽い段をもち貼瘤が見られる。胴部最大径を肩部にもつものである。2485 は雲形文が施文された注口である。ネガ部はポジ部より低くなっている。2486 は頸部が無文、胴部に LR 縄文が施文された鉢である。2487 は LR 縄文が施文された深鉢である。口唇部は平坦に調整されている。2488 は口縁部が内湾し口唇部が肥厚する深鉢である。胎土に赤色粒子を含み内面には調整の際の粘土のまくれが残っている。2489 は口唇部に低い山形突起が付され胴部に RL 縄文が施文された内湾する深鉢である。2542 は土製円盤である。

〈石器〉 2662 は両面が細部加工された異形石器である。基部は凹基となっている。

〈時期〉 縄文時代晩期中葉前半頃と推定される。

SC16 焼土遺構

遺構 (第 127 図、写真図版 148)

〈位置〉 B 調査区、G VI グリッドに位置している。

〈検出状況・重複関係〉縄文時代晩期前葉の遺物が出土する層の上面で検出された。一部調査区外に延びている。現地性の焼土である。

〈規模・形状〉推定 50 cm×44 cm・深さ 10 cm、平面形は不整形である。

遺物 出土していない。

〈時期〉縄文時代晩期中葉前半頃と推定される。

SC17 焼土遺構

遺構（第 127 図、写真図版 149）

〈位置〉B 調査区、H VII グリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SC18・SC19・SC20 焼土遺構と隣接している。これらと同レベルで検出されており一連の焼土と思われる。現地性の焼土である。

〈規模・形状〉48 cm×40 cm の規模で、平面形は不整形である。

遺物 出土していない。

〈時期〉縄文時代晩期中葉前半頃と推定される。

SC18 焼土遺構

遺構（第 129 図、写真図版 149）

〈位置〉B 調査区、I VII グリッドの西側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SC17・SC19・SC20 焼土遺構と隣接している。これらと同レベルで検出されており一連の焼土と思われる。現地性の焼土である。

〈規模・形状〉44 cm×34 cm の規模で、平面形は不整形である。

遺物 出土していない。

〈時期〉縄文時代晩期中葉前半頃と推定される。

SC19 焼土遺構

遺構（第 129 図、写真図版 149）

〈位置〉B 調査区、I VII グリッドの中央部に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SC17・SC18・SC20 焼土遺構と隣接している。これらと同レベルで検出されており一連の焼土と思われる。現地性の焼土である。

〈規模・形状〉32 cm×32 cm の規模で、平面形は不整形である。

遺物 出土していない。

〈時期〉縄文時代晩期中葉前半頃と推定される。

SC20 焼土遺構

遺構（第 129 図、写真図版 149）

〈位置〉 B 調査区、I VII・HVII グリッドの境界に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SC17・SC18・SC19 焼土遺構と隣接している。これらと同レベルで検出されており一連の焼土と思われる。SA21 焼土遺構の下位にあり、現地性の焼土である。

〈規模・形状〉 40 cm×24 cm の規模で、平面形は不整形である。

遺物 出土していない。

〈時期〉 縄文時代晩期中葉前半頃と推定される。

SC21 焼土遺構

遺構（第 130 図、写真図版 149）

〈位置〉 B 調査区、HVII グリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA21 焼土遺構の上位にあり、投棄された焼土である。

〈規模・形状〉 346 cm×236 cm・層厚 10 cm± の規模で、平面形は不整形である。

遺物（第 353・356・357 図、写真図版 312・313・315・316）

〈土器〉 2490 は台の高い無文の台付鉢である。口唇部には 3 個 1 対の低い山形突起が 6 ヶ所に付されている。2491 は口唇部がやや肥厚し胴部に LR 縄文が施文された深鉢である。晩期中葉（2492～2494）が出土している。縄文 2543 は土製円盤、2544 は無文のミニチュア台付鉢である。

〈石器・石製品〉 2564 は半円状偏平打製石器である。偏平な両面は凹石と兼用している。2565 は打製石斧状のものである。2566 は長軸方向の両端部アバタ状の敲打痕が見られる敲石である。

〈時期〉 縄文時代晩期中葉頃と思われる。

SC22 焼土遺構

遺構（第 129 図、写真図版 149）

〈位置〉 I VII・HVII グリッドの境界に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 現地性の焼土である。

〈規模・形状〉 68 cm×54 cm・層厚 10 cm± の規模で、平面形は楕円形である。

遺物（第 356・358 図、写真図版 315・316）

〈土製品〉 2545 の土製円盤と焼成粘土が 2 点（2546・2547）出土している。

〈石器〉 2569 は横型の石匙である。

〈時期〉 縄文時代晩期中葉頃と思われる。

SC23 焼土遺構

遺構 (第 129 図)

〈位置〉 B 調査区、JVII グリッドの西側にあり、SA24 焼土遺構と隣接している。

〈検出状況・重複関係〉 投棄された焼土である。

〈規模・形状〉 68 cm×68 cm の規模で、平面形は不整形である。

遺物 (第 357 図、写真図版 316)

〈石製品〉 2568 は石棒の先端部と思われる。

〈時期〉 縄文時代晩期中葉頃と思われる。

SC24 焼土遺構

遺構 (第 129 図)

〈位置〉 B 調査区、JVII グリッドの西側にあり、SA23 焼土遺構と隣接している。

〈検出状況・重複関係〉 投棄された焼土である。

〈規模・形状〉 86 cm×72 cm の規模で、平面形は略円形である。

遺物 出土していない。

〈時期〉 縄文時代晩期中葉頃と思われる。

SC25 炉跡

遺構 (第 130 図、写真図版 150)

〈位置〉 B 調査区、I VIII グリッドの北側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 柱穴・壁に相当するものが検出できなかったため、単独の炉として取り扱うことにした。

〈規模・形状〉 南側が開放したコの字状の石囲炉である。100 cm×66 cm の規模で、南北に長軸方向を持っている。構成礫として長大な礫を使用している。

遺物 (第 353・359 図、写真図版 312・316)

〈土器〉 2495 は縄文時代前期前半の土器である。

〈石器・石製品〉 石鏃 2 点 (2585・2588)、石匙 2 点 (2589・2590)、石斧 1 点 (2586) が出土している。

〈時期〉 縄文時代の遺構であり、縄文時代前期より新しいことは明かである。検出面などから縄文時代後期後半の時期が考えられる。

SC26 焼土遺構

遺構 (第 130 図、写真図版 150)

〈位置〉 B調査区の、I VIIIグリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SC27 焼土遺構と隣接しており、この焼土遺構と同レベルで検出されている。投棄された焼土である。

〈規模・形状〉 平面形は略円形で、150 cm×124 cm の広がりをもつ。

遺物（第 353・356 図、写真図版 312・315）

〈土器〉 2496・2497 は縄文晩期中葉の土器である。2555 の焼成粘土が 1 点出土している。

〈時期〉 縄文時代晩期中葉頃と思われる。

SC27 焼土遺構

遺構（第 130 図、写真図版 148）

〈位置〉 B調査区の、I VIIIグリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SC26・SC28・SC29 焼土遺構と隣接しており、これらの焼土遺構と同レベルで検出されている。投棄された焼土である。

〈規模・形状〉 平面形は不整形で東西に細長く、466 cm×118 cm の広がりをもつ。

遺物（第 354・356・357 図、写真図版 313・314・316）

〈土器・土製品〉 2498 は口縁部が内湾し口縁部が肥厚する平縁の深鉢である。胴部には 0 段多条の LR 縄文が施文されている。2499 は RL 縄文が施文された深鉢である。2500 は無文の注口の下半部である。2501 は口縁部に平行沈線、胴部に無節縄文が施文された小型の鉢である。2502～2504 は縄文晩期中葉前半の土器である。焼成粘土 1 点（2549）と土版が 1 点（2550）が出土している。土版は内外面に沈線で不規則な文様が施文されている。

〈石器〉 2563 は縦型の石匙である。

〈時期〉 縄文時代晩期中葉前半の時期が考えられる。

SC28 焼土遺構

遺構（第 131 図、写真図版 150）

〈位置〉 B調査区の、I VIIIグリッドの中央部に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SC27・SC29 焼土遺構と隣接しており、これらの焼土遺構と同レベルで検出されている。投棄された焼土である。

〈規模・形状〉 平面形は不整形、204 cm×124 cm の広がりをもつ。

遺物（第 354・355・356・357・358・359 図、写真図版 314～317）

〈土器〉 2506 は LR 縄文が施文された深鉢である。2507 は口唇部は装飾状で頸部には浮彫手法で入組文が施文されている。頸部の張り出し部分に刻目帯をもち胴部には LR 縄文が施文されている。内面の口縁部にも浮彫な文様が施文されている。頸部に括れをもち口縁部は外反してい

る。2508 は装飾口縁で頸部に刻目帯、胴部に LR 縄文が施文された鉢である。頸部に括れもち口縁部は緩やかに外反している。2510～2514 は縄文晩期中葉前半の土器である。2552 は土玉である。焼成前の穿孔が見られる。2551 は中実土偶の脚部と思われる。

〈石器〉石錐 1 点 (2567) と石製円盤 1 点 (2574) が出土している。また、剝片の集積が認められ多くは 2 次加工が見られない。

〈時期〉縄文時代晩期前葉後半頃と考えられる。

SC29 焼土遺構

遺構 (第 131 図、写真図版 150)

〈位置〉B 調査区の、I VIII グリッドの南側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉SC27・SC28 焼土遺構と隣接しており、これらの焼土遺構と同レベルで検出されている。投棄された焼土である。

〈規模・形状〉平面形は不整形、354 cm×274 cm の広がりをもつ。

遺物 (第 355・356・357・358 図、写真図版 314～316)

〈土器・土製品〉2515 は沈線で菱形文・弧状文が施文された壺である。結節部には瘤が貼付されている。他に、縄文後期後葉 (2519)、晩期初頭 (2516・2517)、晩期前葉後半 (2518) の土器が出土している。耳飾 1 点 (2548) と焼成粘土 3 点 (2553・2554・2556) が出土している。

〈石製品〉石製円盤が 1 点 (2570) 出土している。

〈時期〉縄文時代晩期前葉後半頃と考えられる。

SC30 炉跡

遺構 (第 131 図、写真図版 151)

〈位置〉B 調査区の、I VIII・I IX グリッドの境界に位置している。

〈検出状況・重複関係〉柱穴・壁に相当するものが検出されなかったため単独の炉として扱うことにした。

〈規模・形状〉南側が開放したコの字状の石囲炉である。80 cm×66 cm の規模で、南北に長軸方向を持っている。構成礫として長大な礫を使用している。

遺物 出土していない。

〈時期〉縄文時代後期後半の時期と考えられる。

SC31 焼土遺構

遺構 (第 132 図、写真図版 151)

〈位置〉B 調査区の、I VIII グリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA67 住居跡状遺構の上位に位置しており、住居跡状遺構より新しい。投棄された焼土である。胴部下半に沈線が巡り下半は無文である。

〈規模・形状〉 平面形は不整形、310 cm×196 cm の広がりで深さ 10～30 cm である。

遺物（第 355・357・358・359 図、写真図版 314～316）

〈土器・土製品〉 2522 は口縁部が内湾し胴部に LR 縄文が施文された深鉢である。2521 は算盤玉形の丸底の注口である。胴部上半には刻目文、下半は無文である。注口部は胴部の中央に付き、短いものである。2523 は装飾状の口縁でその直下に連続刺突文が巡り、胴部に LR 縄文が施文された鉢である。2524 は装飾口縁で、口縁部が直立気味の鉢である。2本の平行沈線が頸部にめぐり頸部文様帯には入組三叉文、胴部には LR 縄文が施文されている。外面に赤色顔料の痕跡が認められる。2533 は楕円形無文の浅鉢である。底部内面には全周する 2本の沈線が見られる。精選された胎土が使用されており、内外面ともていねいな磨きが施されている。2525～2529 は縄文晩期中葉前半の土器である。土製円盤 1点（2557）とミニチュアの無文注口（2558）が出土している。

〈石器・石製品〉 石鏃 4点（2571・2576・2578・2580）、石錐 4点（2572・2577・2581・2582）、石匙 1点（2573）、石製円盤 2点（2575・2579）、異形石器 1点（2583）が出土している。

〈時期〉 縄文時代晩期前葉から中葉の時期と考えられる。

SC32 焼土遺構

遺構（第 132 図、写真図版 151）

〈位置〉 B 調査区の、HIXグリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA60 住居跡の上位に位置しており、住居跡より新しく攪乱を受けている。現地性の焼土である。

〈規模・形状〉 平面形は不整形、88 cm×48 cm の広がりで深さ 10 cm±である。

遺物（第 356・359 図、写真図版 315・316）

〈土器〉 2534 は LR 縄文が施文された深鉢である。

〈石製品〉 2587 の半円状偏平打製石器が 1点と石鏃 1点（2584）が出土している。

〈時期〉 縄文時代晩期前半の時期と考えられる。

SC33 焼土遺構

遺構（第 131 図、写真図版 151）

〈位置〉 B 調査区の、HIXグリッドの東側に位置している。

〈検出状況・重複関係〉 SA33 住居跡の上位に位置しており、住居跡より新しい。現地性の焼土である。

〈規模・形状〉 平面形は不整形、46 cm×36 cm の広がりで深さ 10 cm±である。

遺物 (第 356 図、写真図版 315)

〈土器〉 2535 は主体的に横走る縄文が施文された深鉢の下半部である。

〈時期〉 縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭の時期が考えられる。

SC34 炉跡

遺構 (第 132 図、写真図版 152)

〈位置〉 B調査区、J Xグリッドの西側、SC35 炉の 60 cm 南側に位置している。

〈規模・形状〉 炉に対応する壁・柱穴等の存在が確認されないことから単独の炉として扱うことにした。炉の縁石は 15 cm 大の亜角礫を構成礫とし、70 cm×60 cm の規模の略円形を呈している。

遺物 (第 356・357 図、写真図版 315)

〈土器・土製品〉 2536 は LR 縄文が施文された薄手の深鉢である。焼成粘土が 1 点 (2560) 出土している。

〈時期〉 縄文時代晩期前半の時期と思われる。

SC35 炉跡

遺構 (第 132 図、写真図版 152)

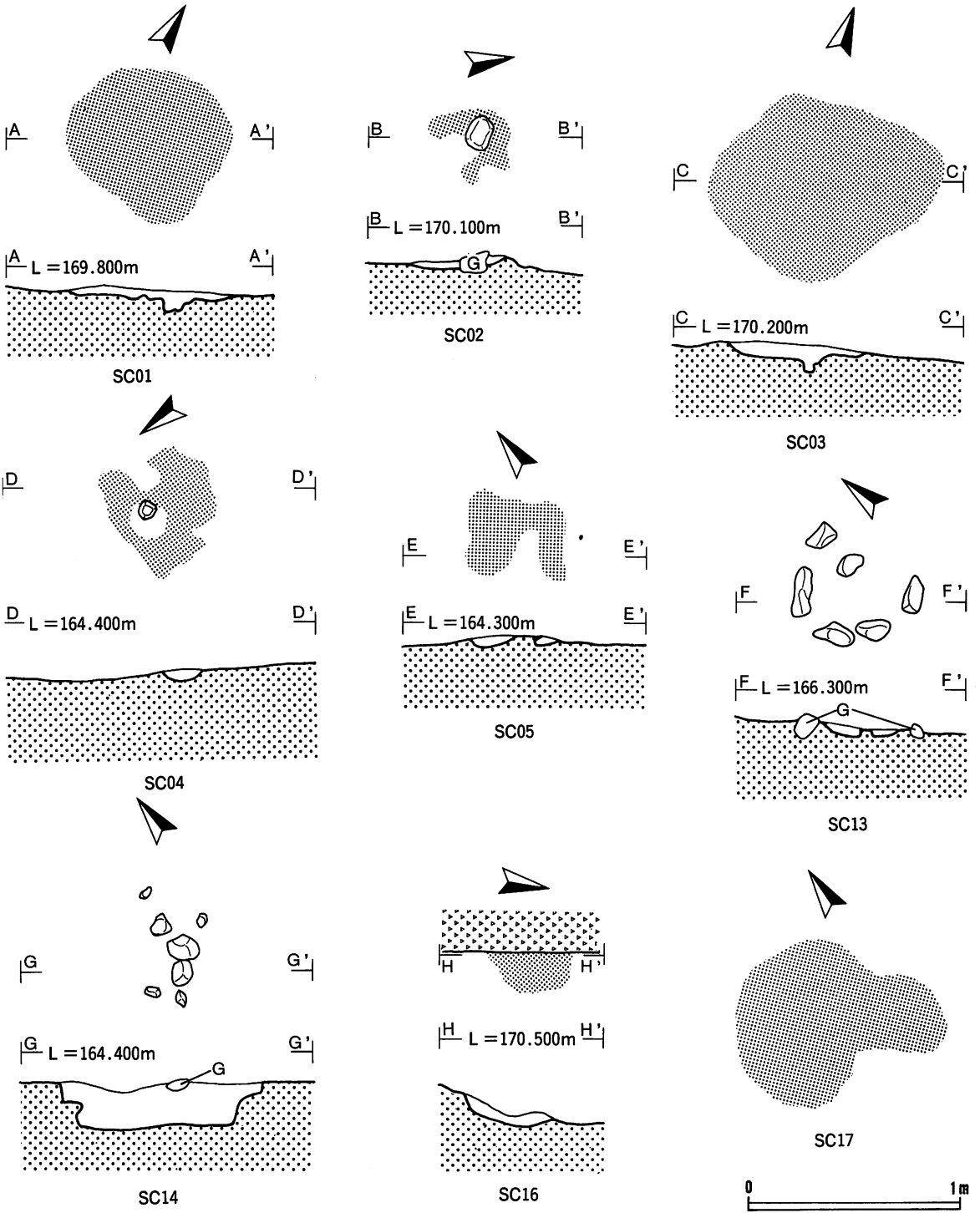
〈位置〉 B調査区、J Xグリッドの西側に位置している。

〈規模・形状〉 中央部に土器を埋設した石囲炉である。この炉に対応する壁・柱穴等の存在が確認されないことから単独の炉として扱うことにした。炉の縁石は 15 cm 大の亜角礫を構成礫とし東側が開く、C字状を呈している。

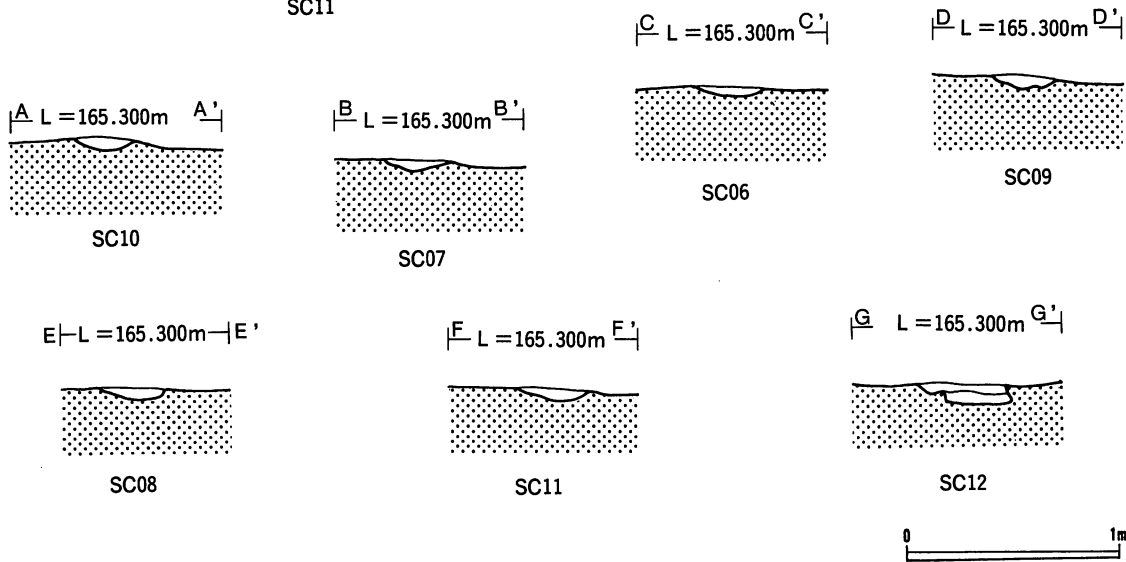
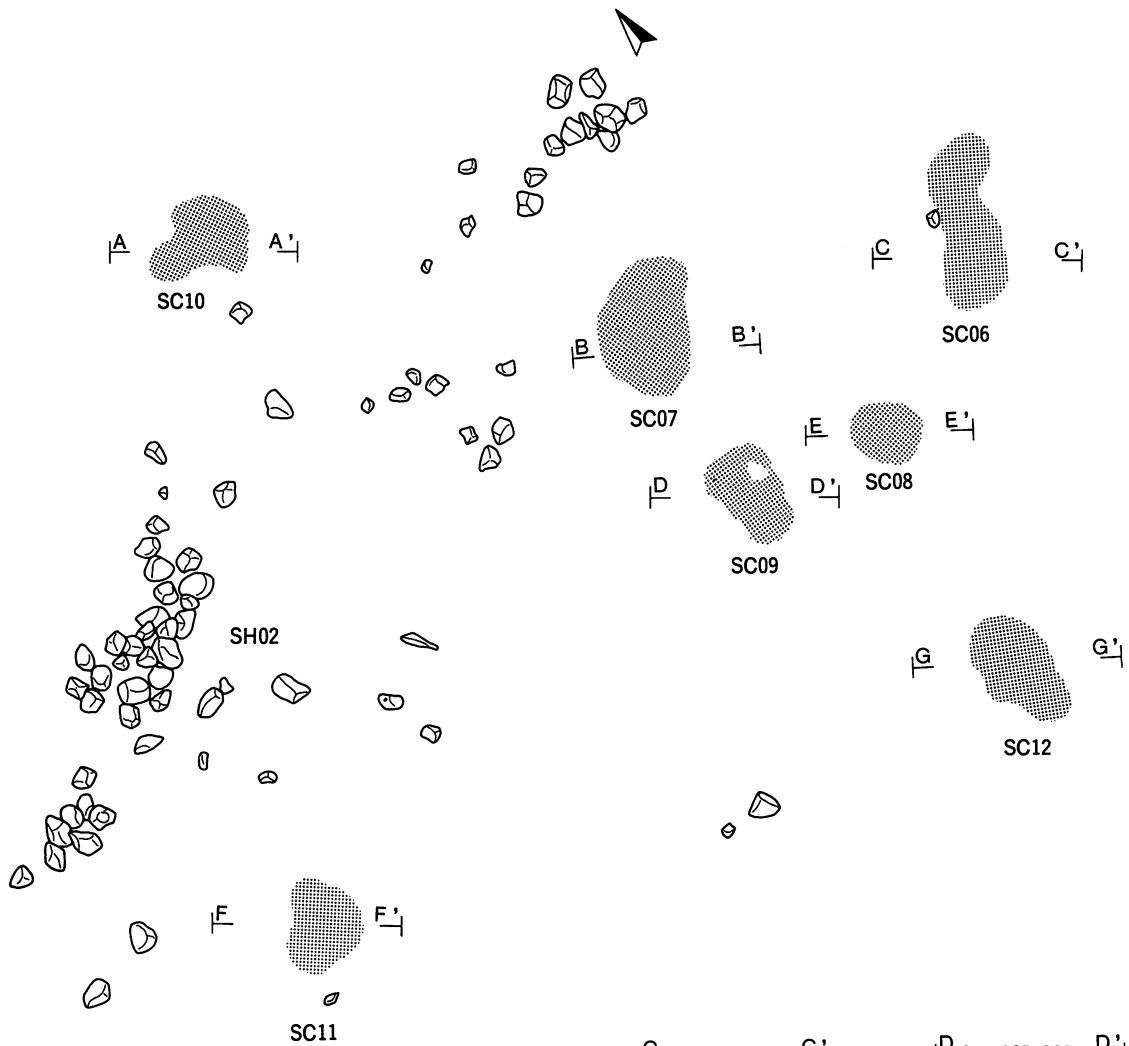
遺物 (第 356・357 図、写真図版 315)

〈土器・土製品〉 2537 は RL 縄文が施文された壺の下半部である。最大径を胴部付近もっている。縄文後期後葉 (2540)、晩期初頭 (2538)、晩期中葉 (2540) の土器が出土している。焼成粘土が 1 点 (2559) 出土している。

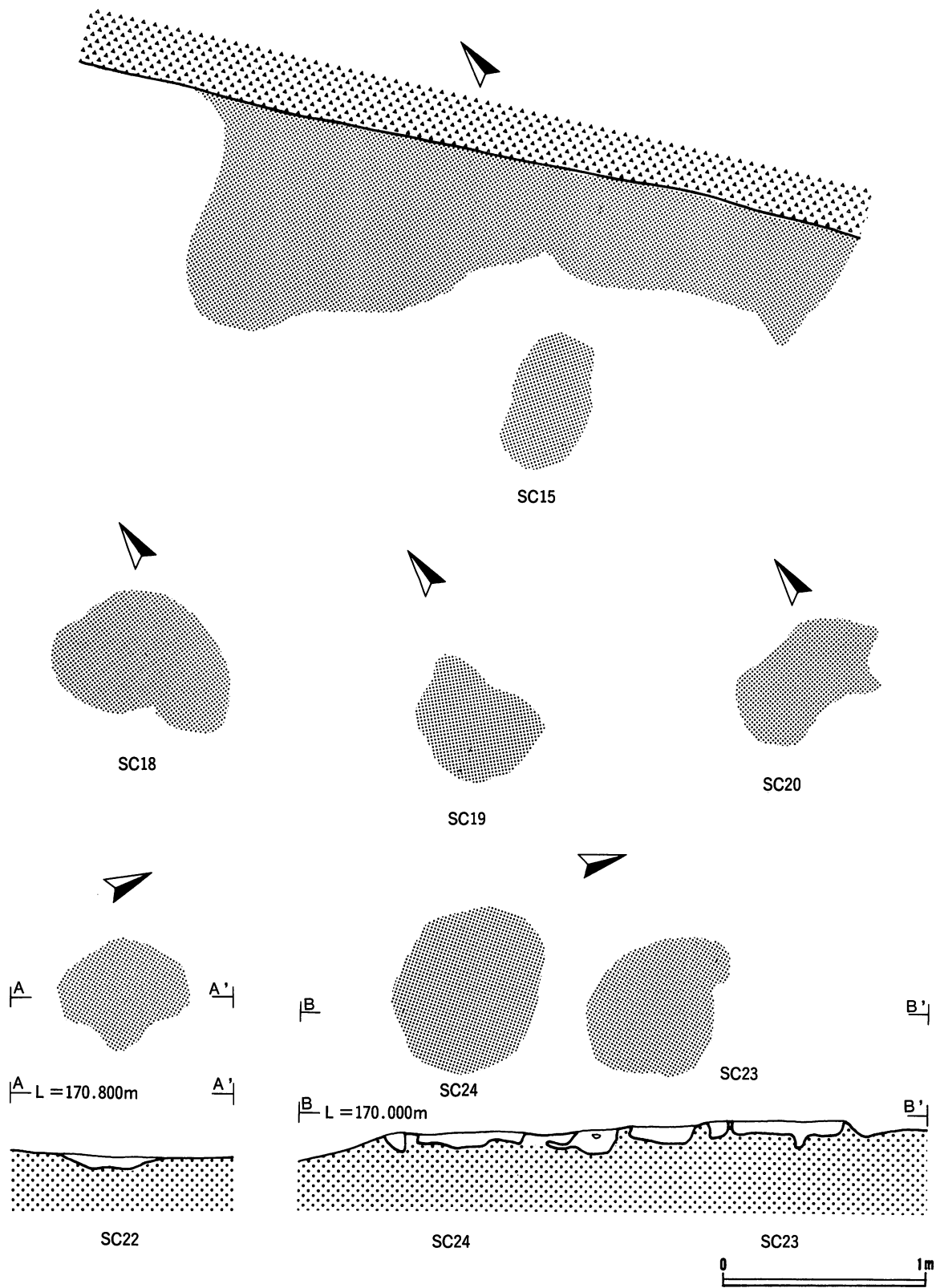
〈時期〉 縄文時代晩期前半から中葉の時期と思われる。



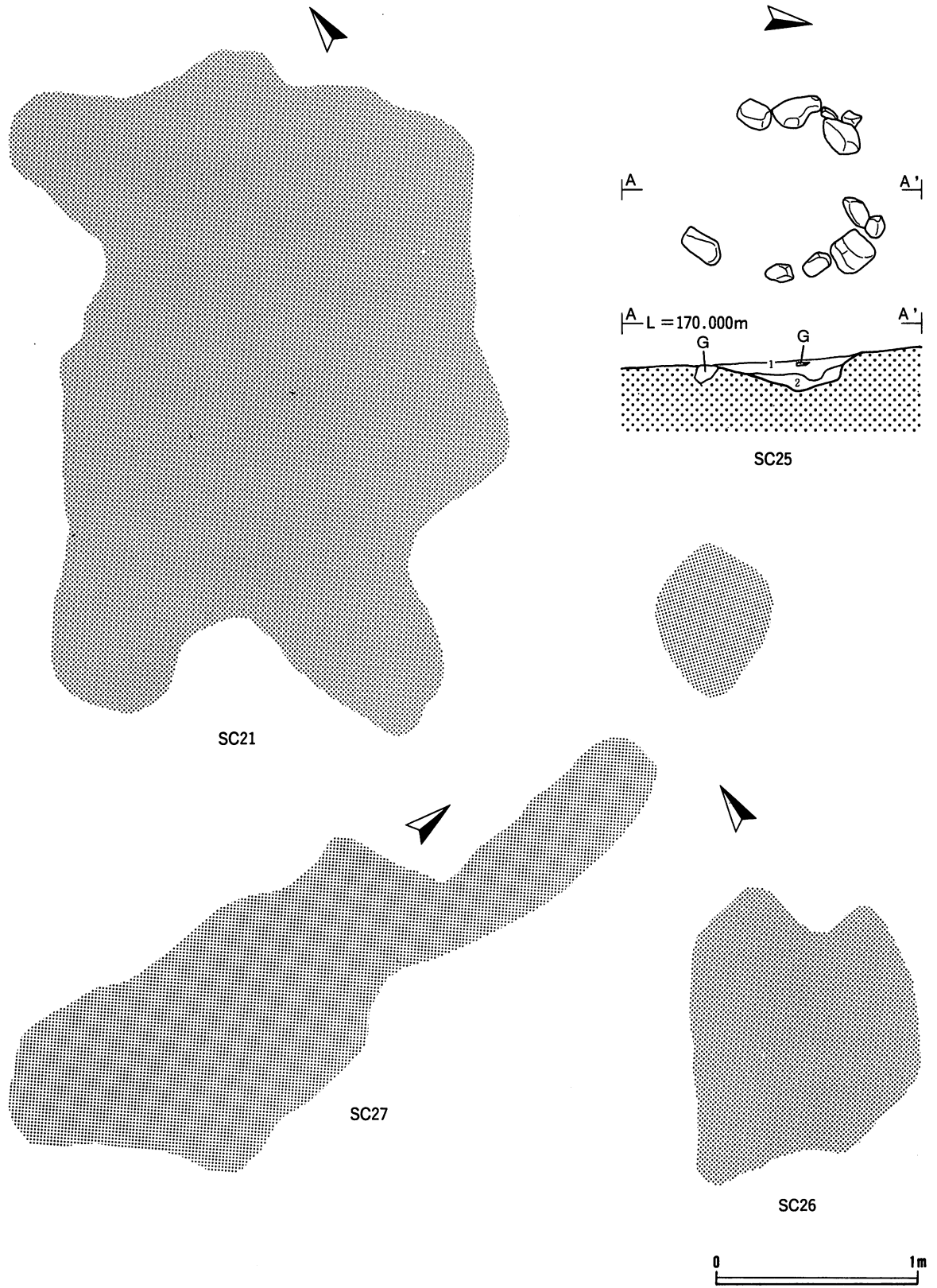
第127图 烧土遺構・炉跡



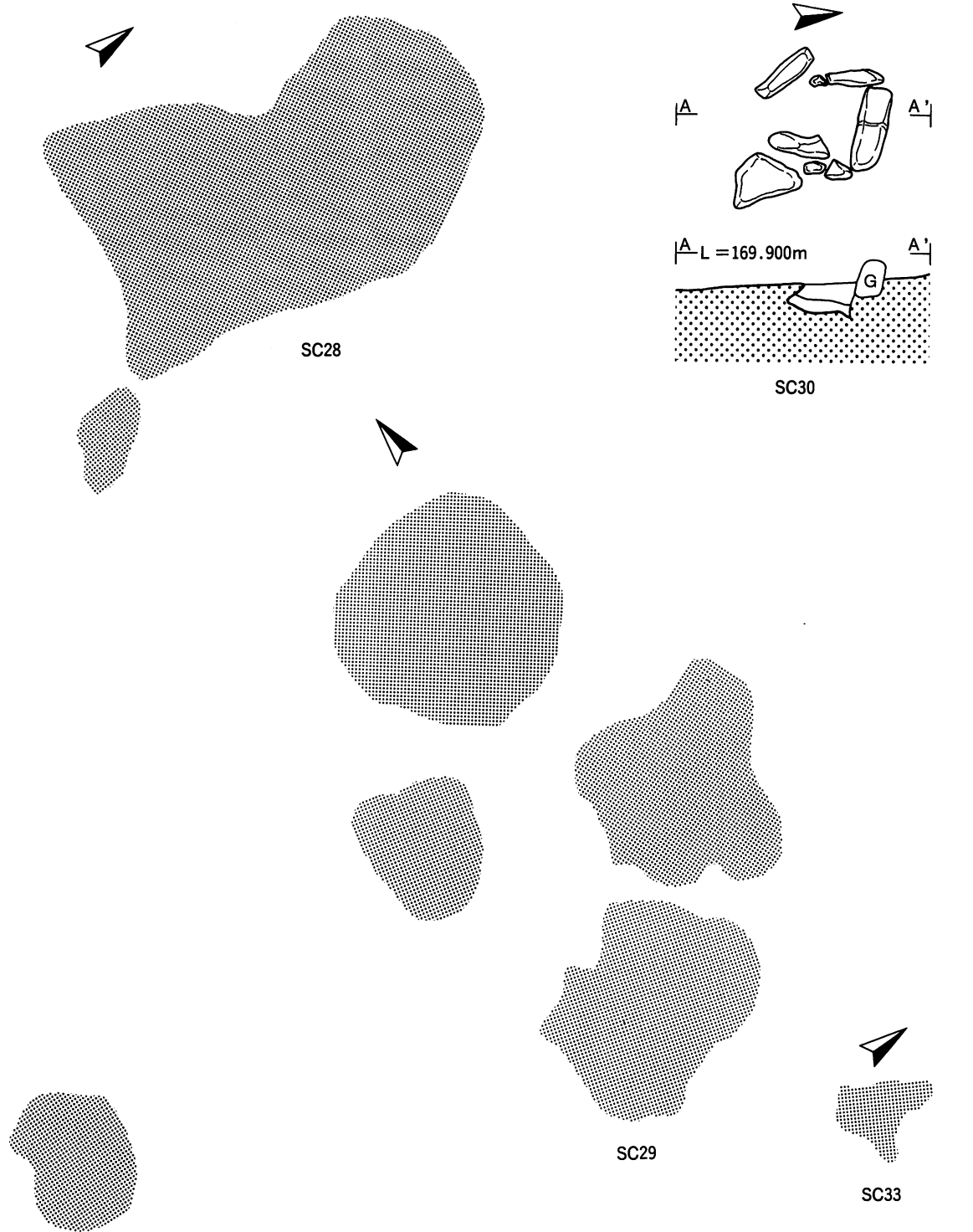
第128図 焼土遺構・炉跡



第129図 烧土遺構

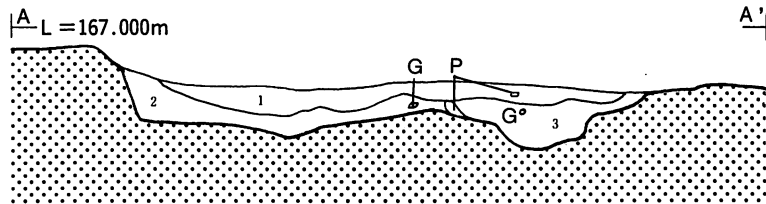
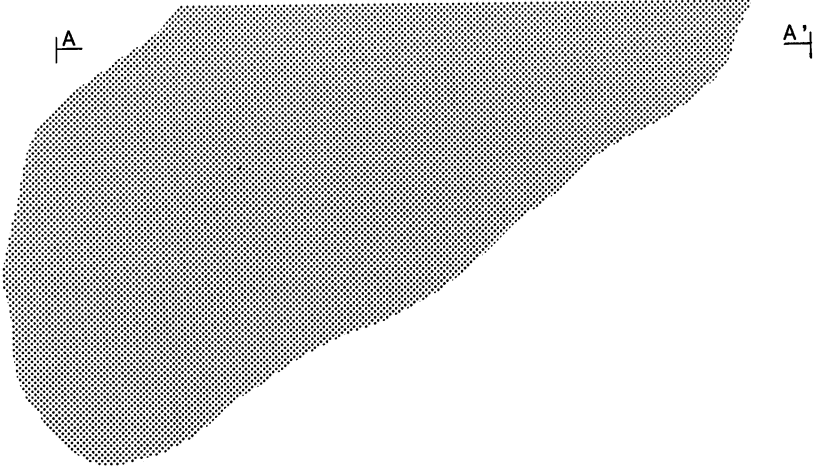


第130图 烧土遺構・炉跡

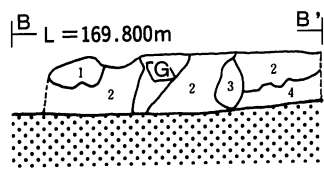
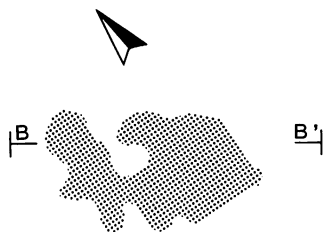


第131図 焼土遺構・炉跡

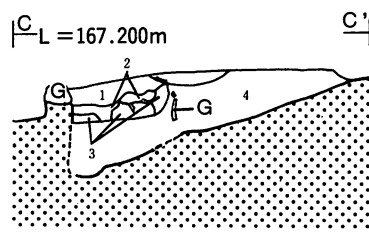
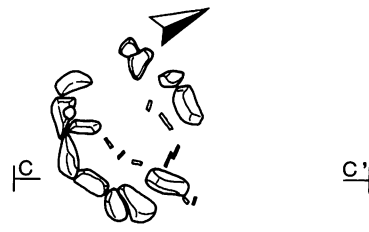
0 1m



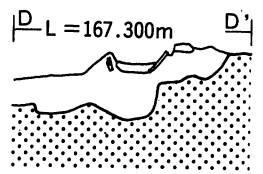
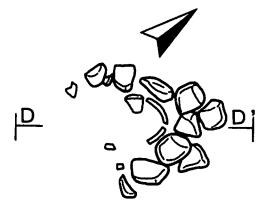
SC31



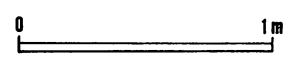
SC32



SC34



SC35



第132图 烧土遺構・炉跡

5. 土器埋設遺構

SG01 土器埋設遺構

遺構（第 133 図、写真図版 152）

B 調査区、Q VII グリッドにあり SA32 住居跡の北西側に位置している。検出面は II 層下部で、深鉢形土器の上半部が正立に埋設されていた。明瞭な掘り込みは確認されなかった。土器内部は黒色のシルト質土が充填されている。

遺物（第 361 図、写真図版 318）

2592 は胴部上半に若干の膨らみをもち、口縁部は緩やかに外反する深鉢形土器である。平縁で、口縁部文様帯には 2 個の円孔が見られる。綾絡文と C 字形の爪形圧痕文により口縁部文様帯と胴部文様帯が区画されている。約 6 cm 幅の口縁部文様帯には撚紐と爪形の圧痕とにより幾何学状の文様が施文されている。胴部全面には、縦位の綾絡文と木目状撚糸文が施文される。円筒下層 D 式に比定される土器である。

SG02 土器埋設遺構

遺構（第 133 図、写真図版 152）

B 調査区、I VII グリッドの南側にあり SD091 土坑の上部に位置している。この土坑とは関係しない単独の土器埋設遺構と判断した。深鉢形土器が倒立の状態で埋設されていた。明瞭な掘り込みは確認されなかった。

遺物（第 361 図、写真図版 318）

2593 は体部全面に LR 縄文が施文された平縁の深鉢形土器である。比較的薄手で口縁部は内湾しており、底部はやや上げ底となっている。口唇部は平坦に調整されている。内外面に煤の付着が見られる。土器内から焼成粘土（2608）と破損した耳飾り（2607）が各 1 点出土している。縄文時代晩期前葉の土器と思われる。

SG03 土器埋設遺構

遺構（第 133 図、写真図版 153）

B 調査区、J VIII グリッドの南西隅に位置している。胴部上半が欠失した深鉢形土器が正立に埋設され、その内部には脚部を下向きにした入れ子の状態の台付鉢形土器が出土している。土器の内部は黄褐色浮石細粒が混じった黒～黒褐色のシルト質土が充填されていた。

遺物（第 361 図、写真図版 318）

2595 は正立の深鉢形土器の内部から入れ子の状態で見つかった台付鉢形土器である。口縁部は二叉状の緩やかな山形突起であり、口縁部に巡る 2 条の横位沈線と胴部中央部に巡る 2 条の

横位沈線の間には LR 縄文が施文された入組帯縄文が施文されている。2594 は正立の状態で見えていた。明瞭な掘り込みは確認されなかった。土器の内部は微量の焼土が混じった黒色のシルト質土で充填されていた。

SG04 土器埋設遺構

遺構 (第 133 図、写真図版 153)

B 調査区、J VIII グリッドの南西側に位置している。粗製の深鉢形土器が正立の状態で見えていた。明瞭な掘り込みは確認されなかった。土器の内部は微量の焼土が混じった黒色のシルト質土で充填されていた。

遺物 (第 362 図、写真図版 318)

2596 は口縁部が欠失しているが、胴部に LR 縄文が施文された粗製の深鉢形土器である。外面に煤の付着が見られる。周辺から出土している土器などから縄文時代晩期中葉の時期と考えられる。

SG05 土器埋設遺構

遺構 (第 133 図、写真図版 153)

B 調査区、J VIII グリッドの北側に位置している。片口の鉢形土器が正立の状態で見えていた。明瞭な掘り込みは確認されなかった。土器の内部は黄褐色浮石細粒を含む黒色のシルト質土で充填されていた。

遺物 (第 362 図、写真図版 319)

2598 は片口の鉢形である。口縁部は平縁で、頂部の口唇部分にくぼみを持つ低い山形突起が片口の両側に 3 個一対、その他の場所には 2 個一対で 3 カ所に付されている。口縁部は内湾しており、沈線間に刻目の施された 3 条の沈線が巡っている。全面に LR 縄文が施文されている。文様の特徵から縄文時代晩期前葉後半頃の土器と思われる。

SG06 土器埋設遺構

遺構 (第 133 図、写真図版 153)

B 調査区、J VII グリッドの南西側に位置している。III 層中を遺構構築面としている。粗製の鉢形土器を倒立の状態で見えていた。明瞭な掘り込みは確認されなかった。土器の内部は混入物を含まない黒色のシルト質土である。

遺物 (第 362 図、写真図版 319)

2599 はバケツ形の鉢である。口縁部は平縁で口唇部は平坦に調整され、胴部には LR 縄文 (0

段多条) が密に施文されている。胴部外面には少量の煤が付着している。縄文時代後期後半の時期と思われる。

SG07 土器埋設遺構

遺構 (第 133 図、写真図版 154)

B 調査区、J VII グリッドの北側に位置している。約 50 cm 東側には SG08 土器埋設遺構がある。明瞭な掘り込みは確認されなかったが、胴部上半が欠失した粗製の深鉢形土器が正立の状態で見捨てられていた。土器内部には黄褐色浮石細粒混じりの黒色のシルト質土が充填されていた。

遺物 (第 362 図、写真図版 319)

2597 底部付近に無文部を残し、胴部に LR 縄文が施文された粗製の深鉢である。外面には広範囲に煤の付着が認められた。層位、土器の胎土等から縄文時代晩期中葉頃と思われる。

SG08 土器埋設遺構

遺構 (第 133 図、写真図版 154)

B 調査区、J VII グリッドの北側に位置している。明瞭な掘り込みは確認されなかったが、粗製の深鉢形土器が正立の状態で見捨てられていた。土器内部には黄褐色浮石細粒混じりの黒色のシルト質土が充填されていた。

遺物 (第 363 図、写真図版 319)

2600 は胴部上半に膨らみをもち口縁部が内湾する粗製の深鉢である。口唇部はやや肥厚し丸みをもっている。胴部に LR 縄文が施文されている。縄文時代晩期中葉頃と思われる。

SG09 土器埋設遺構

遺構 (第 134 図、写真図版 154)

B 調査区、J VIII グリッドの北西側に位置している。明瞭な掘り込みは確認されなかったが、粗製の深鉢形土器が正立の状態で見捨てられていた。土器との関係は不明であるが、約 10 cm 北側に土偶が出土している。

遺物 (第 363 図、写真図版 319)

2601 極端な上げ底の深鉢である。口唇部はやや肥厚し平坦に調整されている。胴部には撚りの異なる 2 種の原体を使用して羽状縄文 (非結束) が施文されている。胎土に大粒の沼鉄を多量に含んでいる。土器内から不定形の剥片石器が 1 点出土している (2604)。

SG10 土器埋設遺構

遺構（第 134 図、写真図版 154）

B 調査区、I VIII グリッドの南側に位置している。明瞭な掘り込みは確認されなかったが粗製の深鉢形土器が正立の状態 で埋設されていた。土器との関係は不明であるが、約 20 cm 西側に小形の鉢形土器が出土している。

遺物（第 363 図、写真図版 320）

2602 は極端な上げ底の粗製深鉢である。口唇部は平坦に調整されている。胴部には撚りの異なる 2 種の原体を使用して羽状縄文（非結束）が施文されている。内外面に煤の付着が認められる。縄文時代晩期初頭の時期と思われる。

SG11 土器埋設遺構

遺構（第 134 図、写真図版 155）

B 調査区、I VII グリッドの西側に位置している。明瞭な掘り込みは確認されなかったが、底部が欠失した粗製の深鉢形土器が倒立の状態 で埋設されていた。土器の内部は黄褐色浮石細粒を含む黒褐色のシルト質土が充填していた。土器との関係は不明であるが、約 20 cm 南側から土偶が出土している。

遺物（第 364 図、写真図版 320）

底部の欠損した粗製の深鉢形土器である。胴部には異なる原体で羽状縄文（非結束）が施文されている。口縁部の 1 カ所に 2 個一対の低い山形突起がついている。口縁部は内湾しており、口唇部は肥厚している。縄文時代晩期中葉頃と思われる。

SG12 土器埋設遺構

遺構（第 134 図、写真図版 155）

B 調査区、H VI グリッドの東側に位置している。明瞭な掘り込みは確認されなかったが、粗製の深鉢形土器が正立に近い状態 で埋設されていた。土器の内部には黒褐色のシルト質土が充填していた。

遺物（第 363 図、写真図版 320）

2603 は口縁部が内湾し、口唇部が平坦調整された粗製の深鉢である。胴部には LR 縄文が施文されている。内外面に煤の付着が見られる。縄文時代晩期前葉と思われる。

SG13 土器埋設遺構

遺構（第 134 図、写真図版 155）

B調査区、HVIグリッドの北側に位置している。明瞭な掘り込みは確認されなかったが、胴部上半が欠失した粗製の深鉢形土器が正立の状態で見つかった。土器の内部には黒褐色のシルト質土が充填していた。

遺物（第 364 図、写真図版 320）

室内整理の段階で埋設と同一個体の口縁部が見つかった。口縁部に 4 個の低い山形の突起をもつ粗製の深鉢形土器である。口縁部は内湾しており口唇部は内反りに調整されている。胴部には LR 縄文が施文されている。外面に煤の付着が見られる。縄文時代晩期前葉頃と思われる。

SG14 土器埋設遺構

遺構（第 134 図、写真図版 155）

B調査区、HVIグリッドの西側に位置している。明瞭な掘り込みは確認されなかったが、粗製の深鉢形土器が正立に近い状態で埋設されていた。土器の内部には黒褐色のシルト質土が充填していた。

遺物（第 365 図、写真図版 321）

2610 は口縁部に低い 2 個一対の山形突起を持つ粗製の深鉢形土器である。胴部中央から緩やかな弧を描いて内湾している。胴部に LR 縄文が施文される。外面全体に煤の付着が認められる。縄文時代晩期中葉頃と思われる。

SG15 土器埋設遺構

遺構（第 135 図、写真図版 156）

B調査区、IVIグリッドの西側に位置している。明瞭な掘り込みは確認されなかったが、正立に近い状態で粗製の深鉢形土器が埋設されていた。土器の内部は、黄褐色浮石細粒・炭化物・焼土を含んだ黒色のシルト質土が充填されていた。

遺物（第 365 図、写真図版 321）

2611 は 2 個一対の低い山形突起を持ち、非結束の羽状縄文が施文された粗製の深鉢形土器である。胴部は緩やかな弧を描き口縁部は内湾し、口唇部は肥厚している。胴部外面に微量の煤が付着している。縄文時代晩期中葉頃と思われる。

SG16 土器埋設遺構

遺構（第 135 図、写真図版 156）

B調査区、HVIグリッドに位置している。40 cm×38 cm の円形の掘り込みが見られ、深鉢形

土器が正立の状態 で埋設されていた。土器の内部は、少量の炭化物・黄褐色浮石細粒が混じった黒褐色のシルト質土が充填されていた。

遺物（第 365 図、写真図版 321）

2612 底部付近に 5 cm 程度の無文部を残し、全面に LR 縄文が施文された粗製の深鉢形土器である。平縁で口縁部が内湾しており、全体に薄手であるが口唇部は肥厚しに鋭く調整されている。底部は若干上げ底となっている。縄文時代晩期前葉の土器である。

SG17 土器埋設遺構

遺構（第 135 図、写真図版 156）

B 調査区、HVI グリッドの中央部に位置している。プラン検出の段階では明瞭な掘り込みが確認できなかったが、土層断面観察の段階で直径 45 cm 程度の掘り込みが認められた。粗製の深鉢形土器が正立の状態 で埋設されている。土器の内部には、小形の壺形土器が入っていた。掘り込み部分と深鉢土器の内部の土は、微量の炭化物を含んだ黒褐色のシルト質土である。

遺物（第 366 図、写真図版 321・322）

2614 は正立に埋設されていた深鉢形土器である。口縁部は内湾し、口唇部は若干肥厚しやや丸みをもっている。底部付近を除いた全面に LR 縄文が施文されている。内外面に煤の付着が見られる。底部はやや上げ底となっている。土器内から石製円盤が 1 点出土している (2617)。2616 は深鉢形土器の内部から出土した口縁部が欠失した壺形土器である。底部は丸底で 1 条の沈線が巡っている。外面が研磨され無文である。外面及び内面の頸部付近まで赤色顔料の痕跡が認められる。

SG18 土器埋設遺構

遺構（第 135 図、写真図版 157）

B 調査区、JX グリッドの北側に位置する。土器は八戸火山灰層の漸移層をほりこんで正立の状態 で埋設されている。土器の周辺に拳大の垂角礫がみられるが、埋設土器と直接的な係わりをもつものではない。土器の内部は黄褐色浮石混じりの黒色のシルト質土で充填されている。土器の内部からは遺物は出土していない。

遺物（第 365 図、写真図版 321）

2613 は LR 縄文が施文された粗製の深鉢形土器である。胎土・焼成・色調などから縄文晩期中葉前後の土器と思われる。

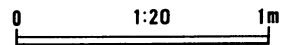
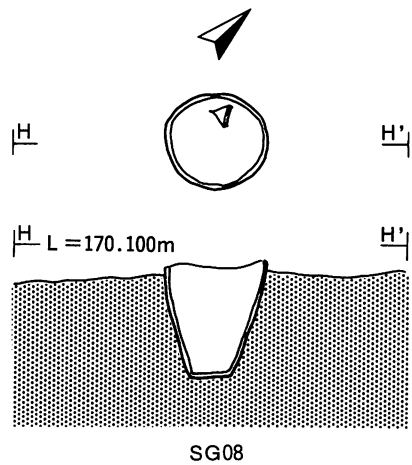
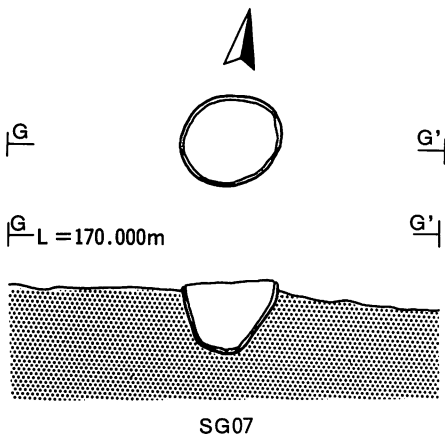
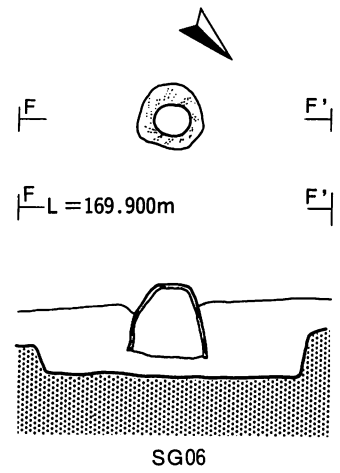
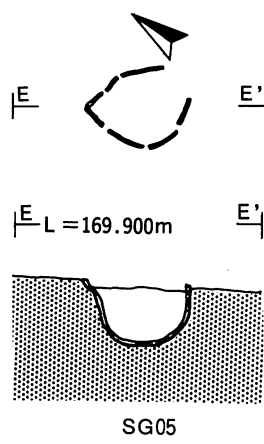
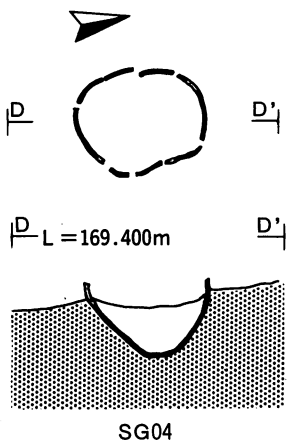
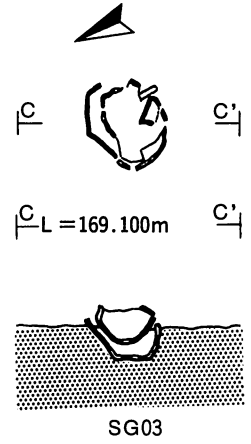
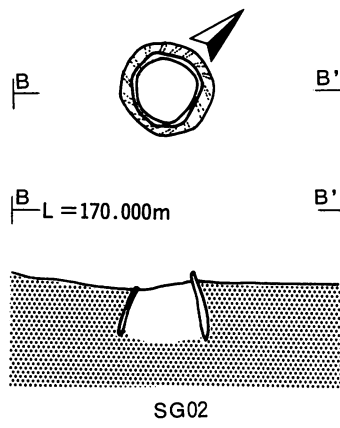
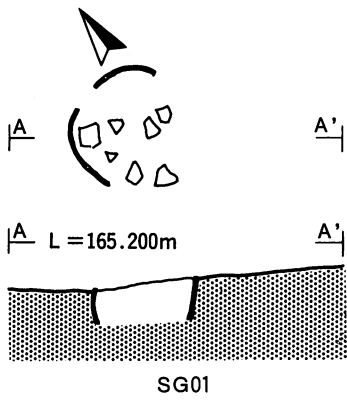
SG19 土器埋設遺構

遺構（第 135 図、写真図版 157）

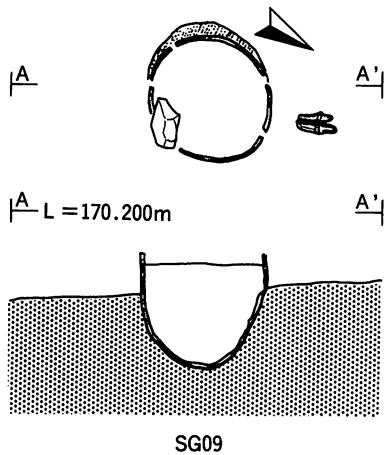
B調査区、J Xグリッドの北側に位置する。土器はIII層下部で検出され住居の貼床と考えられ、にごった南部浮石の下位に認められる。八戸火山灰層の漸移層を掘りこんで正立の状態に埋設されている。同心円状の掘り方が認められ、土器よりやや東によって掘り込みが作られている。土器の底部は埋設時点で既に欠失しており、土器の下部には厚さ 5 cm 程度の偏平な礫が出土している。この偏平な礫は土器の口縁部を塞ぐ目的で本来は置かれたものと考えられる。土器の内部はIII層起源と思われる黄褐色浮石混じりの黒色のシルト質土で充填されている。土器の内部からは偏平な礫が出土しただけである。

遺物（第 366 図、写真図版 322）

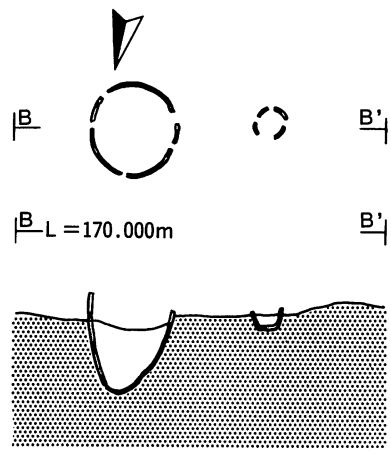
2615 は緩やかな四波状を呈する深鉢形土器である。胴部は直線的に外傾しており、頸部付近で急角度で外反する。口縁部文様帯と胴部文様帯は綾絡文により区画され、口縁部文様帯には撚紐圧痕により幾何学状の文様、胴部には木目状撚糸文が施文される。口縁部文様帯には波頂部から垂下する撚紐圧痕が施文された隆帯が貼付されている。内面は光沢が認められるほど丁寧に磨かれている。縄文時代前期後半円筒下層Dの土器である。



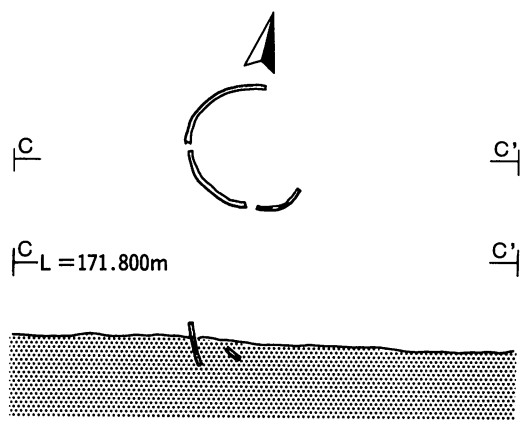
第133図 土器埋設遺構 (1)



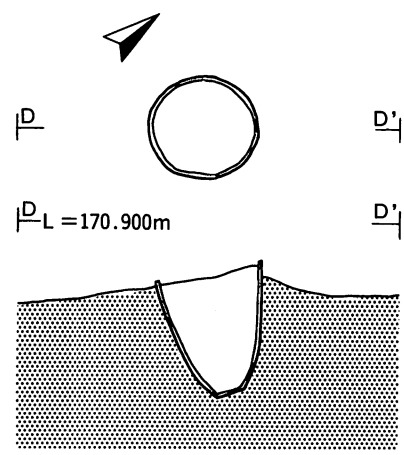
SG09



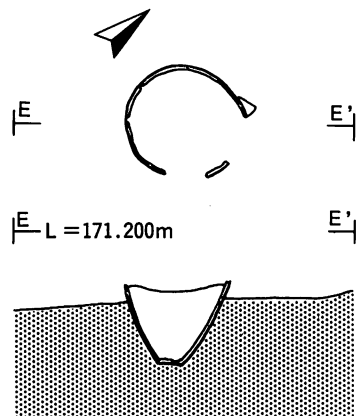
SG10



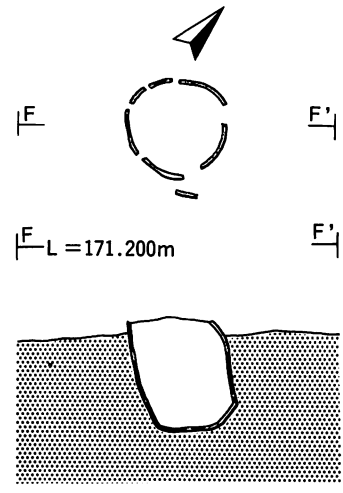
SG11



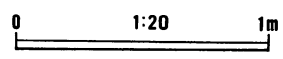
SG12



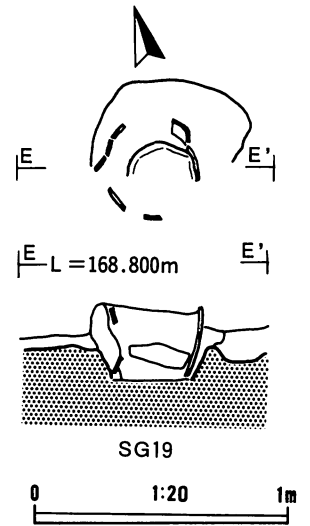
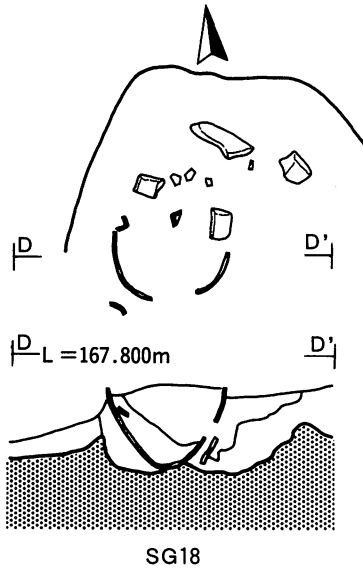
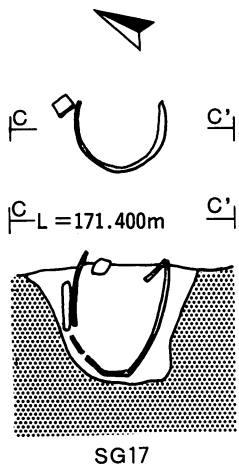
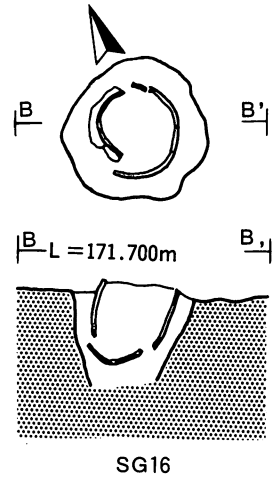
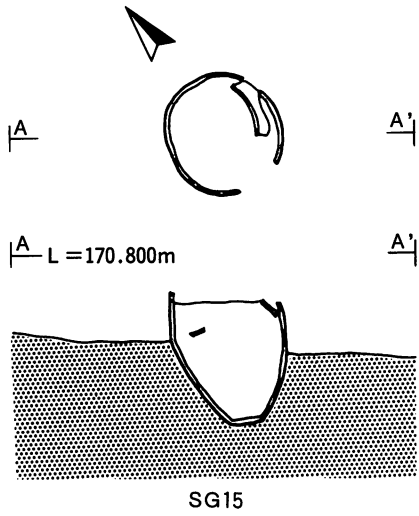
SG13



SG14



第134図 土器埋設遺構 (2)



第135図 土器埋設遺構 (3)

6. 集配石遺構

SH01 配石遺構

遺構（第 136 図、写真図版 157）

この遺構は調査グリッド北西側、SA34住居跡の南東寄りに位置する。中心部分の規模は、短軸 35cm、長軸150cmで、最小で6cm、最大で25×45cmの角礫をほぼ東西に長軸をもつ形に密に配石しているものである。これから南側約1m離れたところにも個々に礫の分布が認められる。

遺物 出土していない。

〈時期〉 遺構の確認面などから弥生時代前半の時期と考えられる。

SH02 配石遺構

遺構（第 136 図）

この遺構はB調査区、RVIIグリッドのほぼ中央部、SA31住居跡北側柱穴列の上面に位置する。中心部分の規模は短軸2m、長軸5mで、10cm大の角礫をほぼ東西に長軸をもつ形に、一部途切れながらも密に配石している。周辺からSC06焼土遺構をはじめ計7基の焼土遺構が検出されている。

遺物 出土していない。

〈時期〉 遺構の確認面などから弥生時代前半の時期と考えられる。

SH03 配石遺構

遺構（第 137 図、写真図版 158）

B調査区、KVIIグリッドの南側に位置している。長辺120cm、短辺で90cmの規模である。頭大の亜円礫を東西に長く方形に配列しており、西側の短辺中央部には高さ35cmの立石が見られる。隣接SH04配石遺構とは分離した単独の配石遺構である。長軸方向はN0°Eである。配石の下部からは土坑は検出されなかったが、礫の最下部から数cmほど全体が浅皿状に落ち込んでいる。立石の存在から、これらの配石は土坑の下部に配置された可能性も考えられる。

遺物（第 367 図、写真図版 322）

〈土器〉 2618 は頸部に刻目帯、胴部には丸みの強い雲形文が施文されている。ネガ部はポジ部より低くなっている。2619 は平行沈線文が施文された壺である。

〈時期〉 縄文時代晩期前半から中葉の時期と思われる。

SH04 配石遺構

遺構（第 137 図、写真図版 158）

B調査区、KⅦグリッドにありSH03配石遺構の北側に隣接している。頭大の礫が中心であるが、中には30から40cm程度の巨礫も見られる。最大幅50cm、南北に5mの規模を持つ列石状の配石遺構である。この配石遺構と一連の構成礫と考えられる礫が、周囲に何個か散在している。この遺構の南端はSH03配石遺構に接している。断面観察ではSH03・04配石遺構の礫は若干のレベル差はあるが同一の層位のなかに認められる。この列石状の配石の下部には、個々には全く対応関係は見いだせないが、土墳墓であるSD065・066・067・069・070・071遺構が分布している。

遺物 (第367図、写真図版322)

〈土器〉 縄文晩期中葉前半の土器(2620～2622)が出土している。

〈石器〉 2634は両面調整の不定形石器である。

〈時期〉 縄文時代晩期前半から中葉の時期と思われる。

SH05 集石遺構

遺構 (第138図、写真図版159)

B調査区、JⅧグリッドの北寄りSA49住居跡の上位に位置している。密に分布する区域が2カ所に認められる。北側の礫群は拳大～半頭大の礫を楕円形状に配したようである。南側の礫群は頭大の礫を弧線状に配している。これらの下部には土坑などは検出されていない。

遺物 (第367図、写真図版322)

〈土器〉 2623はRL縄文が施文された深鉢である。2624は底部付近に沈線が巡りLR縄文が施文された深鉢である。その他、2625～2629の縄文時代中期後葉の土器の特徴を持つ土器が出土している。2633は無文のミニチュアの鉢である。

〈時期〉 縄文時代中期末葉の時期と思われる。

SH06 配石遺構

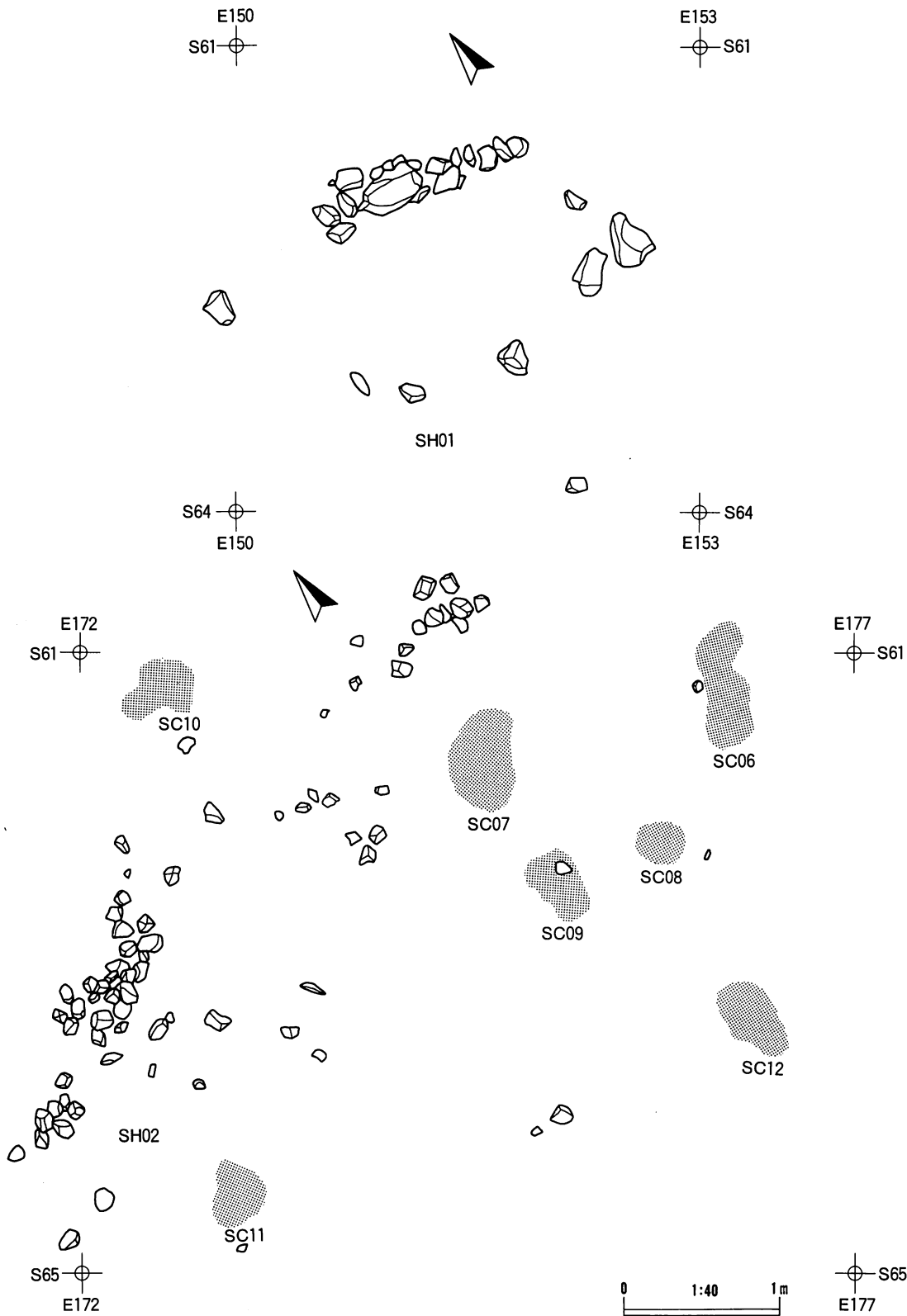
遺構 (第138図、写真図版158)

B調査区、JⅦグリッドの北側に位置している。検出面はII層上面である。鍵状に拳大から頭大の明らかに意図的に配列された礫群が認められた。北辺で75cm、南辺で135cmの規模である。長軸方向はN0°Wである。礫の下部には土坑などは検出されなかった。礫の抜き取りの痕跡などは認められなかったが、本来は礫が長方形に巡っていたとも考えられる。

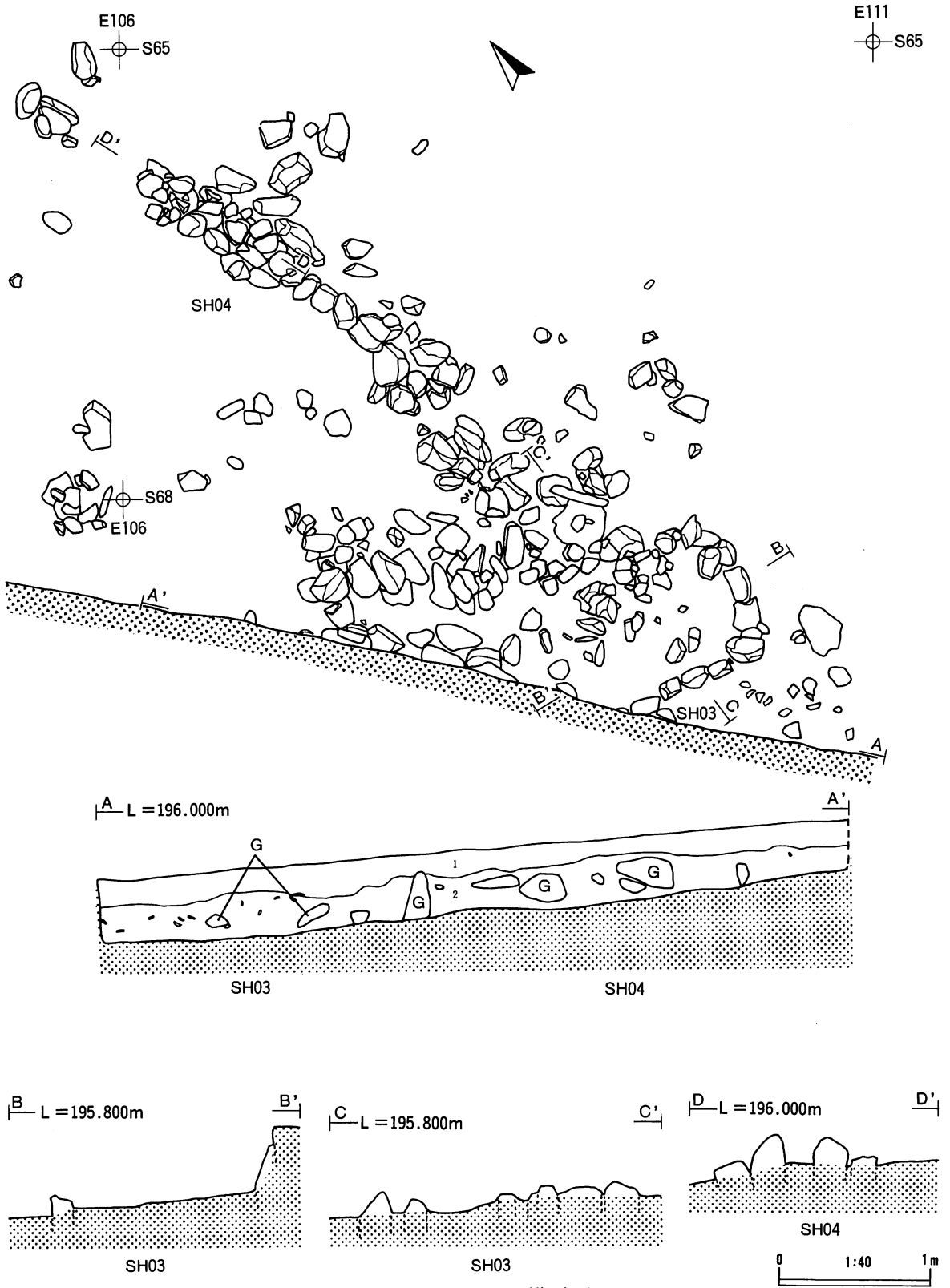
遺物 (第367図、写真図版322)

〈土器〉 2630～2632は縄文のみが施文されている。

〈時期〉 縄文時代後期後半から晩期前葉の時期と思われる。



第136図 集配石遺構 (1)



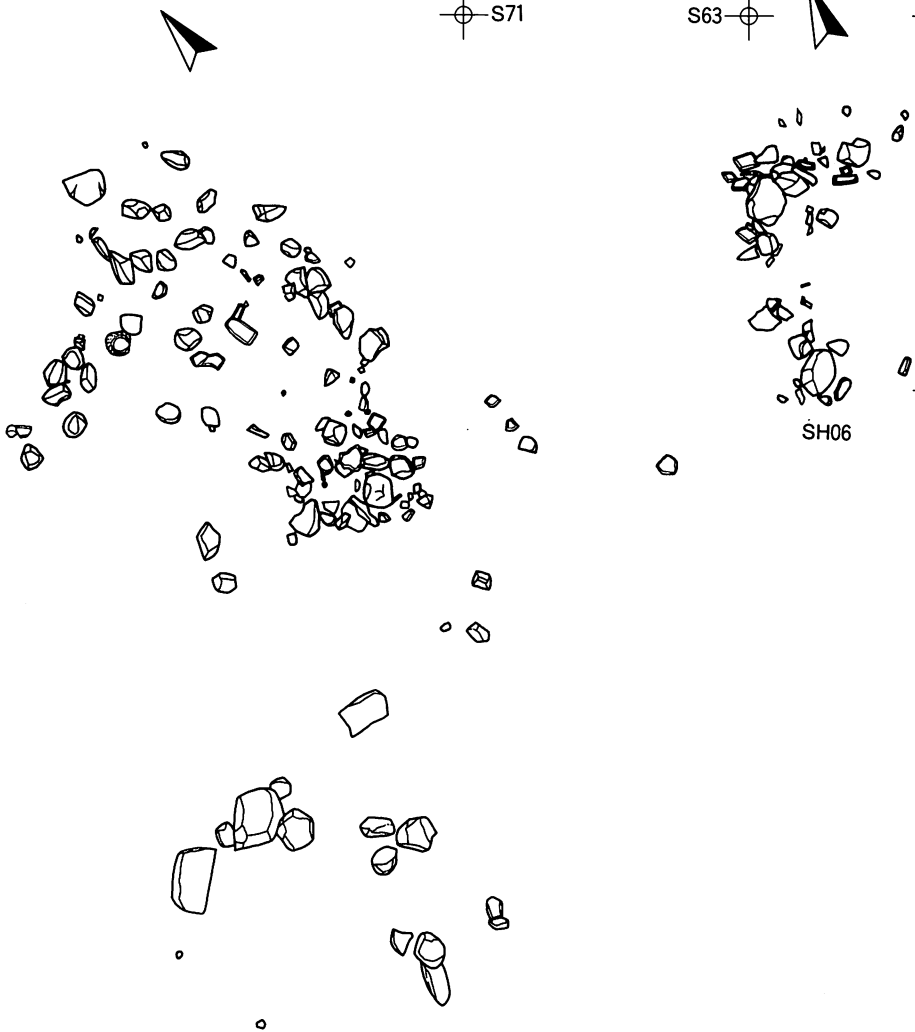
第137図 集配石遺構 (2)

E93
S71

E96
S71

E95
S63

E96
S63



SH05

0 1:40 1m

S77
E93

S77
E96

第138図 集配石遺構 (3)

7. 溝跡・旧河道溝跡

SF01 溝跡

遺構 (第 139 図、写真図版 160)

〈位置〉 この遺構は調査区の南東側に、南東緩斜面に沿って検出された。

〈重複関係〉 周辺に位置している弥生時代の複数の住居跡と重複しており、これらすべての遺構よりも新しい。

〈規模・形状〉 規模は幅 2.5～3.0 m、長さは L グリッドから N グリッドにかけて約 28 m に渡って検出されたが、両端とも調査区外にはいる。深さは北西側の浅いところで約 20 cm、中央部分で約 45 cm、南東側の最も深いところで 127 cm と測り、斜面の下方にいくにしたがい次第に深くなる。断面形は北西側から中央部が皿形を、南東側は V 字形となる。

〈埋土〉 埋土は黒色土で占め、底面直上は堅くしまる黒褐色土から極暗褐色土で構成される。中央部には酸化鉄と 10～20 cm 大の角礫が集積する。底面は、ピット状、溝状の凹みが認められる。北西側と南東壁底面には深さ 10～15 cm のほそい小溝が走る。この溝の埋土は主に砂である。

〈時期〉 当初は時期的に、重複する弥生時代の遺構に近いと考えていたが、その後の調査で昭和に入ってから用水路状の遺構と判明した。遺物の多くはこの遺構に伴うものではなく、周囲の弥生時代の住居跡の覆土に含まれるものであるがこの項で事実記載を行う。

遺物 (第 368～371 図、写真図版 322～324)

〈土器〉 2638 は高坏である。口縁部には低い叉状の山形突起が 6 単位付いている。口縁部は外反しており口縁内面にも 1 条の沈線が巡っている。胴部上半に 3 条の沈線が巡りその下には 3 単位の変形工字文が施文されている。胴部下半には LR 縄文が施文され脚部は無文である。外面に煤の付着が見られる。2644 は 6 単位の叉状の緩やかな山形突起が付された甕である。口縁部は外傾し頸部文様帯は無文、胴部には横走る LR 縄文が施文されている。2656 は口縁部が外傾し頸部が無文の壺である。胴部上半には変形工字文が施文されている。工字文の相対する部分には刺突文が施文されている。2662 は平縁で口縁部が無文、胴部に横走る LR 縄文が施文されている。2654・2658 は胴部・頸部に平行沈線が見られる壺である。2655・2659 は頸部に横位沈線と列点文がみられる。

〈石器・石製品〉 石鏃 9 点 (2674～2682)、石錐 1 点 (2683)、石槍 1 点 (2684)、不定形石器 10 点 (2685～2694)、石斧 3 点 (2695～2697)、凹石 1 点 (2698)、敲石 2 点 (2699・2700) が出土している。2696 の石斧は基部が敲石に転用されている。

SF02 旧河道

遺構（第 140-1～141 図、写真図版 160～165）

〈位置〉 A 調査区と B 調査区に間に位置している。

〈検出状況〉遺跡の中央部を雪谷川に注ぐ幅 1 m 前後の A 調査区と B 調査区を開析する沢が流れている。平成 2 年度の調査のおり、B 調査区の下方斜面末端の露頭を観察した結果、泥炭層の存在が予想された。平成 3 年度の調査時に I XII グリッドに 1 m×5 m のテストトレンチを設定した。その結果、現表土下約 2 m 程には無遺物層が連続し礫層に達しており、この礫層の面からトチの実の皮が大量に認められたため本格調査を実施することにした。調査は安全面上の対策などから約 200 m²程度の調査に留まった。その結果、縄文時代の旧河道が検出された。部分的に新しい井戸により攪乱を受けている。

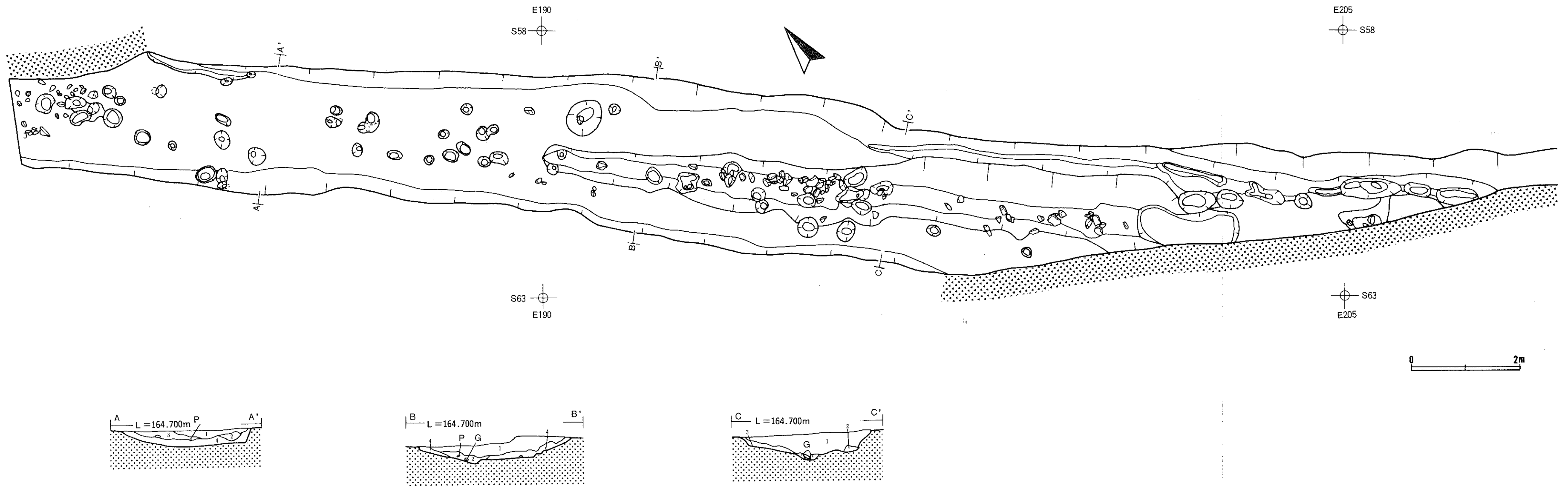
〈規模・形状〉検出された旧河道は、上端で幅約 5 m、下端で 2～3 m 西から東へ向かい緩やかな傾斜をもっている。今回は約 17 m の範囲を調査した。

〈埋土〉層序は、現表土から約 2 m 下までは遺物を全く含まないシルト質層、その下位は基盤層となる岩盤にまで達する約 2 m の礫層及び礫層間に介在する腐植土層によって構成されている。礫層の上部には平安時代に降下した十和田 a 火山灰（7 層）や酸化鉄の集積（5 層）が水平に認められる。一部に湿地性植物の遺存体も認められるが、礫層部分にいたるまで人口遺物は全くふくまれていない。この層は、一時的に冠水した状況も認められる。十和田 a 火山灰層の上部は、水平層をなしており安定した堆積環境にあったことがうかがえる。この礫層は、拳大から人頭大、一抱えもあるほどの垂角礫や亜円礫で構成されている。これらの礫は、断続的に引き起こされた急激な水流の変化によって上流部から供給されたものである。

遺物（第 372～414 図、写真図版 324～344、写真図版 345～347 は欠番）

〈出土状況〉遺物の大半は 13 層から 18 層中から出土している。特に多量に出土しているのは 18 層とした礫層及びこの礫層間に部分的に見られる腐植土層中から出土している。弥生時代・奈良時代の遺物も若干見られるが多くは縄文時代晩期前葉から中葉の時期の遺物である。このような堆積環境であるため、礫層中の遺物は現位置を保っているのではなく遺物相互の厳密な共伴関係は不明である。弥生時代から古墳時代、奈良時代の土器は A 調査区の斜面側付近から出土している。特に奈良時代の土器は集中して出土しており一括廃棄されたもの考えられる。

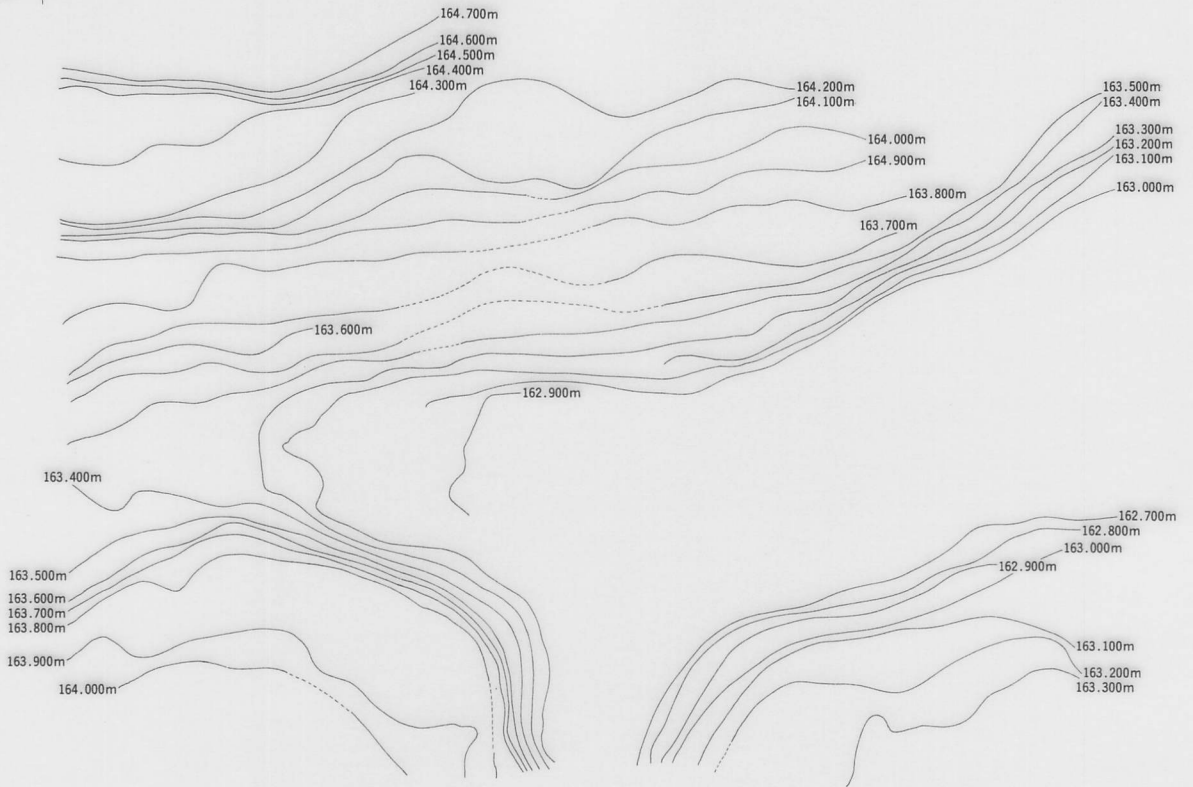
〈土器・土製品〉2701 は縄文時代前期前半の土器である。2702 は縄文時代中期前半の土器である。2703 から 2730 は縄文時代は縄文時代後期初頭から中葉頃の土器である。2724 はつまみ部に横方向の貫通孔を持つ蓋である。放射状の 5 単位の弧状沈線が施文されている。外面には赤色顔料の痕跡が認められる。2725 は口縁部に付される内部が空洞化した突起物である。2731～2759 は縄文時代後期後田柄貝塚第 IV 群・V 群に相当する土器群である。2760 から 2808 は縄文時代晩



第139图 SF01沟迹

E80
S109

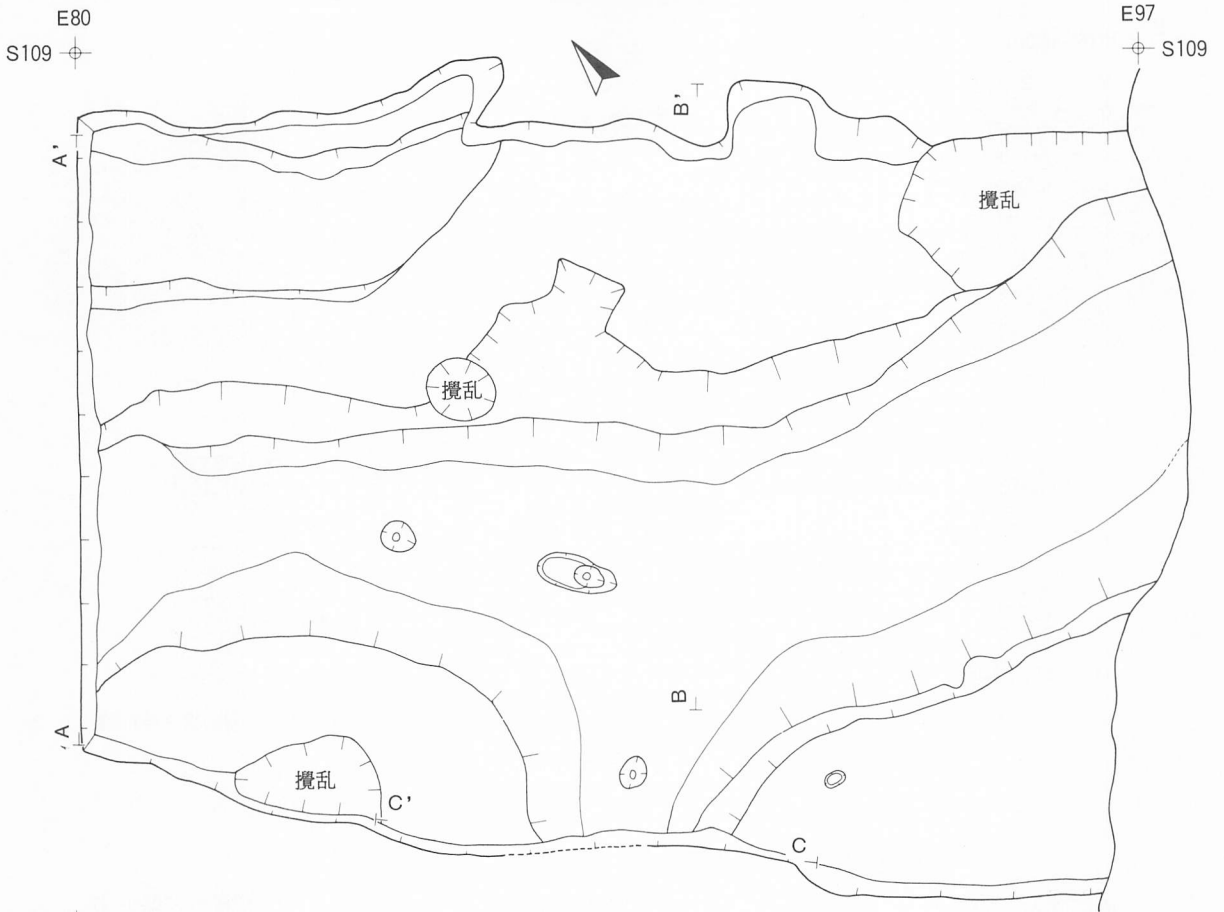
E97
S109



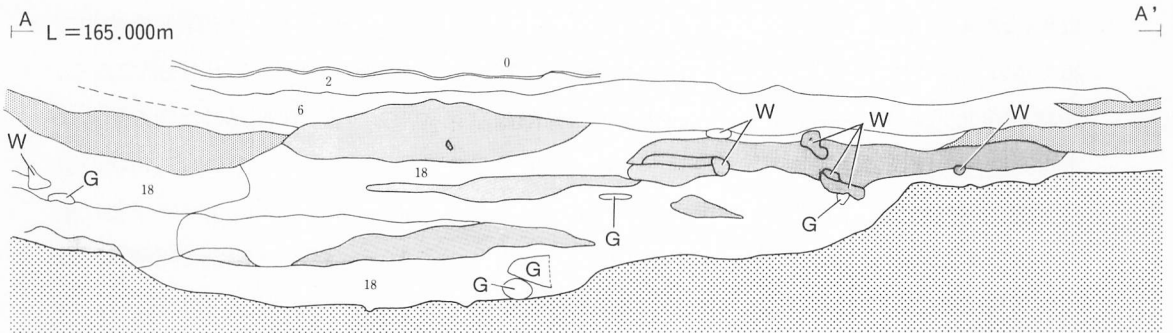
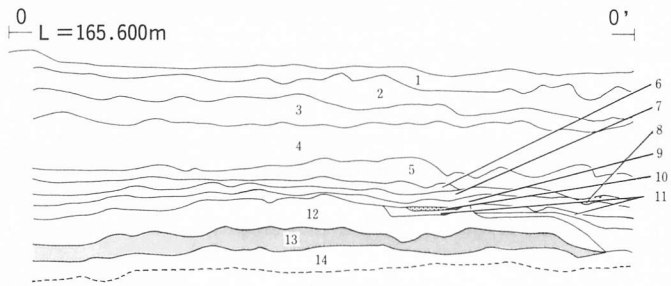
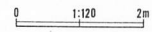
S123
E80

S123
E97

第140-1图 SF02旧河道(1)



S123 E80 E97 S123

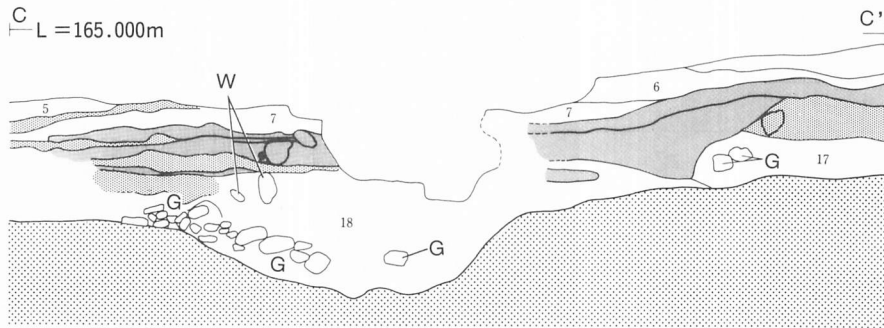
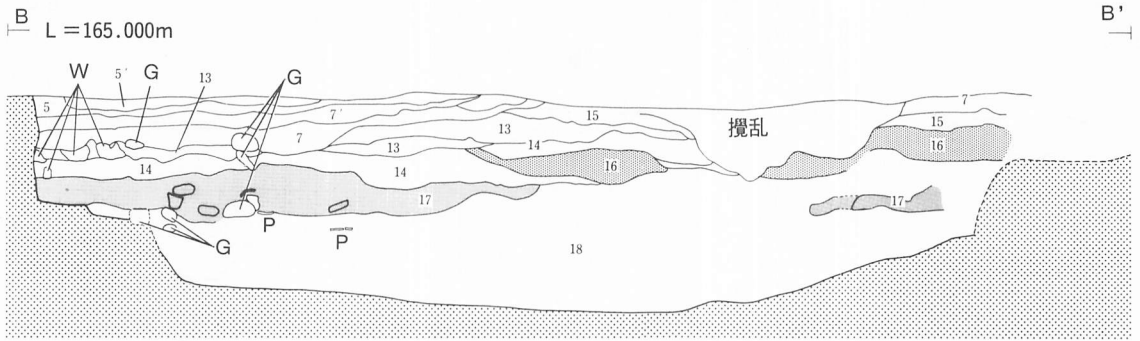


※ W 木 G 石

※ 同層注記 P 495 参照

断面図 S = 1/60

第140-2 図 SF02旧河道(2)



断面図 S=1/60

第141図 SF02旧河道(3)

期前葉から中葉前半頃の土器である。2776 は黒漆が見られ浅鉢である。2783 は漆溜め容器と考えられる小型の台付鉢である。容器の内面には口縁部まで漆の皮膜が見られる。また口縁部の刻み部分も漆で目づまりしている。胴部上半には赤色顔料の付着も認められる。2809～2820 は縄文時代晩期中葉後半頃の土器である。2821 は台付鉢の台部である。底部に焼成後の穿孔が見られる。2822 は中実で円柱状の土製品である。下半には横方向の焼成前の穿孔が見られる。内面に煤の付着が見られる。2823 は脚付土器の脚部である。灰白色で非常に硬質である。2825～2842 は弥生土器である。2831 は肩部に平行沈線をもつ遠賀川系土器の壺である。2835 は頸部が無文帯の甕である。口縁部には LR 縄文が施文され内面にも縄文が施文されている。2837・2838・2841 は平行沈線・山形沈線文・磨消縄文が見られる壺である。2840 は甕の頸部で無文帯と断続的に施文された山形沈線が見られる。2839・2842 は異方向に撚糸文が施文された甕の口縁部である。2843 は後北式土器である。口縁部は四波状で口縁部は直立気味である。波頂部には刻みを持つ隆帯が貼付されている。口縁部には刻みをもつ隆帯が2条巡っている。その下には三角状の連続刺突文が施文されている。胴部の中央に横走する帯縄文が巡っており、それより下半には縦走する帯縄文が施文されている。胴部上半には、帯縄文・彩色された微隆起線文で円環状・弧状の文様が施文されている。三角形連続刺突文は微隆起線文に沿うように施文されている。底部外面には木口状の工具によると思われる斜格子状の痕跡が見られる。2844 は奈良時代前半頃

の土器と思われる。すべてロクロは使用しない土師器である。2844 は口縁部が外反する長胴の甕である。内外面頸部は横方向のミガキ調整、胴部外面は刷毛目調整の後にミガキ調整されている。2845 は口縁部が外反する甕である。頸部は内外面とも横方向のミガキ調整、外面胴部はミガキ調整、内面は刷毛目調整が施されている。2846 は口縁部が大きく外反する甕である。頸部は内外面とも横方向のミガキ調整、胴部外面は刷毛目調整後ミガキ調整、内面はミガキ調整が施されている。2847 は口縁部が短く胴部が下膨れの甕である。内外面とも摩滅が顕著である。頸部外面は横方向のミガキ調整、胴部内外面ともミガキ調整されている。2848・2849 は小型の甕である。2848 は頸部に焼成前の穿孔が見られる。内外面とも刷毛目調整の後にミガキ調整されている。2849 は内外面とも刷毛目調整の後にミガキ調整されている。2850 は球胴の壺である。内外面とも刷毛目調整の後にミガキ調整されている。2851 は球胴の壺である。摩滅が顕著であるが外面胴部にミガキ調整、内面口縁部はミガキ調整、胴部は刷毛目調整されている。2852～2859 は無文のミニチュア土器である。2860～2863 は匙形土製品である。2864 は鐸形土製品である。2865～2895 は土偶である。2865 は土偶の頭部である。頭頂部の王冠状の部分は欠損している。額の部分には刺突の施された隆帯が貼付されている。鼻は隆起しており鼻孔も表現されている。眼は沈線で表現され耳には穿孔が見られる。後頭部は沈線でX字文が施文されている。2886 は額の部分に途中穿孔の孔があり、玉抱き三叉文風の文様となっている。眉・鼻・眼・口は隆起状に表現されており、耳には貫通孔が見られる。2867 は顔面の各部位は隆帯で表現されている。頸部はソケット状となっている。2868 は遮光器土偶の頭部である。2869 は遮光器土偶の眼部である。2870 は頭頂部と左腕・左脚が欠損した中実の土偶である。表裏面の胸腹部には雲形文様の文様が展開している。鼻は隆起し眼・口は沈線で表現されている。乳房は鼻と同様鋭く突出している。肩の部分には刺突文が巡っている。252 は正中線部に刺突が施され、腹部は隆起している。腰の部分に沈線が巡り RL 縄文が施文されている。2872 は簡略化された板状の土偶である。2873 腰部から曲がる頭部と脚部が欠損した土偶である。乳房はやや垂れており、腹部は隆起している。腰部の表裏面には沈線が巡っている。2874 は中空土偶の腹部付近である。2875 は中実土偶である。表裏面を板状に仕上げはりあわせて成形したと考えられる。2879 は中実土偶の腹部であり、一部に空洞部が見られる。2881 は中空土偶の上半身である。頸部に穿孔が見られる。2882 は中空土偶の右胸部である。肩と乳房の周囲には刺突文が施文されている。2889 は遮光器土偶の腕の部分である。2886・2887 は中空土偶の肩の部分である。2888 はC字状の刺突文が見られる。部位については不明である。2889 は肩の部分である。2896・2899 は土版である。2896 は表裏面に渦巻状、側縁にも沈線が見られる。2897・2898 は沈線で渦巻状の文様が施文された土製品で亀形土製品の類の可能性も考えられる。2900 は三角形濤状土製品と思われる。沈線文で文様が施文されている。2901 は全面赤色塗彩の耳栓である。2902～2904 は円環状の耳飾

りである。2905・2906 は昆虫の幼虫に類似した土製品である。2905 は湾曲し背の部分には刻みが施されている。2906 は背の部分に一部剝落した痕跡が認められるがほぼ完形品である。両側縁には沈線で渦巻状の文様が施文されている。2907 は不明土製品である。湾曲し凹部分がある。2908～2941 は土製円盤である。このなかで 2941 は周縁が扁平で中央に穿孔された成形円盤である。他のものは土器片利用の再生円盤である。2942～2951 は焼成粘土である。

〈石器・石製品〉 2952～2956 は石鏃である。2954 は異形石鏃で側縁部にノッチがみられる。295～2958・2960・2961 は石錐である。2959～2970 は石匙である。2971～2981 は不定形石器である。2982～3036 は石斧である。2984 は基部に敲打痕がみられ刃部の片側のみ損傷が著しい。2985 は基部にアバタ状の敲打痕が見られる。3038～3084 は敲打磨石類である。3040 の磨石の周縁部には赤色顔料の痕跡が見られる。3063・3064・3065 の敲石は側縁部にアバタ状の細かい敲打痕が見られる。3077 は長形状の磨石で長軸方向の両端部に赤色顔料の痕跡が見られる。3085・3086 は周縁部を打ち欠いた扁平な打製用具で側縁部の中央付近にノッチ状のつくりだしが認められる。3087 は磨製石斧の再加工が考えられる。3088～3102 は凹部分を持つ石皿である。3103～3107 は磨面が平で台石の類と考えられる。3103 の表面には広く赤色顔料の痕跡が認められる。3108～3140 は土製円盤である。3139 は片面の中央部に直径 1 cm ほどの略円形のアスファルトの付着痕が見られる。3141～3164 A・3166～3168 は石棒類である。3141 は頭部に膨らみをもち 2 条の沈線が巡っている。3142 は頭部で矢羽根状・格子状の文様が沈刻されている。3154～3157 は石剣の柄部である。3157 の柄部には 2 条の沈線が見られる。3165 は岩版の一部である。表面には正中線が沈刻されその下に円形の凹が付されている。裏面には一部敲打痕の集中部が見られる。3169 は三角形溝状石製品である。両側面には 5 条の沈線が見られ、三角形の両側面は大きく窪んでいる。底面には円形の大きな凹部が見られる。

〈木製品〉 3170 は籃胎漆器の口縁部破片である。体部はより薄く作られ、口縁部は肥厚し、折り返し状になっている。内外面とも赤漆塗りで仕上げられている。3171・3172 は小破片であるが、木製の腕輪と思われる。特に、3172 は外面部分の一つおきに台形状に彫り残すことによって浮彫的な装飾効果をあげている。2 点ともマタビ属の材を使用し、表面を赤漆で仕上げている。3173 は一部欠損しているが、円形を基調としており、中央部に両面から穿孔された孔が認められる。3182 も欠損品であるが、円形を意図した製品であろう。外皮部分には工具による階段状の剝離痕が明瞭に残されている。3174 は半截した丸木材の一端を瘤状に残し、表面を平滑に調整している。3176 は完形品で、両端および表面を面取りしたうえで平滑に調整している。3175・3177・3178 は弓の一部と考えられる。3 点とも樹皮は残存していない。3175 は末弭、本弭のどちらの部分に相当するか判断しかねるが、末端部から 3.2 cm の部分に、幅 1.3 cm 程度を瘤状に彫り残し、末端部分は細身に仕上げている。顔料や樹皮の巻き帯の痕跡は認められな

かった。3177・3178 は小型弓である。材として 3175 はカバノキの一種、3177・3178 はイヌガヤが使用されている。3173・3182 は樹皮を使用して製品としている。3179・3180 は現段階では籠状木製品と呼称しておく。3179 は途中で切り込みを入れることにより頭部を球状に作り出している。先端部分は既に失われているが、残存部の形状から推定すると、細身となるものであろう。表面を比較的平滑に仕上げている。コナラ属コナラ・亜属コナラ節の一種を材として使用している。3180 は先端部はやや欠損しているものの、ほぼ原形を止めている。上端は丁寧に切断され、表面は研磨されたかのように非常に平滑に調整している。3181 は杭状の木製品である。先端部を面取りして先鋭にしている。3183～3185・3190 は丸木を用いて一端を加工して平滑な曲面に仕上げている。3186・3187 は分割材の一部である。3188～3202 は丸木材・分割材の一部に加工痕が見られるものである。3202～3218 は建築部材の一部と思われる。3219 はほぞ穴と思われる部分が観察され、表面は丁寧に調整されている。板状に仕上げられたものとしては、3203・3204・3208 がある。15 は木口面及び両面が平滑に調整されている。その他は比較的厚手のもので、板材というより柱材のようなものであろう。3203 は先端部分に木口面があり、柂目材を使用している。3214 は、板目のクリ材を使用した厚手の板材の一部と考えられる。焼けた痕跡が広く認められる。

〈時期〉木製品や土器の残存状況からこの河道は縄文時代晩期前葉から中葉の時期に埋没を始めたと考えられる。木製品は、残存状況の良好な漆塗り土器などが縄文晩期中葉前半頃のものであることなどからほぼこれに近い時期の所産と考えられる。

8. 柱穴状ピット群

遺構（第 142 図、写真図版 104）

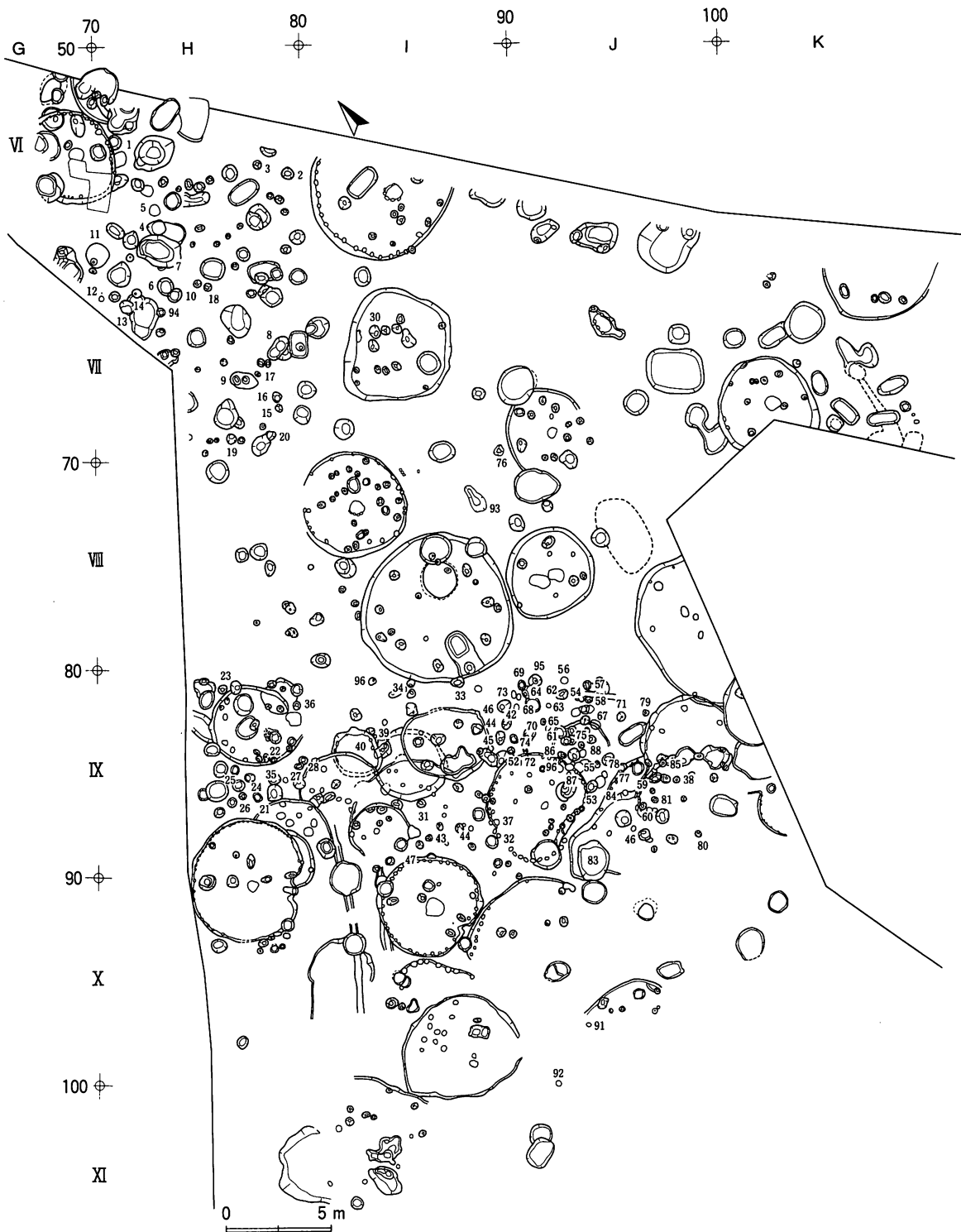
柱穴群としたものは住居跡内から発見された柱穴や土坑・掘立柱建物跡の構成柱穴以外のものを総括した。本来は住居の構成柱穴であったものが後世の人間の活動により床面や壁が失われ、痕跡的に柱穴のみが残存した場合が考えられる。特に平成元年・3年調査のB調査区に集中している。計測値と出土遺物を表に記した。

遺物（第 415～422 図、写真図版 348～351）

〈土器〉 第 415～420 図および観察表に特徴を記した。

〈土製品〉3394 は無文のミニチュアの壺である。3395 は土偶の左脚部である。沈施文が多用され沈線文の間は異種原体による非結束羽状縄文が施文されている。3396 は土偶の胸腹部である。3397・3405 は土製円盤で、3405 は表面の中央部分まで打ち欠かされている。3398 焼成前の穿孔が見られる土玉である。3399 は瘤が貼付された小型の注口である。模様は沈線で施文され胴部上半に展開しているがモチーフについては不明である。3400～3404 は焼成粘土である。3406 は台付鉢の台部との接合部である。瘤が貼付されその間は櫛歯状の縦の沈線が施文されている。3407 は剥片の集積である。2次加工は認められない。

〈石器・石製品〉 3408 は縦型の石匙である。3409 は石棒の頭部である。山形文、平行沈線文が沈刻されている。3410 は磨製品石斧の基部付近である。アバタ状の敲打痕が見られる。3411 は多角状の磨石で稜線の一部に磨面が見られる。3412 は有茎凸基の石鏃である。3413 は円形基調の搔器である。3414 は石製円盤である。3415 は片面に凹を持つ凹石である。3416 は無茎円基鏃である。3417 は尖頭様の石器である。3418 は円形基調の偏平な磨石である。



第142図 柱穴状ピット群 (PP群)

9. 土器捨て場・遺物集中区

大日向II遺跡は調査区全域が遺物包含層であり、この遺物包含層を掘り込んで各種遺構が構築されていると言っても過言ではない。遺物の分布は地域によってある程度の差異は認められる。このなかでもある特定の時期の遺物が局所的に認められる区域があり、このような地域を遺物集中区として把握することにした。また、A調査区の斜面下方に各時期の遺物が混在して出土する地域があり、このような場所を土器捨て場として把握した。

(1) SX01 遺物集中区 (写真図版 166・167)

遺物 (第 423～426、写真図版 352～355)

〈位置・出土状況〉B調査区、HX・HXIグリッドを中心に約 30 m²の範囲内に縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭の遺物が出土している。完形のままで出土したものはなく、土器はすべておしつぶされたような状態で密集して出土した。3419は無文の大型壺である。3420は同一の壺の口縁部と思われる。口縁部は短く大きく外反している。大型壺は胴部最大径を中央部より上半にもっている。頸部にいわゆるわらじ虫の見られる1条の列点文、肩部には太い3条の沈線が巡っている。色調は明黄褐色、胎土に小礫を含んでいるが内外面ともていねいに磨かれ小礫は見えなくなっている。内外面に黒斑が見られるがその部分是对応していない。3421は頸部に沈線の見られる無文の壺である。3422は胴部にLR縄文が施文された薄手成形の壺である。頸部は無文で口縁部はやや直立気味に外傾している。頸部と胴部の境に軽い段が見られる。3423～3432は高坏・鉢である。3425の高坏は頸部に屈曲部をもち口縁部は直立気味である。口縁部は緩やかな山形口縁部で口唇部と口縁部の内面には沈線が見られる。坏部の上半には変形工字文が施文されるが単位は不明である。変形工字文には瘤が見られるが盛り上がりは小さく粘土をよせたものと思われる。胴部下半・脚部は無文である。3426は変形工字文が施文された台付浅鉢に近いものである。工字文の結節部には低い粘土瘤が見られる。3427～3429は高坏の脚部である。無文で脚部は逆台形状で直線的である。3428は坏部の底部内面に沈線による円文が見られる。3429の脚部はやや丸みをもっており内面に赤色顔料の痕跡が見られる。3433は胴部にあまり膨らみを持たない壺である。頸部は無文で口縁部は外反している。頸部と胴部の境に2条、胴部最大径部分に3本の沈線が見られる。胴部にはLR縄文が施文されている。胎土に小礫・砂粒の混入がめだつ。3434は5単位小波状の口縁部である。口唇部と口縁部の内面には沈線が施されている。頸部には整然とした8条の平行沈線文が巡り胴部はRL縄文が施文されている。沈線部の一部には粘土の削り瘤が見られるが顕著ではない。3435は低い山形突起が付された鉢である。口唇部がやや肥厚し口縁部は短く外反している。胴部上半に4単位2段の雑な変形工字文、胴部にはLR縄文が施文されている。3436は口縁部が直立気味の鉢である。口唇

部付近が無文帯、胴部に RL 縄文が施文されている。3437 は口縁部が直立気味の鉢である。口唇部付近が無文帯、胴部に LR 縄文が施文されている。3438～3440 も同様の口縁部をもつものである。3431 の口縁部は肥厚しやや外反気味である。3442 は口縁部が短く外反する甕である。胴部には LR 縄文が施文されている。口縁部の無文帯は横方向にミガキが施されている。外面に煤の付着が見られる。3443 は口縁部が内湾し胴部に LR 縄文が施文された深鉢である。3445～3447 は大型の甕である。3445 は短い口縁部が直立しており、頸部は無文帯となっている。胴部には横走る LR 縄文が施文されている。3446 は口縁部が短く外反しておりその部分に 3 条の沈線が巡っている。胴部には LR 縄文が施文されている。内面および外面口縁部はていねいにみがかれている。3448 は中実土偶の肩部付近と思われる。3449 は焼成粘土である。3450 は一部中実の土偶である。中空を基本としているが腰の部分は粘土を充填して補強している。胴部は逆三角形で正中線・臍は沈線で表現されている。乳房は剝落しており左右に 3 条の沈線が施文されている。背面にも表面と同じく沈線で円文・平行沈線文が施文されている。腰部は大きく両側に膨らみ表面には弧状沈線、両腰部・裏面には鋭い刺突文が施文されている。

〈石器・石製品〉 3451 は石鏃、3452 はガラス製の玉、3453・3456 は石斧、3454 は石棒、3455 は柱状石棒、3457 は側縁に剝離が見られる石剣である。

(2) A 調査区土器捨て場 (写真図版 168)

〈位置〉 A 調査区、I XIV・K XIV グリッドを中心とした地域に分布している。沢に向かうこの斜面部には、十和田 a 火山灰・十和田 b 火山灰が認められ遺物の多くはこれらの下位から出土している。縄文時代後期前半～後半の遺物が中心である。

遺物 (第 427～473 図、写真図版 356～379)

土器については時期的な大枠の中で配列した。土製品・石器・石製品については器種毎に配列してある。

〈土器〉 3458～3459 は太い平行沈線、不整綾線文などから縄文時代前期前半の土器と考えられる。3460～3463 は縄文時代前期後半円筒下層 D 式の時代の土器である。3464～3467 は縄文時代中期大木 9 式段階に相当する土器である。3468～3469 は縄文時代中期末葉大木 10 式頃の土器である。3468 は刺突文が施された横 S 字文が展開すると思われる。3470～3533 は縄文時代後期前葉に相当する一群である。3470～3488 は細沈線で円文・流水状の文様が施文されている。3489～3788 は沈線と隆帯状の縄文帯が併用され文様が施文されている。3534～3548 は縄文時代後期田柄貝塚第 II～III に類似する一群である。平行縄文帯、S 字状沈線文、ダイナミックな曲線状文などが見られる。3549～3576 は縄文時代後期田柄貝塚第 III 群に類似した土器群である。3568 は台付皿である。低面内面、口唇部、台部に同一原体の回転方向を変化させた非結束羽状

縄文が施文されている。ミガキが丁寧で色調は黒色系である。3577～3595 は縄文時代後期十腰内IV群に類似した一群である。3581 は深鉢の土器である。口縁部には山形の突起、口縁部部裝飾帯は瘤の貼付された縄文帯、頸部文様帯には瘤の貼付された縄文帯、胴部全域には幅の広い入り組み状の曲線状文が展開している。施文されている原体は異種原体による非結束羽状縄文である。3584 は平行沈施文が施文され口縁部に低い突起が付く壺である。3585 は壺の口縁部である。頸部文様帯には弧状の縄文帯、頸部と胴部の結節部には瘤の付いた縄文帯、胴部上半には縄文が施文されている。3586～3589 は縄文帯と無文帯が重なる壺である。3590 は単孔壺である。胴部には入り組み状の曲線状文が展開している。3594 は弧状沈線が展開する注口で肩部に瘤が貼付されている。3596～3656 は縄文時代後期田柄貝塚第IV群頃に相当する土器である。3605 は刻みの突起が付く平口縁の深鉢である。縄文が磨消縄文の弧状文が胴部に展開し、文様の結節部には瘤が貼付されている。3606 は 3612 刻みの突起が付く平口縁の深鉢である。縄文が磨消縄文の弧状文が胴部に展開し、文様の結節部には瘤が貼付されている。3612 は沈線でタスキ掛け状入り組文が施文されたミニチュアの鉢である。2365 は平口縁の深鉢である。口縁裝飾帯には縦長の基部が貼付されている。3623 は胴部上半に緩やかな屈曲を持つ深鉢である。無文で口縁部裝飾帯と胴部の中央部には瘤が貼付されている。3624 は平口縁で胴部が無文の鉢である。口縁部裝飾帯・頸部文様帯は瘤が貼付された縄文帯となっている。3626 は平行沈線と瘤が貼付された台付鉢である。胴部に貼付された瘤の間には円形の刺突文が施されている。3629 は急角度の注口部が胴部の中央に付いている。胴部下半は無文で胴部中央に瘤が貼付された縄文帯が巡り、上半には弧状沈線文が展開している。単位文様の要所には瘤が貼付されている。3630 は注口の上半である。口縁部裝飾帯には瘤が貼付された縄文帯が巡り、頸部は無文となっている。さらにその下は膨らみをもち瘤の貼付された縄文帯となっている。3631 は口縁部が大きく外反する注口の口縁部付近である。瘤が貼付された幅の狭い縄文帯と幅広の無文帯が重層している。3632 は注口の頸部と思われる。膨らみをもち瘤の貼付された連結沈線状の縄文帯と無文帯が重層している。3633～3638 は特に小さな瘤が多く貼付されている。3649 は口縁部が大きく外反する注口である。頸部に膨らみをもち口縁部と頸部文様帯は瘤の貼付された無文帯が6条巡っている。胴部の上半に最大径部をもちその部分に注口が付いている。胴部上半には小粒の瘤が貼付された入り組み状の弧状文が展開し下半部は無文となっている。注口部にアスファルトの付着が見られる。3650 は注口の口縁部付近である。無文帯と瘤が貼付された無文帯、矢羽根状の微隆線が施文されている。3651 頸部文様帯が無文の注口である。胴部との接点に瘤が貼付されている。割れ口にアスファルトの付着が見られる。3652 は口縁部文様帯に沈線で入り組み状の文様が見られる注口である。文様の結節部と口縁部裝飾帯に瘤が貼付されている。3653・3654 は注口の口縁部である。口縁部は無文で頸部に膨らみをもち、頸部には瘤を中心に三叉状の文

様が見られる。3655 は香炉の頂部である。沈線で文様が施され瘤が貼付している。3656 は押圧状刻目列が見られる。3657～3677 は縄文時代後期最終末～晩期初頭頃の土器である。3661 は薄手口縁部は小波状縁である。胴部に LR 縄文が施文され底部は上げ底風となっている。3662 は孔のある円文が貼付された無文の浅鉢である。3670 は頸部が内傾し胴部がおしつぶされたような算盤玉形の注口である。内外面無文研磨され剣菱状文が見られる。3674 は胴部中央に最大径をもつ丸底の注口である。胴部上半には入組沈線文が見られる。3679～3711 は縄文時代晩期前葉後半頃から中葉前半頃に相当する土器である。3691 は平縁の口唇部に刻みのある台付鉢である。3703 は算盤玉形の注口である。胴部には雲形文が展開している。3707 は丸底の注口で横に流れるような大腿骨文が見られる。3771 はミニチュアの脚付き皿である。3712～3746 は縄文時代晩期中葉後半頃に相当する土器である。3750 から 3761 は縄文時代後期後半から晩期前半頃の粗製の深鉢・鉢である。3762～3769 は縄文時代晩期後葉後半頃に相当する土器である。3762・3764 は同一個体の壺の上半部である。胴部下半は無文で上半には変形工字文が展開している。3770 から 3791 は弥生時代後半頃の土器である。円形の刺突文、退化した交互刺突文、横走する帯縄文、縦走する帯縄文、横走する撚糸文、矢羽根状の縄文が見られる。3792 は後北 C₂・D 式の土器である。刻みのある隆帯、三角形連続刺突文がみられる・3793 は並行する微隆線の特徴などから北大 I 式に相当するものである。

〈土製品〉3794～3803 はミニチュアの土器である。3804～3915 は土偶である。3804 は腹部にボタン状の貼付が見られ、腹部・脚部の表裏面は雑な沈線で文様が施文されている。中実の作りである。3805 は頭部が欠損している。表裏面とも丁寧に磨かれている。3806 は無文の完形品で土偶の簡略化したものとした。縦方向に焼成前の穿孔が見られる。3807 は隆起した正中線上に 3 列の刺突列が見られる。胸部には羽状縄文、背面には沈線文が見られる。中実で首の部分にアスファルトの付着が見られる。3808 は胸部で作りは一部中空である。3814・3815 は異種原体の非結束羽状縄文が施文された脚部である。3816・3818 は垂飾りと思われる。3817 は表裏面に鱗状の隆帯と刺突文が見られる滑車形の耳飾りである。3820・3821 は鼓形の耳飾りである。3822 は円環状の耳飾りである。3823 は鐸形土製品、3824 はスタンプ形土製品、3825・3826 は球状土製品、3827 は棒状土製品である。3823 は横方向に貫通孔が見られ表裏面に細沈線が施されている。3830 は土器の底部が合体したような不明土製品である。3831～3870 は土製円盤である。3037 の裏面には縁の相対する部位に紐懸けのような切り込みが見られる。3843・3847・3866 の割れ口には煤の付着が見られる。3871～3902 は焼成粘土である。

〈石器・石製品〉3903～3954 は石鏃、3955～3984 は石匙、3985～3989 は石錐、3990～4008 は不定形石器として扱った。4009 は剝片の集積で特に 2 次加工は見られない。4010～4052・4054 は磨製石斧である。このなかの 4012・4018 は石状のものであろうか。4053・4056・4055・4057～4073・

4075～4077 は敲打磨石類である。4065 は特に敲打痕はみられず石冠状のものであろうか。4074 は台石、4078～4083 は石皿である。4078 の石皿には脚の作りだしが見られる。4084～4090・4093・4094 は石製円盤、4091・4095 は軽石製品である。4092 は偏平な礫の一部にノッチが入り表面には線刻の文様が施されている。4096～4109 は石棒類、4110～4117 は石剣・石刀類である。

(3) B調査区遺物包含層 (写真図版 169～174)

〈位置〉一部希薄な区域もあるがB調査区全域にわたって遺物包含層が形成されている。地域的にはある特定時期の遺物が集中して見られるところもあり廃棄行為が反映していると思われる。遺物の掲載にあたって、土器は大グリッド毎(10 m×10 m)におおよそ古い順に並べてあり、隣接するグリッド相互の類似土器はほぼ廃棄の同時性を示していると考えられる。また、土製品・石器・石製品についてはグリッド枠をはずし器種毎に配列した。

遺物 (第 473～712 図、写真図版 380～516)

B調査区・GVIグリッド出土土器 (第 473～477 図、写真図版 380～382)

4118～4131 は縄文時代後期田柄貝塚第Ⅲ・Ⅳ群頃に相当する土器である。4127 口縁部裝飾帯が縄文、頸部が無文の壺である。4128 は胴部にノ字状の曲線状文が施文された壺である。3単位で縄文部分には同一原体による非結束羽状縄文が施文されている。4132 は縄文後期十腰内V群頃に相当する土器である。口縁部裝飾帯の縄文帯部分に斜格子状の沈線が見られる。4133～4159 は縄文時代晩期初頭～前葉前半頃の土器に相当する。4133 は山形の突起の下に深い三角形の彫去が見られる。4134・4135 は口縁部に連続する弧状沈線文と三叉文が見られる。4136 は口縁部に入組三叉文が施文された鉢である。4138 は口唇部が畝状の裝飾縁で口縁部は直立気味である。頸部に3本の沈線が巡り頸部文様帯には入り組みの浅い三叉文、胴部にはRL縄文が施文されている。4149 は口縁部が外反する台付鉢である。裝飾状の口唇部で口縁部は外反している。頸部に2本の沈線が巡り、口縁部文様帯の入組三叉文は末端が結合している。胴部にはLR縄文が施文されている。4153 は頸部に膨らみをもち口縁部が直立気味の浅鉢である。口縁部文様帯には剣菱状文が施文されている。4160～4164 縄文晩期前葉後半頃に相当する土器である。4162 は頸部に数珠文の見られる鉢である。4163 は口唇部は裝飾縁で口縁部がやや内湾気味の鉢である。頸部に3本の沈線が巡り頸部文様帯には右下がりの羊歯状文、胴部にはRL縄文が施文されている。4164 は内外面赤色塗彩の壺である。頸部には羊歯状文、胴部上半には玉抱き状の入組文が施文され下半は無文である。全体に浮彫的手法である。4170～4176 は縄文晩期中葉前半頃の土器である。4170 は注口で口縁部裝飾帯には連続する刻目、胴部上半にはZ字文が施文されている。ネガ部は周囲より一段低くなっている。4172 は裝飾口縁の台付鉢で、頸部文様帯には平行

沈線文と連続刻目文、胴部に LR 縄文が施文されている。4175 は 4172 とほぼ同じ台付鉢である。台部との境に連続刺突文が見られる。4176 は雲形文が展開する浅鉢である。

B 調査区・G VII グリッド出土土器 (第 477 図、写真図版 383)

4177 は平口縁の鉢である。頸部に括れがあり口縁部は外傾している。口縁部文様帯には剣菱縄文、胴部には LR 縄文が施文されている。4179 は口縁部が直立気味の鉢である。口唇部には斜めの刻みが施され口縁部文様帯には数珠文、胴部には LR 縄文が施文されている。

B 調査区・H VI グリッド出土土器 (第 477～489 図、写真図版 383～391)

4178～4198 は縄文後期田柄貝塚第 III 群・IV 群に相当する土器と思われる。4185 は頸部が無文の壺である。口唇部には刻みの施された突起が 4 個付いている。口縁部装飾帯には連続する刻目が施されている。4186 は広口の平口縁の壺である。頸部文様帯には 7 列の刻目帯が巡っている。4187・4188 は鍵状の縄文帯が施文された壺である。4192 は頸部に括れをもち口縁部が外反する深鉢である。頸部は無文で胴部との境に縄文帯が巡り胴部には入組帯状文が展開している。縄文は異種原体による非結束羽状縄文である。4198 は幅の広い口縁部装飾帯の壺である。4199 は台付鉢である。胴部下半は無文、胴部に瘤を挟んだ連結沈線が見られる。4200～4213 は縄文後期十腰内 V 群に相当する土器群と思われる。4200 は口縁部装飾帯に瘤が貼付され、頸部文様帯には小さい瘤の付いた幅の狭い縄文帯と無文帯が重層している。4210 は台付浅鉢である。胴部は直線に外傾しており、底部の縁は平ではない。台と胴部の境には瘤の貼付が見られる。胴部には列点文と相対する弧状文が展開し連結部に瘤が貼付されている。4214～4288 は縄文晩期初頭から前葉前半頃の土器と思われる。4226 は無文の長頸壺である。頸部に膨らみをもち全面が無文である。底部付近にはアスファルトによる補修の跡が見られる。4239 は口縁部がやや外反する鉢である。2 本の平行沈線で区画され頸部文様帯には入組三叉文、胴部には LR 縄文が施文されている。4240 は口縁部が外傾する鉢である。2 本の平行沈線で区画され頸部文様帯には入組三叉文、胴部には RL 縄文が施文されている。4241 は畝状の個で口縁部が直立気味の鉢である。3 本の平行沈線で区画され頸部文様帯には入組三叉文、胴部には LR 縄文が施文されている。4242 は頸部に括れをもち胴部が膨らむ鉢である。頸部文様帯には平行沈線文と刻目、頸部には入組三叉文、胴部には LR 縄文が施文されている。4243 はミニチュアの鉢である。瘤が貼付され胴部上半には三叉文が施文されている。4243 は頸部に括れをもち口縁部文様帯には入組三叉文、胴部には RL 縄文が施文されている。4245 は直立気味の口縁部の鉢である。頸部に 2 本の沈線が巡り、頸部文様帯には入組三叉文、胴部には LR 縄文が施文されている。4246 は台付鉢の台部である。膨らみをもつ台部には三叉状の透かしが見られる。4247 は頸部に括れのあ

る鉢である。装飾口縁で頸部文様帯には2段に入組三叉文が施文されている。4248は頸部に軽い括れをもつ浅鉢である。頸部文様帯にはC字状の入組沈線文が施文されている。4249は頸部に2本の沈線が巡り、頸部文様帯には玉抱き三叉文、胴部正面にはC字状文、突起部の口縁部内面には浮彫的な文様が施文されている。4250は入組状のC字状文が施文された浅鉢である。4251は台付鉢の台部である。三叉状とC字状の透かしが見られる。4252は末端が噛むC字状文が口縁部文様帯に展開し、頸部に横長の連続刻目文が見られる。4253は丸底の注口である。頸部文様帯には連続刻目文、胴部上半には剣菱状文が施文され、胴部下半は無文となっている。注口部の根本にも三叉文が見られる。4289～4301は縄文晩期前葉後半頃の土器と思われる。4289は頸部に括れをもち口縁部が直線的に外傾する台付鉢である。頸部文様帯には右下がりの羊歯状文、胴部上半には平行沈線文、下半にはLR縄文が施文されている。4290は頸部に括れのある台付鉢である。屈曲部に横長の連続刻目文、胴部にはLR縄文が施文されている。4291は頸部の長い壺である。頸部文様帯は無文、胴部上半には羊歯状文が見られる。4293は文様単位に丸みをもち雲形文が施文された浅鉢である。4295・4299は胴部上半に剣菱縄文が施文された壺である。4296は胴部上半に文様が施文された壺である。文様の展開については不明である。4297・4298・4301は片口土器である。4302～4344は縄文時代晩期中葉前半頃の土器と思われる。装飾状の口縁部、頸部に羊歯状文、胴部に雲形文が施文されている。4345～4353は縄文時代晩期前葉から中葉前半頃の粗製深鉢である。

B調査区・HⅦグリッド出土土器（第489～496図、写真図版391～396）

4354～4356は縄文前期前半頃の土器である。4354は幅の広い口縁部文様帯に不整綾線文、胴部には撚糸文が施文されている。4355は爪形の圧痕文が施文された低い隆帯で区画され、口縁部文様帯・胴部文様帯には結束羽状縄文が施文されている。4356は刺突文が施された低い隆帯で区画され、口縁部文様帯には不整綾線文、胴部には縄の束の回転文、底部付近には不整綾線文が施文されている。4357～4388・4391は縄文後期中葉から後葉の土器である。4359は胴部がドーナツ状となる異形注口の胴部である。4365は口唇部外端に刻みが施された波状縁の深鉢である。頸部は無文帯、頸部の境に刻目帯、胴部には綾杉状の斜位沈線が施文されている。4366は胴部に屈曲部をもつ深鉢である。屈曲部には瘤が貼付され胴部には縄文が施文されている。4367は口縁部に小さい突起が付く深鉢の口縁部である。口縁部装飾帯は瘤の貼付された縄文帯、頸部には入組帯状文が展開し曲折部分に小さい瘤が貼付されている。4368は平口縁の深鉢である。口縁部装飾には瘤の貼付された縄文帯が巡り、胴部上半には幅の狭い曲折状文が展開している。4369は胴部に小さい瘤が貼付された入組帯状文が展開する鉢である。口縁部装飾帯にも瘤が貼付されている。4378は胴部上半に3列の押圧状刻目列、胴部にLR縄文が施文された

深鉢である。押圧状刻目列の間に一部瘤が貼付されている。4385 は頸部に横長の列点文が施文された壺である。4387・4388・4391 には単位文様のなかに櫛歯沈線が見られる。4389・4390・4392～4398 は縄文時代晩期初頭の時期と考えられる。4399～4446 は縄文時代晩期前葉前半ころの土器である。4447～4450 は縄文時代晩期前葉前半頃の粗製土器と思われる。

B 調査区・HⅧグリッド出土土器（第 497～499 図、写真図版 397～401）

4460 は波状口縁の深鉢である。口縁部装飾帯は瘤の貼付された縄文帯、胴部上半は瘤が貼付された幅の狭い曲折状文が展開している。4464～4483 は縄文後期最終末頃の土器と思われる。風冠突起、縄文の施文された入組帯状文、突起の下の三角形去、横長の列点文などが見られる。4480 は人面付き土器である。縄文時代晩期中葉の土器(4487～4494・4496)、晩期後葉後半(4495・4497)の土器などが出土している。

B 調査区・HⅨグリッド出土土器（第 500 図、写真図版 399～401）

縄文時代前期前半（4498・4499）、後期中葉（4501・4502）、後期後葉土器（4503・4504）、晩期中葉（4597）の土器が見られる。

B 調査区・HⅩグリッド出土土器（第 500・501 図、写真図版 400・401）

縄文時代後期前葉（4508・4509）、後期中葉（4510）、晩期中葉（4511・4512）、晩期後葉後半（4513～4533）の土器が出土している。4528 は沈線文と列点文の見られる遠賀川系土器である。

B 調査区・HⅪグリッド出土土器（第 501 図、写真図版 400・401）

縄文晩期中葉（4534）、晩期最終末（4535～4537）の土器が出土している。

B 調査区・IⅥグリッド出土土器（第 501～504 図、写真図版 400・401）

縄文時代後期中葉から後葉の土器（4540～4560）、晩期初頭・前葉の土器（4559～4562）、晩期中葉（4565～4573・4576・4577）、晩期後葉（4574・4575）の土器が出土している。4558 は刻目が施された香炉の頂部である。4561 は低い山形突起の付いた深鉢である。胴部上半には異種原体による非結束羽状縄文が施文された入組帯状文が展開している。

B 調査区・IⅦグリッド出土土器（第 504～529 図、写真図版 402～425）

4578～4623 は縄文時代前期前半の土器である。4578～4581 は幅の広い口縁部文様帯に不整綾線文、胴部に縦位撚糸文が施文されている。4582～4584 は口縁部文様帯には不整綾線文、胴部

には LR 縄文が施文されている。4585 は微隆帯で区画され口縁部文様帯には横走る不整綾線文、胴部には縦走る不整綾線文が施文されている。4586 は口縁部文様帯には不整綾線文、胴部に縦位撚糸文、底部付近に不整綾線文が施文されている。4587 は口縁部文様帯に不整綾線文、胴部に LR 縄文、底部付近に不整綾線文が施文されている。4588 は明瞭な区画隆帯をもち口縁部文様帯には不整綾線文、胴部には縦位撚糸文が施文されている。4589 は刺突文の施された区画隆帯をもち、口縁部文様帯には不整綾線文、胴部には RL 縄文が施文されている。4590 は押圧状の刺突が施された区画隆帯をもち、口縁部文様帯には不整綾線文、胴部には LR 縄文が施文されている。4591 は撚紐が押捺された区画隆帯をもち、口縁部文様帯には不整綾線文、胴部には縦位撚糸文が施文されている。4592 は刺突文が施された区画隆帯をもち、口縁部文様帯には不整綾線文、胴部には撚糸文が施文されている。4593 は低い区画隆帯をもち、口縁部文様帯には不整綾線文、胴部に撚糸文が施文されている。4594 は沈線で区画され、口縁部文様帯には不整綾線文、胴部に多軸絡条体回転文が施文されている。4595 は区画隆帯をもち、口縁部文様帯には不整綾線文、胴部に縦位撚糸文と横位撚糸文が施文されている。4596 は刺突文が施された区画隆帯をもち、口縁部文様帯には不整綾線文、胴部には LR 縄文が施文されている。口唇部にも刺突が見られる。4597・4598・4600 は区画帯は見られず全面に縦位撚糸文が施文されている。4599 は撚紐が押捺された区画隆帯をもち、口縁部文様帯には不整綾線文、胴部には縦位撚糸文が施文されている。4601 は特に区画帯は見られず絡条体の回転方向を変化させて文様が施文されている。4602 は特に区画帯はみられず全面に LR 縄文が施文されている。4603 は隆帯で区画され、口縁部文様帯・胴部に回転方向を変化させた LR 縄文が施文されている。4604 は頸部に太い区画隆帯をもち、外反気味の口縁部・胴部に回転方向を変化させた LR 縄文が施文されている。4605 は特に区画隆帯はみられず全面に LR 縄文が施文されている。4606 は刺突が施された区画隆帯をもち、口縁部文様帯には撚紐の押捺と LR 縄文、胴部には LR 縄文が施文されている。4607 は区画隆帯をもち、口縁部には不整綾線文、胴部には不整綾線文と縦位撚糸文が交互に施文されている。4608 は撚紐が押捺された区画隆帯をもち、口縁部文様帯・胴部に LR 縄文が施文されている。4609 は刺突が施された区画隆帯をもち、口縁部文様帯には撚紐の押捺、胴部には縦位撚糸文が施文されている。4610 は刺突が施された区画隆帯をもち、口縁部文様帯には撚紐の押捺、胴部には LR 縄文、底部付近には不整綾線文が施文されている。4611 は撚紐が押捺された区画隆帯をもち、口縁部文様帯には撚紐の押捺、胴部には LR 縄文が施文されている。4612 は口縁部文様帯に撚紐の押捺、胴部には LR 縄文が施文されている。4613 は口縁部文様帯に撚紐の押捺、胴部に縦位撚糸文が施文されている。4614 は押圧の刺突文により区画され、口縁部文様帯には撚紐の押捺、胴部には縦位撚糸文が施文されている。4615 は特に区画帯は見られず、口縁部文様帯には撚紐の押捺、胴部には縦位撚糸文が施文されている。4616 は LR 縄文が施文

された区画隆帯をもち、口縁部文様帯には撚紐の押捺が見られる。4617 は胴部に LR 縄文が施文されている。4618 は胴部に縦位撚糸文、底部付近に不整綾線文が施文されている。4619 は胴部に縦位撚糸文、底部付近に不整綾線文が施文されている。4620 は胴部に木目状撚糸文、底部付近に不整綾線文が施文されている。4621 は胴部に LR 縄文、底部付近に縦位撚糸文が施文されている。4622 は胴部に縦位撚糸文、底部付近に不整綾線文が施文されている。4623 は胎土に少量の繊維を含み硬質で、網目状撚糸文が施文されている。4624～4631 は縄文時代中期後半の土器である。4634 は縄文時代後期前葉の土器である。4635～4655 は縄文時代後期中葉から後葉の土器である。4644 は瘤が貼付された縄文帯と無文帯が重層する頸部に膨らみをもつ注口である。4650～4688 は縄文時代後期最終末から晩期前葉前半頃の土器である。4676～4682 は縄文時代晩期前葉後半頃の土器である。4689～4840・4842～4845 は縄文時代晩期中葉頃に相当する土器である。4841・4846～4848 は縄文時代晩期最終末の土器と思われる。

B 調査区・Ⅷグリッド出土土器 (第 530～541 図、写真図版 424～432)

4849～4862 は縄文時代前期前半に相当する土器である。4849 は区画隆帯をもち口縁部文様帯には不整綾線文、胴部には縦位撚糸文が施文されている。4850 は特に区画帯はみられず口縁部文様帯には不整綾線文、胴部には縦位撚糸文が施文されている。4851 は胎土に繊維を含み焼成は良好で硬質である。畝状の口唇部で頸部には太い沈線が 2 条巡り、口縁部・胴部には LR 縄文が施文されている。4852 は特に区画帯はなく、口縁部文様帯には不整綾線文、胴部には LR 縄文が施文されている。4853 は特に区画帯はなく、口縁部文様帯と底部付近に不整綾線文、胴部に撚糸文が施文されている。4863 は縄文時代前期の大木系の土器と思われる。RL 縄文の上に垂下する波状の粘土帯が貼付されている。4864～4866 は縄文時代前期後半の円筒下層式系の土器である。4868・4869 は縄文時代後期前葉の土器である。4870・4867 は縄文時代中期初頭の円筒上層式系の土器である。4871～4882 は縄文時代後期中葉頃の土器である。4878 は口縁部外端と胴部の境に刻みをもつ注口である。胴部には曲折状文が展開し胴部最大径の部位に瘤が貼付されている。施文される縄文は異種原体による非結束羽状縄文である。4883～4918 は縄文後期後葉の土器である。4923～4989 は後期最終末～晩期初頭頃に相当する土器と思われる。4923 は胴部に括れをもち口縁部は直線的に外傾している。口唇部に刻みもつ冠冠突起が 6 個付されている。頸部文様帯には入組帯状文が展開し、膨らみをもつ胴部には異種原体による非結束羽状縄文が施文されている。4925 は台付鉢である。口唇部には刻目が施され、胴部上半には入組帯状文が展開し、台部には三角形の透かしが見られる。4928 は壺の下半部である。異種原体による非結束羽状縄文が施文された相対する弧状文が施文されている。4936 は注口である。弧状文が展開している。4938 は注口と思われる。口縁部は無文、頸部には列点文、胴部には三叉文が見

られる。4990～5010 は晩期前葉前半、5011～5051 は晩期前葉後半頃、5052～5058 は晩期中葉の土器である。

B調査区・IⅨグリッド出土土器（第541～543図、写真図版431・432）

5065 は表裏条痕文の土器である。縄文時代前期前半の土器（5061～5067）、前期後半の土器（5072）、後期前葉の土器（5070・5074）、中期前半円筒上層系の土器（5071・5073）、後期中葉～後葉の土器（5075～5082）、晩期初頭（5080～5090）、晩期前葉前半の土器（5091～5097）、晩期中葉の土器（5098～5102）などが出土している。

B調査区・IⅩグリッド出土土器（第543図、写真図版431・432）

縄文時代前期後半の大木系（5103・5104）、晩期初頭（5105）、後期中葉（5107）、晩期中葉（2906・5108）、晩期最終末（5109～5113）の土器が出土している。

B調査区・IⅪグリッド出土土器（第544図、写真図版431・432）

5114 はLR縄文が施文され口縁部ぬきに横位の沈線が施文された深鉢である。5115～5132 は縄文時代晩期最終末に相当する土器である。5113 は中実の作りで台付の土器ないしは脚付土器の一部と思われる。

B調査区・JⅥグリッド出土土器（第544・545図、写真図版433）

縄文時代晩期中葉（5130・5134）、後期中葉～後葉（5137～5147）の土器が出土している。

B調査区・JⅦグリッド出土土器（第545～551図、写真図版433～436）

5148 は表裏条痕文の土器である。5149～5152・5155 は縄文時代前期前半頃の円筒下層系、5154・5156・5159・5161 は大木系の前期後半頃の土器である。5157 は大木系の土器で縄文時代中期初頭頃である。5158 は撚紐が押捺された、縄文時代中期、円筒上層前半ころの土器である。5162・5163 は縄文時代中期後半ころの土器である。5160・5164～5179 は後期前半頃の土器である。5180～5233 は縄文時代後期中葉から後半の土器である。5234～5238 は晩期初頭・前葉前半頃の土器である。5239～5243・5245 は晩期中葉頃の土器である。5244 は晩期終末ころの土器である。

B調査区・JⅧグリッド出土土器（第551～557図、写真図版436～440）

5246～5259 は縄文時代前期前半の土器である。5250～5251 は縄文時代前期後半の円筒下層系の土器である。5252～5254 は縄文時代中期初頭の大木系の土器である。5255～5257 は中期前半

の円筒上層系の土器である。5258～5261・5263・5265 は中期後半の大木系の土器である。5262・5264・5266～5271 は後期前葉の土器である。5280・5271 は壺形の切断土器である。5272～5311 は後期中葉から後葉の土器である。5312～5327 は晩期前葉前半頃の土器である。5328～5353 は晩期前葉後半から中葉前半頃の土器である。

B 調査区・J IX グリッド出土土器 (第 558 図、写真図版 441)

5355～5357 は縄文時代前期前半、5358 は後期前葉、5359～5361・5363 は後期後葉の土器である。

B 調査区・J X グリッド出土土器 (第 558 図、写真図版 441)

5362 は押型文土器、5365 は縄文時代前期前半の土器である。

B 調査区・J XI グリッド出土土器 (第 558 図、写真図版 441)

縄文時代前期前半 (5366・5367)、晩期中葉 (5368)、晩期終末 (5370～5372) 頃の土器が出土している。

B 調査区・K VI グリッド出土土器 (第 558 図、写真図版 440・441)

5369 は口縁部外端・頸部に刻みが施され、胴部に 3 単位の曲折状文が展開する注口である。肩部に注口と瘤が貼付されている。縄文は同一原体による非結束羽状縄文である。5373 は胴部に屈曲部のある深鉢である。頸部は無文、胴部に 1 条の沈線が巡り下半には折り重なる曲折状文が施文されている。縄文は異種原体による非結束羽状縄文である。

B 調査区・K VII グリッド出土土器 (第 551～563 図、写真図版 441～444)

5374 は縄文時代前期後半、円筒下層系の土器である。5375・5376 は縄文時代中期前半、円筒上層系の土器である。5377・5378・5383 は後期初頭頃の土器に相当すると思われる。5379～5382・5384～5397 は縄文時代後期前葉に相当する土器である。5398～5418 は縄文時代後期中葉から後葉の土器である。5419～5439 は縄文時代晩期前葉・中葉の土器である。5440～5443 は晩期終末の土器である。5433 は片口の深鉢である。片口の両側の口唇部には 2 個 1 対の凹が貼付されている。胴部には LR 縄文が施文され片口の両側に刻みのある渦巻文が見られる。

B 調査区・K IX、K XI、K XII グリッド出土土器 (第 563 図、写真図版 444)

5465・5468・5469 は片口の深鉢である。5465 は口唇部の片口の両側に凹が貼付され、頸部に

列点文が巡っている。

B調査区・L VIIグリッド出土土器（第 563～566 図、写真図版 444～447）

3167～5483 は縄文時代晩期中葉ころの土器である。5485・5486・5489・5490 は RL 縄文が施文され平行沈線文、山形沈線文が施されている。弥生時代中葉後半頃に相当する土器と考えられる。

B調査区・M VIIグリッド出土土器（第 566・567 図、写真図版 446～448）

5494 は壺形の切断土器である。外面には赤色顔料の痕跡が認められる。5498 は注口部で焼成前の穿孔が見られ、根本の部分にアスファルトの付着が見られる。5506 は弥生時代前半、5507・5508 は弥生時代後半の土器である。

B調査区・N VIIグリッド出土土器（第 567 図、写真図版 447・448）

5509・5510・5513 は縄文時代後期前葉の土器である。5511・5512 は後期中葉の土器である。

B調査区・O VIIグリッド出土土器（第 568 図、写真図版 448）

5514～5520 は弥生時代中葉から後半の土器である。5514 は直線的に外傾する無文の口縁部で胴部には無節縄文が施文されている。5515 は口縁部外面は無文、内面には LR 縄文が施文されている。5516 は外面に無節縄文、口縁部内面にも無節縄文が施文されている。

B調査区・P VIIグリッド出土土器（第 568・569 図、写真図版 448・449）

5523・5528 は縄文時代後期初頭、5524 は後期中葉、5525～5527・5529～5547 は晩期終末から弥生時代初頭の土器である。

B調査区・Q VIIグリッド出土土器（第 569・570 図、写真図版 449）

5548～5558 は縄文時代晩期終末頃の土器である。

B調査区・R VIIグリッド出土土器（第 570 図、写真図版 449）

5559 は縄文時代後期中葉頃の土器である。5560～5564 は弥生時代初頭の土器である。5560 は太く浅い多条の平行沈線文が施文された浅鉢である。内面口縁部にも 1 条の沈線が見られる。5561 は粒の大きい瘤が貼付され、3 単位の変形工字文が施文された浅鉢である。5564 は肩部に 3 本の平行沈線が巡り胴部下半に RL 縄文が施文された壺である。

B調査区・S, T, UVIIグリッド出土土器 (第570・571図、写真図版449・450)

5565～5571・5579～5602は弥生時代前半の土器である。5572～5579は弥生時代後半の土器である。

B調査区・VVIグリッド出土土器 (第571・572図、写真図版450)

5603～5605は縄文時代前期後半、円筒下層系の土器である。5606～5609は弥生時代初頭頃の土器である。

〈自然遺物〉 (第572図、写真図版450)

5610は骨針、5611は骨篋の一部、5612は環状骨製品である。5613・5614はコナラ属、5615はトチ、5616はクルミである。

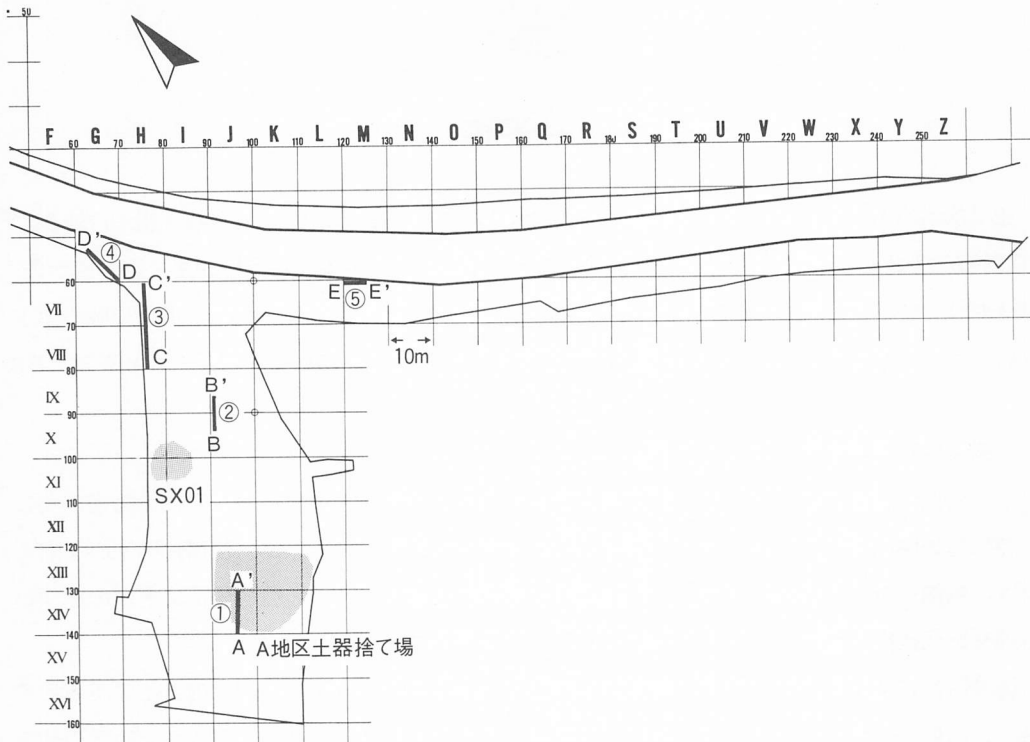
〈土製品〉 (第573～630図、写真図版451～472)

5617～5696はミニチュアの土器である。5698～5702は匙状土製品である。5699はパイプ状である。5703～5968は土偶である。5703は遮光器土偶の頭部である。後頭部に蛇行沈線が見られる。5704は中空の作りで、眼部は隆帯表現である。5705は中空の遮光器土偶で赤色顔料の痕跡が見られる。5706は中実の作りで頭頂部に横方向の貫通孔が見られる。眉・眼・口は隆帯表現で、首の折損部にアスファルトの付着が見られる。5709は中空の作りで耳に貫通孔が見られる。5715は遮光器土偶の後頭部で蛇行沈線が見られる。5716は中実の作りで眼・口は凹状の表現となっている。5720は土偶の鼻で赤色顔料の痕跡が見られる。5722は土偶の頭頂部である。5734は一部中空の作りである。5736は中実の作りで赤色塗彩の痕跡が見られる。5741は鼻曲がりの顔面で頭頂部から縦に貫通孔が見られる。5744は小型の土偶で赤色顔料の塗布が見られる。5745左腋下にアスファルトの付着が見られる。5757は異種原体による非結束羽状縄文が施文されている。5758は赤色顔料が塗彩されている。5759は小型の土偶で赤色顔料の痕跡が見られる。5762は一部中空の作りで赤色顔料の痕跡が認められる。5766は顔料の痕跡が認められる。5776は中実の作りで赤色顔料の痕跡が認められる。5777は一部中空の作りである。5790は腹部が膨らみ三叉文状の文様が施文され、裏面には異種原体による非結束羽状縄文が施文されている。全面に赤色塗彩の痕跡が見られる。5863は肩の部分と思われる。5969～5994は土版である。5979には表面に人面意匠が見られる。5980は突出する人面意匠の見られる土版である。眉・眼・口は隆帯で表現されている。5983は赤色顔料の痕跡が見られる。5984はアスファルトの痕跡が認められ突出する人面意匠であったと思われる。5987・5993は亀形土製品の可能性もある。5988・5989は楕円形で沈線で文様が施文されている。5990は顔面意匠のある楕円形の土版である。眼などは隆起表現されている。5991・5992は現段階では土版の範疇に含めておいた。5994は厚手の土版である。赤色塗彩の痕跡が見られる。5995～5998は亀形土製品である。5995・5998の観

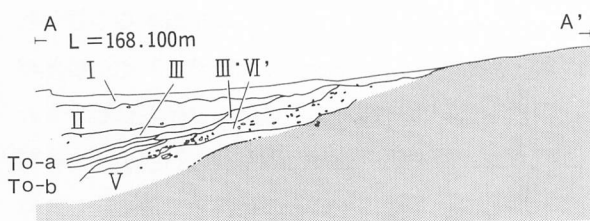
察では合体部分には刻みが施されている。5999～6001 は鐸形土製品である。6002 はキノコ形土製品と思われる。6003～6042 は環状の耳飾りである。6013 は沈線で文様が施されている。6033 は隆起状の文様が見られる。6036 は三叉文が見られ、内外面に顔料の痕跡が見られる。6043・6049 は滑車状の耳飾りである。6060～6058・6091・6092 は耳栓状の耳飾りである。6060・6062～6070 は腕輪である。6064 は不明土製品で全面に顔料の痕跡が見られる。6072～6082 は土製玉・垂飾りである。6083～6085 は腰飾りである。6086～6088 は菱形状の土製品で長軸方向には穿孔部がある。6089・6090 はボタン状の土製品である。6093・6094 はスタンプ形土製品である。6095～6100 は球状土製品である。6101 は円形刺突文が施された動物形土製品である。6102～6112 は棒状土製品である。6113 は不明土製品である。外縁の作りは亀形土製品に類似している。6116 は全面赤色塗彩された不明土製品である。6121 は顔面意匠の土器あるいは土面の可能性がある。左端（耳に相当）に焼成前穿孔が見られる。6138 は完形品で横方向の貫通孔が見られる。6139 は不明土製品で湾曲部分があり文様施文部分には顔料の痕跡が見られる。6141 は不明土製品で全面に赤色塗彩の痕跡が認められる。6146～6538 は土製円盤ですべて土器片利用の再生円盤である。ほとんどは無孔であるが 6511 は有孔円盤である。6540～6710 は焼成粘土である。

〈石器・石製品〉（第 631～712 図、写真図版 473～516）

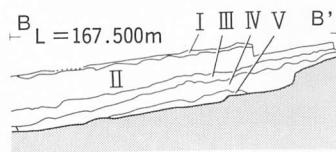
6711～7142 は石鏃、7143～7260 は石匙、7261～7369 は石錐、7370 は石槍、7371～7480 は不定形石器である。7481～7577 は磨製石斧である。7484 は基部が敲石に転用されている。7486 は身部の中央部に括れがある。7492～7494 は石爪とも考えられる。2375 は大型蛤刃である。7561 は刃部・基部が敲石に転用されている。7578～7654 は敲打磨石類である。7655～7658 は石皿類である。7659 は一部砥石としての使用痕が認められる。7671～7918 は石製円盤である。7726・7759・7825 には片面に小さい円形のアスファルト付着痕、7732・7748・7761・7783・7803・7829・7840 には赤色顔料の痕跡が認められる。7919～7975 は石棒・石剣・石刀類である。7976～7979・7992 は有孔石製品、7980・7981・7983～7985 は菱形状の石製品、7082・7986～7991・7993～7998 は軽石製品である。菱形状の石製品の長軸方向の両端部には穿孔が認められる。7999 は扁平な礫の側縁部に鋸歯状のノッチが見られる。8000～8013 は玉類である。この中の 8008～8011 は集中してセットで出土しており、これらの穿孔部の内面には赤色顔料の痕跡が認められた。



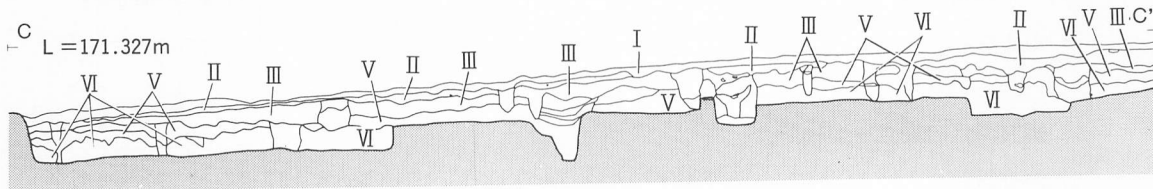
※土層は基本土層に準ずる



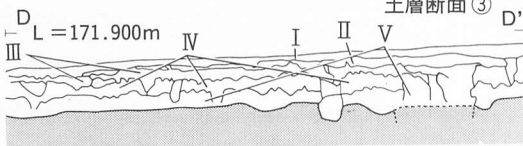
土層断面①



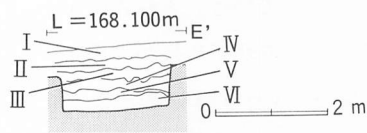
土層断面②



土層断面③



土層断面④



土層断面⑤

第143図 土層断面調査地点

V 総括(1) ～遺構について～

第2次から第5次にわたる4ヵ年の調査で縄文時代の住居跡64棟・住居跡状遺構10棟・掘立柱建物跡22棟・土墳墓を含む土坑類164基・炉焼土遺構24基・集配石遺構5基・旧河道1条、弥生時代の住居跡8棟・焼土遺構11基・配石遺構1基、奈良時代の住居跡1棟、近世以降の用水路跡1条が検出された。ここでは各種遺構から派生する問題点を取り上げ若干のまとめとする。

1. 縄文時代後期中葉・後葉の住居跡

この時期に相当する住居跡は今回の調査でもっとも多く検出されている。遺構の重複が激しく特に住居跡内の柱穴配置については明確にとらえられた例は少ないが、住居跡の中心を向くような内傾した多くの壁柱穴は、この時期には普遍的に認められる。住居の構造・炉の形態から縄文時代後期中葉から後半の住居跡の変遷について概観する。

縄文時代後期中葉田柄Ⅲ群期に相当する時期の住居跡は円形基調で地床炉のタイプが主流である。円形を基調とした住居であるが、円弧の一部がやや内側に入り込んだような形状の見られる住居跡がある。これらの住居跡は、この内側に入り込む部分に地山をスロープ状に掘り残しその両脇に並列した小柱穴が認められる例があり、出入口施設に相当すると思われる。田柄Ⅳ群期相当段階の住居跡では楕円形で相対的に大型の住居跡が見られるようになり、炉の形態としては地床炉が一般的で、住居の壁際の一部に直行させた二条の出入口に相当すると思われる並行した溝が見られるようになる。田柄Ⅴ群・Ⅵ群相当期の住居跡は前段階よりやや規模が縮小し、平面形が円形基調の住居跡である。前段階に認められたような出入口施設は設けられなくなるようである。炉の形態にやや変化が見られ、礫を使用した円形基調の石囲炉へと移行するが、この円形の石囲炉は円弧の一部が切れ「C」状となっているのが特徴である。これ以降の時期については後期末葉段階では岩手町前田遺跡1住居跡に見られる地床炉、また次の縄文時代晩期初頭段階に位置づけられる九戸村道地Ⅲ遺跡の該期の住居跡では地床炉が確認されている。

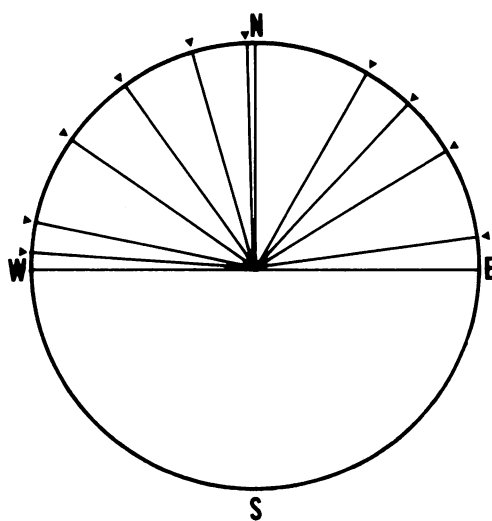
2. 縄文時代の掘立柱建物跡

A調査区から1棟(SB01)とB調査区から21棟(SB02～SB22)の掘立柱建物跡が検出されている。これらの掘立柱建物跡を構成している柱穴の規模は一般の住居跡の柱穴や土坑より明らかに規模が大きく、4～6本程度の柱穴で建物が構成され、明瞭な柱痕跡を残す例が多く認められる。壁や炉に相当するものは検出されず平面形態は紫波町西田遺跡で数多く発見された掘立柱建物跡に類似するものである。本遺跡でこの遺構の分布状況を見るとB調査区の北西側

の地域に多く分布している。B調査区の例では、時期的には縄文時代晩期の遺物包含層の下位から検出され、住居跡との重複関係では縄文時代後期中葉田柄Ⅱ・Ⅲ群相当期の住居跡より確実に新しく（SA50・56住居跡）、田柄Ⅴ・Ⅵ群に相当する住居跡（SA51・SA41・SA60住居跡）とは同時期ないし古い状況が確認されている。また、構成柱穴内から出土している土器では田柄Ⅳ群相当期のものとそれ以前の土器が出土しており、縄文時代晩期の遺物が含まれるようなことはない。このような状況から本遺跡ではこの種の掘立柱建物跡は、縄文時代後期後葉後半段階の所産と考えられる。壁や炉をもたず大型の柱穴で構成されているこれらの掘立柱建物跡は明らかに一般の竪穴住居跡とは異なっており、通常の居住施設とは考えられない。本遺跡を含め他遺跡でこれらと類似する縄文時代の掘立柱建物跡の多くは、大型の柱穴で太い柱が使用されていた痕跡が明瞭に残された例が多く、太い柱は抜き取られることはなくそのまま残される性格をもった構造物であったと思われる。また、ある特定区域に集中して発見される場合が多く遺跡の空間構成上（遺構の占地）、何らかの強い制約のもとで構築された遺構と考えられる。縄文時代中期中葉の紫波町西田遺跡では土壌墓群を取り囲むようにこの種の遺構が環状に分布しており葬送施設との考えが提示されている。本遺跡でもこれら掘立柱建物跡の東側にはほぼ2ヶ所に墓域が認められており西田遺跡同様、本遺跡の場合も葬送儀礼に関連をもつ施設と考えることができよう。しかし、西田遺跡例を含め縄文時代のこの掘立柱建物跡を葬送施設とすることに対して懐疑的な見解も示されており、一律にこれを適用できない面もある。しかし、同一遺跡内でこのような掘立柱建物跡と墓域がセットで検出される例などは西田遺跡の見解を支持できる状況と考えられる。縄文時代中期の西田遺跡では中央部の空白区・土壌墓群・掘立柱建物跡群が整然とした環状構造を示しており、強い空間規制が作用した結果であろう。しかし、本遺跡の場合は、これと類する遺構がB調査区の東側には認められないことから環状構造を示すものではないが弧状に並ぶように思われる。本遺跡ではB調査区では2ヶ所に掘立柱状建物跡の集中区が認められており、これらがやはり2ヶ所に認められる墓域にそれぞれ対応すると考えられる。

3. 縄文時代の土壌墓

B調査区、KⅦグリッドとHⅥ・IⅥグリッドを中心とした区域から埋葬人骨を遺す土



第144図 土壌墓軸線方位

墳墓が検出された。埋葬人骨が遺存する土壇墓の規模や形状、分布状況から土壇墓と推定される土坑もいくつか認められる。また、土層が非常に複雑で土壇墓の存在を明確にできなかったものもあり、実数はややこれを上回ると思われる。人骨のみ、赤色顔料のみが確認されたものもあるがこれらも本来は小判型の土壇墓と同様のものと考えられる。分布状況を見る限りでは2ヶ所にその集中地点があり仮にHVIグリッド側を西群、KVIIグリッド側を東群とすると、2群の埋葬区で墓域が構成されていたと考えられる。

これらの土壇墓は形態的には160 cm±×100 cm±の規模の小判型～楕円形のもが主体であるが、円形を基調とするものもいくつか見られる。小判型の一類型と思われるが土坑の底面に溝や柱穴様の小さい穴を巡らせた例もある。土坑内部に明瞭に形状を把握できる埋葬人骨が遺存した例が4例認められ、仰臥・側臥屈葬状態の埋葬方法が見られる。本質的には一土坑1体が基本であるが、SD127土壇墓では頭位方向の異なる並列ないし重なった状態の2体の合葬人骨が確認されている。特にこの土壇墓は東群・西群にも属さず離れた場所から検出されており他とは異なった存在として理解されるかもしれない。

遺存する埋葬人骨や赤色顔料の検出地点などからある程度人骨の体軸方向つまり埋葬頭位を類推することは可能である。赤色顔料が土壇墓の長軸方向の一端から検出される場合が多く、遺存する人骨の頭部付近に赤色顔料の痕跡が認められることから、顔料の散布位置が頭位部分を示していると考えられる。検討資料は少ないが本遺跡の場合は東～西頭位のものが多いように思われる。

埋葬人骨のなかには遺体とともに各種の遺物が認められたものもある。SD084土壇墓の埋葬人骨は左手にミニチュアの土器、SD099土壇墓の埋葬人骨は頸部に2点・腰部に2点のヒスイの玉が検出されている。広義の副葬品としての遺物を持つ場合と持たない場合が認められる。これは赤色顔料の散布にも適合されることである。東群では広義の副葬品は持たないが赤色顔料が認められる場合が多く、これに対し西群は副葬品を持つことが多いようである。

次に土壇墓と礫の関係について触れてみたい。SD084・SD099土壇墓では埋葬人骨の胸・腹部に相当する部分に赤色顔料が塗布された偏平な礫が認められた。特にSD099土壇墓では、土坑の開口部に顔料塗布面を遺体側に向けた状態で検出されており赤色顔料の散布と同様、葬送者側の遺体に対する何らかの特別な意識が働いた結果と考えられる。このような礫の使用法の他に、SD077・092土壇墓に見られるような巨大な礫を用いた例があり、これらは墓標的側面も兼備していたと考えられる。

これらの土壇墓は縄文時代晩期前葉・中葉の遺物包含層の下位から検出されており、田柄III群相当期の遺物包含層を切り込んでいる。遺構の重複関係から田柄IV群期に相当するSA35住居跡よりは新しく、田柄VI群期に相当するSA51住居跡との関係では同時期ないしこれより古い時

期が想定されている。このような状況から、これらの土墳墓を含む墓域の構築時期は縄文時代晩期前葉まで下ることはなく、縄文時代後期後半（田柄IV群期以降）～後期末葉（田柄VI群相当期）の間に求めることができよう。

前述したように当遺跡では土墳墓の分布に東群・西群の2ヶ所の集中区が見られる。これはおのおの、林謙作氏のいう埋葬区に相当し本遺跡の場合は2群で墓域が構成されている。10数基の土墳墓が円内に分布して埋葬区を形成する墓域構成は縄文時代後期後半から晩期中葉の時期に東北地方北半地域では普遍的に見られる葬法である。岩手県内でもこのような例は盛岡市稗内遺跡、三陸町宮野貝塚、花泉町貝鳥貝塚などで確認されている。また、本遺跡とほぼ同時期と考えられる八戸市風張遺跡でも二分された墓域が確認されており、墓域の構成にさいして何らかの分割原理があったことを意味していると思われる。

集落構成から墓域を見た場合、本遺跡では平成4年度以降の調査で北東側の地域からはこれらに類する土墳墓・縄文時代後期後葉の住居跡の検出がほとんどなく、墓域を中心とした環状構造は認められない、しかし傾向としては該期の住居跡は墓域をおかすことはなく墓域を前提とした意図的・計画的な集落構成を見ることができる。

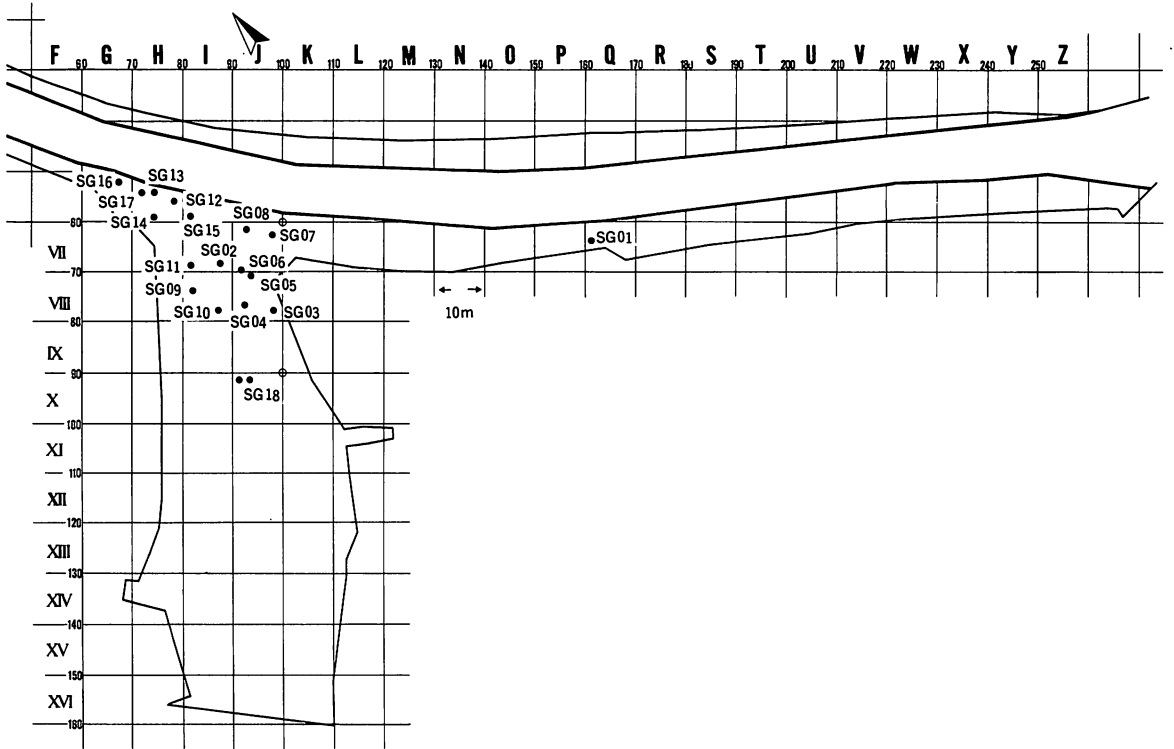
遺構名	規模 (cm)	深さ (cm)	平面形	軸線方向	備 考
SD 064	180×82	60	楕円形	N 79°W	土墳墓、西端に赤色顔料
SD 065	150×76	41	楕円形	N 90°W	土墳墓
SD 066	156×74	60	小判形	N 90°W	土墳墓、西端に赤色顔料
SD 067	126×90	33	略円形	N 43°E	土墳墓
SD 068	120×76	44	楕円形	N 29°W	土墳墓
SD 069	162×68	35	楕円形	N 58°E	土墳墓
SD 070	152×54	36	楕円形	N 1°W	土墳墓
SD 071	124×100	4	隅丸長方形		周溝状?土墳墓?
SD 072	×		長楕円形		土墳墓、顔料のみ検出
SD 077	212×108	5	不整楕円形		土墳墓、墓標礫、ビット
SD 084	178×112	20	小判形		土墳墓、人骨、顔料、礫、ミニチュア土器、東頭位、仰臥埋葬
SD 087	124×86	22	隅丸長方形		土墳墓
SD 092	96×80	20	略円形		土墳墓、墓標礫
SD 095	156×88	30	小判形	N 90°E	土墳墓
SD 096	156×88	30	小判形	N 55°W	土墳墓
SD 099	175×95	40	小判形	N 82°E	土墳墓、ヒスイ、顔料塗布礫、西頭位、仰臥埋葬
SD 103	188×93	11	小判形	N 36°W	土墳墓、人骨、東南頭位、仰臥埋葬
SD 108	99×99	5	円形		土墳墓、人骨
SD 115	70×66	24	円形		土墳墓、人骨頭部
SD 127	155×70	37	長楕円形		土墳墓、人骨2体分、西、東頭位、仰臥埋葬
H V15 d					人骨、赤色顔料

土墳墓一覧表

4. 土器埋設遺構（第145図）

今回の調査でB調査区から19例の土器埋設遺構が検出された。時代別では縄文時代前期2例、縄文時代後期後半～末葉3例、縄文時代晩期前葉7例、縄文時代晩期中葉7例である。

縄文時代前期の2例とも円筒下層d式に位置づけられる土器である。両者は非常に離れた場所で見出されており直接的な関連は見いだせない。平成4年度以降のB調査区の北東側の調査



第145図 土器埋設遺構(SG)分布図

遺構	埋設状況	底部穿孔	備考	時期
SG01	正立	欠失		縄文時代前期後半
SG02	倒立	無	耳飾・焼成粘土	縄文時代晚期前葉
SG03	正立	無	入れ子	縄文時代晚期前葉
SG04	正立	無		縄文時代晚期中葉
SG05	正立	無	片口土器	縄文時代晚期前葉後半
SG06	倒立	無		縄文時代後期後半
SG07	正立	無		縄文時代晚期中葉
SG08	正立	無		縄文時代晚期中葉
SG09	正立	無	不定形石器	縄文時代後期後半
SG10	正立	無		縄文時代後期末葉
SG11	倒立	欠失		縄文時代晚期中葉
SG12	正立	無		縄文時代晚期前葉
SG13	正立	無		縄文時代晚期前葉
SG14	正立	無		縄文時代晚期中葉
SG15	正立	無		縄文時代晚期中葉
SG16	正立	無		縄文時代晚期前葉
SG17	正立	無	壺	縄文時代晚期前葉後半
SG18	正立	無	周囲に礫	縄文時代晚期中葉
SG19	正立	無	蓋石	縄文時代前期後半

土器埋設一覽表

ではこの時期に相当する多数の土器埋設遺構が検出されている。しかし、縄文時代前期後半時期の住居跡はほとんど検出されておらず居住域とは異なる場所に埋葬に関わる施設が設定されたと考えることができる。

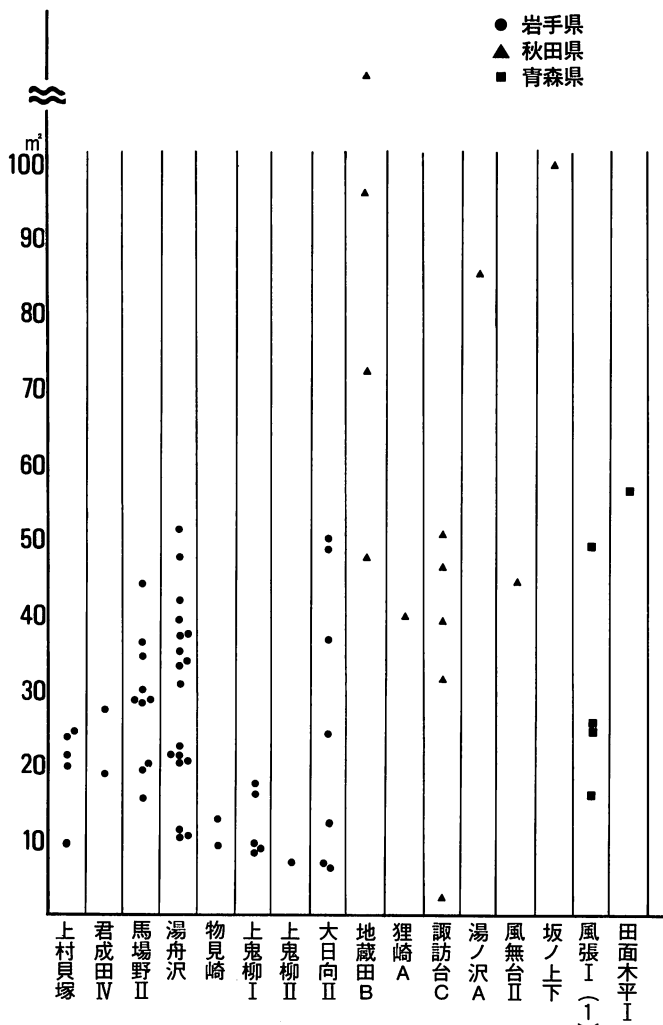
縄文時代晩期前葉ではJ VIII・G VI・H VIグリッドに、晩期中葉の時期のものはJ VII・I VIIIグリッドに集中しており時期により占地に相違が見られ、埋葬施設として独立した空間を占めている。また、本遺跡ではこれらの土器埋設遺構が分布する地域にこれよりも古い時期の墓域が確認されており、埋葬施設は異なるが時期を越えてこのエリアが墓域空間として踏襲されていたことが認められる。

5. 弥生時代初頭の住居跡

(第146図)

B調査区の東端付近から弥生時代初頭の時期の住居跡が8棟検出されている。全容を把握できたものは少ないが重複が激しく土器の内容から近接した時期と考えることができる。短期間に住居の構成に変化があったと思われる。この時期の住居跡の変化については既に小田野が詳細に論じている。

平面形は略円形のものが多く一部楕円形のものが見られる。住居の床面積を比較した場合非常に顕著な違いが認められる。相対的に大型の住居跡は全容を把握できたものはなく床面積はすべて推定値であることをことわっておく。10 m²±の小型のタイプ(SA24・SA28・SA32)と50



第146図 弥生時代前半の住居跡床面積

m²±の大型のタイプ (SA25・SA26・SA29) が見られる。また、大型のタイプは石囲炉形態のものでしかも拡張住居跡が多いこと壁溝 (周溝) が見られることが指摘される。重複関係から大型タイプの住居跡が時期的に古く位置づけられる。このような住居構造は同じ軽米町にある馬場野II遺跡・君成田IV遺跡でも見られる。これに対し北上川上流域にある湯舟沢遺跡では大型の住居跡も若干認められるが、壁溝や同心円状の拡張はみられず位置をかえての建て替えが見られる。また、沿岸部の上村貝塚、北上川中流域の物見崎遺跡・上鬼柳I遺跡では大型の住居跡は検出されていない。他県に目を転じれば、この時期の壁溝・同心円状の拡張が見られる大型住居跡は青森県・秋田県にみられ東北地方北半地域に多く認められる傾向がある。この分布は東北地方北半地域の遠賀川系土器の分布と重複している。遠賀川系土器の出現と大型住居跡の出現はほぼ同時期に起こった事象と考えられる。大型住居跡は遠賀川系土器の分布が希薄な北上川流域にはみられないことから支持されると思われる。しかも、これらの相対的に大型の住居跡はそれ以降の時期に継続されることはなく一時的な現象としてとらえることができる。

VI 総括(2) ～遺物について～

1. 土器

4ヵ年の調査で約9トンの土器が出土している。その約9割以上は縄文時代の土器で、その他に弥生時代の土器と奈良時代の土器が出土している。約8トンは土器捨て場や緩斜面中に形成された遺物包含層中から出土している。また、僅かではあるが遠賀川系土器・後北式土器・北大式土器など他地域との交流を示す土器も出土している。

第155図に遺構外 (土器捨て場等) から出土した土器の重量分布を示した。I XII・J XII グリッドは旧河道に相当し各時期の土器が出土しているが主体をなすのは縄文時代晩期前葉・中葉の土器である。A調査区ではJ XIII・J XIV・K XIII・K XIV グリッドから多量の遺物が出土している。このグリッド部分は南側から沢に向かって形成された谷部分に相当し断続的であるが遺物の廃棄場所として使用されたと思われる。出土量は縄文時代後期後半期の土器が最も多く、次いで後期前葉、晩期中葉の順となっている。B調査区では調査区全域にわたって遺物の出土が見られるが、J XI・J Xグリッドの集中区は北側から南側の沢に向かう緩斜面で細片が多いことなどから遺物の捨て場ではなく斜面上方の包含層からの流れ込みで形成されたものと考えられる。特に、G VI・H VI・H VII・I VII・I VIII・J VIIIグリッドに遺物の集中が見られる。この区域は遺構の集中も著しく人間の活動が活発であったことがうかがわれる。この中でG VI・H VI・H VIIグリッドでは縄文時代晩期前半期大洞B式に相当する土器の出土が目立った。I VII・I VIIIグリッドを中心とした区域では縄文時代晩期中葉、後期中葉・後半期、縄文時代前期前葉

円筒下層系の土器の出土が顕著であった。また、HX・HXI・IXIグリッドにまたがる地域にはSX01 遺物集中区とした縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭の遺物廃棄場所が確認された。また、LVIIグリッド以東には縄文時代後期前葉の土器、縄文晩期中葉、弥生時代初頭の土器が出土している。特に縄文時代後期前葉の土器は他地点に比べ多く出土している。僅かではあるが弥生時代中期・後半期の土器もこの地点から出土する傾向がある。最も遺物量の多い縄文時代晩期前葉・中葉の時期に相応する遺構は、A・B両調査区を通じても非常に少なくこの時期に相当する遺跡の主体部はB調査区の北西部の斜面上方に存在すると考えられる。

(1) 出土土器の概要 (第713～748図)

ここでは、本遺跡の遺構内外から出土した土器を対象として大略的な土器の変遷を提示した。提示にあたっては最近の研究成果をふまえ既存の土器型式に準拠した。

第I群 縄文時代早期の土器群である。

- 1類…縄文時代早期前葉の押型文土器に位置づけられるもので、回転押型文が施文される一群と、縄文と平行沈線文が見られる土器で日計式に類する一群である。
- 2類…縄文時代早期中葉頃に位置づけられるもので、貝殻文が見られる一群である。本遺跡では1片しか出土しておらず貝殻の腹縁で幾何学的な文様が施文されることから物見台式に相当すると考えられるものである。
- 3類…縄文時代早期後葉頃に位置づけられるものでムシリI式に類似するものである。平縁で尖底の土器である。内外面に条痕文が見られ口縁部周辺に刻みの施された細い隆線が貼付されている。口唇部、胴部下半に絡条体の圧痕文がみられる。

第II群 縄文時代前期の土器群である。

- 1類…前期前半の土器で円筒下層a式・円筒下層b式に位置づけられる一群。さらに区画隆帯の有無により、区画隆帯を持たないグループ(第II群1a類)と区画隆帯を持つグループ(第II群1b類)、沈線で区画されたグループ(第II群1c類)に細分した。
- 2類…前期後半の土器で円筒下層c式・円筒下層d式に位置づけられる一群。このなかで幅の広い口縁部文様帯に撚紐押捺により幾何学状の文様が施文されるものは円筒下層c式に近いものと思われる(第II群2a類)。また、幅の狭い口縁部文様帯に撚紐押捺や絡条体押捺が見られる類は円筒下層d式に位置づけられるものである(第II群2b類)。
- 3類…前期中葉の大木系土器で大木3・4式頃に位置づけられる一群。細い沈線等で口縁部周辺に不規則な沈線文が施文されている。やや類似する土器が秋田県上の山II遺跡で出土している。
- 4類…前期後半の大木系土器に位置づけられる一群で本遺跡では大木6式が出土している。

第Ⅲ群 縄文時代中期の土器群である。

- 1 類…中期前半の土器で円筒上層 a 式・円筒上層 b 式に位置づけられる一群。波状口縁、口縁部文様帯内への平行・山形などの擦紐押捺、隆帯内の無文部・刺突文がみられる。
- 2 類…中期中葉の土器で円筒上層 e 式に位置づけられる一群。口縁部周辺に細い粘土紐の貼付が見られる。
- 3 類…中期初頭から中葉の大木系の土器で本遺跡では大木 7・8 式が出土している。口縁部周辺への細沈線による綾杉状の文様（第Ⅲ群 3a 類）、縄文が施文された垂下する波状隆帯が見られる（第Ⅲ類 3 b 類）。
- 4 類…中期後葉から末葉の大木系の土器で、本遺跡では大木 9 式・大木 10 式の土器が出土している。縄文が充填された長楕円文（第Ⅲ群 4a 類）、横 S 字状文、刺突文などがみられる（第Ⅲ群 4 b 類）。

第Ⅳ群 縄文時代後期の土器群である。

- 1 類…後期前葉の土器で十腰内Ⅰ群の時期に相当する一群である。
- 2 類…後期中葉の土器で十腰内Ⅱ・Ⅲ群、田柄貝塚第Ⅲ群土器（手塚：1986）の一部、新山権現社Ⅱ・Ⅲ式（金子：1993）に類似した一群。SA64・SA50・SA56 住居跡出土資料が該当する。
- 3 類…後期中葉の土器で十腰内Ⅳ群、田柄貝塚第Ⅳ群土器（手塚：1986）、高柳瘤付第Ⅰ段階（高柳：1988）、安孫子瘤付第Ⅰ様式（安孫子：1989）の一部に類似した一群。SA07・SA35・SA36・SA38・SA46・SA69・SA77・SA82 住居跡出土土器が該当する。
- 4 類…後期後葉の土器で十腰内Ⅴ群、高柳瘤付第Ⅱ・Ⅲ段階（高柳：1988）、田柄貝塚第Ⅴ・Ⅵ群土器（手塚：1986）に類似した一群で瘤が最も多用される段階である。SA03・SA08・SA41・SA43・SA44・SA51・SA60 住居跡出土遺物が該当する。この中でも SA03・SA08 住居跡は他よりもやや先行し、押圧状刻目列が盛んに用いられる SA51 住居跡出土はやや新しい可能性がある。
- 5 類…後期最終末葉の土器で十腰内Ⅴ群、高柳瘤付第Ⅳ段階（高柳：1988）、田柄貝塚第Ⅶ群土器（手塚：1986）に類似した一群。良好な資料には恵まれなかったが、入組带状文の内部を櫛歯状沈線で充填したものや、深鉢の胴部の屈曲部に横長列点文が施文されたもの、口縁部に「几」字状突起がふされたものが見られる。

第Ⅴ群 縄文時代晩期の土器群である。

- 1 類…晩期初頭の一群で、十腰内Ⅵ群、高柳大洞 B 古段階（高柳：1988）に相当する一群である。縄文が充填された入組带状文や連続した低い畝状の口縁部が特徴的である。
- 2 類…主に入組三叉文等によって特徴づけられ晩期前葉前半頃に相当する一群である。

3類…主に羊歯状文等によって特徴づけられ晩期前葉後半に相当する一群である。

4類…主に雲形文・刻目文によって特徴づけられ晩期中葉前半頃に相当する一群である。

5類…主に雲形文・工字文等によって特徴づけられる一群で、晩期中葉後半から晩期後葉前半頃に相当する一群である。

第VI群 弥生時代の土器群である。

1類…小田野編年（小田野：1987）の第I期に相当する一群である。変形工字文で特徴づけられる一群である。

2類…小田野編年（小田野：1987）の第III期～第IV期の前半頃に位置づけられる一群と思われる。田舎館式や一戸町上野遺跡第I群土器に類似する土器で磨消縄文、平行沈線文、連続山形沈線文、連続弧状沈線文などがみられる（第378図 2837・2838・2841、第568図 5518・5520）壺形土器が出土している。また、薄手硬質で頸部に無文帯をもつものや口縁部内面や口唇部に縄文が施文された例、平行沈線文、重層連続山形沈線文が施文された例はすべて甕形土器である。

3類…小田野編年（小田野：1987）の第V期に相当する。本遺跡ではA地区土器捨て場（第445図 3770～3791）、SD062土坑（第335図 2139～2141）、B地区S・T VIIグリッド（第570図 5572～5578）、SF02（第378図 2839・2842）で出土している。口縁部付近に施文される工字文風の沈線文、交差する縄文、退化交互刺突文、羽状状縄文が特徴で赤穴式の後半段階と考えられる。

第VII群 弥生時代後半から古墳時代の土器群である。

1類…後北式土器に位置づけられる一群である。

SF02旧河道とA地区の土器捨て場から後北式土器が出土している（第379図 2843、第445図 3792）。刻みが施された口縁部に並行する隆帯、微隆起線、三角形連続刺突文などの特徴から両者とも後北C₂・D式に位置づけられるものである。後北式土器の時期的な位置づけについては未だ流動的で、大きくは弥生時代後半の土器あるいは古墳時代前半の土器との併行関係が考えられている。岩手県内ではこれらの関係について遺構内での共伴資料や層位的な検出例は全くなく、時期的な問題については机上論が先行している。このなかで在地の弥生時代後半の土器のなかに後北C₂・D式土器の施文方法との類似性が見られる土器が存在する。例えば胴部下半に間隔のあく帯縄文風の文様が展開する例（第445図 3788・3789）や文様帯を区画するような胴部を巡る横方向の帯縄文（第445図 3781）が本遺跡のA地区土器捨て場から出土している。

2類…北大式に位置づけられる一群である。

A地区の土器捨て場から並行微隆起線を特徴とする北海道に主要な分布域を示す北大

式(第445図3793)が出土している。本遺跡から出土した資料は細片であるため詳細は不明である。類似資料としては西根町上斗内Ⅲ遺跡、水沢市石田遺跡、一戸町大久保遺跡で出土が知られている。このなかでも石田遺跡出土のものは帯縄文も施文されており他の例よりは若干古くなると思われる。

第Ⅷ群 奈良時代の土器群である。SA02住居跡とSF02旧河道から出土している。

上記が今回の大日向Ⅱ遺跡の調査で出土した土器群の概要である。次に各土器群の内容から派生する問題について若干触れてみたい。

(2) 縄文時代前期前半の土器について

本遺跡で第Ⅱ群1類としたものが該当する。B調査区ⅠⅦグリッド・ⅠⅧグリッドを中心とした区域から比較的まとまった資料が得られており、これらの土器は一括性のたかいものである。従来の型式名では円筒下層a式・b式と呼ばれている型式名が該当してくるが本遺跡ではこれらの土器群が混在して出土している。

区画隆帯をもたない第Ⅱ群1a類には異なった施文方法で口縁部文様帯を意識したものと、口縁部文様帯が見られないものがある。口縁部文様帯には不整綾線文・葺瓦状綾線文・撚紐の押捺がみられ不整綾線文施文の土器が卓越している。胴部の地文では縦位撚糸文と斜行縄文が見られる。口縁部文様帯のないグループでは前者と同様の施文が見られる。第Ⅱ群1b類としたものは区画隆帯で明確に口縁部文様帯が区画されているものである。区画隆帯には各種あり、隆帯上に沈線(溝線)が巡るもの、撚紐が押捺されたもの、刺突文が施文されたものが見られる。区画された口縁部文様帯には不整綾線文、単節斜行縄文、撚紐押捺が見られる。胴部の地文には縦位撚糸文、斜行縄文が見られる。第Ⅱ群1c類としたものは口縁部文様帯に横位の平行沈線や山形沈線文が施文された一群である。多くは斜行縄文を地文とした土器群である。単独に沈線のみが施文された土器や、第Ⅱ群1b類の区画隆帯をもつ類にみられる場合もある。上記の他にこれらの土器群と混在して出土している土器に、組紐回転文、縄の束の押捺、条痕文、網目状撚糸文、S字状連鎖沈線文が施文されたものがある。

第Ⅱ群1類としたものは特にⅠⅦ・ⅠⅧグリッドから混在した状況で集中して出土している。また、共伴関係は明かでないが同一遺構内でもともに出土する傾向が見られる。これらの土器群の多くは従来の型式では円筒下層a式・b式の範疇で理解される一群である。しかし、この中で第1c類とした沈線のみみられる一群は従来の型式認定の要素からは逸脱するものである。しかし、口縁部が隆帯区画された従来の円筒下層b式でとらえられる土器の口縁部文様帯に山形沈線文が施文された土器があることや平行沈線文が施文された土器で口縁部内面に縄文の施文された土器があることなどから、これら沈線文を有する一群は円筒下層a・b式に近いことが指

摘される。また、近隣の青森県階上町白座遺跡でも円筒下層 a 式・b 式的な要素を持つ土器群とこれら沈線文を持つ一群がともに出土している例や、従来の円筒下層 a・b 式にはみられない胴部文様帯で横方向に展開する不整綾線文や底部付近での地文の施文方法の変化などをさせて胴部地文のなかに文様帯を意識した施文方法は共通して認められる。ただし、階上町白座遺跡に見られるような胴部に膨らみをもつ器形や底部外面に縄文を施文するものは本遺跡にはほとんど見られない。細部では相違する部分はあるものの総体的には非常に類似した内容をしめしており、現段階ではこれらの土器群の示す内容は該期の新井田川水系に特徴的に分布する土器群とも思われる。

(3) 縄文時代後期中葉から後期終末の土器について (第 147～151 図)

本遺跡で第IV群 2 類から 5 類とした一群が該当する。この時期の土器群は縄文時代後期中葉から後葉の段階に相当するものである。この時期の編年については従来から東北地方北半地域では磯崎正彦氏等によって編まれた十腰内編年(十腰内II群～十腰内V群相当)や宮城県仙台湾周辺での後藤勝彦氏等による宮戸編年(宮戸II式～宮戸III式相当)が当てられてきた。最近では宮城県田柄貝塚(田柄第III群～第VII群相当)で層位的な出土例が知られるようになりこの時期の土器群についても次第に明らかにされてきている。

縄文時代後期中葉前半段階の土器は本遺跡の第IV群 2 類が相当し十腰内II・III群、田柄貝塚第III群の一部、新山権現社II・III式(金子:1993)に類似した一群である。壺形土器や深鉢形土器の口縁端部や胴部との境の頸部付近に刻目が施文される。浅鉢土器でも胴部の屈曲部付近に同様の刻目帯が見られる。文様要素としてはこれらの刻目帯の他に非結束羽状縄文が充填された幅の広い「ノ」字状文・平行带状文、幅の狭い反転平行带状文、綾杉状・斜格子状の沈線文などが見られる。深鉢では大波状縁のものも見られ、壺形土器の多くは平口縁である。この段階の頃から特に県北部地域を中心に単孔壺の分布が見られるようになる。本遺跡の SA 50・56・64 住居跡出土土器や岩手町川口II遺跡の BD2・BB1・BB3・AC2 住居跡、軽米町馬場野II遺跡 LIV-3 住居跡出土土器が相当する。

縄文時代後期中葉後半段階の土器で本遺跡の第IV群 3 類が相当し十腰内IV群、田柄貝塚第IV群、高柳編年の瘤付き第I段階に類似した一群である。壺形土器では前段階に続き広口のものがみられ、平口縁で口唇部に低い突起が付き口縁部裝飾帯として口縁部の直下に1～2条の幅の狭い縄文帯が巡る。このような口縁部裝飾帯は各器形に多用されている。文様要素としては幅の狭い平行帯縄文、鍵状帯縄文、曲折状文、放射状の弧状文、タスキ掛け状入組文などが見られる。深鉢形土器は平口縁で口唇部に多数の大小の突起が付き、胴部に屈曲部をもち口縁部が外傾するものが見られる。比較的大きめの瘤が深鉢では突起の口縁部外端や胴部の屈曲部、

壺形土器の胴部に小数貼付される。本遺跡の SA03・07・35・36・38・46・77・82 住居跡出土土器や軽米町馬場野 II 遺跡 MIV-07・MIV-05・LIV-06・LIV-04・MIV-04・KV-02、野田村根井貝塚第 1 号住居跡、軽米町君成田 IV 遺跡 I 55-1 号・D54 住居跡、大日向 II 遺跡 I I-2 住居跡出土土器（第 1 次調査）が相当する。

縄文時代後期後葉前半段階の土器で本遺跡の第 IV 群 4 類が相当し十腰 V 群、田柄貝塚第 V・VI 群、高柳編年の瘤付き第 II・III 段階に類似した一群である。瘤が最も多用される段階で、狭い縄文帯上、文様の連結部・深鉢の屈曲部分に貼付されることが多くなる。瘤は以前にみられたような丸みをもつものから先の鋭いものや、瘤の粒の小さいもの、縦に長いものなどが認められる。文様要素としては瘤が貼付された幅の狭い平行帯縄文や鍵状帯縄文、弧状文、曲折した曲線状文、入組带状文、弧線連結文、沈線による円文・楕円文・弧状文・菱形文などが見られる。深鉢形土器では 4 単位の大振りの山形波状口縁部や平口縁に付く低い「几」字状突起が多く見られる。注口は口縁部が長く、頸部に膨らみをもつ三段構成のものが数多く見られる。各種の無文土器を伴うことが多いようである。この時期のさらに古い段階として本遺跡の SA03・08 住居跡、後続の段階として SA41・43・44・60 住居跡出土土器が該当すると思われる。特に後出の段階とされる SA51 住居跡出土土器は深鉢形土器の口縁部や胴部の屈曲部分に突き起こしによる押圧状刻目列が巡っており、これらは以前までの見られた瘤の貼付位置と同じであり瘤の技法が刺突の手法に変化したものと思われる。この時期の古い段階としては野田村根井貝塚第 2 号住居跡埋土下部資料、軽米町大日向 II H I-1・I II-3・H I-8・H I-4 住居跡、滝沢村湯舟沢遺跡 VII Le-2 住居跡、大迫町板橋遺跡第 1 号住居跡、盛岡市科内遺跡出土土器が相当すると思われる。さらに新しいと考えられる大日向 II 遺跡 SA51 出土資料は県内には良好な比較可能な一括資料が見られず、軽米町長倉遺跡・安代町水神遺跡（小田野他：1982）などにごく僅かに散見される程度である。

縄文時代後期後葉後半段階の土器で本遺跡の第 IV 群 5 類が相当し十腰 V 群、田柄貝塚第 VII・VI 群、高柳編年の瘤付き第 IV 段階に類似した一群である。櫛歯沈線で充填された入組文と平口縁に「几」字状突起が付された深鉢などが見られる。良好な一括資料に乏しく安代町水神遺跡 II g60 住居跡、滝沢村大緩遺跡 103 号陥し穴、盛岡市科内遺跡、岩手町前田遺跡第 1 号住居跡床面、岩手町桜遺跡出土資料などが該当する。これらに類する資料で縄文時代後期最終末を迎え、続いて縄文が充填された入組帯縄文や平口縁に大小の「几」字状突起が付されたような滝沢村湯舟沢遺跡、一戸町小井田 IV 遺跡、軽米町駒板遺跡 III c 87-5 P 土坑出土資料のような一群を経て、岩手町前田遺跡第 1 住居跡 3b・3c 層、九戸村道地 III 遺跡 F II-9 住居跡出土のような縄文時代晩期初頭の一群につながっていくものと思われる。

(4) 縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭の土器について

SX01 遺物集中区はB調査区のH XI・HX・IX・IXIグリッドにまたがった約20m²程度の広がりをもつ区域である。遠賀川系の大型壺を含む在地の土器と土偶・匙状土製品・石剣・ガラス丸玉など祭祀・葬制に関連した遺物の出土が注目される。このような出土状況であるため純粋に器種構成を反映しているとは思われないが、浅鉢・高坏・壺・甕が見られこれらのものに遠賀川系の土器が共伴している。浅鉢は図示できたものはないが破片から見る限りでは胴部上半に細い沈線で隆起状の変形工字文が施文されている。口縁部は内湾するもので直線的に外傾するものは見られなかった。高坏は一般に台部が低く無文のものや鋸状の沈線文が施文されたものが見られる。台部には台形状のものや曲線的なものが見られる。坏部には変形工字文が施文されるが沈線は細く断面形がやや鋭さをもつ。工字文に見られる瘤は小さいものが多く、この傾向は浅鉢・鉢の変形工字文にもあてはまるようである。甕の多くは短い直立気味の口縁部をもつことが最大の特徴で口縁部周辺は横方向のミガキ調整がなされている。口縁部の括れの部分に2～3条の沈線が巡る甕も出土している。SA85 住居跡出土土器は胴部上半に細い沈線による小さい瘤をもつ無文壺を含むことからやや古い様相を示しているかもしれない。これらの特徴を総合するとこれらの土器群は大洞A'式古段階、工藤氏の剣吉荒町II群に相当すると思われる(工藤:1987)。

このSX01 遺物集中区から約100m東側にある昭和63年度の調査区では弥生時代の住居跡とこの時期に相当する遺物が出土している。縄文時代晩期終末期頃の土器も多少出土しているが主体的に出土しているのはいわゆる砂沢式あるいはこれに後続する段階の土器、小田野編年(小田野:1987)の弥生Ia期・Ib期の土器を含んでいる。混在した状況で出土しており2～3段階程度の時期の土器を含んでいる可能性がある。浅鉢では直線的に外傾するものが多く胴部には太い沈線で並行沈線・変形工字文が施文されている。変形工字文の瘤は大きいものが目立ち、胴部に縄文が施文されたものは相対的に少ない。高坏類では胴部下半に縄文が施文され上部には3単位構成の変形工字文が施文されている。このなかでも沈線が細く変形工字文の曲線部の相対部分がシャープに屈曲しているものはやや後続の段階の可能性もある。口縁部は平口縁もしくは二又状の低い波状縁で口縁端部は直立気味のものが多い傾向にある。脚部やや高く、太い沈線で波状文が施文されている。文様の施文された小型甕は胴部上半に並行沈線による文様帯をもつことが多い。大型の甕類は長い無文の口縁部をもち胴部全面には縄文が施文されている。肩の付近に最大径を持つものが多くこれが一つの特徴となっている。壺類では全面無文のものが多いようである。蓋は非常に少なく沈線文が施文されたものが1点出土している。共伴関係は不明であるがこの付近から沈線と列点文が施文された遠賀川系の甕の破片が出土している。

上述の様にSX01 遺物集中区出土遺物は弥生集落区の土器に比較してやや古い要素の見られ

る土器が出土している。弥生集落区出土遺物はより砂沢的な土器群とそれより若干新しい土器群を含んでおり軽米町君成田IV遺跡(=下野場遺跡)・同馬場野II遺跡出土の弥生時代土器群との共通性がみられる。SX01 遺物集中区の甕類は口縁部が短く直行型のものが多く、弥生集落区出土の甕は肩部に膨らみをもち長めの口縁部が外傾する形態のもので際だった変化が見られる。

(5) 岩手県内出土の遠賀川系土器について

今回の大日向II遺跡の調査で遠賀川系土器の存在が確認された。器種としては壺・甕が見られ、これらには横位平行沈線文・列点文が見られる。特に SX01 遺物集中区では在地の縄文時代晩期大洞A'式の土器と明確な共伴関係で出土しており時間的な問題で一つの指針を提示した。一方、弥生時代の住居跡が検出された周辺でも数点の遠賀川系土器が出土している。この地点では少量の晩期終末期の土器・砂沢式およびこれに後続する土器群が出土しており、これらのいずれかには伴うと思われるが共伴関係は不明であり、本遺跡における遠賀川系土器は明らかに大洞A'式に共伴するもののそれに後続する土器群との関係も考慮され、ある程度の時間幅も考えられる。

県内では現在までのところ遠賀川系土器は軽米町大日向II遺跡(壺、甕)・同駒板遺跡(壺)・同君成田IV遺跡(壺)、二戸市金田一川遺跡(壺)、北上市兵庫館遺跡(壺)・同上反町遺跡(壺)・同中屋敷遺跡(壺)、平泉町大沢遺跡(壺)で出土が確認されている。当初は県北地域馬淵川、新井田川流域での発見が主であったが最近の調査では北上川中流域でも見つかるようになってきた。大日向II遺跡では祭祀・葬制関連の遺物集中区、君成田IV遺跡では合口壺棺、金田一川遺跡では合口壺棺、駒板遺跡では焼土遺構、兵庫館遺跡では再葬墓、大沢遺跡では住居跡から出土しており祭祀・葬制関連遺構から出土する傾向がある。多くは壺型の器種に限定されていることも特徴の一つとしてあげられる。次に時期的な問題であるが大日向II遺跡、君成田IV遺跡、金田一川遺跡、兵庫館遺跡例から大洞A'式・砂沢式など晩期終末から弥生時代初頭の土器と共伴するようである。列点文が施文された駒板遺跡の土器も緩やかな山形波状口縁や波頂部に刻みが入ることなどから、この時期の高坏・鉢との共通性が見られ遠賀川系土器と在地の土器の様相を兼備した土器と考えられれば同時期と把握してよいであろう。大沢遺跡例は現在まであまり知られることはなかったが、外面のミガキが丁寧な壺、頸部付近の横位平行沈線文(本数は不明)、灰褐色の色調など他の遠賀川系土器と似る要素が認められる。この遠賀川系土器と共伴している粗製甕は在地の弥生時代初頭とされる土器に類似している。以上のことから本県の遠賀川系土器は縄文時代晩期終末から弥生時代初頭の時期に存在したことはほぼ動かせないであろう。このなかでも兵庫館遺跡例は磨滑縄文を多様する一群と共伴しており他の例よりも時間的にやや後出の段階の可能性も考えられる。

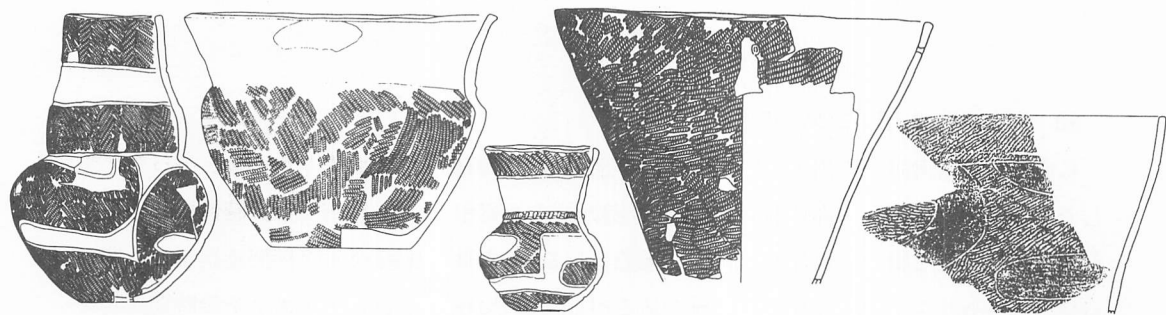
(6) 奈良時代の土器について

C調査区の旧河道から出土した奈良時代の土師器はA調査区の斜面寄りからまとめて出土したものであり一括性の高いものである。今回の調査と昭和59年の調査で奈良時代の住居跡も計3棟検出されておりこれらとの関連が指摘される。SA02住居跡・SF02旧河道出土の土器には坏が含まれておらず時期決定は困難であるがこれまでの成果とあわせおよその時期比定を行う。SA02住居跡は約半分程度しか調査しておらずここから出土した土器がこの住居跡の土器のセットを反映しているとは言えない、同様にSF02出土の土器についてもいえることである。むしろSF02の場合は一括廃棄されたと考えられる土器群のなかにもっとも一般的な坏が含まれていないことにこそ意味があるのかもしれない。

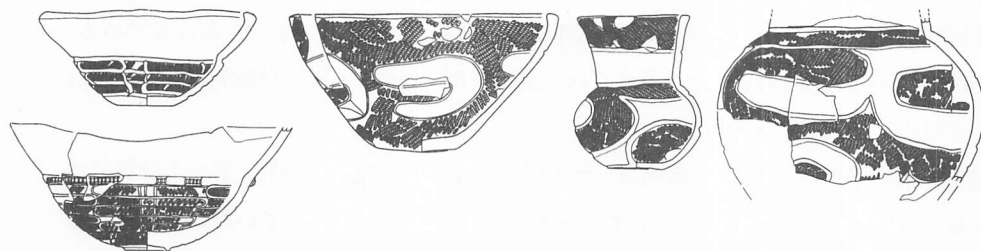
SA02住居跡出土土器は小型の甕（器高20cm以下）と壺（胴の張る球胴甕）形の土師器で構成されている。須恵器は全く含まれておらず、成形にはロクロは使用されていない。小型の甕は頸部に軽い段をもちこの部位に最大径部分をもっている。底部内面は平ではなく球面状で底部外端はやや外側に突き出ている。口縁部は外傾気味で緩やかに反っており1点のみであるが口唇部に凹線が見られる土器がある。壺にも同様のことが当てはまるが、外面は入念にミガキ調整が施されている。内面調整は横方向の刷毛目調整が行われた後にヘラミガキ調整が加えられているが外面に比較して全面に及ぶことは少ないようである。昭和59年に調査された奈良時代のJII-1住居跡では、頸部に段をもつ壺、頸部無段の長胴甕、胴部中央部よりやや下の部分に段を持つ壺形土器が出土し、いずれの土器も入念なヘラミガキが調整が加えられておりSA02住居跡出土土器との近似性が見られる。これは住居跡の構造の面からも指摘され、壁の中央部にカマドが布設されること、カマドの袖部に灰白色のシルト質土を使用すること、袖部・天井部に偏平な粘板岩を使用すること、煙道部が短く側壁からすぐに立ち上がっていることなどの共通性が見られる。これらの土器の諸特徴、カマドの構築方法などは隣接する八戸市田面木平遺跡（八戸地教委：1988）と類似している。

SF02旧河道から出土している土器はすべて成形時にロクロを使用しない土師器で須恵器・ロクロ使用土師器は共伴していない。小型の甕・無段長胴甕・壺（球胴甕）で構成されている。河道からの出土のため摩滅が顕著で調整が不明瞭なものが多いが外面は刷毛目の後にヘラミガキ調整、内面も刷毛目調整の後にヘラミガキ調整が加えられるが外面に比べ刷毛目部分が残る場合が多いようである。ここで出土した土器群の最大の特徴は頸部に明瞭な段をもつことであり、類似資料としては昭和59年調査分の大日向II遺跡、軽米町君成田IV遺跡、胴駒板遺跡、隣接の九戸村丸木橋遺跡、二戸市上田面遺跡、野田村古館山遺跡などで出土例が知られる。

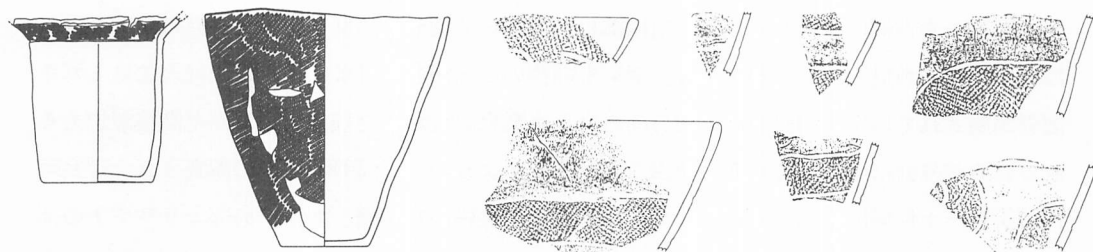
本遺跡で出土したこれら奈良時代の土師器は、周辺地域との対比（宇部：1989）で現段階ではほぼ8世紀前葉段階の時期を想定しておきたい。



岩手町川口Ⅱ, BD 2住居跡



岩手町川口Ⅱ, BB 1住居跡

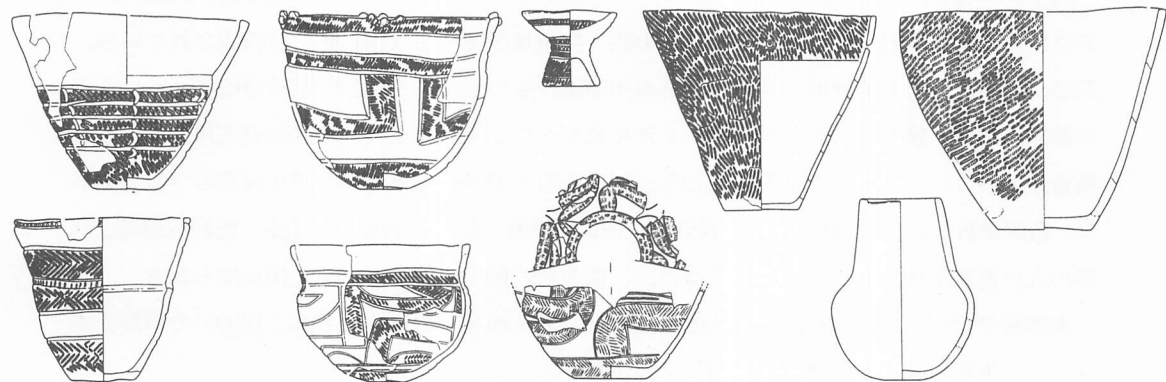


岩手町川口Ⅱ, BB 3住居跡



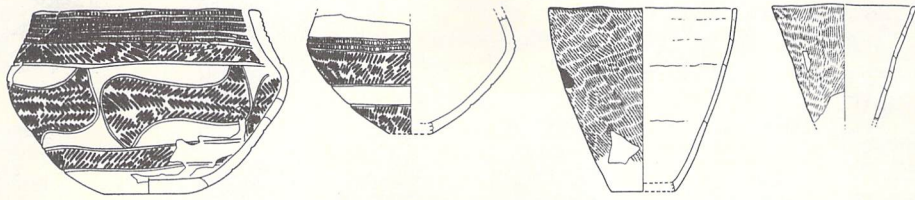
岩手町川口Ⅱ, AC 2住居跡

軽米町馬場野Ⅱ, LⅣ-3住居跡



軽米町馬場野Ⅱ, MⅣ-07住居跡

第147図 参考土器(1)



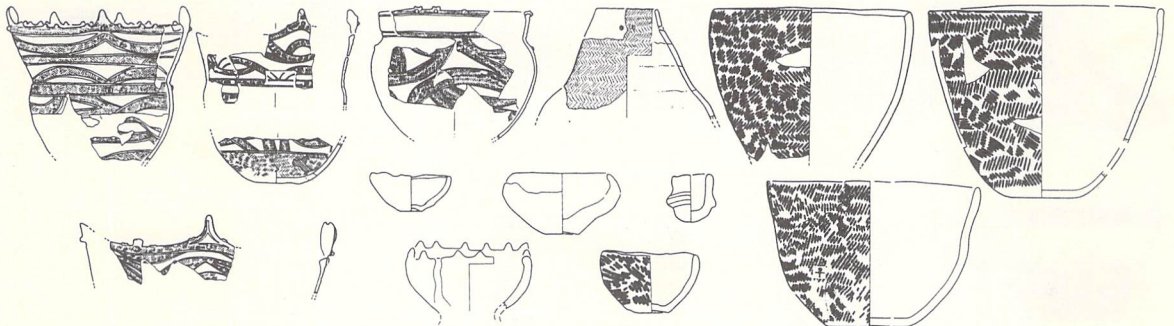
軽米町馬場野II, M IV 05住居跡



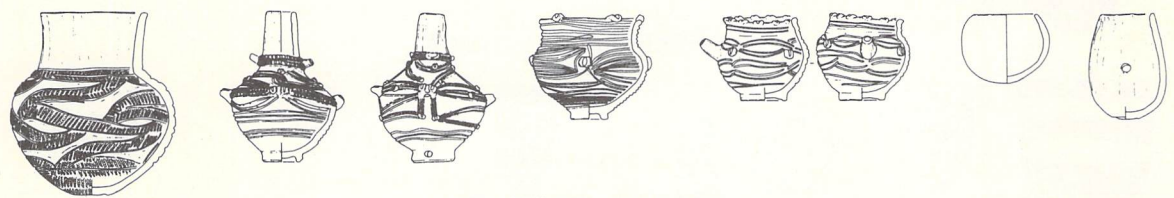
軽米町馬場野II, L IV 06住居跡



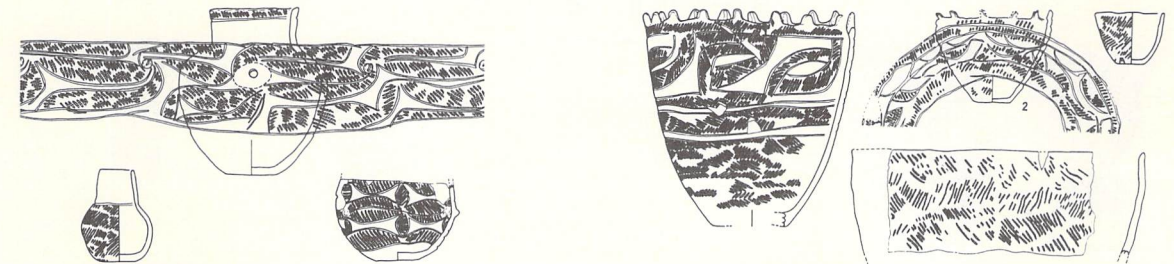
軽米町馬場野II, L IV -04住居跡



軽米町馬場野II, M IV -04住居跡



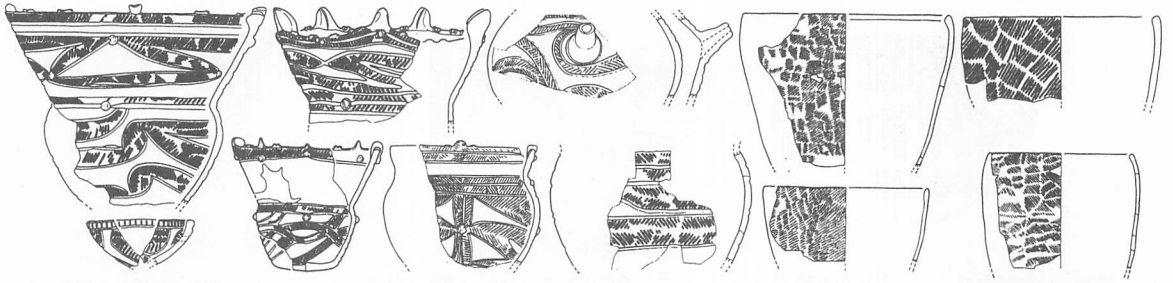
野田村根井貝塚, 第1号住居跡



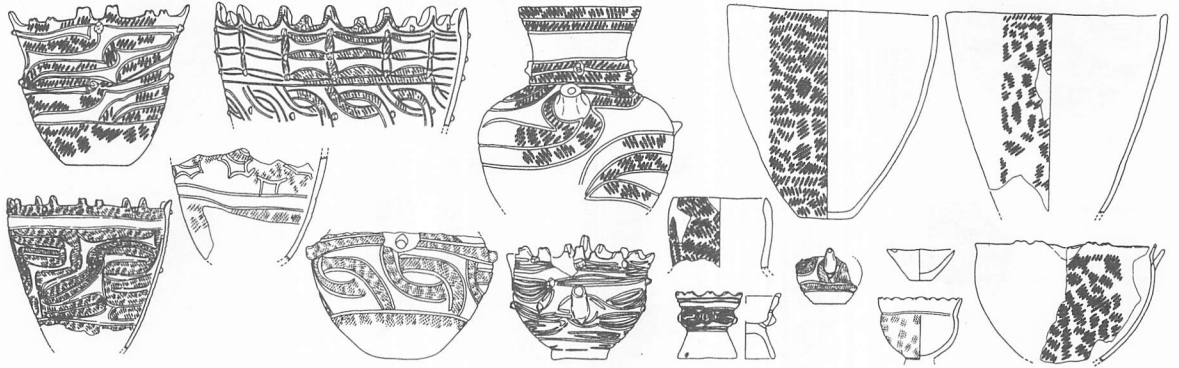
軽米町君成田IV, I 55-1号住居跡

軽米町君成田IV, D54住居跡

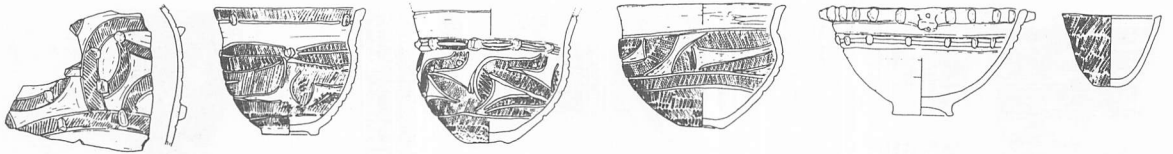
第148図 参考土器(2)



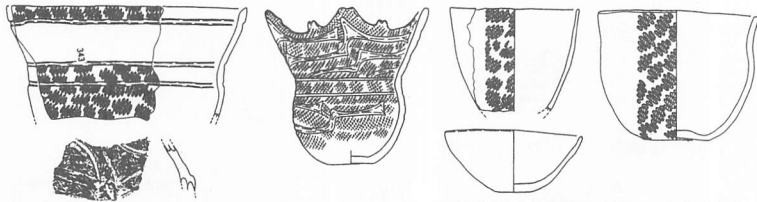
輕米町馬場野II, KV-02住居跡



輕米町大日向II, I I-2住居跡



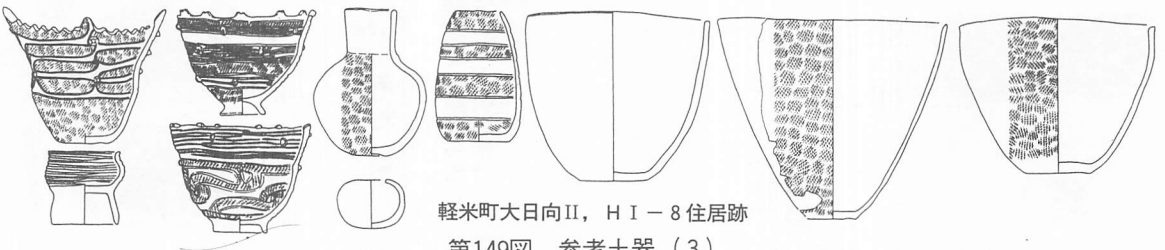
野田村根井貝塚, 第2号住居跡埋土下部



輕米町大日向II, HI-1住居跡

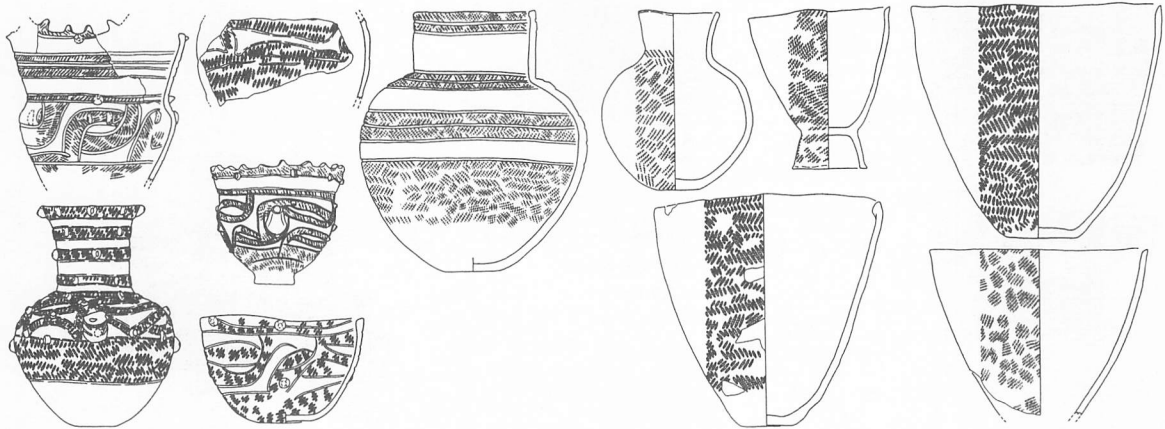


輕米町大日向II, I II-3住居跡

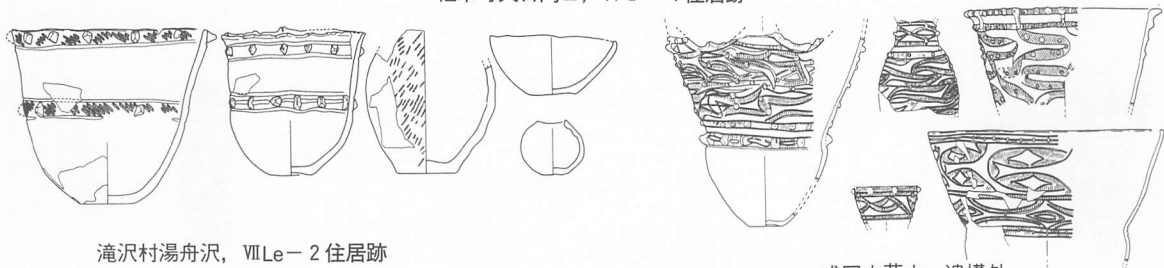


輕米町大日向II, HI-8住居跡

第149図 参考土器(3)

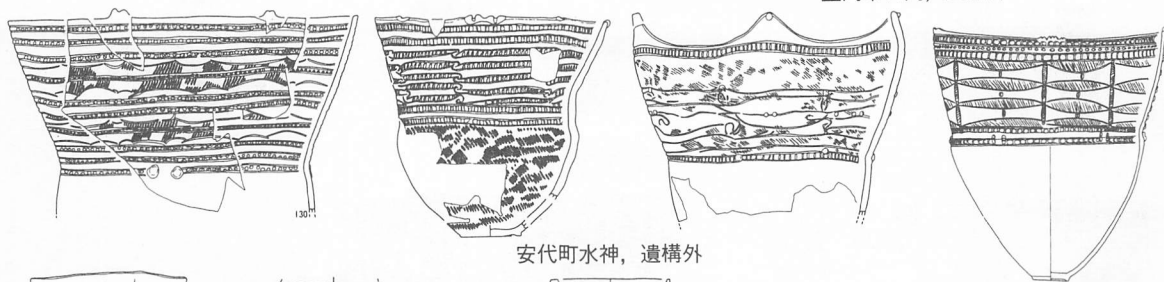


軽米町大日向II, HI-4住居跡

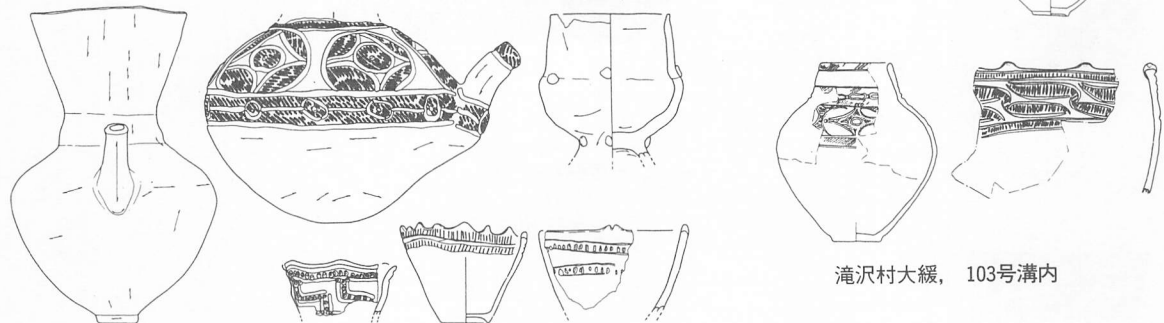


滝沢村湯舟沢, VIIe-2住居跡

盛岡市萩内, 遺構外

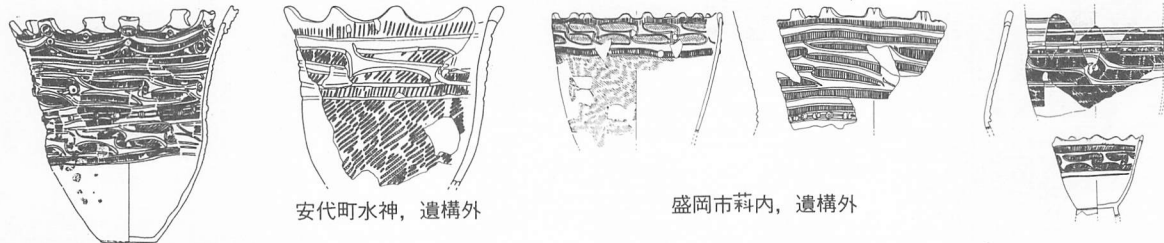


安代町水神, 遺構外



滝沢村大緩, 103号溝内

安代町水神, II 960住居跡



安代町水神, 遺構外

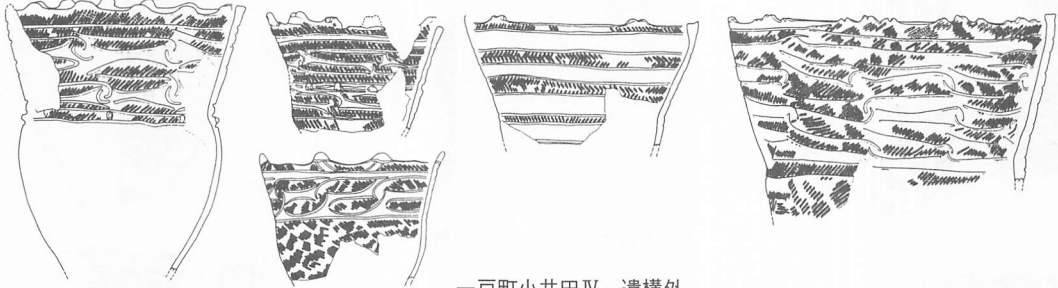
盛岡市萩内, 遺構外

岩手町前田, 1号住居跡床面

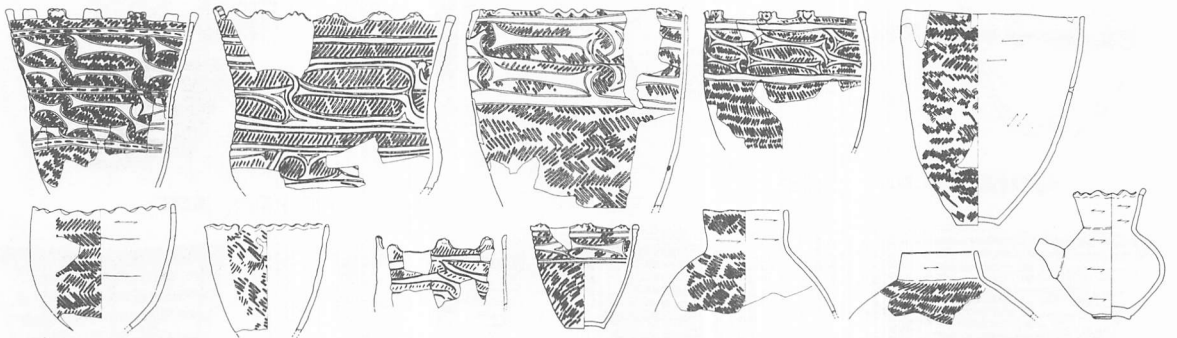
第150図 参考土器(4)



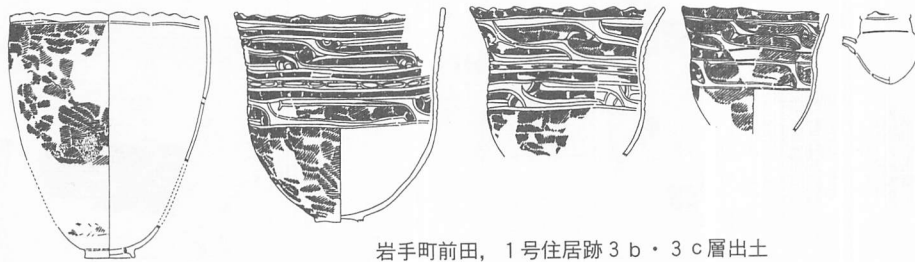
滝沢村湯舟沢，遺構外



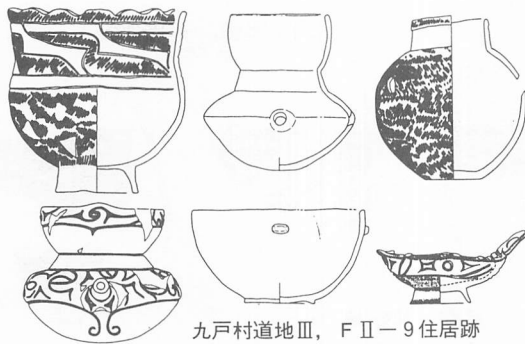
一戸町小井田Ⅳ，遺構外



軽米町駒板，Ⅲ c87-5P土坑



岩手町前田，1号住居跡 3 b・3 c層出土



九戸村道地Ⅲ，FⅡ-9住居跡

第151図 参考土器 (5)

2. 土製品

今回の調査で遺構内・遺物包含層中から、ボタン状土製品 2 点・環状土製品 6 点・亀形土製品 7 点・球状土製品 11 点・三角形濤状土製品 1 点・耳飾（含耳輪、耳栓）107 点・腰飾り 4 点・匙状土製品 12 点・焼成粘土 335 点・鐸形土製品 8 点・土玉 11 点・土冠 1 点・土偶 372 点・土製円盤 548 点・内面渦巻状土製品 1 点・土版類 34 点・動物形土製品 3 点・不明土製品 46 点・腕輪 12 点・キノコ形土製品 1 点・スタンプ形土製品 10 点・ミニチュア土器 157 点が出土した。次に主な土製品について若干のまとめを行う。

(1) 土偶（第 156・749～752 図）

小型の板状土偶以外はすべて破損品である。総数で 372 点出土している。遺構内からの出土もあるが多くは包含層中から出土している。時期的には縄文時代前期前葉の土偶から弥生時代初頭頃までの土偶が出土しており、最も多いのは縄文時代後期中葉から後葉の時期のもの、次いで縄文時代晩期前葉・中葉頃の順となっている。アスファルトの付着が見られるのは 9 点（2.4%）、赤色顔料の付着は 29 点（7.8%）に見られる。なお、晩期の土偶については金子氏の一連の研究成果を参考にした。主な土偶については集成図第 749～752 図に再掲載した。

大日向II遺跡で出土した土偶で最も古いのは縄文時代中期前半の円筒上層前半期に相当すると思われるものである。板状の作りで奴型と思われる。表裏面には撚紐の押捺により、平行線文・渦巻文が施文されており、この時期の土器見られる施文技法・文様の共通性が見られる。

縄文時代後期中葉から末葉の土偶は各部位を含めると最も多く出土している。両側の頭部は盛り上がっており後頭部に縦に孔が穿孔されているものが見られる。首は猪首状でやや全面に突き出ている。顔面の眼・口・鼻等は粘土の貼付で作られ、耳朵には穿孔が見られる。首がソケット状の作りで胴部との接合方法を示すものも見られる。胴部は基本的には中実の作りであるが、首との接合部分が一部中空の作りとなっているものも見られる。胴部では縄文が施文される系統と表面が磨かれ沈線で文様が施文される系統がある。文様としては鍵状の帯縄文、タスキ掛け状入組文などの文様が見られる。タスキ掛け状入組文、異種原体による回転方向変化の羽状縄文はこの時期の土器群に共通した施文手法・文様である。全体に肩が張り乳房は盛り上がっている。正中線もやや盛り上がり、上には刺突が施される場合が多く腹部にも盛り上がりが見られる。膝頭の部分や腰部にベルト状の盛り上がりが見られるのも一つの特徴である。

縄文時代後期末葉から晩期初頭とした土偶は、沈線文が多用されている。腹部・膝頭の部分に玉抱き三叉文状のモチーフが見られる。

晩期前葉頃の土偶には遮光器土偶を含め中空の作りのものも多く認められるようになる。肩の部分に刺突が施文された帯状の隆帯や文様がみられるものが多くなり、前代に比べ文様の施

文が体部全面に及ぶようになる。腕が短く作られることもこの時期の特徴である。また、遮光器土偶も含め眼が切れ長・楕円状から丸みを帯びようになってきている。

晩期中葉頃の土偶は頭部が王冠状に作られている。中空・中実の製作方法が認められる。中空の作りの中には、輪積み状の製作方法ではなく、板状のものを貼り合わせたような製作方法がみられるものもある。

晩期後葉から弥生時代初頭頃に相当する土偶は、主に沈線文と刺突文が施文される。体部表裏面・腕の部分・頭部には数条の並行な沈線文が施文されている。製作方法では中空・中実の両者が見られ、中空の土偶でも一部を補強の為に中実の手法と併用しているものもある。

(2) 土版類 (第 753 図)

総数で 34 点出土している。出土状況等から小型の円盤状のものは縄文時代晩期初頭頃のものと思われる。晩期中葉の土版に比較し薄手で小型である。表裏には沈線文で抽象的な文様が施文されている、なかには人面意匠のものも見られる。主なものについては第 753 図に再掲載した。

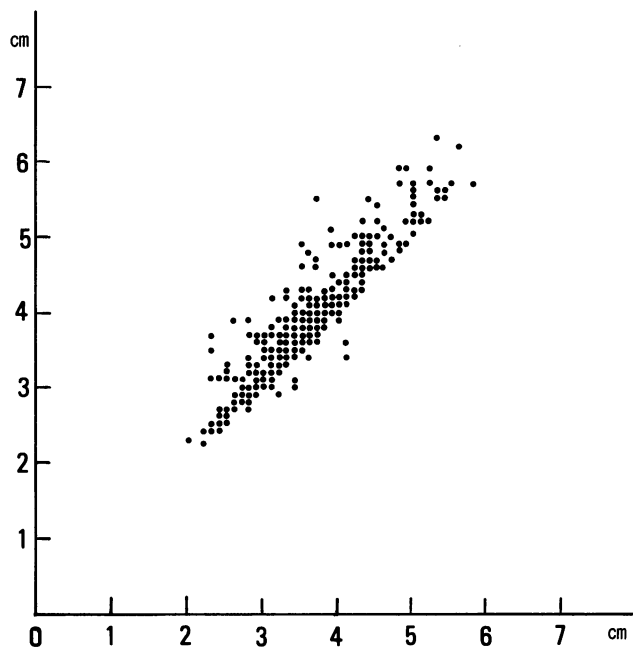
表裏面に沈線で渦巻文が施文された一群は縄文時代晩期中葉後半頃のものと思われる。重層する鍵状沈線が施文されたものはやや新しいと思われる。形状では小判型、コーナー部分に張りをもつものが見られる。顔面意匠が見られる土版が 3 点出土している。土版の内部に顔面意匠をもつもの、版外に顔面を作り出すものが見られる。一方、版外に顔面意匠を作り出したものもあり、このような例はいままであまり例を見ないものである。作りだし部分(首の接点)にアスファルトの付着痕が見られる例もあり、これも同様に版外に顔面意匠を作りだした土版と思われる。顔面作りだしの土版の眼・鼻・口は隆帯状の作りとなっている。このような顔面部分の製作法、アスファルトと付着痕、正中線の存在など土偶ときわめて共通した要素も見いだされる。

同一個体の接合資料が 2 個体に認められ隣接した区域からそれぞれ出土している。出土資料の多くは包含層中からで特異な出土状況は認められなかった。他の遺物同様、機能が消失段階で廃棄されたと思われる。

(3) 土製円盤 (第 152・153・158 図)

総数で 548 点出土している。その多くは遺物包含層中から出土しており特に B 調査区の G VI・H VI・H VII グリッドからは高密度で出土している (第 158 図)。土器の出土状況などから多くの土製円盤は縄文時代晩期前葉頃の所産と思われる。548 点中の 547 点は破損した土器片の一部を再利用した所謂“再生円盤”でありすべて無孔品である。残りの 1 点は土器片再利用のものではなく、有孔でしかも当初から断面凸レンズ状に成形されたものであり土製円盤に含まれるかやや躊躇するものである。分析にあたっては 547 点の再生円盤を対象にして行う。破損は 97 点に

見られ破損率は17.7%である。長さは最大で6.6cm・最小で2.3cm・平均値は4.0cmであり、全個体数の約63%は3.0cm～4.6cmの間におさまる。重さでは最大値37.0g・最小値3.2g・平均値12.3gで、8.0g～12.0gの間にピークがあり約49%は6.0g～12.0gに集中しており大きさ形状とも比較的画一性・規格性の高い遺物である。出土状況を見るとまとまって出土する傾向がありこれは使用と廃棄が表裏一体であり、この背景には同一目的に応じた利用法が考えられる。また、石製円盤の出土状況とも符合する点が認められる。この種の遺物については過去に藤村



第152図 土製円盤法量図(1)

東男氏（藤村：1989）と佐々木嘉直氏（佐々木：1990）の研究がある。藤村氏は縄文時代晩期後半の北上市九年橋遺跡を取り上げ破損状況・形態・出土状況など多角的な面から分析を試みた。長さの平均値4.3cm、重さの平均値11.6g（有孔10.6g・無孔13.0g）という結果が得られており非常に近似した値が得られている。また、佐々木氏との結果を合わせると有孔品は主に九年橋遺跡や安堵屋敷遺跡など縄文時代晩期後半期の遺跡から出土する傾向がある。このなかで藤村氏は有孔品・無孔品・途中品は製作行程を示すとの考えを示しているが、遺跡によっては有孔品が全く出土しない遺跡もあり、有孔品・無孔品の有無は時期差として考えられる。

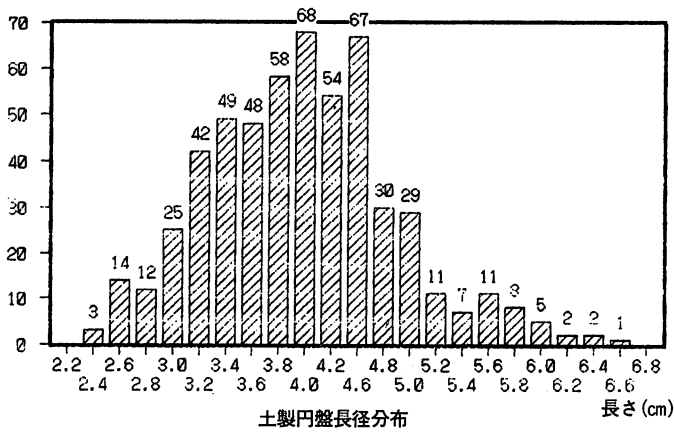
(4) 耳飾り・耳栓類

107点出土している。

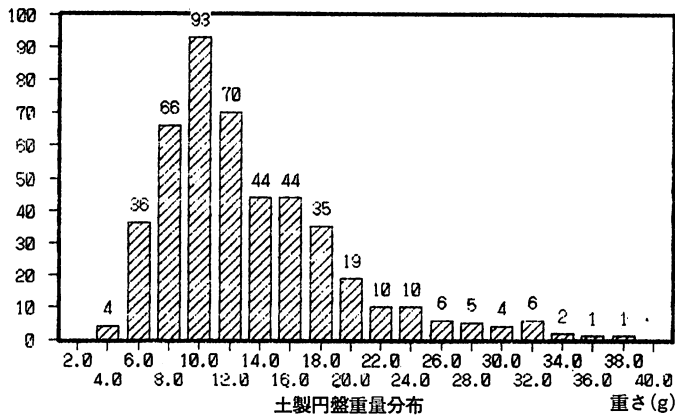
I類…薄手の作りで環状となっているものである。多くは内外面が磨かれた素文のものであるが、中には輪の内側の部分に隆帯状の作りだしや沈線で三叉文が施文されたものもある。

II類…いわゆる滑車状の耳飾りである。一般に厚手の作りである。

III類…平面形が円形、断面形が台形状で一面が開口している形態のものを本類とした。現段階では耳飾りとして把握したが、他の土製品の可能性もある。



総数	548
完形	451
欠損	97
欠損率%	17.7
有孔	1
無孔	547
最大径cm	6.6
最小径cm	2.3
平均径cm	4.0
最大重g	37.0
最小重g	3.2
平均重g	12.3



長径 cm	大日向II	駒板	荒谷 A	下村	葎内	手代森	小田	安堵屋敷	東裏	貝島貝塚	川内	九年橋
1.0~	0		0	0	1	0	0	1	0		0	0
2.0~	0		0	2	43	4	43	6	0		11	25
3.0~	29		25	27	142	32	123	61	18		53	125
4.0~	222		32	29	88	30	72	76	23		39	126
5.0~	219		9	4	22	13	11	31	11		7	46
6.0~	66		1	0	1	3	1	9	0		1	7
7.0~	10		0	0	1	0	0	2	0		0	2
8.0~	0		0	0	0	0	0	0	0		0	0
計	546	0	67	62	298	82	250	186	52	0	111	331

土製円盤長径分布

重さ g	大日向II	駒板	荒谷 A	下村	葎内	手代森	小田	安堵屋敷	東裏	貝島貝塚	川内	九年橋
0.0~	199	10	5	7	147	23	158	75	19	10	23	112
10.0~	212	55	40	38	114	42	89	86	27	23	65	88
20.0~	35	11	12	14	28	10	2	21	6	11	14	18
30.0~	10	1	8	2	5	7	1	3	0	0	5	1
40.0~	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	3	0
50.0~	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	1	1
計	456	77	67	62	295	82	250	186	52	45	111	220

土製円盤重量分布

第153図 土製円盤法量図(2)

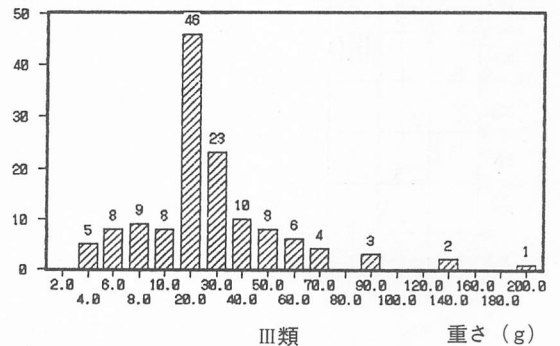
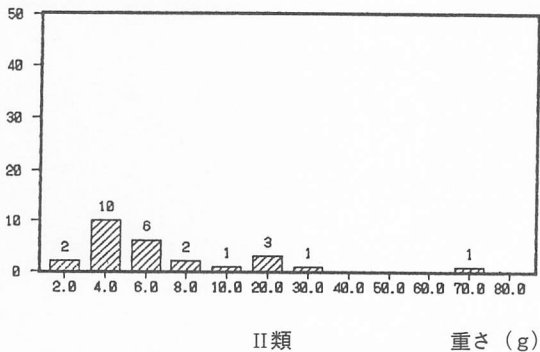
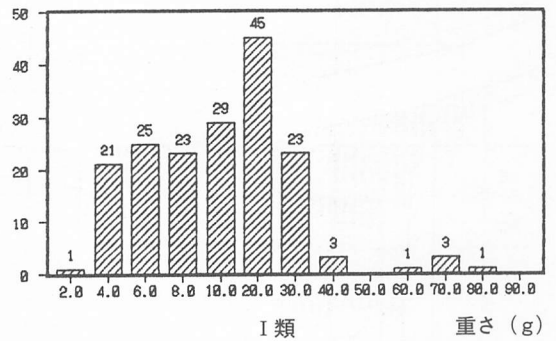
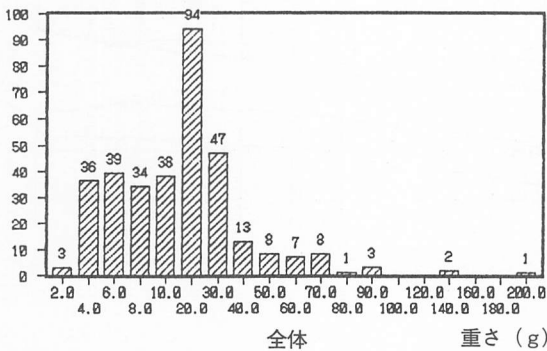
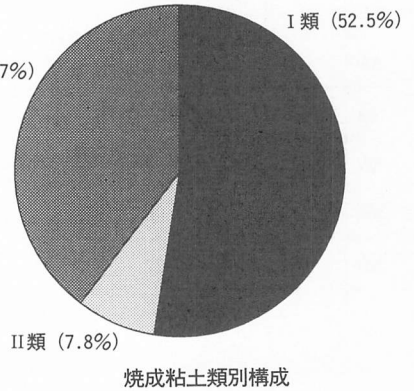
IV類…耳栓、鼓型の耳飾りである。

V類…小型で環状になっているものである。

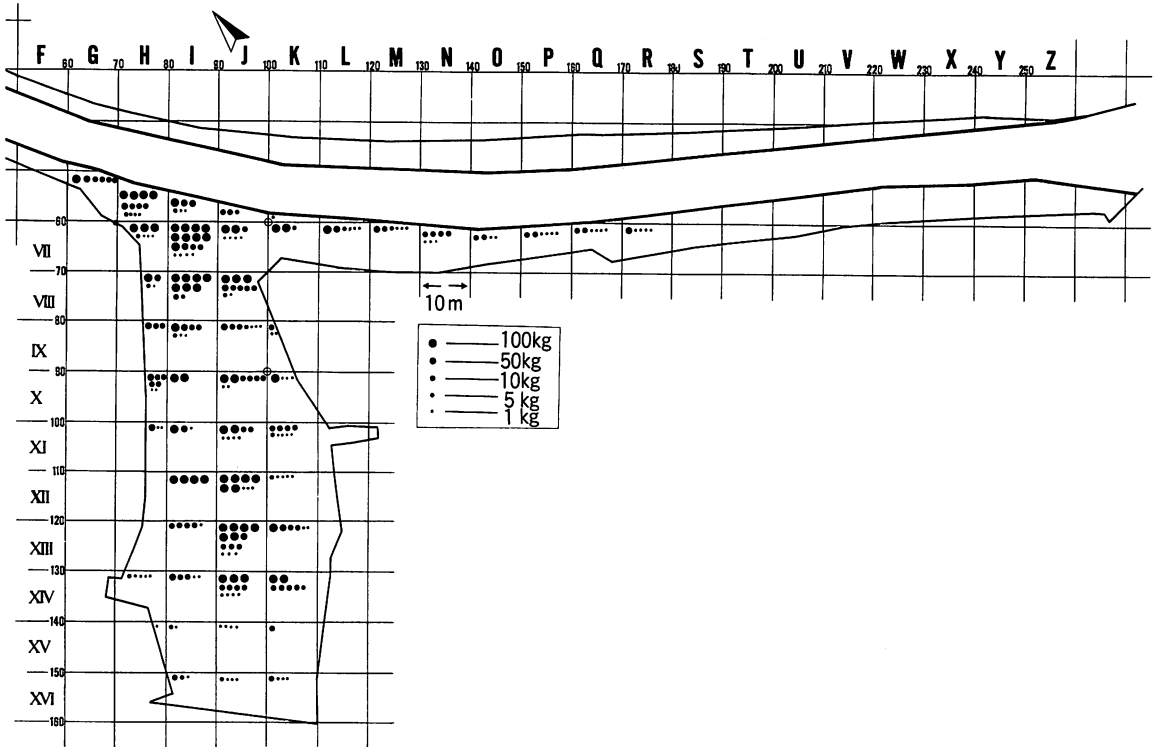
I類とした耳飾りは最も多く出土している。時期的には縄文時代後期末葉～晩期前葉頃のものである。遺物の形態状態破損しやすく完形品の出土は1点もない。縄文時代中期末葉～後期前葉頃と思われる滑車状の耳飾りは(II類)厚手で重さもあり完形品で出土する割合は比較的高い。

(5) 焼成粘土類

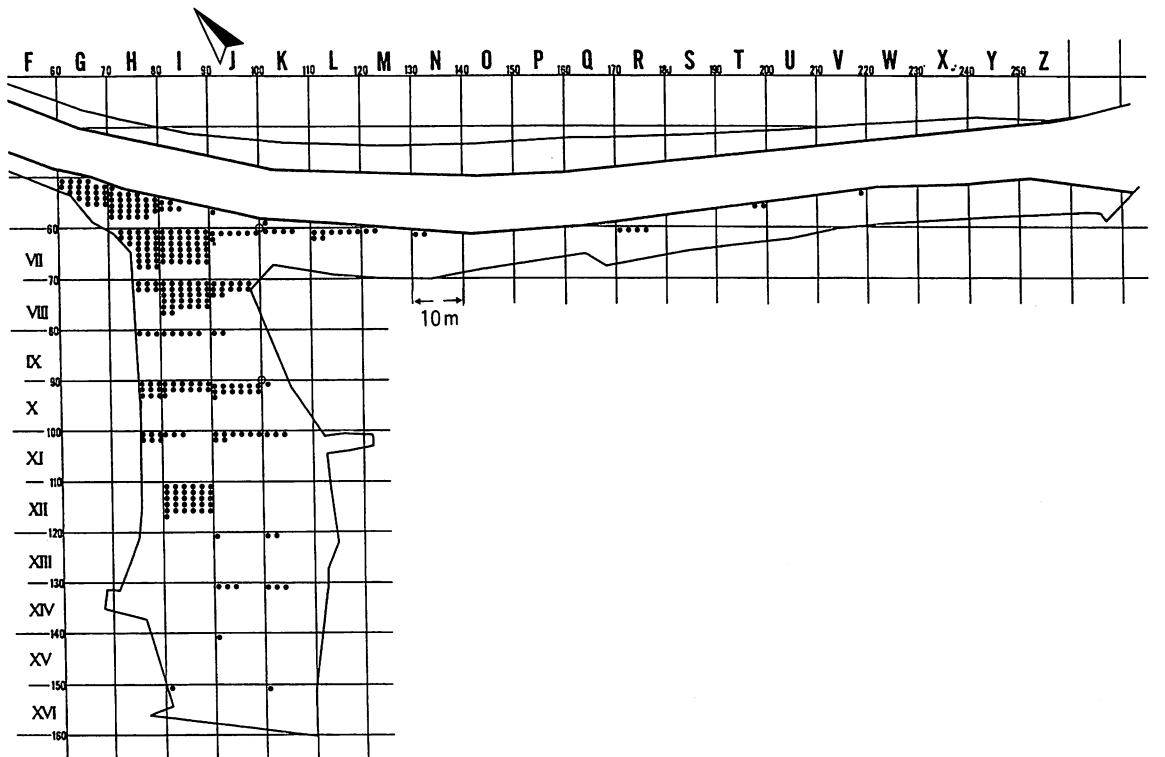
焼成粘土とした定形的な土製品とも認められない塊状・棒状等の土製品が出土している。形状等から便宜的に以下のように分類した。これらの焼成粘土の胎土は様々であるが比較的きめの細かいものを使用されており植物性繊維や大粒の砂粒などは含まれることはない。橙色や灰白色系のものが目だち焼成はあまり良好とはいえないものが多い。遺構内の埋土等から出土するものもあるが、多くは遺物包含層中から出土しており他の遺物とともに廃棄されたと考えられる。特に、土製品・土器などの出土が多いB調査区の西側のグリ



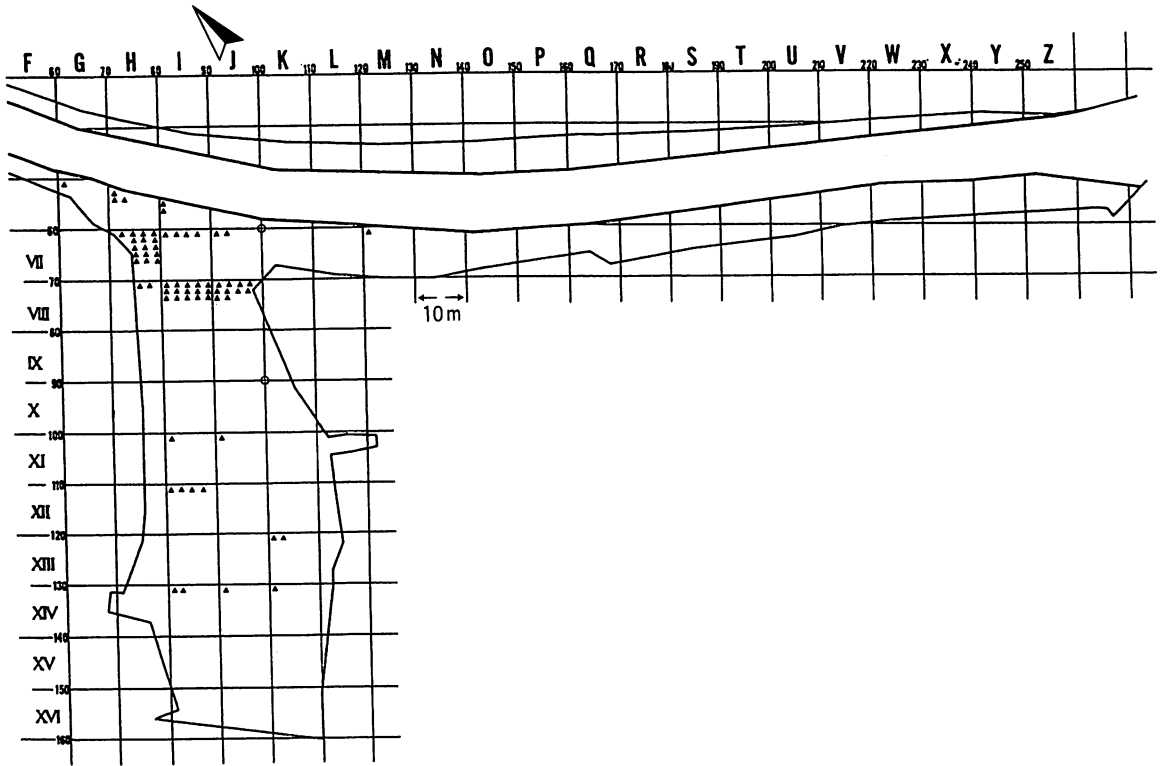
第154図 焼成粘土法量図



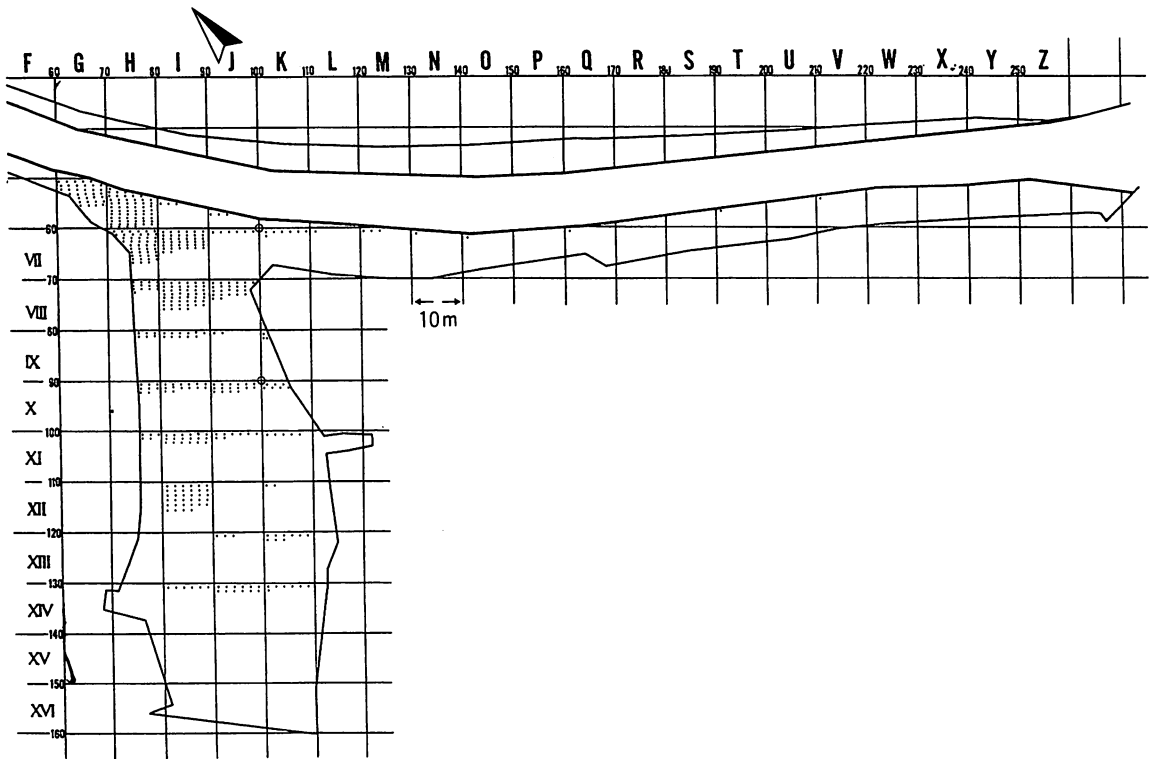
第155图 土器重量分布图



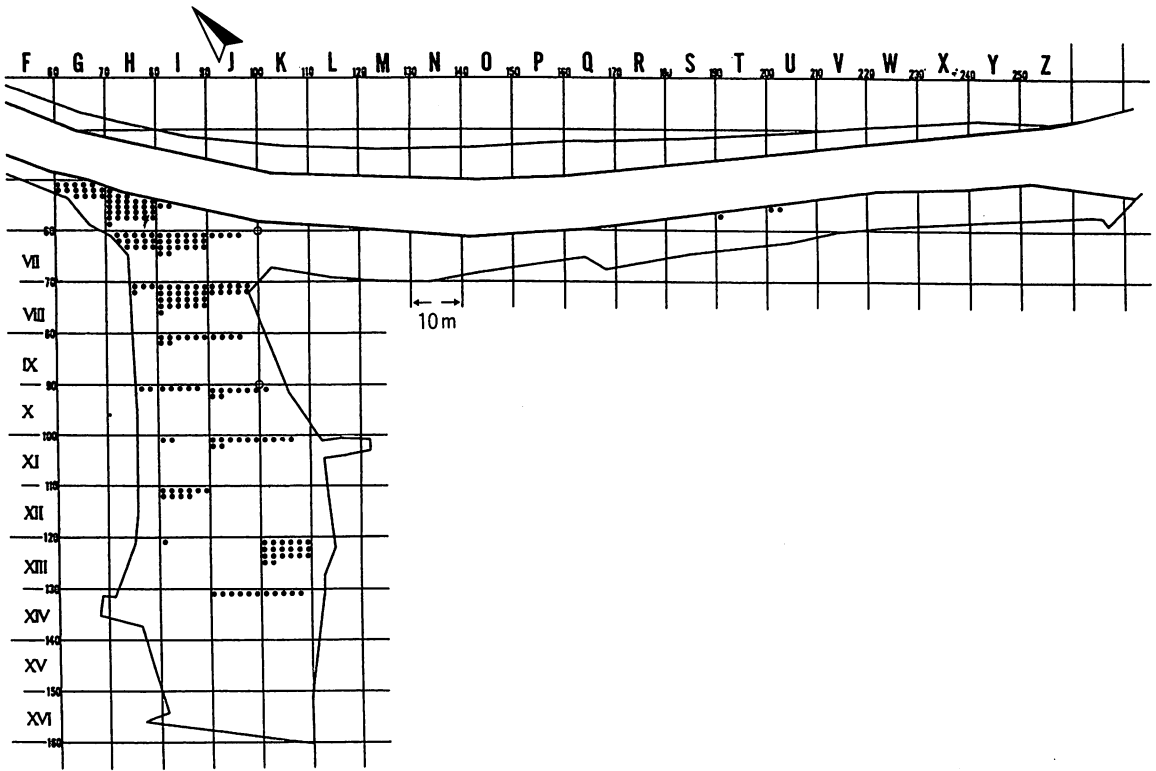
第156图 土偶出土分布图



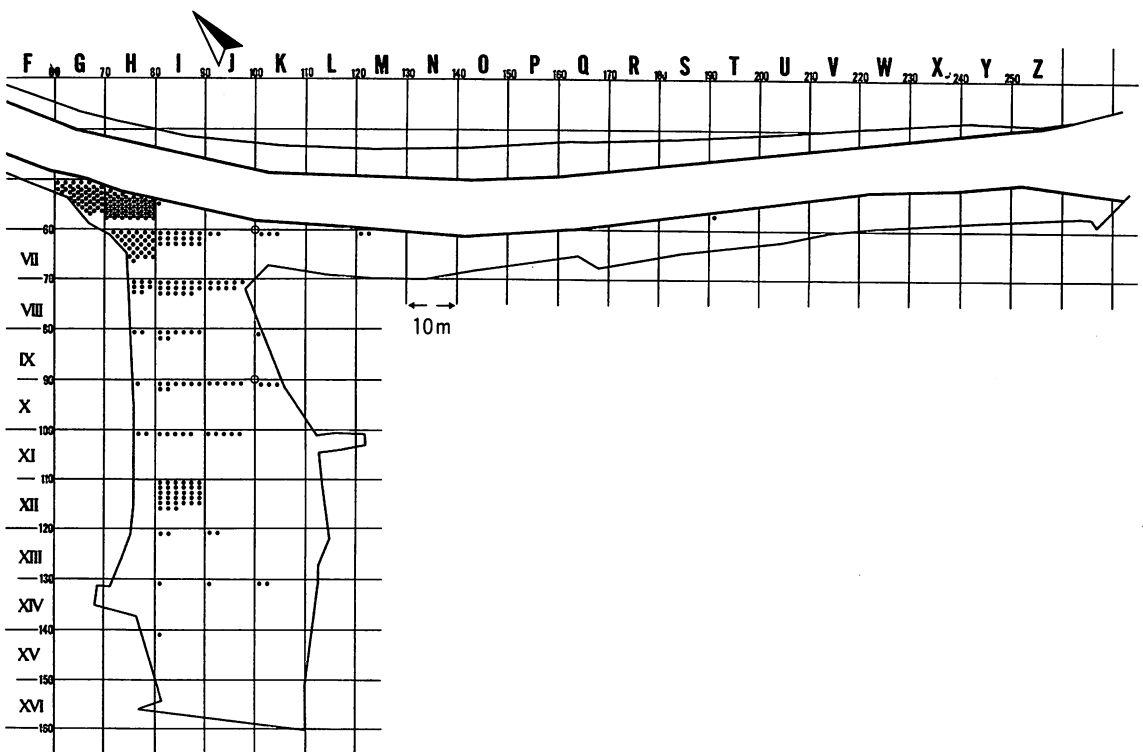
第157図 耳飾り類出土分布図



第158図 土製円盤出土分布図



第159图 烧成粘土出土分布图



第160图 石製円盤出土分布图

ッドからの出土が顕著である。総数で 335 点、総重量で 5897 g が出土している。

I 類…団子状または塊状のもので押しつぶしたりひねりをくわえ、あるていど成形化した意図が認められるもの。

II 類…棒状に近いもの。

III 類…塊状のもので特にひねりや押しつぶしたりした痕跡は認められないもの。

構成比率は、I 類 (52.5%)・II 類 (7.8%)・III 類 (39.7%) であり約半数の焼成粘土には何らかの製作意図ないしは人為的痕跡が認められるものである。形態はばらばらで全く画一性が認められないものであり、最大の長さが 10.4 cm・平均値は 3.8 cm、最大の重さが 184.1 g・最小が 3.8 g・平均値が 17.4 g である。重さでは 10 g～20 g の間にピークがあり、多くの焼成粘土は 2.0 g～30.0 g のあいだに分布している。明確な時期については不明であるが、縄文時代時代後期後葉から縄文時代晩期前葉頃と思われる。この種の遺物についてはあまり報告例を聞かないが、田中耕作氏が新潟県村尻遺跡のこれに類する遺物について紹介を行っている (田中：1991)。色調なども類似しており同一の遺物を対象としていると考えられる。

3. 剝片石器類・礫石器類・石製品類

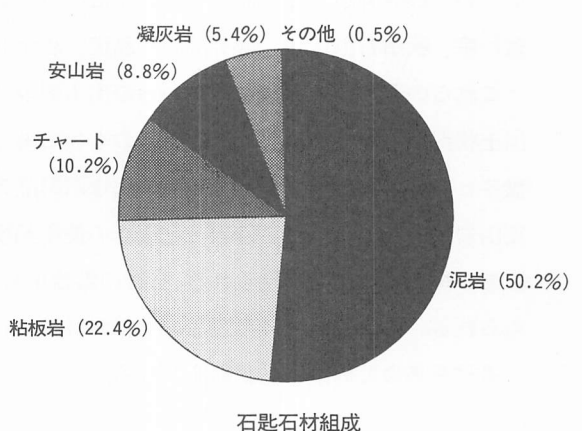
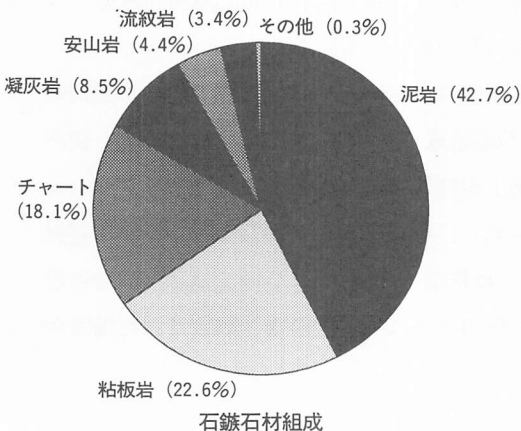
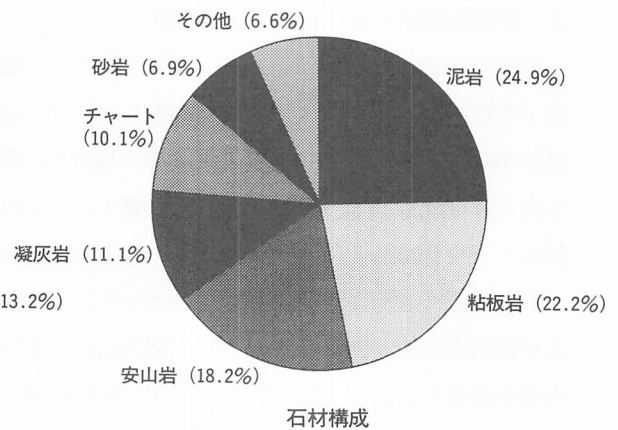
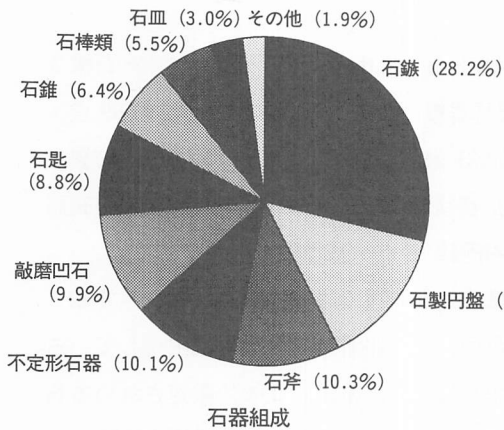
総数で 2324 点掲載した。内訳は剝片石器類 (石鏃 656 点・石匙 205 点・石錐 149 点・石槍 2 点・不定形石器 235 点・フレーク集積 7ヶ所分)、礫石器類 (石製円盤 308 点・石皿類 69 点・石斧 240 点・打製用具 12 点・砥石 6 点・敲磨凹石類 231 点・石錐 1 点)、石製品 (環状石製品 7 点・軽石製品 23 点・刻線礫 1 点・岩版 1 点・三角形濤状石製品 1 点・石棒類 127 点・有孔石製品・不明石製品 1 点・玉類 19 点)、その他 (土器内円礫 15 点・墓標礫 2 点) である。

石器の石質鑑定はかなり細部まで行われているが構成比率を扱う段階では傾向性をさぐることに目的のため上位のレベルで資料操作した。各石器類の石材組成は 100 点以上出土しているものを対象とした。また、産地についても大略的に取り扱った。産地が比較的限定されている石については除外してしており、ヒスイについては新潟県糸魚川産、黒曜石は北海道白滝産・同置戸産、秋田県深浦産、青森県出来島産、岩手県雫石産が知られている。

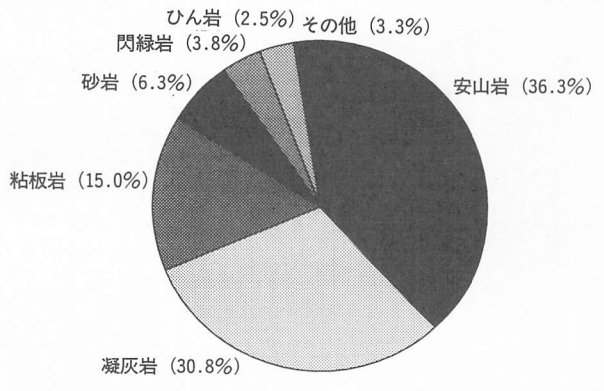
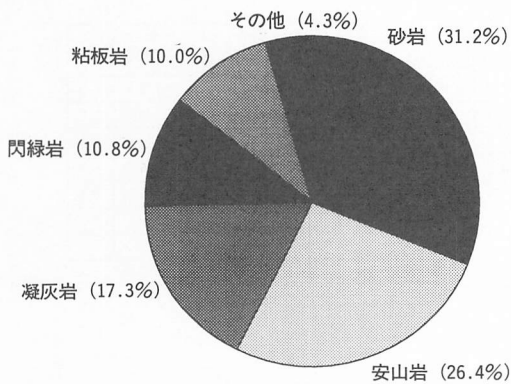
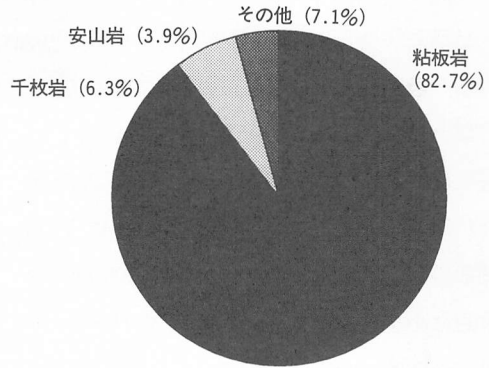
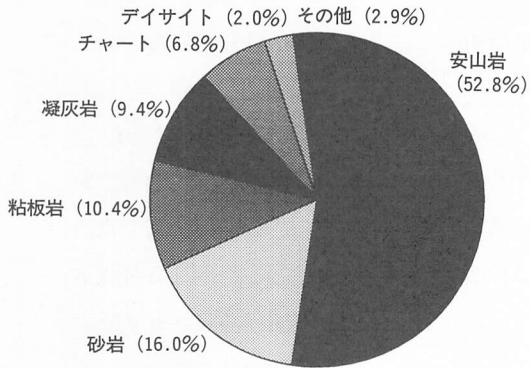
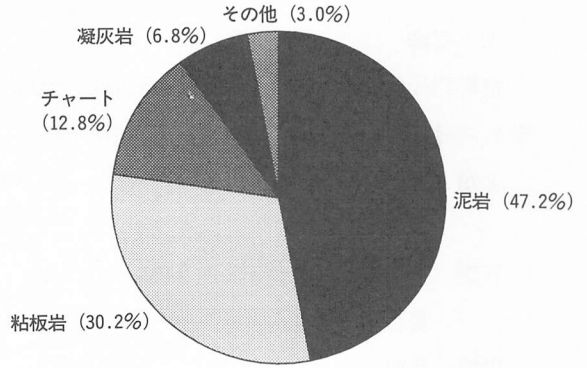
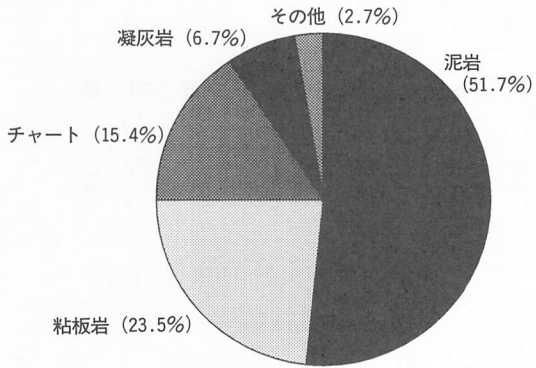
これらの石器は遺物包含層中からの出土が多く時期的な比定については不明であるが遺物の出土状況から多くの石器は縄文時代のものである。石器組成では全体の約 13% を占める石製円盤やヒスイ製玉類、石棒類・多種多様な石製品の出土が特筆される。石材としてはチャート・安山岩・凝灰岩・泥岩・砂岩・粘板岩の使用頻度が高く、剝片石器類・礫石器類では使用石材にある程度の傾向性が見られる。石材の供給源としては約 70% のものについては北上山地に求められる。このなかで軽石製品の供給源は全て二戸周辺とされておりかなり限定された場所から素材を求めていたことが推定される。

	チャート	ダイサイト	ひん岩	ヒスイ	ホルンフェルス	安山岩	雲母鉄鉱	花崗岩	凝灰岩	砂岩	水晶	千枚岩	閃緑岩	泥岩	粘板岩	片岩	流紋岩	軽石	玄武岩	黒曜石	計	
ブレイク集積	3								1					1	2							7
石製円盤	21	5				162	1		29	49		2	3	1	32		3					308
環状石製品									1						6							7
円礫	9									6												15
軽石製品																		23				23
刻線礫															1							1
石匙	21					18			11		1			103	46		5					205
石皿類	3					46				15			2		2					1		69
石錐	23					2			10					77	35		2					149
岩板									1													1
三角形礫状石製品									1													1
石槍	1																	1				2
石斧		1	6			92			74	15		1	9	4	36	2						240
石鏃	119					29			56					280	148		22				2	656
石棒類						5			3	1		8		1	105	2	2					127
打製用具					1				2	1			1		7							12
磁石						3			2											1		6
不定形石器	30					4			16		1			111	71		2					235
不明石製品	1																					1
墓石										1					1							2
有孔石製品									4						2							6
敲磨凹石	3		1		1	61		1	40	72		2	25		23	1				1		231
石鏟										1												1
玉類	1			11					8													20
計	235	6	7	11	2	422	1	1	259	161	2	13	40	578	517	5	37	23	3	2		2325

石材構成



第161図 石器組成と石材構成(1)



第162図 石材構成(2)

(1) 石鏃

定形剝片石器のなかで、ほぼ左右対称の形状で尖頭部を持ち先端部が薄くて扁平な一類。基部と側縁の形状の組み合わせから分類を行う。

I類…基部が突出するが、抉りははいらず直線ないしは身部との境界が不明瞭なもの（凸基有茎鏃）。

II類…基部が突出し両面から抉りが入り基部が作り出され、身部と基部の境が明瞭なもの（平基有茎鏃）。

III類…基部全体に抉りが加えられ、凹部が内湾状に作り出されたもの（凹基無茎鏃）。

IV類…基部が直線的に加工されたもの（平基無茎鏃）。

V類…基部が丸味や尖鋭で突出部を作り出すもの（円・尖基無茎鏃）。

V類 a …突出した基部が丸みを帯びるもの。

V類 b …突出した基部が尖鋭で身部と基部の境が不明瞭で、身部が三角形にちかいもの。

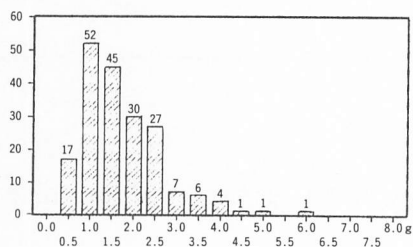
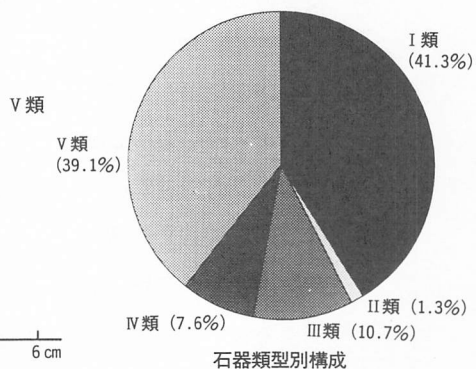
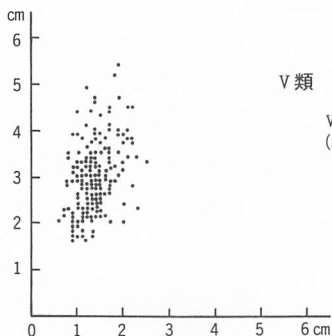
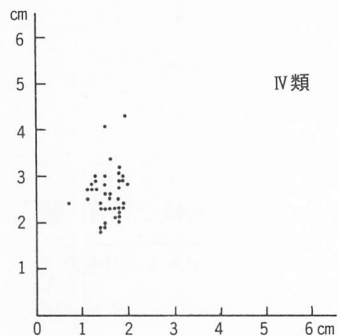
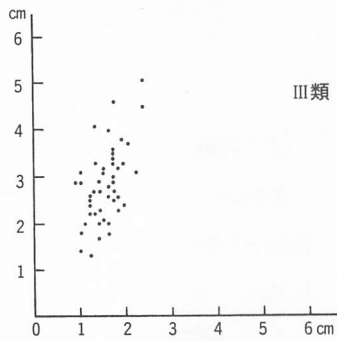
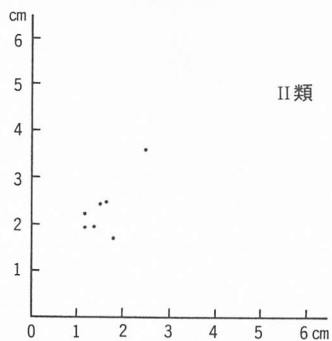
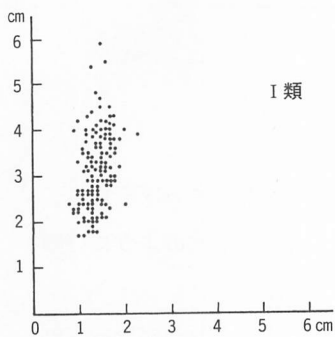
V類 c …突出した基部が尖鋭で身部と基部の境が不明瞭で、身部が棒状にちかいもの。

VI類…破損などにより細分できないもの。

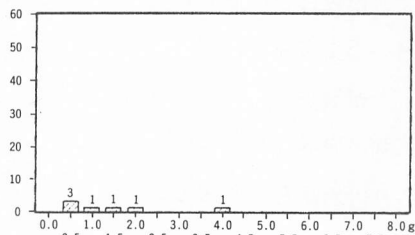
VI類とした破損品を含め総数で656点出土している。分析にあたってはVI類を除いた617点を対象にした。身部と機能部が連続的で境の不明瞭なV類cは棒状の石鏃との識別が困難であったが、石鏃に比べ機能部がより扁平に近いものを石鏃として取り扱った。類別の構成では凸基有茎鏃と円・尖基無茎鏃の出土の割合が高い。法量を比較した場合II類とした平基有茎鏃が相対的に小型のものが多く、V類の円・尖基鏃に大型のものが多く。欠損部は各類とも基部に集中し必然的であるが石鏃I類がもっとも欠損率が高い。アスファルトの付着は主に基部付近にみられ、52個体8.4%の資料に認められた。この中でもっとも付着率の高いのはI類の凸基有茎鏃、次いで円・尖基無茎鏃であり矢がらへの着装の不安定なものに対する付着が高い傾向にある。

	総数	完形	欠損	欠損率 %	アスファルト	付着率 %	縦 cm			横 cm			厚さ cm			重さ g		
							MAX.	MIN.	AVG.	MAX.	MIN.	AVG.	MAX.	MIN.	AVG.	MAX.	MIN.	AVG.
石鏃I類	255	187	68	26.7	34	13.3	5.9	1.7	3.0	2.3	0.8	1.4	1.0	0.3	0.5	5.9	0.2	1.5
石鏃II類	8	7	1	12.5	0	0	3.7	1.8	2.4	2.5	1.2	1.6	0.7	0.3	0.4	3.5	0.3	1.2
石鏃III類	66	53	13	19.7	5	7.6	5.1	2.3	2.8	2.3	0.8	1.5	1.0	0.2	0.4	7.5	0.2	1.6
石鏃IV類	47	43	4	8.5	0	0	4.3	1.8	2.6	2.1	0.7	1.6	1.0	0.2	0.4	8.0	0.6	1.8
石鏃V類	241	226	15	6.2	13	5.4	5.4	1.6	2.9	2.5	0.6	1.4	5.5	0.3	0.6	5.8	0.1	2.1
石鏃VI類	39	0	39	100.0	0	0												
全体	656	516	140	21.3	52	8.4												

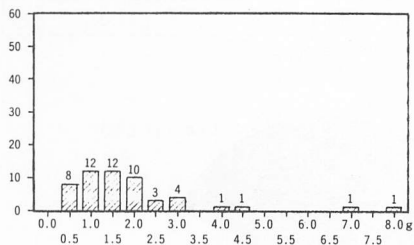
石鏃分類表



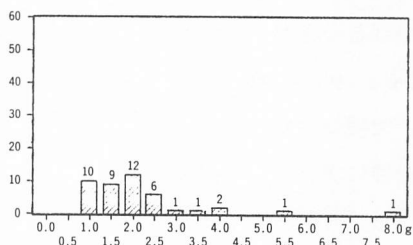
石鏃 I 類重量分布



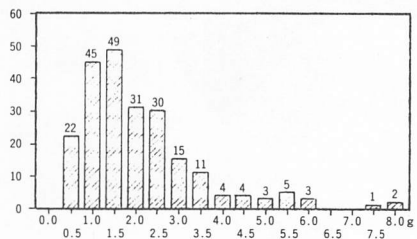
石鏃 IV 類重量分布



石鏃 II 類重量分布



石鏃 V 類重量分布



石鏃 III 類重量分布

第163図 石鏃法量図

(2) 石匙

定形剥片石器のなかで、両側縁から挟りを入れることにより作り出されたつまみ部を持ち、刃部と判断できる縁辺をもつ石器。つまみ部と刃部の位置の組み合わせにから次のように分類した。

I 群…機能面を構成する縁辺のなかで相対的に長い辺と向き合った辺につまみ部が形成されるもので所謂、横長石匙と呼ばれるものである。

A…つまみ部軸線と最長辺がほぼ直交するもの。

B…つまみ部軸線と最長辺が鋭角で斜交するもの。

a…つまみ部が辺のほぼ中央部に付くもの。

b…つまみ部が構成辺の交点（コーナー）付近に付くもの。

II 群…機能面を構成する縁辺の中で相対的に短い辺につまみ部が形成されるもので所謂、縦長石匙と呼ばれるものである。

A…つまみ部軸線と最長辺

がほぼ平行するもの。

B…つまみ部軸線と最長辺が斜交するもの。

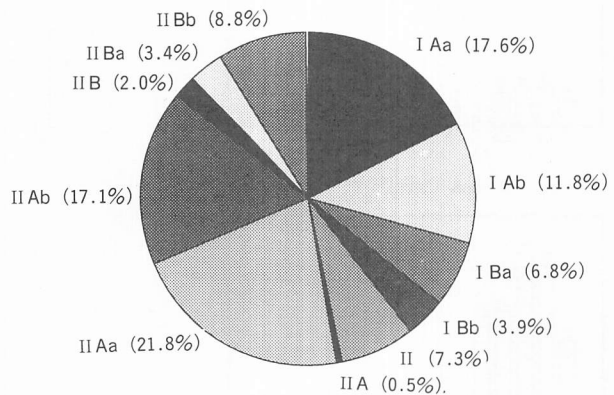
a…先端部が尖鋭なもの。

b…先端部が丸味あるいは平坦なもの。

205 点出土しており法量にはかなりのばらつきがみられる。このなかの約 60% は横型の石匙である。欠損率は剥片石器のなかでは石錐に次いで高い割合となっている。縦型石匙が横型に比べ欠損率が高くこれは形態が反映した結果であろう。欠損部は縦型の場合は先端付近、横型の場合は両肩から主要刃部（最長辺）付近である。欠損は素材となる石材の物理的性質や道具と

	類別	総数	完形	欠損	欠損率 %	アスファルト	付着率 %
I Aa	36	81	69	12	14.8	5	6.2
I Ab	24						
I Ba	13						
I Bb	8						
II	15	124	85	39	31.5	4	3.2
II A	1						
II Aa	44						
II Ab	35						
II B	4						
II Ba	7						
II Bb	18						
計	205	205	154	51	24.9	9	4.4

石匙類型表



第164図 石匙の構成

しての石器の機能に規定されていることは当然である。アスファルトの付着は全てつまみ部分の括れの部分に見られる。横型石匙では6.2%、縦型石匙では4.0%、全体で4.4%のものに認められ石鏃のアスファルト付着率の約半分程度である。

(3) 石鏃

定形剥片石器のなかで機能部として先端部に尖頭部分をもつ石器。機能部である鏃部(身部)の形状やつまみ部の有無により次のように細分した。

I 群…つまみ部と鏃部により構成されその境が明瞭なもの。

a…棒状の鏃部が細長いもの。

b…棒状の鏃部が太く短いもの。

II 群…つまみ部と鏃部によって構成されるがその境が不明瞭なもの。

a…つまみ部をつくりだしているもの。

b…つまみ部と鏃部が連続的でその先端部付近に鏃部のあるもの。

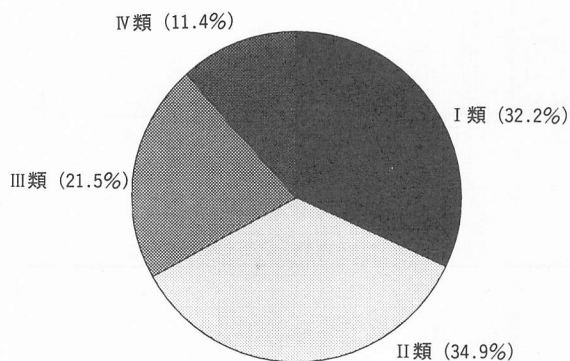
III 群…特に明瞭なつまみ部はなく全体に棒状を呈するもの。

IV 群…石鏃の一部であるが分類の不可能なもの。

149 点出土した。全体の欠損率は約36%で剥片石器のうちでは最も高く消耗度の著しい遺物である。なかでもつまみ部をもち鏃部が細長い種類の欠損率をもっとも高くなっている。

	総数	完形	欠損	欠損率 %
石鏃 I a 類	47	21	26	55.3
石鏃 I b 類	1	1	0	0.0
石鏃 II a 類	21	21	0	0.0
石鏃 II b 類	31	23	8	25.8
石鏃 III 類	32	29	3	9.4
石鏃 IV 類	17	0	17	100.0
計	149	95	54	36.2

石鏃構成

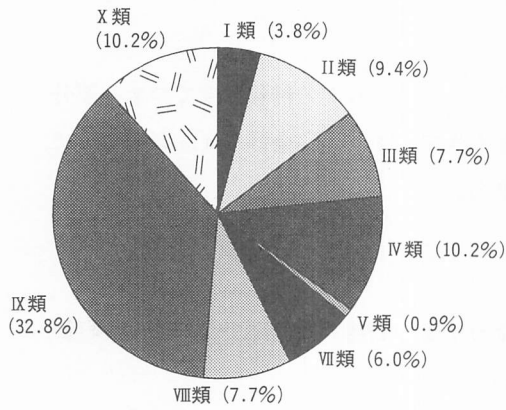


第165図 石鏃の構成

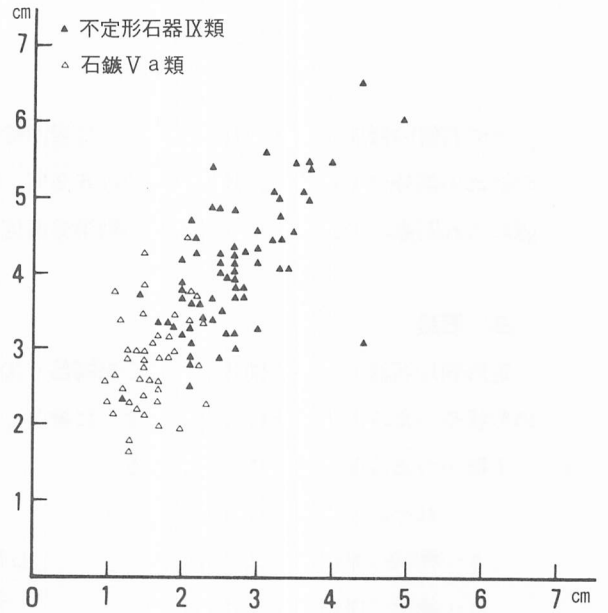
(4) 不定形石器類

剥片石器のなかで石鏃・石匙・石鏃などの定形的な剥片石器類以外の不定形な剥片石器類を一括した。加工状況や主要刃部の位置、平面形態から次のように分類した。

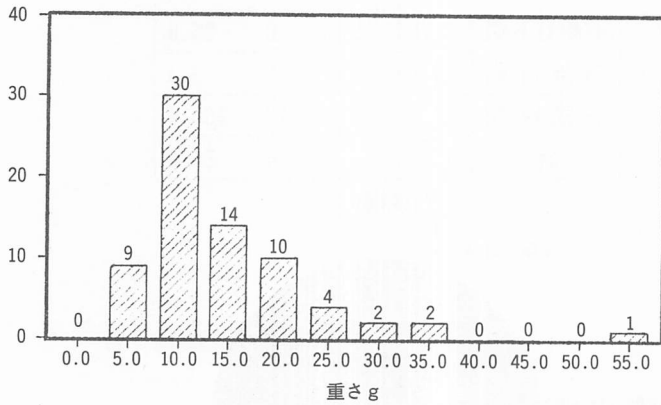
I 類…内湾している部分に連続的な加工が認められる一群。



不定形石器類別構成



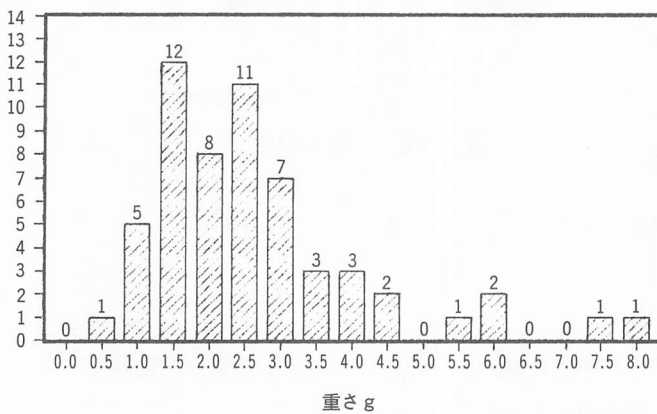
不定形石器IX類と石鏃Va類の大きさ



不定形石器IX類重量分布

計測個体	74	75	76	73
最大値	6.5	4.9	2.0	55.2
最小値	2.3	1.2	0.5	1.5
平均値	4.1	2.7	1.0	12.5

不定形石器IX類



石鏃Va類重量分布

計測個体	57	60	61	57
最大値	4.5	2.3	1.0	7.5
最小値	1.7	1.0	0.3	0.5
平均値	2.9	1.6	0.6	2.4

石鏃Va類

第166図 不定形石器の構成と量量

- II類…凸辺部分に連続的な加工が認められる一群。
 III類…直線的な最長辺に連続的な加工が認められる一群。
 IV類…二辺以上に曲線的な加工が認められる一群。
 V類…全縁に加工が認められる一群。
 VI類…特異な形態で、全縁に加工が認められる一群、異形石器と呼ばれるもの。
 VII類…平面形態は長方形～方形を基調とするもので、比較的厚手の素材を用いて縁辺に荒い加工が認められる一群。
 VIII類…平面形態は円形～略円形に近く全縁あるいは一部に加工が認められる一群。
 IX類…平面形態は楕円形～長円形を基調とし、石鏃の先端部ほどの鋭さは認められないが長軸方向の一端あるいは両端に比較的先鋭な部位を持つ一群。
 X類…形態的に規格性に欠け不整形な剝片の一部に加工が認められる一群。
- この中でIX類とした楕円形に近い形状の石器は、両面加工され周縁にも細部の加工が施される場合もある。石鏃や搔器などに含まれる要素も持っているが大きさ・重量の点で石鏃とは大きな違いが認められる。比較的画一性の認められる石器で独立した器種の可能性が考えられる。

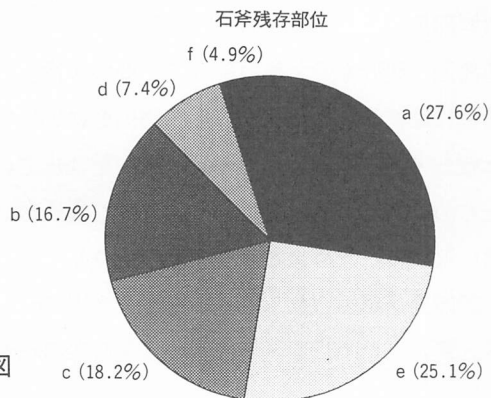
(5) 石斧類 (凡例図・第167図)

特に分類は行わなかったが形状・大きさにかんがりのばらつきが見られる。なかには石斧と分類したが石爪、太型蛤刃石斧も出土している。多くは包含層中から出土しており特異な出土状況の見られるものはなかった。完形品も少なく多くは破損品である。一部、敲石や凹石に転用したものも見られる。八戸市丹後谷地遺跡の分析例を参考にし完形品も含め破損の状況から7タイプが認められた。240点を対象とした。

- a…身部の大半と基部が残存し、刃部付近が欠損したもの。
 b…身部の大半と刃部が残存し、基部付近が欠損したもの。
 c…刃部が残存し、基部含む身部の大半が欠損したもの。

a	56	23.3
e	51	21.3
g	37	15.4
c	37	15.4
b	34	14.2
d	15	6.3
f	10	4.2
計	240	100.0

石斧残存部位



第167図 石斧の残存部位類型図

- d…身部の中央部が残存し、基部と刃部が欠損したもの。
- e…基部付近が残存し、刃部を含む身部の大半が欠損したもの。
- f…刃部付近が残存し、基部を含む身部の大半が欠損したもの。
- g…ほぼ完形品に近いもの。

完形品は非常に少なく欠損率は84.6%と石棒類などと同様破損の割合が高い遺物である。

(6) 敲磨石凹類

ここでは礫の一部に凹部分・研磨部分・敲打が認められる礫石器類を一括した。これらの礫石器類の多くは各種の要素が複合している。分類にあたっては第一義に形態・形状を考慮し、次の段階で遺物に残された使用痕を加味した。

〈礫の形状・形態から〉

- I群…平面形・断面形とも円形・略円形・楕円形の礫。
- II群…偏平な礫で形状が半円形または半月形の礫
- III群…偏平で比較的長身の垂角礫（棒状）のもの。
- IV群…偏平で長方形・撥形に近い形状の礫。
- V群…長身で断面形が柱状・略円形に近い礫。
- VI群…上述の分類から除外される不定形な礫及び破損品のため全体の形状が不明なもの。

〈加工要素〉

- A…凹部分のみ認められるもの。
- B…研磨部分のみ認められるもの。
- C…敲打部分のみ認められるもの。敲打の手法には粗い剝離が加えられるものと、非常に繊細な敲打痕の認められるものがある。
- D…凹部分と研磨部分が複合しているもの。
- E…凹部分と敲打部分が複合しているもの。
- F…研磨部分と敲打部分が複合しているもの。
- G…凹部分・研磨部分・敲打部分の三要素が複合しているもの。

形態的には比較的入手可能な円形・楕円形に近い形状の礫が選択されており、このような形状の礫は敲石・凹石・磨石など多目的に利用されている。遺物に見られる加工要素としてB・Cとしたものが多くみられるのは、本質的な機能の結果ではなく他に素材となる礫を目的に応じた形状に近づけるために敲ったり・擦ったりしたための整形の過程の痕跡も含まれたためと思われる。凹部分が認められる礫は略円形・楕円形～長方形の形状のものが使用されている。

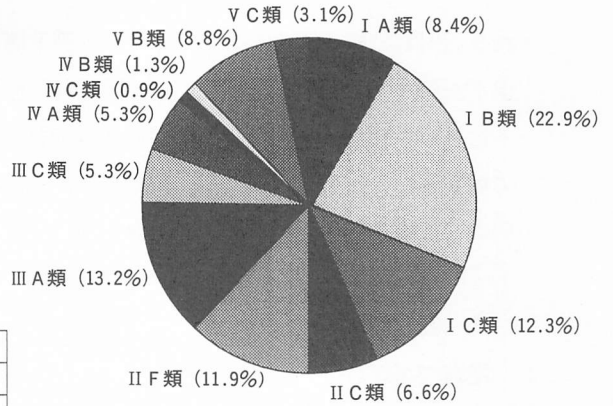
II群C・Fとした半月形・半円状の形状の礫は石冠・半月磨石・半円状偏平打製石器とよば

	A	B	C	D	E	F	G	計
I	19	52	28					99
II			15			27		42
III	30		12					42
IV	12	3	2					17
V		20	7					27
VI	6							6
計	67	75	64	0	0	27	0	233

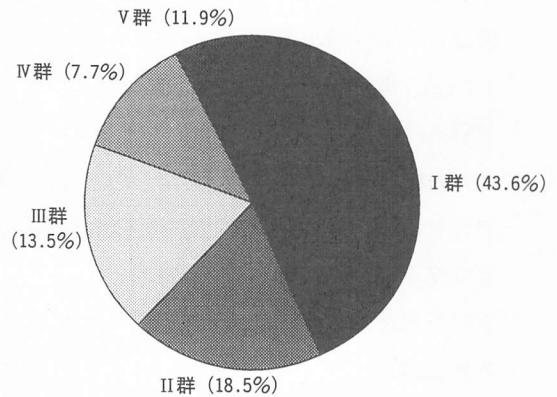
敲打磨石構成表

	総数	欠損	欠損率	最大重 g	最小重 g	平均重 g
I A	19	4	21.1	860	185	393
I B	52	12	23.1	2105	5	676
I C	28	7	25.0	1492	35	441
II C	15	7	46.7	1800	148	536
II F	27	16	59.3	709	151	404
III A	30	16	53.3	622	236	340
III C	12	4	33.3	655	67	405
IV A	12	3	25.0	529	226	382
IV A	3	1	33.3	1425	841	1133
IV C	2	0	0.0	995	907	951
V B	20	14	70.0	859	239	509
V C	7	4	57.1	295	128	236
VI A	6	6	100.0			
計	233	94	40.3			

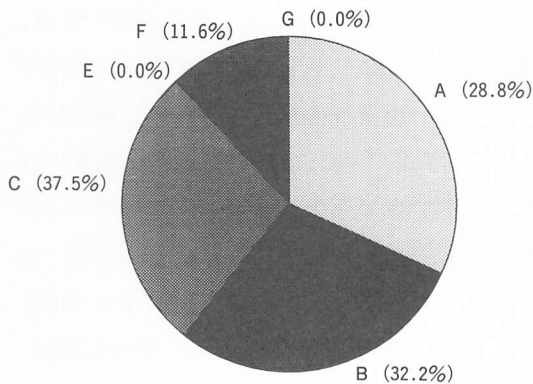
敲打磨石類計測値



敲打磨石構成



敲打磨石形状



敲打磨石加工要素

第168図 敲打磨石類の構成

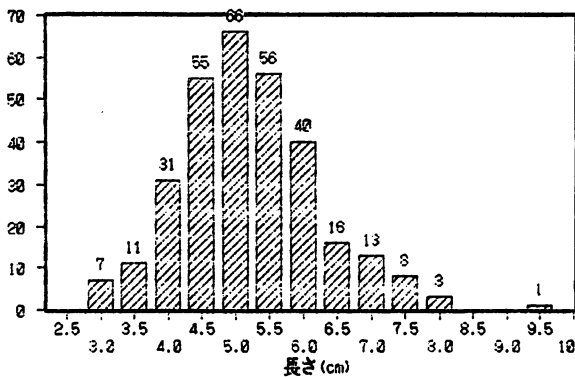
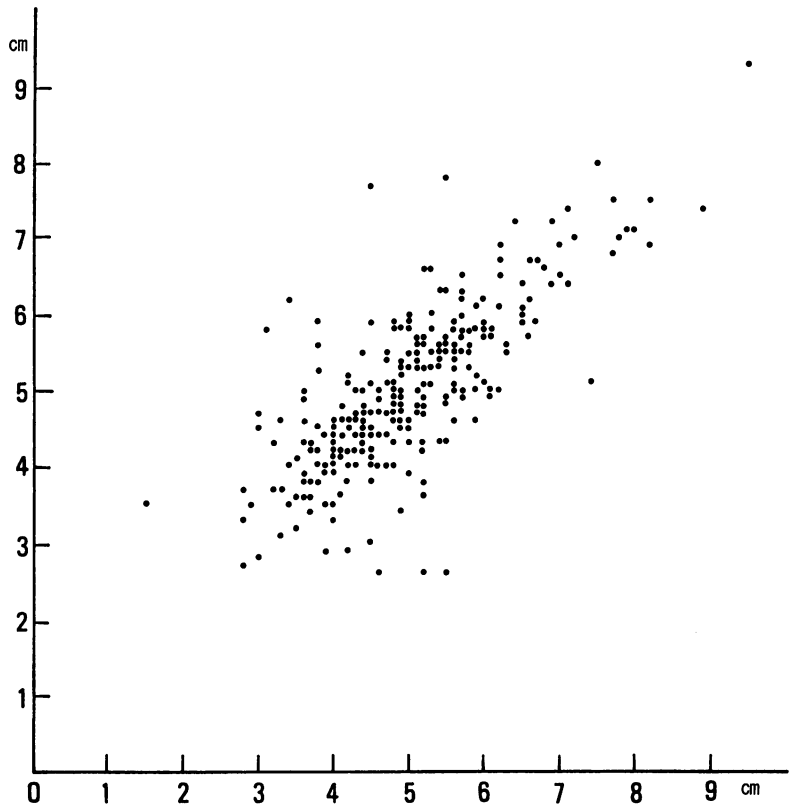
れる石器群に相当するもので従来から円筒下層式の土器に伴出する特徴的な石器とされている。扁平な礫を使用し周縁を打ち欠いて半円状に整形しており、長軸方向も鋭角な部分をなくすように整形されている。主要機能面は直線部分でその部分は両側からの粗い剝離が加えられ、後で擦面として使用されている。欠損率が高く約半数以上に欠損が認められ、欠損品の多くは半円のほぼ中央部付近で破損する場合が多い。

(7) 石製円盤 (第 160・169 図)

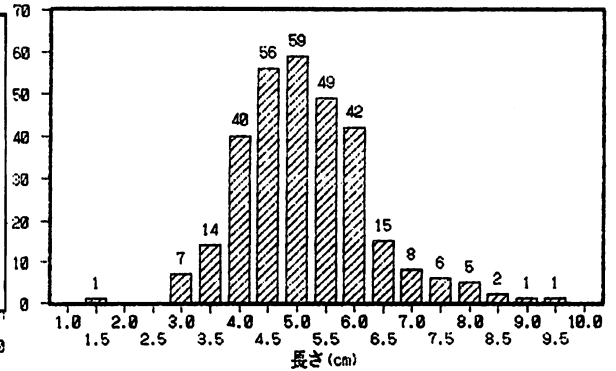
総数で 308 点出土している。出土状況を見ると集中して出土する傾向があり、このことは一括廃棄される場合が多い遺物と考えられ、同様の傾向は土製円盤についてもあてはまる。周縁が「〈〉」状、研磨され「()」状となっているものが見られる。この周縁の違いが成形の結果なのか機能面としての結果なのかは不明である。時期的には多くの石製円盤は縄文時代晩期前葉・中葉頃のものと思われる。素材の性質上破損品は少なく、破損率は 11.6% である。長径の最大値は 5.3 cm・最小値 2.6 cm・平均値 5.0 cm、厚さの最大値は 4.5 cm・最小値 0.4 cm・平均値 1.7 cm、重量の最大値は 500.0 g・最小値 3.3 g・平均値 70.2 g である。片面に赤色顔料の付着が認められるものが 6 個 (1.9%) 認められたが、これは故意に付着したというより顔料の付着した石皿類の破片を再利用したものと考えられる。また、片面の中央部に径 1.0 cm 土の円形のアスファルトの付着痕が認められるものが 3 個 (1.0%) 出土している。これは偶然によるものではなく明らかに意識的に付着させたものであり、この種の遺物の用途を考える上でひとつの示唆をあたえていると思われる。このような例は非常に少なく手代森遺跡に数点見られる程度である。岩手県内で石製円盤が比較的多数出土している遺跡として、北上市九年橋遺跡 (560 点、縄文時代晩期)・大迫町小田遺跡 (179 点、縄文時代晩期)・大迫町観音堂遺跡 (103 点、縄文時代中期～後期)・衣川村東裏遺跡 (317 点、縄文時代晩期)・盛岡市稗内遺跡 (981 点、縄文時代晩期)・安代町曲田 I 遺跡 (92 点、縄文時代晩期)・盛岡市湯沢遺跡 (151 点、縄文時代中期～後期)・盛岡市手代森遺跡 (2511 点、縄文時代晩期) など縄文時代晩期の遺跡からの事例が多く報告されている。このなかで九年橋遺跡の第 3 次～第 6 次調査分の 171 点については藤村氏、曲田 I 遺跡・稗内遺跡・手代森遺跡・安堵屋敷遺跡・東裏遺跡については佐々木氏により分析されている。径の平均値は九年橋遺跡では 5.9 cm、曲田 I 遺跡では 5 cm～6 cm、手代森遺跡・稗内遺跡・安堵屋敷では 4 cm～6 cm、東裏遺跡では 6 cm～7 cm の部分に集中しておりほぼ 6 cm 土の値が得られている。厚さについては九年橋遺跡で 1.8 cm という平均値があり大日向 II 遺跡とほぼ近似した値である。次に重量であるが九年橋遺跡では平均値が 107 g、曲田 I 遺跡では 20 g～80 g、手代森遺跡では 20 g～60 g、稗内遺跡遺跡では 20 g～60 g、安堵屋敷遺跡では 20 g～60 g、東裏遺跡では 40 g～100 g の部分に集中している。他の要素に比べ重量

総数	308
完形	278
欠損	30
欠損率%	9.7
最大径cm	9.5
最小径cm	1.5
平均径cm	5.0
最大厚cm	4.5
最小厚cm	0.4
平均厚cm	1.7
最大重g	500.0
最小重g	3.3
平均重g	71.6
顔料塗布	6
塗布率%	1.9
アスファルト	3
付着率%	1.0

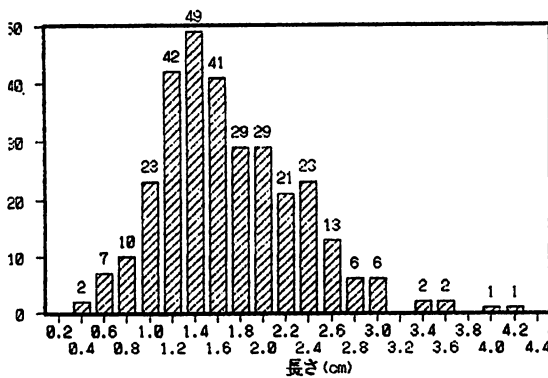
石製円盤



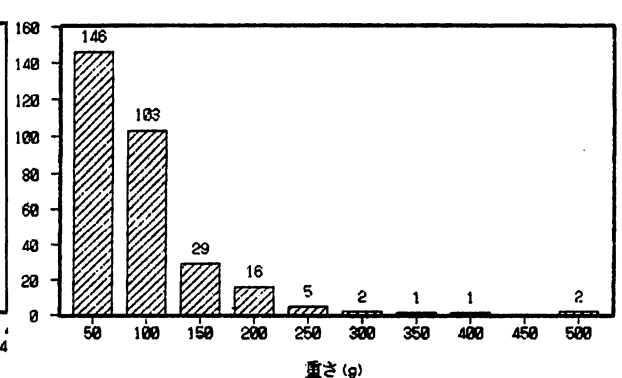
石製円盤長さ分布



石製円盤短径分布



石製円盤厚さ分布



石製円盤重量分布

第169図 石製円盤法量図

についてはやや遺跡間にばらつきがみられるが40g～80g付近にもっとも集中している。このなかでも九年橋遺跡・東裏遺跡は比較的重量の重いものが出土している。しかし、この種の遺物は遺跡間をこえて形状・法量にかなりの画一性が見られる。

出土状況は大日向II遺跡ではB調査区GVI・HVIグリッドの遺物包含層を掘り下げる過程で集中して、しかも土製円盤とともにみつかる場合が多くこの両者は密接な関わりをもつ遺物と考えられる。また、九年橋遺跡でも集中して出土した例があり、石製円盤も土製円盤同様、同時使用一括廃棄といった状況が想定される。石製円盤の用途については敲打器、投げ石、石錘、宗教用具などの説がみられる。これらの説を積極的に支持する要素は認められないが、この種の遺物を多く出土する遺跡は各河川の合流付近（下流部）に立地する大規模な遺跡が多く、また海岸部の遺跡などからの出土例が少ないことなども用途を考えるうえで一つの示唆を与えていると思われる。北上市九年橋遺跡の数km先に立地している縄文時代前期末葉から中期初頭の滝ノ沢遺跡・煤孫遺跡からは、両端打ち欠きの偏平な礫石錘と考えられる石製品が多量に出土しており、時代はことなるものの生業を考える上で類似点が見いだせる。

長径 cm	大日向II	曲田	萩内	手代森	安堵屋敷	東裏	九年橋	重量 g	大日向II	曲田	萩内	手代森	安堵屋敷	東裏	九年橋
0.0～	0	0	0	0	0	0		0.0～	24	0	72	115	5	3	
1.0～	0	0	0	0	0	0		20.0	88	22	304	699	22	12	
2.0～	7	0	5	8	0	0		40.0	61	24	200	739	16	47	
3.0～	42	0	69	151	1	3	2	60.0	46	16	137	421	5	53	
5.0～	96	36	314	962	14	93	7	100.0	19	6	41	125	7	47	
6.0～	29	21	120	272	12	127	5	120.0	8	7	16	40	4	27	
7.0～	11	4	39	49	10	52	1	140.0	5	1	10	41	2	29	
8.0～	0	1	9	9	1	11		160.0	8	06	3	19	1	15	
9.0～	1	1	3	1	4	2		180.0	5	1	5	7	1	9	
10.0～	0	0	1	0	2	0		200.0	11	1	11	21	4	15	
計	307	88	874	2505	70	317	17	計	305	88	862	2441	70	297	169

(8) 石棒・石刀類

石を素材として、刀剣状・棒状に加工したものを一括した。

I類…断面の形状が丸みをもつもので石棒に相当するものである。

II類…断面の形状が偏平な凸レンズ状あるいは偏平なもので両側縁または一側縁に疑似的な刃が作られたもの。石刀・石剣に相当する。

III類…断面の形状が多角柱であるものを一括した。

(9) 軽石製品

軽石を用いて表面を研磨し整形しているものである。素材の形状から以下のように分類した。

I類…偏平に整形されているもの。

II類…棒状に整形されているもの。

III類…塊状に整形されているもの。

もっとも多くみられるのはI類で長軸方向の一端に穿孔が見られる場合が多い。また、III類としたものは塊状で一部に紐懸けと思われる括れがある。岩手県内ではこのような軽石製品は縄文時代後期後半以降の遺跡から出土している。

(10) 石製玉類について

今回の調査で19点の石製玉類が出土しており、このなかの11点は糸魚川産のヒスイ、その他は緑色凝灰岩質の石材が使用されている。時期的には縄文時代後期末葉から晩期初頭の所産と考えられる。形態的には丸玉10点、勾玉状4点、棗玉状1点、垂玉(楕円形～菱形状)3点が出土している。玉類の多くは墓域と隣接したグリッドから出土しており土壌墓に関連した可能性をもつものが多く含まれていると思われる。例えばSD099土壌墓では埋葬人骨に装着した状態で4点のヒスイが出土している。遺構・人骨の確認はされなかったがJⅧ3aグリッドから4点のヒスイ丸玉が隣接して出土している。これらの丸玉の孔には赤色顔料の痕跡が認められ赤い紐状のものに連ねられた一連のものと考えることができよう。青森県上尾駸(1)遺跡C地区(青埋文:1988)の調査では土壌墓から帯状赤色顔料が検出されておりきわめて類似した例である。次に石材加工という面に着目したとき、11点のヒスイが形態の如何を問わず片面からの穿孔が行われており、緑色凝灰岩製の玉が両面からの穿孔であるのと対照的であり石材による加工方法の違いが認められる。玉の形態・厚さを越え一貫して片面穿孔という方法が採用されており同じ技術体系のもとで製作されたと考えられる。片面穿孔という共通性のほかに両面の孔径に著しい差があることも特徴の一つとしてあげることができる。ヒスイ製玉類のこのような穿孔方法に対して硬度的にも軟らかい緑色凝灰岩製の玉類は両面穿孔の方法がとられる場合が多いようである。これは硬度的に圧倒的にヒスイに劣る緑色凝灰岩を製品化するさいの必然的な結果であろうと考えられる。また、緑色凝灰岩が石材とされた背景にはヒスイの緑色に最も近く石材の入手が容易であるという経済効率と縄文人の嗜好性が反映した結果と考えられる。

県内で現在までのところ縄文時代のヒスイ製品の出土が確認されているのは宮古市上村貝塚(中期大木8b式、大珠、片面穿孔)・紫波町西田遺跡(中期大木8a式、大珠、片面穿孔)、大槌町夏本遺跡(中期大木9式、大珠、片面穿孔)、岩泉町森の越遺跡(中期大木8～9式、大珠)、野田村平清水遺跡(中期、大珠、片面穿孔)、野田村広内遺跡(中期、大珠、両面穿孔)、大迫町立石遺跡(後期～晩期、大珠、無孔)、軽米町大日向遺跡(昭和59年調査、後期後半、勾玉、片面穿孔)、岩手町豊岡遺跡2点(晩期、丸玉－片面穿孔・勾玉－両面穿孔)、田野畑村館石野

(後期、大珠、2孔片面穿孔)、大迫町立石遺跡1点(後・晩期、丸玉、両面)、釜石市北方3点(時期不明、勾玉うち1点片面穿孔他は不明)、盛岡市上米内遺跡(縄文晩期、勾玉、片面穿孔)、軽米町大日向II遺跡(平成3年調査、後期末～晩期、勾玉・丸玉・垂玉、片面穿孔)、安代町谷地田(晩期前葉、勾玉―片面、棗玉―両面)遺跡などで出土している。他県に比べ数も少なく、県内出土の総数が他県の一遺跡の出土数にも満たない状況である。全県的にみた場合でも他の石製品などに比較して圧倒的に資料が少なく極めて希少価値の高い遺物であることがわかる。時期的には縄文時代中期からみられ後期後半から晩期の時期に再び出現する傾向がある。また、中期には主に大珠の部類が多く後晩期には小型の勾玉・丸玉・棗玉・垂玉など製品の種類が多く認められるようになる。時期が新しくなるにつれて製品の小型化・形態(種類)の多様化が看取される。産地同定で西田遺跡・大日向II遺跡・夏本遺跡出土のヒスイは糸魚川産とされており、国内の産出がほぼこの地に限定されていることから他遺跡の例も同様と考えられる。これらのヒスイ製品は縄文時代の全時期を通して原産地周辺で製品化されたものが各地に供給されたと考えられる。西田遺跡・大日向II遺跡では明らかにある特定の土壌墓からのみ出土しておりヒスイ製品を持ち得る者と持たざる者の存在が考えられる。

4. 自然遺物

(1) 木製品

製品と認定されたものが少なく、その多くが断片試料であるため全貌を知り得たものは少なかった。今回出土した資料のなかには木胎容器が欠落しているものの、他県で知られている縄文時代晩期の遺跡から出土する遺物と類似した内容であることが指摘できる(表4)。木製腕輪は、青森県是川中居遺跡・土井I号遺跡で出土が確認されており、いずれも表面を赤漆で仕上げている。大日向II遺跡の2点は、マタビ属の一種の蔓が用いられている。是川中居遺跡の例は、フジが利用されており、加工に容易な弾力性のある用材を選択していることが知られる。弓?としたものは3点出土している。弓弭部分と思われるものは、帯状に瘤を残すが彫刻や漆の塗布はみられず、飾り弓ではなく実用的なものであったと考えられる。他の2点は、イヌガヤを使用した小型弓である。岩手県稗内遺跡・埼玉県寿能遺跡・小樽市忍路土場遺跡出土の小型弓の用材と一致し、用途に応じた材の選択が行われていることが認められた。中央部に孔を穿った樹皮製円盤は、青森県亀ヶ岡遺跡で1点・稗内遺跡で3点(有孔2点・無孔1点)出土している。亀ヶ岡遺跡の報告書では、この種の遺物に対し加工品としての明確な判断を避けているが、円形を基調にしていること、直径5 cm±・厚さ0.5 cm±の近似した値を示すことから比較的画一性をもった製品と思われる。亀ヶ岡遺跡ではトチノキの樹皮を使用している。球状の瘤を残す籠状木製品と呼称したものは、東北地方の晩期の遺跡のなかにも出土例を求めるこ

とはできないが、3179（第410図）は、山形県押出遺跡から出土している縄文時代前期の篋状木製品に大きさや形状がもっとも類似している。3180（第410図）は、全面が研磨され一見完成品のように見えるが、是川中居遺跡で出土している縄文琴といわれるものの未製品とも考えられる。

建築用部材としては、板状に仕上げられた部材・ほぞ穴をもつ太い丸木材がある。黒崎直氏は、「縄文時代にもほぞ差し結合は石鏃や石斧の装着法に知られていたが、木製品同士の組み合わせには一般的ではなかったようだ。おそらく細部に加工、とくにほぞ穴を掘り込む技術が未熟だったものと思われる。鉄製利器をはじめとする木工具類が完備してこそ、初めて一般的となった。」と、縄文時代のほぞ差しに関しては否定的である。しかし、最近特に注意が向けられるようになった掘立柱状建物跡の存在や、石川県桜町遺跡・小樽市忍路土場遺跡・岩手県萩内遺跡の出土例、あるいは割り貫きの木胎容器や丸木舟の存在を前提としたならば技術的には十分可能であったと考えられる。

本遺跡では、クリ・ニガキ・コナラ属の一種が部材の用材として確認されている。また、流木あるいは分割材とされたなかにも、コナラ属・クリ・カエデ属が多く認められている。しかも、これらの30～40％には焼けた痕跡が認められている。特に、試料総数の約22％を占めるクリ材の約30％に焼けた痕跡が認められる。部材として使用された樹種には各種認められるが、そのなかでも縄文人は積極的にクリ材を求めていたと考えられる。巨木木柱列で著名な石川県真脇遺跡・チカモリ遺跡でも、ほとんどの柱根にクリ材が使用されている。また、千野裕道氏の一連の研究でも、建築材・燃料材の用材としてクリ材が多く使用されていたことが知られている。このように、重要な食糧資源であるクリを用材としていることは、一見矛盾しているように見える。しかし、クリやクルミの木を切ることにより高い生産力が維持されることから、縄文人のクリやクルミに対する積極的な管理の可能性を指摘する西田正規氏の見解もある。

赤漆塗りの木製腕輪・籃胎漆器・彩文土器・漆液容器など、漆工と関連した遺物が本遺跡でも出土している。口縁部付近に赤色顔料の付着が認められる小型鉢型土器（第4図25）は、漆液の保存容器というより製品への漆塗布の際に使用したパレット状の容器と考えられる。漆工技術の一工程を遺跡内で行っていたことがうかがえる資料である。東北地方の縄文時代晩期の遺跡から出土する漆工関係遺物として、漆液容器は是川中居遺跡・亀ヶ岡遺跡・秋田県中山遺跡・宮城県山王厩遺跡、漆濾し布は中山遺跡・亀ヶ岡遺跡・福島県荒屋敷遺跡で出土例が知られている。漆工関係遺物が出土することは、単に低湿地性という遺物の保存に適した環境の特異性だけでなく、その背景には漆工技術を専門とする專業集団の存在や遺跡の特殊性が反映していると考えられる。木製品は限られた条件下でしか遺存しないため、取扱いに困難を要する遺物である。他の考古遺物に比べ、出土する量も少なく知ることのできる情報量も限られている。

木胎容器は、出土遺物の多くを占める土器（土胎容器）の不足分を補完したのではない。木胎容器の多くに漆塗りが見られることなどから、日常雑器としての土胎容器に対して、非日常的な場面での使用が考えられる。木胎容器は耐火性の点では土胎容器に大きく劣っている。しかし、漆を塗布するなどの技術を付加することにより、耐水性と耐久性を増し、土胎容器になり長所をもつことになる。素材の入手ということを考えた場合でも、木材の確保は粘土と同様にそれほどの困難をとまなうものではない。むしろ、木製品の素材となる用材の入手は、目的とする製品の用途に応じた選択が重要になる。また、木取りや加工を容易に行うためには、用材となる樹種の性質を十分に熟知していなければならない。さらに木工やそれに付随する漆工技術は、土器製作に比較してより高い専門的な知識と経験が要求される。このような技術基盤を支えた背景には、これらの技術を伝える専門集団の存在も考えられる。

ここに紹介した木製品は、他県の低湿地遺跡から出土した遺物に比較して質・量とも貧弱である。しかし、県内では縄文時代後期の葦内遺跡に続くものであり、晩期の木製品としては初見である。亀ヶ岡文化のなかでも、現在まであまり知ることでできなかった一端を明らかにしたことの意義は大きい。

5. ガラス製玉について

遠賀川系大型壺を含む縄文時代終末期のSX01 遺物集中区（大洞A'式段階相当）からガラス製の小玉が出土している。一部に亀裂が見られるがほぼ原型をとどめている。計測値は、直径9.4 mm・厚さ7.5 mm・孔径0.7 mm・重さ0.98 gである。色調は不透明な淡い水色を基調とし側面部に部分的に数条の縞状の白色帯が見られる。孔は直線的に貫通しており成形後の穿孔ではなく、製作段階にできたものであり芯材にガラス原料を練り巻く手法がとられたと考えられる。出土状況については詳細な記録は残されていないが、SX01 遺物集中区では石剣・匙状土製品・土偶・遠賀川系大型壺が出土しており祭祀・葬制に関連した遺物の出土しておりこれらと関連を持つ遺物と考えられる。蛍光X線分析では本資料は主成分のケイ素の次に鉛を含む鉛ガラスであるとの結果を得ている。また、鉛ガラスであるもののバリウムが含まれておらず、いままであまり検出されることのなかった微量のアンチモン・ビスマスの元素も含まれており材質面でも興味有るデータが報告されている。

県内で縄文時代・弥生時代を通じてガラス製品が出土しているのは弥生時代後半期の水沢市常盤遺跡が唯一の例である。常盤遺跡では土壇墓と思われる土坑の底面付近からコバルト色をした透明のガラス製小玉2個が出土している。一面が丸く、他面が平で、四角張った饅頭形で、計測値は長径6.0 mm・短径5.2 mm・厚さ3.0 mm、一方は長径6.0 mm・短径5.2 mm・厚さ3.0 mmである。孔径は1.0 mmで両面穿孔であり、ガラス製白玉の再加工されたものとされて

いる。同時に鉱物学的調査が実施され、等方体で屈折率1.4815-1.4845、比重2.32、硬度5度（モース硬度計）という結果が得られている。小玉の中に気泡がみられ、比重および屈折率を既知の古代ガラスと比較して古墳出土の小玉のソーダ石灰ガラスに近く、中尊寺の小玉の鉛ガラスとは若干差がありおそらくソーダガラスの仲間であろうとの見解が発表されている（伊東：1976）。ともに出土している土器は常盤式と呼ばれる天王山式の前半に相当する土器である。

東北地方北半地域（青森・岩手・秋田）で縄文時代の遺跡からのガラス製品の報告がなされているのは青森県亀ヶ岡遺跡（青森県：1973）と八戸市是川遺跡（保坂：1972）のみである。亀ヶ岡遺跡出土のものは小玉の類で計測値は直径4.0mm・孔の直径0.8mmで両端が良く研磨され平滑に仕上げられている。平面形プランは、若干不整形で色調はスカイブルー、小玉の所属時期は伴出土器から縄文時代晩期大洞A式期と考えられている。詳細な化学分析については不明である。色調・形態・時期が大日向II遺跡出土の資料に類似している。是川遺跡では2点のガラス製玉類が報告されている。計測値が径1.64mm・厚さ1.17mmで白色がかかった橙色で側面に黄色い縞が入ったガラス丸玉と径1.32mm・厚さ0.82mmで横に黄色い縞が入り割りのあるくすんだ緑色の蜜柑玉である。是川遺跡自体は縄文時代晩期の遺跡であるが時期の詳細については不明である。

ガラス製品は弥生文化を特色づける遺物であり、弥生時代では九州を中心に主に西日本に分布しており従来から縄文時代の遺跡からの出土はないとされてきた。また、日本で発見される古代ガラス（12世紀末の平安時代までに製造されたガラス器の総称）にはアルカリ石灰ガラスと鉛ガラスの2種類が存在し弥生時代前半頃に発見される鉛ガラスは中国大陸と関連が指摘されている。本遺跡出土のガラス玉は、成分的にもバリウムを含まない鉛ガラスであることや従来まであまり知られなかったアンチモン・ビスマス元素を含有していることなどが指摘されており今後の資料の増加を待ちたい。

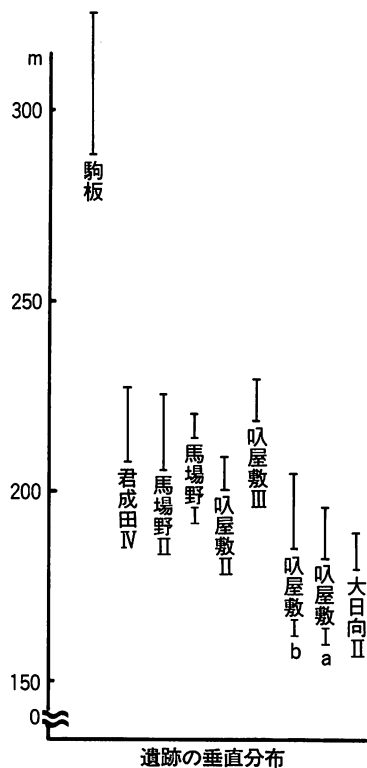
亀ヶ岡遺跡・本遺跡出土例が示すように、既に縄文時代晩期終末の時期に東北地方北半地域にもガラス製品が存在していたことが明かとなった。常識的に考えてもこれらのガラス製品が当地域で製作されたとは考えられず当然のことながら搬入品であろうと思われる。ここで問題となるのは遠賀川系土器を含む土器群と共伴していることである。この遠賀川系土器については現段階では搬入品あるいは在地生産の結論は下せないが、外来的要素をもつ土器が存在していることは搬入ルートを考えるうえで一つの示唆をあたえているものと思われる。今後、製作技法の解明を含め、製品の製作地・原料の産地・搬入ルートなど解明しなければならぬ問題点が残された。近年特に資料が増加してきた遠賀川系土器、砂沢遺跡遺跡での水田跡の検出など縄文時代晩期終末から弥生時代初頭にかけての東北地方、とりわけ北半地域は汎日本的視野のなかで再評価されなければならないであろう。

VII まとめ

1. 軽米町内の縄文時代の遺跡の立地について

軽米町付近は平坦な土地が少なくこれは遺跡の立地にも反映しているようである。現在までの調査成果では、縄文時代・弥生時代に限定すると遺跡は丘陵地状の尾根の先端部や先端部付近の鞍部、あるいは尾根に挟まれた緩やかな谷の緩斜面上に立地している場合が多く、当遺跡の立地も同様の傾向にある。尾根の先端部分に立地する遺跡としては大日向II遺跡・叭屋敷I b遺跡・叭屋敷I a遺跡、尾根上の鞍部に立地する遺跡としては馬場野I遺跡、緩やかな谷の緩斜面上に立地する遺跡としては叭屋敷III遺跡・叭屋敷II遺跡・馬場野I遺跡・馬場野II遺跡などがあげられる。また、遺跡の垂直分布を見た場合遺跡の分布状況の図に示したように、大きく3グループに分けられる。もっとも低位に立地する遺跡としては大日向II遺跡(標高165m~170m)・叭屋敷I b遺跡(標高174m~194m)・叭屋敷I a遺跡(標高172m~186m)、さらに一段高い面には叭屋敷III遺跡(標高210m~220m)・叭屋敷II遺跡(標高190m~200m)・馬場野I遺跡(標高205m~211m)・馬場野II遺跡(標高205m~211m)・君成田IV遺跡(標高198m~217m)、高位に立地する遺跡としては駒板遺跡(標高280m~320m)があげられる。

各遺跡間の中心部からの直線距離は低位に立地しているグループでは大日向II遺跡・叭屋敷I a遺跡間は約140m、叭屋敷I a遺跡・叭屋敷I b遺跡間は約200m、一段高いグループの叭屋敷III遺跡・叭屋敷II遺跡間は約150m、叭屋敷II遺跡・馬場野I遺跡間は約120m、馬場野I遺跡・馬場野II遺跡間は約250mと比較的近似した値を示している。各遺跡の時期別住居跡検出数をみた場合、大日向II遺跡(縄文時代中期末葉・後期後葉・晩期・弥生時代前半)、叭屋敷I a遺跡(縄文時代中期末葉)、叭屋敷III遺跡(縄文時代中期末葉・後期前葉)、叭屋敷II遺跡(縄文時代中期末葉・後期前葉)、馬場野I遺跡(縄文時代後期前葉)、馬場野II遺跡(縄文時代中期末葉・後期中葉・弥生時代前半)、君成田IV遺跡(縄文時代中期末葉・後期前葉・後期後葉・弥生時代前半)、駒板遺跡(縄文時代後期前葉・後期後葉・晩期前葉)となっており、縄文時代中期末葉から後期前葉の時期に遺跡数および住居跡数の顕著な増加が見られ、このような傾向は全県的な傾向とほぼ一致している。町内の遺跡では縄文



時代後期前葉の時期では大規模な集落が駒板遺跡や君成田IV遺跡に見られるように高位面に立地している。縄文時代後期後葉の段階では遺跡の分散化とともに大日向II遺跡のように拠点集落的な遺跡が見られるようになる。縄文時代晩期の段階では遺跡の分散化とともに集落の小規模化の傾向が認められる。弥生時代前半の段階では低位面に立地する大日向II遺跡と高位面に立地する君成田IV遺跡・馬場野II遺跡で集落跡が検出されており生業を考えるうえでも興味ある立地の仕方をしている。

軽米町内の縄文時代の時期別住居跡検出状況（住居跡状遺構含）

遺 跡 名		早 期			前 期			中 期			後 期			晩 期			弥 生	
		前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	前半	後半
長倉 No 14	遺物									○								○
	住居跡																	
長倉	遺物				○	○												
	住居跡																	
君成田IV	遺物								○	○		○						○ ○
	住居跡								10	24	3	8	4					2
叭屋敷II	遺物					○	○		○	○		○	○	○				
	住居跡								7				6					
叭屋敷III	遺物								○	○			○					
	住居跡								4	9								
土弓 I	遺物	○		○	○			○					○	○				○
	住居跡																	
叭屋敷 I a	遺物								○	○	○	○	○	○				
	住居跡								37	1	2				1			
叭屋敷 I b	遺物				○			○	○	○		○	○	○				
	住居跡				2				1									
馬場野 I	遺物								○	○		○	○					
	住居跡								1	7	1							
駒坂	遺物				○					○		10						
	住居跡									24		11	4	1				
馬場野II	遺物	○	○						○	○	○	○	○	○	○	○		○
	住居跡								10	3	23	6	1	2				
大日向II第1次	遺物				○	○			○	○	○	○	○	○				
	住居跡						3		4			27						
大日向II第2～5次	遺物	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	住居跡		2	5			1	10	2	5	27	6	3	1	8			
大堤II	遺物													○				
	住居跡																	
糝口 I	遺物	○	○	○											○			
	住居跡		1															
皂角子久保	遺物													○				
	住居跡																	

2. 大日向Ⅱ遺跡の構成について

- (1) 本遺跡は縄文時代早期から奈良時代までの各時期の住居跡等を含む複合遺跡である。第1次調査（昭和59年調査）と今回の調査（第2次～第5次）、第6・7次調査（平成4・5年度）を通観すると縄文時代早期前葉押型文系の住居跡・早期後葉の条痕文系の住居跡が確認された。前期では大量の土器が出土しているが住居跡等については不明である。中期では特徴的な複式炉を持つ末葉の時期に住居跡が増加する傾向が見られる。縄文時代後期前葉の時期には遺物の出土はみられるが住居跡は少なくこの時期に本遺跡は居住の痕跡がやや希薄となる。
- (2) 第1次調査を含め本遺跡で最も住居跡が多く検出されているのは縄文時代後期後半から後葉の時期のものである。特に旧河道を挟んだ南側のA調査区では第1次調査と第3次調査を含めこの時期の住居跡が30棟検出されており同時期の住居跡同士でも重複関係が認められることから何時期かに細分される。同様にB調査区とした旧河道を挟んだ北側の調査区にもほぼ同時期と考えられる住居跡が19棟検出されており、斜面の両側に同時期の集落が併存していたと考えられる。
- (3) 縄文時代後期末葉から晩期初頭の埋葬人骨を含む墓域が検出され縄文時代の墓制を研究するうえで貴重な資料が提示された。また、土壙墓と関連をもつ葬制に関連した遺構として掘立柱建物跡が確認された。墓域の双分性などほぼ同時期の八戸市風張遺跡の類似した様相が見られる。
- (4) 本遺跡からは縄文時代後期後半から晩期の時期に含まれる多くの土偶や様々な土製品・石製品が出土しており近隣に分布する遺跡とはやや性格を異にする中核的・拠点集落遺跡と考えられる。
- (5) 縄文時代ではヒスイ・黒曜石・アスファルト、縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭の時期では遠賀川系土器・ガラス製玉、弥生時代後半から古墳時代では後北式土器・北大式土器など各時代にまたがって他地域との交流を示す遺物が出土した。特に、ヒスイの出土は県内では群を抜いており東北地方では最も多く出土している青森県に隣接しているという地理的な要因が考えられる。
- (6) 縄文時代晩期の土版・土偶など多種多様な土製品が多く出土しており該期の各種土製品を網羅しているといっても過言でない状況である。これに対しほぼ同時期と考えられる岩版・岩偶などの特殊石製品の出土は少なく、僅かに岩版1点と三角形濤状石製品1点が出土している程度である。材質による器種構成の極端な偏重が見られる。
- (7) 縄文時代後期後半から晩期中葉の遺物包含層中、住居跡の埋土中から内陸部では非常に希有な例として動物の骨類が出土した。貝類ではアサリ・コタマガイ・シジミ類、獣類ではワシ・イノシシ・シカ・ノウサギ・ムササビ・テンの骨が確認されており、内陸山間部に位置する遺跡の狩猟採集活動の一端を知ることができた。

(8) 他地域との交流を示す遺物として土器では縄文時代晩期終末期から弥生時代初頭の遠賀川系土器、弥生時代後半から古墳時代前半にかけての後北式土器が出土している。その他の遺物としては縄文時代のヒスイと黒曜石・アスファルト、縄文時代晩期終末から弥生時代初頭の遺物と考えられるガラス製小玉、海産の貝類が出土している。黒曜石と認定されたなかでは、その産出地として北海道の白滝・置戸、秋田県の深浦、青森県の出来島、岩手県の雫石が認められた。石製玉類のなかでは11点のものがヒスイと認定されこれらはすべて糸魚川産とされた。分析結果が示すように当地域には遠隔地との交流を示す多様な遺物が出土しており広範囲にわたる人の動き・物の動き・情報の伝達等が想定される。

以上、粗略であるが本遺跡のまとめとしたい。膨大な遺物量であり様々な面で限界があったが、可能なかぎり図化・掲載に努めた。期間および報告者の能力の限界もあり不十分な部分が多々あると思われ、今後何らかの機会を通して補足して行きたいと思う。

住居跡・住居跡状遺構一覧

遺構名	規模(m)	面積(㎡)	平面形	炉形態	備考	時代 時期
SA01	3.5×3.5	5.7	略円形	無		縄文 晩期前半
SA02	4.0×4.0	10.0	隅丸方形	カマド	焼失家屋	奈良 前半
SA03	4.4×3.7	10.8	不整円形	地床炉	壁柱穴	縄文 前期田柄V群期
SA04	3.8×3.8	9.4	円形	複式炉	焼失家屋	縄文 中期末葉大木10式
SA05	6.0×4.5	13.5	不整円形	未検出		縄文 後期田柄IV群期
SA06	4.0×3.4	12.3	不整円形	地床炉		縄文 後期田柄IV群期
SA07	8.2×7.5	43.7	楕円形	地床炉		縄文 後期田柄IV群期
SA08a	5.2×5.2		楕円形		出入口施設、拡張	縄文 後期田柄V群期
SA08b	6.5×6.3		楕円形		出入口施設、拡張	縄文 後期不明
SA08c	8.3×7.5	49.7	楕円形	地床炉	出入口施設、拡張	縄文 後期田柄V群期
SA09	×		隅丸長方形	未検出		縄文 後期
SA10	5.2×5.0	16.6	円形	地床炉	出入口施設	縄文 後期田柄IV群期
SA11	3.5×3.3	7.4	円形	石囲炉		縄文 後期前葉
SA12	×	3.2	不整形	地床炉		縄文 中期末葉
SA13	2.0×1.5	2.0	楕円形	無		縄文 後期不明
SA14	4.1×3.4	10.4	略円形	地床炉	出入口	縄文 後期田柄IV群期
SA15a	3.3×3.2	6.6	略円形	地床炉	拡張	縄文 後期田柄IV群期
SA15b	4.2×4.2	12.7	略円形	地床炉	拡張	縄文 後期田柄IV群期
SA16			円形	未検出		縄文 後期不明
SA17	×		円～楕円形		壁柱穴	縄文 後期不明
SA18	×		円～楕円形		壁柱穴	縄文 後期不明
SA19	4.5×4.2	13.2	略円形	複式炉	壁溝	縄文 中期後半大木9式
SA20	5.0×5.0	16.4	略円形	方形石	囲炉	縄文 後期前葉
SA21	3.0×3.0	5.1	円形	未検出		縄文 前期
SA22	×		隅丸長方形	地床炉		縄文 前期
SA23	×		長方形	無		縄文 前期前半
SA24	4.0×?	12.3	不整楕円形	地床炉		弥生 初頭
SA25	7.1×7.1	36.5	円形	方形石	炉に土器埋設	弥生 初頭
SA26	9.9×9.9	48.5	円形	円形石	囲炉	弥生 初頭
SA27	5.5×5.5	24.0	円形	地床炉		弥生 初頭
SA28	3.0×3.0	6.3	円形	地床炉		弥生 初頭
SA29	8.7×8.7	50.1	円形	地床炉		弥生 初頭
SA30	11.0×11.0		円形	地床炉		弥生 初頭
SA31	×				建て替え	縄文 後期
SA32	3.6×3.3	6.9	隅丸方形	石囲炉		弥生 初頭
SA33	3.5×3.4	7.0	略円形	無		縄文 晩期不明
SA34	3.6×3.6	6.1	円形	未検出		縄文 前期前半
SA35	5.1×4.6	15.4	略円形	地床炉		縄文 後期田柄IV群期
SA36	5.0×5.0	20.2	略円形	地床炉		縄文 後期田柄IV群期
SA37	2.7×2.1	3.9	隅丸長径	無		縄文 前期前半
SA38	4.2×3.8	12.9	楕円形	地床炉		縄文 後期田柄IV群期
SA39	5.2×5.0	18.9	隅丸方形	無		縄文 晩期中葉
SA41	5.2×4.9	17.2	円形	石囲炉		縄文 後期田柄V群期

遺構名	規模(m)	面積(m ²)	平面形	炉形態	備考	時代	時期
SA42	7.5×7.4	32.4	円形	複式炉		縄文	中期末葉
SA43	6.0×6.0		円形	地床炉	焼失家屋	縄文	後期田柄V群期
SA44	4.2×4.2	11.4	円形	地床炉	焼失家屋	縄文	後期田柄V群期
SA46	4.0×4.0	17.1	略円形	地床炉		縄文	後期田柄IV群期
SA47	6.0×6.0		円形	未検出		縄文	後期田柄IV群期
SA48	6.0×6.0		円形	地床炉		縄文	晩期中葉
SA49	12.0×6.5	42.0	隅丸長方形	石囲炉	2ヶ所	縄文	中葉前半上層b式
SA50	4.3×4.1	12.6	円形	地床炉		縄文	後期田柄III群期
SA51	6.7×6.7	23.0	円形	石囲炉		縄文	後期田柄V～VI群期
SA52	2.3×1.6	2.2	不整形	無	壁柱穴	縄文	前期
SA53	×		不明	地床炉		縄文	後期田柄IV群期
SA54	×		不明	石囲炉	後期末葉・SA42の上位に位置	縄文	晩期前半
SA55	4.0×4.0		円形	未検出		縄文	後期田柄IV群期
SA56	4.5×4.5	12.3	円形	地床炉		縄文	後期田柄III群期
SA57	2.5×2.5		円形	地床炉		縄文	晩期前半
SA58	×		円形	未検出		縄文	晩期前半
SA59	×		不明	石囲炉		縄文	晩期前半
SA60	4.0×4.0	11.0	円形	石囲炉		縄文	後期田柄V～VI群期
SA61	4.0×4.0	9.7	略円形	未検出		縄文	後期田柄III群期
SA62	3.0×3.0	4.4	略円形	未検出		縄文	後期不明
SA63	5.8×4.9	23.1	略円形	地床炉	出入口施設	縄文	後期田柄III群期
SA64	4.9×4.8	16.3	略円形	地床炉	出入口施設	縄文	後期田柄III群期
SA65	4.0×4.0	12.2	円形	石囲炉		縄文	後期田柄IV群期
SA66	3.0×3.0	5.1	円形	石囲炉		縄文	後期田柄IV群期
SA67	4.3×3.5	10.3		小判形		縄文	晩期
SA68	2.3×2.2	3.1	隅丸方形	無		縄文	前期前半
SA69	5.0×5.0	26.0	円形	地床炉		縄文	後期田柄IV群期
SA70	3.5×3.5	7.4	略円形	無		縄文	早期後葉
SA71	3.1×2.7	5.9	不整形	石囲炉		縄文	中期末葉～後期前葉
SA72	×		楕円形	未検出		縄文	不明
SA73	6.0×6.0	24.7	略円形	石囲炉		縄文	晩期前半
SA74	5.0×5.0	17.4	略円形	地床炉		縄文	後期田柄V群期
SA75	3.5×3.5		不明	石囲炉	土器埋設	縄文	晩期中葉
SA76	5.5×2.8		小判形	無		縄文	早期後葉
SA77	×		円形	地床炉		縄文	後期田柄IV群期
SA78	4.5×4.5	16.9	円形	竅穴炉		縄文	中期末葉
SA79	3.5×3.5	7.3	円形	未検出		縄文	後期田柄IV群期
SA80	5.2×5.0	24.0	円形	竅穴炉		縄文	中期末葉
SA81	3.0×3.0	5.2	円形	地床炉		縄文	前期前半
SA82	3.2×3.2	8.4	円形	未検出		縄文	後期田柄IV群期
SA83	6.1×3.3	18.6	楕円形	石囲炉		縄文	不明
SA84	×		楕円形	未検出		縄文	前期
SA85	8.0×8.0		不明	石囲炉		縄文	晩期後半

土坑類・土墳墓一覧

遺構名	規模(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
SD001	96×96	42	円形	
SD002	60×50	21	略円形	
SD003	110×77	21	楕円形	
SD004	80×60	15	楕円形	
SD005	68×49	28	小判	
SD006	40×37	27	円形	
SD007	70×32	21	小判形	
SD008	92×84	82	小判形	
SD009	84×80	53	小判形	
SD010	66×60	23	円形	
SD011	104×103	66	円形	底面に赤色顔料・鉢形土器
SD012	102×92	35	円形	
SD013	122×110	45	円形	底面に注口
SD014	74×72	20	円形	
SD015	95×95	25	円形	
SD016	116×110	20	円形	
SD017	125×110	15	円形	
SD018	57×54	17	円形	
SD019	125×120	40	円形	
SD020	132×128	32	略円形	
SD021	137×130	70	略円形	
SD022	86×64	40	楕円形	
SD023	94×66	64	楕円形	
SD024	115×113	33	円形	

遺構名	規模(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
SD025	80×58	30	長円形	
SD026	92×58	27	略円形	
SD027	222×211	70~80	略円形	
SD028	288×98	96	略円形	
SD029	114×110	24	円形	
SD030	142×122	26	小判形	
SD031	73×	15	略円形	
SD032	94×70	56	楕円形	
SD033	52×46	46	円形	
SD034	60×58	80	円形	
SD035	76×74	81	円形	
SD036	60×56	37	円形	
SD037	108×96	70	略円形	
SD038	75×	39	略円形	
SD039	124×106	18	略円形	
SD040	150×130	34	略円形	
SD041	76×62	92	略円形	
SD042	85×75	37	略円形	
SD043	73×65	46	略円形	長軸端部に小ビット
SD044	88×72	42	略円形	
SD045	74×74	34	略円形	
SD046	84×74	56	略円形	長軸端部に小ビット
SD047	96×74	80	小判形	
SD048	126×94	40	不整形	
SD049	192×136	14	不整形	
SD050	120×118	120	略円形	
SD051	130×100	36	楕円形	
SD052	128×124	22	円形	
SD053	108×104	20	円形	
SD054	120×120	23	円形	
SD055	183×130	24	楕円形	
SD056	70×70	28	円形	
SD057	68×62	54	円形	
SD058	104×84	10	円形	
SD059	150×114	10	円形	
SD060	72×72	42	円形	
SD061	80×71	21	円形	深鉢
SD062	110×95	34	略円形	
SD063	195×174	47	円形	
SD064	180×82	60	楕円形	土壇墓、西端に赤色顔料
SD065	150×76	41	楕円形	土壇墓
SD066	156×74	60	小判形	土壇墓、西端に赤色顔料
SD067	126×90	33	楕円形	土壇墓
SD068	120×76	44	楕円形	土壇墓
SD069	162×68	35	楕円形	土壇墓
SD070	152×54	36	楕円形	土壇墓
SD071	124×100	4	隅丸長方形	周溝状?、土壇墓?
SD072	×		長楕円形	土壇墓、顔料のみ検出
SD073	202×174	116	略円形	
SD074	106×106	39	略円形	
SD075	112×106	30	略円形	
SD076	183×106	32	楕円形	
SD077	212×108	5	不整楕円形	土壇墓、墓標礫、ビット
SD078	130×114	50	略円形	
SD079	240×	50	不整形	立石
SD080	130×130	30	円形	
SD081	144×86	37	不整楕円形	小ビット
SD082	228×146	33	不整形	
SD083	104×	33	不整形	
SD084	178×112	20	小判形	土壇墓、人骨、顔料、礫、ミニチュア土器
SD085	112×110	17	円形	
SD086	94×86	50	略円形	
SD087	124×86	22	隅丸長方形	土壇墓
SD088	90×74	45	略円形	
SD089	152×150	30	円形	
SD090	80×66	42	円形	
SD091	134×128	44	円形	
SD092	96×80	20	略円形	土壇墓、墓標礫
SD093	74×64	27	円形	
SD094	86×70	52	略円形	

遺構名	規模(cm)	深さ(cm)	平面形	備考
SD095	156×88	30	小判形	土墳墓
SD096	156×88	30	小判形	土墳墓、骨片
SD097	266×200	30	不整円形	
SD098	94×80	30	略円形	
SD099	175×95	40	小判形	土墳墓、ヒスイ、顔料塗布礫
SD100	50×46	32	略円形	
SD101	56×54	17	略円形	
SD102	70×70	27	円形	
SD103	188×93	11	小判形	土墳墓、人骨
SD104	114×68	79	楕円形	
SD105	108×106	61	略円形	
SD106	102×64	31	小判形	
SD107	86×86	23	円形	
SD108	99×99	5	円形	土墳墓、人骨
SD109	126×84	20	不整楕円形	
SD110	55×41	58	略円形	
SD111	116×106	31	円形	
SD112	70×60	5	円形	
SD113	116×112	29	円形	
SD114	174×162	54	略円形	
SD115	70×66	24	円形	土墳墓、人骨頭部
SD116	70×69	27	円形	
SD117	178×146	26	小判形	
SD118	66×56	23	略円形	
SD119	80×78	28	円形	
SD120	86×80	49	円形	
SD121	120×100	32	不整形	
SD122	86×68	72	略円形	
SD123	108×96	19	略円形	
SD124	110×104	77	略円形	
SD125	150×146	17	円形	
SD126	166×164	27	円形	
SD127	155×70	37	長楕円形	土墳墓、人骨2体分
SD128	94×86	40	略円形	
SD129	82×76	86	円形	
SD130	142×142	28	円形	
SD131	124×110	30	円形	
SD132	160×160	84	略円形	
SD133	164×108	16	不整形	
SD134	54×52	46	円形	
SD135	62×62	32	円形	
SD136	80×74	20	円形	
SD137	72×72	44	円形	
SD138	90×84	84	円形	
SD139	108×106	38	円形	
SD140	82×66	55	楕円形	
SD141	72×72	27	円形	
SD142	58×56	41	円形	
SD143	104×96	20	円形	
SD144	110×96	15	円形	
SD145	56×56	39	円形	
SD146	56×56	41	円形	
SD147	88×70	32	小判形	
SD148	105×70	24	楕円形	
SD149	100×50	30		
SD150	56×54	46	円形	
SD151	90×56	16	小判形	
SD152	58×56	60	円形	
SD153	94×88	44	円形	顔料塗布偏平礫
SD154	148×134	16	略円形	
SD155	84×80	36	略円形	
SD156	126×76	24	楕円形	
SD157	136×132	32	不整円形	
SD158	64×64	34	円形	
SD159	106×102	30	円形	
SD160	66×64	28	円形	
SD161	72×66	36	円形	
SD162	58×54	38	略円形	
SD163	100×100	72	円形	
SD164	150×114	64	隅丸長方形	



第170図 時期別住居跡分布図

〈引用・参考文献〉

- 安孫子昭二 1969「東北地方における縄文後期後半の土器様式」石器時代9
新谷武・岡田康博 1986「青森県平館村今津遺跡出土の鼎状三足土器」考古学雑誌 71-2 日本考古学会
磯崎正彦他 1968「十腰内遺跡」『岩木山』
伊東信雄 1976「水沢地方の弥生式土器」水沢市史 I
宇部則保 1989「青森県における7・8世紀の土師器—馬淵川下流域を中心として—」北海道考古学第25輯北海道考古学会
岡田康博 1986「十腰内第Ⅲ群・Ⅳ群・Ⅴ群土器の再検討」遺址No.3
小田野哲憲 1987「岩手県の弥生式土器編年試論」岩手県立博物館研究報告第5号岩手県立博物館
小田野哲憲 1993「東北北部縄文時代末期・弥生時代初頭の遺構と遺物」古代第95号
金子昭彦 1990「いわゆる遮光器土偶の編年について(1)」岩手考古学2
金子昭彦 1991「いわゆる遮光器土偶の編年について(2)」北奥古代文化21号
金子昭彦 1993「大洞C₂式の土偶」古代第95号
小井川和夫 1980「宮戸島田囲貝塚出土の縄文後期末・晩期初頭の土器」宮城史学No.7
後藤勝彦 1956「宮城県宮戸島里浜田囲貝塚の研究」『宮城県の地理と歴史 I』
後藤勝彦 1961「陸前宮戸島里浜田囲貝塚出土の土器について」考古学雑誌 48-1 日本考古学会
後藤勝彦 1971「宮城県七ヶ浜町二月田貝塚」塩釜高校社会部
佐々木嘉直 1989「岩手県内出土の石製円盤・土製円盤について」紀要Ⅶ岩手県埋蔵文化財センター
佐藤嘉広 1989「東北地方北部における弥生文化受容期の様相—北上川中流域の土器群の分析を中心に—」岩手県立博物館研究報告第7号岩手県立博物館
鈴木隆英 1982「縄文時代の玉類についての初歩的研究」紀要Ⅱ(財)岩手県埋蔵文化財センター
須藤 隆 1984「北上川流域における縄文晩期前葉の土器」考古学雑誌 69—3 日本考古学会
高田和徳 1985『上野遺跡』一戸町教育委員会
高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正 1982『岩手の土器』岩手県立博物館
高柳圭一 1988「仙台湾周辺の縄文時代後期末葉から晩期初頭にかけての編年動向」古代No.85
田中耕作 1991「村尻遺跡出土のねかせ状態の焼粘土塊について」北越考古学第4号北越考古学研究会
手塚 均他 1986『田柄貝塚』宮城県教育委員会
富樫泰時 1993「円筒土器文化—総論—」考古学ジャーナルNo.362 ニュー・サイエンス社
富沢威・富永健 1983「古代ガラスの化学」化学の領域
八戸市教育委員会 1988『田面木平遺跡(1)』八戸市埋蔵文化財調査報告書第20集
福田友之 1981「津軽半島今津遺跡の鼎状三足土器」青森県考古学第6号青森県考古学会
藤田等 1977「弥生時代のガラス」『慶祝松崎寿和先生六十三歳記念論文集』
藤村東男 1981「岩手県九年橋遺跡出土の円盤状石製品について」萌木16号慶應女子校
藤村東男 1989「岩手県九年橋遺跡出土の円盤状土製品について」考古学の世界
保坂三郎 1972『是川遺跡出土遺物報告書』八戸市教育委員会
村越 潔 1974『円筒土器文化』雄山閣
山崎一雄 1977「日本出土のガラスの化学的研究」『古文化財の科学』思文閣出版
青森県教育委員会 1973『亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告第14集
青森県教育委員会 1985『売場遺跡発掘調査報告書遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第93集
青森県教育委員会 1988『表館(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第120集
青森県教育委員会 1988『上尾駁(1)遺跡C地区』青森県埋蔵文化財調査報告書第113集
秋田県教育委員会 1988「寒川II遺跡」『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
岩手県埋蔵文化財センター 1980『長倉No.14遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第10集
岩手県埋蔵文化財センター 1981『長倉遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第25集
岩手県埋蔵文化財センター 1983『吠屋敷II遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第47集
岩手県埋蔵文化財センター 1983『吠屋敷III遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第48集

岩手県埋蔵文化財センター 1983 『土弓遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第 50 集
岩手県埋蔵文化財センター 1983 『叭屋敷 I a 遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第 61 集
岩手県埋蔵文化財センター 1983 『君成田IV遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第 62 集
岩手県埋蔵文化財センター 1983 『叭屋敷 I b 遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第 63 集
岩手県埋蔵文化財センター 1983 『馬場野 I 遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第 68 集
岩手県埋蔵文化財センター 1986 『駒板遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第 98 集
岩手県埋蔵文化財センター 1986 『馬場野II遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第 99 集
岩手県埋蔵文化財センター 1986 『大日向II遺跡発掘調査報告書～第 1 次調査～』岩埋文報第 100 集
岩手県埋蔵文化財センター 1987 『大堤II遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第 119 集
岩手県埋蔵文化財センター 1988 『皂角子久保IV遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第 129 集
岩手県埋蔵文化財センター 1991 『柁口 I 遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第 175 集
岩手県埋蔵文化財センター 1986 『沼久保遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第 109 集
岩手県埋蔵文化財センター 1987 『親久保 I・II遺跡発掘調査報告書』岩埋文報第 116 集
岩手県埋蔵文化財センター 1991 『上村貝塚発掘調査報告書』岩埋文報第 158 集
岩手県埋蔵文化財センター 1993 『新山権現社遺跡発掘調査報告書』岩埋分報第 188 集

付 篇

付 篇 目 次

大日向Ⅱ遺跡出土材の樹種	391
大日向Ⅱ遺跡出土の黒曜石製遺物の石材産地分析	423
大日向Ⅱ、夏本、沢内B遺跡出土の玉類の産地分析	432
大日向Ⅱ遺跡出土土器、火山灰の蛍光X線分析	444
大日向Ⅱ遺跡出土遠賀川系土器の胎土分析	447
大日向Ⅱ遺跡出土の獣骨鑑定	448
岩手県軽米町大日向Ⅱ遺跡出土の人骨の鑑定	453
大日向Ⅱ遺跡出土ガラスの分析	480
大日向Ⅱ遺跡出土遺物の成分分析	483
炉跡の粉状試料に含まれる鉱物および炭素、酸素同位体組成	487
大日向Ⅱ遺跡 自然科学分析	492

大日向Ⅱ遺跡出土材の樹種

高橋利彦(木工舎「ゆい」)

1. 試料

試料は総計488点で、縄文時代晩期のものと考えられている旧河道を埋積する礫層中から検出されたものである。試料を含む木質遺物の堆積層準は複数認められているが、それらの堆積時期に大きな時間間隙があるとは考えられていない。試料の大半は人為的な加工の有無が必ずしも明かではない分割材とされるもので、ほかに小数の木製品・加工材が含まれている。また一部の試料には焼痕が認められている。なお、試料番号には遺物台帳の登録番号をそのまま用いている。

2. 方法

剃刀の刃を用いて試料の木口・柁目・板目の3面の徒手切片を作製、ガム・クロールル(Gum chloral)で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版(図版1~11)も作製した。なお、作製したプレパラートは木工舎「ゆい」に保管されている。

3. 結果

試料は全般に劣化が進んでいるものが多かった。手元の現生標本中には該当するものが見あたらないため同定できないものもあったが、試料の劣化や変形のため確実な同定ができず類似種としたものを含め453点が以下の29種類[ここでは分類群(Taxon, 複数形Taxa)をさす。本稿では属・亜属・節・種の異なった階級の分類単位を総称している]に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、各Taxonの科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」(1989)にしたがい、一般的性質などについては「木の事典 第1巻~第17巻」(1979~1982)も参考にした。また、()のついた試料番号は類似種としたものを表している。

・カラマツ (*Larix kaempferi*) マツ科

早材部から晩材部への移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく樹脂道がある。放射組織は仮道管と柔細胞、エピセリウム細胞よりなり、柔細胞はじゅう状末端壁をもつ。分野壁孔はヒノキ形(Cupressoid)~トウヒ形(Piceoid)で3~5個。放射組織は単列、1~20細胞高のものとして樹脂道をもつ紡錘形のものがある。No.379はカラマツかトウヒ属と判断されたが、劣化が進んでいるため確定できなかった。ただしトウヒ属であるとする根拠も得られなかったため

カラマツ類似種としておく。

カラマツは本州（宮城・新潟県以南）の山地から亜高山の限られた地域に自生し、また北海道・東北地方などで広く植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工は容易ではなく、保存性は中程度である。建築・土木・器具材などの用途がある。

このように現在県内でみられるカラマツはいずれも近年植栽されたもので、自生はしないとされてきた。千島・樺太には同属のグイマツ (L. gmelinii var. japonica) が自生し、ともに本州各地の洪積世からの化石の報告があるようだが詳細は不明である。試料が推定されているように縄文時代晩期に出土地点周辺に生育していた樹木に由来する化石であるならば、その植物学的な意義は大きい。

・マツ属複雑管束亜属の一種 (Pinus subgen. Diploxylon sp.) マツ科

早材部から晩材部への移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエピセリウム細胞よりなり、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。分野壁孔は窓状。放射組織は単列、1～15細胞高のものと樹脂道をもつ紡錘状のものがある。

複雑管束亜属（いわゆる二葉末類）には、クロマツ (Pinus thunbergii)・アカマツ (P. densiflora)と琉球列島特産のリウキュウマツ (P. luchuensis) の3種がある。アカマツは北海道南部から九州に、クロマツは本州から琉球に分布するが暖地の海沿いに多く生育し、また古くから砂防林として植栽されてきた。材は重硬で強度が大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途が知られている。

・スギ (Cryptomeria japonica) スギ科

早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、分野壁孔はスギ型 (Taxodioid) で2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では現在ヒノキに次ぐ植林面積をもち、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

・イヌガヤ (Cephalotaxus harringtonia) イヌガヤ科

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は不明瞭。樹脂細胞は散在し、樹脂道はない。放射仮道管はなく、分野壁孔はトウヒ型で1～2個。放射組織は単列、1～5細胞高。仮道管

内壁にはらせん肥厚が認められる。

イヌガヤは本州（岩手県内以南）・四国・九州に分布する常緑小高木～低木で、時に植栽される。北海道西部・本州（主として日本海側）・四国の一部には、葡萄性の変種ハイヌガヤ（*C. harringtonia* var. *nana*）が分布する。イヌガヤの材はやや重硬で、器具・施作材などに用いられる。

オニグルミ（*Juglans mandshurica* var. *sachalinensis*） クルミ科

散孔材で年輪界付近でやや急に管径を減少させる。管孔は単独および2～4個が複合横断面では楕円形。道管は単穿孔をもち、壁孔は密に交互状に配列、放射組織との間では編目状となる。放射組織は同性～異性Ⅲ型、1～4細胞幅、1～40細胞高、柔組織は単接線状、周囲状および散在状。年輪界は明瞭。

根材は幹より道管径が大きく分布もまばら、放射柔細胞も幹材より大きい。

オニグルミは北海道から九州までの川沿いなどに生育する落葉高木である。材の硬さは中程度、加工は容易で狂いが少なく、保存性は低い。銃床として広く用いられるほか、各種器具・家具材などの用途も知られている。

・カバノキ属の一種（*Betula* sp.） カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に2～4個が複合または単独、横断面では楕円形。道管は階段穿孔をもち、段（bar）数は10前後、壁孔は小型で密に配列する。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織はターミナル状および短接線状。年輪界はやや不明瞭。

カバノキ属はシラカンバ（*Betula platyphlla* var. *japonica*）、ダケカンバ（*B. ermanii*）など11種が自生し、主として本州中北部・北海道の山地・高山・寒冷地などに生育する落葉高木から低木である。このうちミズメ（*B. grossa*）は日本固有種で、本州（岩手・新潟県以南）・四国・九州の山地に生育する。ミズメの材は重硬・強韌で、加工困難ではなく、各種の道具・器具材、木地・家具材などに用いられる。梓弓に使われるアズサを本種とする。見解もある。

・アサダ（*Ostrya japonica*） カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～4個が複合、横断面では楕円形。道管は単穿孔をもち、内壁にはらせん肥厚が認められる。壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性～異性Ⅲ型、1～4細胞幅、1～30細胞高。柔葬式は短接線状。年輪界はやや不明瞭。No. 334などにはらせん肥厚が認められなかったが、劣化による消失と判断し類似種とした。

アサダは北海道（中南部）・本州・四国・九州に分布する落葉高木である。材は重硬で、割

裂性は小さく、加工は困難である。器具・家具・建築材などに用いられ、強度を必要とする用途に適している。

・クマシデ属の一種 (Carpinus sp.) カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に2～8個複合する。横断面では楕円形。単穿孔および／または段数が10前後の階段穿孔をもち、壁孔は対列状～交互状に配列、放射組織との間では編目状となる。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、1～3細胞幅、1～40細胞高のものとのルーズな集合組織よりなる。柔組織は短接線状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

クマシデ属は落葉高木～低木で、サワシバ (Carpinus cordata) ・クマシデ (C. japonica) ・イワシデ (C. turzaninovii) ・イヌシデ (C. tschionoskii) ・アカシデ (C. laxiflora) の5種が自生する。サワシバは北海道・本州・四国に普通で九州には少ない。クマシデは本州・四国・九州に分布する固有種である。イワシデは本州(中国地方)・四国・九州の石灰岩地などに生育し、アカシデは北海道南部・本州・四国・九州にイヌシデは本州(岩手・新潟県以南)・四国・九州に生育する。材はやや重硬で、割裂性が小さく、曲木や木地、薪炭材などに用いられる。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (Quercus subgen. Lepidobalanus sect. prinus sp.) ブナ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では円形～楕円形、小道管は管壁はやや薄く、横断面では多角形、ともに単独。単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものとの複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で果実(いわゆるドングリ)が1年目に熟するグループで、カシワ (Quercus dentata) ・ミズナラ (Q. crispula) ・コナラ (Q. serrata) ・ナラガシワ (Q. aliena) といくつかの変・品種を含む。ミズナラ・カシワ・コナラは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州(岩手・秋田県以南)・四国・九州に分布する。このうち平野部で普通に見られるのはコナラである。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ (Q. acutissima) に次ぐ優良材である。

・クリ (Castanea crenata) ブナ科

環孔材で孔圏部は1～4列またはそれ以上、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状網目状となる。放射組織は同性、単（～2）列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。No. 064はほとんどの放射組織が2細胞幅であったため類似種とした。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、楢木や海苔粗朶などの用途が知られている。

・ケヤキ (Zelkova serrata) ニレ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線～斜方向の紋様をなす。大道管は横断面では円形～楕円形、単独、小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。導管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～10細胞幅、1～30細胞高であるが時に60細胞高を越える。しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。No. 546は変形が著しく十分観察できなかったため類似種とした。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mにも達する。材はやや重硬で、強度は大きい加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途が知られ、国産広葉樹材の中で最良のものの一つに上げられる。

・ニレ属の一種 (Ulmus sp.) ニレ科

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線～斜方向の紋様をなす。大道管は横断面では円形～楕円形、単独、小道管は管壁はやや薄く横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～6細胞幅、1～40細胞高。柔組織はターミナル状および周囲状。時に結晶細胞が認められる。年輪界は明瞭。No. 285は小道管のらせん肥厚が確認できなかったが劣化による消失と判断し類似種とした。

ニレ属にはハルニレ (Ulmus davidiana var. japonica) ・オヒヨウ (U. laciniata) ・アキニレ (U. parvifolia) の3種がある。アキニレは本州（長野・静岡県以西）・四国・九州・琉

球に、ハルニレ・オヒョウ北海道・本州・四国・九州に生育するが、ハルニレは北海道・本州北部に多く、オヒョウは北海道に多いが他の地域では少ない。ハルニレの材は中程度～やや重硬で、割裂性は小さく、加工はやや困難、保存性は少ない。器具・家具・建築材などに用いられる。

・ヤマグワ (Morus australis) クワ科

環孔材で孔圏部は1～5列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、もち塊状に複合する。大道管は横断面では楕円形～円形、単独または2～3個が複合、小道管は横断面では多角形で複合管孔となる。道管は単穿孔をもち、壁孔は密かに交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、1～6細胞幅、1～50細胞高。柔組織は周囲状～翼状および散在状。年輪界は明瞭。

ヤマグワは北海道・本州・四国・九州・琉球の山野に自生し、また植栽される落葉高木で、多くの園芸品種があり養蚕に利用されている。クワ属はヤマグワの他に4種が自生するが、西南日本に分布するケグワ (M. cathayana) を除くとその分布域はごく限られている。ヤマグワの材はやや重硬で強靱、加工はやや困難で、保存性は高い。装飾材や器具・家具材として用いられ、樹皮は和紙の原料や染料となり、果実は食用となる。

・モクレン属の一種 (Magnolia sp.) モクレン科

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は階段状～対劣状に配列、放射組織との間では網目状～階段状となる。放射組織は異性Ⅱ型、1～2細胞幅、1～40細胞高。柔組織はターミナル状。年輪界は明瞭。

モクレン属はホオノキ (Magnolia obovata) ・コブシ (M. praecocissima) など5種が自生する。ホオノキ・コブシは北海道から九州の適潤～湿性地に生育するが、コブシは西日本にはやや少ない。ホオノキの材は軽軟で、割裂性が大きく、加工は極めて容易で欠点が少なく、器具・建築・家具・建具材などのほか、指物・木地・下駄歯・刃物鞘など特殊な用途が知られている。コブシの材はホオノキに似るがやや硬く、ホオノキより劣るものとされホオノキに準じた使われ方をする。

・マタタビ属の一種 (Acyinidia sp.) マタタビ科

環孔材で孔圏部は1～3列、横断面ではやや角張った楕円形。道管は単穿孔をもつ。放射組織は異性Ⅱ型、1～5細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状および散在状。年輪界は明瞭で波打つ。

マタタビ属は落葉性の藤本でシマサルナシ (*Acoindia rufa*) ・サルナシ (*A. arguta*) ・マタタビ (*A. polygama*) ・ミヤママタタビ (*A. kolomikta*) の4種がある。シマサルナシは本州(紀伊半島・山口県)・四国・九州・琉球の沿岸山林中に、サルナシ・マタタビは北海道・本州・四国・九州の林内・林縁などに、マヤマタタビは北海道・本州(中部以北)の山中に生育する。材としての用途はなく、結束材として用いられることもあるが、果実を食用とすることではられている。

・サクラ属の一種 (*Prunus* sp.) バラ科

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または2～8個が複合、晩材部へ向かって管径を漸進させる。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～5細胞、幅、1～30細胞高。柔組織は周囲状および散在状。年輪界はやや明瞭。

サクラ属はウワミズザクラ (*Prunus grayana*) やヤマザクラ (*P. jamasakura*) など15種が自生し、多くの変・品種がある。また、モモ (*P. persica*) やスモモ (*P. salicina*) など古い時代に伝えられ栽培されているものもある。多くは落葉性の高木～低木である。このうちウワミズザクラは北海道(石狩以南)・本州・四国・九州に分布する落葉高木で、材は強靱で、木理は緻密、器具・建築・彫刻材などの用途が知られている。

・ナナカマド属の一種 (*Sirbus* sp.) バラ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独および2～5個が複合する。年輪界付近でやや急に密度を減少させる。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性～異性Ⅲ型、1～2細胞幅、1～20細胞高。柔組織は短接線状。年輪界は不明瞭。No316はらせん肥厚が確認できなかったが劣化による消失と判断し類似種とした。

ナナカマド属は羽状複葉をもつナナカマド (*Sirbys cinuxta*) の仲間と単葉をもつアザキナシ (*S. alnifolia*) の仲間に分けられ、6種が自生しいくつかの品種がある。このうち最も分布域の広いのはアズキナシで、北海道から九州まで(伊豆半島を除く)の低山地に普通に見られる。アザキナシの材は重硬・強靱で、器具・建築・家具・旋作・薪炭材などに用いられる。

・コクサギ (*Orixa japonica*) ミカン科

紋様孔材で道管は複合し火炎状に配列する。管壁は薄く、横断面では多角形、単穿孔をもち。放射組織は異性Ⅱ型、単(～2)列、1～20細胞高。柔組織はターミナル状。年輪界はやや明瞭。

コクサギは本州・四国・九州の丘陵地に生育する落葉低木で、石炭岩地では群生する。低木であるため材の用途は特に知られていない。

・キハダ (*Phellodendron amurense*) ミカン科

環孔材で孔圈部は2～5列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合する。大道管は横断面では楕円形、単独または2～3個が複合、小道管は横断面では楕円形～多角形で複合管孔となる。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状および带状。年輪界は明瞭。

キハダは北海道・本州・四国・九州の水湿地を好んで生育する落葉高木である。材はやや軽軟で、加工は容易、強度は小さいが耐湿性が高い。建築・器具・家具・薪材などの用途がある。キハダの名は内皮が黄色であることによるが、この内皮にはアルカロイドを含み胃腸薬として古くから知られ、染料としても用いられた。

・ニガキ (*Picrasma quassioides*) ニガキ科

環孔材で孔圈部は2～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。管壁は厚く、大道管は横断面では円形～角張った円形、単独、小道管は横断面では円形～多角形で単独または塊状に複合。道管は単穿孔をもち、壁孔は小型で密に交互状に配列、放射組織との間では網目状～節状となる。放射組織は同性、1～8細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状～翼状およびターミナル状で時に階層状に配列する。年輪界は明瞭。

ニガキは北海道から九州の山野に普通な落葉高木で、樹皮や材に苦みがあることからその名がついた。材の硬さは中程度で、強度はやや小さい。器具材や薪炭材などにも用いられるが、材や樹皮を健胃・駆虫・殺虫剤として利用することで知られる。

・ヌルデ (*Rhus javanicxa* var. *roxburghii*) ウルシ科

環孔材で孔圈部は2～4列またはそれ以上、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減する。大道管は管壁は薄く、横断面では楕円形、単独、小道管は横断面では楕円形～やや角張り、2～3個が複合、複合部は厚くなる。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、1～5細胞幅、1～40細胞高であるが、時に上下に連結する。柔組織は周囲状および単接線状。柔細胞は時に結晶を含む。年輪界はやや明瞭。ヌルデは北海道から琉球の山野に普通にみられる落葉小高木である。材は軽軟～中程度で、加工は容易、耐朽性が高い。器具材や施作・薪炭材として用いられるほか、杭や浮子と

しての用途も知られる。

・カエデ属の一種 (Acer sp.) カエデ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2～3個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔をもち、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列数細胞高のものから10細胞幅、100細胞高を越えるものまでである。柔組織はターミナル状、周囲状または随伴散在状、接線状。年輪界はやや不明瞭。時に結晶細胞が認められる。No. 301Bはらせん肥厚が確認できないうえに管壁が厚くなっているため類似種とした。

カエデ属はイロハモミジ (Acer palmatum) やハウチワカエデ (A. japonicum) など26種が自生し、また多くの品種があり植栽されることも多い。属としては琉球を除くほぼ全土に分布する落葉高木～低木である。一般に材はやや重硬・強靱で、加工はやや困難、保存性は中程度である。器具・家具・建築・装飾・施作・薪炭材などに用いられる。

・キチノキ (Aescylys tyrbubata) トチノキ科

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または2～3(5)個複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状～節状となり、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で階層状に配列し、肉眼では横縞のリップル・マーク (ripple mark) として認められる。柔組織はターミナル状。年輪界はやや不明瞭。根材は道管径・放射柔組織とも幹材より大きい。

トチノキは北海道(南西部)・本州・四国・九州の主として谷沿いの肥沃地に生育する落葉高木で、東北地方に多く九州には少ない。材は軽軟で、加工・乾燥が容易で耐朽性は小さい。器具・家具材や施作材・木地などに用いられる。

・ニシキギ属類似種 (cf. Euonymus sp.) ニシキギ科

散孔材であるが、年輪のはじめに環孔状に配列する。道管は小型で横断面では多角形、単独および2～3個が複合、単穿孔をもつ。放射組織は同性、単列、1～30細胞高。年輪界はやや不明瞭。道管内壁にらせん肥厚が認められないため類似種とした。

ニシキギ属は、ニシキギ (Euonymus alatus)、マサキ (E. japonicus)、マユミ (E. sieboldianus) など18種が自生する。落葉または常緑性の高木また低木ときに藤本で、属としては全土に分布し、また植栽される。丸木弓・小器具・施作材などの用途がある。

・ミズキ属の一種 (Swida sp.) ミズキ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形。道管は階段穿孔をもち、段は多数。放射組織は異性Ⅱ型、1～6細胞幅、1～40細胞高。柔組織は散在状。年輪界はやや不明瞭。No291は劣化・変形が進んでいるため類似種とした。

ミズキ属にはクマノミズキ (Swida macrophylla) とミズキ (S. controversa) がある。ミズキは北海道・本州・四国・九州の丘陵地・平地に普通にみられ、クマノミズキは本州・四国・九州に自生するいずれも落葉高木である。ミズキの材はやや重硬で、加工は容易、施作・木地器具・薪炭材などに用いられる。クマノミズキの材はミズキより硬く、細工物にはあまり適さないが、炭材としてはミズキより優れている。

・タラノキ (Aralia elata) ウコギ科

環孔材で孔圏部は3～5列、孔圏外でやや急激に管径を減じたの漸減させる。大道管は横断面では角張った楕円形、小道管は横断面では多角形で複合管孔となる。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～8細胞幅、1～50細胞高で鞘細胞 (sheath cell) が認められる。年輪界は明瞭。

タラノキは北海道・本州・四国・九州の山野にみられる落葉低木～小高木である。材は軽軟で、箱・下駄・すりこぎ・経木などに用いる。

・リョウブ (Clethra barbinervis) リョウブ科

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独でやや疎らに配列する。道管は階段穿孔をもち、段は多数、壁孔は交互状～階段状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～5細胞幅、1～30細胞高。柔組織は散在状。年輪界はやや明瞭。

リョウブは北海道 (渡島半島) ・本州・四国・九州の主として陽好地に生育する落葉小高木である。材はやや重硬で割裂しにくく、加工はやや困難、器具・施作・玩具・新炭材などに用いられる。

・エゴノキ属の一種 (Styrax sp.) エゴノキ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では楕円形、2～4個が複合または単独で配列、年輪界付近で管径を減ずる。道管は階段穿孔をもち、段数は5～10。放射組織は異性Ⅱ型、1～3細胞幅、1～30細胞高。柔組織は単接線状および散在状。年輪界はやや不明瞭。

エゴノキ属にはエゴノキ (Styrax japonica)、ハクウンボク (S. obassia)、コハクウンボク (S. shiraiana) の3種がある。エゴノキは北海道 (渡島) ・本州・四国・九州・琉球に、ハ

クウンボクは北海道（北見・石狩以南）・本州・四国・九州に、コハクウンボクは本州（栃木県以南）・四国・九州に分布する落葉高木～低木である。材はやや重硬で割裂しにくく、加工はやや容易、施作・器具・薪炭材などに用いられる。

・トネリコ属の一種 (Fraxinus sp.) モクセイ科

環孔材で孔圏部は2～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔をもち、壁孔は小型で密に交互状に配列、放射組織との間では網目状～節状となる。放射組織は同性（～異性Ⅲ型）、1～3（5）細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状、時に階層状の配列を示す。年輪界は明瞭。根材は管径の大きな散孔材で放射柔細胞も幹材より大きい。

トリネコ属はシオジ (Fraxinus platypoda)、トネリコ (F. japonica)、ケアオダミ (F. langinosa) など9種が自生する。このうちヤマトアオダモ (F. langicuspis) は本州・四国・九州に、マルバアオダモ (F. sieboldiana) ・ケアモダモは北海道・本州に・本州・四国・九州に、ヤチダモ (F. mandshurica var. japonica) は北海道・本州に、トネリコは本州（中部地方以北）に、シオジは本州（関東地方異性）・四国・九州に分布する。いずれも落葉高木である。材の性質は種によって異なるが、一般には中庸～やや重硬で、韌性があり、加工は容易で、建築・器具・家具・施作・薪炭材などの用途が知られる。

上記の他に種類不明の広葉樹が35点ある。このうちNo. 029, 343の2点は根材であり、No. 270, 273, 306の3点はつる性と思われる環孔材、残りの30点はそのほとんどが灌木性と思われる散孔材であった。

以上の同定結果を推定されている用途とともに一覧表で示す（表1）。

4. 考察

今回同定対象とされた試料の中で何らかの用途の推定されている試料は？のついたものを含めてもごく少なく、全体の95%以上の試料は用途の特定できない分割材や加工材とされているものである（表2）。

このように試料数は限られているが、木製品とされているものの用材をみると特定の樹種を選択して用いているのではないかとの印象を受ける。すなわち、小型弓にはイヌガヤが、弓？にはカバノキ属が用いられていたが、イヌガヤ製の丸木弓の出土例は各地・各時代の遺跡での

方向が散見され²⁾、上述したようにカバノキ一種であるミズメを梓弓の梓³⁾とする見解もあることからこれを弓と考えても用材としてはうなずける（ただし、遺物の用途は樹種からではなく、あくまでその形態や出土状況から判断すべきものであることは言うまでもない）。また、腕輪は2点ともマタビ属であった。つるを利用したものであろうが、類例は知られていないようである。へら状木製品とされるものは2点あり、コナラ節と不明広葉樹（散孔材）が用いられていた。コナラ節に属する樹種の材はいずれも重硬で、加工は容易ではなかったことと思うが製品の使用時の強度は期待できる。散孔材の樹種は残念ながら明らかにできなかったが、現在有用材として用いられているものの中に該当するものは見あたらない。したがって強度的にはコナラ節の材よりも劣るものとみなしてよいであろう。同じへら状木製品に分類されているものの、両者はその使用目的に違いがあったものと推測する。

一方、建築材・部材・杭とされるものも試料数は少ないが、建築材・部材では10試料で8 Taxaが、杭では3試料で3 Taxaが認められている。試料数に比して多様な樹種が用いられているうえに、その硬軟・強度など材質にも大きな違いがあり、特定の樹種を選択しているようにはみえない(表2)。試料が少ないため断定はできないものの、木製品のように厳密な樹種選択が行われずに、手近で入手可能な利用をしたことの表れかもしれない。

以上の木製品などを含め同定対象となった試料を総覧すると、クリが最も多く全体の22%余りを占めている。カエデ属・ニレ属・コナラ節がこれに次ぎ、この上位4 Taxaで全体の半数をこえる(表3)。用途の特定できない試料がほとんどであるため断定はできないが、特定の樹種のみを選択的に採取していた結果の表れではなく、ここで得られた組成はある程度当時の自然植生を反映しているものと考えている。また、沢筋や斜面下部など湿性な立地に生育するあるいは生育可能な種を含むTaxa（オニグルメ・ケヤキ・ニレ属・キガダ・カエデ属・トチノキ・トネリコ属など）の試料数が、尾根筋や斜面上部などの乾性な立地に生育するTaxa（複維管束亜属やコナラ属など）より多い（試料数最多のクリは過湿地を除けばそのどちらにも生育が可能である）。こうした樹種構成から、その供給源となった当時の森林植生として、沢筋からそれに続く斜面下部のやや湿性から適潤な地形・土壌条件下に成立する落葉広葉樹林を推定する。出土地点は現在冷温帯落葉広葉樹林帯に属しているが、当時も同様であったものと思う。この植生帯はブナによって代表されることから「ブナ帯」とも呼ばれるが、試料にブナがまったく認められなかったことから、ブナはほとんどあるいはまったく生育していなかったものと思う。クリやコナラ節が多いことから、自然植生が破壊された跡に回復した「二次林」とみることも可能であろうが、当時風倒や土砂破壊などの自然災害が頻発したり⁴⁾、人為的な伐採や火入れが大規模に行われていたとも考えにくい。出土地点の標高が約165mとブナの生育地としてはやや低いことから、気候帯・植生帯としては「ブナ帯」に属しているものの、植生とし

てはブナを欠いた森林があったものと考えたい。具体的には、丘陵地のクリ・ナラ類・シデ類・カエデ類などからなる林と、そこを開析する沢筋のオニグルミ・ケヤキ・ハルニレ・カエデ類・トチノキ・ヤチダモなどからなる林が混在していたものとする。そしてその景観・相観は、現在では農耕地の間にわずかに残存するにすぎなくなった「雑木林」的なものであったと想像する⁵⁾。

ところで、同定対象となった試料のおよそ1/3に焼痕が認められたとされている(表3)。炭化材は、言うまでもなく何らかの火を受けた樹木・林片が燃え尽きて灰になる前にその火が消えて残ったものであるが、湿潤な気候条件下にある日本では自然発火(野火)による炭化材の形成の可能性はほとんど考えられない。遺跡や人口遺物の有無に関わらず、土中から検出される炭化材は、故意・過失を問わずその形成に人間が関わっているとみなしてよいであろう。具体的には、炭や薪などの燃料(この中には各種用材を廃棄する材に燃やしてしまう二次的な利用もありうる)、加工(丸木舟や大型の容器の内部の刳出しには、刃物を用いて削り出すのではなく、表面を焦がして炭化した部分を少しずつ欠き落とす技法も用いられたことが知られている)、狩猟や農耕のため山野への火入れなどが想定できる。ただ、試料がそれらのどの目的で焼かれたものかはわからない。焼痕の認められた試料には総試料数の多いクリやカエデ属・コナラ節の数が多いが、種類ごとにその総試料数に占める焼痕の認められたものの割合(表3では炭化材占有率とした)を求めると、複雑管束亜属・クマシデ属・クリは全体値より大きく、カエデ属はやや大きく、オニグルミ・コナラ節はほぼ同じ、ケヤキ・ニレ属・トネリコ属は小さい。このように樹種による差⁶⁾がもたらされた原因については、試料の遺物としての性格が明らかにされていないこともあってわからない。

〈注〉

- 1) 軽米町の南約240kmに位置する宮城県仙台市富沢遺跡では、約2万年前の最終氷期とされる地層中からアカエゾマツ(*Picea glehnii*)・グイマツ・チョウセンゴヨウ(*Pinus koraiensis*)などの針葉樹が検出されている(仙台市教育委員会 1989)。本州では唯一早池峰山に分布するアカエゾマツはこの時代の生き残り(遺存種)と考えられているが、グイマツ・チョウセンゴヨウの原生種は県内には分布しない。また、今から2500年ほど前とされる縄文時代晩期は、寿命・世代時間が長い樹木にとってはごく近い過去にすぎないといえよう。
- 2) 筆者の知る限りでは、岩手県はもちろん東北地方での報告例はないようである。
- 3) 青森県八戸市是川遺跡の縄文晩期とされる試料の中にアズサ製の継木弓の出土が報告されている(故亘理 俊次氏の同定による)ようであるが、筆者の手元に原典がないため確認できない(伊東ほか 1987によった)。

4) 確かに試料を狭在する礫層の堆積をもたらした程度の土石流はそれほど稀ではなく発生していたと考えられているから、そうした自然災害による森林破壊がなかったとは言いきれない。ただそうした破壊がまとまった面積 (haやkm²単位) で優先樹種の交替をもたらすほどのものだったとは考えにくい。

5) 滝沢村湯舟遺跡の縄文時代後・晩期の土器を伴出する層準から検出された自然流木は、コナラ節 (報文ではナラ類と表記されている) 8点・クリ3点・不明広葉樹1点に同定されている (松田 1986)。ここで推定したような植生景観は軽米町周辺だけではなく広く県中央部まで広がっていた可能性も考えられ、今後の検討課題として留意したい。

6) 完全な炭化材は今回の同定対象から除外されているため表3に示した占有率若干変動する可能性もあるが、大勢は変わらないと思う。

引用文献

平井 信二 1979～1982「木の事典 第1巻～第17巻」、かなえ書房。

伊東 隆夫・山口 和穂・林 昭三・布谷 知夫・島地 謙 1987 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途、「木材研究・資料」、第23号、42-210。

松田 隆嗣 1986 湯舟沢遺跡より出土した自然流木の樹種について、「滝沢村文化財報告書 第2集 湯舟沢遺跡 (第2分冊)」、滝沢村教育委員会・(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター・トーメン住宅開発株式会社、873-876。

佐竹 義輔・原 寛・亘理 俊次・富成 忠夫(編) 1989 「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」、平凡社、321・305pp。

仙台市教育委員会 1989「仙台市文化財パンフレット第15集 タイムトラベル 富沢を探るー富沢遺跡第30次調査のあらましー」、14pp。

番号	種別	種名	番号	種別	種名
001	分割材	クリ	064	分割材	クリ類似種
002	建築部材	スギ	065	分割材	ナナカマド属の一種
003		広葉樹(散孔材)	067	分割材	クリ
004	分割材	ニレ属の一種	069	分割材	モクレン属の一種
006		リョウブ	070	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
009		クリ	071	分割材	オニグルミ
010	建築部材	ニレ属の一種	073	分割材	カエデ属の一種
011	杭?	オニグルミ	074	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
012		コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	075	分割材	オニグルミ
013	削り出し棒	カエデ属の一種	077	分割材	クリ
014		イヌガヤ	078	分割材	クリ
015	先端加工材	サクラ属の一種	079A	分割材	トチノキ(根)
016		ニレ属の一種	079B	分割材	オニグルミ
017	削りかす	オニグルミ	080	分割材	クリ
019	加工材	ニガキ	081	建築材	クリ
020	建築材	オニグルミ	082	分割材	クリ
021	建築部材	クリ	083	分割材	オニグルミ
022	杭?	トチノキ(根)	084	建築材?	トネリコ属の一種
023	分割材	カエデ属の一種	085	分割材	クリ
024	建築部材	クリ	086	角材	クリ
025		コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	087	分割材	オニグルミ
027		広葉樹(散孔材)	088	分割材	カエデ属の一種
028		リョウブ	090	分割材	カエデ属の一種
029		広葉樹(根)	091	分割材	クリ
030	弓?	カバノキ属の一種	092	分割材	クリ
031	部材?	ニガキ	093	分割材	クリ
032	浮彫り	広葉樹(散孔材)	094	分割材	マツ属複雑維管束亜属の一種
033	木端	カエデ属の一種	095		トネリコ属の一種
034	分割材	クリ	096	分割材	クリ
035		広葉樹(散孔材)	097	分割材	クリ
036	角材	クリ	098	先端加工材	ヤマグワ
037	分割材	ニレ属の一種	099	分割材	クリ
038		ニガキ	100	分割材	カエデ属の一種
041	不明製品	キハダ	101	分割材	ケヤキ
043	腕輪	マタタビ属の一種	103	分割材	クリ
046	部材	リョウブ	104	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
048	腕輪	マタタビ属の一種	105	分割材	クリ
050	へら状製品	広葉樹(散孔材)	106	分割材	クリ
051	へら状製品	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	166		カエデ属の一種
052	小型弓	イヌガヤ	167	先端加工材	モクレン属の一種
053	不明製品	カエデ属の一種	168	分割材	広葉樹(散孔材)
054	分割材	トネリコ属の一種	169	分割材	クリ
055	分割材	コクサギ	170	分割材	クリ
056	加工材	トネリコ属の一種	171	分割材	カエデ属の一種
057	分割材	オニグルミ	172	分割材	カエデ属の一種
058	分割材	カエデ属の一種	173	分割材	カエデ属の一種
059	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	174	分割材	ヌルデ
060	分割材	クリ	175	分割材	カエデ属の一種
061	分割材	オニグルミ	176	分割材	ニレ属の一種
062	加工材	広葉樹(散孔材)	177		マツ属複雑維管束亜属の一種
063	分割材	カエデ属の一種	179		ニレ属の一種

表1-1 出土材の樹種

番号	種別	種名	番号	種別	種名
180	削りかす	広葉樹（散孔材）	235	分割材	ミズキ属の一種
181	分割材	オニグルミ	236	分割材	タラノキ
182	分割材	カエデ属の一種	237	分割材	ニシキギ属類似種
183	分割材	ヤマグワ	238	分割材	ニレ属の一種
184	分割材	クリ	239	削りかす	クマシデ属の一種
185	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	240	分割材	クリ
186	分割材	マツ属複維管束亜属の一種	241	分割材	クリ
187	分割材	オニグルミ	242		ニレ属の一種
188	分割材	オニグルミ	243	分割材	トチノキ
189	分割材	ヌルデ	244	分割材	ニレ属の一種
190	分割材	カエデ属の一種	245	加工材	広葉樹（散孔材）
191	分割材	カエデ属の一種	246	角材	クリ
192	分割材	オニグルミ	247		ミズキ属の一種
193	分割材	カエデ属の一種	248	分割材	ミズキ属の一種
194	分割材	広葉樹（散孔材）	249		ニレ属の一種
195	分割材	クリ	250	分割材	クマシデ属の一種
196	分割材	クリ	251		ニレ属の一種
197	分割材	クリ	252		ミズキ属の一種
198	分割材	カエデ属の一種	253	分割材	マツ属複維管束亜属の一種
199	分割材	カエデ属の一種	254	分割材	広葉樹（散孔材）
200	分割材	クリ	255	分割材	マツ属複維管束亜属の一種
201	分割材	カエデ属の一種	256	分割材	クリ
202	分割材	クリ	257	分割材	広葉樹（散孔材）
203	分割材	クリ	258	分割材	ニレ属の一種
204	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	259	分割材	クリ
205	分割材	広葉樹（散孔材）	260	分割材	クマシデ属の一種
206	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	261	分割材	クリ
207	分割材	オニグルミ	262	分割材	クマシデ属の一種
208	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	263	分割材	クリ
210	分割材	広葉樹（散孔材）	264	分割材	ニレ属の一種
211	分割材	クリ	265	削りかす	クリ
212	分割材	オニグルミ	266	分割材	クリ
213	分割材	コクサギ	269	角材	クリ
214	分割材	ヌルデ	270		広葉樹（散孔材）
215	分割材	アサダ	272	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
216	分割材	カエデ属の一種	273	分割材	広葉樹（散孔材）
217	削りかす	クリ	274	分割材	ヤマグワ
218	分割材	オニグルミ	275	分割材	クマシデ属の一種
219	分割材	クマシデ属の一種	277		ヤマグワ
221	分割材	クリ	278	分割材	ニレ属の一種
224	先端加工材	ヤマグワ	279	分割材	広葉樹（散孔材）
225	分割材	クリ	280	分割材	トネリコ属の一種
226		カラマツ	281	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
227	分割材	クリ	282	分割材	カエデ属の一種
228	分割材	クリ	283	先端加工材	クマシデ属の一種
229	分割材	ニレ属の一種	284	分割材	広葉樹（散孔材）
230	削りかす	トネリコ属の一種	285	分割材	ニレ属の一種
231	削りかす	アサダ	287	分割材	ケヤキ
232	分割材	エゴノキの一種	288	分割材	ヤマグワ
233	分割材	クリ	289	分割材	アサダ
234	分割材	ヌルデ	290	分割材	オニグルミ

表 1 - 2 出土材の樹種

番号	種別	種名	番号	種別	種名
291	分割材	ミズキ属類似種	346	分割材	トネリコ属の一種
292	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	347	分割材	カエデ属の一種
295	分割材	ヤマグワ	348	分割材	サクラ属の一種
297	分割材	広葉樹(散孔材)	349		クリ
298	先端加工材	リョウブ	350		カエデ属の一種
300	分割材	マツ属複維管束亜属の一種	351		オニグルミ
301A	分割材	サクラ属の一種	352	分割材	クリ
301B	分割材	カエデ属の一種	353	分割材	アサダ類似種
302	分割材	クリ	355	分割材	カエデ属の一種
303	分割材	トネリコ属の一種	357	分割材	クリ
304	分割材	マツ属複維管束亜属の一種	358	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
306	分割材	広葉樹(環孔材)	359	分割材	トラノキ
307	分割材	オニグルミ	360	分割材	トリノキ
308	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	362	分割材	クマシデ属の一種
309	分割材	クリ	363	分割材	カエデ属の一種
310	分割材	クリ	364	分割材	ケヤキ
311	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	366	分割材	広葉樹(散孔材)
312	分割材	トネリコ属の一種	367	分割材	トネリコ属の一種
313	加工材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	368	分割材	サクラ属の一種
314	分割材	ヤマグワ	369	削りかす	クマシデ属の一種
315	分割材	クリ	370	削りかす	クマシデ属の一種
316	分割材	ナナカマド属類似種	371	分割材	広葉樹(散孔材)
317	分割材	クリ	372	分割材	ヤマグワ
318		トネリコ属の一種	373	分割材	ニレ属の一種
319	分割材	カエデ属の一種	374	分割材	クリ
320	分割材	カエデ属の一種	375	加工材	ニレ属の一種
321	分割材	カラマツ	376	分割材	クリ
323	分割材	カエデ属の一種	378	分割材	ニレ属の一種
324	分割材	クリ	379	分割材	カラマツ類似種
325	分割材	オニグルミ	380	分割材	カエデ属の一種
326	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	381	分割材	ケヤキ
327	分割材	クリ	382		ニガキ
328	分割材	クリ	383	分割材	ニガキ
329	分割材	クリ	384	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
330	分割材	クリ	385	分割材	クマシデ属の一種
331	分割材	クリ	386	分割材	クリ
332	分割材	ニレ属の一種	387	分割材	クマシデ属の一種
333	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	388	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
334	分割材	アサダ類似種	389	分割材	ケヤキ
335	分割材	カエデ属の一種	390	分割材	カエデ属の一種
336	分割材	クリ	392	分割材	クリ
337	分割材	カエデ属の一種	393	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
338	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	394	分割材	カエデ属の一種
339	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	396	分割材	トネリコ属の一種
340	分割材	カエデ属の一種	398	分割材	ニレ属の一種
341	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	399	分割材	ニレ属の一種
342	分割材	ヤマグワ	400	分割材	ケヤキ
343	分割材	広葉樹(根)	401	分割材	クマシデ属の一種
344	分割材	カエデ属の一種	402	分割材	トネリコ属の一種(根)
345A	分割材	アサダ類似種	403	分割材	クマシデ属の一種
345B	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	404	分割材	クリ

表1-3 出土材の樹種

番号	種別	種名	番号	種別	種名
405	分割材	カエデ属の一種	461	分割材	カエデ属の一種
406	分割材	ニレ属の一種	462	分割材	クリ
407	分割材	ニレ属の一種	464	分割材	トネリコ属の一種
408	分割材	クリ	465	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
409	分割材	クリ	466	分割材	オニグルミ
410	削りかす	トネリコ属の一種	467	分割材	ニレ属の一種
411	分割材	ヤマグワ	468	分割材	カエデ属の一種
412	分割材	クリ	469	分割材	カエデ属の一種
413	分割材	ニレ属の一種	470	分割材	クマシデ属の一種
414	分割材	クリ	471	分割材	トネリコ属の一種
415	分割材	イヌガヤ	472	分割材	ニガキ
416	分割材	ニレ属の一種	474	分割材	カエデ属の一種
417	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	475	分割材	ニレ属の一種
418		ニレ属の一種	476	分割材	広葉樹（散孔材）
419	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	478	分割材	オニグルミ
420	分割材	クリ	479	分割材	クリ
421	角材	クリ	480	分割材	クリ
422		クリ	481	分割材	クリ
423	分割材	カエデ属の一種	483		カエデ属の一種
424	分割材	カエデ属の一種	484	分割材	広葉樹（散孔材）
425	分割材	カエデ属の一種	485		クリ
426		クリ	486	分割材	ニレ属の一種
429	分割材	ミズキ属の一種	487	分割材	クリ
430	分割材	クマシデ属の一種	489	分割材	トチノキ
431	分割材	クリ	490		トチノキ
432	分割材	クリ	491	分割材	クリ
433	先端加工材	ニレ属の一種	492	分割材	ニレ属の一種
434	分割材	クマシデ属の一種	493	削りかす	クリ
435	分割材	クリ	494		ニレ属の一種
436	削りかす	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	495	分割材	トネリコ属の一種
437	分割材	クリ	499A	分割材	クリ
438	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	499B	分割材	オニグルミ
439	分割材	カエデ属の一種	500		コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
440	分割材	アサダ	501	分割材	カエデ属の一種
441	分割材	カエデ属の一種	502		カラマツ
442	角材？	クリ	503	分割材	カエデ属の一種
443	分割材	クマシデ属の一種	504		ケヤキ
444	分割材	ニレ属の一種	505	角材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
445	分割材	クリ	506	分割材	クリ
446	分割材	カエデ属の一種	507	分割材	ナナカマド属の一種
447	分割材	ヤマグワ	508		クリ
448	分割材	ニレ属の一種	509	分割材	ニレ属の一種
450		ニレ属の一種	510	分割材	ミズキ属の一種
451	分割材	オニグルミ（根）	512	分割材	ニガキ
452		トチノキ	513	分割材	ニレ属の一種
453	分割材	広葉樹（散孔材）	514	分割材	カエデ属の一種
455		コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	515	分割材	ニレ属の一種
456	分割材	クリ	516	角材	カエデ属の一種
458		キハダ	517	分割材	広葉樹（散孔材）
459	分割材	クリ	518	分割材	ニガキ
460	分割材	ニレ属の一種	520	分割材	カラマツ

表1-4 出土材の樹種

番号	種別	種名	番号	種別	種名
521	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	607	分割材	ナナカマド属の一種
522	分割材	カラマツ	609	分割材	クマシデ属の一種
523	分割材	クリ	610		広葉樹（散孔材）
524	分割材	カエデ属の一種	611	分割材	ナナカマド属の一種
525	分割材	ニレ属の一種	612	分割材	広葉樹（散孔材）
526	分割材	クリ	613	分割材	広葉樹（散孔材）
527	分割材	オニグルミ	614	分割材	ニレ属の一種
529	分割材	広葉樹（散孔材）	616	分割材	クリ
530	分割材	オニグルミ	618	分割材	ミズキ属の一種
531	分割材	トネリコ属の一種	619	分割材	ヤマグワ
532		ニガキ	621	分割材	カエデ属の一種
533	分割材	ニガキ	623	分割材	カエデ属の一種
534	分割材	マツ属複維管束亜属の一種	624	分割材	ナナカマド属の一種
535	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	625	分割材	ナナカマド属の一種
536		コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	626	分割材	カエデ属の一種
537		コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	627		ニレ属の一種
538		カエデ属の一種	628	分割材	オニグルミ
539	分割材	ニレ属の一種	629	角材	クリ
540		コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	631	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
541	杭	ニガキ	632	分割材	オニグルミ
542	分割材	ケヤキ	633	分割材	タラノキ
543		コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	638	加工材	ケヤキ
544		クリ	640	分割材	マツ属複維管束亜属の一種
545	分割材	カエデ属の一種	641	分割材	クリ
546	分割材	ケヤキ類似種	642		クラマツ
547	分割材	広葉樹（散孔材）	643	分割材	クマシデ属の一種
548	分割材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	644	分割材	広葉樹（散孔材）
549	分割材	カエデ属の一種	645	分割材	クリ
550	建築部材？	ケヤキ	647		マツ属複維管束亜属の一種
551		モクレン属の一種			
556		クリ			
557		ニレ属の一種			
558	分割材	キハダ			
561	分割材	カエデ属の一種			
562	分割材	カエデ属の一種			
564	分割材	ヤマグワ			
565	分割材	カエデ属の一種			
592	分割材	アサダ類似種			
593	分割材	クリ			
594	分割材	リョウブ			
595	角材	トネリコ属の一種			
596		コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種			
597		ニレ属の一種			
598		カエデ属の一種			
599	削りかす	トチノキ			
600	分割材	クリ			
601	分割材	クリ			
602	分割材	マツ属複維管束亜属の一種			
603	分割材	ニレ属の一種			
605	分割材	広葉樹（散孔材）			
606		クマシデ属の一種			

表1-5 出土材の樹種

種類/用途	建築材	製品	杭	分割材など	合計
カラマツ				7(1)	7(1)
複雑管束亜属				11(6)	11(6)
スギ	1				1
イヌガヤ		1			1
オニグルミ	1		1	27(9)	29(9)
カバノキ属		1			1
アサダ				8(3)	8(3)
クマシデ属				21(11)	21(11)
コナラ節		1		43(14)	44(14)
クリ	3(2)			106(43)	109(45)
ケヤキ	1(1)			10(1)	11(2)
ニレ属	1			46(7)	47(7)
ヤマグワ				14(4)	14(4)
モクレン属				3(2)	3(2)
マタタビ属		2			2
サクラ属				4(3)	4(3)
ナナカマド属					7
コクサギ					2
キハダ		1			2
ニガキ	1		1	9(3)	11(3)
ヌルデ					4
カエデ属		1			4
トチノキ			1	65(23)	66(23)
ニシキギ属類似種				7(2)	8(2)
ミズキ属					1
タラノキ				8(3)	8(3)
リョウブ	1			3(2)	3(2)
エゴノキ属					4
トネリコ属	1				1
不明広葉樹		1		18(3)	19(3)
				34(6)	35(6)
合計	10(3)	8	3	467(146)	488(149)

表2 大日向Ⅱ遺跡試料の用途別樹種構成

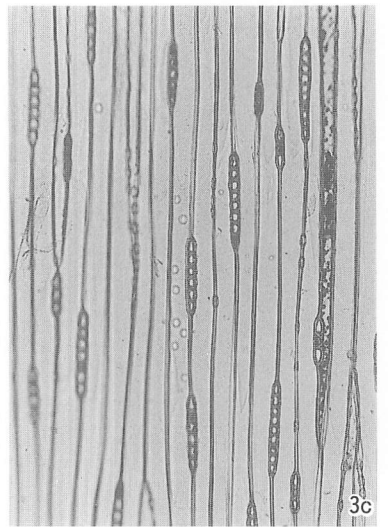
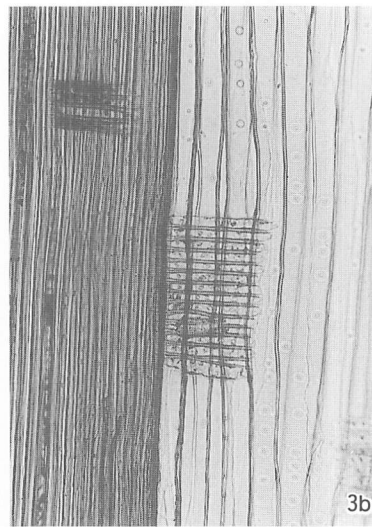
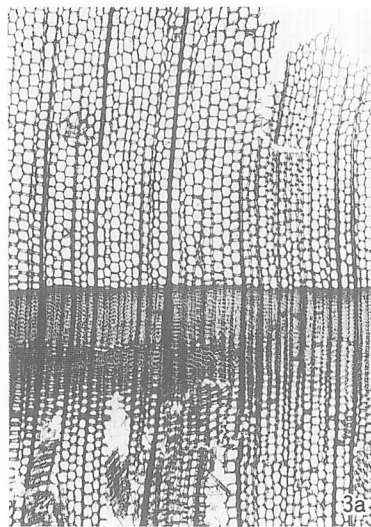
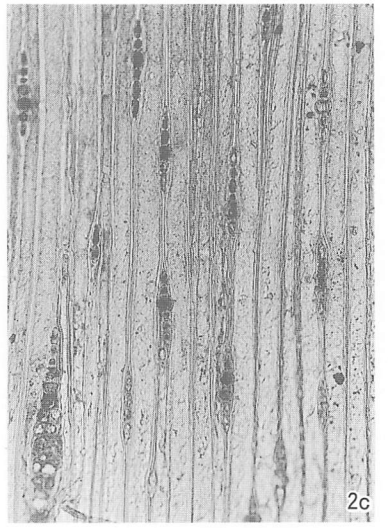
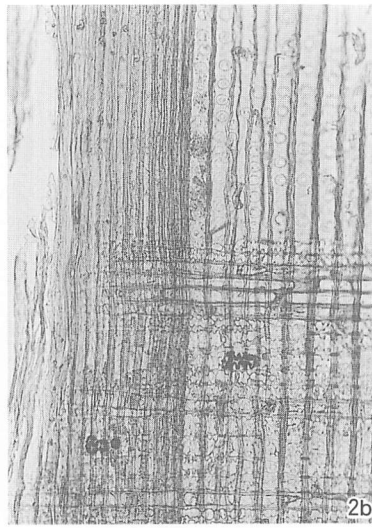
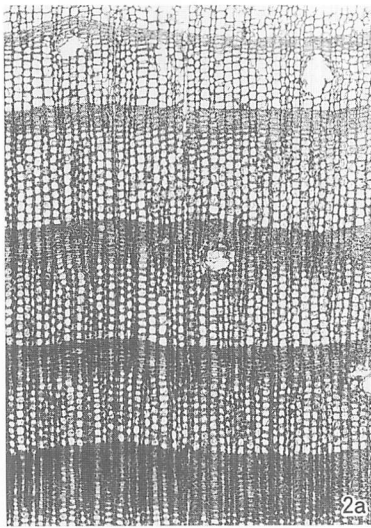
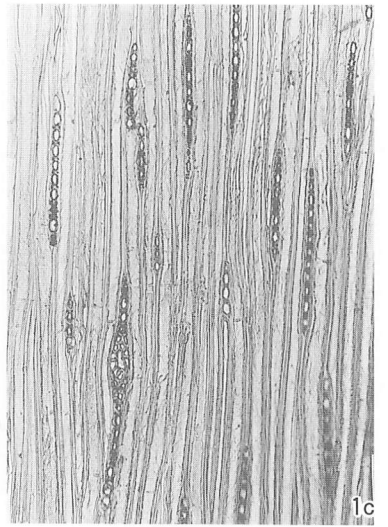
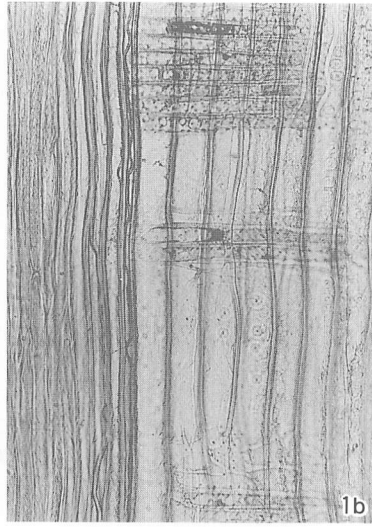
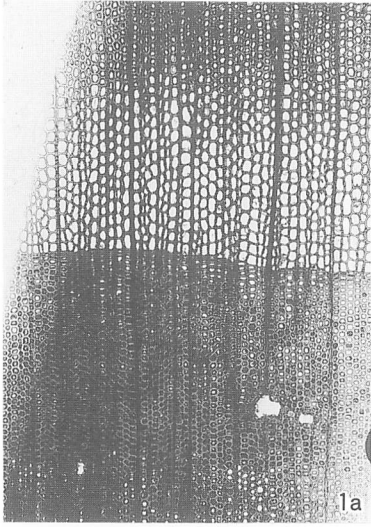
()内は焼痕の認められたとされるものの数。類似種としたものも各種類に含め、?のついたものもそれぞれの用途に含めた。

種類	総試料数(%)	炭化材数(%)	炭化材占有率
複雑管束亜属	11(2.3)	6(4.0)	0.55
他の針葉樹類	11(2.3)	1(0.7)	0.09
オニグルミ	29(5.9)	9(6.0)	0.31
クマシデ属	21(4.3)	11(7.4)	0.52
コナラ節	44(9.0)	14(9.4)	0.32
クリ	109(22.3)	45(30.2)	0.41
ケヤキ	11(2.3)	2(1.3)	0.18
ニレ属	47(9.6)	7(4.7)	0.15
ヤマグワ	14(2.9)	4(2.7)	0.29
ニガキ	11(2.3)	3(2.0)	0.27
カエデ属	66(13.5)	23(15.4)	0.35
トネリコ属	19(3.9)	3(2.0)	0.16
他の広葉樹類	95(19.5)	21(14.1)	0.22
合計	488(100.1)	149(99.9)	0.31

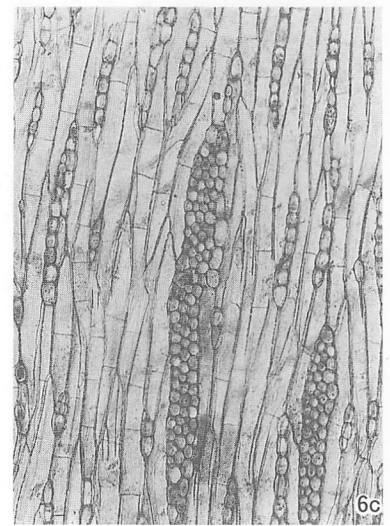
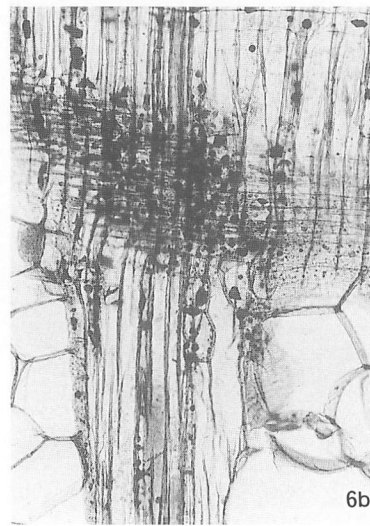
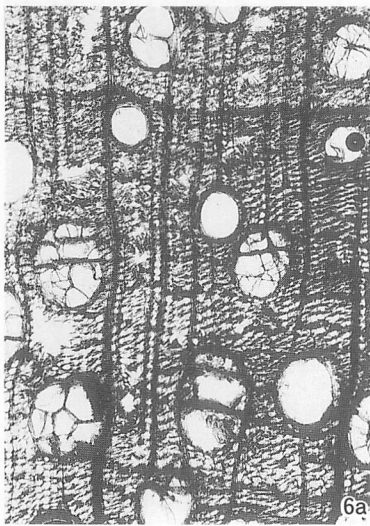
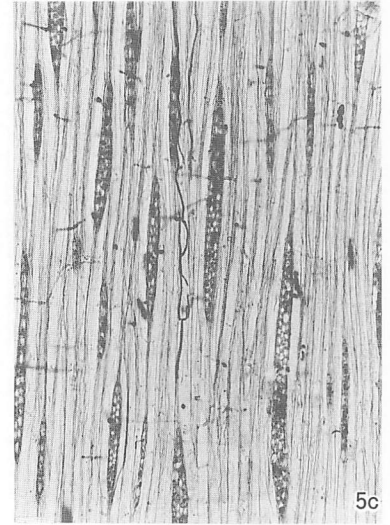
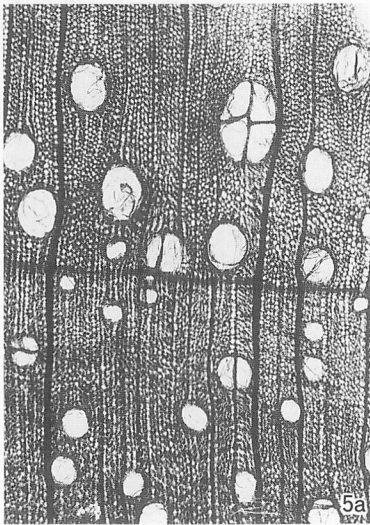
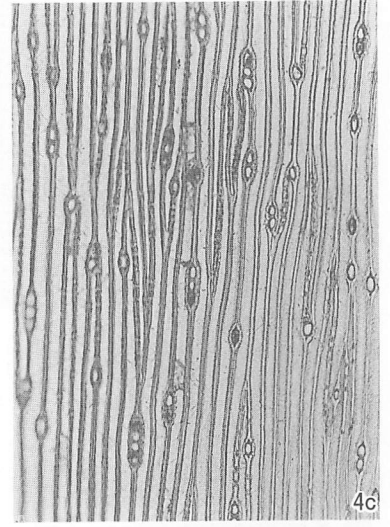
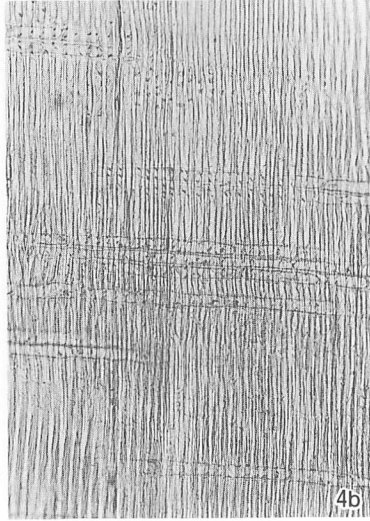
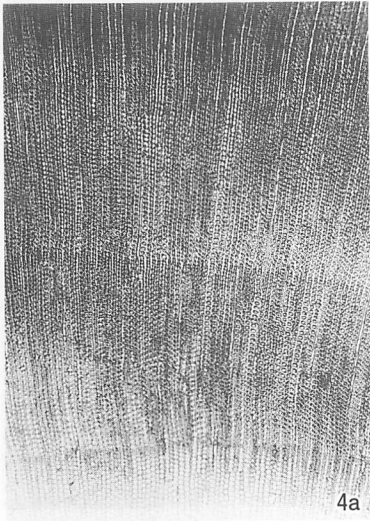
表3 大日向Ⅱ遺跡試料のうち主な樹種の試料数と炭化材

(焼痕の認められたとされる)数および樹種ごとの炭化材の占める割合。その他に一括したTaxaについては表2を参照のこと。

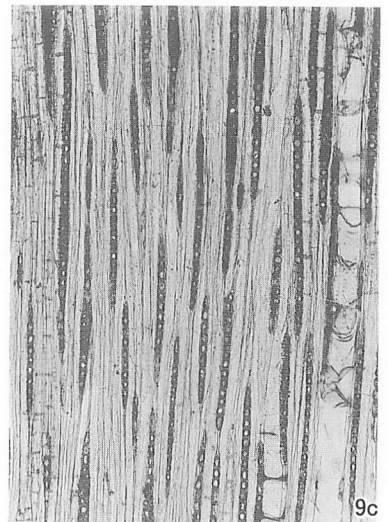
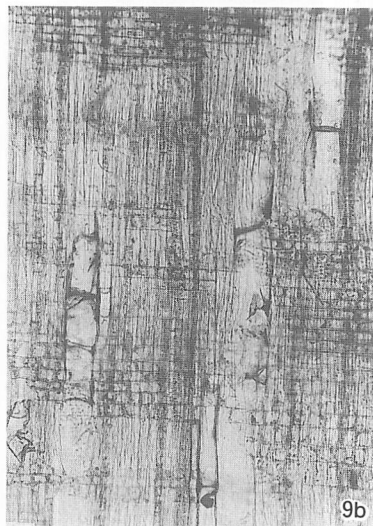
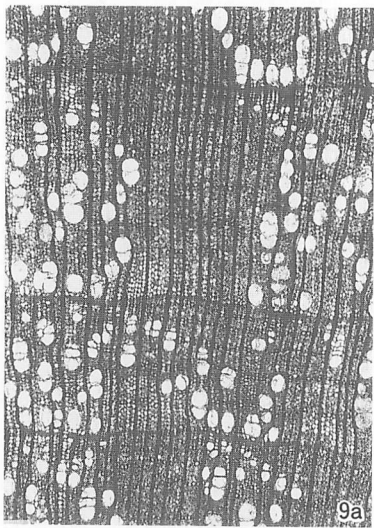
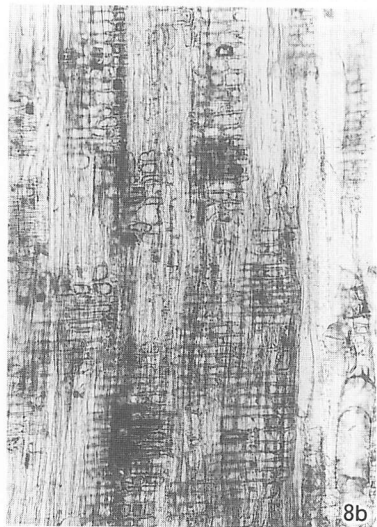
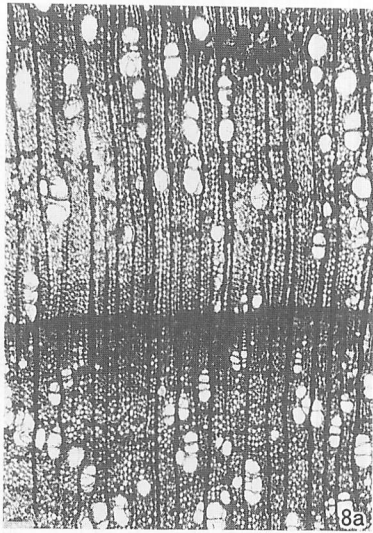
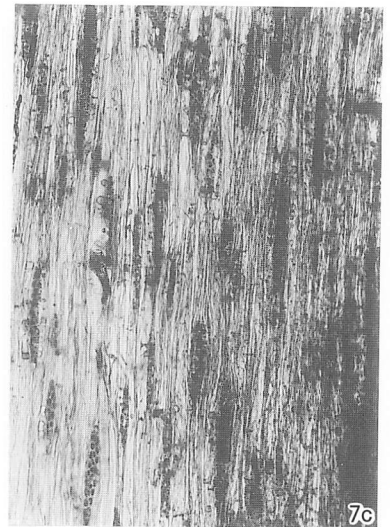
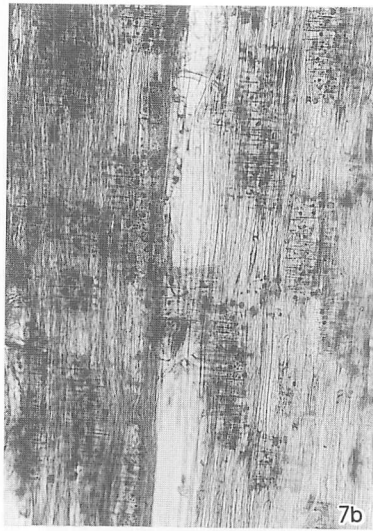
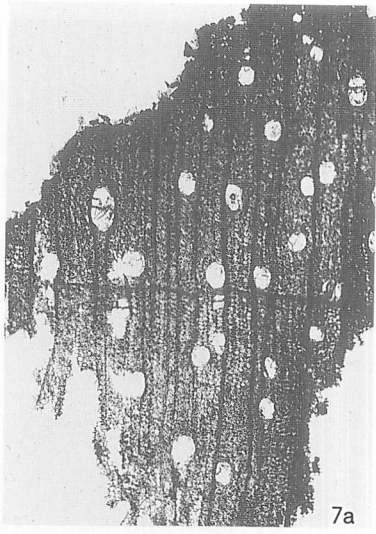
写 真 图 版



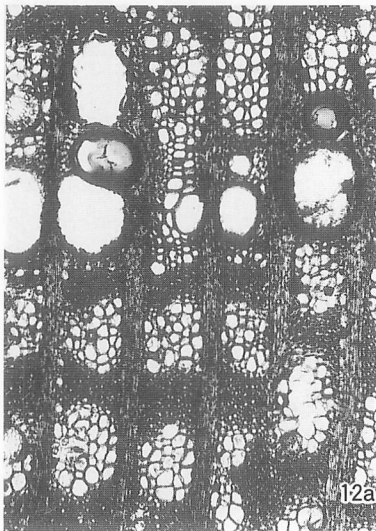
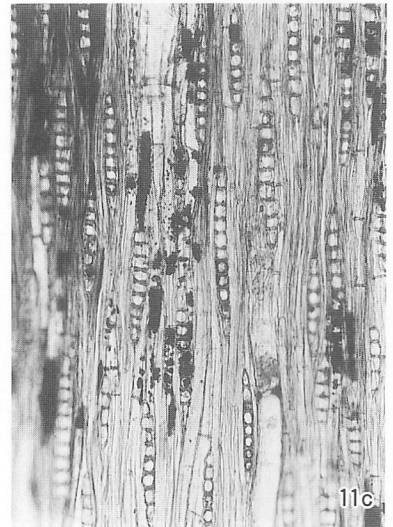
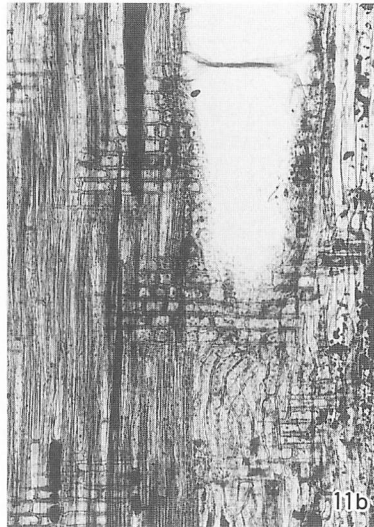
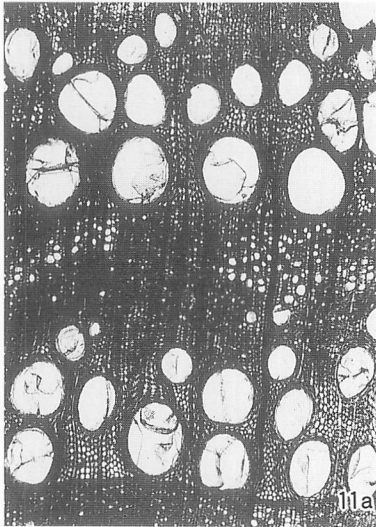
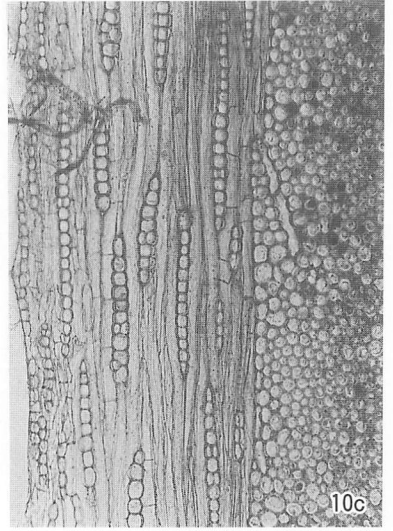
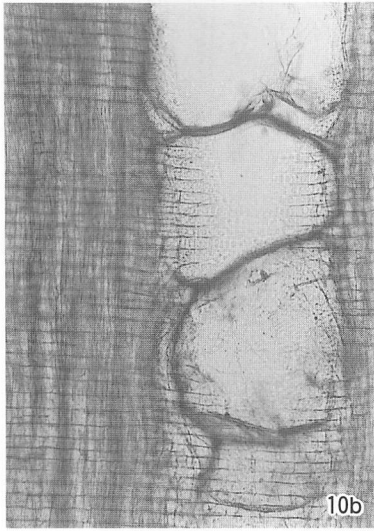
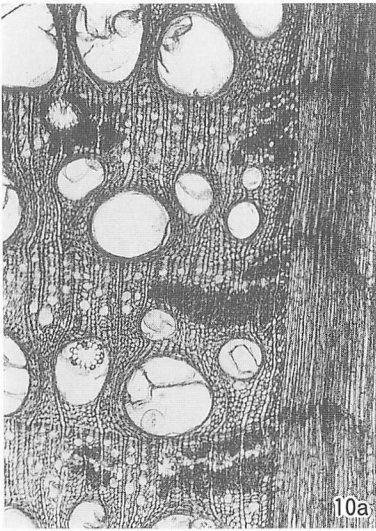
写真図版(1)



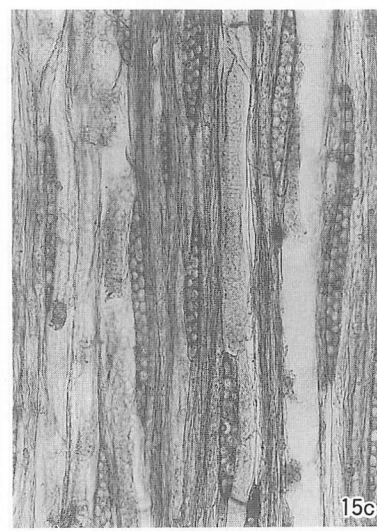
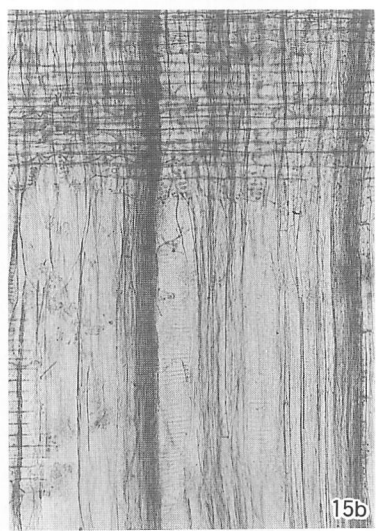
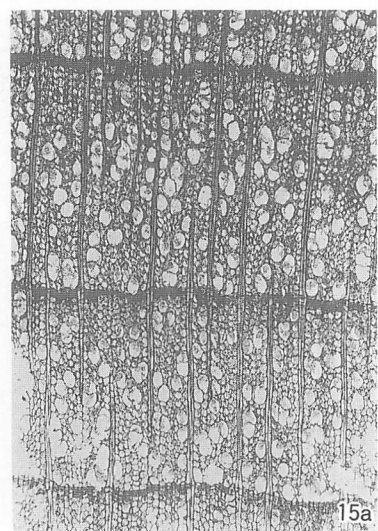
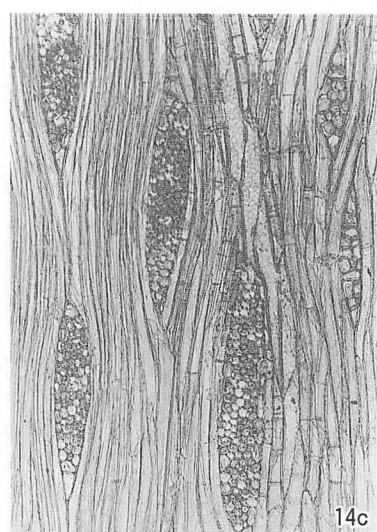
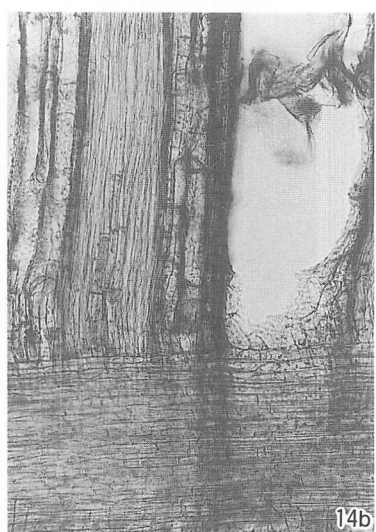
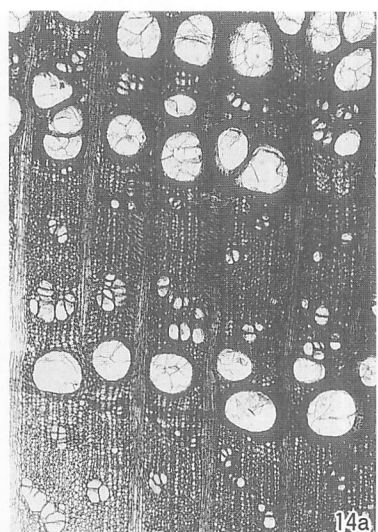
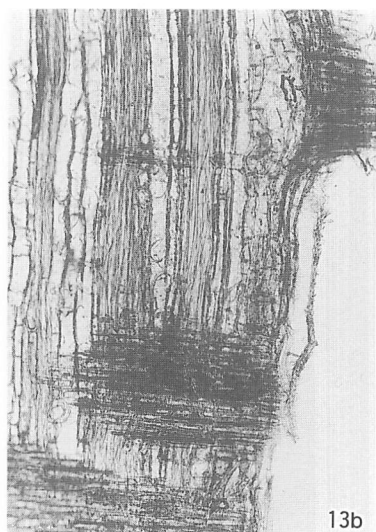
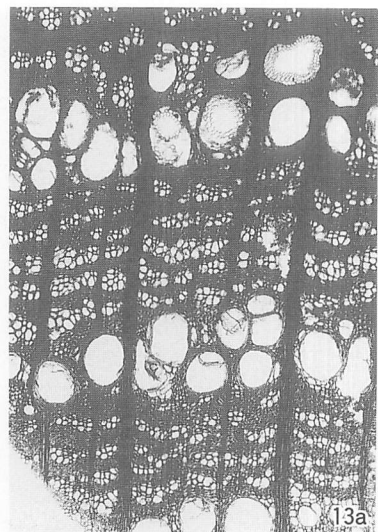
写真图版(2)



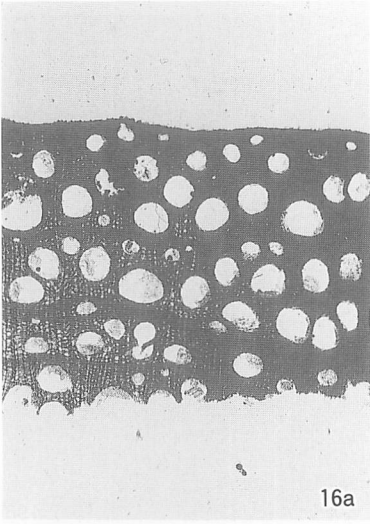
写真図版(3)



写真図版(4)



写真図版(5)



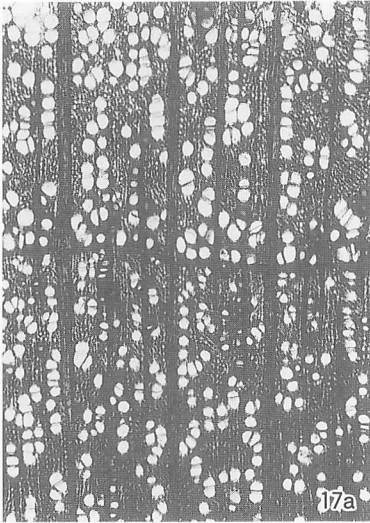
16a



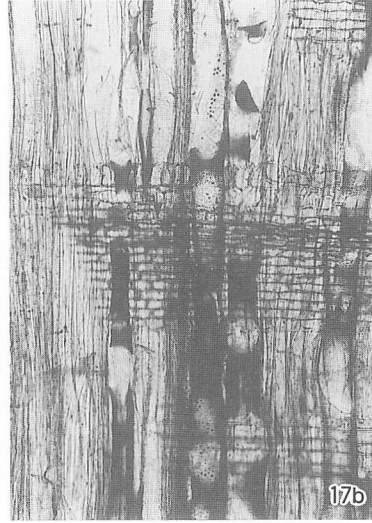
16b



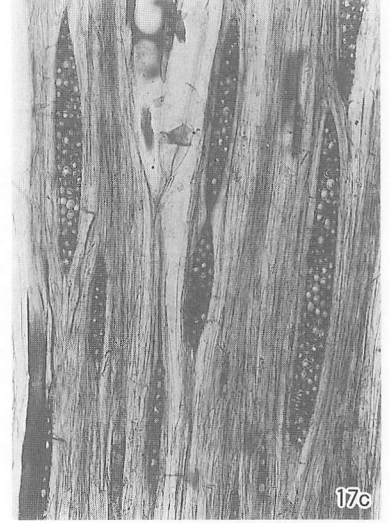
16c



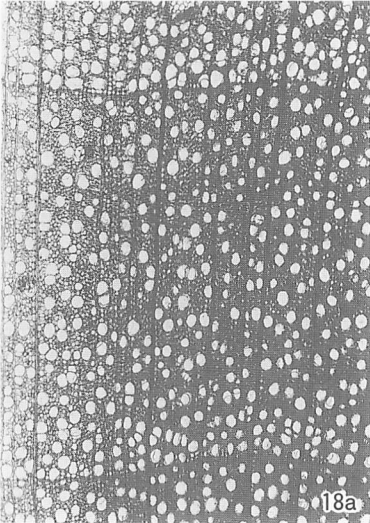
17a



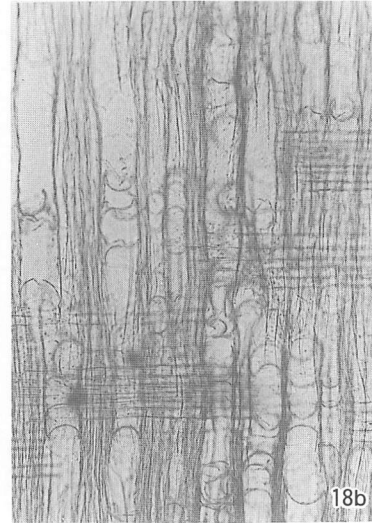
17b



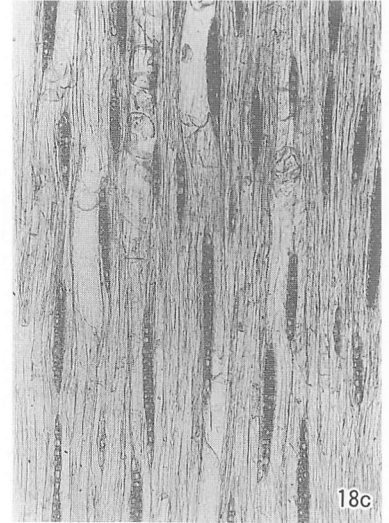
17c



18a

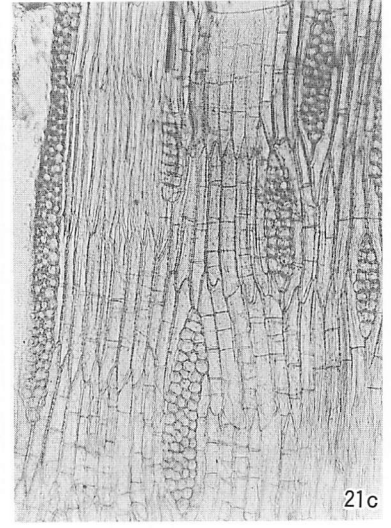
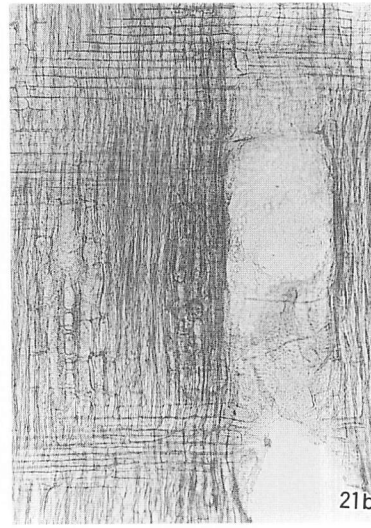
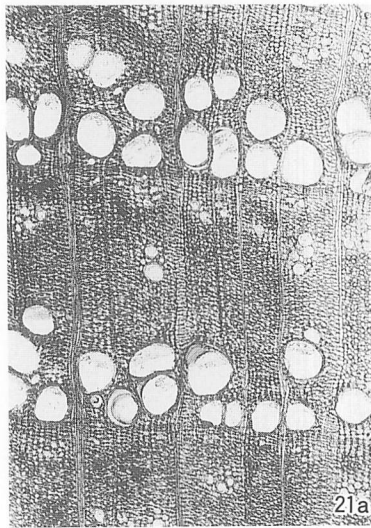
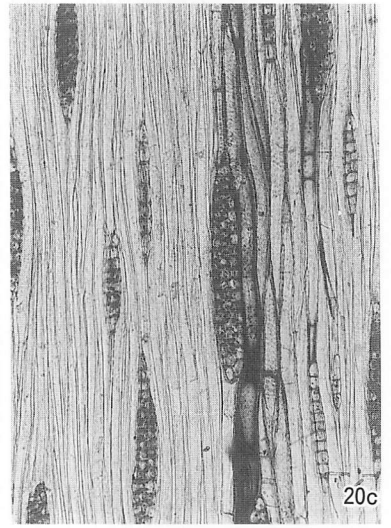
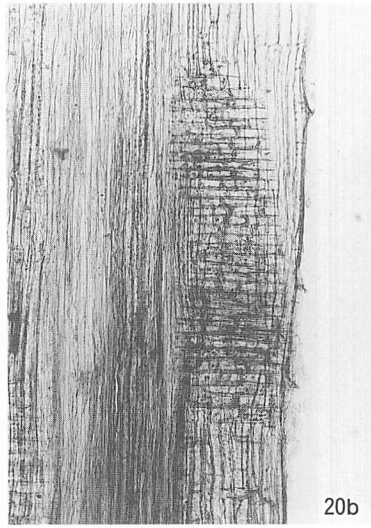
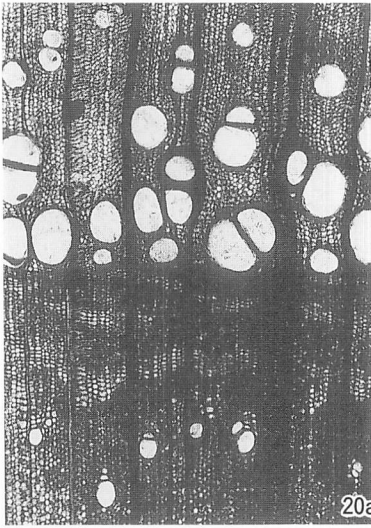
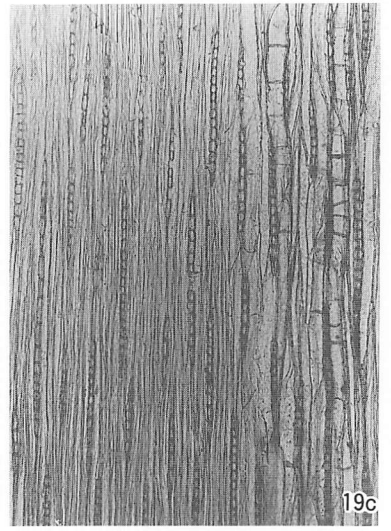
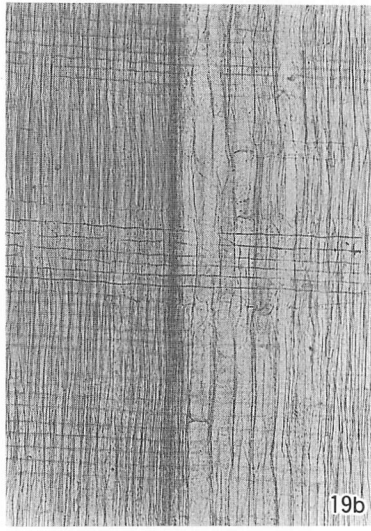
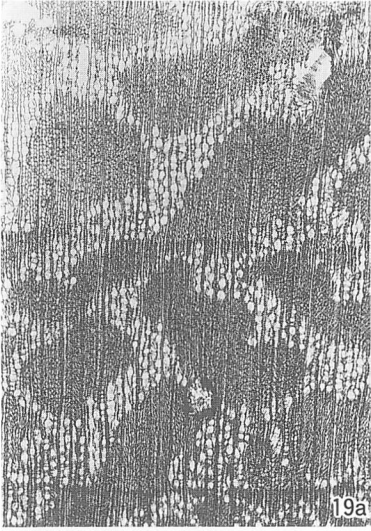


18b

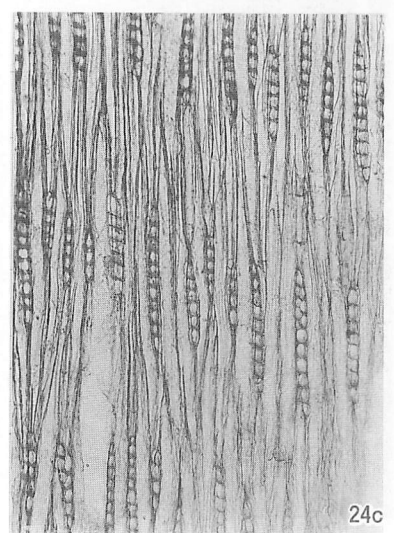
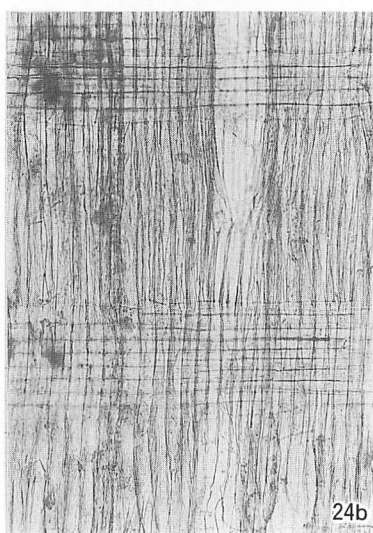
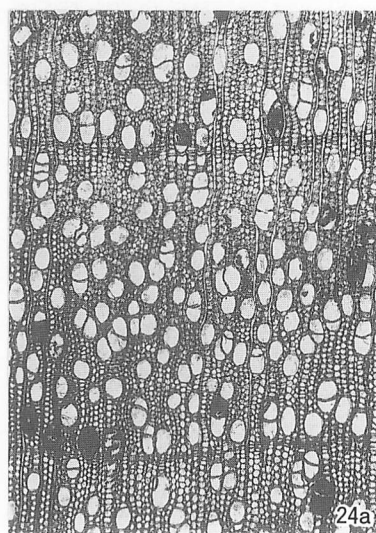
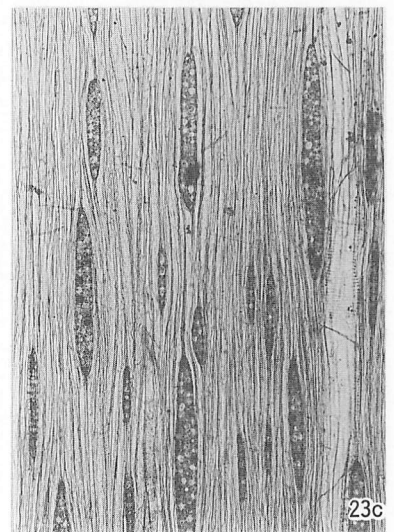
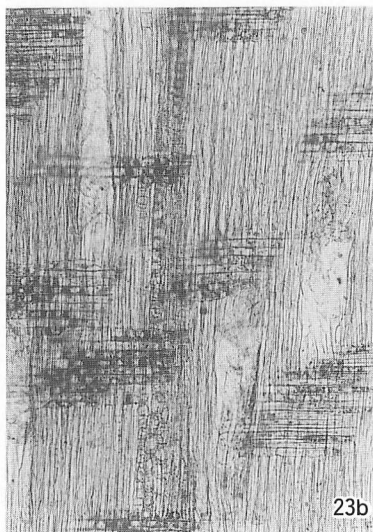
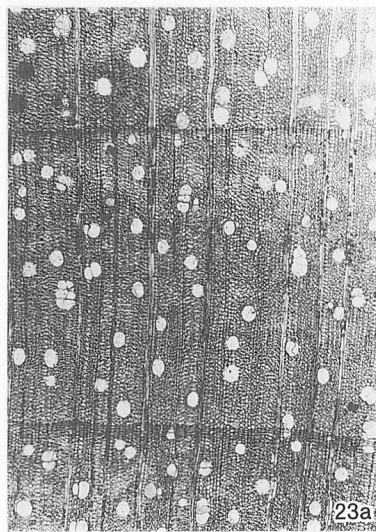
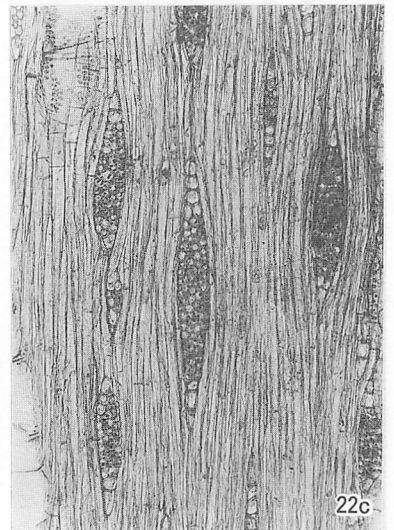
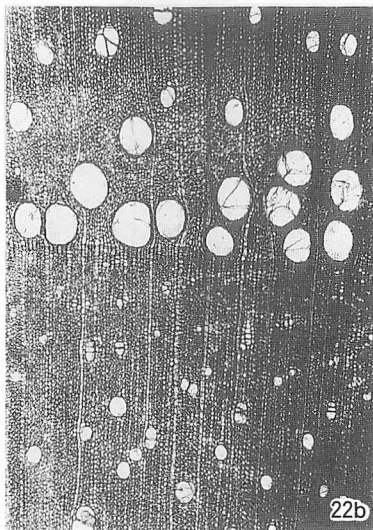
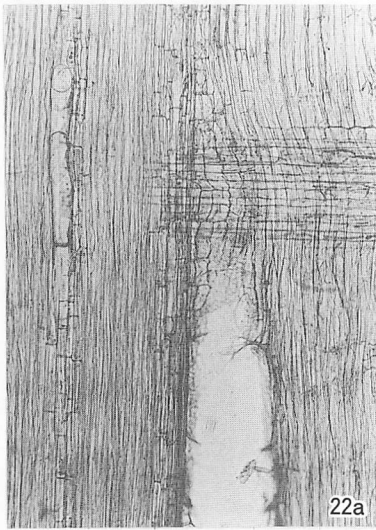


18c

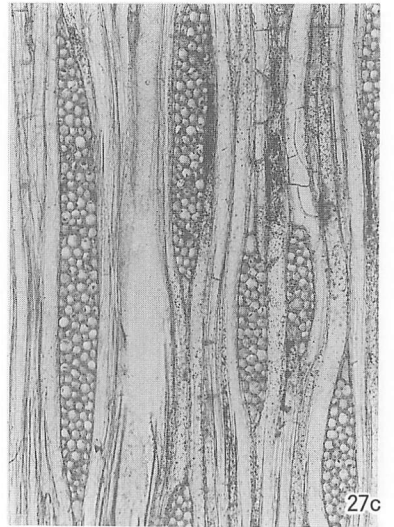
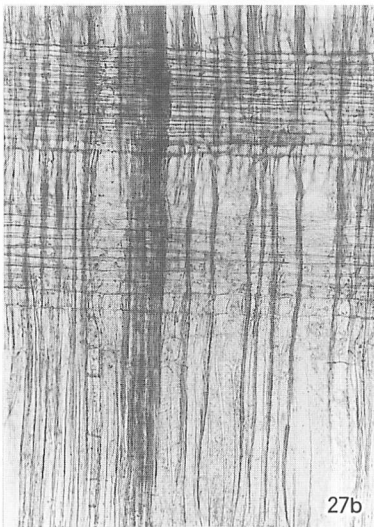
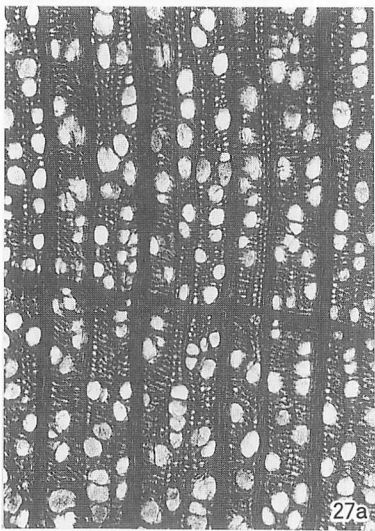
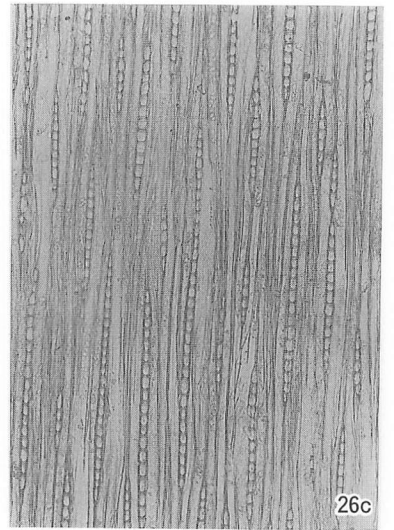
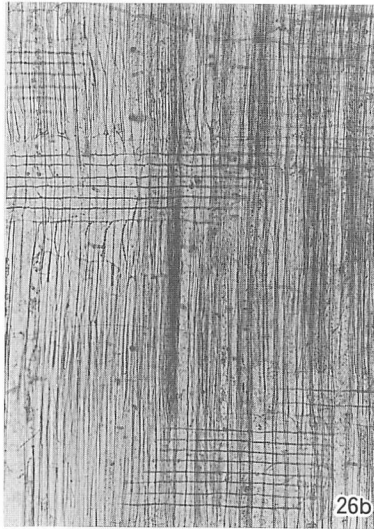
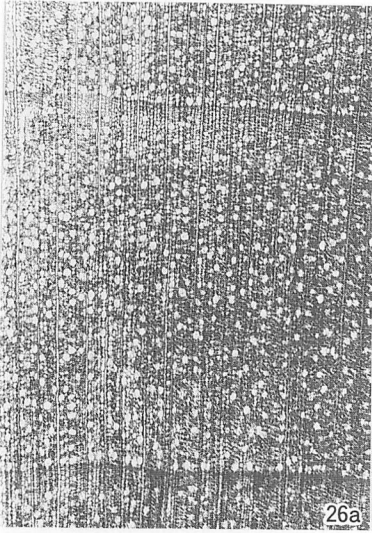
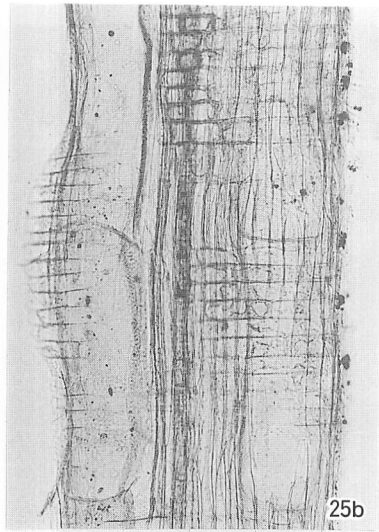
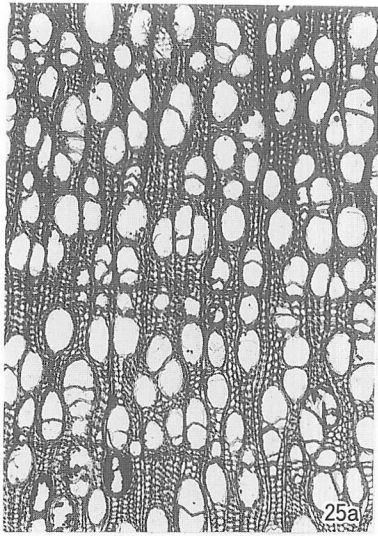
写真図版(6)



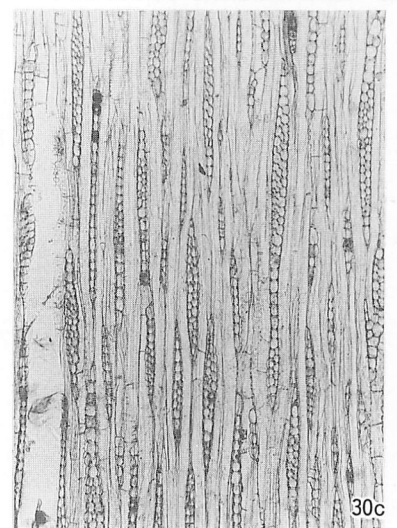
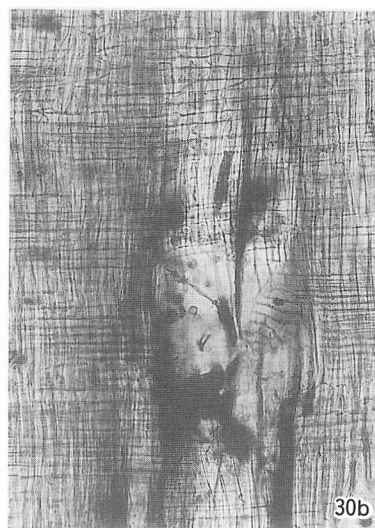
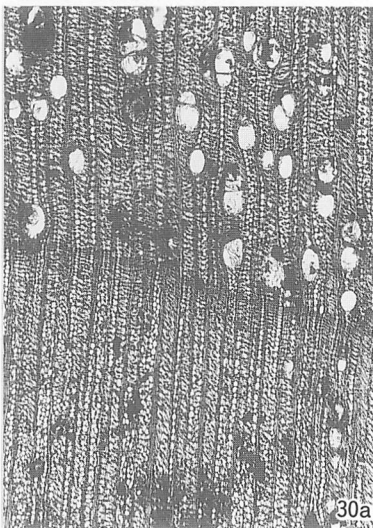
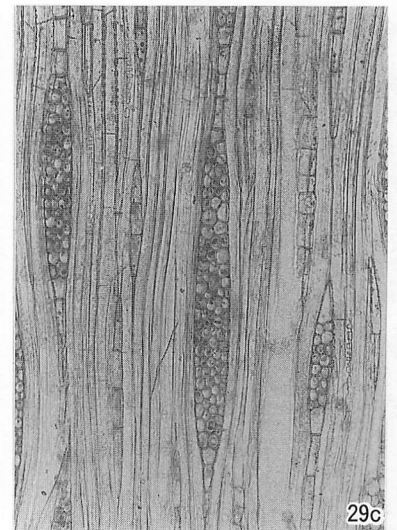
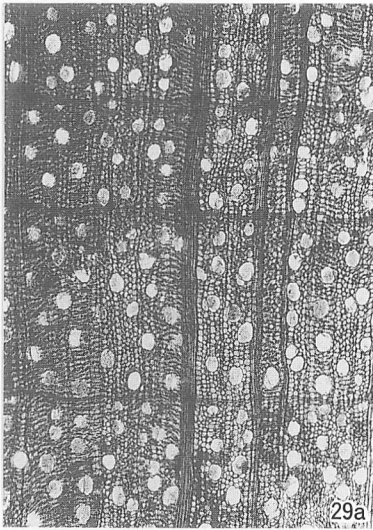
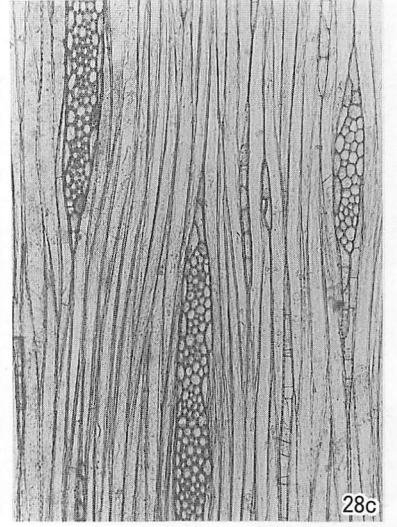
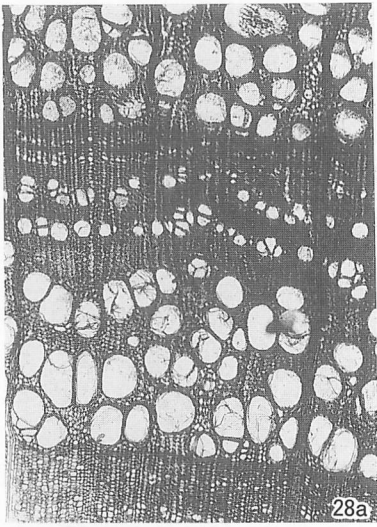
写真図版(7)



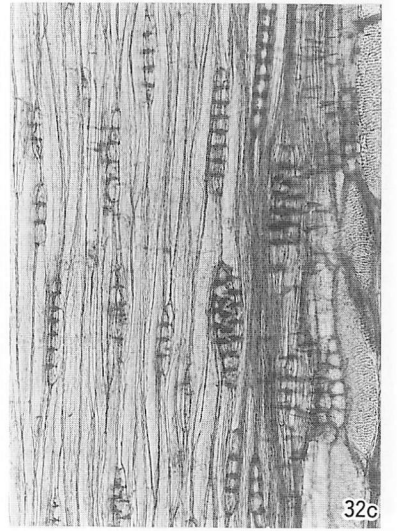
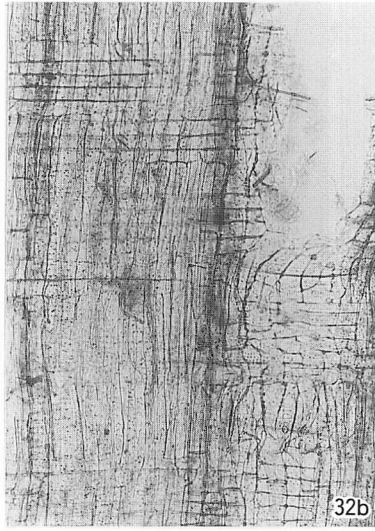
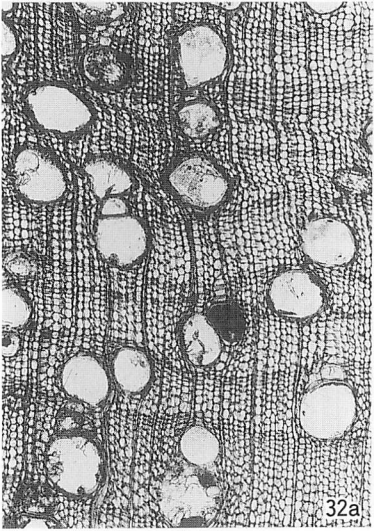
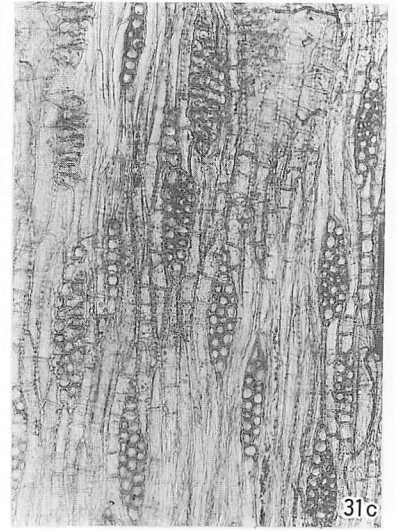
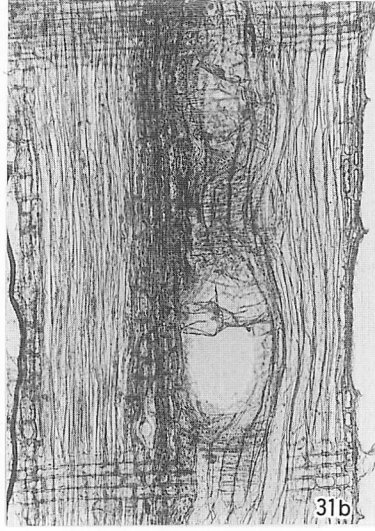
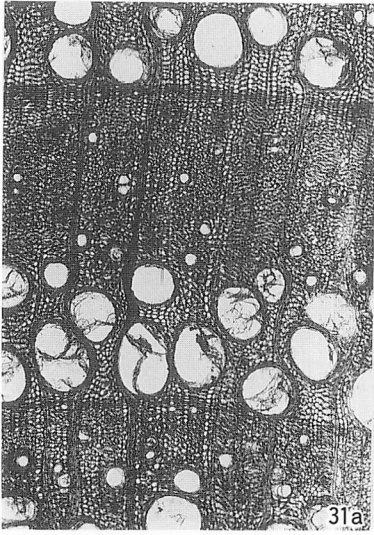
写真图版(8)



写真図版(9)



写真図版(10)



財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
大日向Ⅱ遺跡自然科学分析

目 次

はじめに	492
1. 調査課題について	492
2. 試料	493
3. 分析方法	496
4. 本遺跡周辺地域の古環境（水域環境・古植生）推定	498
(1) 7層（7'層）の中にみられるテフラの起源	
(2) 低地（沢）の水域環境	
(3) 縄文時代晩期～平安時代の周辺地域の古植生	
5. 縄文時代中期・後期および奈良時代の住居構築材について	505
(1) 炭化材の樹種	
(2) 考察	
6. 縄文時代後期の住居内炉址の燃料材について	509
(1) 組織片の産状	
(2) 考察	
7. 土器埋設遺構の遺体埋葬について	510
(1) 結果	
(2) 考察	
8. 総括	512
〈引用文献〉	513

— 図表一覧 —

- 図 1 低地（沢）堆積物の断面図および試料採取層位
- 表 1 分析試料一覧
- 表 2 珪藻化石の生態性
- 表 3 珪藻分析結果
- 表 4 花粉分析結果
- 表 5 植物珪酸体分析結果
- 図 2 珪藻化石群集
- 表 6 縄文時代中期・後期および奈良時代の住居址の炭化材同定結果
- 表 7 住居炉址および遺物包含層の植物珪酸体分析結果
- 図 3 住居炉址および遺物包含層の組成片の産状
- 表 8 リン・カルシウム分析結果

大日向Ⅱ遺跡 自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

大日向Ⅱ遺跡(九戸郡軽米町第13地割1-2所在)は、雪谷川と馬淵川支流の郷坂川に挟まれた丘陵上(標高約170m)に立地する。これまでの発掘調査により、縄文時代前期～奈良・平安時代にわたる遺構・遺物が確認されており、縄文時代中期～弥生時代初頭の集落址が検出されている。

今回、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターにより、本遺跡の古環境(水域環境・古植生)変遷と住居構築材の樹種同定などに関する自然科学分析調査が要望された。そこで、同センターと分析調査内容に関する協議を行った結果、以下に示す調査課題を設定した。

1. 調査課題について

(1) 本遺跡周辺地域の古環境(水域環境・古植生)推定

調査区の南西部には低地(沢)があり、縄文時代晩期から奈良・平安時代の遺物が包含される。低地堆積物は、発掘調査時に1層～18層に分層されている。

各層の時代性については、次の通りである。1層～6層は無遺物層であり、時代時期が不明である。7層(7'層)は細粒火山灰層である。8層～12層が平安時代前後の土層とされる。13層(13'層)・15層は奈良・平安時代とされる。16層は縄文時代晩期に相当し、礫層(18層)に達する。14層は縄文時代晩期の遺物を含むが、再堆積の可能性が強いとされる。

今回の分析調査では、7層中に認められた細粒火山灰を既知の指標テフラと比較し、年代指標を得るためにテフラ分析を実施する。また、低地の水域環境・古植生を珪藻化石・花粉化石・植物珪酸体の各微化石の産状から知るために、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を行う。ただし、花粉分析については、土壌の性質から概査(花粉化石の有無を調べる調査)を行い、可能な限り古植生に関する検討を行うこととした。

(2) 縄文時代中期・後期および奈良時代の住居構築材について

縄文時代中期・後期および奈良時代に相当する各住居址内から炭化材が検出された。これらは当時の住居構築材と考えられている。

本分析調査では、採取された炭化材の樹種名を明らかにし、住居構築材に関する検討を行うために、炭化材同定を行う。

(3) 縄文時代後期の住居内炉址の燃料材について

縄文時代後期に相当する住居址内には炉址が認められ、灰層や焼土が検出された。

本分析調査では、炉の燃料材として用いられた植物、とくにイネ科植物についてを灰層や焼土に残留する組織片の産状から検討する。炉などでイネ科植物の燃料材が用いられると、灰中

に植物珪酸体が組成片の形で残留している例（佐瀬，1982：大越，1985）が多い。したがって、組織片の産状を調査するにも有効な植物珪酸体分析を行う。

(4) 土器埋設遺構の遺体埋葬について

調査区の斜面上方では、縄文時代後期末～晩期初頭の土墳墓が検出された。また、土器埋設遺構も検出されている。発掘調査所見では、土器内に遺体が埋葬されたと推測されているが、骨片など遺体の埋葬を示唆する痕跡は認められなかった。そこで、土器内の土壌を対象として土壌成分を調査し、遺体埋葬の可能性を検討する。人骨などが確認されない場合の遺体の存在を検証する自然科学的分析手法としては、次の2つ方法が知られている。ひとつは、人体、とくに人骨に多量に含まれ、しかも土壌中では比較的移動しにくいリンの含有量を測定するリン分析（竹迫，1981など）である。もうひとつは、土壌中に比較的残留する脂肪酸の組成を測定する脂肪酸分析である。現在では、脂肪酸分析は動植物の種類を推定できる点で優れた面が多い。しかし、試料の採取方法と分析・解析方法が繁雑である。したがって、今回はこれまでに調査事例が豊富であり、分析操作が比較的簡便なリン分析を実施することとした。さらに、骨のもうひとつの主成分であるカルシウム含量についても、カルシウム分析を併用して調査する。

2. 試料

分析調査用の試料は、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターにより採取・選択された。以下に、各分析調査課題ごとに分析試料を記す（表1）。

(1) 本遺跡周辺地域の古環境（水域環境・古植生）推定

試料は、沢部に設定されたトレンチの土層断面において、1層～8層にわたり層位試料として合計20点（試料番号31～50）採取された（図1）。7層は細粒の火山灰層とされ、本層の下位には奈良・平安時代頃の遺物が検出されている。

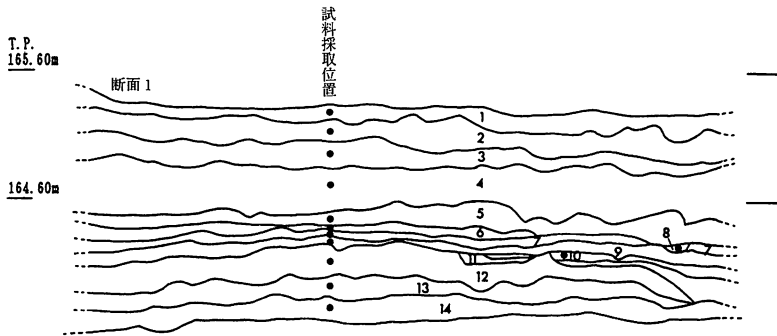
本分析調査では、層相や時代性を考慮して、各時期の遺物包含層からテフラ分析・珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析での分析試料を選択した。各分析調査項目の分析点数は、テフラ分析が1点（試料番号37）、珪藻分析が合計3点（試料番号42・44・49）、花粉分析が合計4点（試料番号35・42・44・49）、植物珪酸体分析が合計4点（試料番号36・42・44・49）である。

(2) 縄文時代中期・後期および奈良時代の住居構築材について

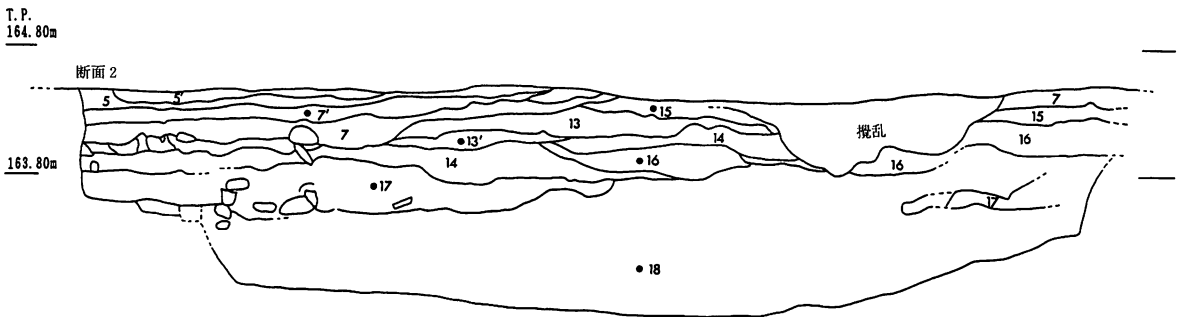
材同定試料の対象とされた試料は、縄文時代中期の住居址（SA78）、縄文時代後期の住居址（SA42，SA64，SA43）、奈良時代の住居址（SA02）から採取された炭化材9点（試料番号6～14）と、縄文時代後期・晩期の遺物包含層から検出された炭化材3点（試料番号3～5）の合計12点である。このうち、試料番号6～14の炭化材は、住居の構築部材と考えられている。試料番号3～5の炭化材については用途等の詳細は不明である。

表1 分析試料一覧

試料番号	試料名	試料採取位置	時代性	分析試料					
				テフ ラ	珪 藻	花 粉	植物 珪酸 体	材	リン ・ カル
1	SA51住居跡炉	住居跡炉埋土	縄文時代後期				○		
2	KⅦグリッドⅡ層	住居跡	縄文時代晩期				○		
3	GⅥ4d、Ⅲ層	遺物包含層	縄文時代後期					○	
4	IⅨ5eⅢ層	遺物包含層	縄文時代後期					○	
5	JⅩⅣ2bⅣ層	遺物包含層	縄文時代後期					○	
6	SA78埋土下部	遺物包含層	縄文時代中期					○	
7	SA42埋土	住居跡	縄文時代後期					○	
8	SA64埋土	住居跡	縄文時代後期					○	
9	SA43埋土	住居跡	縄文時代後期					○	
10	SA02埋土	住居跡	奈良時代					○	
11	SA64埋土	住居跡	縄文時代後期					○	
12	SA43埋土	住居跡	縄文時代後期					○	
13	SA43埋土	住居跡	縄文時代後期					○	
14	SA15埋土	住居跡	縄文時代後期					○	
15	SA07埋土	住居跡	縄文時代後期				○		
16	SA14埋土	住居跡	縄文時代後期				○		
17	SA64埋土	住居跡	縄文時代後期				○		
18	SC29	遺物包含層	縄文時代晩期				○		
19	SG10	土器内	縄文時代後期末						○
20	SG10	土器外	縄文時代後期末						○
21	SG04	土器内	縄文時代後期末						○
22	SG04	土器外	縄文時代後期末						○
23	SA35埋土上部	土器内	縄文時代後期末						○
24	SA35埋土上部	土器外	縄文時代後期末						○
25	SG03	土器内	縄文時代後期末						○
26	SG03	土器外	縄文時代後期末						○
27	SG16	土器内	縄文時代後期末						○
28	SG16	土器外	縄文時代後期末						○
29	SG08	土器外	縄文時代後期末						○
30	SG08	土器内	縄文時代後期末						○
31	SFO1層	低地	不明						
32	SFO2層	低地	不明						
33	SFO3層	低地	不明						
34	SFO4層	低地	不明						
35	SFO5層	低地	不明						
36	SFO6層	低地	不明						
37	SFO7層	低地	平安時代			○	○		
38	SFO7'層	低地	平安時代	○					
39	SFO8層	低地	平安時代?						
40	SFO9層	低地	平安時代?						
41	SFO10層	低地	平安時代?						
42	SFO11層	低地	平安時代?		○	○	○		
43	SFO12層	低地	平安時代?						
44	SFO13層	低地	奈良・平安時代		○	○	○		
45	SFO13'層	低地	奈良・平安時代						
46	SFO14層	低地	縄文時代晩期						
47	SFO15層	低地	縄文時代晩期						
48	SFO16層	低地	縄文時代晩期						
49	SFO17層	低地	縄文時代晩期		○	○	○		
50	SFO18層	低地	縄文時代晩期						



- 土層説明
- 1層：黒褐色土、腐植層。(資料番号31 採取層位)
 - 2層：黒色シルト、部分的に砂・酸化鉄・植物の根を含む。(試料番号32 採取層位)
 - 3層：黒色シルト、酸化鉄をまばらに含む。(試料番号33 採取層位)
 - 4層：黒色シルト、浅間板鼻黄色火山灰を含む。(試料番号34 採取層位)
 - 5層：黒褐色砂質シルト、部分的に酸化鉄・植物の腐植層を含む。(試料番号35 採取層位)
 - 6層：黒色シルト、植物腐植層。(試料番号36 採取層位)
 - 平安時代—7層：灰オリーブ色土、十和田 a 火山灰層。(試料番号37 採取層位)
 - 8層：オリーブ黒色砂質シルト。(試料番号39 採取層位)
 - 9層：粘質シルト、植物の腐植層を含む。(試料番号40 採取層位)
 - 10層：オリーブ黒色砂質シルト。(試料番号41 採取層位)
 - 11層：黒色粘質シルト、植物の腐植層を含む。(試料番号42 採取層位)
 - 12層：黒褐色砂混じり粘質シルト。(試料番号43 採取層位)
 - 奈良～平安時代—13層：粘質シルト、部分的に砂が混じる。多量のトチの実と植物質を含む。(試料番号44 採取層位)
 - 縄文時代晩期 14層：オリーブ黒色礫。縄文時代晩期の土器および植物質遺物を含む。(試料番号45 採取層位)



- 土層説明
- 時代、時期不明—5層：黒褐色砂質シルト 部分的に酸化鉄・植物の腐植層を含む。
 - 5層：黒褐色砂質シルト (5層より黒色が強い)、部分的に酸化鉄・植物の腐植層を含む。
 - 平安時代—7層：灰オリーブ色土、十和田 a 火山灰層。
 - 7層：黒色シルト質粘土、腐植層。(試料番号38 採取層位)
 - 奈良～平安時代—13層：粘質シルト、部分的に砂が混じる。多量のトチの実と植物質を含む。
 - 13層：黒色シルト。
 - 14層：オリーブ黒色礫。縄文時代晩期の土器および植物質遺物を含む。(試料番号46 採取層位)
 - 15層：黒褐色粘土質シルト、小粒の礫を含む。(試料番号47 採取位置)
 - 縄文時代晩期—16層：灰褐色砂質シルト、部分的に砂が水平に入る。(試料番号48 採取層位)
 - 17層：黒褐色シルト、腐植層。(試料番号49 採取層位)
 - 18層：礫層、亜円礫を含む。(試料番号50 採取層位)

図1 低地(沢)堆積物の断面および試料採取層位

●は試料採取位置を表す。

(3) 縄文時代後期の住居内炉址の燃料材について

分析試料は、縄文時代後期の住居（SA51, SA07, SA14, SA64）内炉址から採取された灰・焼土4点（試料番号1・15～17）と縄文時代晩期の遺物包含層中から検出された灰層1点（試料番号2）と焼土集中部から採取された土壌試料1点（試料番号18）の合計6点である。

(4) 土器埋設遺構の遺体埋葬について

試料は、縄文時代後期末～晩期初頭の土器埋設遺構（SG10, SG04, SA35埋土上部出土土器, SG03, GS16, GS08）内の土壌試料6点（試料番号19・21・23・25・27・30）と、比較試料として土器外（堀り方）から採取された土壌試料6点（試料番号20・22・24・26・28・29）の合計12点である。

3. 分析方法

(1) テフラ分析

試料約10gに水を加え、小型超音波洗浄装置により分散、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより泥分を除去する。得られた砂分を実体顕微鏡および偏光顕微鏡下で観察し、テフラの本質物質である軽石、スコリア、火山ガラス、遊離結晶などの産状を調べる。さらに、必要ならば火山ガラスの屈折率の測定を行う。これらの観察および測定結果からテフラの同定を行う。なお、屈折率の測定は、新井（1972）の浸液法に従って行った。

(2) 珪藻分析

試料を湿重で4.4～6.0g秤量し、過酸化水素水（ H_2O_2 ）、塩酸（HCl）の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適量計り取りカバーガラス上に滴下、乾燥する。乾燥後、プレウラックスで封入する。

検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、K.Krammer & Lange-Bertalot（1986・1988・1991）などを用いる。なお、珪藻の生態性の解説を表2に示した。

堆積環境の解析については、まず塩分濃度に対する適応性から産出種を海水－汽水－淡水生種に分類し、淡水生種については更に塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応性について生態区分する。そして、産出率2%以上を示す分類群について、主要珪藻化石の層位分布図を作製する。図中の海水－汽水－淡水生種の帯グラフと各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の帯グラフは淡水生種の合計は基数とした相対頻度で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示した。なお、●は1%未満の産出を示す。環境解析については、安藤（1990）の環境指標種群を参考とする。

表2 珪藻化石の生態性

塩分濃度に対する区分		塩分濃度に対する適応性	生育環境(例)
海水生種:	強塩生種 (Polyhalobous)	塩分濃度40.0パーミル以上に出現するもの	低緯度熱帯海域、塩水湖など
	真塩生種 (Euhalobous)	海産性種、塩分濃度40.0~38.0パーミルに出現するもの	一般海域 (ex 大陸棚及び大陸棚以深の海域)
汽水生種:	中塩生種 (Mesohalobous)	塩分濃度30.0~0.5パーミルに強中塩生強 (-Mesohalobous) 出現するもの 弱中塩生強 (-Mesohalobous)	河口・内湾・沿岸・塩水湖・潟など
淡水生種:	貧塩生種 (Oligohalobous)	塩分濃度0.5パーミル以下に出現するもの	一般陸水域(ex 湖沼・池・沼・河川・沼沢地・泉)
塩分・pH・流水に対する区分		塩分・pH・流水に対する適応性	
塩分に対する適応性	貧塩-好塩性種 (Halophilous)	少量の塩分がある方が生育するもの	高塩類域 (塩水遡上域・温泉・耕作土壌)
	貧塩-不定性種 (Indifferent)	少量の塩分があってもこれによく耐えることができるもの	一般陸水域 (湖沼・池・河川・沼沢地など)
	貧塩-嫌塩性種 (Halophobic)	少量の塩分にも耐えることができないもの	湿原・湿地・沼沢地
	広域塩性種 (Euryhalinus)	低濃度から高濃度まで広い範囲の塩分濃度に適応して出現するもの	一般淡水-汽水域
pHにたいする適応性	真酸性種 (Acidobiontic)	pH7.0以下に出現、特にpH5.5以下の酸性水域で最もよく生育するもの	湿原・湿地・火口湖 (酸性水域)
	好酸性種 (Acidophilous)	pH7.0付近に出現、pH7.0以下の水域で最もよく生育するもの	湿原・湿地・沼沢地
	pH-不定性種 (Indifferent)	pH7.0付近の中性水域で最もよく生育するもの	一般陸水域 (ex 湖沼・池沼・河川)
	好アルカリ性種 (Alkaliphilous)	pH7.0付近に出現、pH7.0以上の水域で最もよく生育するもの	
	真アルカリ性種 (Alkalibiontic)	pH8.5以上のアルカリ性水域で最もよく生育するもの	アルカリ性水域
流水に対する適応性	真止水性種 (Limnobiontic)	止水域のみ出現するもの	流水の少ない湖沼・池沼
	好止水性種 (Limnophilous)	止水域に特徴的であるが、流水にも出現するもの	湖沼・池沼・流れの穏やかな川
	流水不定性種 (Indifferent)	止水域にも流水域にも普通に出現するもの	河川・川・池沼・湖沼
	好流水性種 (Rheophilous)	流水域に特徴的であるが、止水域にも出現するもの	河川・川・小川・上流域
	真流水性種 (Rheobiontic)	流水域にのみ出現するもの	河川・川・流れの速い川・溪流・上流域
陸生珪藻	好気性種 (Aerophilous)	好気的環境 (Aerial habitats) 水域以外の常に大気に曝された特殊な環境に生育する珪藻の一群で多少の湿り気と光さえあれば、土壌表層中のコケの表面に生育可能特に、土壌中に生育する陸生珪藻を土壌珪藻という	・土壌表層中や土壌に生えたコケに付着 ・水の飛沫や霧に生えたコケに付着 ・濡れた岩の表面やそれに生えたコケに付着 ・流の飛沫で濡ったコケや石垣・岩上のコケに付着 ・湖沼入口や内部の照明に当たった所に生えたコケに付着

註 塩分に対する区分はLowe(1974)、pHと流水に対する区分はHustedt(1937-38)による。

(3) 花粉分析

試料数gについて、水酸化カリウム処理による泥化と腐植酸の溶解、0.25mmの篩を通して大型の植物遺体や碎屑物の除去、重液分離(臭化亜鉛：比重2.2)による有機物の濃集、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理(無水酢酸：濃硫酸=9：1)によるセルロースの分解、の順に行い、堆積物中から花粉化石を濃集した。

処理後の残渣の一部についてグリセリンで封入してプレパラートを作製し、その中に出現した全ての種類 (Taxa) について同定・計数した。

(4) 植物珪酸体分析

分析は、近藤・佐瀬(1986)の方法を参考にした。試料中の植物珪酸体は、過酸化水素水(H₂O₂)・塩酸(HCl)処理、超音波処理(70w, 250KHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(臭化亜鉛, 比重2.3)の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラスに滴下・乾燥する。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

なお、燃料材に関する検討では、とくにイネ科葉部短細胞列や葉身機動細胞列などの組織片

の産状に注目した。

(5) 炭化材同定

試料を乾燥させたのち、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の割断面を作製し、走査型電子顕微鏡(無蒸着・反射電子検出型)で観察・同定した。

(6) リン・カルシウム分析

分析は、土壤標準分析・測定法委員会(1986)、土壤養分測定法委員会(1981)、京都大学農学部農芸化学教室(1957)、農林水産省技術会議事務局(1967)、ペドロジスト懇談会(1984)などを参考にした。以下に操作行程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.0mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃、5時間)により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸(HNO₃) 5 mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO₄) 10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100mlに定容してろ過する。今回は、リン含有をリン酸(P₂O₅)濃度として測定する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計により、リン酸濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン含量(P₂O₅mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

4. 本遺跡周辺地域の古環境(水域環境・古植生)推定

(1) 7層(7'層)の中にみられるテフラの起源

a. テフラの産状

試料は、少量の軽石と多量の細砂～極細砂径の火山ガラスから構成されることから、7層(7'層)中の火山灰は細粒のガラス質テフラと判断される。軽石は、最大径約4 mm、白色を呈し、発泡はやや不良～やや良好である。斜方輝石または単斜輝石を包有する軽石も認められる。また、緑色を呈し、気泡が長く伸びて繊維束状に発泡した径2 mm程度の軽石も少量認められる。火山ガラスは薄手平板状のいわゆるバブル型と気泡が長く伸びて繊維束状に発泡およびスポンジ状に発泡した軽石型さらに気泡の少ない破碎片状の3形態が混在する。この中では、軽石型が最も多く、バブル型、破碎片状のものは少量である。ほとんどの火山ガラスは無色透明であるが、微量の褐色のものも認められる。火山ガラスの屈折率は、 $n=1.496\sim 1.504$ であった。

b. 考察

遺物の出土状況などから、7層(7'層)は奈良・平安時代以降であると考えられる。東北地方北部では、平安時代の遺物包含層中に2枚の薄い火山灰層が検出されることが多く、これらのテフラは上位が白頭山ー苦小牧火山灰(B-Tm)、下位が十和田aテフラに同定されている(町

田ほか, 1981; 町田・新井, 1992)。上記の軽石の特徴、火山ガラスの形態と火山ガラスの屈折率を考慮すると、7層中の火山灰は十和田aテフラ (To-a: 町田ほか, 1981; ARAI et al., 1986; 町田・新井, 1992) に同定される。To-aは、十和田カルデラを給源とし、A.D.915年に噴出したとされている。また、テフラの産状から7層を降灰層準と考える。

(2)低地(沢)の水域環境

a. 珪藻化石の産状

結果を表3・図2に示す。珪藻化石は、各層とも豊富に産出する。産出種の大部分は淡水生種で構成され、産出分類群数は、21属115分類群(96種・16変種・1品種・種不明2種類)である。また、完形殻の出現率は、70%以上と高い。次に産出種の特徴を述べる。

・17層(試料番号49)

本層は、真〜好流水性種が優占する。

産出種の特徴は、中〜下流性河川指標種群(安藤, 1990)の*Achnanthes lanceolata*が優占し、同じく中〜下流性河川指標種群の*Diatoma hiemale* var. *mesodon*、*Navicula elginensis* var. *neglecta*、*Stauroneis smithii*、流水不定性の*Gomphonema parvulum*、*Navicula cryptocephala*などが多産することである。

・13層(試料番号44)

本層は、真〜好流水性種と流水不定性種とて占められ、止水生種は極く少ない。

産出種の特徴は、17層に近似し、中〜下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*が優占し、流水不定性の*Gomphonema parvulum*、好流水性の*Navicula elginensis*などが多産することである。

・11層(試料番号42)

本層になると流水生種は減少し、流水不定性種や陸上のコケの表面や土壌表面など、しばしば乾燥するような好気的環境に適応する陸生珪藻が多産することが特徴である。

主な産出種は好流水性の*Caloneis bacillum*、中〜下流性河川指標種群の*Achnanthes lanceolata*、*Meridion circularae* var. *constrictum*、流水不定性種の*Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Gomphonema angustatum*、陸生珪藻の中でもとくに耐乾性の強い陸生珪藻のA群(伊藤・堀内, 1991)の*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*N. content*などが産出する。

b. 考察

完形殻の出現率が高かったことから、得られた珪藻化石は現地性を示すと考えられる。

17層(縄文時代晩期)は、真〜好流水性種と流水不定性種で特徴づけられることから流水域で堆積環境したと推定される。

13層(奈良・平安時代前後)においても、珪藻分析結果から縄文時代晩期の17層と同様に、流水域の環境が示される。この環境は層相とも調和する。

11層(平安時代前後)になると、流水性の珪藻化石が減少し、代わって流水不定性種や陸生珪藻が多産ようになることから、水の流れや滞水の比較的少ない好気的環境に変化したと考えられる。

表3 珪藻分析結果

Species Name	Ecology			沢トレンヂ		
	H. R.	pH	C. R.	42	44	49
[A] Actinoptychus senarius (Ehr.) Ehrenberg	Euh			1	—	—
[A] [B] Thalassionema nitzschioides Grunow	Euh			2	—	1
# Achnanthes exigua Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	—	2	6
# Achnanthes exigua var. heterovalvata Krasske	Ogh-ind	al-il	ind	1	—	—
[K] Achnanthes lanceolata (Breb.) Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	13	38	69
[K] Achnanthes lanceolata var. elliptica Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	1	—
# Achnanthes laterostrata Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	1	1	—
Achnanthes marginulata Grunow	Ogh-ind	ind	ind	2	1	—
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	2	1	—
Achnanthes rostrata Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	2	3	—
# Achnanthes subhudsonis Hustedt	Ogh-ind	ind	r-ph	—	—	1
# Achnanthes suchlandtii Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	1	—	—
Amphora inariensis Krammer	Ogh-unk	unk	unk	1	—	—
[·A] Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	—	—	4
Amphora ovalis var. affinis (Kuetz.) V. Heurck	Ogh-ind	al-bi	ind	3	1	—
[·A] Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	2	—	—
Caloneis bacillum (Grun.) Mereschkowsky	Ogh-ind	al-il	r-ph	28	6	—
[·A] Caloneis hyalina Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	—	1	—
# Caloneis lagerstedtii (Lagerst.) Cholnoky	Ogh-hob	ac-il	ind	1	—	—
Caloneis molaris (Grun.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	—	—	1
Caloneis tenuis (Greg.) Krammer	Ogh-ind	al-il	ind	1	—	—
[·] Caloneis sp.-1	Ogh-unk	unk	unk	2	—	—
[O] Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	—	2	—
# # Cymbella siletiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	1	—	2
# # [K] Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	al-il	r-ph	1	1	1
# # [K] Diatoma hiemale var. mesodon (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	2	7
[·A] Diploneis elliptica (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	1	1	4
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	1	3	1
Diploneis parva Cleve	Ogh-ind	ind	ind	1	—	—
[·] Diploneis yatukenensis Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	ind	2	—	—
Eunotia arcus Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	3	1	—
[P] Eunotia exigua (Breb.) Grunow	Ogh-hob	ac-bi	ind	2	1	—
[O] Eunotia incisa W. Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	2	—	—
Eunotia lunaris (Ehr.) Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind	1	—	—
Eunotia lunaris var. subarcuata (Naeg.) Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind	1	1	—
Eunotia mondon var. maior (W. Smith) Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	9	—	—
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	—	—	1
# # Fragilaria capucina Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	—	1	—
# # Fragilaria vaucheriae (Kuetz.) Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	1	—	—
Frustulia vulgaris (Thwait.) De Toni	Ogh-ind	ind	ind	—	3	—
Frustulia weinholdii Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	—	1	—
[O] Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	1	—	1
Gomphonema angustum Agardh	Ogh-ind	al-il	ind	6	2	1
Gomphonema angustatum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	2
Gomphonema angustatum var. linearis Hustedt	Ogh-ind	ac-il	unk	2	2	—
Gomphonema clevei var. inaequilobum H. Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph	—	—	1
[O] Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-bi	l-ph	3	—	1
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	8	23	24
[J] Gomphonema sumatrense Fricke	Ogh-ind	ind	r-ph	—	—	1
Gomphonema sap.	Ogh-unk	unk	unk	1	—	—
[·A] Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	31	4	5
[·A] Melosira roseana Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	1	—	1
# # [K] Meridion circulae Agardh	Ogh-ind	al-il	r-bi	—	1	—
# # [K] Meridion circulae var. constrictum (Ralfs) V. Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	7	1	—
[·] Navicula bryophila Boye-Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	—	1	—
# # [K] Navicula capitatoradiata Germain	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	1	1
# # [·B] Navicula confervacea (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	—	—	1
# # [·A] Navicula contents Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	6	—	—
Navicula cryptoccephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	—	2	11
Navicula cryptotenella Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	—	1	—
Navicula decussis Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	1	—
[O] Navicula elginensis (Greg.) Ralfs	Ogh-ind	al-il	r-ph	10	10	3
Navicula elginensis var. cuneata H. Kobayasi	Ogh-ind	al-il	ind	1	—	—
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	2	18
[·] Navicula hamburgii Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	5	1	—
[·B] Navicula ignota Krasske	Ogh-ind	ind	ind	3	—	—
[·B] Navicula ignota var. palustris (Husr.) Lund	Ogh-ind	ind	ind	1	—	—
Navicula laevissima Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	ind	—	1	—
Navicula medioconvexa Hustedt	Ogh-unk	unk	unk	—	1	—
Navicula minima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	1	4	—
# [·A] Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	15	3	3
Navicula plusibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	1	—	—
# Navicula pupula Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	2	6	—
Navicula pusio Cleve	Ogh-hob	ind	ind	1	—	—
[·] Navicula schoenfeldii Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-bi	1	—	—
# [·B] Navicula seminulum Grunow	Ogh-ind	ind	ind	1	1	1
# [·] Navicula seminulum var. radiosa Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	—	1	1
Navicula subcostulata Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	—	3	—
Navicula subnympharum Hustedt	Ogh-unk	unk	unk	4	—	—
[J] Navicula tenelloides Hustedt	Ogh-unk	unk	r-ph	—	3	—
[·] Navicula tokyoensis H. Kobayasi	Ogh-ind	ind	ind	—	5	—
Navicula veneta Kuetzing	Ogh-hit	al-il	ind	—	—	1
Navicula sp.-1	Ogh-unk	unk	unk	5	—	—
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	3	1
[·A] Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	1	1	—
Neidium ampliatum (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	—	1	—
Neidium productum (W. Smith) Cleve	Ogh-ind	ind	ind	—	1	—
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	—	9	—
Nitzschia linearis W. Smith	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	—	1
# Nitzschia palea (Kuetz.) W. Smith	Ogh-ind	al-bi	ind	—	2	1
Nitzschia sinuata var. delognei (Grun.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph	—	—	2

表3のつづき

Species Name	Ecology			沢トレンチ		
	H. R.	pH	C. R.	42	44	49
[·A]Pinnular borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	1	2	—
Pinnularia gibba var. linearis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	—	—	1
[·A]Pinnularia intermedia (Largerst.) Cleve	Ogh-ind	ind	ind	—	1	—
#Pinnularia interrupta W. Smith	Ogh-ind	ac-il	ind	—	1	—
Pinnularia kroekii (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ind	ind	—	3	—
Pinnularia mesolepta (Ehr.) W. Smith	Ogh-hob	ac-il	ind	—	—	1
#Pinnularia microstauron (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	1	3	—
[·A]Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	2	3	2
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-ind	ind	ind	—	3	—
[·]Pinnularia schoenfelderii Krammer	Ogh-ind	ind	ind	1	4	3
[·]Pinnularia schroederii (Hust.) Krammer	Ogh-ind	ind	ind	—	1	—
Pinnularia similis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	1	—	—
Pinnularia stomatophora (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	1	—	—
[·B]Pinnularia subcapitata Gergory	Ogh-ind	ind	ind	1	3	1
Pinnularia ueno Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	—	1	—
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	—	1	—
Stauroneis kriegerii Patrick	Ogh-ind	ind	ind	—	1	—
Stauroneis laenburgiana Hustedt	Ogh-ind	ind	unk	—	4	1
Stauroneis laenburgiana fo. angulata Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	—	2	—
[·B]Stauroneis obtusa Lagerst	Ogh-ind	al-il	ind	—	1	—
Stauroneis smithii Grunow	Ogh-ind	ind	ind	1	—	—
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	—	14
Surirella ovata Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	—	1	1
Surirella ovata var. pinnata (W. Smith) Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	—	1
Surirella ovata var. pinnata (W. Smith) Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	1	4
Marine Water Species				3	0	1
Marine to Brackish Water Species				0	0	0
Brackish Water Species				0	0	0
Fresh Water Species				213	204	208
Total Number of Diatoms				216	204	209

凡例

H.R.:塩分濃度に対する適応性 pH:水素イオン濃度に対する適応性 C.R.:流水に対する適応性
 Euh:海水生種 al-bi:真アルカリ性種 l-bi:真止水性種
 Ogh-hil:貧塩好塩性種 al-il:好アルカリ性種 l-ph:好止水性種
 Ogh-ind:貧塩不定性種 ind:ph不定性種 ind:流水不定性種
 Ogh-hob:貧塩嫌塩性種 ac-il:好酸性種 r-ph:好流水性種
 Ogh-unk:貧塩不明種 ac-bi:真酸性種 r-bi:真流水性種
 unk:ph不明種 unk:流水不明種

環境指標種群

[A]:外洋指標種, [B]:内湾指標種, (小林, 1988)

[J]:上流性河川指標種, [K]:中～下流性河川指標種, [O]:沼沢湿地付着生種, [P]:高層湿原指標種 (安藤, 1990)

#:好汚濁性種, ##:好清水性種 (渡辺ほか, 1986)

[·]:陸生珪藻 ([·A]:A群, [·B]:B群、伊藤・堀内, 1991)

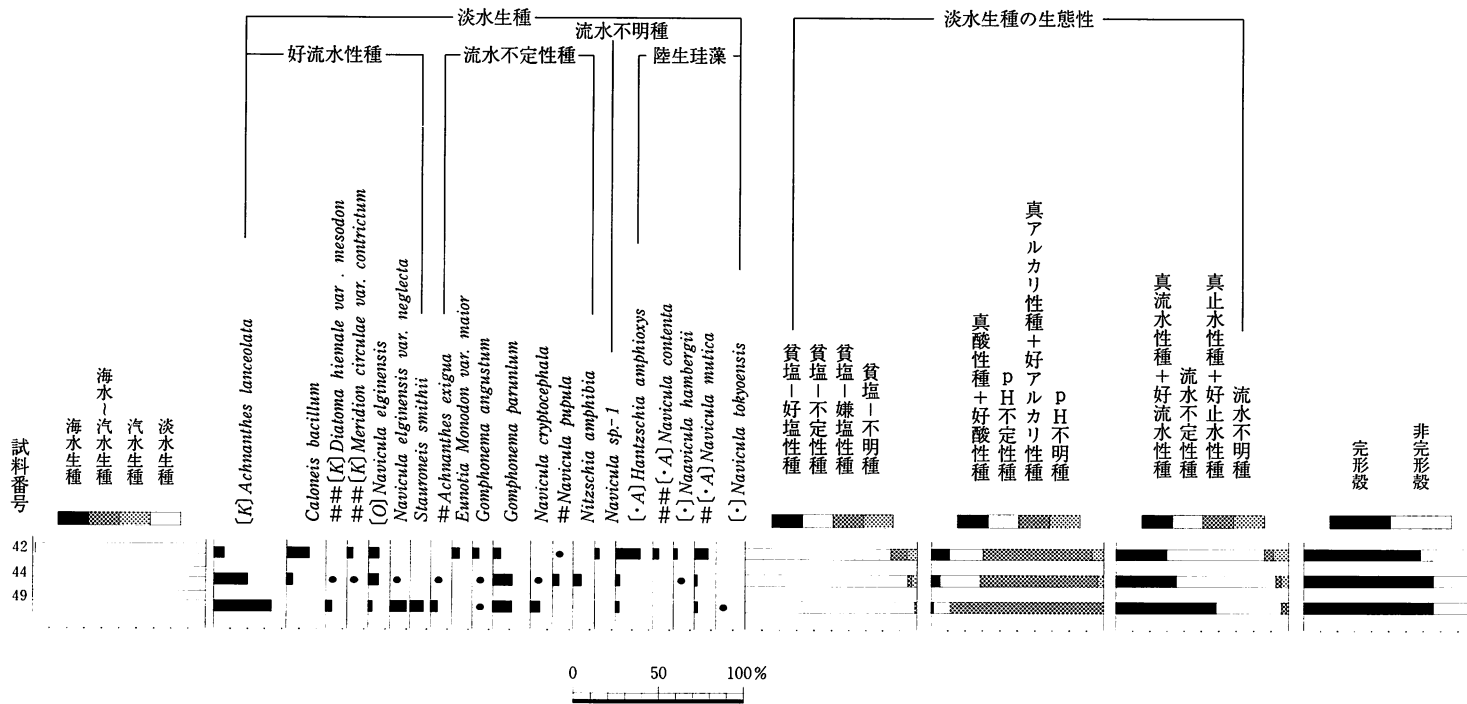


図2 珪藻化石群集

海水—汽水—淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示した。なお、●は1%未満の産出、○は100個体未満の試料における産出を示す。

環境指標種群；[K]：中～下流性河川指標種，[O]：沼沢湿地付着生種，(安藤，1990)

#：好汚濁性種，##：好清水性種（渡辺ほか，1986）

[・]：陸生珪藻（〔・A〕A群，〔・B〕B群、伊藤・堀内，1991）

(3) 縄文時代晩期～平安時代の周辺地域の古植生

a. 花粉化石の産状

結果を表4に示す。いずれの試料中からも、少量の花粉化石しか検出されず、保存状態は悪い。13層（試料番号44）では、コナラ亜属・クルミ属・ニレ属－ケヤキ属・トチノキ属などがわずかに認められる。

今回の分析結果では、統計的に結果を処理できないので、縄文時代晩期から平安時代にわたる古植生について、検討することは困難である。

表4 花粉分析結果

種 類(Taxa)	採取層 試料番号	6層 36	11層 42	13層 44	17層 49
木 本 花 粉					
モミ属		—	1	—	—
ツガ属		1	—	—	—
マツ属		—	7	—	—
スギ属		—	—	1	—
クルミ属		—	—	7	—
クマシデ属－アサダ属		—	—	1	—
ハンノキ属		—	—	1	—
ブナ属		—	—	1	—
コナラ属コナラ亜属		—	—	9	—
クリ属		—	—	—	1
ニレ属－ケヤキ属		—	—	4	—
カエデ属		—	—	1	—
トチノキ属		—	—	2	—
草 木 花 粉					
カヤツリグサ科		—	—	1	—
ヨモギ属		—	—	1	—
他のキク亜科		—	1	—	—
タンポポ亜科		—	—	2	—
シ ダ 類 胞 子					
他のシダ類胞子		2	10	4	—
合 計					
木 本 花 粉		1	8	27	1
草 本 花 粉		—	1	4	—
シダ類胞子		2	10	4	—
総花粉・胞子		3	19	35	1

b. 植物珪酸体の産状

結果を表5に示す。イネ科起源の植物珪酸体は少なく、保存状態も悪い。検出された種類は、キビ族・タケ亜科・ヨシ属・ススキ属などである。この中では、タケ亜科の検出個数の多い傾向が認められる。

表 5 植物珪酸体分析結果

種 類(Taxa)	試料番号	1	2	15	16	17	18
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属		—	7	—	—	—	—
キビ族ヒエ属		—	34	—	—	—	—
キビ族キビ属		—	2	—	—	—	—
キビ族エノコログサ属		27	2	7	—	5	—
キビ族 (その他)		75	40	26	1	16	5
タケ亜科 (その他)		34	75	85	85	60	1
ヨシ属		5	19	91	112	13	—
ウシクサ族ススキ属		99	18	29	2	24	1
イチゴツナギ亜科 (その他)		19	68	63	14	2	1
不明キビ型		98	115	70	10	67	1
不明ヒゲシバ型		28	60	60	73	33	—
不明ダンテク型		19	29	60	9	18	—

イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属		—	4	—	—	—	—
キビ族		10	2	12	7	38	2
タケ亜科 (その他)		36	30	45	64	99	1
ヨシ属		3	2	10	21	8	—
ウシクサ族		12	6	18	2	25	1
シバ属		—	1	—	—	—	—
不明		12	11	23	18	52	—

合 計							
イネ科葉部短細胞珪酸体		404	469	491	306	238	9
イネ科葉身機動細胞珪酸体		73	56	108	112	222	4
検出個数		477	525	599	418	460	13

組 織 片							
イネ属穎珪酸体		—	3	—	—	—	—
エノコログサ属短細胞列		1	—	—	—	1	—
キビ族短細胞列		9	1	—	—	—	1
タケ亜科短細胞列		1	—	—	—	—	—
ススキ属短細胞列		4	—	—	—	—	—
ウシクサ族機動細胞列		1	—	—	—	—	—

c. 考察

腐植や植物遺体が遺存する土層を対象に分析調査を行ったが、いずれの試料からも花粉化石と植物珪酸体の産出は少なかった。したがって、今回の調査結果からは既存の調査例との対比や周辺植生の検討は困難である。花粉化石や植物珪酸体の産出が少なかった要因は、堆積速度が早くて花粉化石や植物珪酸体が土層中に保存されなかったり好気的環境下による花粉化石の二次的な分解などが生じたことが考えられる。

なお、奈良・平安時代頃の13層では、コナラ亜属・クルミ属・ニレ属・ケヤキ属・トチノキ属などが産出した。これらは、いずれも冷温帯の沢沿いに普通に見られる種類であることから、当時の沢沿いに生育していた種類を反映していると見られる。また、6層・11層・13層・17層が堆積した頃には、少なくともキビ族・タケ亜科・ヨシ属・ススキ属などのイネ科植物が周辺に生育していたと思われる。タケ亜科の検出個数が多い傾向が認められたが、タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科植物と比較して風化に強く、さらに生産量が多い点が指摘されている（近藤，1982；杉山，1986）。このため、植物珪酸体の残留する割合の低い土壌中でもタケ亜科の植物珪酸体が保存される割合が高いと考えられる。したがって、当時生育していたタケ亜科の割合はそれほど高くないと思われる。

5. 縄文時代中期・後期および奈良時代の住居構築材について

(1) 炭化材の樹種

同定結果を表6に示す。12点の試料は、5種類に同定された。各種類の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、学名・和名は、主として「原色日本植物図鑑 木本編〈Ⅱ〉」（北村・村田，1979）にしたがい、一般的な性質については「木の事典 第2巻・第4巻」（平井，1979，1980）も参考にした。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura)

クルミ科

散孔材で年輪界付近でやや急に管径を減少させる。管孔は単独および2～4個が複合、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列する。放射組織は同性～異性Ⅲ型、1～4細胞幅、1～40細胞高。年輪界は明瞭。

オニグルミは、北海道から九州までの川沿いなどに生育する落葉高木である。材の硬さは中程度、加工は容易で狂いが少なく、保存性は低い。銃床として、洋の東西を通じて広く用いられた。他に各種器具・家具材などの用途も知られている。

・アサダ (*Ostrya japonica* Sarg.) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～4個が複合、横断面では楕円形、管壁は薄い。

道管は単穿孔を有し、内壁にらせん肥厚が認められる。壁孔は交互状に配列する。放射組織は(同性～)異性Ⅲ型、1～4細胞幅、1～30(50)細胞高。年輪界はやや不明瞭。

アサダは北海道(中南部)・本州・四国・九州に分布する落葉高木である。材は重硬で、割裂性は小さく、加工は困難である。器具・家具・機械・建築材などに用いられ、強度を必要とする用途に適している。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.)

ブナ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものとの複合放射組織とがある。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で、果実(いわゆるドングリ)が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ(*Quercus mongolica* Fischer ex Turcz.)とその変種ミズナラ(*Q. mongolica* Fischer ex Turcz. var. *grosseserrata* (Bl.) Rehder et Wilson)、コナラ(*Q. serrata* Murray)、ナラガシワ(*Q. aliena* Blume)、カシワ(*Q. dentata* Thunberg)といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州(丹波地方以北)に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州(岩手・秋田県以南)・四国・九州に分布する。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてクヌギ(*Q. acutissima* Carruthers)に次ぐ優良材である。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単列、横断面では円形～楕円形、小道管は単列および2～3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形、ともに管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、櫓木や海苔粗朶などの用途が知られている。

・バラ科ナシ亜科の一種(*Rosaceae* sibfam. *Maloideae* sp.)

散孔材で、管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、単列および2～5個が複合する。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型～同性、1～2細胞幅、1～20細胞高。年輪界は不明瞭。

以上の特徴からナシ亜科のいずれかと考えられるが、ナシ亜科に含まれる各属の組織は類似

表6 縄文時代中期・後期および奈良時代の住居址の炭化材同定結果

番号	出土遺構・試料名	時代	用途等	樹種名
3	GVI4d Ⅲ層 No.395	縄文時代後期	不明	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
4	IX5e Ⅲ層	縄文時代後期	不明	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
5	JXIV2b IV層	縄文時代後期	不明	オニグルミ
6	SA78 埋土上部	縄文時代中期	構築部材	バラ科ナシ亜科の一種
7	SA41 埋土下部	縄文時代後期	構築部材	クリ
8	SA64 埋土	縄文時代後期	構築部材	アサダ
9	SA43 埋土	縄文時代後期	構築部材	クリ
10	SA02 床面	奈良時代	構築部材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
11	SA64 埋土	縄文時代後期	構築部材	アサダ
12	SA43 埋土	縄文時代後期	構築部材	クリ
13	SA43 埋土	縄文時代後期	構築部材	クリ
14	SA15 埋土	縄文時代後期	構築部材	クリ近似種

(2) 考察

今回同定を行った炭化材の多くは、縄文時代後期の住居構築部材に属する。この住居構築部材の樹種は、近似種も含めてクリが多く、他にアサダが同定された。炭化材が検出された縄文時代後期の住居址は4軒(SA64 SA41 SA43 SA15)である。このうち、SA64から検出された炭化材はアサダ、他の3軒の住居址から検出された炭化材は全てクリであった。この結果は、各々の住居址により構築部材に使用されていた樹種が異なっていた可能性がある。しかし、各住居址から検出された炭化材は少なく、住居構築部材の樹種構成の比較を行うことは、今回の結果のみでは困難である。

本遺跡周辺地域では、一戸町御所野遺跡、八戸市葦窪遺跡、鶉窪遺跡、鴨平(2)遺跡などで住居構築部材の樹種同定が行われている(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993; 嶋倉, 1983a, 1983b, 1982)。これらの調査でもクリが多く同定されていることから、東北地方で縄文時代にはクリが広く利用されていたと推定される。

また、今回の調査では、縄文時代後期の構築部材の他に縄文時代中期(SA78)と奈良時代(SA02)の住居構築部材各1点について同定を行っている。樹種はナシ亜科とコナラ節であった。これらは、いずれも縄文時代後期の構築部材には認められていない。したがって、各時代時期により構築部材の用材に差異があった可能性がある。しかし、分析点数が少ないために今回の結果のみで判断することはできない。とくに、コナラ節については、御所野遺跡において住居の構築部材に1点同定されている。また、本遺跡の縄文時代後期の遺物包含層中からも炭化材が検出されていることを考えると、縄文時代後期にもコナラ節が利用されていたと推定される。

縄文時代後期の遺物包含層中より検出された炭化材は、コナラ節2点、オニグルミ1点であった。これらの炭化材の用途等は不明であるが、炭化していることから何らかの原因で燃焼したと考えられる。これについては、炭化材の出土状況、とくに住居址や土坑など遺構周辺部から

表7 住居内炉址および遺物包含層の植物珪酸体分析結果

種類(Taxa)	試料番号	36	42	44	49
イネ科葉部短細胞珪酸体					
キビ族 (その他)		1	17	6	—
タケ亜科 (その他)		2	21	10	8
ヨシ属		2	9	1	1
ウシクサ族ススキ属		2	21	3	1
イチゴツナギ亜科 (その他)		2	6	1	1
不明キビ型		11	38	6	3
不明ヒゲシバ型		1	17	3	1
不明ダンテク型		3	4	1	2
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
キビ族		1	4	2	4
タケ亜科 (その他)		5	21	3	7
ヨシ属		—	3	1	4
ウシクサ族		2	11	1	1
不明		1	12	5	9
合計					
イネ科葉部短細胞珪酸体		24	133	31	17
イネ科葉身機動細胞珪酸体		9	51	12	25
検出個数		33	184	43	42
組織片					
キビ族短細胞列		—	—	1	—
ススキ属短細胞列		—	1	—	—

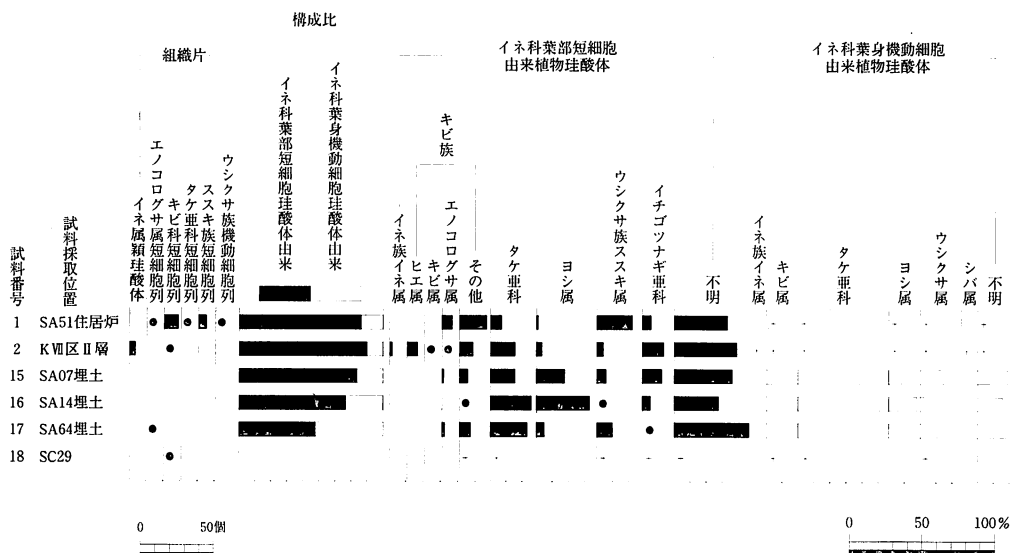


図3 住居内炉址および遺物包含層の組織片の産状

植物珪酸体組成は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体のそれぞれの総数を基数として百分率で算出した。組織片の●は1個、植物珪酸体の●○は1%未満、+は短細胞珪酸体の総数が200個未満および機動細胞珪酸体の総数が100個未満の試料より産出した種類を示す。

検出されたのか否かを確認して検討する必要がある。

6. 縄文時代後期の住居内炉址の燃料材について

(1) 組織片の産状

結果を表7に示す。また、各燃料の組織片の産状と植物珪酸体組成を図3に示す。

組織片の産出した試料は、試料番号1・2・17・18であるが、概して検出数は少ない。このうち、試料番号1では検出数は少ないものの、キビ族短細胞列やススキ属短細胞列などの種類が認められる。また、イネ科植物以外の植物に由来すると思われる組織片も多い。試料番号2では、稲籾に形成されるイネ属穎珪酸体やキビ属短細胞列が認められる。

植物珪酸体組成は、各試料でやや異なる。試料番号1では、キビ族・ススキ族の短細胞珪酸体の割合が高い。試料番号2ではイネ属が認められ、キビ族の中でもヒエ属・キビ属・エノコログサ属が認められる。試料番号15・16ではタケ亜科・ヨシ属の割合が高く、試料番号17ではタケ亜科の割合が高い。試料番号18では植物珪酸体がわずかしか認められない。

(2) 考察

縄文時代後期および晩期の住居址内の炉址の灰混じりの土壌や焼土からは、概して組織片の検出数は少なかった。炉址内に燃料材の灰がそのまま残り、それを試料とした場合には大量の組織片が認められる。この点を考慮すれば、炉が埋積した段階ですでに灰が掻き出されていたことが推定される。

このなかで、縄文時代後期住居址の炉埋積土から採取された試料番号1では、キビ族短細胞列やススキ属短細胞列などが認められた。試料番号1には灰が混在していた。これより、この灰の中にはキビ族やススキ属などの灰が混じっていたと考えられる。したがって、試料番号1の組織片の産状を考慮すれば、縄文時代後期の燃料材としてこれらのイネ科植物が利用されていたと思われる。また、イネ科以外の植物の組織片も認められることから、他の植物も利用されていたのであろう。

縄文時代晩期のⅡ層から採取された試料番号2では、キビ族短細胞列や稲籾に形成されるイネ属穎珪酸体が産出し、イネ属・キビ族（ヒエ属・キビ属・エノコログサ属）・タケ亜科・ヨシ属などの植物珪酸体が認められた。本層には灰が混入していたことから、この灰の中に稲籾やキビ族に由来するイネ科植物が混入していたと思われる。

ところで、炉の埋積物からヨシ属の短細胞と機動細胞の植物珪酸体が産出した。ヨシ属は、低湿地に生育するイネ科植物であることを考慮すれば、丘陵地上に形成された集落内に低地からヨシ属が持ち込まれ、炉の燃料材として用いられたと考えられる。したがって、縄文時代後期には低地にも人間活動が及んでいた可能性がある。

7. 土器埋設遺構の遺体埋葬について

(1) 結果

結果を表8に示す。

リン含量：リンは、動植物の必須元素の一つであり、体内中の含有量が比較的高い(種類によって異なるが哺乳動物の骨格で $142\sim 163\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}^{1)}$ 、陸上植物で $0.27\sim 6.9\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}^{1)}$ 。土壤、とくに火山灰土壤に集積(吸着)しやすく、土壤に供給されたリンは拡散・溶脱しにくいと言われている。土壤中の含量は、土壤の種類つまり母岩石の種類により大きく異なり(花崗岩と頁岩と石灰岩で $1.6\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}^{1}$ 、玄武岩で $3.2\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}^{1}$)、母岩石で平均 $2.875\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}^{1}$ 、日本の土壤では平均 $1.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}^{1}$ であると言われている。

分析値は、土器内から採取された土壤(以下、土器内土壤とする)の方が、土器外部から採取された土壤(以下、土器外土壤とする)に比べて高い値を示している。全体的にみると対照試料である土器外土壤で平均 $5.17\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 、変動係数 8.37% 、土器内土壤で平均 $6.31\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 、変動係数 23.93% となり、土器内土壤は土器外土壤に比べて含量が高く、しかも変動が大きい傾向にあり、リンの集積つまり人為的なリンの供給を示唆する結果となっている。

カルシウム含量：カルシウムもリンと同様に動植物の必須元素の一つであり、動物遺体中の含量が高い(種類によって異なるが哺乳動物の骨格で平均 238CaOmg/g^{1} 、陸上植物で $4.2\sim 19.6\text{CaOmg/g}^{1}$)。土壤中では最も溶脱されやすく、とくに日本などの酸性土壤での溶脱は著しい。カルシウム含量は、リンと同様に土壤の種類つまり母岩石の種類により大きく異なり(花崗岩で 22.1CaOmg/g^{1} 、玄武岩で 94.0CaOmg/g^{1} 、頁岩で 22.4CaOmg/g^{1} 、石灰岩で 476CaOmg/g^{1})、母岩で平均 51.0CaOmg/g^{1} であるが、土壤化が進むにつれて含量は低くなり、日本の土壤では平均 6.0CaOmg/g^{1} であるが、土壤化が進むにつれて含量は低くなり、日本の土壤では平均 6.0CaOmg/g^{1} であると言われている。

分析値はSG08において土器外土壤の方が土器内土壤に比べて高い値を示しているが、それ以外の土器埋設遺構では、土器内土壤の方が土器外土壤に比べて高い値を示している。全体的にみると対照試料である土器外土壤で平均 $10.67\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 、変動係数 12.51% 、土器内土壤で平均 $12.38\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 、変動係数 16.57% となる。このように、土器内土壤では土器外土壤に比べて含量が高い傾向が認められる。一方、土器内外土壤の変動係数が同値であることにより土器内土壤のカルシウムの特異的な集積は認められないことになるが、カルシウムの拡散が土壤で容易に起こることを考慮すること、人為的なカルシウムの供給を示唆することができる。

注：1) 文献により表示方法が異なっているが、ここでは比較のため統一して酸化物での mg/g に換算して表示した。

2) 標準偏差の大小は平均値の大きさに左右されるため、統計学ではバラツキの相対尺

度を変動計数として表す。とくに平均値の大きく異なるいくつかのものを対象としたとき、比較に便利である。また、これは無名数であるから、全く違った種類のもでも比較できる。その中で、母標準偏差の変動係数を母集団の変動係数とよぶ。一般にCVで表示する。

表8 リン・カルシウム分析結果

試料番号	試料名	リン含量 P ₂ O ₅ mg/g	カルシウム含量 CaOmg/g	土色	土性
19	IⅧ-72 土器内 土器外	9.08	14.61	10YR2/1 (黒色)	SL
20		5.64	11.18	10YR2/1 (黒色)	SL
21	JⅧ-72 土器内 土器外	4.84	13.42	10YR2/1 (黒色)	SL
22		4.50	8.81	10YR2/1 (黒色)	SL
23	KⅦ-71 土器内 土器外	6.78	12.86	10YR2/1 (黒色)	SL
24		5.24	12.03	10YR2/1 (黒色)	L
25	JⅧ-73 土器内 土器外	6.12	10.13	10YR2/2 (黒褐色)	L
26		5.30	9.17	10YR2/2 (黒褐色)	L
27	GⅥ-91-71 土器内 土器外	5.64	13.70	10YR1.7/1 (黒色)	L
28		5.52	11.45	10YR1.7/1 (黒色)	L
29	JⅦ-71 土器内 土器外	5.38	9.56	10YR1.7/1 (黒色)	L
30		4.82	11.36	10YR1.7/1 (黒色)	L

注. (1) リン、カルシウムの単位は、乾土あたりのmg/gで示した。

(2) 土色の判定は、マンセル表色系に準じた新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

(3) 土性の判定は、土壤調査ハンドブック記載の野外土性の判定法（ペドロジスト懇談会編，1984）による。

SL：砂壤土（砂の感じが強く、ねばり気はわずかしかない。）

L：壤土（ある程度砂を感じ、ねばり気もある。砂と粘土が同じくらいに感じられる。）

(2) 考察

上記したように、土器内の人為的なリンとカルシウムの供給が示唆されたことにより、遺体埋葬の可能性はある。しかし、今回は土器内と土器外からそれぞれ一括して試料が採取され、分析を行った。今後は土器内埋積物の上位・中位・下位など複数の試料を採取し分析を行って、各成分の含量の差を詳細に検討することも重要である。

8. 総括

ここでは、各分析課題ごとに分析調査結果を総括的に述べる。

(1) 本遺跡周辺地域の古環境（水域環境・古植生）推定

低地（沢）の堆積物を対象とした縄文時代晩期から平安時代にわたる古環境変遷に関する分析調査では、花粉化石と植物珪酸体の産状が悪いために、古植生の変遷を検討することは困難であった。珪藻分析の結果からは、縄文時代晩期から平安時代にかけて、本遺跡周辺は流水域であったと推定される。ただし、縄文時代晩期の上層が奈良・平安時代の土層である。すなわち、縄文時代晩期以降奈良・平安時代以前の土層が確認されていないために、その当時の堆積環境の変遷を詳細に検討することはできなかった。また、平安時代には陸生珪藻が産出されることから、好気的な堆積環境に変化したと思われる。

7層および7'層は火山灰層とされるが、テフラ分析の結果細粒のガラス質テフラ質テフラと判断され、さらに屈折率を測定した結果、十和田 a テフラ (To-a) であることが明らかとなった。十和田 a テフラは、A.D.915年に噴出した火山灰であることが知られており、低地（沢）堆積物の堆積時期は、発掘調査所見と調和的といえる。

(2) 縄文時代中期・後期および奈良時代の住居構築材について

縄文時代後期の住居構築材には、クリが主に用いられていたと考えられる。しかし、分析試料数が少ないために住居構築材の樹種構成を検討することはできなかった。また、縄文時代中期と奈良時代の住居址を対象として住居構築材に関する同定を行った結果、縄文時代後期の住居構築材とは組成が異なった。しかし、同様に試料点数が少なかったため、構築材の樹種構成を検討するまでに至らなかった。

今後は、今回の分析結果を基礎試料としてさらに多くの住居構築材の同定を行い、樹種構成を検討することが課題として残される。

(3) 縄文時代後期の住居内炉址の燃料材について

住居内炉址埋積物を対象に、植物珪酸体分析を行い、イネ化植物の燃料材に関する検討を行った結果、ヨシ属の植物珪酸体が検出された。ヨシ属は低湿地に生育する植物であることから、丘陵上に形成された当時の集落内に持ち込まれ、炉の燃料材として用いられたと思われる。したがって、当時低地にも人間の活動が及んでいたと推測される。

(4) 土器埋設遺構の遺体埋葬について

人体などの主要成分であるリン酸カルシウムの集積状態を検討した結果、SG08土器埋設遺構のみ土器内土壌が土器外土壌よりリン含量の値が低かったが、分析対象とされた他の土器埋設遺構は、リン含量・カルシウム含量の値はいずれも土器外土壌より土器内土壌で高かった。この結果より、土器内には遺体が埋葬されたと考えられる。しかし、今回は土器内土壌と土器

外土壌が一括して採取されているために、各成分の含量の集積状態を密に知ることはできなかった。土器内土壌については、底部・中部・上部から密に試料を採取して分析を行い、各成分の含量を比較検討することも重要と考える。

〈引用文献〉

新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフクロロジーの基礎的研究—。第四紀研究, 11, p.254-269.

ARAI, F., H. MACHIDA, K. OKUMURA, T. MIYAUCHI, T. SODA, and K. YAMAGATA (1986) Catalog for Late Quaternary Marker-Tephra in Japan II—Tephra occurring in Northeast Honshu and Hokkaido—. Geographical Reports of Tokyo Metropolitan University, 21, p.223-250.

土壌標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壌標準分析・測定法。354p., 博友社。

土壌養分測定法委員会編 (1981) 土壌養分分析法。440p., 養賢堂。

G.H.Bolt, M.G.M.Bruggenwert (1980) 土壌の化学・岩田進午・三輪毅太郎・井上隆弘・陽 捷行 訳, 309p., p.235-236, 学会出版センター [G.H.Bolt, M.G.M.Bruggenwert (1976) SOIL CHEMISTRY].

平井信二 (1979, 1980) 木の事典 第2巻・第4巻。かなえ書房。

北村二郎・村田源 (1979) 原色日本植物図鑑 木本編〈Ⅱ〉。545P., 保育社。

近藤鍊三 (1982) Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究。昭和56年度科学研究費 (一般研究C) 研究成果報告書, 32p.

近藤鍊三 (1983) 植物珪酸体 (プラント・オパール) 分析の農学および理学への応用。十勝農学談話会誌, 24, p.66-83.

近藤鍊三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用。第四紀研究, 第25号, p.31-64.

町田 洋・新井房夫 (1992) 「火山灰アトラス」。276p., 東京大学出版会。

町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ。科学, 51, p.562-569.

三井進午監修 (1991) 最新土壌・肥料・植物栄養事典。481p., 博友社。

パリノ・サーヴェイ株式会社 (1993) 花粉分析・炭化材同定・種子同定。「御所野遺跡Ⅰ 縄文時代中期の大集落」, p.341-355, 一戸町教育委員会。

嶋倉巳三朗 (1982) 鴨平 (2) 遺跡から出土した炭化材の樹種。青森県埋蔵文化財調査報告書 第73集「鴨平 (2) 遺跡 発掘調査報告書 —東北縦貫自動車道八戸線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ—」, p.235, 青森県教育委員会。

嶋倉巳三朗 (1983a) 葦窪遺跡出土炭化材の樹種調査報告。青森県埋蔵文化財報告書第84集「葦窪遺跡 —東北縦貫自動車道八戸線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶ—」, p.392-393, 青森県教

育委員会.

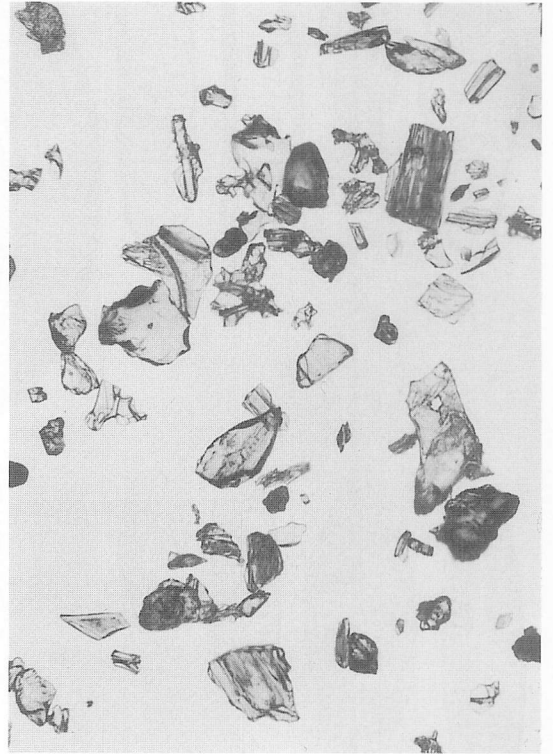
嶋倉巳三朗 (1983b) 鶉窪遺跡の炭化材. 青森県埋蔵文化財調査報告書第76集「鶉窪遺跡 発掘調査報告書」, p.106, 青森県教育委員会.

杉山真二・藤原宏志 (1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—. 考古学と自然科学, 19, p.69-84.



1. 軽石

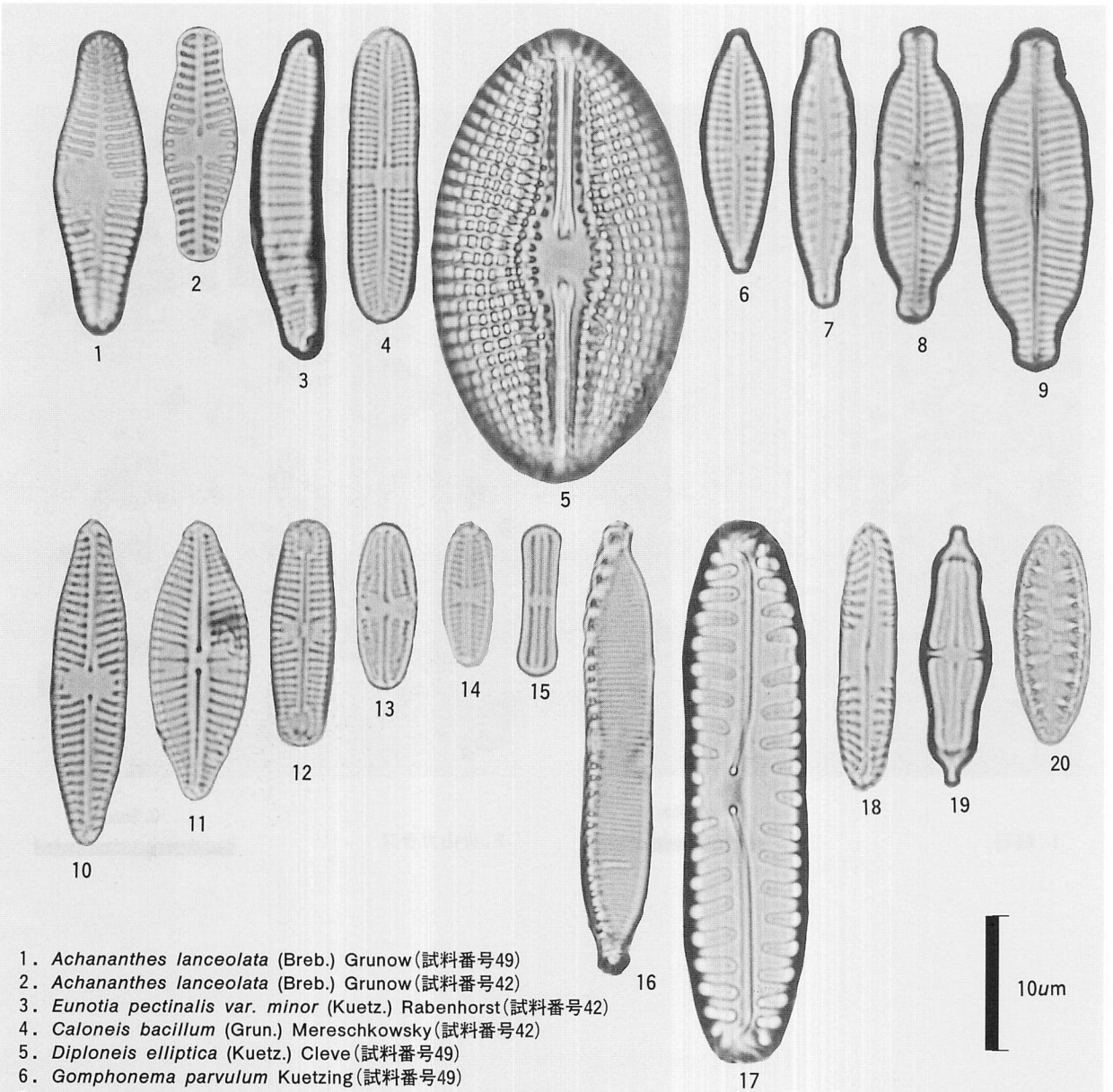
4.0mm



2. 火山ガラス

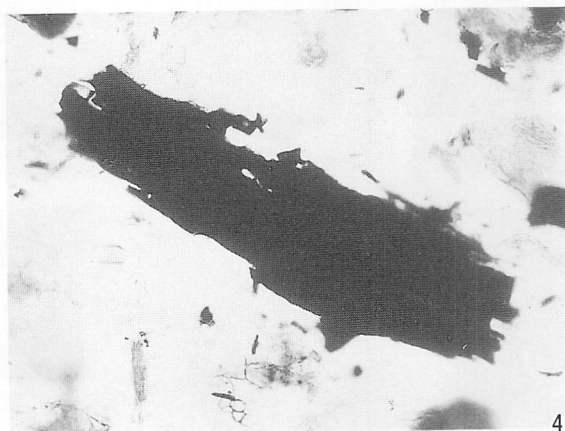
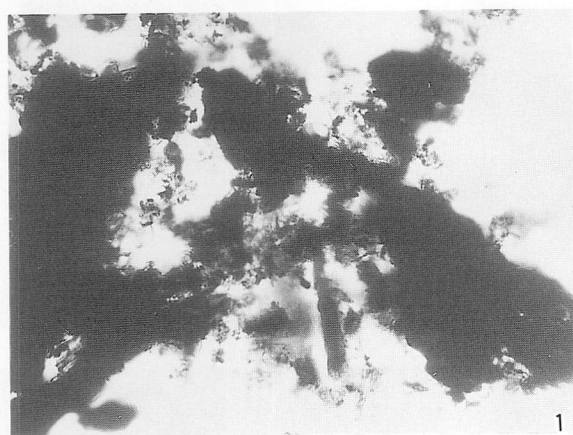
0.5mm

図版1 試料番号37の軽石および火山ガラス



1. *Achananthes lanceolata* (Breb.) Grunow (試料番号49)
2. *Achananthes lanceolata* (Breb.) Grunow (試料番号42)
3. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst (試料番号42)
4. *Caloneis bacillum* (Grun.) Mereschkowsky (試料番号42)
5. *Diploneis elliptica* (Kuetz.) Cleve (試料番号49)
6. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (試料番号49)
7. *Gomphonema angustatum* (Kuetz.) Robenhorst (試料番号42)
8. *Navicula elginensis* (Greg.) Ralfs (試料番号42)
9. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (試料番号49)
10. *Navicula veneta* Kuetzing (試料番号49)
11. *Navicula hambergii* Hustedt (試料番号42)
12. *Navicula ignota* var. *palustris* (Hust.) Lund (試料番号42)
13. *Navicula contenta* Grunow (試料番号42)
14. *Navicula seminulum* Grunow (試料番号42)
15. *Navicula contenta* Grunow (試料番号42)
16. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (試料番号42)
17. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (試料番号42)
18. *Pinnularia obscura* Krasske (試料番号42)
19. *Stauroneis smithii* Grunow (試料番号49)
20. *Surirella ovata* var. *pinnata* (W. smith) Hustedt (試料番号49)

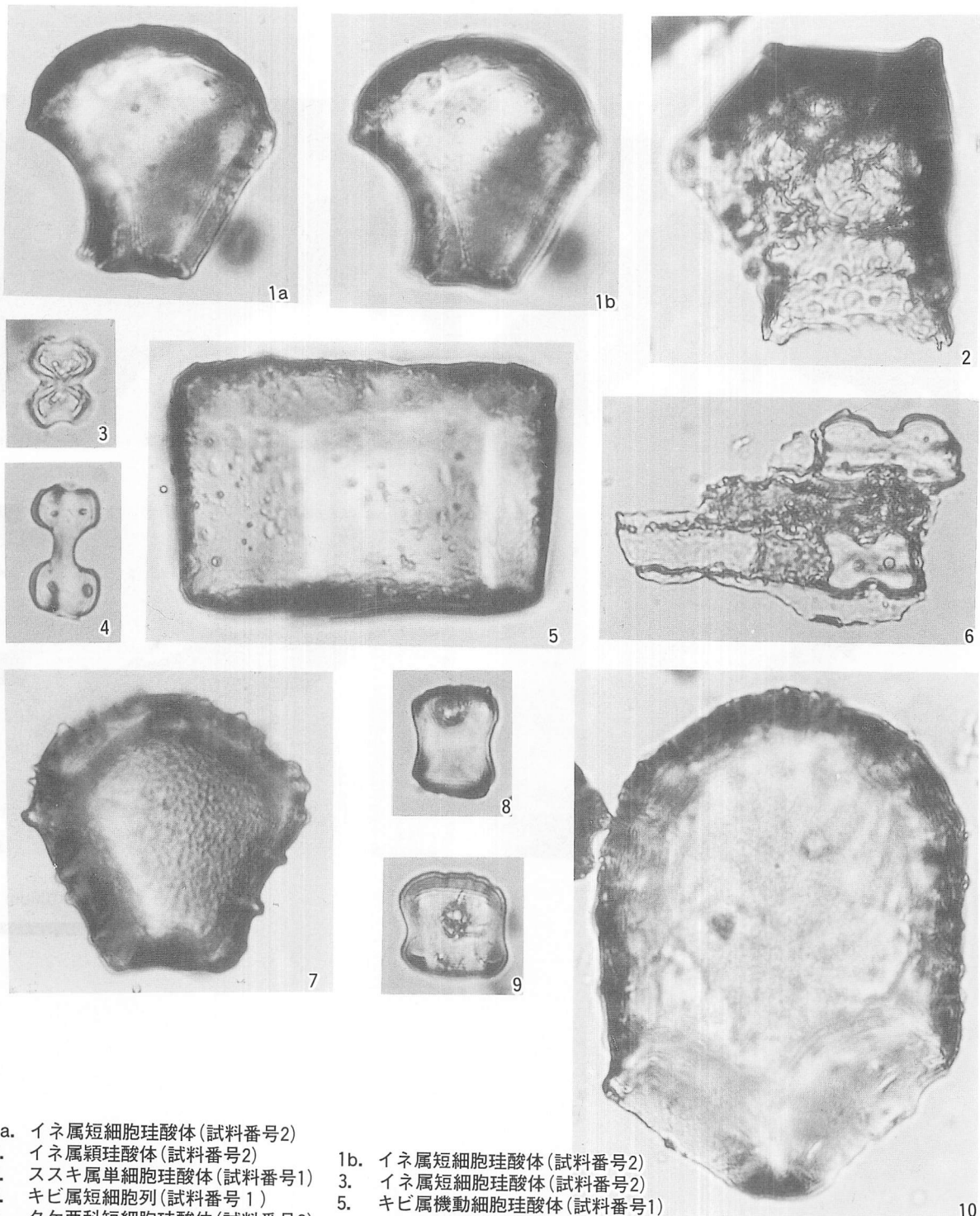
図版2 珪藻化石



100um

1. 状況写真(試料番号36)
2. 状況写真(試料番号42)
3. 状況写真(試料番号44)
4. 状況写真(試料番号49)

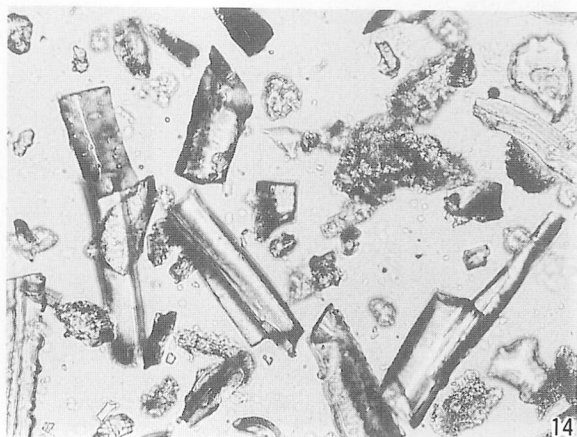
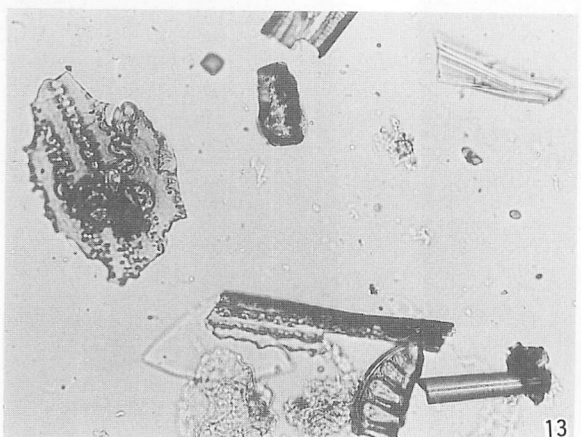
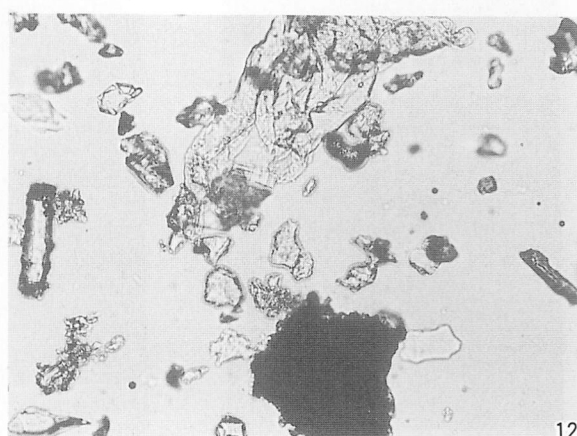
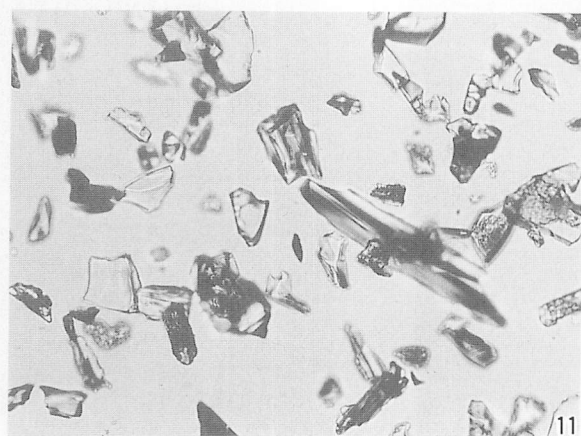
図版3 花粉化石プレパラートの状況写真



- 1a. イネ属短細胞珪酸体 (試料番号2)
 2. イネ属穎珪酸体 (試料番号2)
 4. ススキ属単細胞珪酸体 (試料番号1)
 6. キビ属短細胞列 (試料番号1)
 8. タケ亜科短細胞珪酸体 (試料番号2)
 10. ヨシ属機動細胞珪酸体 (試料番号49)
- 3b. イネ属短細胞珪酸体 (試料番号2)
 3. イネ属短細胞珪酸体 (試料番号2)
 5. キビ属機動細胞珪酸体 (試料番号1)
 7. タケ亜科機動細胞珪酸体 (試料番号1)
 9. ヨシ属短細胞珪酸体 (試料番号2)

20µm

図版 4 植物珪酸体

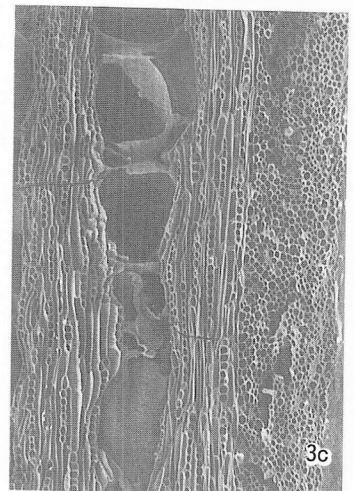
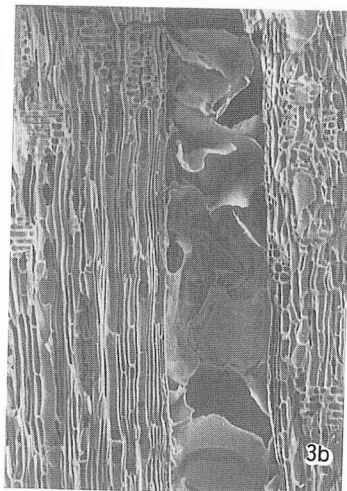
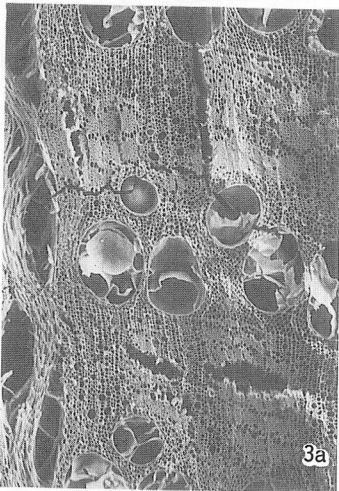
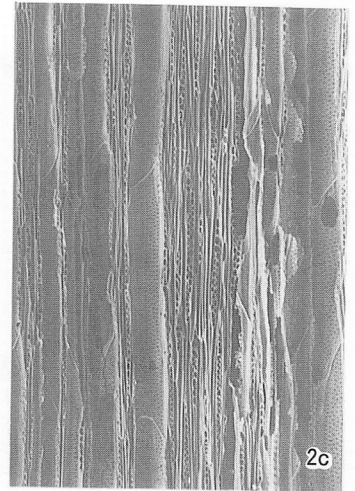
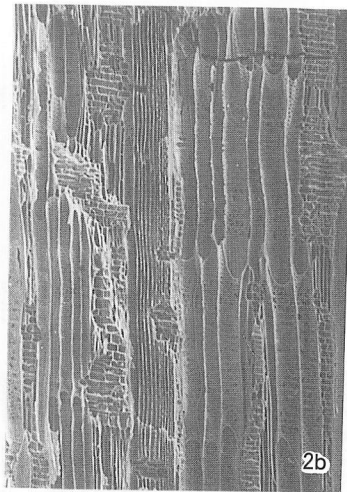
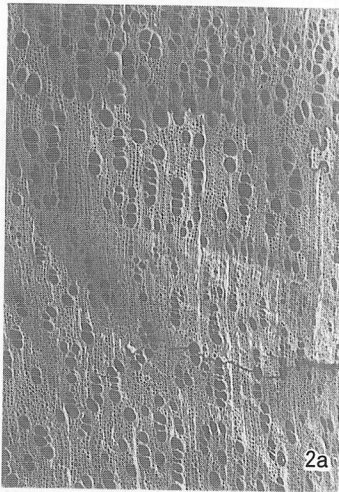
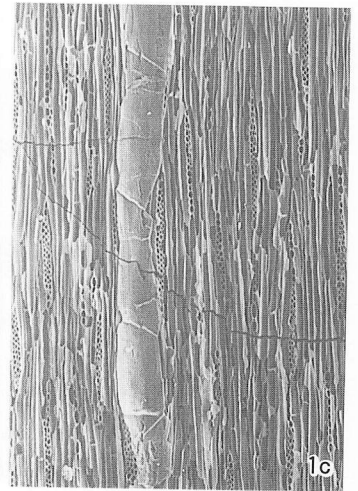
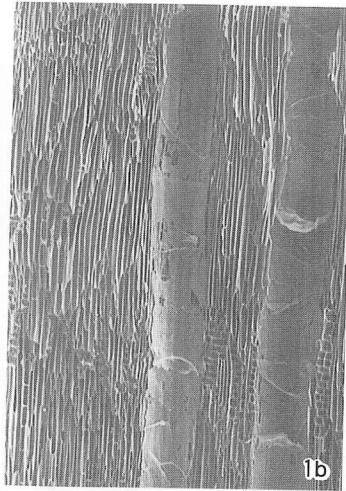
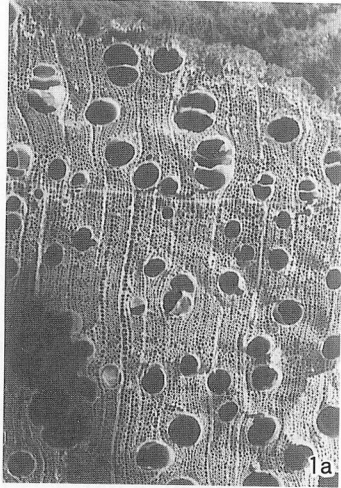


50μm

- 11. 状況写真(試料番号36)
- 12. 状況写真(試料番号42)
- 13. 状況写真(試料番号44)
- 14. 状況写真(試料番号49)

図版 5 植物珪酸体プレパラートの状況写真

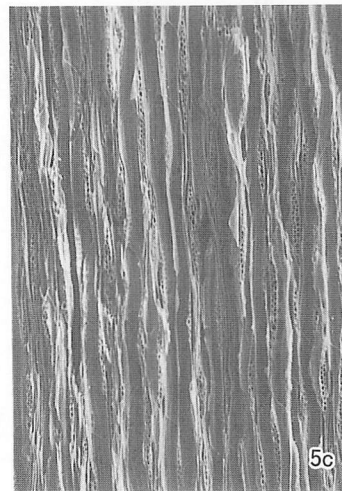
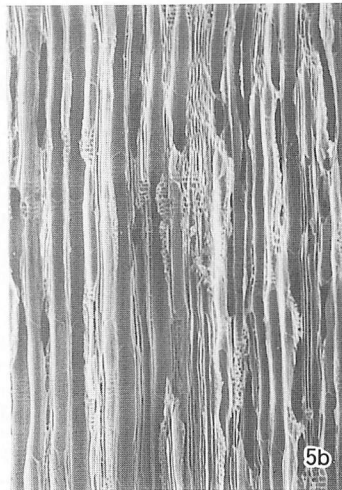
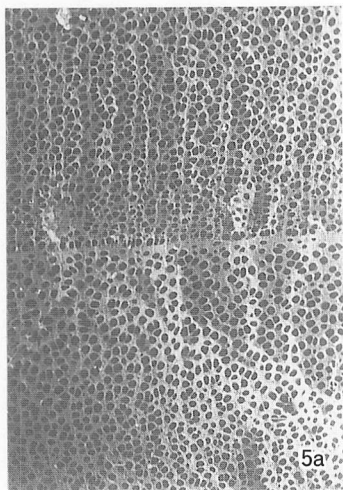
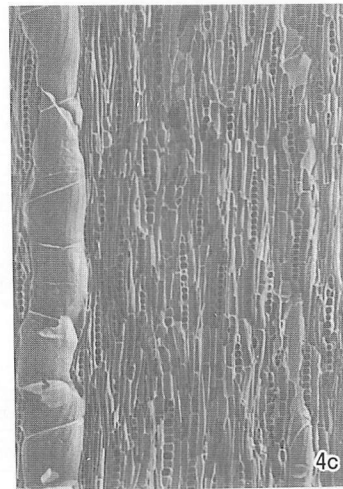
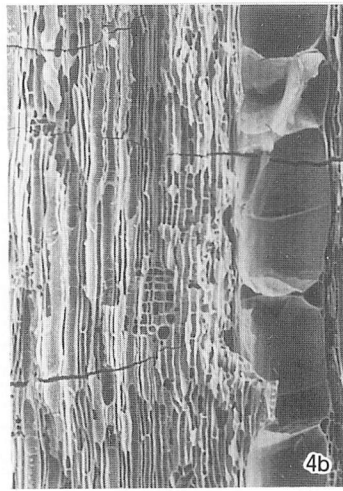
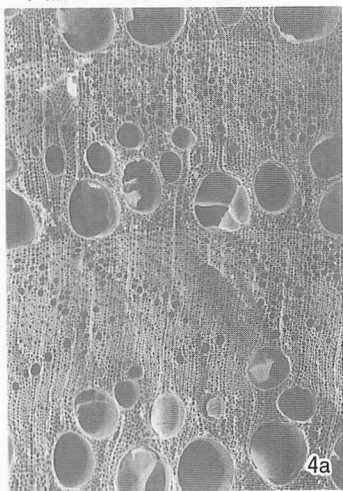
図版 6 炭化材(1)



1. オニグルミ (試料番号5)
2. アサダ (試料番号2)
3. コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (試料番号10)
 - a. 木口 b. 柁目 c. 板目

200hcm : a
200hcm : b, c

図版7 炭化材(2)



4. クリ (試料番号12)
 5. バラ科ナシ亜科の一種 (試料番号6)
 a. 木口 b. 柱目 c. 板目

200hcm : a
 200hcm : b. c

報告書抄録

ふりがな	おおひなたにいせきはつかつちょうさほうこくしよ							
書名	大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書 -第2次~第5次調査-							
副書名	国道395号改良工事関連遺跡発掘調査							
巻次	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	田鎖壽夫・斉藤邦雄							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020 盛岡市下飯岡11-185 TEL0196-38-9001							
発行年月日	西暦 1995 年 3 月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ・〃	東経 ・〃	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおひなたに 大日向Ⅱ遺跡	いわてけんくわへん 岩手県九戸郡 軽米町第13 地割字吹屋 敷26-1	軽米町 03501	I F 73 - 2112	40°19'	141°28'	1988. 4.27~7.21 1989. 4.7~6.30 1990. 4.10~7.6 1991. 4.9~11.8	1,400㎡ 950㎡ 1,000㎡ 1,385㎡	道路改良工 事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大日向Ⅱ遺跡	集落跡	縄文 弥生 奈良	住居跡 住居跡状 掘立柱建物跡 土坑 埋設土器 焼土遺構 集配石遺構 旧河道 住居跡 焼土遺構 配石 住居跡	64棟 10棟 22棟 164基 19基 24基 24基 1条 8棟 11基 2基 1棟	土器・石器多数 特に縄文時代の土偶を 含む各種土製品が豊富 自然遺物(骨、木製品) ガラス丸玉	縄文後期後半・弥生前半 の集落 埋葬人骨の残る縄文時 代の土壙墓群 ヒスイ 遠賀川系土器 ガラス玉 後北式土器		

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 高 橋 重 實
副 所 長 千 葉 政 男

[管理課]

管 理 課 長 澤 田 寛
主 事 佐 藤 理 恵
〃 久保田 幸 恵

嘱 託 吉 田 十 次 夫
〃 野 崎 他 夫

[調査課]

調 査 課 長 鈴 木 恵 治
課 長 補 佐 三 浦 謙 一
〃 高橋 與右衛門
主 任 文 化 財 員 菊 池 強 一
〃 渡 辺 洋 一
〃 工 藤 利 幸
〃 中 川 重 紀
〃 佐々木 清 文
〃 高 橋 義 介
〃 中 村 英 俊
〃 酒 井 宗 孝
文 專 門 文 化 調 査 財 員 千 葉 孝 雄
〃 菊 池 人 見
〃 伊 東 格
〃 吉 田 充
〃 斎 藤 邦 雄
〃 高 橋 一 浩
〃 鎌 田 勉
〃 小 山 内 透
〃 松 本 建 速
〃 笹 平 克 子
〃 花 坂 政 博
〃 佐々木 務

文 化 調 査 財 員 專 門

金 子 昭 彦
木 戸 口 俊 子
大 道 篤 史
阿 部 勝 則
星 雅 之
羽 柴 直 人
高 木 晃 拓
村 上 知 子
高 橋 佐 昭 太 郎
杉 沢 浩 二 郎
溜 田 精 造
鎌 高 橋 英 樹
佐 藤 修 一
稻 垣 雅 宏
元 吉 弘 明
熊 谷 和 明
佐々木 裕 明
千 葉 裕 司
沼 田 和 宏
後 藤 円

期 限 財 員 專 門 職 付

[資料課]

資 料 課 長 駒 嶺 高 幸 之
主 任 文 化 財 員 專 門 調 査 高 橋 正 之

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第225集

大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書

国道395号改良工事関連遺跡発掘調査

第1分冊

印刷 平成7年3月25日

発行 平成7年3月31日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (0196) 38-9001

印刷 (株)吉田印刷

〒020 岩手県盛岡市名須川町23-27

TEL (0196) 25-2323

© (財)岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター1994